昭和五年六月出版

羣書類從

第拾參輯

東京

續群書類從完成會

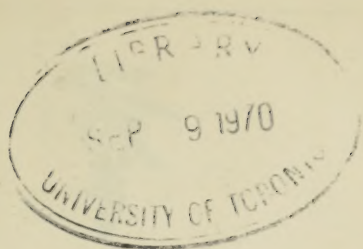
群書類従第拾參輯目次

和歌部歌合

群書類從第拾參輯目次終

群書類從卷第二百五

和歌部六十 歌合廿六

撿挍保己一集

永福門院歌合 嘉元三乙巳年正月四日 後二條院御在位

戀十首

一番

左勝 中將

みる人も物を思はぬさまなれは心のうらをたれにかたらむ

右 從三位親子

幾たひかもの思はしとすつれともこゝろの下に戀しき物を

二番

左勝 永福門院内侍

まことかと嬉しかりつる一言にさらなる思ひまた色そそふ

右 新宰相

人を只恨ることそなかるへきそれによらすはさそいかにせん

三番

左 親子

一すちにこひたつ夜半のそのうちは待より外の事もましらす

右勝 中將

いかゝあらん今夜きてもの行末より空なる月そ常にみらるゝ

四番

左勝 新宰相

あらぬ方にきゝ果るこそ悲しけれ空しきまてに頼まゝしよを

右 内侍

恥しやおもへはいかに思ふらむ心のまゝにうらみつることを

五番

左持 中將

けふの日よいかなる日そと人もうく身も恨めしく人も戀しき

右 親子

思ふことの慰ますのみなりゆけはあるましきかと身そ哀なる

六番

左 内侍

見るもうく聞るゝもうき同し世といとふかはては又そ悲しき

右勝 新宰相

思へかし哀ならてもいかゝあらん馴てひさしきなかの契りそ

七番

左持 親子

いつはりはかくれぬ物をさらはたゝまたとも何と人のいふ覧

右 中將

うき事もくやしき事もさこそはと思ひし方そたかはさりける

八番

左　　新宰相

人も我を思ひつらむと思ひせは嬉しくやあらむ悲しくやあらむ

右　　内侍

思ひすと恨みし人のあやにくにわれしたのめは又うくそなる

九番

左勝　　中將

悲しきを思ふそとのみいひしかとそのしるしなる一言もなし

右　　親子

しゐはれす思はれまさるはてはたゝうき身の上も忘られそ行

十番

左　　内侍

頼るかとそれのけしきの見えはくにたゝさま〳〵にそふ思ひ哉

右勝　　新宰相

つらさまさりおもひとゝむと思ふ程の心に過て何か悲しき

十一番

左持　　親子

うき世にはなからへんともおもはねと命のまゝに哀はく身を

右　　中將

うきからきは易くやはあらむ人は哀なるこそ猶うかりけれ

十二番

左勝　　新宰相

何故にとはさりつるといはんより思ひなからと聞はうらめし

右　　内侍

いましたゝ哀かけなむ行末をみはつるまては身のあらはこそ

十三番

左勝　　中將

あはれみは今はあはしと思へ共あふとしあへはあはんとそ思ふ

右　　親子

まちこんといふともよもや道もあらし我に知れぬ偽も哉

十四番

左勝　　新宰相

さりともとおもふ心を過ゆけはなにしかゝりて思ひしもせん

右　　内侍

今さらに思ふことこそおもはるれ雨のふるにも風の吹にも

十五番

左持　　親子

かはりはてし人は残らぬいにしへを忍ふ心に忘れかねぬる

右　　中將

世とゝもに哀なりしそわすられぬうきを久しと誰かいひけん

十六番

左持　　内侍

あさからす見えし情の程もへぬされはかくこそなる世也けれ

右　　新宰相

しりぬれは我こそ心悲しけれたゝうきふしはきかしとそ思ふ

十七番

左　　中將

よそなからその俤をみるかこと心のうちをしることもかな

右勝　　親子

ありしうちかあらす成ぬる今のみかされは一方は夢かとそ思ふ

十八番

左持　　内侍

ためしなのうさやつらさやこのきはゝ侘てやしたふ恨てやのく

右　　　新宰相
恨みてもなけきてもけに果はたゝ我を思へといはまくほしき

十九番

左勝　　観子
思ふ事はあまたの時を移すなかよいつの逢日をまちたにもせす
右　　中将
おもひいて又思ひのみ出くれはいかにも人を忘れかねぬる

二十番

左勝　　新宰相
君にかくなれすは何に慰まむうきおりことはくやしけれとも
右　　内侍
いかにとけ君を心にますそ思ふあすしらぬよの定めなきにも

嘉元三年正月之頃、於ニ永福門院御所一各十首詠レ之。判詞雖持明院殿震筆也、希代之重寶尤比類少者歟。容易不レ可ニ外見一者也。

右永福門院歌合以百花庵宗固本校合

歌合　嘉元三年三月

題

寄花春　寄月戀　寄雲雜

作者

左

女房
新宰相
右中将藤原朝臣範春
正四位下行右近衛権中将兼春宮権亮藤原朝臣清雅
従一位藤原朝臣教良女

右

正四位下行右近衛権中将藤原朝臣俊兼
従三位親子
中将
宮内卿
永福門院小兵衛督
生覺
永福門院内侍

講師
讀師
判者

一番　寄花春

左勝　女房

猶もこのうきよの色そ揃かたき花のなさけのはるになれても

右　從三位親子

九重の霞のみきはの花さかり馴しその世の春そ戀しき

二番

左勝　新宰相

あさほらけ長閑きいろもこもりけり春の心や花にひらくる

右　中將

春やさかり野山を見れはおしなへて梢は花のさかぬしもなし

三番

左　範春

おりをえて四方の櫻もさくなれは春は名たかき時にそ有ける

右勝　宮內卿

花を惜み春をしたふととにかくに彌生はいつも物をこそ思へ

四番

左勝　清雅

はかなくのなかめの程にかへさはや花よりさきの春の日數を

右　小兵衞督

なへて世の花てふ花は咲ぬらしはるも盛になりぬとおもへは

五番

左　藤原朝臣女

ちらぬまの花に詠むる春のとき幾夜もかくてあらはとそ思ふ

右勝　生覺

よそになる身をは忘れて此春もむかしのまゝに花になれぬる

六番

左勝　俊兼

春をしらん我身よいつは時しあれは四方の梢に花もさきけり

右　內侍

よも山は霞のとけみをしてゆく春にかなへる花の色かな

七番　寄月戀

左　女房

うらめしくつれなの月やなき愁へこひかこてとも同し影なる

右勝　親子

見る月に哀のいかゝそはさらむうきにあらしとおもひなる頃

八番

左　新宰相

獨のみたゝ夜とともに月をみてかこつかたなき事をしそ思ふ

右勝　中將

こよひ我いかさまにしてなくさまむ月は哀に人は戀しき

九番

左　範春

まつ人はむなしき床のひとりねに賴めぬ月の影のみそさす

右勝　宮內卿

またしとは思へとも猶月影のふくるをみれはまたそかなしき

十番

左　清雅

うき今の泪のうちになかむれは月も其(袖イ)夜にかけそかはれる

右勝　小兵衞督

うれへ盡す心を月はしるらめは人にかたらぬ友とたのまむ

十一番

左　藤原朝臣女

わすられぬ月を哀とおもひいてゝ落る涙のやかてとまらぬ

右勝　　　　　　　　　　　　　　　生　覺

よな／＼の月をかたみと思へとも見し世にかへる俤はなし

十二番

左勝　　　　　　　　　　　　　　　俊　兼

こぬ人をなとかすゝめぬ戀しさもつらさも誘ふ夜半の月かけ

右　　　　　　　　　　　　　　　　内　侍

常よりも人はこゝろに戀しくて向ふこよひの月そかなしき

十三番　　寄雲催

左持　　　　　　　　　　　　　　　女　房

うきてふる身のはかなさも悲しきはたゝめのまへの夕暮の雲

右　　　　　　　　　　　　　　　　親　子

荒き雨は軒の檜はらにしたゝりて向ひの山も雲にかくれぬ

十四番

左　　　　　　　　　　　　　　　　新宰相

かけつらく暮ぬと見つる大そらの雲のたへまにまた日影さす

右勝　　　　　　　　　　　　　　　中　將

山きよく雨ははれぬる夕くれのふもとの杉にくもそのこれる

十五番

左持　　　　　　　　　　　　　　　範　春

見るまゝにほしの光もきよくなりて雲そ晴行曉のそら

右　　　　　　　　　　　　　　　　宮内卿

むら雲に夕ひのかけは匂ひくれて向ひのやまの色そうつろふ

十六番

左　　　　　　　　　　　　　　　　清　雅

はる／＼といく／＼雲路にへたつらむ忍ふこゝろにちかき都を

右勝　　　　　　　　　　　　　　　小兵衛督

けふも又たゝ大そらの雲にのみわかなかめをはつくしぬる哉

十七番

左　　　　　　　　　　　　　　　　藤原朝臣女

夕暮のくもの行そらいつよりもさま／＼ものを哀れとそみる

右勝　　　　　　　　　　　　　　　生　覺

返り見るたにゝ一むら雲をりてあらしにこゆる峯そはるけき

十八番

左　　　　　　　　　　　　　　　　俊　兼

雲のゆくそなたの空をみやことてはかなくしたふ旅の夕くれ

右勝　　　　　　　　　　　　　　　内　侍

山かけやゆふへの眺めしつかにて谷より雲のほるをそ見る

右嘉元三年歌合以一本挍合

外宮北御門歌合 元亨元年冬

題

落葉　冬月　朝雪　不逢戀　待戀
惜歳　山家松　懷舊夢　神祇

作者

左
禰宜度會神主常良
禰宜度會神主家行
禰宜度會神主貞蔭
禰宜度會神主貞香
權禰宜度會神主延良
權禰宜度會神主行俊
權禰宜度會神主富行
權禰宜度會神主延親
權禰宜度會神主朝名

右
禰宜度會神主朝棟
藤原憲家女
權禰宜度會神主延明
權禰宜度會神主延議
權禰宜度會神主秀長
權禰宜度會神主兼蔭
權禰宜度會神主盛行
權禰宜度會神主兼冬
藤原家業

講師

讀師

判者

小倉中納言入道

一番　落葉

左持　禰宜度會神主常良
もろく散木の葉はかりや槇の屋に過る時雨の音のこすらん

右　禰宜度會神主朝棟
うき雲にはれても猶そ時雨ける木のはをさそふ峯のあらしに

左右哥。心詞尤同。可ㇾ爲ㇾ持。

二番

左　禰宜度會神主家行
とひすくる跡にももろき泪かなこのはの音はよそに時雨て

右勝　藤原憲家女
浮雲ははれ行跡の山風に猶時雨るゝや木のは成らむ

右哥。姿似ㇾ宜。尤爲ㇾ勝。

三番

左勝　禰宜度會神主貞蔭
吹よはるかたにやふかく積るらん嵐にもろきみねのもみち葉

右　權禰宜度會神主延明
ちりしくも又さそはるゝ朝かせに霜のしたえを見る木の葉哉

左哥。いさゝかまさるへきにや。

四番

左持　禰宜度會神主貞香
ふきさそふ風のまゝなる木の葉にも已れと散や猶ましるらん

右　權禰宜度會神主延議
時雨かと聞はかりにや吹風にさそふこのはも袖ぬらすらむ

兩首殘の無二勝劣一と申侍らん。

五番

左持　權禰宜度會神主延良
定めなく時雨るゝ頃とおもはすは何にこのはの音まかへまし

右　權禰宜度會神主秀長
吹かせにもろき木の葉を時雨かときゝまかへてもぬるゝ袖哉

爲レ持。

六番

左勝　權禰宜度會神主行俊

もろくちる程もしられて吹風の絶まにも猶散このはかな

右　權禰宜度會神主雅蔭

音たてし木のはやうすくなりぬらん誘ふにつけてよはる風哉

右。結句よは〳〵しく侍。左まさると申へし。

七番

左持　權禰宜度會神主富行

しくれつる音はつれ行山風にまたをとつれてふる木のは哉

右　權禰宜度會神主盛行

槇の屋に時雨てもらぬ音つれや嵐にたくふ木のはなるらん

左右のをとつれ。持とすへし。

八番

左持　權禰宜度會神主延親

ふく風のさそはぬひまもをのつから心ともろくちる木の葉哉

右　權禰宜度會神主雅冬

聞たゆむひまこそなけれ木のは散やとは時雨の幾めくりとも

左哥。かやうのうた見侍しやうに侍る。右歌また勝へき歌にあらす。

九番

左持　權禰宜度會神主朝名

とひすつる時雨の跡の山風にまたをとつれて散木のはかな

右　藤原家業

さそひ行嵐の跡の山のはに殘るもみちの色そすくなき

勝負不二分明一。

十番

左勝　冬月　朝名

しくれつる雲まに出て定めなきそらのならひは月もしりけり

右　家業

山の端に時雨るゝ雲の吹すてゝ風の跡よりいつる月かな

右。下句見る心地し侍。左。聊勝とや申へし。

十一番

左持　延親

さやけさは秋にかはらぬ月影のこほるそ冬のしるし也ける

右　雅親

影まても秋にかはりてこほるよの月のかつらに霜や置らむ

左右同科なから。霜には所をき侍へきにや。

十二番

左　富行

さゆる夜のひかりを霜に置そへてひとつにこほる冬の月かけ

右勝　盛行

しくれぬる雲をはよそに吹すてゝ嵐にこほる冬のよの月

右。下句すこしはまさり侍らん。

十三番

左　行俊

更るよのあらしにこほる池水にやとらぬ月の影そさえゆく

右勝　雅蔭

とひなれし露の名殘をしたひてやかれ野の月の霜にさゆらん

同前。

十四番

左勝　延良

冬と見し花のかたみを淺茅生のそてに殘して氷る月かけ

右　季長

しくれけるもりの木葉の跡とめてもりくる月の影の淋しさ

右勝とすへし。

十五番

左勝　貞香

霜むすふ尾花はくちて我袖の涙をつゆとやとる月哉

右　延誠

しも結ふおはなかそてをよすかにて露の跡とふ野への月かけ

左右の袖おなし。爲㆑持。

十六番

左持　貞蔭

見るまゝにきえこそまされ山風のこほりて更る冬のよの月

右　延明

木のまもるこゝろつくしの秋よりも猶さえまさる冬の夜の月

兩首同しほとの事にや。

十七番

左　家行

露ならて玉とそ見ゆるをく霜のこほれは移るあさちふの月

右勝　憲家女

木からしの雲ふきさそふ山のはにさえて殘れる冬の夜の月

左。露ならぬ玉霜にて侍よし。おほつかなし。右難なくいひくたし侍。尤かち侍へし。

十八番

左　常良

この葉のみ風のつてに時雨きてくもらぬ空に冴る月かな

右勝　朝棟

淺茅生の露の跡とふ月のみや霜にもかれぬ秋の面かけ

右哥下句めつらしく見え侍。返々勝と申へくや。

十九番　朝雪

左　常良

はらはねは朝たつ袖も白妙の雪をかさぬる旅衣かな

右勝　朝棟

水くきの岡のやかたは跡もなしねての朝けの雪のふかさに

猶右尤よし。可㆑爲㆑勝。

二十番

左持　家行

わか跡を人もとめてや歸るらん今朝ふみ分る雪の下道

右　憲家女

夜のまより雲のみふかくかさなりてまた一重なる今朝の初雪

左哥には雪の下みち聞ならはす。老耄之故歟。無㆓左右㆒不㆑能㆑付㆓勝負㆒。

二十一番

左　貞蔭

霜かれしあとさへけさは絶にけり雪の下なる野へのみとりは

右勝　延明

今朝のまをとふへき人は誰なれはたのめぬ跡を雪に待らん

右の下句。左にはまさりてや侍るへからむ。

二十二番

左持　貞香

明わたる外山も雪のふかしとや出る日影の猶こほるらん

右　延誠

うき宿の習ひになさぬ雪ならはとはるゝ跡もけさやまたれん
左右爲レ持。

二十三番

左勝　延良

今朝も猶人のとはすは庭の雪に我あとおしむかひやなからむ

右　秀長

とはれねは我出かての跡をのみけさはつけつる庭の雪哉

右。第二句如何にとよめるにか。不レ得レ心。いか樣にも。左勝とすへし。

二十四番

左　行俊

今朝にはまた庭にやつまぬ雪なれととはれはいかゝ跡も厭はん

右勝　雅蔭

けさも猶とふ人をそき庭のゆきにまたぬ日影の跡やいとはむ

右第四句。こゝろ有さまに侍にこそ。

二十五番

左　富行

終夜つもれる程もかつ見えて雪にそしらむ窓の朝明

右勝　盛行

ゆきのうちに心かよはゝとふやとて我をも人のけさや待らむ

左。結句不二庶幾一。以レ右爲レ勝。

二十六番

左　延親

旅ころも朝たつ道の行末もまよふ計の野へのしら雪

右勝　雅冬

いつくをか干かたともみん朝朗なみにつゝきて積る白雪

兩首。いつれと申かたく侍れと。右。聊風情ありて侍にこそ。

二十七番

左　朝名

草のはら朝たつ野邊の行末を誰にとはまし雪の下道

右勝　家業

いつのまに人のとはぬもうらむらん今朝こそつもれ庭の白雪

右まさり侍へし。左結句の事先に申。

二十八番　不逢戀

左勝　朝名

うき身をは人もゆるさぬ命もて逢にかへはと何頼むらん

右　家業

つれなさもうき身もたえてなからへは等閑なりと人や思はん

左。例風情に侍れと。爲レ勝。

二十九番

左　延親

何こともむくひとならはうき人のつれなさも又みにや歸らん

右勝　雅冬

つれなさのうつゝに限る中ならは夢にや人のあふと見えまし

右爲レ勝。

三十番

左勝　富行

ことの葉の情もあらはをのつからうきにや殘る涙ならまし

右　盛行

數ならぬ身をかこてとや僞の情にたにもなをもらすらん

左哥まさり侍へし。

三十一番

左持　　行俊

ことしなん命より情なき跡におしかるへきは憂名也けり

右　　藤蔭

かひなしや後の世とたに逢事を契らぬ中にすてむ命は

左右よろしく侍る。勝劣不レ辨。

三十二番

左　　延良

つれなさをしたひ忘ぬとし月のつもれる程は人もしるらん

右勝　　秀長

逢事にかへはと思ふあらましの末もたのまぬわか命哉

右。いさゝか勝侍にや。

三十三番

左持　　貞香

こりす猶したふ心よつれなさのはてもや有と何たのむ覧

右　　延誠

つれなさの程をしらすは同し世になからへはとも頼れやせむ

左右。齊優劣見え侍らす。

三十四番

左持　　貞蔭

等閑のつれなさならは数ならぬ身を忘てもしたはれやせん

右　　延明

いたつらにうき名なかして妹せ川へたつる中は逢せたになし

同躰。

三十五番　　待[illegible]

左持　　家行

までといふ誰あらましになからへてうきに命の猶殘る覧

右　　憲家女

つれなさやおもひよはるとなからへて待みる程の命とも哉

左右皆。心詞無二勝劣一侍へし。

三十六番

左持　　常良

つれなさもはてしあらはと頼身の心なかさや命成らん

右　　朝棟

つれなさをいつまてとてかしたふらん命は人のかきり有世に

此両首。とり〳〵に優に侍歟。

三十七番

左持　　常良

かはるやと人をうたかふ心にてとはて更るもいとゝかなしき

右　　朝棟

待よひも誰あらましに更ぬとてとはれは人の憂になすらん

左。聊可レ勝歟。

三十八番

左　　家行

更てうき影ともなるはまつ事のまた身に殘る山のはの月

右勝　　憲家女

宵のまは待に頼みもあるものを更るもつらき月のかけ哉

右聊勝へし。左第三句より下。戀哥としも不レ聞歟。

三十九番

左持　　貞蔭

僞のつらさにこりぬ心かなちきれは人の猶またれつゝ

右　　延明

うき人の僞しるく更る夜に猶まちすてぬ程もつれなし

雨首爲レ持。

四十番

左持　貞　香

せめてなと來ぬ夜あまたの僞をまたしとたにも思はさるらん

右　延　誠

とはれけるいつの夕へのならひとて契れは人の猶またるらむ

又爲レ持。

四十一番

左勝　延　良

僞もいつの限にたのめとて今よひも更る契なるらむ

右　秀　長

宵のまとおもはゝせめて僞の契もたのむかたやあらまし

雨篇なをつきかたく侍へし。

四十二番

左　行　俊

たのめぬを我あらましに待よひの更るは人の僞もなし

右勝　雅　藤

いつはりとおもふ心も無なれは猶まちすてぬ夕なるらん

此左右心々可レ爲レ持之處、右歌。猶心ある躰に侍けり。

四十三番

左　富　行

ことはりともとまつに頼みを殘す夜の更もつらき鐘の音かな

右勝　盛　行

とはれすは後のつらさとなりやせむこよひは頼む人の言のは

右心ふかきまに侍へし

四十四番

左勝　延　親

まちあかす我あかつきの鐘の音をたか別れにかなして聞らん

右　業　冬

有明の月は雲ゐに出ぬれとまたれてとはぬ人そつれなき

右。有明のつれなさみゝなれ侍。左のかね。勝とさゝなされ侍る。

四十五番

左　朝　名

とはるへき頼をなにゝ殘してか思ひもすてぬゆくゑ成らむ

右勝　家　業

僞はなか〳〵うしと思へとも契れはたのむゆふくれのそら

右は。猶心有て侍へくや。

四十六番

左持　根　懸　朝　名

慕ひてもかひなき身こそかこたるれ人の心のつらきのみかは

右　家　業

身の程をおもひしりてもうき人のつらさにたへぬ我なみた哉

雨首竝躰に侍。しゐて勝負を決かたし。

四十七番

左持　延　親

しらせはやまくすか原の秋風にたへぬ恨のありと計に

右　雅　冬

つらからは思ひもたえて何とたゝしたふ恨の猶のこる覧

此左右。さることに侍。おなし程に申へし。

四十八番

左持　富　行

人をのみつらきになして恨るや身のとかしらぬ心なるらん

右　盛　行

こゝろにはのこる恨のありとたにことに出ねは知人そなき

同前。

四十九番

左勝　行　信

[illegible]涙にまけてつらさをも思ふ計はいひそしらせぬ

右　華　叢

[illegible]思ひしりぬる心をは誰になしてか久うらむらん

[illegible]尚さうらはん[illegible]と侍に。左。まかされて侍る敗や。勝と申侍へし。

五十番

左持　延　良

ことはりをおもひしらすは数ならぬみを忘てやなを恨まし

右　秀　長

身をしれは人の心のつらさをも恨るまての言の葉そなき

左右こゝろ〳〵。不レ可レ有二勝劣一歟。

五十一番

左勝　貞　香

心に[illegible]も残るらん言の葉にいひ尽すへきつらさならねは

右　延　誠

さのみとていはぬ日数の移をもうらみよはると人や思はん

左。勝侍にや。

五十二番

左持　貞　叢

身の程をおもひもしらはせめてなと人のつらさを忘さるらん

右　延　明

数ならぬみのことはりのしられすは人のつらさも猶やまさ覧

左右。心詞不レ替にや。

五十三番

左持　家　行

よしやたゝ風のたよりの眞葛原うらみしかひも有みならねは

右　憲家女

恨みわひ涙に袖そ朽ぬへき我みひとつの憂になせとも

此番も。無二差勝劣一侍。可レ為レ持歟。

五十四番

左持　常　良

つらさをもたへて命のなからへは世にためしある恨とやせむ

右　朝　棟

うきを身の咎とはかりはしりなからつらさそ人に猶残りける

兩首。心々とり〳〵に侍る。

五十五番　山家松

左持　常　良

とふ人は絶てあらしの音信て松にのみきく山かけの庵

右　朝　棟

たえてすむ友としきけは淋しさもうきになされぬ峯の松風

此兩首。とり〳〵に侍。よろしき持と申へし。

五十六番

左　家　行

馴なはと思ひしよりも淋しきはしのふみ山のまつの夕風

右勝　憲家女

としをへていく世の夢を殘しけん枕になるゝ峯の松かせ

左。しのふみ山。何とよめるにか。右はおほつかなき所なく。優に侍にや。

五十七番

左持　貞　蔭

心をもすめとてしめし宿なれはさひしき松の風もいとはす

右　延　明

松風の吹ぬたえまも淋しさの猶かこたるゝ山かけのいほ

兩首。持に侍へきか。

五十八番

左持　貞　香

たえすとふ松の嵐の音つれはなれてもさひしやまかけの庵

右　延　誠

なれなはと何思ひけむ淋しさはおなしみ山の松の夕風

又無二勝負一や侍らむ。

五十九番

左持　延　良

さひしさをいかにしのへとまつ風のとひも忘ぬ軒はなるらん

右　秀　長

山里のならひとおもふ淋しさもわけてしらるゝまつの夕風

勝負猶不二分明一。

六十番

左勝　行　俊

やま蔭の柴の庵はしはしにて軒はの松や千年をもへむ

右　雅　蔭

淋しさをうきになしても山さとに聞すてられぬ松のゆふ風

左。祝言珍敷心。勝侍へくや。

六十一番

左持　富　行

ならひそとおもひなすにも山里の猶さひしきは松の夕かせ

右　盛　行

たゆむまはしはしまきるゝ淋しさもなを忘られぬ軒の松かせ

左右。初五字おなし程に聞ゆるにや侍らん。

六十二番

左持　延　親

庵はまた身をもかくさぬ山里に心こそすめ軒のまつ風

右　雅　冬

いつとてもとふ人はなき山さとに心と誰をまつのゆふ風

左右おなしかるへし。

六十三番

左持　朝　名

なれなはとおもひし峯の松風になを淋しさをかこつ宿哉

右　家　業

さひしさはさらても同しやま里に松のあらしを何かこつらむ

同前。

六十四番　懷舊夢

左　朝　名

たのますよみるもはかなき夢路より面影はかり通ふ昔は

右勝　家　業

ぬるかうちの夢には道もかひそなき現にかへる昔ならねは

兩首。心同といへとも。右少し勝と申へくや。

六十五番

左　　　　延視

今更にむかしを忍ふね覺識なこりを夢のすゑにのこして

右勝　　　　雅冬

遠さかる昔を今と見る夢の覺るたゝちも現なるかは

右哥。結句いかゝとみえ侍に。左。夢のすゑ。なを聞ならはす侍。右勝とすへし。

六十六番

左　　　　常行

はかなしやさむれはもとの古に又立かへるゆめのをも影

右勝　　　　盛行

をのつからみる俤もとまらぬは昔にかへる夢路也けり

右は殊にやすらかにて。勝侍へし。

六十七番

左　　　　行俊

なき人の面かけみせてぬるからちの夢はむかしも隔さりけり

右勝　　　　雅蔭

ゆめ路にもかよふたよりやなからまし現にしたふ昔ならすは

又以二右一可レ爲レ勝。

六十八番

左持　　　　延良

さめぬれは又今さらにしのふ哉夢を昔の俤にして

右　　　　秀長

面影もありしはかりに見る程のゆめそ昔のかたみ也ける

左右。下句大略同哥なり。持に侍へし。

六十九番

左持　　　　貞香

みても猶はかなきものは思ひねの夢ちにかへる昔なりけり

右　　　　延誠

夢のうちにかよふ計の俤は見るもはかなき昔なりけり

是も兩首心詞同。不レ可レ有二勝劣一歟。

七十番

左持　　　　貞蔭

俤の人たのめなるむかし哉みてもとまらぬ夢にかよひて

右　　　　延明

いにしへをかへしてみつるうたゝねの夢の名殘を又したふ哉

右第二句。夜の衣かとみえ侍。左は戀のこゝろかと見ゆ。

不レ可レ有二勝劣一歟。

七十一番

左持　　　　家行

ありとても猶行すゑそたのまれぬ過にし方を夢と見るにも

右　　　　憲家女

いま更に覺ても落る涙かな昔にかよふゆめの名殘に

左初五字。何と詠るにか。我身の事ならは。ありて世になと侍らは。よろしく哉侍へし。但し同事歟。右。優に侍。但し戀の哥にや侍らん。女うたなれは可レ爲レ持。

七十二番

左持　　　　常良

はかなしとおもひなからもたのむ哉昔は夢のほかに見えねは

右　　　　朝棟

面かけはさらても殘るいにしへを猶忍へとや夢にみゆらん

兩首よろし。爲レ持。

七十三番　神祇

左　　常良

みしめ縄たのみをかくるかひあらは神の心もさそなひく覧

右勝　　朝棟

あめの下まもる誓ひも神風のおさまれる世の恵にそしる

左下句。近寄侍歟。右神風宜。爲レ勝。

七十四番

左持　　家行

天てらすみかけや更にうかふらむ心のみつのすむにまかせて

右　　憲家女

五十鈴川きよきなかれにすむ月の影にもふかき恵をそしる

左殊に宜侍。右五十鈴川月も。難レ棄や侍らん。

七十五番

左勝　　貞蔭

ますかゝみいまも曇ぬ御かけこそ神代をうつすすかた也けれ

右　　延明

跡たれて流たえせぬいすゝ川ふかき誓ひの程もかしこし

神代をうつす鏡。あきらかに侍へくや。

七十六番

左勝　　貞香

あま照すかみの恵は久かたの月日とともにつきしとそ思ふ

右　　延誠

君か代を常盤にいのる榊葉に木綿四手なひくいせの神垣

此両首皆宜。いつれ勝とも申かたくこそ。

七十七番

左持　　仁良

ちかひをは神もへたてしみつ垣の内外にかける宮の道とも

右　　秀長

岩戸開しよもの神わさなかりせは光あまねく世を照さめや

左右。又いつれとも申かたし。但右。結句少きゝよからす侍歟。

七十八番

左勝　　行俊

うこきなき下津岩根の宮柱いくたひ同し跡にたつらん

右　　雅蔭

つかへても神の恵はしらゆふのかけて心にたのむ計そ

左の宮柱。力入て聞ゆ。光かち侍へし。

七十九番

左持　　富行

神代よりめくみはしけき芦原の國のさかへは今もかしこし

右　　盛行

いすゝ川かみ代久しくすみそめてなかれの末そ限しられぬ

左は。あしはらの國いまもさかへ。右は。五十鈴川の流かきりなく見え。可レ爲レ持歟。

八十番

左勝　　延親

まことある人をや神も守らむめくみは同しちかひ成とも

右　　雅冬

内外とて分へき神の誓ひかはおなしめくみにてらす月日を

左右のちかひ。神恵　不レ及二是非一歟。

八十一番

左持　　朝名

やはらけて光を塵にましへしや世を照すへき始也けり

右　　家業

みつかきのそとものミやゐふりぬれと神の惠そ猶あらたなる

兩首。神なり妙なり。爲レ持。

常良　持六　負三
家行　持五　負四
貞藤　勝二　負一　持六
貞香　勝一　持八
延良　勝二　負一　持六
行俊　勝四　負四　持一
富行　勝一　負四　持四
延親　勝一　負三　持五
朝名　勝二　負三　持四

朝棟　勝三　持六
憲家女　勝四　持五
延明　勝一　負二　持六
延誠　持八　負一
秀長　勝一　負二　持六
雅藤　勝四　負四　持一
盛行　勝四　負一　持四
雅冬　勝三　負一　持五
家業　勝三　負二　持四

右外宮北御門歌合以村井敬義本挍合

新玉津嶋社歌合　貞治六年三月廿三日

題　權中納言爲秀卿

浦霞　尋花　神祇

作者

左方

二條殿　關白從一位藤原朝臣良基公
北山　右大臣正二位藤原朝臣實俊公
三條　從一位藤原朝臣前內大臣公忠公
洞院　從一位藤原朝臣前內大臣實夏公
三條　正二位行陸奥出羽按察使藤原朝臣實繼
今小路前大納言　正二位藤原朝臣良冬
九條殿息　正二位行權大納言右近衞大將藤原朝臣忠基
征夷大將軍正二位源朝臣義詮
綾小路前中納言　正二位源朝臣重資
園前中納言　從二位藤原朝臣基隆
中山前中納言　從二位藤原朝臣定宗
富小路前宰相中將　從二位藤原朝臣實名
四辻宮　正二位行左近衞中將源朝臣善成

從三位行左近衛權中將藤原朝臣冬貫
西園寺內大臣女
大納言公直母
後醍醐院女藏人万代
正四位下行左近衛權中將藤原朝臣家尹
正四位下行左近衛權中將藤原朝臣行輔
（冷泉）從四位下行左近衛權中將藤原朝臣爲邦
（日野）藏人正五位上行左少辨藤原朝臣仲光
（吉見）正五位下行右馬頭源朝臣氏賴
前伊與守正五位下源朝臣貞世
僧正法印大和尙位慈能
散位從五位下三善朝臣資連
法務僧正法師大和尙位光濟
權少僧都法眼和尙位經賢
權律師法橋上人位明紹
（今川）沙彌心省
沙彌光威

沙彌仍海
沙彌照覺

右方

從一位藤原朝臣 九條前關白經教公
從一位藤原朝臣 經通公
內大臣正二位行左近衛大將藤原朝臣 師良公
從三位宣子
從三位資子
從四位上行右近衛權中將藤原朝臣爲重
沙彌觀意
權中納言爲秀女
（冷泉）正三位行權中納言藤原朝臣爲秀
（日野）正三位行權中納言藤原朝臣時光
參議從二位行侍從兼備中權守藤原朝臣行忠
權中納言從三位兼行右衞門督藤原朝臣忠光
（小倉）正三位藤原朝臣實遠
（石山座主）權僧正法印大和尙位杲守
從二位行權大納言藤原朝臣公豐
參議從三位行右兵衞督藤原朝臣爲遠

二條 正三位藤原朝臣爲忠

侍從同

爲遠 從四位下行左近衛權少將藤原朝臣爲定

權中納言爲定女

徽安門院小宰相 九條三位隆朝卿女

世尊寺 散位從五位上藤原朝臣爲敦

前遠江守從五位上三善朝臣信方

上野介 散位從五位上源朝臣氏光

松田 正六位上行左衛門少尉平朝臣貞秀

權律師法印大和尚位有慶

從三位行大藏卿兼越中權守菅原朝臣長綱

小比叡宣從四位下行中務權大輔兼祝部宿禰成光

賀茂社神 散位從四位下賀茂縣主雅久

佐々木佐渡大夫判官入道 沙彌導譽

安藝前入道 沙彌性威

散位從四位下安倍朝臣宗時

道堅

久我 太政大臣從一位源朝臣通相公

講師

冷泉中將爲邦朝臣

讀師

冷泉中納言爲秀卿

判者

同前

一番　浦霞

左　關白二條良基公

紀の浦のみや浪もかすみも立まよひそら吹上の春のうらかせ

右　〔前關白〕

霞のみたつとはみえて難波かた浪しつかなるはるの明ほの

二番

左　〔右大臣〕

和歌のうらや風おさまれる御代なれはいく〳〵霞も立重るらむ

右　內大臣二條師良公

もしほ燒なにはのみつの朝かすみ煙をこめてたちやそふらん

三番

左　前內大臣三條公忠公

ゆふ日かけかたふく浦のなみまより霞もはてぬ松のむらたち

右　從三位宜子 資名卿女

みくまのや浦こく舟のほのかにもみえすかすめる波の遠かた

四番

左　前內大臣西園寺實俊公

たちこむるすゑは雲ちのうら〳〵にかすみて遠きおきの釣舟

右　從三位資子

わかのうらや雲と浪との末とほくかすみもやへの春の明ほの

五番

左　按察使實繼

あけわたす浦のはつ嶋はつかにもみえぬや深き霞成らむ

右　右近權中將爲重朝臣

みとりなる霞の色にかけてけりまたはつ草のわかのうら浪

六番

左　前大納言良冬

へたてしな浪ちの末は霞むとも心をよするわかの浦舟

右　沙彌觀意（按察入道大納言）

清なみはたえ〲みえてわたの原春は霞の色そはてなき

七番

左　右近大將忠基（九條御息）

こく舟のゆくゑもみえすかすむなり遠き浦ちの春の曙

右　權中納言代壽女

あさなきのうら路のとけき八重霞波はこゑさへ立へたてつる

八番

左　征夷大將軍（義詮）

明石かたせとのしほ風吹にけり霞もはてぬ奧津しら浪

右　權中納言（[illegible]秀）

和歌の浦やみちくる鹽はみえわかて霞のまより波はいさよふ

九番

左　前中納言重資

いくらのちさとの波もうつもれて霞そやへの鹽ち也ける

右　權中納言時光

わかのうらや松こそ春の色ならめ浪さへかすむみとりそふ覽

十番

左　前中納言基隆

わかの浦や鹽のみちひもみえぬまてあしへはるかに霞む頃哉

右　參議行忠

和歌の浦やあしへのたつのこゑはかり浪にきこえて立霞哉

十一番

左　前參議定宗

ふみ迷ふわかの浦なみ代々かけしあとゝもみえすなと霞む覽

右　右衞門督忠光

あさみとり立そふ春の色みえて松よりかすむ和歌の浦なみ

十二番

左　前參議實名

白妙のはまのまさこを吹上や霞をよするはるのうら風

右　前參議實遠

すみよしのうらふく風もあさみとり松にはあへす霞春かな

十三番

左　左近中將善成

春といへは猶しほかせのふきあけに霞もはてぬわかのうら松

右　權僧正杲守

なみかゝるよとのつきはしたえ〲に霞もはてぬまのゝ浦風

十四番

左　左近權中將冬實

ゆふなきのはるの浦なみはる〲とかすみをわくる蜑の釣舟

右　權大納言公豐

よさの浦やなきたる朝にみ渡せはたえ〲霞むあまのはし立

十五番

右　僧正桓覺

今朝はなを霞にけりな鹽竈のうらの煙もわかぬはかりに

二十六番

左　僧正光済

みとりそふ松のみ春はあらはれて木のまにかすむわかの浦浪

右　大藏卿長綱

和歌の浦やよせくる浪はのとかにてかすみ計そ立とみえける

二十七番

左　權少僧都經賢

よそにたにこきゆく舟はみえわかてそらよりをちにたつ霞哉

右　小比叡禰宜成光宿禰

紀のうみやそこともしらすたちこめて霞たゆたふわかの浦風

二十八番

左　權律師則祐

霞のみたつとそみゆるわかの浦の浪と風とのおさまれるよは

右　散位雅久縣主

あさほらけおとはへたてすきこゆ也霞にのこる和歌のうら浪

二十九番

左　沙彌心省

うら風の吹上のはまもなのみして霞にこもる春のあけほの

右　沙彌導譽

ひのいつるおきつそらより明そめてそらの霞によや殘るらん

三十番

左　沙彌元威

さかの浦の浪はへたてしなともなしいかにたちそふ霞成らん

右　沙彌性威

うら／＼のなきたる朝もふく風に霞のこせる松のむらたち

三十一番

左　沙彌仍海

きのうらや音はかりして浦風のよはれはかすむをきつしら浪

右　散位宗時朝臣

浦なみのみきはに遠くなり行や立そふ春のかすみなるらむ

三十二番

左　沙彌照覺本近江大夫入道

とをさかる浦半のまつの色なからみとりをそへて立霞かな

右　蓮堅

わたのはらのこる日かけもくれなゐの霞にかゝる奥つ白浪

三十三番

左　前關白九條經教公

久かたの空こそ春にかすむとてたちなへたてそわかのうら浪

右　太政大臣久我通相公

はる／＼とおきつ浪間はうつもれて霞にうかふわかの浦松

三十四番　尋花

左　關白

花とみる雲のよそめにあくかれてきにし心のはるの山みち

右　前關白近衞

みよしのはしのふの山にあらねとも花に分入おくのかよひち

三十五番

左　右大臣

山深みかきりもしらすわけいらん花よりおくに花もありやと

右　内大臣

このもとにけふはくらしつ明はまたあらぬ山ちの春や立らむ

三十六番

左　前内大臣

あくかるゝ心を花のしるへにてやまちの雲をいくへこゆらん

右　従三位宣子

山さくらあかぬこゝろをしるへにていくへもわけむ峯の白雲

三十七番

左　前内大臣

かへるさは道まよふとも山櫻かつさくみねを猶やたつねむ

右　従三位資子

わけわけぬこゝろ許はさきたてとしらぬ野山を花にまかせて

三十八番

左　按察使實繼

たつねきて千代もへぬへき山路哉のとけき春の花し匂はゝ

右　爲重朝臣

山ふかくわけつる花のかけなれやさくらにうつむ跡のしら雲

三十九番

左　前大納言良冬

いくたひか花にまかへて白雲のかゝるやまちに尋ねきぬらん

右　觀意

さくらかりはなかとみゆる白くものいくへの峯に人さそふ覽

四十番

左　右近大將忠基

見ぬ[illegible]花をたよりにきつる哉歸る山路のあとたとるまて

右　權中納言爲秀女

櫻狩くれなはけふそかへらましまれなる花のかけはたのまて

四十一番

左　征夷大將軍義詮

行まゝに山はさくらにあらはれて花よりつゝく峯の白雲

右　權中納言爲秀

いたつらにゆきては歸る日數へてまたみぬ花に猶やまよはぬ

四十二番

左　前中納言重資

まかひつるよそめを道のしるへにて花にわけなす峯のしら雲

右　權中納言時光

けふいくかよそめははなと峯の雲わけてもこりぬ心なるらん

四十三番

左　前中納言基隆

木の本にけふはくらさむ櫻花かへさをおくれ山のはの月

右　參議行忠

たつねこしあとはいくへの霞ともしらぬ山路の花にくらしつ

四十四番

左　前參議定宗

分すきて行衛の道に咲はなをかつみよし野の奥そゆかしき

右　右衛門督忠光

ゆくすゑは花をかきりの山ちともみえぬおのへの山のしら雲

四十五番

左　前參議實名

みやこふといつれを花のさかひともしらぬ山路の雲やわく覽

右　前參議實遠

わけいれははなにもうつむあともなくて猶さをよふ峯のしら雲

四十六番

左　左近中將善成

みよし野はいつくも花の影なれはわきてしほりの跡も尋ねす

右　權僧正杲守

咲にけりたつねぬさきの日影さへけふはくやしき山さくら哉

四十七番

左　左近中將冬實

わけきつる心つくしはやま櫻うき身なからも哀とをみよ

右　權大納言公豐

分まよふ花の所のしるへして雲より匂ふ春のやまかせ

四十八番

左　西園寺内大臣女

たつね入道も梢のさかりにてはなゆへ花のかけやくれなむ

右　右兵衛督爲遠

まかひける雲に山路をさそわれてけに咲花のところをそしる

四十九番

左　大納言公直母

雲とのみよそにみえつる山櫻わけ入まゝに花になりゆく

右　前參議爲忠

しをりせし道はたのまて山さくら花のかにのみまかせてそ行

五十番

左　女藏人万代

よそにして尋ねもゆかし身のうきを花に任せて見る世ならすは

右　頓阿

花ゆへにいまさらとはゝ我宿とたのむよしのも道やたと覽

五十一番

左　家尹朝臣

けふははやたつねくらして山櫻あすのためなる春のしたふし

右　嗣定朝臣

しら雲のしらぬ山路は花の香の風をたよりにたつねてそ行

五十二番

左　行輔朝臣

たつねゆく末に心のいそかれて花ゆへ花をしつかにも見す

右　權中納言經定女

白くものかさなる峯はとをくともこえてや花をみよし野の山

五十三番

左　爲邦朝臣

咲花のこのもとちかくなりぬらしにほひそふかき春の山風

右　小宰相

ふきさそふかせのさきにとあくかれて花よりあたにちる心哉

五十四番

左　仲光

山ふかく分入はなのおもかけを霞をそむるみねのしら雲

右　爲敦

あくかるゝ心を花のしるへにてまたみぬ山のおくもまよはす

五十五番

左　氏頼

山深みわけこしほともしられぬは花にやうつるこゝろ成らん

右　信方

きのふまて分こしやまをよのまにも花咲ぬやと又たつねつゝ

五十六番

左　貞世

けふも猶うはのそらにやまよはまし花みて歸る人しあかすは

右　氏光

木のもとにことよひかさねん行末の雲をはあすの花にのこして

五十七番　左　　貴　連

しるへなき山のかすみにわけ入てまた見ぬ花に道たとるなり

右　　平貞秀

分ゆかは花のところとなりやせん山ちのすゑにかゝる白雲

五十八番　左　　前僧正慈能

あくかるゝ花のこゝろをしるへにて山路たとらぬ花さかり哉

右　　僧正桓覺

咲そむるこすゑやあると花ゆへにけふもやまちを尋ねつる哉

五十九番　左　　僧正光済

山ふかみまたみぬ方をたつねきて心をはなに迷ひつる哉

右　　大藏卿長綱

にほひくる風をたよりに白雲のかゝれるかたに花やたつねん

六十番　左　　權少僧都經賢

日數へてはなにそこゆる雲井路の遠けき程とみえしたかねを

右　　成光祐禰

わけこすは花ともしらていたつらにさてやはつせの峯の白雲

六十一番　左　　權律師則祐

いつくともしらぬやまちの花の香にやへ立雲を分やつくさん

右　　雅久縣主

みよし野や雲のおくまてしるへせよ花のか深き春の山かせ

六十二番　左　　心　省

けふも猶はなにはなくていたつらに雲のみわくる春のやま道

右　　尊　譽

花かとて木のもとことに立よれはたゝ雨雲のよそめ成けり

六十三番　左　　元　威

山櫻またみぬかたのしるへには風そまたるゝあふ人はなし

右　　性　威

よそめにはたれかはわかむたつねくる山ちも春に迷ふ白雲

六十四番　左　　仍　海

あすもなをたつねやせまし吉野山けふみぬ方に春や殘ると

右　　宗時朝臣

そことなき春の山路をたとるかな人たのめなる風の匂ひに

六十五番　左　　昭　覺

あかす猶わけてやみまし山ふかみ花よりおくのみねの白雲

右　　道　堅

分つくす花にことよひも旅ねしてあすはいつくの山ちくらさむ

六十六番　左　　前關白

花かともとひてそみまし山の端の雲ににほひはあらしふく也

右　　太政大臣

旅まてけさにほひつる花のかや夕こえかゝる山のしたかせ

六十七番　神祇

左　　　　　　　關白
たのむかな我ふちはらの都よりあとたれそめし玉つ嶋姫
右　　　　　　　前關白近衞
みつかきのみかゝれしよりやはらくる光そまさる玉津しま姫
六十八番
左　　　　　　　右大臣
言のはの露もみたれぬあしはらやひかりをそふる玉つ嶋姫
右　　　　　　　内大臣
たまつしまもとの光にまさるらし都にうつす神のみやゐは
六十九番
左　　　　　　　前内大臣
幾千代もまもりはすてし敷嶋のやまとしま根は神のくにとて
右　　　　　　　從三位宣子
ことの葉をいかてみかゝむ玉津しまめくみしらるゝ神の光は
七十番
左　　　　　　　前内大臣實
あまてらすかけをみかきてたまつ嶋神よのあとは猶守るらし
右　　　　　　　從三位資子
今もかもみかきやそへむたまつ嶋神のしるしの跡もかはらす
七十一番
左　　　　　　　按察使實繼
いとゝ猶ひかりをみかく玉津嶋みちをも世をもさそ照すらし
右　　　　　　　爲重朝臣
さゝかにの蛛の糸すちよゝかけてたえぬことはの玉つ嶋ひめ
七十二番
左　　　　　　　前大納言良冬
やはらくるひかりも道をてらすらむ今はたみかく玉津嶋姫
右　　　　　　　觀意
こゝのへに宮ゐをいまもうつしきて昔にかへる玉つしまひめ
七十三番
左　　　　　　　右近大將忠基
おろかなる心は神そてらすらん我ふみまよふしきしまの道
右　　　　　　　權中納言爲秀女
みかきなす玉つしまひめ君か代の光そへとや跡をたれけん
七十四番
左　　　　　　　征夷大將軍義詮
神もさそひかりをそへむ玉津嶋あらたにみかく時をまちえて
右　　　　　　　權中納言爲秀
えにしありてうつる光も玉つしまたゝ我道のしるへ也けり
七十五番
左　　　　　　　前中納言重資
波の下にしつみはてしをもしほ草神そ手向のかすもいれつる
右　　　　　　　權中納言時光
いく千代も猶まもるらし玉つしま曇らぬ君かおなしひかりを
七十六番
左　　　　　　　前中納言基隆
都にも光をわけてたまつしまくもりなきよをさそ守るらむ
右　　　　　　　參議行忠
君かよにふたゝひみかく言のはの光もそひぬ玉つしまひめ
七十七番
左　　　　　　　前參議定宗
あとたれし昔をとへは玉つ嶋かみ世の松にうらかせそふく

右

いにしへもかくやはみかく玉つしま光をそへよ今のみやゐに　右衛門督忠光

七十八番　左

和歌のうらや浪のしらゆふ代々かけて我道まもる玉つ嶋姫　前參議晋名

右

おふしてのなひかむ末もあつさ弓道に照せ玉つしま姫　前參議實遠

七十九番　左

いさたとる海のはまもにあらはれて心をよせしたまつしま姫　左近中將善成

右

あとたるゝ名もあらはれて和歌の浦やもに埋もれぬ玉つ嶋姫　權僧正果守

八十番　左

神かきもあらたにみかく玉つ嶋あきらけき世の程はみえけり　左近權中將冬實

右

千早ふる神しらけすは玉津嶋たまならぬ身の名をかけめやは　權大納言公豐

八十一番　左

萬代もさそやまもらむ玉津嶋みかきそへぬる神のひかりに　西園寺内大臣女

右

うつしゝ宮ゐはこゝにあらはれて光もそひぬ玉つ嶋ひめ　右兵衛督爲遠

八十二番　左

たまつしま花の錦にあらはれて昔をやすかく猶まもるらし　大納言公直母

右　前參議爲忠

玉津嶋たえぬ浪ちにうかふ舟のうたかた守る神もたのまし

八十三番　左　女藏人万代

みやゐして君をそまもる玉つ嶋光をそふる萬代までも

右　頓阿

めにみえぬ神のあはれむ道を猶わきてそまもる玉つしま姫

八十四番　左　家尹朝臣

さそなけに神もうくらむ和歌の浦にあつむる玉の光あるよを

右　嗣定朝臣

世々へぬるあとはあれとも玉つ嶋けふの手向やわきてうく覧

八十五番　左　行輔朝臣

さらにまたひかりそふらし玉つ嶋みかきかさぬる神の宮ゐに

右　權中納言經定女

和歌のうらにあとたれしより世々をへて光そまさる玉つ嶋姫

八十六番　左　爲邦朝臣

今そ猶ひかりはまさるたまつしまこゝも昔の宮ゐなれとも

右　小宰相

よる浪のつての藻くすもらすなよみかく言葉の玉つしま姫

八十七番　左　仲光

和歌のうらの道あるみ代の光にそ跡をもたるゝ玉つ嶋ひめ

右　爲敦

いにしへにかはらぬあとやしらるらむうつす光の玉つしま姫

八十八番

左　氏頼

たまつ嶋きみかみかける神垣にやちよの末をさそ照すらむ

右　信方

たまつ嶋みかける君を萬代と神のこゝろにさそ守るらん

八十九番

左　貞世

九重にちかきまもりと玉津嶋光をわけて神やすむらん

右　氏光

やはらくる光をそへて玉つしまかみの宮ゐもみかくとそ見る

九十番

左　資運

あらたなる神のゐかきの松かえに君か千年はかねてしるしも

右　平貞秀

こゝにまたみやゐせしよりやはらくる光やうつす玉つ嶋姫

九十一番

左　前僧正憲能

いとゝしくみかくひかりに敷嶋の道をやてらす玉つ嶋ひめ

右　僧正桓覺

玉つしま宮ゐをこゝにうつしてや猶この道のひかりそふらむ

九十二番

左　僧正光濟

玉つしまたむくるからに言のはの露にもみかく色や見ゆらむ

右　大藏卿長綱

こゝに又あとをたれよとやはらくる光をうつす玉つ嶋ひめ

九十三番

左　權少僧都經賢

千はやふる神よの道をそのまゝにのこして守るたまつ嶋姫

右　成光宿禰

君か代にみかく道とや玉つ嶋いまのみやゐもひかりそふらん

九十四番

左　權律師則祐

よろつよの君かひかりと宮はしらたてゝそみかく玉つ嶋ひめ

右　雅久縣主

今さらにみかきそへよとひかりをはみやこにわくる玉つ嶋姫

九十五番

左　心省

おろかなる我ことのはもたまつ嶋みかくひかりをたのむ計に

右　導譽

この道の言葉をみかく玉津嶋ちかひやよゝにたえせさるらむ

九十六番

左　元威

おなしくはみかく心のかひも哉露のこと葉の玉つしま姫

右　性威

和歌のうらにひろへとつきぬ玉つ嶋よゝの光は神のまに〳〵

九十七番

左　仍海

いとゝ猶光やそへんたまつしま世のあきらけき時にあひつゝ

右　宗時朝臣

跡たれてこゝにそ今はきの國やそのなふりにし玉津嶋姫

九十八番

左　昭覺

玉へしきのやまとのちりにましはるや猶道まもるちかひ成らむ

右　　　　　　道堅

おさまれるよにみかゝれて玉つ嶋なをあらたなる光そふらん

九十九番

左　　　　　　前關白

みかきえぬこと葉の露のたまつ嶋神も光をそへさらめやは

右　　　　　　太政大臣

ましりける道もあらたに玉津嶋みかきあつむるやまと言の葉

冷泉爲和朝臣以二眞蹟一令二書寫一校二畢。假名眞名不レ違二一字一也。

右新玉津嶋歌合以百花庵宗固本挍合

和歌部六十一 歌合二十七

五百番歌合 天授元年

一番 春一

左勝 女房

出る日の影も神代にかはらねは我國よりや春はたつらん

右 源資氏

久堅の雲ゐやなへて霞むらんけふあら玉の千世の初春

天照す神代の春もしらるゝは雲ゐにたかく出る日のかけ

二番

左 無品法親王寺仁譽

萬國民そ業へん我君のめくみあまねきみよの初春

右勝 太宰帥親王兼式部卿惟成親王

春やとき空に嵐の猶さえて霞もやらぬあまのかくやま

みよの春民はまちえて仰くらし霞に高き天のかく山

三番

左 辨内侍

天の戸の明れはやかて霞むなりけふたちかへる春のしるしに

右持 關白

たをやめの御階に出るけふよりや雲井に千世の春はたつらん

春くれは霞もともに立のほる雲の梯又上もなし

四番

左持 前關白入道前關白左大臣

春來ては同し雪けに風さえてかすみもあへぬ遠近のやま

右 權大納言實爲

しら雪は猶ふるさとのよし野山霞はかりに春やたつらん

春來てもかすみそやらぬ遠近の同し雪けのみよしのゝ山

五番

左 春宮大夫顯統

春きぬとふりさけみれはいとはやも天の原こそ霞初けれ

右勝 前大僧正賴意

よそに見し雲もさなからうつもれて霞にけりなかつらきの山

天の原霞のうへやかすむらし雲よりたかき葛城の山

六番

左持 前大納言光有

梓弓はるの日數は淺みとり入野の原ははやかすみつゝ

右 中納言光資

春ははや久米ちの橋の中空にけさは霞やたちわたる覽

立わたる霞も同し空なれは入野の原も春や知らん

七番

左勝 權大納言公長

いとはやも春きにけりと天の原横雲ながらたつ霞かな

右　　前中納言具氏

與謝の海や浪まにたてる松の葉のみどりも見えず霞こめつゝ

　豊岡なる松は沈みてよさの海の霞のうへにかゝる横雲

八番

左持　　左衛門督長親

春のくるそなたの空の朝日影出るとみれはゝや霞つゝ

右　　春宮權大夫師兼

むへしこそ春こゆくらしこもりくの初瀬の山の今朝は霞める

　朝日影そなたの空にこもりくのはつせの山そはや霞ける

九番

左勝　　權中納言實興

霞立をのへの春のあけぼのにおもかけはかり殘る松か枝

右　　源頼武朝臣

立こむる山のいつこは見えわかて霞そふかきみよし野の奥

　霞はつる山の奥よりゆかしきはをのへにたてる松の面影

十番

左勝　　藤原經高朝臣

よさの海や霞をわたる春風にと絶もはてぬあまのはしたて

右　　源成直

棹姫の霞の衣立そめてけふやほすらん天のかく山

　さほ姫の霞立きてほす衣袖ふく風にしほたれぬへし

十一番　　春二

左勝　　藤原經高朝臣

なれに先霞かをしへし鶯のなく音よりこそ春はしらるれ

右　　源貴氏

春來てはふしの裾野そ霞むなる高根は雪のさえかへれとも

　霞立裾のゝ春をしらするも鳴鶯の高根ならすや

十二番

左　　權中納言實興

仕へこし人にやならふ鶯のあしたをいそくこゑきこゆなり

右勝　　源成直

敷嶋の道ある御代の鶯ややまとことはのはなになくらん

　仕へこし人にふりにき鶯の花めつらしき聲を聞はや

十三番

左　　左衛門督長親

綠そふをのへの松の春の色の今ひとしほは霞也けり

右勝　　源頼武朝臣

雪消る谷の戸出て初春のはつ音をけふと鶯そなく

　鶯の谷より出る初ねの日松はふりにしためしはかりそ

十四番

左　　權大納言公長

誰か又袖ふりはへて春の野に雪まのわかなけさは摘らん

[illegible]右勝　　春宮權大夫師兼

清見潟霞やふかくなりぬらん遠ざかりゆくみほの松原

　清み潟ゆたにそ霞む若な摘雪まははるの色もすくなし

十五番

左勝　　前大納言光有

徒に老にけるかな春の野の若なとともに年をつむ身は

右　　前中納言具氏

春きぬとたれか告けん雪ふかき谷の戸かけの鶯のこゑ

　春の野に誰も若なを出て摘ん谷の戸影はよしや住うし

十六番

左　　春宮大夫[illegible]續

みしふつを植し門田のそれならて若なつむにもぬるゝ袖かな

右勝　　中納言光資

春やときをのか羽風の寒けさにまた出やらぬ谷のうくひす

袖ぬるゝ若なはつまし鶯のはかせも寒き谷の小川に

十七番

左勝　　前關白

そことなく霞にけりな棹姫のかつらき山のはるのあけほの

右　　前大僧正頼意

白雪のふりぬる身さえしめし野にけふ珍しく若なつむ也

棹姫のかつらき山は陰高し思ひかけめやねせりつむひと

十八番

左　　辨内侍

春きても猶谷風のさむからし古巣なからのうくひすの聲

右勝　　權大納言實爲

諸人の日影も春と野へに出てけさ七種の若な摘なり

珍しや日影も春の野へを見よ聲はふるすのまゝの鶯

十九番

左持　　無品法親王

立のほるふしの煙の行末は空もひとつに打かすみつゝ

右　　關白

むさし野はいつくを春のかきりとも山の端しらて立霞かな

武藏野もふしの煙の行すゑも霞はてゝはしる人そなき

二十番

左勝　　女房

主や誰ととへとしら浪春立は霞に染るぬのひきの瀧

右　　太宰帥親王

立渡る霞へたてゝ春は猶ゆくすゑ遠し武藏野の原

むさし野も猶數ならす霞つゝ空にはてなき布引の瀧

二十一番　　春三

左持　　女房

鶯の花まつほとのやとりかも春くるかたの庭のくれ竹

右　　關白

うくひすは何のうれへに我君の春待えてもねをはなくらん

鶯のうれへもしらす呉竹の春くる方もおほつかなしや

二十二番

左　　無品法親王

理りや谷には春も白雪のふるすを出てうくひすのなく

[illegible]　右勝　　權大納言實爲

匂ひくる風をしるへにたつねはや梅さく宿の花のあるじを

物うさや今わするらん鶯も梅さく宿のあるし尋ねて

二十三番

左持　　辨内侍

心にも袖にもうつる梅かかをさそふそつらき春の夕かせ

右　　前大僧正頼意

谷の戸の雪やけぬらし朝日影出るふるすのうくひすの聲

梅か香をたくへてさそふ春風に谷の戸出るうくひすの聲

二十四番

左持　　前關白

我爲にくる春としはなけれとも先聞そむるうくひすの聲

右　　中納言光資

吹送る軒はの梅の下風に手枕にほふはるのうたゝね
ゝ我爲に誘ひきぬとや鶯の聲ふきいるゝ梅の下風

二十五番
左持　春宮大夫顯統
咲しより絶すとはるゝ我宿の梅花こそ主なかりけれ
右　前中納言具氏
朧夜の月にもまかふ梅かえの匂ひや花のしるへなるらん
朧なる月と花とを春はとへあるしは宿の梅はかりかは

二十六番
左勝　前大納言光有
また散ぬ袖にあかすなくうつるなりねぬよの床に匂ふ梅か香
右　春宮權大夫師兼
今しはゝ野原の雪は消なゝん八十氏人も若なつむへく
梅かえに我袖ならす此ころは若菜もつます成にし物を

二十七番
左持　權大納言公長
さほ姫のたつや霞のうす衣はるとも見えす雪はふりつゝ
右　源頼武朝臣
若なつむ我跡見えて春の野の雪そ家路のしるへなりける
棹姫の霞の袖や白妙の雪ふりはへてわかなつみつゝ

二十八番
左勝　左衛門督長親
消初る雪まの草のうすみとりまたはつかなる春の色哉
右　源成直
消初る雪まあれはと飛火野にけふ里人や若なつむらん
消初る雪まの草の春の色に今一しほはこゝろ染つゝ

二十九番
左持　權中納言實興
かすめとも猶空寒したをやめの袖の春風心してふけ
右　源貴氏
谷陰はなをかきくらしふる雪にをのれ春しる鶯の聲
谷かけは寒くあるらしたをやめの袖の春風けに心せよ

三十番
左持　藤原經高朝臣
心なきわか袖にしも誘ひ來て梅か香やつす軒の春風
右　太宰帥親王
袖ふれし人のかたみと匂ふらしはるやむかしの軒の梅かえ
梅か香も春や昔とおもひ出は我身ひとつの袖はやつさし

三十一番　春門
左勝　藤原經高朝臣
をのつから涙くもらて見し世たに春は朧の袖の月かけ
右　闕　白
春さむき袖うちはらひ白雪のふる野の若菜誰か摘らし
はる寒き袖打拂ふ雪よりもみしよの月そ心ありける

三十二番
左持　權中納言實興
難波女かこやのしのやの浦風に隙こそなけれ匂ふ梅かゝ
右　太宰帥親王
池水のみとりにうつる陰見れは猶色ふかき春の青柳
なにはめかこや吹風の隙もなし誘ふ梅かゝなひく青柳

三十三番
左勝　左衛門督長親

またれこし軒はの梅の花さかり風こそかよへとふ人はなし

右　源季氏

時しもあれかすむ宵の春そうき花のこのまのいさよひの月

霞つゝ木の間いさよふ月よりは花のさかりに風はふく共

三十四番

左　權大納言公長

春風のにほはさりせは梅の花咲にけりともいかてしらまし

右勝　源成直

咲つゝくあまた梢の梅かかを一つになして誘ふ春かせ

梅かかを空に合せて匂ひけり一木をすくる風はものかは

三十五番

左　前大納言光有

出るより朧は春のならひそとおもふにすきてかすむ月影

右勝　源頼武朝臣

梅かかを我袖まてはさそふともよそになすきそ春の夕風

我袖のたくひしられぬ梅かかを霞める月にいかて比へん

三十六番

左持　春宮大夫顯統

棹姫のかすみの衣春やとき猶かせさえて淡雪そふる

右　春宮權大夫師兼

古郷の軒端の梅も春をへてそめし心の色なわすれそ

さほ姫のかすみの衣春を經て軒はの梅の色に染つゝ

三十七番

左持　前關白

いとはしよよその匂ひをさそひこはみるは一木のむめの下風

右　前中納言具氏

春やとき猶風さえて天つ空かすみもやらす雪はふりつゝ

見る程は一木の梅の色もかもちれはや風に雪とふりつゝ

三十八番

左持　辨内侍

かすむらん空はかりかは影やとす袖のうへにも朧夜の月

右　中納言光資

誰ゆへにつもれは老のなみたさへかすむとしるや春の夜の月

かすむらん空はかりかは老か身の袖も涙に朧夜の月

三十九番

左持　無品法親王

散かゝる花はまかはぬ雪なからはらふ袂に匂ふ梅かか

右　前大僧正頼意

春風もかよふは夢の手枕におとろくはかり匂ふ梅か香

梅か香の夢の枕にかよふ夜はまかはぬ雪もまかふ春風

四十番

左勝　女房

春はや名におふ花も咲ぬらし梅津の里の春をいかにと

右　權大納言實爲

立よりてみてをゆかなん露結ふ遠方のへの青柳の糸

名にしるき梅津の里にさそはれて立もかくれぬ青柳の糸

四十一番　春五

衆議作上　左勝　女房

春は又我住かたに急くなりあし屋の海士の衣かりかね（歸る雁）

右　前大僧正頼意

いとはやも緑をそえて春雨の古木の柳露むすふなり

なへて世のたくひもあらし芦の屋の鹽燒蜑の衣かりかね

四十二番
左勝　無品法親王
をしなへて吹とは見えぬ遠方の柳になひく春の夕かせ
右　中納言光親
舟よはふ河せの浪やかすむらん宇治のわたりの春の曙
舟よはふうちのわたりは見えもせて霞の上になひく青柳
四十三番
左勝　[illegible]内侍
いつも見る同し空にはかはらねと心にそめし春のあけほの
右　前中納言具氏
[illegible]いとは[illegible]かけて柳かけ立よる袖に春風そふく
浅みとり心は春しあけほのゝかすみて残る柳かけかな
四十四番
左勝　前関白
さひしさをたへてみ山の松の戸に影さへふくる春のよの月
右　春宮権大夫師[illegible]
したはした雲ゐのかりの帰山あかりとはかりの秋のたのみは
遠さかる雲ゐのかりの帰山こゑさへふくる春の夜の月
四十五番
左勝　春宮大夫[illegible]
塩竈の煙になるゝ浦人はかすむもしらて月や見るらん
右　源[illegible]臣
越路には春ともいかてしら山の消あへぬ雪にかへる雁かね
春のきていつくはあれと塩竈の煙にかすむ月をこそ見め
四十六番
左　前大納言光有
古郷を見はてぬ夢の手枕に涙をそへてかへる雁かね
右勝　源成直
我思ふ人をはしるやふるさとにいさことつてんはるの雁かね
帰る雁夢にかひなし玉章を現にいとゝ人につたへよ
四十七番
左持　権大納言公長
さすか又花に名残やとまるらんなく／＼そ行春の雁かね
右　源資氏
たえ／＼に軒の玉水音はしてふるとも見えぬ春雨の空
帰る雁なく／＼立し別れより涙絶せぬ春雨のそら
四十八番
左勝　左衛門督長親
はては又雲もひとつに成にけりめかれぬ物をかへる雁かね
右　太宰帥親王
さほ姫の霞の袖にやとる夜は月もおほろの影やそふ覧
さほ姫の霞の袖の月影も雲と一つにかへる雁かね
四十九番
左　権中納言實興
風吹は梢をよそに青柳の亂るゝ藤やはるの糸ゆふ
右勝　關白
そのかみに誰植置て我門の柳はよゝに蔭なひくらん
我門の梢あまねき青柳をよそまてかけて誰たのむらん
五十番
左勝　藤原經高朝臣
秋にのみそめし心の色もまたうつりにけりな春の明ほの
右　権大納言實爲

雲居のならひを更にたとるかなさやつしなれたる袖の月影

右勝　前中納言具氏

澄月の雲井は同し影なから春しもいかて霞そめけん

雲井には霞むはかりの月なるを詠る袖に影なやつしそ

六十番

左持　女房

呉竹の塩屋の夕けふりその色となく春そさひしき

右　中納言光貴

ちはの空に雲つれ捨て行鴈の数さへ見えすかすむ春かな

雲はかり雲つれ捨て行鴈も同し霞の浦の夕くれ

六十一番

左勝　女房

きのふまて見まりし雲の立田山夜はにや花の咲はしめけん

右　前中納言具氏

春といへは霞の衣たちかへり秋こし空に急くかりかね

立田山よはに花咲けさのまをまたても歸る鴈はつらしな

六十二番

新勅撰春下　左　無品法親王

吉野山みねの岩かとふみならし花の為にも身をは惜ます

右　春宮權大夫師繼

匂ひ来る風をは何かいとはましなへて櫻のちらぬ世ならは

なへて櫻ちらぬ世ならは吉野山誰か岩根の道もいそかん

六十三番

左　辨内侍

またしらぬ山路のおくも尋ねみん花にはおしき我身ならねは

右勝　源顯氏朝臣

君すめは八重立雲も九重のみかきか原と花咲にけり

またしらぬ山は尋ねし九重のみかきか原の花をのみ見て

六十四番

左勝　前關白

散はてん後をはいかに咲花にしはしなくさむ身のうれへかな

右　源資直

住吉の神代に植し松ならて誰はの櫻年ふりにけり

住吉の松に相生の花はなし散なん後の身よいかにせん

六十五番

新勅撰春下　左持　春宮大夫顯繼

吉野山岩本櫻うつろへはちらても花の浪やたつらん

右　源貴氏

待ほとは同し木末にたつねきて花ゆへなるゝ春のやま守

まつ程は同し梢そよしの川色なき花のあた浪やたつ

六十六番

新勅撰春上　左勝　前大納言光有

思ひきや三代に仕へてよしの山雲ゐの花に猶なれんとは

右　太宰帥親王

咲ぬとはよそにもしるく匂ふなりかつらき山の花の下かせ

哀なり三代に仕へてみよし野の雲ゐの花にあかぬ心は

六十七番

左勝　權大納言公長

吉野山木末あまたに咲初て花になりゆく峯の白雲

右　關白

出てたに心つくしの影なれやかすむ木のまの春のよの月

咲添て花に成ゆくよしの山よしや木の間の月も見すとも

六十八番

左勝　左衛門督長親

花遅き我身の春のしるへせよ頼むみかさの山のさくら木

右　權大納言實爲

君すめはこゝも雲ゐのよし野山なれてそみつる花の盛を

みよし野の雲ゐになれや花遅き憂身の春そ猶實なる

六十九番

左持　權中納言實興

古郷にかへるはやすき習かとまてこととはんはるのかりかね

右　前大僧正賴意

故郷にいそく心をしるへにて我をもさそへかへる鴈かね

誰も昔しるへとならは忘れしな同し心のかへる鴈かね

七十番

左持　藤原資高朝臣

咲なけと眺めし人は問もこて花こそ春を忘れさりけれ

右　中納言光資

立こむる霞の色も紅のにほひをそふる山さくらかな

立こむる雲の花のくれなゐも問こん人に色はそふへき

七十一番　春八

左持　藤原經高朝臣

山川の岩本さくらちりにけりあらしにまさる水のしら波

右　前中納言具氏

けふも又遠山櫻たつね來てくれなは花の宿やからまし

たつねつる遠山櫻ありにけり岩まにまさる水の白浪

七十二番

左　權中納言實興

此春もかはらぬ色にとはれ來て花には人の情そなき

新葉春下　右勝　中納言光資

うつろはゝいかにせんとか山櫻あたなる花にあひみそめけん

人心變らぬ色はさもあらはあれ移ろふ花よ我いかにせん

七十三番

左持　左衛門督長親

にほはすは花ともいかゝしら雲のたなひく山のみねの春風

右　前大僧正賴意

春霞へたてなはてそ山櫻花の蔭に立かへりなん

白雲の棚引遠の山櫻花の都の色もひとつに

七十四番

左　權大納言公長

櫻花庭をさかりとみるからに木末に春の色そすくなき

右持　權大納言實爲

よしさらは庭を盛と見るはかりそなたにつもれ花の白雪

花の色の雪にふかさやまさる覽庭の盛は同しけれとも

七十五番

新葉春下　左勝　前大納言光有

うつり行日數につけてちる花のつらさをそふる春の山風

右　闕　白

吉野山名もかひありて三代までのみゆきかさなる花の白雲

移り行みよのみゆきの花の蔭おしさやまさる春の山風

七十六番

左　春宮大夫顯統

枝かはす花や散らん立田山松の木のまそ見えす成行

右持　大宰帥親王

櫻咲高ねにかゝるしら雲やさなから花の色と見ゆらん
　峯の櫻木の間の花はたゝ果て雲はかりにかゝるしら雲

七十七番

左勝　前關白

忘れしな又出ぬともよし野山なれてみとせの花の下蔭

右負　源資氏

よしの山若木のさくら咲にけりまた見ぬかたにかゝるしら雲
　みとせ見し花蔭ふりて吉野山わか木の櫻めつらしき哉

七十八番

左勝　讃内侍

雲の翼又はぬ色をみよし野や霞に匂ふ花の夕はへ

右　源成直

紅のうす花そめの山さくらなとしら雲にまかへきぬらん
　紅のうす花染はあかぬかな猶滝しほそ夕はへの色

七十九番

左　無品法親王

さそふをはいとふ物から春の風ふかすはいかゝ花も匂はん

右勝　源頼武朝臣

あかなくにはるの日影を長しとも思ひもはてぬ花のころ哉
　春の日の長きをあかぬ花に猶匂はすとても風はふかせし

八十番

左勝　女房

みよし野の雲ゐの櫻名にしおはゝはてても櫻の春を見せなん

右　春宮大夫顕範

みよしのゝみゆきの春の山さくら花も雲ゐの名こそふりぬれ

八十一番　春九

左勝　女房

暮春もするといふ事はしら雲のこゝの重ねの花さかりかも

右　源頼武朝臣

ねぬるよの夢かと見えて散花をいやはかなにも誘ふ春風
　白雲の九重ねの花さかり散といふことは夢になしてよ

八十二番

左勝　無品法親王

これまても心とむると散花を思ひもしらす猶やしたはん

右　源成直

一すちにたかうき名をも立しとや散ゆく花に春風そふく
　春風の科にはなさて根はや心とむなと花そおりける

八十三番

左勝　讃内侍

陰うつす池の汀の藤の花波のそこにも咲匂ふなり

右　源資氏

霞む野の日影のとけみ見すもあらすみるとしもなき春の糸ゆふ
　糸ゆふのあるかなきかもよししはし心に移る池の藤なみ

八十四番

左勝　前關白

風さそふ木末の花は跡なくて庭に又ふる春のしら雪

右　太宰帥親王

花さそふ春の嵐や吹ぬらし山のは遠く消えしら雲
　雪とたに今は残らす庭櫻消るも同し山のはの雲

八十五番

左　春宮大夫顕範

松の葉に亂れてましる藤の花若紫の色にさくなり

右勝　　關白

治れる我身世にふる思ひ出に花には風もいとはてそ見る

此比の風もいとはぬ花を見ん松には藤も色亂れけり

八十六番

左　　前大納言光有

田子の浦や汀の松に咲にけり波に色かす藤のはつ花

右勝　　權大納言實爲

しからみも花にやかゝる山吹の陰は流れぬ井手の川水

吹藤の波にうつれる陰よりもふかき色にや井手の山吹

八十七番

左　　權大納言公長

吉野川岩こす波も早き瀬にしからみかけて咲る山ふき

新葉春下　右勝　　前大僧正頼意

歸來つる八十の春も哀しれ三代のむかしの花の面影

吉の川しからみかけて花も咲三代の昔の陰やとまると

八十八番

左　　左衛門督長親

山高みかゝれる雲の消行はみつゝ我こし花やちるらん

右勝　　中納言光資

したへともとまらてかへるはるの色をうら紫に咲る藤なみ

紫の藤に心や移さましみつゝわかこし花もちりなは

八十九番

新葉春下　左　　權中納言實興

花はゝや散過にける木末にもつらきなこりの山風そふく

新葉春下　右勝　　前中納言具氏

枝よりはあたにちるとも木の下にしはしは殘れ花のしら雪

山風のつらきかたみはよしやたゝ消なて殘れ花の白雪

九十番

左勝　　藤原經高朝臣

種しあれは同し岩根の松のはに千とせをかけて咲る藤なみ

右　　春宮權大夫師兼

いはぬ色にならはてしもや山吹の下行水に蛙なくらむ

岩根にも松と藤とはおふなるにいはぬ色なる種や変らぬ

九十一番

左勝　　藤原經高朝臣

行春の同し道とはちきらねとしたふに絶ぬ身とや成南

右　　源頼武朝臣

夕日さすときはの山の岩つゝしからくれなゐの色やそふらん

春したふ心の色にくらふれはから紅も物のかすかは

九十二番

左持　　權中納言實興

山吹の花もいつまてゆく春を暮ぬといはぬ色にさくらん

右　　春宮權大夫師兼

棹姫の袖の月かけかすめたゝいくかもあらぬ春のなこりに

山吹も中々いはぬ色なれやいくかもあらぬ春と思ひて

九十三番

左勝　　左衛門督長親

行春のゆかりの色と見るはかり夏まてかゝれ池の藤なみ

右　　前中納言具氏

口なしの名におふ色も山吹のいはての里に春やさく覧

紫の藤はゆかりそ山吹のいはぬいろをは何としらまし

九十四番

左持　　　　權大納言公長
くれて行はるの名殘とあすも見ん猶さきかゝれ池の藤浪

右　　　　中納言光貴
いかにせん限ならぬ身の命にもまさりておしき春の別を
藤浪のあすをかけてもかひなきは命にかふる春の別ち

九十五番

左　　　　前大納言光有
いかにせん思ひはおしき名殘さへいくかもあらぬ春の暮かた

右持　　　　前大僧正賴意
紫の花のゆかりにあられとも松のみとりにかゝるふちなみ
紫のゆかりの春も今はなしみとりをたのめ松の藤浪

九十六番

左持　　　　春宮大夫顯統
まとろまていさおしみ見ん曉のかねきくまての春の名殘を

右　　　　權大納言實爲
限ある春こそあらめ花鳥の色音をいかて猶とゝめまし
花鳥の色音にあらぬ曉のかねには春の名殘そはしる

九十七番

左持　　　　前關白
かすか山松のみとりにかけしより北の藤浪はるそひさしき

右　　　　關白
山里の花のさかりを見る度に都の春を猶いそくかな
かすか山久しく匂へ立かへる都の春をまつの藤波

九十八番

左持　　　　辨内侍
年を經て同しおもひのかひなきはくれゆく春の別れなりけり

右　　　　太宰帥親王
今更に何かはしたふ年をへておしむかひなき春の別を
わきて又限もあらし年をへて同しおもひの春の別を

九十九番

左持　　　　無品法親王
したひこし春も今はのくれはとりあやなくきゝぬ入相の鐘

右　　　　源資氏
山吹の咲てふ井手の里人や花より後の春をしるらん
花の色も殘らぬ春の果はとりあやしとや見んゐての山吹

百番

左持　　　　女房
山吹の花さきぬれは池水のいひ出かたき色そうつろふ

右　　　　源成直
花鳥の色音もとめすゆく春のかたみに殘れ有明の月
山吹もいひいてかたき春の色を猶有明のかすむ池水

百一番　　夏一

左勝　　　　女房
新葉夏
をしなへて山も青葉に成ぬ(にけり集)なり花見し春は昨日とおもふに

右　　　　源資氏
あかさりし花のかたみと成にけり青葉の山の峯の白雲
花を見しきのふの夢の名殘たに猶なくさまぬ峯の白雲

百二番

左　　　　無品法親王
夏山のみとりにましる遲さくらまかはぬ色は時そともなし

右勝　　　　太宰帥親王
あかさりし花染衣立かへて袂にしるく夏はきにけり

折にあへはよそに見る哉遅櫻たかぬきすてし袖の名殘そ

百三番　左　　辨内侍

けふよりの習ひならすは夏衣花の袂にかへん物かは

右勝　　關白

問人もなきにや名のる時鳥朝くら山の明ほののそら

花に今はかへんとそ思ふ時鳥朝倉山の明ほのの空

百四番　左　　前關白

夏衣かへても猶そ忍はるゝきのふの花の袖のなこりは

右勝　　權中納言實爲

白妙の色を重ねて榊とる神のいかきに咲る卯の花

榊葉に咲卯の花のしら重ねきのふの袖の名殘しもなし

百五番　左　　春宮大夫顯統

玉川にさらす調布やたれとゝとかきねにさける卯の花

右勝　　前大僧正賴意

隔こし春のかたみやみよし野の高根に殘る花の白雲

時にあふ賤か垣ねはさもあらはあれ隔てし春の花に形見に

百六番　左持　　前大納言光有

老か身の空目や月の影ならんくるゝ籬にさける卯の花

右　　中納言光資

いつしかにはや立かへて蟬の羽のうすき袂に風をまつかな

卯の花の空目に月の影を見て風や身にしむ蟬のは衣

百七番　左持　　權大納言公長

うの花の咲初しより玉川のさらぬ水に波そ立そふ

右　　前中納言具氏

雪の色にまかへてや見ん卯つき垣花し匂はぬ夕へなりとも

白妙の浪と雪とを分兼てうの花垣の色やまかはん

百八番　左持　　左衛門督長親

別れこし春の契りのうす衣袖にも花の色はのこらす

右　　春宮權大夫師兼

けふやさは花色衣立かへんそをたに春のかたみとおもふに

今はよし春の契りのうす衣かたみの色もかへしてそきん

百九番　左　　權中納言實興

此くれにきなかすとても時鳥さてややむへきむら雨の空

右勝　　源賴武朝臣

村雨をなみたにかりて時鳥たか衣手のもりになくらん

むら雨の同し空にも時鳥わきて聞みし衣手のもり

百十番　左勝　　藤原經高朝臣

あやにくにつれなきよはの時鳥中々またぬ人やきくらん

右　　源成直

ほとゝきす心つくさぬ初音をやみ山の里のおもひ出にせん

時鳥またぬにたにもきくなれはみ山の里もよしや尋ねし

百十一番　　夏二

左勝　　藤原經高朝臣

新葉　むかしたれ花橘に忍へとて袖の香なからうつし植けん

右　源資氏

待になとつれなき物と思ひけん心もしらぬほとゝきすかな

うつし植し花橘の袖の香もけにまたしらぬ時鳥かな

百十二番

左持　權中納言實興

流れる世にたつ民やうきふしもしらぬ竹田のさなへとる覽

右　源成直

ふりすさふしはしを雨の晴まにてさ月の月は見るよはもなし

五月雨の月まち出る晴間かな竹田の早苗よるはとらしを

百十三番

左持　左衛門督長親

聞しまゝ夢かとそおもふ時鳥つれなき頃の心ならひに

右　源頼武朝臣

苔の浦の篠すもそこと見えわかてかたを波たつさみたれの頃

時鳥聞つる夢やかたをなみ芦邊のよるの五月雨の頃

百十四番

左持　權大納言公長

まち侘ぬうき身からにや時鳥同しはつねもつれなかるらん

右　春宮權大夫師兼

村雨の雲まの月に待しゝきすたのめすとても猶やまたまし

杜鵑おなし初音そ待わふる雲まの月の空はかはれと

百十五番

左勝　前大納言光有

さのみなとつれなかるらん時鳥忍ひはつへき初音ならぬに

右　前中納言具氏

都にはいまた木末の郭公はや山人や初音きくらん

心ある人にそ忍ふ時鳥よし山かつよきかけきくとも

百十六番

左勝　春宮大夫顯統

杜鵑はつねや神に手向山ぬさも取あへぬほとに鳴なり

右　中納言光資

いかはかりうき時なれやほとゝきす山より里に出て鳴らん

里に出る聲をは神もたとるらしぬさと手向の山時鳥

百十七番

左持　前關白

むかし又誰かをしへし郭公まつにつれなきならひ有とは

右　前大僧正頼意

幾度か老のね覺にまちかねし我にかたらへ山ほとゝきす

昔よりつれなかりしも時鳥おなしならひの老のねさめか

百十八番

左　辨内侍

待わふる山ほとゝきす心あらはねぬよかさなる宿を問なん

新葉夏　右勝　權大納言實爲

終によも忍は果しほとゝきす心つくさて初音きかせよ

ねぬ夜のみ重ねはつらし時鳥心つくさぬ初音きかはや

百十九番

左勝　無品法親王

山深き住居にかへてほとゝきすことしはまたぬ初音をそきく

右　關白

村雨の露吹おとす夕風に涼しく匂ふ軒のたちはな

むらさめの夕風よりも時鳥またぬはつねに猶増りけり

百二十番

左持　　女房
あま雲のよそにふりなて時鳥我ある山のかひになく覽
右　　太宰帥親王
待わひてねなまし物を時鳥明る雲間に聲きこゆなり
柴の戸の明る雲間の時鳥我ある山のかひに鳴なり
百廿一番　夏三
左勝　　女房
立田川わたらぬ水も濁けり三室の山のさみたれのころ
右　　關白
さみたれに峯の眞柚雲とちて衣もほさす天のかく山
五月雨はいつれも雲の中なれや三室の高ね天のかく山
百廿二番
左　　無品法親王
夢にたに晴るとは見すけふ幾日雲にくもそふ五月雨の空
右勝　　權大納言實篤
かりてほす玉もゝ波に朽やせんとしまか磯の五月雨の頃
五月雨の雲にくもそふ頃なれや磯の玉もゝ朽まさるらん
百廿三番
左勝　　讚內侍
世渡るもくるしきわさの大井河鵜舟のかゝりうきしつみつゝ
右　　前大僧正顯意
有明の月かけなから松の戸になれもつれなき時鳥かな
夕やみの頃と契りてあり明の月はう舟のかゝり火のかけ
百廿四番
左　　前關白
ほとゝきす心つくさてきく度そ住うき山のかひもしらるゝ
右勝　　中納言光資
山かけはいとゝ晴行空も見すなつみの川のさみたれの頃
ほとゝきす待聞頃やなつみ川山かけまさる五月雨の空
百廿五番
左勝　　春宮大夫顯統
日をふれは水かさそまさる河內女の手にまく糸の五月雨の頃
右　　前中納言具氏
きのふといひけふとくらして徒にはれぬ雲間のさみたれの頃
日をへつゝ手にまく糸の心ひけは空も隙なき正月雨の頃
百廿六番
左勝　　前大納言光有
咲にけり花橘もこゝのへの右のつかさの袖匂ふまて
右　　春宮權大夫俑兼
心なき人きけとてやほとゝきす岩木の山に音をは鳴らん
橘の右のつかさの花の香を左の袖にふかくとめつゝ
百廿七番
左勝　　權大納言公長
さらてたにかはく間もなき海士人の袖や朽なん五月雨の頃
右　　源頼武朝臣
かけしあれは猶數そふる池水のそこらに見えてとふ螢かな
飛螢そこらに燃るかひもなしあまの袖たにほさぬ五月雨
百廿八番
左持　　左衛門督長親
みよし野の山ほとゝきす今しはやみやこに出る聲きこゆ也
右　　源成直
植をきし人はむかしのふる里に袖の香殘る軒のたちはな

みよし野の山時鳥出る也世にたち花の花のしるへに

百廿九番

左持　権中納言實興

行水の微ならさりし谷川の岩に波こすさみたれのころ

右　源資氏

我も今はつねときくを時鳥鳴ていくかの夕くれのそら

ゆく水のなを徽しらぬはつ音哉なきて幾日そ山時鳥

百三十番

左持　藤原經高朝臣

たゝあふけ山かみねにもりかねて待出ぬ月の有明の空

右　太宰帥親王

たち花の花と共にやなりぬらんむかしを忍ふ袖の上露

橘の花より上に見ゆるかなは山をいつる月の有明

百三十一番　皇四

左勝　藤原經高朝臣

淺き瀬にせかれし波は岩こえて川音絶るさみたれの頃

右　關白

難波江やくるかたの汐風にふし葉亂れとふ螢かな

芦の葉も下に成つゝ淺きせの岩こす波の増る五月雨

百三十二番

左　権中納言實興

くれてゆく野への螢は旅人のホノマ、玉かと見えまかひつゝ

右勝　太宰帥親王

高ねには夕立すらしよし野川瀧津岩波音まさるなり

よし野川行野へまてもらぬ夕立を峯よりおろす瀧津せの音

百三十三番

左勝　左衛門督長親

ゆふ立のなこりの露の玉さゝに宿かる月の影のすゝしさ

右　源資氏

きのふけふみかさまさりてあすか川淵瀬もわかぬ五月雨の頃

昨日けふふりし雨ともしられぬは名残の露の玉さゝの月

百三十四番

左　権大納言公長

日にみかく光りも清しゆふ立の過ぬる跡の軒のたま水

右勝　源成直

なつみ河う舟の篝数そひて山かけのほる夕やみのそら

夕立の今はなこりもなつみ川山かけのほるうかひ舟かな

百三十五番

左　前大納言光有

よし野河みかさまさりてわたる瀬も淵と成ゆくさみたれの頃

右持　源頼武朝臣

吉野河岩波はやく涼しさは日數をこえて秋やたつらん

よしの川岡しはやせの岩波も秋こす瀬より風そ涼しき

百三十六番

左勝　春宮大夫顯統

心ありてするわさならし夕かほの花もてふける賤かかり庵

右　春宮権大夫師兼

いとゝ又岩波高し落瀧つよし野の川のさみたれの頃

落瀧津波の花さへ色見えて夕かほしろきみよしのの里

百三十七番

左勝　前關白

ふるほとは結ひもあへす夕立のあとの草はにしけき露哉

右　　前中納言具氏

打なひき草のしけみをふく風に露もたまらぬ夕立の空

いつれとも分そ兼つる野へはみな同し草はの夕立の露

百三十八番

左　　辨内侍

音に立ぬ夜はの螢の誰ゆへに身をこかすまて物おもふらん

右勝　　中納言光資

ともしするは山か峯に入鹿は音にこそたてねみをやおしまぬ

ともしするは山か峯の火の影にのへの螢よ如何をよはん

百三十九番

左勝　　無品法親王

誰袖のなこりもしらぬ橘のなとなつかしき香に匂ふらん

右　　前大僧正頼意

をく露の玉江のあしのよることにほす隙そなき五月雨の頃

誰袖とよそふるからに橘のみとゝふりぬるさみたれの頃

百四十番

續古　左勝　　女房

あつめては國の光と成やせん我窓てらすよはのほたるを　作者

右　　權大納言實為

水の面にもゆる澤邊の螢は何にけつへき思ひなるらん

かすかなる澤の螢もあつむれは國のひかりと成ける物を

百四十一番

左勝　　見左　　女房

住吉の松に涼しくひゝきて夕立すくる　むこの山かせ

右　　前大僧正頼意

軒近き花たち花の露なからわか袖かけて　にほふ夕かせ

いかにかは袖の夕風及ふへき高き楠の梢のひゝきに

百四十二番

左勝　　無品法親王

ゆく年の半はこえてみそき川早瀬の浪の立もかへらす

右　　中納言光資

立よれは袖そ涼しき秋ちかくなるおの浦の松の下かけ

秋ちかくなるおの浦の松よりは半こす浪立かへれかし

百四十三番

左持　　辨内侍

わすれては秋かとそおもふ山陰の岩井の清水松風の聲

右　　前中納言具氏

なにはかたあまのたく火の影なれや浪間にもゆる夜半の螢は

螢とふなにはの水も山かけの岩井も秋をまつの下風

百四十四番

左勝　　前關白

みそき川五串の四手の打なひきふくる波間にかよふ秋風

右　　春宮權大夫師兼

いひしらぬおもひにもえて日なしの名におふ里にとふ螢かな

百四十五番

[illegible]　左持　　春宮大夫顯統

くれぬるか鳴音もよはる蟬のはのうすき衣に風そ涼しき

右　　源頼式朝臣

行末も終によるせやありす河みそきになかす浪の白ゆふ

身にならす空蟬のはの薄衣よるそ涼しき河風そふく

百四十六番

七夕のたま／＼むすふ夜はの夢涼しき風やおとろかす覧
百五十五番
左持　春宮大夫實統
いつはとはわかぬ常盤の松風もをとこそかはれ秋やきぬ覧
右　前大僧正頼意
秋のくる方こそ雲にしられけれけふめつらしき三日月の影
常盤なる松にかはる夕風に山のはしろき秋の三日月
百五十六番
左　前大納言光有
けさよりは身にしむはかり吹かへていはぬにしるき秋の初風
右勝　中納言光實
秋といへはまたきほふれ行心かな草葉の露も袖の涙も
草の露袖の涙の秋をしれ風はさやかに見えはこそあらめ
百五十七番
左勝　權大納言公長
七夕の天の川せの岩まくらかはすこよひも袖やぬる覧
右　前中納言具氏
あけは又天の河原の岩枕かたしく袖やかたみならまし
いかにねてかはす河瀬の岩枕左の袖やぬれ増るらん
百五十八番
左持　左衞門督長親
七夕の妻むかへ舟こきよせはあまの河風夜は更ぬらん
右　春宮權大夫師兼
とよひこそ五百機をれる七夕のみけしのころも裁重ぬらん
今夜とてさそ急くらん七夕の五百重衣つまむかへ舟
百五十九番
左持　權中納言實興
いとふへき袖の露かは秋来ぬとおもふ心にむすひそめつゝ
右　源頼武朝臣
夢たにもさたかに見えす秋きぬとおとろかしにし荻の上風
風かよふ荻のは近き夜床ねは夢にやかへて露結ふ覧
百六十番
左　藤原經高朝臣
秋やくる物おもふみのならはしに猶過てをく袖の上露
右勝　源成直
時しあれはけふかけそめつ神まつる秋は立田の森のしめなは
秋の立身の習はしはなかりけりゆふかけ初る森のしめ縄
百六十一番　秋二
左持　藤原經高朝臣
誰をかは見はてぬ夢にかこたまし我うへてきく荻の上風
右　源貞氏
しはしたに舟手急くな七夕のかへるあしたの天の河長
七夕の見はてぬ夢をかこつ哉舟出を急く天の河長
百六十二番
左持　權中納言實興
間遠なる契りなからも秋をへてぬる夜数そふ星合の空
右　源成直
夕くれは風のやとりとなりはてゝ露こそなけれ庭の荻原
ほし合の契りの数にむすひをけは露もまれなる庭の荻原
百六十三番
左勝　左衞門督長親
風の音は軒端の荻を過ぬなり袖に涙の露をのこして

右　　源顯氏朝臣

秋萩の花の錦のぬきをうすみ風も立あへす露そこほるゝ

散亂す萩のは風にちる萩や緯ぬきよはき錦なるらん

百六十四番

左勝　　權大納言公長

をく露も色こそかはれ明な〳〵花の數そふ庭の秋萩

右　　春宮權大夫師兼

したにのみかよひ馴こし秋風もはやほに出る庭の萩はら

萩の上の露は數そふ明な〳〵下葉にかよふ風そ色なき

百六十五番

左勝　　前大納言光有

月日のみよそに過して七夕の一夜はかりをなとちきりけん

右　　前中納言具氏

風ふけは野への白露玉ちりてむすひもあへぬ秋の夕暮

七夕の一よはかりのうき契りむすひもあへぬ袖のしら露

百六十六番

左勝　　春宮大夫顯綱

萩のはにふけはや秋は物うきと風より外の夕くれもかな

右　　中納言光賢

としにありて一よを何か契らましむ七夕つめの我身なりせは

七夕の契りしよりやたか秋のゆふへの風も物うかるらん

百六十七番

左　　前關白

秋風の身にしむくれの哀さは萩の葉よりや間ならひけん

右勝　　前大僧正顯意

いつしかにうきは夕へと間からになみたをさそふ萩の上かせ

身にしむと思ひしまてはいかゝせん淚をさそふ秋の初風

百六十八番

左　　辨內侍

七夕のあまのは衣かさねつゝ袖のひるまやことひなるらん

右勝　　權大納言實爲

しら玉といかゝいはれの野へにさく小萩か露は紫にして

七夕の袖のひるまはいさしらす露そ色こき萩のむらさき

百六十九番

左持　　無品法親王

たなはたのいかに定めて一年にひとよをかきる契りなるらん

右　　關白

ぬるとてもいかゝ拂はん袖の露分るすその萩か花すり

ぬるとても一よはかりは七夕にかさはや袖の萩か花すり

百七十番

左　　女房

淺から ぬ契りもしるし天の川はしは紅葉の枝をかはして

右勝　　太宰帥親王

僞もあらしとおもふたのみにやたへてまちけんほし合の空

僞もあらしとおもふ契りには紅葉の色も猶淺きかな

百七十一番　　秋三

左勝　　女房

萩の戶の花もや忍ふ置露のことしけかりし秋の昔を

右　　關白

松むしの鳴音もよはの初霜に色こそかはれ野への淺ちふ

虫の音も忍ふ計そ萩の戶のことしけかりし露の昔を

百七十二番

左勝　無品法親王

吹しほる野分の風はよはれとも露に又ふす庭の萩原

右　權大納言實爲

旅人の分て入野の初尾花まねく袖にも露そこほるゝ

露にふす萩の契りも結ふらん尾花はまねく人はとまらす

百七十三番

左　辨内侍

あたに吹風になひくな女郎花露よむすはん露の契そ

右勝　前大僧正賴意

宮城のの木の下露に色添て分ゆく袖は萩か花すり

萩か上に落て染ける宮城野の木の下露の色そ增れる

百七十四番

左持　前關白

秋もはやよさむになれは虫の音もかことはかりの庭の蓬生

右　中納言光資

ふく風の先音つるゝ萩のはや秋をしらするつまとなるらん

虫の音もかことはかりの蓬生に風やうらみのつまと成覽

百七十五番

左　春宮大夫顯統

かり衣袖そうつろふ露分て入野のま萩花やちるらん

右勝　前中納言具氏

風わたる野ちの玉川色みえて波間をくゝる秋萩の花

衣手にうつろふよりは秋萩の波間をくゝる野ちの玉川

百七十六番

左　前大納言光有

さらてたになみたはもろき夕くれの袖より外の荻の上風

右勝　春宮權大夫師兼

咲匂ふ花も時ある萩の戸のむかしにかへる朝まつりこと

萩の戸の昔にかへる秋をえてもろきは老の袖の白露

百七十七番

左持　權大納言公長

淺ちふの露のやとりのいかなれは秋にはあへす虫のなくらん

右　源賴武朝臣

なにと（たゝイ）なくゆふへを露にかこつ覽身はならはしの秋の袂を

秋にあへぬ淺茅か虫もことはりよ身も習はしの露の夕暮

百七十八番

左持　左衛門督長親

さひしさを秋の習ひとかこちても唯宿からの夕くれの空

右　源成直

暮行はくさむらことに鳴むしのおもひも同し心なるらん

侘ぬれは床は草はの虫の音を宿からとたにきかて寒けき

百七十九番

左勝　權中納言實興

うしとき〻哀といひて此秋も又なれそめつ荻の上かせ

右　源資氏

吹過てわれをはまねく袖もなし風や薄の心なるらん

軒の荻の上はも共になひけともお花によける風の音哉

百八十番

左勝　藤原經高朝臣

何ゆへと我身にしらぬ涙さへ袖にこほるゝ秋のゆふくれ

右　太宰帥親王

行過る人はとまるを花すゝき又たれありと猶まねく覽

人招く草葉は何か花すゝきなみたこほるゝ袖にくらへよ

百八十一番　持

左勝　藤原經高朝臣

ねにたてぬ思ひをよそにしらねはやをのれはかりと虫の鳴覧

右　關白

鹿の音をきゝそめて[illegible]秋風の夕たか袖に涙そふらん
あちきなく鹿の音虫の鳴度に袖はひとつや涙わけつる

百八十二番

左勝　權中納言資興

玉章のありやなしやも白雲に翅をかはす雁の一つら

右　太宰帥親王

秋のよの[illegible]行まゝに霜[illegible]なく鳴音もかるゝ野への松虫
鳴雁の露の玉章かき絶て霜のみかゝる松虫の聲

百八十三番

左勝　左衛門督長親

曉けは聞りもつらし山鳥の尾上の鹿の妻戀のこゑ

右　源資氏

秋よたゝかゝれとてこそうかるらめ夕へは袖の露もいとはし
袖の露もよその哀に置そふは我にや鹿の鳴増るらん

百八十四番

左勝　權大納言公大

きゝわひぬ秋のね覺も深きよの哀をそふる棹鹿の聲

右　源成直

いつくとも聞そ定めぬ吹風のたよりに通るさほ鹿の聲
お驚と二聲はかりと聞つるに又秋風のたくふ鹿の音

百八十五番

左勝　前大納言光首

まねきわひたかつらさとて秋の野のお花の袖の露けかるらん

右　源頼武朝臣

小男鹿のかけたる萩のしからみを尾花波こす野への秋風
棹鹿の涙の色はもらさしなお花か袖の萩のしからみ

百八十六番

左勝　春宮大夫顯繼

妻かくす恨をたれにかこつらん矢野の神山鹿そ鳴なる

右　春宮權大夫師兼

さひしさもゆふへにかきる秋そとはたかならはしそ袖の白露
妻かくす恨や鹿はまさるらんゆふへをかこつ秋霧の空

百八十七番

[續古今秋上] 左勝　前關白

おく山の松ふく風にたくひ來て軒はに近きさをしかの聲

右　前中納言具氏

秋さむくなりゆく風の夕くれやむしもうらみの音をは鳴らん
鹿の音をたくへてきつる松風に淺茅か虫のなと弱るらん

百八十八番

左　辨内侍

秋ふかき枕の下のきり〳〵すをのか夜さむの露に鳴らん

右勝　中納言光資

秋のよは更行まゝにさほしかの聲すみのほる遠山のかせ
夜やさむき枕の下の蛬鹿のなく音はすみのほるなり

百八十九番

左勝　無品法親王

山陰の秋にはたへぬさをしかやねにあらはれて妻や戀らん

右　前大僧正頼意

秋もはやよさむの風の吹たちて衣かりかね雲になくなり

らはの空によさむとひくる雁よりも哀は鹿の妻戀の聲

百九十番

左持　女房

かすか山禰野の露のたえまよりおのえにたかき棹鹿の聲

右　權大納言實爲

つれもなき松をしらてやよもすから我妻のみと鹿の鳴らん

かすか山松もつれなし鹿の音のおのへに高き秋霧の空

百九十一番　秋五

左勝　女房

尾はさみしくるゝ雲も絶々にみたれてわたる雁の一つら

右　前大僧正頼意

くもりなききみよのしるしに今も引むかしなからの望月の駒

峯こゆる雁かねわたる嶺に引をくれたるもち月の駒

百九十二番

左　無品法親王

和かの浦の波にひかるゝもくつ迄もらさぬ月の影やみかゝん

右勝　中納言光資

なれまても哀は秋のね覺とやかたふく月に鷄なくらん

わきて猶哀もらさぬ月影も鷄の屋に澄まさりけり

百九十三番

左　辨內侍

更ゆけは枕に近くかよひきてねさめもよほすさを鹿の聲

右　前中納言具氏

たつた山おろす嵐にさそはれて旅にちかきさをしかの聲

よはに聞是や吉田の鹿の聲ふもとにちかき旅衣かな

百九十四番

左持　前關白

これまても晴ぬおもひの數なれや月待山の峯の秋霧

右　春宮權大夫師兼

月にこそ秋の心をなくさむをなと夜と共にむしは鳴らん

月に鳴むしの恨や秋霧のはれの思ひのかきり成らん

百九十五番

左勝　春宮大夫顯統

夕されはいつくはあれときり〳〵す蓬か袖に鳴音かなしも

右　源頼武朝臣

月影はよるとも見えすみよし野のたのむの鴈は何となくらん

月影のよるとも見えぬ蓬生に猶鳴まさるきり〳〵す哉

百九十六番

左　前大納言光有

をくら山月はまたしき夕くれに先出てなく棹鹿の聲

右勝　源成直

吹しほる松の木のまの秋風に心つくさぬ月を見るかな

月たにも木のまくもらぬ松風に心つくさぬ鹿の音そうき

百九十七番

左　權大納言公長

いかにせんゆふへは秋のならひとて物おもはてもぬるゝ袂を

右勝　源貴氏

から衣日も夕くれを待えてもこぬ妻戀に鹿やなくらん

物思はぬ人たに袖のぬるなるにことわりなれや鹿の妻戀

百九十八番

左　　左衛門督長親
影やとす露も涙にまかひけり野へのお花の袖の上の月
右　持　　太宰帥親王
いとひつるゆふへの雲や晴ぬらんくまなき月に秋風そふく
　袖せはみ蕙か末の露よりもくまなき月を空にやとさん
百九十九番
左　勝　　權中納言實興
時しらてあれなとおもふみ山への奥にまつ聞さをしかの聲
右　　闕　白
くもはるゝ山は三笠の秋の月誰もろこしの空に見るらん
　もろこしの月は遙けしつらくともみ山の奥の鹿を聞てん
二百番
左　勝　　藤原經高朝臣
あはにこし涙や露と結ふらん妻とふ鹿の道の篠原
右　　權大納言實僞
秋風に鶉の床やあれぬらんゆふへは露も深草のさと
　露しけき鶉の床の秋よりも篠分る色にふかき鹿のね
二百一番　　秋六
左　勝　　藤原經高朝臣
みよし野のすゝ吹風の音絶てきさの小川にすめる月影
右　　前大僧正頼意
小山田の庵もる月に聞わひぬね覺よふかきさをしかの聲
　さほ鹿の夜深き聲も及はぬはすゝ吹風にみよし野の月
二百二番
左　持　　權中納言實興
末とをき田つらの庵をめにかけていそけははるゝ秋の村雨
右　　權大納言實僞
くもりなき我君か代は久方の空にもしるくすめる月影
　民のすむ田つらも晴るゝ村雨にくもらぬ月と君あふく也
二百三番
左　　左衛門督長親
いたつらに見る人そなきあすか風ふくる川瀬の秋のよの月
右　勝　　闕　白
かた敷の袖の初霜打はらひ月や見るらん宇治の橋姫
　徒らに更らぬ月をみんよりはまつを習ひの宇治の橋姫
二百四番
左　持　　權大納言公長
雲はらふ比良の山風さよ更て月のくまなる辛崎の松
右　　太宰帥親王
秋のよはもしほもやかてあま人のけふりいとはす月や見る覧
　鹽やかぬ浦はの月はくまなきに煙とみゆるから崎の松
二百五番
[illegible]上　左　持　　前大納言光有
秋風に雲ものこらぬ山のはの梢をわけていつる月影
右　　源　資氏
すみのほる光りもしるし名におふとよひそ秋の中空の月
　山のはの梢を高み分出て月もなかはの空の秋風
二百六番
左　　春宮大夫顯統
袖にこそしはしやとらめ村雨の雲よりうへの月はくもらし
右　勝　　源　成直
清見かた月みよとてやとゝむらん心ありけるなみの關もり

村雨はよそに過れと行月の清見か關に影とゝむなり

二百七番

左　前關白

有ふとも身をは歎かし秋のよの月見るほとの心なりせは

右持　源頼武朝臣

秋をへて篝火の野もりをみつから契るとなしに月やみるらん

秋をたゝ契るとなしに契る哉月見るほとの人の心は

二百八番

左　辨内侍

つく／＼と更行よはの空見れは月もこゝろもすみ増りつゝ

右持　春宮權大夫師繼

つかへとてなれぬる秋もあまたへぬ友とはみすや雲の上の月

秋をへてなれぬる雲のうへ人や月に心のすみ増るらん

二百九番

左持　無品法親王

かそふれは秋の日數も中空にすむ月かけのおしきよはかな

右　前中納言具氏

出てはや月も高ねの雲はれて空にふけゆく秋風の聲

たくひなき月はこよひの半天にうたてふけゆく秋風の聲

二百十番

左持　女房

かつらきや高まのあらしさよ更て雲なき峯に月そいさよふ

右　中納言光資

片敷の袖に氷やむすふらん月すみわたる宇治の橋姫

かた敷の袖に氷やしもとはふかつらき山の峯の月影

二百十一番　秋七

左勝　女房

いつもすむ月を見るにそよしの山我身の秋をしはしわするゝ

右　前中納言具氏

名にしおふ春こそあらめうき身には秋さへ月のなと霞むらん

照しそふ月の光りをみよし野にしはしは曇る影は眺めし

二百十二番

左持　無品法親王

いくめくり同し空ゆく月影にかはるうき身の秋をしるらん

右　春宮權大夫師繼

難波江やあまの小舟は分過て芦間の浪に月やとりすむ

月かけにかはるうきみを尋ぬれは蜑の小舟そ同し秋なり

二百十三番

左持　辨内侍

身にはまたしらぬ昔の秋までも月に何とてこなしかるらん

右　源頼武朝臣

あれぬれは守人もなし不破の關軒の板まの月にまかせて

あれてみる不破の關屋の秋よりもしらぬ昔や月に戀しき

二百十四番

新葉雜上　左持　前關白

宿るとて月はしるらん我袖にむかしを忍ふなみたありとは

右　源成直

難波江や芦の下おれしけゝれと宿れる月の影はさはらす

いつくにも月はやとれと袖の上の涙をわきて宿とや見る

二百十五番

左　春宮大夫顯親

この頃はなたの鹽やきいとまあれや煙も絶てすめる月影

右勝　源具氏

長月の今夜の月は敷嶋のやまと嶋ねや分てすむらん

月淸みやまと嶋ねを見渡せは灘の鹽ちも物の數かは

二百十六番

左　前大納言光有

ふけぬるか閨の秋風さむしろにもりくる月の影そかたふく

右勝　太宰帥親王

夜もすから吹つる風やたゆむらん村雲かゝる有明の月

山のはにかたふくはらし村雲にまた有明の月としらすや

二百十七番

左　權大納言公長

見るまゝにあくかれはつる心かな月やいつくにさそひ行らん

右勝　關白

浮の空も雲ゐの月にいとふかな衞士のたく火のよはの煙を

あくかるゝ心はなくて御垣守雲井にたかき月になるらん

二百十八番

左　左衞門督長親

雲霧もいかゝおほはんすむ月の秋津しまねの同しひかりは

右持　權大納言實篤

なれもよこ秋こそあらめ住よしの松の木のまの月はかはらし

大方にあまねきかけは秋津しま月は木の間に住よしの松

二百十九番

左　權中納言實興

見るからにうき身の秋のわすられて我心よりすめる月かな

右勝　前大僧正賴意

立かへり夜居につかふる袖までもらさてやとれ雲の上の月

さもこそは憂身忘れて詠むらめ仕ふる夜居の雲の上の月

二百二十番

左勝　藤原經高朝臣

影やとすあらいそ波のよるよるは月も岩こす秋のうら風

右　中納言光資

ことゝひし人は軒はの月影をくるゝ夜ことの友と見るかな

あら磯の月かけなからこす波に笘屋の軒も下にこそなれ

二百廿一番　秋八

左持　藤原經高朝臣

風わたる外山の松はあらはれてふもとにくたる秋のゆふ霧

右　前中納言具氏

秋風のふけゆくまゝにから衣きぬたの音やよさむなるらん

風わたる外山の里やさむからし松の木のまに衣うつ聲

二百廿二番

左持　權中納言實興

露は猶やとりもはてぬ秋風にたへて淺茅の月そ殘れる

右　中納言光資

里人のよさむかはらぬしるしとや同しね覺に衣うつらむ

風さむき淺茅か月の殘るよにおなしね覺と衣うつなり

二百廿三番

左持　左衞門督長親

さゝ竹のみ山のさとの秋風にねぬよかさねてうつ衣かな

右　前大僧正賴意

柴の戶やかりにも人は問もこて友とみ山の秋の夜の月

月をのみ友とみ山の篠の庵ねぬよしらせてうつ衣哉

二百廿四番

左　　　　　　　　　　　　　権大納言公長

秋霧にそことも見えす大井川山はあらしの音はかりして

右　　　　　　　　　　　　　権大納言實為

をのつから月見ぬよはも遠近の砧の音にいこそねられね

遠近の山もへたつる秋霧に砧はかりそそことしらるゝ

二百廿五番

左　　　　　　　　　　　　　前大納言光有

秋風のよさむしられてから衣打もたゆまぬ音そきこゆる

右　　　　　　　　　　　　　関　白

さゝ竹の大宮人にあふ坂の關路にいそく望月の駒

秋風のよ寒しらるゝあふ坂の關路をいつる望月の駒

二百廿六番

左　　　　　　　　　　　　　春宮大夫顯統

秋はたゝ朧の清水名のみしてうつれる月の影もくまなし

右　　　　　　　　　　　　　太宰帥親王

立こむるひらの高ねの夕霧に浪さへむせふしかの辛崎

立こむる霧にや月のくもる覧秋も朧の清水成けり

二百廿七番

左　　　　　　　　　　　　　前関白

曉のしきの羽かきそれよりも我ね覺こそ數つもりぬれ

右　　　　　　　　　　　　　源　賁　氏

心あてにそれかとはかりほの見えて山のは遠き秋の夕霧

霧ふかきね覺の空の心あてにそれかとそ聞鴫の羽かき

二百廿八番

左　　　　　　　　　　　　　内　侍

ふもとをは猶立こめて吹風のあとよりはるゝ峯の秋霧

右　　　　　　　　　　　　　源　成　直

をしなへて同しよ寒の秋風を此里のみとうつ衣かな

（判歌欠）

二百廿九番

左　　　　　　　　　　　　　無品法親王

遠近の砧の音の身にしむやよさむの風のたより成らん

右　　　　　　　　　　　　　源頼武朝臣

難波かたあまの燒藻の我からや立るけふりを空に根みん

なには潟月に根の色よりもよ寒をそふる風の音かな

二百三十番

左　　　　　　　　　　　　　女　房

秋をへて月やとれとや雲の上に露の臺の名を殘しけん

右　　　　　　　　　　　　　春宮權大夫師兼

里人の砧の音もたゆむよに又打そふるころもかりかね

月やとる露の臺の雲の上にいかゝ聞らん衣うつ聲

二百三十一番　　　〔秋九〕

左持　　　　　　　　　　　　女　房

夜寒なる月の桂の里人やねられぬまゝの衣うつ覧

右　　　　　　　　　　　　　源頼武朝臣

みよし野のすゝ吹風はよ寒にてふもとの里に衣うつなり

なへて吹秋風なれは衣うつさとはいつくも夜寒成らん

二百三十二番

左　　　　　　　　　　　　　無品法親王

けさまてもしくるゝ雲の立田山よはにもみちの色や添けん

右　　　　　　　　　　　　　源　成　直

消は又うつろふ色やあらはれんまかきの菊にむすふ朝霜

立田山よけに時雨し紅葉よりうつろひまさる霜のやへ菊

二百三十三番

左

山姫はたか爲とてか秋をへてもみちのにしきをりつくすらん　辨内侍

右勝

くれ竹のふしみの里のよもすから夢もゆるさすうつ衣哉　源貞氏

紅葉はゝ錦もしはしくれ竹のふしみにうつは麻のさ衣

二百三十四番

左持

葉つくす紅葉をぬさと手向山秋にや神も心ひくらん　前關白

右

橋姫の袖の秋風更るよにころもうつなり宇治の里人　太宰帥親王

橋姫のかた敷袖による波のぬさと手向てうつ衣哉

二百三十五番

左勝

夜を重ねねぬも我身のから衣打たゆみてや夢もみるへき　春宮大夫顯統

右

月のこる遠山鳥のしたり尾のなかき夜すからうつ衣哉　關白

衣うつわさは苦しき長きよにしはしもたゆむ方は增れり

二百三十六番

左持

たつた山松より外の紅葉はをいかに時雨のわきて染けん　前大納言光有

右

定めなき時雨や染るうすくこく色こそかはれ木々の紅葉は　權中納言實爲

うすくこき色こそあらぬ立田山松に紅葉をいかゝ時雨し

二百三十七番

左

秋ふけて夜寒しらるゝ月影にいく里人のころもうつ覽　權大納言公長

右勝

千々の秋を契りをくらし九重の玉しく庭の菊の下露　前大僧正賴意

ちゝの秋を幾里人も契るらん惠あまねき菊の九重

二百三十八番

左持

諸人のいたゝくほしにまかふらし天津雲ゐの庭の白菊　左衞門督長親

右

時雨するしつはた山の山姫は今や紅葉の錦をるらん　中納言光資

九重にもみちの錦重ねきてほしをいたゝく雲の上人

二百三十九番

左勝

をのつから砧の音のたゆむ間はあれとも夢をみるよはそなき　權中納言實興

右

夕日影うつろふ山の紅葉はや時雨ならても色はそふらん　前中納言具氏

時雨より猶秋ふかくきこゆるは山風さむく衣うつこゑ

二百四十番

左

衣うつ音にもしるしあすか風いたつらにねぬ秋のさと人　藤原經高朝臣

右勝

から錦秋の紅葉の手向山ちるこそ神のかへす成けれ　春宮權大夫師兼

秋の色や只いたつらのあすか風紅葉に優る色しなければ

二百四十一番　秋十

左勝

泊瀬女か袖の時雨の下紅葉手染のかたや猶まさるらん　藤原經高朝臣

左　女房

春すきて時こそありけれ吉野山さくらの梢色かはる頃

右　源成直

霜露をたてぬきにして錦をるしつはた山の秋の紅葉は

　折にあへは花よりも色そ増る霜露の枝の秋のくれなゐ

二百五十一番　冬一

左　女房

冬くさの園のやかたも打時雨朝けの空に冬は来にけり

右　中納言光資

一村の雲吹はらふ木からしに時雨もつるゝ冬の山もと

　木曽の間の時雨をはしめにて四方の山里かきくもりつゝ

二百五十二番

左　無品法親王

くもるとも照ともいはんかたそなき日影なからに打時雨つゝ

右　前中納言具氏

露結ふ秋は昨日とおもひしにいつより袖に霜のをく覧

　露むすふ秋はきのふの袖の霜とけて朝日に又時雨つゝ

二百五十三番

左　[illegible]内侍

村雲にもるゝ日影はさしなから同し空にもふる時雨かな

右　春宮権大夫師範

つくはねは嵐吹らしみなの川なかれてくたる瀬々のもみちは

　時雨かと聞迄もなしみなの川おちて流るゝせゝの紅葉は

二百五十四番

左　前関白

かき曇り時雨るゝことの隙なきは雲のよそより冬やきぬらん

右　源頼武朝臣

木の葉ちる頃とはしるし日に添て聲もすくなき山下風のかせ

　わく方もなくて時雨を聞つるは雲のよそより山嵐のかせ

二百五十五番

左　春宮大夫顯綖

木の葉ちる峯のあらしの吹音や空にしられぬ時雨なるらん

右　源成直

眞木の屋に音さへ今朝はかはれるや木の葉にましる時雨成覧

　雲の外嵐もくたる山下は雨も木の葉もさそ時雨らん

二百五十六番

左　前大納言光有

晴くもる空にうつろふ冬の日の影さたまらすふる時雨かな

右勝　源貴氏

袖の上や空をもまたて時雨らんきのふの秋の露の名殘に

　晴曇る空より袖のしくるゝはきのふの露の名殘成けり

二百五十七番

左　権大納言公長

聞からにもらてもぬるゝ袂かな木の葉しくるゝ冬の山さと

右勝　太宰帥親王

散はてゝ殘る紅葉もなきものを何を染へき時雨なるらん

　木葉ちる跡の時雨は涙そふ袂の色を染るなりけり

二百五十八番

左　左衛門督長親

一村の雲のたよりの夕時雨はるゝ跡より月そほのめく

右　関白

風にゆく雲のとたえやをのつからしはし時雨ぬ山路なるらん

一村の雲の跡より月出てしはしと絶る夕時雨かな

二百五十九番

左勝　　　　權中納言實興

時雨行あらしにたくふもみち葉はちるまても猶色やそふらん

右　　　　權大納言實爲

雲はまた時雨もあへぬ神無月手向るぬさとちる木の葉かな

神無月雲に時雨やたむくらんちりて色そふ峯のもみちは

二百六十番

左持　　　　藤原經高朝臣

ね覺までしつか篠屋の村時雨もらぬ夜半さへぬるゝ袖かな

右　　　　前大僧正頼意

徒栄し名残をみせて神無月時雨とともにふる木の葉哉

徒栄し木葉より猶色そこき賤か篠屋の袖の時雨は

二百六十一番　　冬二

左持　　　　藤原經高朝臣

ふきまよふ四方の木葉や色々にあらしを染る時雨なるらん

右　　　　中納言光資

和歌のうらやみちくる潮のあら磯に跡付かねて鳴千鳥かな

磯山の積る木の葉の跡みれはみちくる汐に千鳥鳴也

二百六十二番

左　　　　權中納言實興

水上の瀧津岩波氷るらんせかてもほそき山川のすゑ

右　　　　前大僧正頼意

曉の夢をはてそふあらしたにはらはぬ袖の霜のさむしろ

川音のとたえ果たる夜の夢を結ひかさぬる霜のさむしろ

二百六十三番

左　　　　左衛門督長親

冬枯の芦邊の鴨の羽音さへまた色かはる今朝の霜哉

右勝　　　　權大納言實爲

色かへぬ松こそあらめ三の徑あれてものこる菊の一もと

霜をけは鴨の青羽もいさしらす松と菊とそ色は残れる

二百六十四番

左　　　　權大納言公長

いろ／＼に秋見し花はかれ果ていつれも同し霜のした草

右勝　　　　關白

散かゝるよその木葉の時雨にやつれなき松も色かはるらん

散かゝる木葉時雨るゝたひことに松も千入の色を添けり

二百六十五番

左持　　　　前大納言光有

山ははやあらはに成ぬ木葉ちるこすゑは風の音はかりして

右　　　　太宰帥親王

難波江や春見し程の色もなし霜に枯行あしの村立

木葉ちる山こそあらめ霜枯のうらもあらはの芦の一村

二百六十六番

左　　　　春宮大夫顯統

霜こほる袖の白妙色添て月をかさぬるよはのさ衣

右勝　　　　源資氏

山風や紅葉の錦さそひきて古郷いそく人にかすらん

重ねても月と霜との色はなし袖の紅葉そ錦こととなる

二百六十七番

左持　　　　前關白

山かけや木葉吹まく風の音に幾夜か絶し夢の浮橋

右　　　　　　　源成直

さそはれて梢にまたやかへるらん嵐にたくふ四方のもみちは

　木葉ちる夢の浮橋中絶て嵐にまかふ嶺のよこ雲

二百六十八番

左持　　　　　　讃内侍

吹たひに四方の木の葉のさそはれてあらしに秋の色も殘らす

右　　　　　　　源頼武朝臣

ふる程は時雨ににこる池水のすめはすみぬる冬のよの月

　月のもる四方の木葉を吹たひに嵐にくもる冬の池水

二百六十九番

左持　　　　　　無品法親王

浮雲をさそふのみかは木葉さへ跡もさためす山風そふく

右　　　　　　　春宮權大夫師兼

霜氷る入江の芦の夜とともに鹽風さやく音の寒けさ

　川上の木葉を遠くさそふ波の芦間にさはる舟の鹽風

二百七十番

左　　　　　　　女房

さそひ行風の音さへかはりけり日數ふりぬる庭のもみちは

右勝　　　　　　前中納言具氏

立田山峯は夕日の影なから麓の雲や猶時雨らん

　殘りなき木々の紅葉の山颪ふもとの雲や時雨そふらん

二百七十一番　冬三

左勝　　　　　　女房

うつろはぬ人の心のためしとやこの山路までのこるしら菊

右　　　　　　　春宮權大夫師兼

浦遠く鳴す千鳥のをのか妻まつにも今夜波やこゆらん

　秋をきて此時なれやうつろはぬ人の心のしら菊の花

二百七十二番

左持　　　　　　無品法親王

芦鴨の浮ねも絶て氷る夜は月たにすまぬ庭の池水

右　　　　　　　源頼武朝臣

友千鳥立ましりてもまよふ哉我道ならぬ和歌の浦浪

　芦鴨の浮ねもさゆる浦衛我道ならぬ跡はしられす

二百七十三番

左持　　　　　　讃内侍

さよもはやふけゐの浦の汐風に聲さえわたる友千鳥かな

右　　　　　　　源成直

冬の夜は雲のみをさへ氷てや空行月も影よとむらん

　さよ千鳥聲さえわたる冬のよの雲のみをとて氷る月影

二百七十四番

左持　　　　　　前關白

みつ汐の高師の浦に風さえて夕波遠く千鳥なくなり

右　　　　　　　源資氏

難波江や芦間の波の立ゐにも聲はさはらて鳴千鳥かな

　みつ汐の高師の浦に波かけて芦間さはらす立千鳥かな

二百七十五番

新續冬　左持　　　　春宮大夫顯統

風吹は浪も岩ねをこゆるきの礒立ならし千鳥なくなり

右　　　　　　　太宰帥親王

新拾冬　さえくらす雪けの雲をたよりにて先ふり初る玉霰かな

　衛鴨あら礒波による玉のあられ亂て浦風そふく

二百七十六番

左　前大納言光有

乙女子かかさしゝ花とみよし野のよしのゝ宮の雪のあけほの

右

波あるゝよさのふけ井の浦風に松原遠く立千鳥かな

闕　白

松原に立や千鳥も跡ふりて花のかさしをみよしのゝ雪

二百七十七番

左　權大納言公長

和歌の浦やふりにし跡をそれなからよるへも波に鳴千鳥哉

右　權大納言實爲

和田の原そこともしらす立波になく音あらそふさよ千鳥哉

わかのうらに鳴音争ふ友千鳥ふりにし跡にいかゝ友はん

二百七十八番

左　左衛門督長親

夜舟こく由良のみ崎の鹽風に聲を帆にあけて鳴千鳥哉

右　前大僧正賴意

みたれ芦のは風もさむし水鳥の波の浮すやはや氷るらん

夜舟こくゆらの湊も水鳥の波の浮すも寒き汐風

二百七十九番

左　權中納言實興

夕汐にさたやなるみの浦千鳥かはる干潟に聲うつるなり

右　中納言光資

衣手の田上川をきて見れは網代の氷魚もよるへ有けり

田上や網代にひたす衣手はかはるひ潟もあらしとそ思ふ

二百八十番

左　藤原經高朝臣

すまの海士の波の枕に鳴千鳥幾夜の夢の關と成けん

右　前中納言具氏

猶さはる入江にすたく水鳥や芦の枯葉の下に鳴らん

千鳥なく浪の枕をかたふけてまたなき浦の哀をそ聞

二百八十一番　冬四

左　藤原經高朝臣

夕されは霰みたれて吹風にぬきあへぬ玉のをのゝ篠原

右　春宮權大夫師兼

風寒み氷にむすふ瀧のうへのみ舟の山は雪つもるらし

瀧の上にぬきあへぬ玉とみゆる哉波に吹しく風の霰を

二百八十二番

左　權中納言實興

くれ竹のよふかき雪の下をれにみぬよりつもる程そしらるゝ

右　前中納言具氏

夜もすから心くたけて玉篠の葉分の風にあられちるなり

呉竹のたえぬ心の下をれにまたくたけそふ霰玉さゝ

二百八十三番

左　左衛門督長親

けぬか上に猶ふり添て白雪のつもる日數そ庭にしらるゝ

右　中納言光資

槇戸あけておと〔ろ字衍歟〕かれけりさゝ竹の一よのほとにつもる白雪

夜もふる雪の槇戸を明てみれはけぬか上にそ猶積りける

二百八十四番

左　權大納言公長

ふみ分て誰かとひこん徒につもるもおしき庭の白雪

右　前大僧正賴意

燈にかへてそ猶も集めつる夜深き窓につもるしら雪

我ために積むる庭の雪なれはふみ分てとふ人もまたれす

二百八十五番

左 勝　前大納言光有

夜を寒み片敷袖の浦千鳥波のまくらに音をや鳴らん

右　権大納言實爲

うらにまひて先たつ小舟の衣手に霜をもはらふ夜半の寒けさ

霜寒み浦をかよへる沖の浦千鳥鳴音も来る浪枕かな

二百八十六番

左 勝　左京大夫顕統

狩暮し道こそ見えね箸鷹のたかへる鈴は音聞ゆなり

右　闕白

一間もる夕日にみかく白玉の紫にみたれてふる霰かな

かりくらし袖に音やまかふらむたかへる鷹の鈴の緒はら

二百八十七番

左 勝　前關白

作者多

絶さらん跡をしそおもふ身にははや二度こえし關の白雪

右　大宰帥親王

奥津風ふけゐの浦の夕波に聲も消ゆく村千鳥哉

龍川の流ひさしき跡なれは猶またたへよ關の白雪

二百八十八番

左 持　辨内侍

かきくらしふる白雪のつもりなは人をやとはん我やまたまし

右　源資氏

よそよりは積りにけりな浦風の吹上の濱にふれる白雪

浦風の吹上につもる雪みても人をやまたん鳴千鳥哉

二百八十九番

左　無品法親王

春はなをつれなく見えしをはつせの檜原も雪の花やさくらん

右 勝　源成直

見るまゝによせてはかへる波もなしいくへ氷の志賀のから崎

時ならぬ花の雪にはしかの浦の波の氷や立まさるらん

二百九十番

左 持　女房

跡とめし岩のかけ道埋れて雪にさひしきみよし野の奥

右　源頼武朝臣

白雪のふるの神杉それとたに見えぬやつもるしるし成らん

年月をふるの神杉分入は猶みよしのゝおくもしら雪

二百九十一番　冬五

左 持　女房

星うたふ雲にもしるし千早振神の鏡はたゝ愛にます

作者

右　源成直

かきくらしふれと浪にはかつ消てつもれるかたや雪の白濱

くもらねと君かあたりに増鏡神代うつして星うたふなる

二百九十二番

左　無品法親王

徒らに過にし方の悔しさもさらにおとろくとしの暮かな

右 勝　源資氏

木葉おり雪降つもる山里にとすれはたゆる岩のかけ道

年月の行衛もしるし木葉にも雪にも絶る岩のかけ道

二百九十三番

左 持　辨内侍

珍しき春に心はいそけともさすかにおしき年の暮かた

右　　大宰帥親王
今朝そまつ我跡つくる庭の雪に道分侘る人もありやと
　珍らしき春をそいそく白雪の道分わひてわかきみ山は

二百九十四番
左　　前関白
暮てまた我身の老となる年を人なみ〳〵にいそきつるかな
右　　関白
道しあれは関の白雪ふみ分て仕へし代々の跡を見るかな
　ふりぬれはかはらぬ跡と我そみる仕へしまゝの関の白雪

二百九十五番
左　　春宮大夫公継
浦風の音こそ立ね濱松のすかたをみせてつもる白雪
右　　權大納言實宗
後つはつ山なれはそ衰の袖に降よりも猶つもる白雪
　み山より猶ふかゝらしはま松の雪をかさねてつもる峯は

二百九十六番
左　　前大納言光有
今はたゝおなしとしも暮にけり身を忘れつゝ仕へこしまに
右　　前大僧正慈圓
白雪のふるきにかへる道有てこそかのゝみかり今やいそかん
　身をわすれ仕へし道は白雪のふるき跡にも猶そまれなる

二百九十七番
左　　權大納言公具
里の名はとはてもしるし年寒き煙数そふ小野の炭竈
右　　中納言光親
いたつらに暮行年のおしきかなまたかへるへき月日ならねは
　いたつらに暮行年をおしとたに思はていそく小野の炭焼

二百九十八番
左持　　左衛門督長親
今も猶ふり釼る道をしたふかなあつめし代々の跡の白雪
右　　前中納言具氏
名のみして昔につれなき色もなし雪ふり埋む嶺の松原
　軒の松もうつもれぬ名を殘すらん集めし窓の代々の白雪

二百九十九番
左　　權中納言實興
さのみまた積れは人のいとふをもしらてや年の行かへるらん
右　　春宮權大夫師兼
うつもるゝ蘆の笘屋は見えわかて雪の下焼あまのもしほ火
　埋もるゝ笘屋はことに哀なりいつくも雪のつもる日数に

三百番
左　　藤原經高朝臣
ふる雪のつもるにつけてよはる也はけしかりつる松風の聲
右　　源頼武朝臣
待としは思はぬ春もあすか風身はいたつらに老となれとや
　松にふく音こそかはれ飛鳥風あすをは春と人も告ねと

三百一番　　戀一
左　　藤原經高朝臣
夜とてもつゝまぬ袖の涙かなたかしるへゆへ月はとふらん
右　　源成直
分初る人たにあらは問てましならは戀の道はいかにと
　うきを知人たにあらは問てまし誰ゆへに今涙そふらん

三百二番

左持　權中納言實興
おもひ入末いかならん戀路ともしらぬ心にまよひ初ぬる
右　源頼武朝臣
よそにのみ峯の白雲いかにしてかゝる心のありとしらせん
　晴やらぬ心にいとゝまよふなる戀路の末や峯のしら雲
三百三番
左勝　左衛門督長親
はかなしや霞のうちにさく花のほのみし色にうつる心は
右　春宮權大夫師綜
知やいかに岩間かくれを行水のたへぬ思ひの有とはかりに
　咲花のほのみし色をうつしても岩間かくれの水は淺しや
三百四番
左　權大納言公長
行末の猶いかならん戀ころもおもひたつよりぬるゝ袖かな
右勝　前中納言具氏
しられぬや袖のなみたの初時雨おもひそめても色に出すは
　かくて猶月日重ねは戀衣おもひそめにし色や増らん
三百五番
左持　前大納言光有
しらすなよ落る涙のたえすとも何ゆへぬるゝ袖のうへとは
右　中納言光資
いかにせんならはぬ袖に落そむる涙の露の色に出なは
　戀しさもつゝむ心も有なから同し涙そ袖にわかれぬ
三百六番
左持　春宮大夫顯統
もらさしとあふさきるさにつゝむかなとすれは餘る袖の涙を
右　前大僧正頼意
思ひかねほに出にけり初尾花袖のなみたを人のとふまて
　穗に出るあないなしらす花薄とすれはかゝる袖の白露
三百七番
左持　前關白
歎くそとあらはれてたにえそいはぬ我身につゝむ人の契りは
右　權大納言實爲
またしらぬ戀の道芝ふみ分てまよふ心を誰にとはまし
　いつかたもしるへそいとゝ迷はるゝ我身に包む戀の道芝
三百八番
左　辨内侍
紅の初花染の袖のうへにいつならひける涙なるらん
右勝　關白
萌出る雪間の草のはつかにやおもふ心の色をみせまし
　それと見は紅よりや深からん雪間の草のはつかなる色
三百九番
左持　無品法親王
行衛なき戀路とかつは知なから心ひとつにまよひ初ぬる
右　太宰帥親王
見しまゝにその面影もかきくもりやかて時雨るゝ袖の上かな
　行衛なき空さへやかてかきくもり戀路の末はさそ迷ふ覽
三百十番
左勝　女房
尋はや思ひ入野の初尾花なひくはやすき習ひなりやと
右　源貴氏
人心つれなき松を染かれていつしか袖にふる時雨かな

野に立る松は風にもつれなくてなひきまされる初尾花哉

三百十一番　戀二

左 勝　女房

忍ひかね夕の雲にまかへても戀のけふりや空にしられん

右　太宰帥親王

うかるへき行末しらぬ今たにもなとかくはかり袖のぬるらん

　うかるへき身の行末を空にそへ戀の烟そ立まさりける

三百十二番

左 持　無品法親王

つゝむさへ一かたならぬ心かな人のためにもうき名と思へは

右　關白

人しれす袖にかけても歎くかな忍ふる原の露のみたれを

　いかにせん忍ふる原の下露の一方ならぬ袖のみたれを

三百十三番

左 勝　辨内侍

忍ひねの涙は淵となりぬともうき名なかさぬしからみも哉

右　權大納言實爲

忍ひねの袖の涙をいかにして我ゆへとたに人にしられん

　忍ひねの涙の色はかはらぬにたかうき名をか分て立へき

三百十四番

左 持　前關白

ことに出ていふよりあまるおもひとは消ん煙の末やしる（られイ）らん

右　前大僧正頼意

人しれぬ心のおくのみたれをもいつまてさのみ忍ふもちすり

　みたれける心のおくもしらるれは消ん煙そ猶もかなしき

三百十五番

左 持　春宮大夫顯統

言の葉に中々いかていつみ川そこをふかめておもふこゝろは

右　中納言光資

いつまてか忍ふの山の峯の松つれなき色に思ひみたれん

　かはらしな忍ふの山の松の色も底をふかめていはぬ心に

三百十六番

新續拾戀三　左 勝　前大納言光有

はかなくも猶こそたのめ契りをく人の心の末はしらねと

右　前中納言具氏

もらすなよおさふる袖の泪川下行水のせきはかぬとも

　人心上には頼む契りにて涙は袖の下のうらみそ

三百十七番

左 勝　權大納言公長

富士の根の絶ぬ煙にくらへはや我下もえにくゆる思ひを

右　春宮權大夫師兼

せきかへし心につゝむ涙ゆへ袖より先に身をやくたさん

　せき返す涙の袖や田子の浦ふしの煙を上にたてつゝ

三百十八番

左 持　左衛門督長親

しらせはやこもの若葉のみこもりにおもふ心の下のみたれを

新葉戀一　右　源頼武朝臣

涙川袖のしからみせきかねはもらさぬ先に身をやしつめん

　水隱りの思ひを深くせきかねて漏さぬ淵に身をや沈めん

三百十九番

新葉戀四　左 持　權中納言實興

あらさらん此世の外のうき名まて苔の下にや猶つゝままし

右　　　　　　　　　　　　　　源成直

猶たに立ものほらて埋火の下にくゆるをしる人そなき

埋火も苔の下にそくゆるなる此世の外や立はまさらん

三百二十番

左　　　　　　　　　　　　　　藤原經高朝臣

しられはや思ふ心か見えさらん同し世にふる我身ならすは

右　　　　　　　　　　　　　　源資氏

いつまてかしられぬ中にみたれまし忍ふの山の露の下草

同し世のうらみや猶も深からん忍の山も露のした草

三百廿一番　　戀三

左　　　　　　　　　　　　　　藤原經高朝臣

はかなしな契らぬ中になからへてあらはあふよのたのみ計は

右　　　　　　　　　　　　　　太宰帥親王

かくとたにいはせの森の下露のしらてや消ん事をしそ思ふ

はかなしなあらは逢よの契りさへなしといはせの森の下露

三百廿二番

左　　　　　　　　　　　　　　權中納言實興

待なれし心習ひにことひさへ聞へもいらて又あかしつる

右　　　　　　　　　　　　　　源資氏

忍あへぬ涙を露にまかへてもあまりしほるゝ袖のうへかな

待なれし心習ひにねぬ夜半もあまりなる迄袖そしほるゝ

三百廿三番

左　　　　　　　　　　　　　　左衞門督長親

水上を人にはいはし涙川袖はかりこそしらはしるとも

右　　　　　　　　　　　　　　源成直

淵あることはりならは先の世に我も人にやつれなかりけん

涙川袖に流れし水上や我先の世のむくひなりけん

三百廿四番

左　　　　　　　　　　　　　　權大納言公長

神もなとつれなかるらん御秡川あふせにかけよ袖のしからみ

右　　　　　　　　　　　　　　源頼武朝臣

逢と見てしはし慰む夢もかなさめて悔しき契り成とも

御秡川逢せを神にかくるよの夢や現に猶まさるらん

三百廿五番

左　　　　　　　　　　　　　　前大納言光有

契りけん百夜迄こそなけれともまたれしくれの數そつもれる

右　　　　　　　　　　　　　　春宮權大夫師兼

海士のかるみるめ計を契にてうらみん程のたよりたになき

契りける百夜の數はあまのかるみるめ計のたより成けり

三百廿六番

左　　　　　　　　　　　　　　春宮大夫顯統

後の世とたのめぬ程や逢迄の命もかなとみを思ひけん

右　　　　　　　　　　　　　　前中納言具氏

くれなはと契りしよひの村雨やこぬ人たのむ涙成らん

後の世と契りし事そ村雨の空たのめにはせめて增れる

三百廿七番

左　　　　　　　　　　　　　　前關白

人しれすおもふ心は空蟬の木かくれてのみ音はなかれけり

右　　　　　　　　　　　　　　中納言光資

鳥の音のつらき例もしらぬ身を誰ならはしにおとろかすらん

空蟬のつらきためしも唐衣たかならはしの鳥の音もなし

三百廿八番

左持　辨内侍
我中はあはての浦のかたし貝むなしき波の下に朽めや
右　前大僧正頼意
山鳥のをろの鏡の面影もへたつる中はいつか逢みん
雲かくる遠山鳥の契りたにあはてのうらの浪そ隔つる

三百廿九番
左　無品法親王
年をへてつゝむ心にゆるさねはおもひ有やと問人もなし
新葉戀一　右勝　權大納言實爲
相思ふ心まてこそかたからめうき名をせめてもらさすもかな
もらしても誰僞ならしせめて身の浮名計をあひ思はなん

三百三十番
左　女房
また人の袖にやとらは月もみよかゝる涙のたくひやはある
新葉戀一　右勝　關白
夏かりの芦火の烟下にのみ思ひこかれて立雲（宗集）もなし
よそに看立雲もなき烟哉袖の涙はたくひあれとも

三百三十一番　戀四
左持　女房
しるらめや岩間に茂る芦のねのねもみぬ人にみたれ侘とは
右　權大納言實爲
つゝめとも涙の色やくれなゐのふり出てよそにうき名立らん
あちきなくねもみぬ人の紅の心うつして立うき名かな

三百三十二番
左　無品法親王
戀しなん身をは惜まし後の世に思ひあはするむくひ有とは
右勝　前大僧正頼意
同し世に猶住よしのみつかきや久しく祈るしるし成らん
戀しなんとさのみ喞つな同し世に猶住吉の恨めしけれは

三百三十三番
左勝　辨内侍
我はたゝ僞しらぬこゝろにて人の契りを猶たのむかな
右　中納言光資
しらせはや吉野の川の瀧つせのせきあへぬ迄思ふこゝろを
吉野川よしや川波はやけれは人の心を猶やたのまん

三百三十四番
左　前關白
浪かくる礒邊の松を見てもしれつれなきもねに現れやせぬ
新葉戀三　右勝　前中納言具氏
人もまたたのめしまゝの暮ならは同し心に月やまつらん
波かくる松はつれなき色なれは賴めし儘の月をこそ見れ

三百三十五番
左持　春宮大夫顯統
朽ねたゝ祈るもつらしあふ事は終になきさの杜のしめ繩
右　春宮權大夫師兼
さのみまた人のとかとやかこつへきうき我からの心つよさを
逢事の渚の森の名をきけは人のとかにもさのみかこたし

三百三十六番
左　前大納言光有
さりともと猶もあふせを松浦川よるへも波のうき身なれとも
新葉戀三　右勝　源賴武朝臣
たのましといひてもさすかまたるゝや我僞のゆふへなるらん

それは猶心つくしそ松浦川我いひをきしあふせたのまん

三百三十七番

左持　　權大納言公長

うかりける我中川よいかなれはわたらぬ先に袖のぬるらん

右　　源成直

もかみ川人の契のあさきせをしはしはかりと何たのみけむ

　かはらしな我中河にもかみ川わたらぬせゝもしはし計そ

三百三十八番

左勝　　左衛門督長親

をろかなる涙と人やおもふらむ見せはや袖に落る瀧つせ

右　　源資氏

ゝたて行人のこゝろの關守にあふ坂山の名をやかふらむ

　袖に落る涙の瀧や相坂の關の清水に音増るらん

三百三十九番

左勝　　權中納言實興

關守の心もしらてあふ坂といひしはかりの名をたのむ哉

右　　太宰帥親王

たれゆへにしられぬまてを契にて忍ふにあまる我涙かな

　關守の心しられぬ道なれと先あふ坂といふをたのまん

三百四十番

左持　　藤原經高朝臣

あふ事はたかうき世々の報にて神さへうけぬ御祓成らん

右　　關白

天雲のたゝ中天に消はてはさすかに人の哀とや見ん

　逢事を神もうけすは天雲の只中天に身をやなさまし

三百四十一番

持左　　藤原經高朝臣

もろともにおなしかきりの命にて後の世までの契ともかな

右　　權大納言實爲

同し世に有とはかりになからふる我命さへつれなかりけり

　何せんにつらき心の同し世に同しかきりの命なるらん

三百四十二番

左持　　權中納言實興

哀をもかくへき人はあら磯の波にこゝろを何くたくらん

右　　關白

いかにせんうき名は立て春駒の綱引見ても同しつらさを

　よしさらは人の心のあら磯になはたつ春の駒にくらへん

三百四十三番

左　　左衛門督長親

夕されは草葉を袖の上と見よ露に涙の色はなけれと

右勝　　太宰帥親王

忍かね袖にみたるゝ白露のしらすやいかに思ふ心を

　夕暮は袖にみたるゝしら露そ草葉にまさる涙なりけり

三百四十四番

左持　　權大納言公長

かくはかり憂事しけくなけかめやあふにしかふる命なりせは

右　　源資氏

今はかくうきにたえても忍はましあらはあふよの契りなりせは

　あふ事にたへても命惜かなあらはあふよの契まつとて

三百四十五番

左勝　　前大納言光有

神もまた御祓をうけはかたそきの行あふよはのなとなかる覽

右　源成直

吹風のたよりもあらはしらせはや身をうき舟のこかれ侘ぬと

(續拾遺)

三百四十六番

左持　春宮大夫顯統

あふと見ん夢路はゆるせ立わふる現のうさもわするゝ計に

右　源頼武朝臣

忘すは思ひも出よ逢事に命をかへて我はなくとも

逢事はけに又かへし我ならは夢も此世の夢を見ましや

三百四十七番

左　前關白

露ならてむすふ契もなかりけり人を忍ふの山の下みち

[illegible]　右勝　春宮權大夫師兼

こりすまに又たのまるゝ夕かな人のまことも身にはしらねと

身にたえぬ忍ふの露もいかならん猶こりすまの浦の松風

三百四十八番

左勝　辨内侍

偽はつらきものそとしらせはや我まつ人にひとをまたせて

右　前中納言具氏

消かへりおもふ心の下もえのけふりやよそにうき名たつらん

消かへり思ふもつらしよしやたゝ我まつ人に心かへせむ

三百四十九番

左勝　無品法親王

偽になれぬ心や行末を契るにつけて猶たのむらん

右　中納言光資

[illegible]き具節々を数へてこそあふよあらはのあらましにする

あふよあらはうき節々も忘れねよ契につけてたのむ心は

三百五十番

左勝　女房

今は世になしともせめてきかれはやさてたに人の哀しるやと

右　前大僧正頼意

月たにも心つくしの夕哉つれなき人をまつの木の間に

今は世になくて哀の増る身を木のまの月よまつとしうすな

三百五十一番　戀六

左　女房

年なみの猶こえゆくはいかゝせんいひし契のすゑの松山

新撰戀三　右勝　中納言光資

なからへはかはりもやせん契りをく行末またぬ我身とも哉

契置末の松山まつにこそけにこそ波のうきもしらるれ

三百五十二番

左持　無品法親王

つれなさの限もさすかみるやとて幾夜むなしく待あかすらん

右　前中納言具氏

わか袖はみしまかくれの芦なれや、思ひ亂れてかはくまもなし

あはてうきみしま隠れの亂芦いく夜寂しき袖ぬらすらん

三百五十三番

左勝　辨内侍

三輪の山しるしの杉をたのむ哉おもふ心を神にまかせて

右　春宮權大夫師兼

待こすは衣かたしきはつせ風かつ吹夜半をひとりかもねん

待こすは初せもよしや三輪の山神もしるしの杉を頼まん

三百五十四番

左

何ゆへにふかき思ひと成ぬらん契は淺き山の井の水　前關白

新古今　右勝

せく袖にあまれはやかて流れけり淚の川やうき名成らん　源賴武朝臣

山の井の淺きためしを何故かふかき淚の川にくらへむ

三百五十五番

左勝

現にて難面き人はねぬる夜の夢にもあふと見えん物かは　春宮大夫顯統

右

逢事もかへなはせめていかゝせんかひなく立はうき名成けり　源成直

つらきをも夢なりけりと慰めてあはぬ現にこれそ增れる

三百五十六番

左

いかにせん思はぬ中のなみた川立あた波のかゝるうき身を　前大納言光有

右勝

我方に靡もはては夕けふり空に立名はさもあらはあれ　源貴氏

我方になひくけふりの末を見て思はぬ中とたれか恨みん

三百五十七番

左持

契をく心もしらすなからへは逢よ有やと何たのむらん　權大納言公長

右

逢事は波のみこえていたつらに朽ぬる袖やすゑの松山　太宰帥親王

逢事は波のみこえて契をく心もしらぬすゑのまつやま

三百五十八番

左勝

僞にふけぬとたにも思ははやあきらぬ夜はの庭の松かせ　左衛門督長親

右

おくの海の鵜のゐる石の色となくぬれてかはかぬ袖のうへ哉　關白

奥の海のうのゐる岩の波よりは契らぬ夜半の袖ぬらし鳬

三百五十九番

新古今　左持

あま人のたくもの煙いたつらになひかてたえん名こそ惜けれ　權中納言實興

右

いつまてそあはての浦のあた波を袖に懸てもすくる月日は　權大納言實爲

夕煙靡に立や月日ふるあはての浦のおきつしら波

三百六十番

左勝

忘れぬやかはるやいかに松の風ふけはてゝとは契らさりしを　藤原經高朝臣

右

海士人の汐波袖にくらへても我淚こそたくひしられね　前大僧正賴意

あま人の汐くむ袖の恨みには松風のみやふけまさるらん

三百六十一番　〔戀七〕

左勝

せく袖にあまる淚の末なれやうき名をさそふ中河の水　藤原經高朝臣

右

たのめぬを我のみ待てよひ〳〵につらしと人を何おもひけん　中納言光資

中川のうき名も浪やたてつらん賴めぬ人はあふせ待とて

三百六十二番

左勝

かくとたにいひ出ぬ身の淚をはたかこゝろよりもらし初けん　權中納言實興

右

青々にかよふ心もかひそなきなこその關のつらきへたては　前大僧正賴意

わか袖に忍ふ涙もるといへは猶そなこその關はかひなき

三百六十三番

左持　左衛門督長親

思ひ侘ねなましものを何とたゝまつ夜の月を詠そめけん

右　權大納言實爲

人心うき田の森のみしめ繩くる夜もなしと歎く比かな

人心うき田の杜の木の間にも待夜の月の影はなかめき

三百六十四番

左持　權大納言公長

よしさらはまたしと思ふ今宵さへ心ならひにねられやはする

右　關白

たのめつゝ待夜むなしき鳥の音にきぬ/\よりもぬるゝ袖哉

うかりける心習も鳥の音の曉まてはまたれやはせし（するイ）

三百六十五番

左持　前大納言光有

年もへぬいつまてとてかつの國のなからへて猶物やおもはん

右　太宰帥親王

ともこそは現のうさの儘ならぬ夢路にさへやつれなかるへき

夢もうし現もつらしつの國のなにはれかたく存へもせん

三百六十六番

左　春宮大夫顯統

戀しなん後はさすかに哀ともいはゝいへかしいきてある世に

右勝　源資氏

さはる夜もさこそはあれとまたれけり又僞の身にもなれねは

いきてうき猶僞をたのまはや後の哀も何にかはせん

三百六十七番

左持　前關白

神にこそかけても祈れ常陸帶のかくるしるしの末の契を

右　源成直

僞の有ならひをもしらぬこそまつ夜の更るたのみ成けり

神かけてむすふ契の常陸帶けに僞のあるならひかは

三百六十八番

左　辨内侍

年月をかさぬる袖の涙かなつれなきものは我身なりけり

右勝　源頼武朝臣

僞と歎きなからも慰みし空たのめさへ今はたえぬる

徒に涙なかれし年月を空たのめにもなとやすこさぬ

三百六十九番

左持　無品法親王

せきかへす袖に涙のいつもりて物おもふ色のよそに見えけん

右　春宮權大夫師兼

わか袖にまた此暮も浪こえぬうき僞のすゑのまつやま

袖にせく涙もさこそ忍しか松こそ波のあたし習ひを

三百七十番

左持　女房

何とたゝとはれぬ宿の松風は猶うき事の音をはそふらん

右　前中納言具氏

なからへてあひみんまての限こそつれなき中の命なりけれ

徒にちきらぬ宿の松の風あひ見んまての限とそきく

三百七十一番　戀八

左　女房

なよ竹のよをや隔てんと思ふにそうき節よりも袖はぬれけり

新續古一 右勝　春宮權大夫師綠
長き夜を昔にのみ鳴て庭津鳥かけの垂尾のみたれ侘つゝ
なよ竹のうきふしよりも庭つ鳥かけのたれ尾の長き夜哉

三百七十二番
左　無品法親王
定めなき世に習はすはいかはかり人のかはるも猶うからまし
右勝　源頼武朝臣
うきまゝに恨ははてぬしかりとてそむかれなくに人そ戀しき
誰故にうき世の中そしかりとてそむかれぬ身の涙添つゝ

三百七十三番
左持　舞內侍
引かへす心もよしや梓弓もとよりなれぬちきりとおもへは
右　源成直
時の間の夢に夢みる逢事を現のうちのうつゝともかな
梓弓もとより何になれつらん現のうちのうつゝなければは

三百七十四番
左勝　前關白
見し事はいつ杣山にとふさたて木に切かへんあはぬつらさを
右　源資氏
さても我うきせにかけし涙川逢よりおなし袖はぬれけり
つらきをそ木に切かへて流すなる猶杣川は袖やぬれなん

三百七十五番
新續古三 左勝　春宮大夫顯統
つらきをも憂にもたへてこふる身を猶つれなしと人やみる覽
右負　太宰帥親王
淺からぬ心のほとはよな〳〵の夢のたゝちにおもひあはせよ
難面しと人やみる覽よな〳〵の夢のたゝちの契しられは

三百七十六番
左　前大納言光有
戀々てかさぬる夜半のから衣うらめつらしき身の契かな
新葉戀三 右勝　關白
契き情なをこそたとれあひみても見し夜の夢に似たる現は
から衣重ねなからも打かへし見し夜の夢を猶やかこたん

三百七十七番
左持　權大納言公長
めくりあふ袖にも月はくもりけり又いつかはとおもふ涙に
右　權大納言實爲
僞の有世なりともしゐて猶人の契をたのみこそせめ
僞の有世なれはや契ても又いつかはとうたかはるらん

三百七十八番
左勝　左衞門督長親
いつまてかたへて慕はん戀しねとする樂しるき人のつらさを
右　前大僧正賴意
いもせ山隔る中のつらさにや涙は瀧と落はしめけん
戀しねとするは心のわさのみか身なくる瀧も淺瀨成けり

三百七十九番
左持　權中納言實興
命をも逢にかへはとせしみそきそをたに神のゆるすよもなし
右　中納言光資
いとはるゝ我をは神もうけしとや契はよそに三輪の山本
我祈る御祓もうけぬ神ならはいつこを三輪の杉のしるしそ

三百八十番

左勝　　　　藤原經高朝臣

さても又忘られなはと思ふにそあひみぬよりは袖はぬれけり

右　　　　前中納言具氏

年月の恨につもる涙にそをさふる袖も終に朽ぬる

三百八十一番　戀九

左勝　　　　藤原經高朝臣

年月の涙の數も何なれややかて忘るゝ袖のうらみは

右　　　　春宮權大夫師兼

きぬ〳〵の袖の涙に影とめて月もわかるゝ有明の空

人もさそ同し心にいとふらん戀しなぬ身の命なかさは

衣々の袖にわかるゝ月かけや人のつらさを猶もそふらん

三百八十二番

左持　　　　權中納言實興

重ねても袖こそぬるれいひやらぬ本のつらさをかこつ涙に

右　　　　前中納言具氏

待侘ぬ難波の芦間ゆく舟のさはりあれはやとはて過らん

重ねても袖やぬれなん漕かへり同し芦間を分る浦舟

三百八十三番

左持　　　　左衛門督長親

錦木の千束の後もつれなくはあはぬためしの名をや立まし

右　　　　中納言光資

僞のいもれはいとゝしたふかなさのみはよもとおもふ心に

僞の名をそ立まし錦木の千束も過ることよひ成せは

三百八十四番

左勝　　　　權大納言公長

俤の殘るかたみやきぬ〳〵のなみたにうつる有明の月

右　　　　前大僧正賴意

逢事は間遠の衣きても猶すまの浦波そてそぬれそふ

俤のかたみを殘す月をみてま遠の衣袖はしほれぬ

三百八十五番

左　　　　前大納言光有

有明の月さへ袖にやとりきてわかれを殘す面影もうし

右勝　　　　權大納言實爲

たへて猶待そつれなき頼めつゝとはぬつらさの今宵のみかは

有明の別れを殘す影もみすとはぬつらさの夜のみ重て

三百八十六番

左　　　　春宮大夫顯統

しほなるゝあら磯崎の岩根松終につれなき色もうらめし

新葉戀三　右勝　　　　關白

心をはあかぬ袂にとめをきてかへるともなき明暮のそら

鹽なるゝあら磯松にかゝる波かへる恨や猶まさるらん

三百八十七番

左持　　　　前關白

思ひ出ん人の心もいさや川なみたをきそふとこの山かせ

右　　　　大宰帥親王

待宵の更ゆくのみか別れにもつらさは同し鐘のをとかな

更てうき涙の床の山風におなしつらさのかれひゝくなり

三百八十八番

左持　　　　掌内侍

下紐のとけてぬる夜もから衣おもひならひし袖そぬれける

右　　　　源貴氏

曉のわかれもしらてみしものをけにうかりけるありあけの空

下紐のとけてぬる夜や曉の袖のわかれにならひそめけん

三百八十九番

左　無品法親王

またいつと契るたよりもなき中のわかれや今を限なるらん

右持　源成直

なからへてまた有明の空までもいきはや月をかたみとはみん

かたみとや我たにたへぬ別路になからへまさる有明の月

三百九十番

左勝　女房

したひ侘なからふへくもあらぬ身に又よと契る程のはかなさ

右　源頼武朝臣

新撰歌五さらに集

更にまたよそに成てやいひそめん有し身とたに忘れはてなは

よしさらに忘れぬ先にきかれはや長らふへくゝあらぬ我身そ

三百九十一番　戀十

左持　女房

夢とのみ思ひなしてもあるへきを聞しに似たる鳥の音そうき

右　源成直

今朝よりそ我僞に成にけるあふにかへんといひしいのちは

夢現聞定めてやあふ事にかへし命も僞にせん

三百九十二番

左持　無品法親王

衣々にわかれの袖の涙こそ又ねの床のかたみなりけれ

右　源資氏

いかにせんさてもやみると思ひつゝ又ねの夢に面影もなし

かはらしな俤そへてわかれつる同し又ねに夢はなくとも

三百九十三番

左持　辨内侍

かこたはや人のつらさも有明の月には誰かわかれそめけん

右　太宰帥親王

露分し袖とも人にいふへきをいかて涙のいろにいつらん

有明の月にも人やわかれけん袖に色こき道芝の露

三百九十四番

左　前關白

又いつとたのめしまゝに日數へて塵のみ積る床のさ莚

右勝　關白

契りしはそのよはかりの現にて忘れぬ夢を猶なけゝとや

さ莚や拂はぬ床のちりの上に其夜はかりの夢そ残れる

三百九十五番

左勝　春宮大夫顯統

うき名のみよそにちらして色かはる心木のはになと習ふらん

右　權大納言實爲

いきてこそ逢みる夜半も有けれとおもへはおしき我命かな

命にも增りておしき木の葉哉いきてうき名の散と思へは

三百九十六番

左　前大納言光有

たのみしもはかなかりける我身哉替るはやすき人の心を

右持　前大僧正賴意

したひつる袖の別れの其まゝに立もはなれぬ今朝の俤

別れても猶其まゝの面影に替る心やつらさ添らむ

三百九十七番

左勝　權大納言公長

人しれす思ひしものをいかにしてもれける袖の涙なるらむ

右　　中納言光資

せき侘し涙はほしつ今よりの立名におほふ我袖もかな

かくはかりもれける袖の涙をは又せき返し誰かほすへき

三百九十八番

左持　　左衛門督長親

惜まれし命を今は急くかなあふにかへはとおもふ計に

右　　前中納言具氏

うかりしを思ひ出ては白糸のくる夜さへ又ぬるゝ袖かな

覺つかなくる夜もいかて白糸の逢にかへてし命ならすは

三百九十九番

左　　權中納言實興

したふそとおもふからにや中々につらきわかれを猶急くらん

新千載十一　右勝　　春宮權大夫師兼

思ひ出はたか涙にもくもるらん契りし月の同しかたみは

別れにし其俤のかはらねは契りし月そつらさ添つる

四百番

左　　藤原經高朝臣

いつしまにまた跡たえて相坂の關のこなたに猶まよふらん

右勝　　源賴武朝臣

いとさらは袖をたなけん戀衣涙にあかぬ神やうくると

逢坂の關守神の手向にはにしきにまさる涙なりけり

四百一番　　新千載十一

左勝　　藤原經高朝臣

逢みても夢なりせはと歎きしやうつゝのうさに習はさるらん

右　　源成直

歎結の枕に殘るうつり香やあひみし夜半のかたみなるらん

四百二番

手枕に殘る形見もあたなれはみしを中々夢になさはや

左勝　　權中納言實興

年經たる其通ひちは君やこし我や行しとたとらるゝかな

新千載十二　右　　源賴武朝臣

歎あまりみもせぬ夢を語りても思ふ方には誰かあはせん

年へぬる其通ひちはたとる共見もせぬ夢にいかゝ比へん

四百三番

左　　左衛門督長親

替りゆく人の心の淺きせにとすれは絕る中川のみつ

右勝　　春宮權大夫師兼

あはぬまの數かくしちの百夜にもあまり程ふる中の年月

かはりゆく人の心の淺きには數增りけりしちのはしかき

四百四番

新千載十四　左勝　　權大納言公長

契りきや見し夜はかりの現にて夢にも人のつれなかりせは　おれと集

右　　前中納言具氏

今よりは夢をそ賴む逢事の現ともなき夜半のちきりに

夢よりはさすかみし夜や增るらん現ともなき現なからも

四百五番

左持　　前大納言光有

名もつらし關のこなたの音羽山又あふ坂の隔てなりせは

右　　中納言光資

曉も何かうからんまてといふにかへらてとまる別れなりせは

まてといふに歸らてとまる相坂の關の此方を何か賴まん

四百六番

左 持
契りしもいはれは是もかはるやとゝはれぬをさへ又たのむ哉　春宮大夫顕統

右
とはぬ夜を有明の月にかこちつゝ別れしよりもぬるゝ袖かな　前大僧正頼意
　契りしも昔れは是もかはる世におなし空なる有明の月

四百七番
左 勝
忘れてそ身にならしつるあふ事は間遠の衣うらみける名を　前関白

右
鳥の音をきくのみは如何かこつへきさらにてもとまる別ならねは　権大納言実為
　またもきくつらを根を身にならす間遠の衣名はかこつ共

四百八番
左 持
朝露のをき別れつる我床に残るかたみとぬるゝ袖かな　辨内侍

右
今は又かけさへ見えす山の井の浅き契りを何たのみけん　関白
　山の井の浅き契りを結ふ手の雫もおなし袖の白露

四百九番
左 持
夢かとよたゝうたゝねの手枕にうつる匂ひもさたかならねは　無品法親王

右
またよとて別れし夜はの月のみや空しき空にめくりあふらん　太宰帥親王
　我袖に只うたゝねの移りかも其夜の月もさたかならぬを

四百十番
左 持
かきくもり袖の涙の玉ゆらにみし面影は身をもはなれす　女房

右
驚かは又もみし夜に帰るやとうきをさなから夢になさはや　源資氏
　面影よ身をやはなるゝ玉ゆらもよるはさなから通ふ夢哉

四百十一番　恋十二
左
しるしなきねのみなかれてうき人の心の花そ色かはりゆく　女房

新葉雑四 右 勝
かはるとも先逢みんと思ひしやうきにならはぬ心なりけん　太宰帥親王
　行末をしらてたのみし身のうさや心の花に猶増るらん

四百十二番
左
あたにみし其面影は夢なから覚ぬうつゝに猶なけくかな　無品法親王

右 持
たのめこし契りはよその夕暮に猶かきたえぬさゝかにの糸　関白
　夢よりもまたはやさらはさゝかにの糸絶々に懸し頼みを

四百十三番
新葉恋三 左 持
別れにし其面影をかたみにていく有明をひとりみつ覧　辨内侍

右
逢見しは夢かとたとる手枕にはらはぬちりのなと積るらん　権大納言実為
　俤の幾有明になりぬらんふりし枕にちり積るまに

四百十四番
左 持
浦波の懸し契りも絶ぬれはくゆるかひなき海士のもしほ火　前関白

右
見こそうはの空なる頼にて身を浮雲のはてそしられぬ　前大僧正頼意

藻鹽火のくゆる煙もひとつにて身を浮雲の果としもなし

四百十五番

左　春宮大夫顯綱

異方に心引とも梓弓おもひかへしてとふよしもかな

右勝　中納言光資

言の葉のうつろふ色の見えしより袖に時雨のふらぬ日もなし

　梓弓契りし末の秋の色に袖の時雨やふりまさるらん

四百十六番

左　前大納言光有

よしさらは人をも今はうらみしようき我からに厭はるゝ身は

右勝　前中納言具氏

あひ見すは中々さこも有へきに夢の契そ今はあたなる

　かく計人をも身をも恨むるにたかしるへとて夢は見ゆ覧

四百十七番

左持　權大納言公長

またれこしつらさをそへてたまさかに逢夜も袖は猶そ乾かぬ

右　春宮權大夫師兼

其まゝにかけたに見えて山の井の淺き契りの末もはかなし

　山の井の影離れなはと思はれて逢夜も袖や猶ぬらすらん

四百十八番

新葉戀四　左勝　左衞門督長親

おもひ出て心に忍ふ面影や人のちきらぬかたみ成らむ

右　源賴武朝臣

行末の賴みもいさやしら露の玉の緖はかり殘る契りは

　俤を人のちきらぬかたみそと思へはいとゝ賴みなの身や

四百十九番

新千[illegible]　左持　權中納言實興

うつろはん後忍へとやなをさりにあらぬ心の色を見せけん

右　源成直

いかにしてをのか物から心にもまかせぬ袖のなみたなるらん

　心にもまかせぬ色やなをさりにあらぬ袂の涙なるらん

四百二十番

左勝　藤原經高朝臣

厭はるゝ身のことはりを思ふにもたゝうきふしは賤のをた卷

右　源資氏

異方に花色衣うつれはや重ねしまゝの契りなるらん

　あたに移る花色衣みるよりは心なからや賤の小手卷

四百廿一番　〔戀十三〕

左勝　藤原經高朝臣

忘らるゝ我身の末の世かたりをおもふにつけてうき契りかな

右　太宰帥親王

つらきをもしゐてたにこそしたふ身を何ゆへ人の忘れ果らむ

　うきなから我身の末の世語りを忘れし人にせめて傳へよ

四百廿二番

左　權中納言實興

忘れすはわれもといひしことの葉そ替る心のはしめなりける

右勝　源資氏

契りこしもとの心はむかしにて人はふる枝の秋はきのはな

　今更に替るとみるもはかなしや本の古枝の秋萩の花

四百廿三番

新千[illegible]　左持　左衞門督長親

うかりける身のならはしの夕かな入相の鐘にものわすれせて

右　　　　準成直

なをさりに思ひけりとや思はれん忘らるゝ身のいきて有せは

忘れしないきてある世の思ひ出は入相の鐘の夕暮の空

四百廿四番

左勝　　　　權大納言公長

何とたゝみし俤の浮ふらんわすらるゝ身の袖のなみたに

右　　　　源頼武朝臣

つらくてはよも山科の音羽川音には立し袖はぬるとも

音羽河音に聞てもいとゝ猶みし俤や目にうかふらん

四百廿五番

左　　　　前大納言光有

いかなりし世々の契のむくひそと忘らるゝ身を誰にとはまし

右勝　　　　春宮權大夫師繼

伊勢の海の海士のうけ縄くるとあくと絶ぬ恨に委れてそふる

よしや其酬はしらしいせの海士の深き恨に身は沈めても

四百廿六番

左持　　　　春宮大夫顕統

人はさて軒端にすかくさゝかにの厭はるゝ身に何をまつらん

右　　　　前中納言具氏

忘らるゝ身はうき雲のはれやらて袖さへくもる月の影哉

わすらるゝ身のうき雲の絶行は人も軒はのさゝかにの糸

四百廿七番

左持　　　　前關白

わか戀は風吹小野のまくす原うらみて後や枯も果なん

右　　　　中納言光資

契りこしことのはのなとかはる覧其おもかけは忘られぬみに

契りこしことの葉秋の風ならはをのゝ葛原をのれ恨に

四百廿八番

左　　　　辨内侍

其まゝにとはれぬ人のつらさをはわすれはやたゝ同し心に

右勝　　　　前大僧正頼意

逢見しは一夜の夢の名殘にてうつゝにつらき年そへにける

忘るへきつらさにかへて思ひなん一夜の夢の名殘計りは

四百廿九番

左持　　　　無品法親王

忘れ行人に恨や殘らまし身のうきほとをおもひしらすは

右　　　　權大納言實爲

忘れしといひしは夢に成ぬれと我思ひのみさむる間もなし

我思ひさむる間もなき心哉人のつらさを身のうきにして

四百三十番

左勝　　　　女房

をき所なく／＼返す言の葉のその數ことに忍ひかたさよ

右　　　　關白

つらきをも身のうき科に聊ちつゝいはて忍ふも袖はぬれけり

名殘たになく／＼返すことのはの其數毎に袖そぬれそふ

四百三十一番　戀十四

左勝　　　　女房

秋果る三室の山の葛かつら恨みし程のことの葉もなし

右　　　　權大納言實爲

今も猶袖こそぬるれ其まゝに渡り絶にし中川の水

音高き三室の葛の山風にぬるとも袖は恨さらまし

四百三十二番

左勝　無品法親王

身ひとつに積る恨のふかけれは中々いはん言の葉もなし

右　前大僧正賴意

色かはる人の秋そときくからに吹こそやまね葛のうら風

四百三十三番

左持　辨内侍

色替る人の秋にそ身ひとつのうらみはいとゝ深く成ぬる

右　中納言光資

我のみと恨ても猶かひそなきよそにこかるゝ海士のつり舟

四百三十四番

左負　前關白

あたなりし我中河のにかとよおなしあふせに又まよひぬる

右　前中納言具氏

逢瀨なき我中川の末かとよしらぬ湊にまよふあま舟

四百三十五番

左持　春宮大夫顯統

うき人のとてもたえなは隱忍ふわか心をやかたみとはせん

右　春宮權大夫師兼

明ぬとてまた夜をふかみ急しやいとはるゝ身の恨なりけり

四百三十六番

左　前大納言光有

別路は身をこそ厭へわか心人のかたみとせめてなれかし

右　源賴武朝臣

年月は移りにけりな忘らるゝ身のうきまゝの歎せしまに

四百三十七番

左　權大納言公長

我やあらぬ人やはあらぬ待なれしゆふへは同し入相のかね

右勝　源成直

我やあらぬ人やあらぬと聊ても移りに鬼なよその年月

四百三十八番

左　左衞門督長親

絕果ぬかひこそなけれ今も猶つらさはもとのまゝの繼橋

右勝　源資氏

風渡る垣ほの葛やうらむらむこれは絕にしまゝの繼橋

四百三十九番

左　權中納言實興

かりそめの言の葉にたにかゝらねはうらむる袖の露も乾かす

右勝　太宰帥親王

はかなしや積る恨をかきくときいはゝとおもふ賴みはかりに

四百四十番

新葉戀五　左負　藤原經高親王

ことの葉に懸てしるしも猶なくはいはゝと思ふ程や增覽

右　關白

うき身ゆへ急し鳥のおなし音をたか衣々に君かこつらん

せきかぬる淚をみても思ひしれいはれぬ程のうらみありとは

鳥の音のうき衣々の別にもいはれぬ程のうらみやはある

さりともと思ふ賴みにかへるこそ我等閑のうらみなりけれ

うらむともかひやなからん賴めしにかはりのみゆく人の心は

等閑の恨や淺きかくはかりかはりはてたる人のこゝろを

數ならぬ身にも恨はある物をいはゝや人の思ひしるまて

里の海士の波懸衣いつまてかほさぬ恨にしほりかさねん

歎ならは恨も誰か里のあまの波懸衣ほす隙もなき

四百四十一番　戀十五

左　藤原雅經朝臣

蓬生の露の契りはかれはてゝ本の心をとふ人はなし

右勝　權大納言實爲

恨ても年月へぬるみなの河なみたのはてや淵とならまし

蓬生の露は歎かと年月の積る涙の淵となりぬる

四百四十二番

左勝　權中納言實興

何ゆへにと絶そめけん有し世のあふせは又も中河のみつ

右　關白

身をさらぬ俤はかり留置て我をはなにとふるしはつらん

忘めやあふせは又も中川のなかれてふりし人の面影

四百四十三番

左　左衛門督長親

逢事はさて山姫の秋の袖はしあへんものか露も時雨も

右勝　太宰帥親王

さりともと思ひし程の頼みさへはやたえはてゝゆく月日哉

哀なり露も時雨も秋更て月日計におなしよの中

四百四十四番

左　權大納言公長

葛城の久米の岩はし絶ぬとや懸ても今はとはれさるらん

右勝　源貴氏

逢事の緒にし後もかよひきて人頼めなる夢のうきはし

葛城のくめちはいきやまたもみはたゆとも絶し夢の浮橋

四百四十五番

左持　前大納言光有

ふみ分て問こし人の音信も絶てほとふる庭のかよひち

右　源成直

今は又袖に懸てもなけくかなかよひ絶にし道しはの露

かひなしな絶て程ふる露霜に枯にしまゝの庭の通路

四百四十六番

左持　春宮大夫顯統

僞とおもひなからも頼みしや猶絶はてぬちきりなりけん

右　源頼武朝臣

替りゆく人の心のたねよりや忘るゝ草はおひはしめけん

忘草心の種は急くとも猶絶はてぬ契りとをしれ

四百四十七番

左持　前關白

俤も隔果てや山鳥のはつをのかゝみかけしかひなし

右　春宮權大夫師兼

是も又いつまてかはとかなしさは絶にし中に殘るおもかけ

山鳥のおろの鏡もうかるへし絶し面影猶もへたては

四百四十八番

左　辨内侍

渡りこしまゝの繼橋と絶してむなしく朽ん名こそ惜けれ

右勝　前中納言具氏

何ゆへに我うき中の絶ぬらんありて別れしまゝの繼はし

我中に渡してさらはたのまはや其名も同しまゝの繼橋

四百四十九番

左勝　無品法親王

徒にすくる月日をかそへしは猶もちきりのある世なりけり

右　中納言光資

難波江の深き根のかきなるや身に淺からぬむくひなるらん

難波江の深きにおふる芦の根の猶契りある世をや頼まん

四百五十番

左持　女房

あふ事はさて山陰の柴の庵しはしはなとかすます成ぬる

右　前大僧正頼意

かき絶て問もとはれす玉章の通ひしまてやたのみなりけん

柴の戸の昔しもなとか待すみぬ問とはるへき道にたえぬに

四百五十一番　雑一

左勝　女房

昔人の心の種もかはらねは今はむかしの和歌のうらまつ

右　中納言光資

今はまた愛も吉野の鶴島ふるきにかへる道やとはまし

昔にや心の種も及ふらん今はよし野の人のことの葉

四百五十二番

左勝　無品法親王

をこたらぬ暁起の身になれて鳥の初音はまつとしもなし

右　前中納言具氏

見渡せは松に塩風吹たてゝ波のはなちるいそのまつはら

塩風の松に吹はやめもあはてあかつき起の數つもるらん

四百五十三番

左　辨内侍

長きよもさすかに今は更ぬらんほのかにのこる閨のともし火

右勝　春宮權大夫師繼

身をてらす影とそ頼む芦垣のひまもるよその窓のともし火

長きよに閨の燈消ぬともよその光や猶てらさまし

四百五十四番

左　前關白

住なれし都へたつる旅衣たちかへるへき月日しらはや

右勝　源頼武朝臣

いにしへの乙女のかさし今そみる玉ぬきちらすみよしのゝ里

旅衣月日重ねてみよし野の瀧の白玉數まさるらし

四百五十五番

左勝　春宮大夫顯藏

仕とて起なれにける暁を何ゆへ鳥のしりてなくらん

右　源成直

行暮ぬ今夜はさねんしはつ山ならの下柴嵐ふくとも

楢の葉を片敷山の旅ねにも仕へしまゝの暁やまつ

四百五十六番

左持　前大納言光有

殘る夜も明かた近し庭の鳥八聲の後のそらにしられて

右　源資氏

山里はいつくも旅とおもふこそ都にいそくこゝろなりけれ

山里に都を急く心をや八こゑの鳥も空にしるらん

四百五十七番

左勝　權大納言公長

嶺の嵐谷の清水も聞なれぬ昔につかふる山路かさねて

右　太宰帥親王

をけはにやゆふ付鳥のこゑ〳〵に明ぬと告る逢さかの山

峯の嵐谷の清水も關の戸の明るはしるき逢坂の山

四百五十八番

左　　　　　　左衛門督長親

仕へても入ける物をよしの山そむかはとのみ何おもひけん

右勝　　　　　　關白

呉竹の末々までもあふかれていひしにかなふ御代のかしこさ

　呉竹の末々までも殘りなく仰は高き御よし野の山

四百五十九番

左持　　　　　　權中納言實興

をのつから鳥の音きかて明す夜も身は習はしつね覺をそする

右　　　　　　權大納言實爲

相坂のゆふつけ鳥はいつよりか明を告て鳴はしめけん

　關守も身をならはしつね曉して鳥の音またぬ相坂の山

四百六十番

左勝　　　　　　藤原雅高朝臣

仕へへき道にいそかは誰もかく明つけ鳥の音をやまつらん

右　　　　　　前大僧正頼意

君か代をいのるかひあれ結ふ手の曉起のやまの井の水

　仕へへき人や待らん君か代のあけつけ鳥もすてに鳴也

四百六十一番

左持　　　　　　藤原雅高朝臣

さひしさは同し太山の松風を聞なれなはと何おもひけん

右　　　　　　中納言光資

幾夜我かた敷袖のみなと舟浮ねの夢に都みつらん

　湊舟浮ねの波もさひしさは同しみ山の松風のこゑ

四百六十二番

左　　　　　　權中納言實興

いとふなと誰をしへけんとても猶身をおく山にすまぬ心は

右勝　　　　　　前大僧正頼意

夕汐や磯山かけてみちぬらん浪間に見ゆる松のむら立

　奥山にすまぬも人の心にてしほたれまさる松のむら立

四百六十三番

左持　　　　　　左衛門督長親

都出てきつゝなれ行旅衣なとやあまりにぬるゝ袖哉

右　　　　　　權大納言實爲

故郷そ猶隔行岩根ふみかさなる山の峯のしら雲

　岩ね踏かさなる山の旅衣さそしほるらん年もへぬれは

四百六十四番

左　　　　　　權大納言公長

故鄕は佛をさへへたてきぬ分つる山のあとのしら雲

右勝　　　　　　關白

君か代のやすきにゐてもくるしきはあやうき民の心なりけり

　分のほる程やくるしき君か代のやすきにゐたる嶺の白雲

四百六十五番

左持　　　　　　前大納言光有

こととはん人は音せて柴の戸をたゝくや峯の嵐なるらん

右　　　　　　太宰帥親王

徒に人は問こて柴の戸の明ぬくれぬと松かせそふく

　峯の嵐松の風にて月日へぬ柴の樞の明ぬくれぬと

四百六十六番

左　　　　　　春宮大夫顯統

都にて音にそ聞しあさなけになれけるものを軒の松風

右勝　　　　　　源資氏

古里の俤うかふ月みれは秋そ旅ねのときとなりける

あさなけになれける松の風の音旅ねの秋やうさは添らん

四百六十七番

左持　前関白

哀さの限りはすみて知ぬれと心をかぬやまのおくかな

右　源成直

風ふけは行かふ人のまねくらん尾花をかこふ野への仮庵

もろ人や心をとめて過ぬらんまねく薄の垣ほわたりを

四百六十八番

左勝　辨内侍

山里の都に替る住居には軒端に峯の雲そかゝれる

右　源頼武朝臣

都にはいかにねし夜か通ひちと草のまくらをさためかねつゝ

山里は軒端に嶺の雲閉てみし都路に夢もかよはす

四百六十九番

左持　無品法親王

いつくをか常のやとりと定めけん旅をはたひと急くなるらん

右　春宮権大夫師兼

かりねする猪名野の小篠風過て夢もあたなる露の手枕

小篠ふく風の宿りのかりの世はいつくもおなし露の手枕

四百七十番

左勝　女房

新千載一　今こそあれ住へき代々の都鳥我ゆく末の事やとはまし

右　前中納言具氏

馴て聞松の嵐やしら雲のかゝるみ山のともとなるらん

白雲のかゝる山にも都鳥有やなしやと昔をそとふ

四百七十一番

左　女房

しつかなる心は猶そなかりける世を思ふ身の山の住居に

右勝　春宮権大夫師兼

和歌の浦やまよふ波路に年もへぬ哀はかけよ玉津嶋姫

いとゝ敷浮世を思ふことわさの猶数そふる和歌の浦波

四百七十二番

左持　無品法親王

新葉雑中　御芳野の山の奥には入ぬれと猶世をいのる名をはのかれす

右　源頼武朝臣

岩根ふみあやうき峯をこえ過てやすきにかへる道はまよはし

岩根ふみ危き峯のすゝ分て身のためならぬ世を祈るらし

四百七十三番

左持　辨内侍

旅衣あさたつ人をまちつれてともにや越んさやの中山

右　源成直

秋はつる小田のなる子は引たえてあせもる水の音のみそする

こえかぬるさやの中山うき物を又秋はつる小田のあせ道

四百七十四番

左持　前関白

我忍ふ心は今もかはらねとなれしむかしの人そすくなき

右　源資氏

難波かたうら浪かすむ夕暮に行とも見えぬあまの釣舟

我忍ふ昔はそれと難波潟うら波遠くかすむ夕暮

四百七十五番

左　春宮大夫顕親

古郷にゆきかふ夢を吹あらしあなかきまたき覚もこそすれ

右勝　太宰帥親王
けふも又しらぬ野原に行暮てあたにも結ふ草まくら哉
行暮し野原に結ふ草まくらあなかま風いとはれそする

四百七十六番
左　前大納言光有
うかりけりならは貞嘉の露の床草はのまくら野へのかり臥
右勝　闕　白
たらちねの束はしめにし梓弓是さへ家の風となりぬる
梓弓家はしめたる家の風そ崩れの床の草をなひかす

四百七十七番
左勝　權大納言公長
住吉のうらはの波の夕なきにみれはほとなき淡路嶋山
右　權大納言實爲
しはしこそさひしかりしか馴ぬれは吹もいとはぬ軒の松かせ
淡路嶋あはやとみゆる夕なきに松の木のまの風ふかす共

四百七十八番
左持　左衛門督長視
民やすく國治れと臥ておもひ起ていのるもたゝ君のため
右　前大僧正頼意
故郷にたれ植置て窓の竹よゝにかはらぬ友となるらん
植置て窓の竹のふして思ひ起てそいのる君か萬代

四百七十九番
左　權中納言實興
假初のあらましにのみ年もへぬ扱いつまてそひなの住居は
右勝　中納言光賞
住へ來てなにこたらぬ身の名をたにも後にはとめよ關の藤川
假初のあらましならぬ末なれは名さへとめけり關の藤川

四百八十番
左勝　藤原經高朝臣
篠枕偖うき夜半をかさね來て夢も都に遠さかりつゝ
右　前中納言具氏
篠まくら夜半に嵐をかたしきてふしみの里は夢もむすはす
さゝ枕伏見より猶寢とはみやこに通ふ夢路をそきく

四百八十一番　雜四
左　藤原經高朝臣
身のうさも限あれはとなくさめて見ぬ行末をたのむはかなさ
右勝　春宮權大夫師兼
かこ山の峯の眞榊枝しけみ掛し鏡や世をてらすらん
身のうさもよしや歎かしかこ山の峯の正木の陰を頼みて

四百八十二番
左持　權中納言實興
君かため身を忘れすは吉野川さのみうき世の浪を分めや
右　前中納言具氏
あすか川七瀬の淀のいたつらにすくる月日のしからみもかな
君かため身をたに安く忘る也ましても月日のゆくも覺えす

四百八十三番
左勝　左衛門督長視
やはらくる光をそへよ和歌の浦に此たひみかく玉つしま姫
右　中納言光賞
何をかは件にもとめんむねにすむ心の月のひかりならては
和歌の浦に磨く心の玉やこれさらすはすまん胸の月かは

四百八十四番

左　　權大納言公長
何事を忍ふにしもはあらねとも過にしかたそ面影にたつ
右勝　　前大僧正賴意
松の風筧の水の音までもこゝろすみける谷かけの庵
松の風筧の水よこれならぬむかしの庵の面影はなし
四百八十五番
左　　前大納言光有
五十餘りめてこし月のつもるをは老と成ぬる身にしられけり
右勝　　權大納言實爲
數々に物忘れせて忍ふかなさてもかへらぬむかしかたりを
積りける昔語のことゝへは五十めてこし月も數かは
四百八十六番
左　　春宮大夫顯統
昔こそふりゆく身には戀しけれまして老なん年のくれかた
右勝　　關白
春日野の露のめくみの廣前に身を忘れても世を祈るかな
今更にむかしかけめや春日野の露のめくみの事繁き世に
四百八十七番
左持　　前關白
身を歎く涙とともにさすらへていつちよるへの水のうたかた
右　　太宰帥親王
曇りなき御代のしるしと神風や御裳すそ川に澄る月影
神風や寄邊しらすよさすらふる御裳濯川の水のうたかた
四百八十八番
左　　辨内侍
かち杙かひの雫に袖ぬれて波のよる〳〵浮ねをそする
右勝　　源貞氏
住吉のきしかた遠く忍はれて忘るゝ草の名のみなりけり
袖ぬるゝ里のよるへの浮舟も及はぬきしの忘草かな
四百八十九番
左持　　無品法親王
位山今一坂をこえかねて代々に及はぬ身をはつるかな
新葉集中　右　　源成直
和歌の浦の玉を磨ける人なみにもくつはかりをかきや置へき
和かの浦の猶人なみに立ながら代々に及はぬ身と思はめや
四百九十番
左勝　　女房
さらぬたに苗代水の濁る世を心の川にいかゝまかせん
右　　源賴武朝臣
武士の八十宇治川の瀬を早み身をこそたてね浪はたてとも
心ある八十うち川の波なれと苗代水に猶やひかまし
四百九十一番　　雜五
左持　　女房
峯高き龜の尾山の瀧つせのなかれは絶し萬代までに
右　　源成直
神代より絶せぬあまつひつきとてけにくもりなき君は我君
天津日嗣絶せす照す龜の尾の瀧の流の君も我君
四百九十二番
左　　無品法親王
松か枝も千世とそ契る我君のさかゆく末を何にたとへん
右勝　　源貞氏
千早振神のまもりと仰く哉天てらす日の影をみるにも

松かえの千年さかふる梢より天てらす日の影は高しな

四百九十三番

左持　辨內侍

神風の吹つたへたる君か代にみもすそ川もさそな澄らめ

右　太宰帥親王

吾君の千世の數かもみよし野の山より落る瀧のしら玉

神風のみもすそ川も我君のよし野の瀧もかけはくもらし

四百九十四番

左　前關白

きしかたに又千世添てゆくすゑを君としちきれ住よしの松

右勝　關白

判詞闕

下枝二たひかけにあらたまり松は花さく御代の久しさ

住吉の神めつらしく思はまし松も花さく御代にあひつゝ

四百九十五番

左　春宮大夫顯統

御長田の稻も八束の秋つはのすかたの國はたのしかるへし

右勝　權大納言實爲

住よしの東遊も勅なれはかしこき御代を神そまつらん

秋つはの姿の國にすみよしの神かきなれは勅もかしこし

四百九十六番

左　前大納言光有

我君の豐葦原の中津國治まる時と民そさかゆく

右勝　前大僧正賴意

やはらくる光もしるき春日山くもらぬ御代をさそまもるらし

やはらくる光を君に春日山くもらぬ御代は神のまに〳〵

四百九十七番

左　權大納言公長

五十鈴川絕ぬ流や萬國治る御代のためしなるらん

右勝　中納言光資

千代まても君をさしてそ祈る覽三笠の森の神の宮つこ

治むへき御代のためしと我君をさして三笠の杜の宮つこ

四百九十八番

左勝　左衛門督長親

神の代の三種の寶つたへます我すへらきそ道もたゝしき

右　前中納言具氏

今もかも天てる神のいすゝ川淸きなかれの御代の久しさ

唯たのめ神代たゝしくつたへます三種の寶又上もなし

四百九十九番

左勝　權中納言實興

君守る神路の山を出る日もあまねき御代の光とそ見る

右　春宮權大夫師兼

我君のあふけはいとゝ高てらす天つ日つきそくもる時なき

判詞闕

五百番

左持　藤原經高朝臣

君守る神の宮居も代々ふりてしたつ岩根に苔むしにけり

右　源賴武朝臣

五十鈴河波立かへるみつかきの久しき末そ世々にこえ行

いすゝ川浪立かへる末までも下つ岩根はかはらさらなん

右五百番歌合以百花庵宗固藏本書寫得一本挍

和歌部六十二歌合二十八

内裏九十番御歌合 應永十四年十一月廿七日

題

寒月　浦雪　神祇

作者

左方

御製 後小松

崇賢門院

入道前太政大臣女

爲定卿女

關白從一位藤原朝臣 經嗣公

入道前太政大臣 實冬公

從一位行左大臣藤原朝臣 良嗣公

右大臣正二位藤原朝臣 公行公

征夷大將軍從一位行權大納言兼右近衞大將源朝臣義持

沙彌常空

正二位行權大納言兼左近衞大將藤原朝臣公俊

正二位行權大納言藤原朝臣公宣

正二位行權大納言藤原朝臣實信

正二位行權大納言藤原朝臣忠定

沙彌清寂

正二位行權大納言源朝臣通宣

從二位行權大納言藤原朝臣資藤

從二位行權中納言藤原朝臣宗氏

沙彌常永

參議正三位藤原朝臣隆直

沙彌宗儀

正四位下行左近衞權中將藤原朝臣基親

正五位下行左近衞權少將藤原朝臣雅清

沙彌中證

小比叡別當宣親部成胤

法務前大僧正法印大和尚位道意

前大僧正法印大和尚位尊經

僧正法印大和尚位道尋

僧正法印大和尚位滿濟

二品法親王 [illegible]

右方

准三宮 [illegible]

二品親王 [illegible]

正二位行權大納言藤原朝臣實永

經定卿女
從二位藤原朝臣公敎
沙彌宋雅
内大臣正二位藤原朝臣[illegible]公
參議從三位右近衞權中將藤原朝臣公雄
正三位行權中納言藤原朝臣爲尹
正二位行權大納言兼左衞門督藤原朝臣重光
從二位源朝臣具言
從四位上行右近衞權中將藤原朝臣實秀
參議從二位行侍從兼安藝權守藤原朝臣行俊
從二位行權中納言兼左兵衞督藤原朝臣兼宣
參議從三位藤原朝臣滿親
從四位上行刑部卿藤原朝臣爲盛
權中納言從三位藤原朝臣經豐
藏人頭正四位下行右近衞權中將藤原朝臣宗量
沙彌祐信
權大僧都堯尋
權大僧都慶成
從三位加茂縣主脩久
侍從從五位下藤原朝臣爲員
沙彌釋念
從五位下行左近將監津守國淸
前大僧正法印大和尚位尊辨
正二位行式部大輔菅原朝臣秀長
正四位下行右近衞權中將藤原朝臣公種
正四位下行右大辨藤原朝臣豐光

二品法親王堯仁

講師

讀師

判者

一番　寒月

左勝　御製

霜かれのころさへ月のやとりにて千年のかけそ松にのこれる

右　准后

つかへつゝよはひもたかき雲のうへの月の氷を袖にみるかな

二番

左勝　崇賢門院

さえ渡る影そこほりてみかは水ともにすむ夜の月そくまなき

右　義仁親王

小夜ふかき庭の木のはの霜の上に光をそへて氷る月哉

三番

左勝　入道前太政大臣女

さえわたる影もあまねき月よりや色もひとつの霜はをくらん

右　權大納言實永

ふくる夜の月にのこらぬ雲きえてさてもや影の猶こほるらん

四番

左勝　爲定卿女

やとれ月露よりなれしおも影をさゆる霜よの袖にのこして

右　經定卿女

更行は空にあらしの音さえて雲まの月の影そこほれる

五番

左　　関白

雲井まで氷れる月や河竹の夜はなかはしにさえわたるらむ

右持　　前大納言公敦

今ははや雪をは霜に置かへてあらぬやとりの月の影かな

六番

左持　　入道前太政大臣

ひはらふく外山のひゝきさえくれて月の氷をまつあらしかな

右　　沙彌宗雅

氷るそとみるより空は猶さえて霜にへたてぬ月のかけかな

七番

左持　　左大臣

むら雲をはらひつくせる山風になをさえまさる冬のよの月

右　　内大臣

さえわたる雲ゐの月をみかは水うつれる影や猶こほるらん

八番

左勝　　右大臣

霜さゆる嵐は松に音ふけて月は雲ゐに影こほるなり

右　　右近中將公雅

更行は猶かけさむしあさちふの霜にこほれる冬の夜の月

九番

左勝　　右近大將義持

さゆる夜は氷かさねてみかは水猶すみまさる庭の月かけ

右　　權中納言爲尹

今ははやしきたつ澤のかけもみす氷にむかふ冬のよの月

十番

左　　沙彌常空

をのつからたゝよふ雲もさゆる夜のあらしに晴てすめる月哉

右勝　　權大納言重光

有明のこほれる影をさきたてゝあらしふけ行山のはのそら

十一番

左勝　　左近大將公俊

山のはも霜夜にさゆる松かえのあらしをわけていつる月かけ

右　　前大納言具言

あきらけき君か光を猶そへて雲ゐにさゆるふゆのよの月

十二番

左勝　　權大納言公宣

吹はらふ雲はあらしにとゝまらて空にさえ行冬のよの月

右　　實秀朝臣

あまつ空霜も氷もむすふそと影よりみえてさゆる月かな

十三番

左　　權大納言實信

うちとけてねられぬ夜半の袖の霜むすひそへてや月も宿れる

右勝　　參議行俊

吹風のゐなの笹原夜はふけて置そふ霜にこほる月かけ

十四番

左勝　　權大納言忠定

ふけぬるか猶影さむしをく霜のこゝのかさねの冬のよの月

右　　左兵衛督資宣

さゆる夜はいかなる霜の光にて秋より月のすみまさるらん

十五番

左持　　沙彌清寂

空までも霜をかさねてすむ月の更行まゝに影そこほれる

右　参議満親

みるまゝに夜ふかき空の霜さえて袖にも月の影そこほれる

十六番

左　権大納言通宣

霜さゆるみかきの竹のよとともにかはらぬ月の影そこほれる

右　為盛朝臣

よそにゆく雲の波まて氷けりさゆる霜夜の月のひかりに

十七番

左　権大納言資藤

さゆる夜のほともしられて山端にこほれる雲を出る月かけ

右　権中納言經豐

鐘の音もあらしとともに更行は霜夜の空にこほる月かけ

十八番

左　権中納言宗氏

さゆる夜はあらしの音もたかさこやおのへに氷る月のかけ哉

右　宗豐朝臣

影にたにをくそとみえし霜の色の眞砂にふかき冬のよの月

十九番

左　沙彌常永

くれ竹のよ枝にやとる月も出てあられ吹まく夜半のこからし

右　沙彌祐信

風さゆる雲の衣にかけとめて氷かさぬるふゆのよのつき

二十番

左　参議隆直

久かたの雲ゐにきえてみかは水氷かさぬる千世の月かけ

右　権大僧都堯尋

天津空霜にみちぬる夜はとてや月にさえ行かねの音かな

廿一番

左　沙彌宗像

影こほる月をは袖にしきわひぬとけてねぬよの霜のさむしろ

右　権大僧都慶成

さえわたる月の氷もみかは水なかれひさしき御代てらすらし

廿二番

左　基親朝臣

さゆる夜も更行袖の霜の上に氷かさぬる月のかけかな

右　従三位脩久

あけぬるか霜夜の鐘の聲よりも猶さえまさる月のかけ哉

廿三番

左持　雅清

すみのほる影よりやかてさゆる夜は霜をもまたて月そ氷れる

右　為貞

さむしろやねられぬまゝにみつる哉霜もかさなる庭の月かけ

廿四番

左持　沙彌中鑑

天津空おさまる空（雲歟）の波間より光をそへてこほる月かな

右　沙彌釋念

夏の夜も霜かとみえし玉敷の庭のまさこの冬の月かけ

廿五番

左　小比叡禰宜祝部成胤

時雨つる雲ものこらぬ山のはに月さえのほるみねのまつかせ

右　津守國清

ふけ行はあらしも霜もさゆる夜に氷て月のかけそさやけき

廿六番　左　前大僧正道意
久かたの雲には月の氷る夜も雲の波たつかせのをとかな
右　前大僧正慈辯

右。　豐光朝臣
うき雲ははらひつくして山風の更行まゝに月やさゆらむ
三十番
左(持)　二品法親王(尊助)
風さえてはれ行ほとのうき雲にこほりさためぬ月のかけかな
右　堯仁法親王
久方の空もひとつにすみのほる御はしの月の影のさむけき
三十一番　浦雪
左(持)　御製
雪てふる我名もかけよ和歌の浦の玉もの雪の跡の白波
右　准后
きゝしより名もむつましく思ふなり足利の浦につもる白雪
三十二番
左(勝)　崇賢門院
みわたせは波もひとつに白妙の雪にこきゆく浦のつりふね
右　義仁親王
浦かせも吹しつまりぬふる雪のつもりの浦の明ほのゝ空
三十三番
左(勝)　入道前太政大臣女
しら波の關吹こゆるをとはして雪をそをくるすまの浦かせ
右　權大納言實永
ふりにけりみほの松原それなから浦波しらむ雪の朝あけ
三十四番
左(持)　爲定卿女
和歌の浦やくち木の松に降雪のつもれる年も今そかひある
右　經定卿女
波かゝるしつえはかりは嵐晴て松につもりの浦のしら雪
三十五番
左　關白
あゆの風吹こしの海もなきてけり雪にこきいつるなこの浦舟
右(勝)　前大納言公敦
けさはなをきのふのうへに降そへて名さへつもりの浦の白雪
三十六番
左(勝)　入道前太政大臣
住吉のうら地明ゆく波まより雪にかくれぬあはちしまやま
右　沙彌宋雅
なるみかた浦風とをし吹しきてしほひにつもる雪の明ほの
三十七番
左　左大臣
十かへりの花とみよとや和歌の浦の松の梢にふれるしら雪
右(勝)　内大臣
あけてみは猶やつもらむ玉くしけふたみの浦のよはのしら雪
三十八番
左　右大臣
和歌の浦の道柴へゆく御代にありて雪分そむる跡やのこらん
右　右近中將公雅
吹風もをとたてぬまてよさの海の松にそつもる雪の明ほの

三十九番
左持
もしほくむ浦のとまやも埋れて雪をそわくるあまのかよひち　右近大將義持
右
日影にも猶かゝやきて山あひのをみのうらはにはるゝしら雪　權中納言爲尹

四十番
左持
風さむみ末こす波とみしほとに雪そつもりの浦のまつ原　沙彌常空
右
夕日さすいその松原はれそめて雪しつかなる浦風そふく　權大納言重光

四十一番
左勝
吹よはるほともしられて降雪のやかてつもりのうらの松かせ　左近大將公俊
右
志賀の浦さゝ波よするみきはとやふりつむ雪もした氷るらん　前大納言具言

四十二番
左勝
浦風になみもかゝらてふる雪に梢そなひくみほの松はら　權大納言公宣
右
木末にはつもりもあへす松風のふけゐの浦の雪の明かた　實秀朝臣

四十三番
左持
よるとみし木のまの波もうつもれぬうらはの松の雪の明ほの　權大納言實信
右
難波かた芦邊をしなみふる雪のすゝゐに積る浦のしら波　參議行俊

四十四番
左持
降つもる雪のひかりの明かた(之闕)□しはしはくれぬうらの遠方　權大納言忠定
右
難波人たくやあし火の煙さへうつもれぬへくふれるしら雪　左兵衛督兼宣

四十五番
左(判欠)
あま人のしほくむたこのうら風に袖にも雪はなをつもりけり　沙彌清寂
右
浦ちかくなれて汐くむかよひちも雪にやたとるすまのあま人　參議滿親

四十六番
左
住よしの浦よりをちはかつ晴て雪にそむかふあはちしまやま　權大納言通宣
右勝
浦遠きしほのひかたもしら波の又よするかとつもるしらゆき　爲盛朝臣

四十七番
左勝
なみ風もおさまる時とふりつみて雪そたかしのうらの松原　權大納言資藤
右
あま人の衣ほすまもしら雪のつもれはかゝる袖のうらなみ　權中納言經豐

四十八番
左勝
かきくらしふるとはみれとうら風のつもりもあへぬ波の白雪　權中納言宗氏
右
夜もすからしかの浦波音たてゝあくる渚につもるしら雪　宗量朝臣

四十九番
左勝
沙彌常永

浦近くふりくるほとをまつしまやをしまは雪のかつらつむ也

右　　沙彌蓮信

あけわたるよさの浦波ほの〴〵と雪よりしらむ天のはしたて

五十番

左　　参議隆直

みくまのゝ浦にふれとも濱夕のいくへつもれるほともしら雪

右勝　　權大僧都堯尋

園の戸は雪よりあけて須磨の浦や猶雪ふかしあはちしまやま

五十一番

左　　沙彌宗傳

難波かたことうらよりも蘆ふきのこやにはふかくつもる白雪

右勝　　權大僧都慶成

白雪のふるかひありて和歌の浦の松にや千世のあとを殘さん

五十二番

左　　基祐朝臣

明わたるよさのうら風吹しきて雪になり行天のはしたて

右勝　　從二位隆久

しきたへのとこの浦風しつまりてよのまは積る雪のあさあけ

五十三番

左持　　業清

きよみかたしほのみちひもみえわかて雪と波とに浦風そ吹く

右　　隆員

和田のはら八十嶋かけてふる雪にさらにかきりも波の上かな

五十四番

左勝　　沙彌中鑑

さゝ波や釣するあまの袖までも雪にそかへるしかのうらかせ

右　　沙彌禪念

ふる雪のつもれはいとゝ浦風のをともおさまるみほの松原

五十五番

左　　小比叡禰宜祝部成胤

うちよするおきつしら波をとさえて雪になるみの浦風そふく

右　　津守國清

ふりつもるみきはの雪を吹たてゝ波もたかしの濱の夕かせ

五十六番

左持　　前大僧正道意

すみよしの浦ふく風もしつかにて猶まつかえにつもるしら雪

右　　前大僧正慶辨

あとつけてまたふみなれぬ敷嶋や和歌のうらはの雪をみる哉

五十七番

左勝　　前大僧正實經

ふりはるゝひかたの雪をふきたてゝまたかき曇るおきつ潮風

右　　式部大輔秀長

松にふくしほ風までもうつもれて雪にのこるやみほのうら波

五十八番

左持　　僧正道尊

よさの海やうら風わたるはしたての雪もたえ〴〵みゆる松原

右　　公種朝臣

浦ちかくこきくる舟の笘しろくなみにもかけてみ雪ふるらし

五十九番

左勝　　僧正滿濟

松は猶さたかにみえて波風もおさまる浦の雪の明ほの

右　　豊光朝臣

ふる雪の積りもあへす難波江の芦のかれ葉にかゝる浦かせ

六十番

左勝　永助法親王

和田のはら雪にへたてし浦々もさたかにみゆる雪の明ほの

右　尭仁法親王

をしなへていつくの浦もかはかりや風しつかなる雪の明ほの

六十一番　神祇

左持　御製

芦牙とみえしかたちをはしめにてくにつ社の神のかしこさ

右　准后

今は身のとしも五十鈴の川波を千たひ百たひわたらへの宮

六十二番

左持　崇賢門院

君そすむかけをはうつすいはし水幾代のかすを数へかさねて

右　義仁親王

いはし水ゆく末遠き君か代を神もあらたにさそまもるらん

六十三番

左勝　入道前左大臣女

春日山ときはの松のかけにゐて猶すへらきの千年いのらん

右　権大納言實永

君守る千代のためしといはし水なかれもきよみ神やすむらん

六十四番

左勝　為宗卿女

我君のあふくに神も老松の千年の友と猶やまもらむ

右　経宗卿女

行末を思ふもひさしあとたれていく代へぬらんすみよしの松

六十五番

左　関白

六かへりのもゝ年あまりみ笠山あとたれし世のまもる此御代

右勝　前大納言公敦

かすかやま六十の老の坂こえぬ神と君とのめくみある代に

六十六番

左　入道前太政大臣

男山ちとせの坂もこえぬへし君かめくみの道にまかせて

右勝　沙彌宋雅

いく千代か神ちの山のうちにみて外にあらはれ君まもるらん

六十七番

左　左大臣

八しまもる神の宮ゐをこゝのへの浦にいつより祝ひそめけん

右勝　内大臣

たてかふる春日の神の宮柱千たひやちたひ君そみるへき

六十八番

左勝　右大臣

石清水たえぬなかれをくむ君の千代もすむへき影やみゆらん

右　右近中将公雅

天の下くもらぬ御代とみかさ山さしてや君を猶まもるらむ

六十九番

左持　右近大将義持

千代ふへき神のちかひやすみよしの松をためしのしき嶋の道

右　権中納言為尹

松たにも久しときくを住吉の神は幾代かまもりきぬらん

七十番

左　沙彌常空

やはらくる光もたかし男山さかゆく御代をまそてらすらん

右持　權大納言重光

あめつちの神代もきかすあし原や今ほと國のおさまりしとは

七十一番

左持　左近大將公俊

いはし水神のなかれの末遠くまもるにすめる君か御代哉

右　前大納言具言

男山神のちかひもあらはれてさかゆく御代の末そひさしき

七十二番

左持　權大納言公宣

いはし水そこにふかめておもふ哉君かすむへき千代の久しさ

右　實秀朝臣

八百よろつかけてそすまむ石清水にこりなき代を神に任せて

七十三番

左(判欠)　權大納言實信

あふきみん君に賴みをかけまくもかしこき神の惠みある世に

右　參議行俊

跡たれてまもるも久しいはし水にこりなき世と神やすむらん

七十四番

左持　權大納言忠定

上下の賀茂の社のゆふたすきかけてそいのる千代のゆくすゑ

右　左兵衞督兼宣

石清水すみはしめける代々をへてたくひはあらし君か惠は

七十五番

左持　沙彌清寂

神かきもいま色そへてすみよしの松にや君か千世はみゆらむ

右　參議滿親

神もさそみもすそ川の末とをくたえせぬ御代を猶まもるらん

七十六番

左持　權大納言通宣

代々にこえまもるもしるし石清水君か千年のかけを移して

右　爲盛朝臣

おさまれる御代にそいとゝしられける神は正しき道守るそと

七十七番

左持　權大納言資藤

あめつちのひろき惠を三笠山あまてる神や代をまもるらん

右　權中納言經豐

やはらくる光を神もさしそへてさしてそまもる君かよろつ代

七十八番

左持　權中納言宗氏

石清水きよき流のたえせねは君か千年のかけそすみける

右　宗量朝臣

ちはやふるみかさの森のゆふたすきかけてそたのむ神の惠を

七十九番

左(判闕)　沙彌常永

天津空ひかりをことにあふく哉てる日のみことゝ月よみの神

右　沙彌祐信

かすく／＼の神もまもれは君かへん八百萬代の末そひさしき

八十番

左　參議隆直

神もさそ心よすらんかすかやま今たちかふるにおなみのみや

右勝　　權大僧都光尋

まもるらむ道をも代をもすみよしの宮居におなし玉津島守

八十一番

左　　沙彌宗傑

君か代に今たてかふる宮柱てらすひかりの日のくまの神

右勝　　權大僧都運成

つきせしなわか神垣に朝なゆふな君をも代をもいのる心は

八十二番

左勝　　基親朝臣

君かため幾代か神もすみよしの松のよはひをちきりをくらん

右　　從三位爲久

榊葉に神のうけひくみしめ繩なひくにつけて代をいのる哉

八十三番

左勝　　雅清

千代かけて松に契りを住吉の神やかはらす道まもるらん

右　　爲員

道まもるちかひをきけはわきて猶心にたのむ住吉のかみ

八十四番

左勝　　沙彌中鑑

君か代に千度うつさん神ち山瑞殿のみや宮つくりして

右　　沙彌律念

やはらくる光はおなしちりひちの山となるへき御代の行末

八十五番

左勝　　小比叡禰宜祝部成胤

かす〳〵に君をそいのるさき草の三葉よつはの七の玉かき

右　　津守國清

住吉の神につかふる身にしあれは君をそいのる萬代まてと

八十六番

左持　　前大僧正道意

おさまれる御代の千年をみくまのゝ神にまかせて猶いのる哉

右　　前大僧正應辨

君まもる七の神垣さらに又代々にもこえて猶そさかへん

八十七番

左勝　　前大僧正尊經

いはし水神の誓のそのまゝににこらぬ御代をさそまもるらん

右　　式部大輔秀長

風月のあるしとなれる天神ひかりをそへよやまとこと葉に

八十八番

左持　　僧正道尋

もろ神のまもるしるしと君か代もともにさか行しきしまの道

右　　公種朝臣

よろつとしいのり重ねんちはやふる神てふ神の守る代なれは

八十九番

左持　　僧正滿濟

やはた山神のいかきのみしめ繩なかゝれとのみ代をいのる哉

右　　豐光朝臣

をしを山松の千年を契りつゝ神にそいのる君かゆくすゑ

九十番

左勝　　永助法親王

わきて猶千代とそいのるいはし水なかれ久しき君かめくみは

右　　堯仁法親王

天地のひとかたならす君をまもるほしのくらゐや七の神かき

仙洞歌合寛正二年十一月

題

河落葉　曉千鳥　述懐　忍逢戀　松歷年

作者

宰相典侍　　二條

式部卿[illegible]親王　　按察使公保

右大臣實量　　權大納言宗繼

大宰權帥實[illegible]　　沙彌[illegible]

沙彌常宣　　左衛門督持季

權中納言資任　　權中納言教季

權中納言公綱　　侍從持爲

右衛門督雅親　　參議政賢

前甲斐守[illegible]朝臣　　左兵衛督有俊朝臣

散位[illegible]朝臣　　權右中弁親長朝臣

左近中將爲富朝臣　　左兵衛佐永親朝臣

右近中將[illegible]朝臣　　右近中將[illegible]朝臣

右近中將季[illegible]朝臣　　右近中將實有朝臣

右兵衛督公[illegible]朝臣　　法印堯孝

民部權大輔行秀　　藏人式部丞源政仲

判者

關白[illegible]

飛鳥井中納言入道[illegible]

一番　河落葉

左　　宰相典侍

うちいつる波もえならぬ色なれや木のはしくれし跡の山川

右　　沙彌[illegible]

波のをともひとつになりぬ落葉せしならのを川の木枯のかせ

[illegible]

左右兩首とり／＼におかしく社侍れ。愚意みわつらひ侍ほとに。右の上下の句の初の字。おなしく侍りけり。これはふかき難には侍らねと。歌合の儀としてはかやうの事をこそ嫌ふにも申侍れは。左勝とや申侍るへからん。

[illegible]

左歌。うち出る波もえならぬといひ。この葉しくれしあとのなと侍る。心詞相叶て。首尾相應せり。右のならの小河の波の音は。かけても及かたくや侍らん。尤以左爲勝。

二番

左勝　　二條

もみち葉の錦をしける大ゐ川くたす筏になかやたえなん

右　　按察使公保

このころは木のはしくれて山河のいはまの水は色かはりゆく

みかとのおほんめには錦とみ給ける立田川のもみち。玉しきたひらの宮古の大井河にまちかくみなし侍れは。君も臣も身を合せたる昔を今になすにやと。たのもしくおほえ侍れと。木のはしくれていはまの水の色かはるなと[illegible]たしかにて。ことによろしく聞え侍れは。しはらく持にもとや申侍らん。

左はかのもみちみたれてなかるめりとあるを。大井川下すいかたに中や絶なんと侍るも。みところあるてきこえ

侍るに。右もこの葉しくれていはまの水の色かはる。心宜侍れは。なすらへて可ㇾ爲ㇾ持。

三番

左　　式部卿親王

瀧の音もあめとふりそふ山河にまさらぬ水や木のはなるらん

右勝　　右近大將實量

山かせのこの葉せきいるゝ音は川秋にもみゆる波の色かな

左は何條か。雨と降ても水はまさらしといへる歟をおもひ。右はいせか。せきいれて落す瀧つせにといへる心をとれり。ともに三代集をもとゝせるにとりて。左は本歌の心とおなしやうに侍るにや。またたきの辞もあまりに聞え侍り。秋にもこゆるなみの色なといへるわたり。今すこしまさると申へきにや。

左の歌。宜は侍るを雨とふる木のはに水のまさらぬ心。常にきゝなれたるやうに侍り。右やま風のこの葉せきいるゝといひ。秋にもこゆる波の色なといへるわたり。今すこしまさると申へきにや。

四番

左勝　　權大納言宗織

ふく風も山かけ深くみえてけりもみちによとむ谷川の水

右　　太宰權帥實雅

大井川波にちりしくもみちははさそふあらしの山めくるらし

左の歌。上句。聊心えぬやうに侍れと。もみちによとむなと優に侍るにや。右ことなる難はみえ侍らねとも。さそふあらしの山めくるや。しくれなとの心し侍らん。左かちに侍るへし。

左の。もみちによとむ谷川。右の。波にちりしく紅葉。ともによろしくみえ侍れは。いつれをふかく淺しと。わきまへかたくや侍らん。

五番

左　　沙彌淨空

山本の河せによとむもみちはやくたしもやらぬあけのそほ舟

右勝　　左衛門督持季

からにしき秋みし水のかゝみさへ落葉にくもる冬の山川

左。あけのそほ舟に。もみちをたとへられ侍るすかたは。珍らしくきこえ侍れと。萬葉集なとにもや入侍らん。この心み及侍しやうに覺侍る。玉葉集なとにもや入侍らん。ひかおほえにや。右歌。かの花の鏡のおもかけなとおもひ出られ侍て。優には侍れと。からにしきの五文字。もみちはさる事に侍れと。たゝまくおしきなとやうのことはのよせなくては。なをいかゝとおほゆるやうに侍るにや。

左。もみちの色を。あけのそほ舟にまかへたる心。みし心地し侍り。しからは右珍きふしは侍らねと勝へきにや。

六番

左持　　權中納言資任

散かゝる山の木のはや大ゐ川ゐせきの水も行なやむまで

右　　權中納言教季

山かせやしからみとめぬ早瀬河つもりもあへすゆく木のは哉

右歌。はやせ川のもみち風のしからみかけかねたる心にやとは。をしはかられ侍れと。しからみとめぬと侍ることはつかひ。もみちの外に別にしからみとて。あるやうにも聞え侍らん。左は。やすらかにいひくたされ侍り。勝れ

るにや侍らん。

左はゆきなやむ水のあさからぬ木のはにこゝろをとゝめ。右は山かせのしからみかけぬもみちの積りもあへぬ色をおもへり。其心ことなりとはいへとも。歌の科おなしほとにや。

七番

左持　権中納言公綱

ちりかゝる色は錦の名とり川やなせの波もそむるもみち葉

右　侍従持為

なかれあふせゝのもみちはせきとめて昔にかへる谷の埋れ木

左歌。水海に秋の山へうつしては。はたはりひろき錦とそみると侍れは。水をにしきにたちなされ侍る心詞。おかしくはきこえ侍るを。色はにしきのとはへる色の字。猶いつれとわかれぬさまに侍にや。右歌は。昔にかへるなと侍るは。この埋木むかしのもみちにや。疑ふ詞をも残され侍らぬこそ。なにをしるしと聊心もとなきやうには侍れ。いかさま二首の躰等同に侍り。持にこそ侍らめ。

左右ともに心あるさまに侍るを。むかしにかへる谷のうもれ木。いま少まさると申へきにや。

八番

左　右衛門督雅親

大ゐ川水底にみし影たえてあらしにうかふせゝのもみち葉

右　参議政賢

立田川散しもみちの梢のみうきてなかれぬ山かせそふく

右歌。もみちをはとしをきて。梢木の梢を賞せられ侍る心。おほつかなく聞侍り。又うきてなかれぬも。今さらことあたらしくや聞え侍らん。左の歌。第二の句さゝへて聞え侍れと。心すかた優に侍るにや。

左。底なるかけはたえて。せゝにうかふもみちの色。見所ありて聞え侍るに。右又。梢のみうきてなかれぬと侍る。いつれもすてかたき心なるを。散しくもみちといひて。のこるこすゑのみうきてなかれぬといはんことは。冬ふかくなりてもあるへきか。落葉とあらん題には。祇今散たる所をみる心あらまほしく侍る也。然らは今すこしたしかなるにつきて。左可レ勝にや。

九番

左　前甲斐守明茂朝臣

山川や波にかたよるあし鴨の羽色もそめてちるもみち哉

右勝　左兵衛督有俊朝臣

みかの原山かせ吹はいつみ河もみちそ色にわきてなかるゝ

左歌。萬葉には。ゝそちるいはまにかつくかも鳥はをのか青羽ももみちしにけり。同心にや侍らん。右。もみちそ色になと。おかしからさるにあらすや。可レ爲レ勝。

右。わきてなかるゝ泉河と云歌をおもひて。もみちそ色になといへる。いとよろしく侍めり。左。波にかたよるあしかものと侍るは。あしくもきこえぬを。萬葉の詞には侍れとも。羽色もそめてといへるつゝき。不レ被二庶幾一侍れは。右の勝へきにこそ。

十番

左勝　散位伊忠朝臣

なこりさへあらしの末も山川にさそふ水ありとちるもみち哉

右　権右中弁親長朝臣

ちりしけは色も朽木の杣川になかれておしきせゝのもみちは

左なこりさへあらしといひて。下にさそふ水ありと侍る。同心の躰まては侍れと。聞きゝにくゝや。右也。朽木となりはてたる落葉おしみとめても。そのかひなくや侍らん。

左右ともによろしく侍るを。右の末の句。いますこしよはく聞え侍にや。

十一番

左勝　左近中将為富朝臣

大ゐ川山はあらはに木枯のさそふゆくゑそ波にせかるゝ

右　左兵衛佐永親朝臣

ちりしきておち葉によとむ山川の水をもさそふあらし吹なり

山はあらはに木からしのさそふなと侍れは。まかふかたなくは聞え侍れと。歌合なとには。たしかならぬとかや。のかれかたく侍らん。右ちりしけはとありて。又おちはと侍る。いかゝ。[illegible]の詞にもや侍らん。大方歌のやうは。いつれと申かたくや。

右。水をもさそふといへるや。心えかたく侍らん。左まさると申へし。

十二番

左持　右近中将経秀朝臣

波のをる錦とそみる立田河水もちしほのせゝのもみちは

右持　右近中将房[illegible]朝臣

山かけにうかふちしほや水無瀬河袖つく色にまかふもみち葉

左右のちしほ。浅深わかれかたく侍り。左はあまり麁にすかりて侍にや。袖つく色にまかふなとは。少心あるさまにきこえ侍り。勝へきにや。

左右のちしほ。いつれともわきかたく侍にや。

十三番

左持　左近中将季保朝臣

埋もれて波さへたゝぬからにしき秋のかたみの大井川かな

右持　右近中将實有朝臣

ちりかゝるもみちの色にをりはへて波のあやさへ染川の水

左歌。波さへたゝぬは。秋のかたみをたゝぬ也けりといへる本歌の心とは聞え侍るを。題のもみちや不足に侍らん。又終句も。よはく聞え侍り。右歌。大ゐ川立田なとをさしをきて。染きそめ川まこたとりゆきけんも。あやしくや侍らん。大方ことなり勝負もみえ侍らぬにこそ。

右。波さへたゝぬからにしき秋のかたみなと侍れは。もみちのことにこそとは。をしはかられ侍るを。末の句。猶不[illegible]二無幾一にや。よりて右の勝とす。

十四番

左負　右近少将公澄朝臣

山河や木のは吹しく風なれは色の千種に波もたちけり

右勝　法印尭孝

にし河やふかきみゆきの跡にもみちもうかふ水のしらなみ

右歌。なにかしのおとゝの。いま一たひとをしへられけん亭子院の昔を思へるにや。いと珍しく聞え侍れと。跡にうかふなと。みぬ世のことをも申侍るへきにや。大井の逍遥なとの事につきては。いさゝか便も侍らんかしとそおほえ侍る。左歌。色の千種に波もたちけりなと。もみちの色も今一しほそめまして侍るや。

西川の御幸。世にふりたることなれと。歌のさま左にはま
さるへくや。

十五番

左　民部[illegible]大輔行秀

秋の色はさそふあらしにいぬかみやとこの山河紅葉にたえて

右　藏人式部丞源政仲

橋姫のまつ夜なからの袖かけてもみちふきいるゝ宇治の河風

左。とこの山[illegible]にいぬかみや。詞のつゝき優に侍り。右もつ
よなからの袖かけて。又妖艶に侍れは勝劣を決せすや侍
らん。

左右いつれも心あるさまにみえ侍れは。可ν爲ν持歟。

十六番　曉千鳥

左　宰相典侍

むれてたつまさこの千鳥かけみえて有明さむし吹上のはま

右　式部卿親王

霜さゆる沖のしらすに立千鳥かけまて晴ぬ有明の月

兩首ノ千鳥。左は濱の眞砂の月にかけを弄し。右は沖洲
の霜にあとをのこせり。寒曉の景氣如ν在ν眼前ノ。是非已迷
優劣難ν辨。

眞砂のちとりかけみえてといひ。沖のしらすにたつ千鳥。
また有明さむし。有明の月。ともに佛堂にうかひて。まこ
とに當持れは優劣わきまへかたく侍り

十七番

左持　二條

さよ千鳥雲に聲して有明のかたふくかたにとをさかりゆく

右　右近衛大將實量

あくるまてなれぬる月や友千鳥かたふくかたに浦つたひして

かたふく方にとをさかりゆく。かたふく方に浦つたひし
て。姿かはれる所侍らぬにや。

左右ともに。姿詞いひしりて。おかしくは侍るを。さよ千鳥
うらつたひゆく波の上にかたふく月もとをさかりぬると
いふ歌に。心詞相似侍るにや。

十八番

左勝　按察使公保

難波かた浦風さむき有明の月も入江に千鳥なくなり

右　權中納言資任

さらぬたにきけは心もすまの浦の有明の月に千鳥しはなく

此兩首。暗燭一寸なとの歌とや申侍らん。右初句もいひお
ほせぬにや侍らん。又可ν爲ν持。

右、須磨ノ關有明の空に鳴千鳥かたふく月はなれもかな
しやと云歌。聊思ひ出られ侍にや。左。月も入江とは。波に
やとれる心にや。又山のはに入ぬるならはふくろしも有
明の月をまち出つる哉とこそよみて侍るに。有明の曉に
いらん事や。いかゝと覺侍れと。猶左の勝とや申へから
む。

十九番

左　權大納言宗繼

小夜千鳥波をしきつの衣手にうらふれてなく曉のこゑ

右　權中納言公綱

きそひても友やこぬみの濱千鳥うらむる聲の有明のそら

この千鳥。しきつこぬみの名はかはり侍れと。うらふれて
なく恨むる聲のなと。すかたことは。ひとしく侍にや。

左右の歌。いつれもよろしく侍り。持なとにや。

二十番

左[illegible]　太宰權帥實雅

さよ千鳥つままちこふる曉はなみたやみつのはまになくらん

右　沙彌[illegible]

たつとみし夕波千鳥かへるらん有明の月の落しほになく

左歌。みつの濱につままちこふるなと。和歌の心優に聞え侍り。勝へきにや侍らん。

みつの濱にまちこふる心。きゝふりにたるやうには侍れと。萬葉の古躰もすてかたく侍れは。可レ爲レ勝。

二十一番

左勝　侍從持爲

有明の月をかたみの浦千鳥つまもつれなくわかれてやなく

右　右衞門督[illegible]

老の波よるのね覺にこととへはもろき涙の川千鳥かな

左。老のなみよるのねさめ。あはれにもよほし侍るにや。月をかたみの浦千鳥。優さひしくは侍れと。下句なといさゝか左まされるやうに侍れは。勝と申へきにや。

老の浪よるのね覺もろき涙まて。身にしられ侍り。また月を形見のうらちとりつまもつれなくなといへるも。心なきにあらさるにや。仍爲レ持。

二十二番

左[illegible]　沙彌淨空

あま人のね覺とふなりくさかえの入江のちとり友なしにして

右　法印[illegible]

なけ〳〵なけなれそせめては友千鳥ひとりねさめの濱の苫やに

左。萬葉の古風をはおもはれ侍れと。上句なとうちやりさまなるにや。右思ひ入ては侍れと。なれそせめての詞。いさゝか優ならさるにや。持にこそ侍らめ。

左。くさかえの入江にあさるあし田鶴のと云歌をおもひ。入江の千鳥友なしにしてと侍るに。右又。なれそせめてはなといへるも。ともに優にきこえ侍れは。これも可レ爲レ持。

二十三番

左[illegible]　左衞門督持季

友千鳥よそにそわたる浦風のあらき濱への明方の空

右　左兵衞督有俊朝臣

うらかせもおつる潮にさそはれて千とりとわたる曉のそら

左。あらき濱への明かたの空なとは。まさりてきこえ侍るにや。

明かたの空。曉の空。いつれもおなし科にや。

二十四番

左[illegible]　權中納言教季

なく千鳥そなたに友や有明のかたふく沖に遠さかりゆく

右　右近中將經秀朝臣

有明の月にしはなくさよ千鳥あはれやとまる須磨の關守

左歌。末の三句十七番の歌と同樣に侍るにや。かたふくおきもいかゝとおほえ侍る。右に。平頭韻二の病侍る。とかめぬ事も侍れと。これはあまりなるにや侍らん。但左かちまてのことはおほつかなく侍り。

此番は。いつれも宜は侍るを。左は十七番に申出つる歌の心にかよひ。右は十八番にしるしつけ侍りし歌に相似侍る歟。なすらへて持にこそ。

二十五番

左持　　参議政賢

有明のかけもこほれる玉河の波をのこしてたつ千鳥哉

右　　散位伊忠朝臣

うら風に有明の影もこほるなりいつくの波に千鳥なくらん

左右の歌。河瀬のかはれるはかりにて。有明の波にこほれる心ばなと。同やうに侍れは。をしこめて持と申侍て。ことたりぬへく覺侍れと。たま／＼両者のやうなる事をうけたまはるにつけては。つたなき心におもひよる一節を。はゝかりなから申侍るへし。左歌。波をのこしてと侍る。ちとりは必波をつれてたつへき事のやうにきこえ侍り。右のいつくの波も。その所となくきこえ侍にや。磯にもはまにも立居なくとこそ讀ならはし侍るに。是は波をはなれてはなき侍ましきやうに。こと葉つかひの侍るも。いかゝと覺侍る。まめやかに管見の愚案。草跡の儲事に侍へし。

左右。同科に侍るを。浪をのこしてといへるよろしく侍れは。左の勝にや。

二十六番

左勝　　前甲斐守明茂朝臣

月をさへをしまのあまの苫やにや心ありけに千鳥鳴らん

右　　民部権大輔行秀

千鳥なく磯山かつらほの／＼と波もたちくるあけほのゝ雲

左。月をさへの字。いかに心えわくへき事にか。中のにやの字も。さゝへて聞え侍るにや。右の磯山かつら。これもこのましからぬ躰にや侍らん。右ほの／＼といひて。あけほのやいかゝ侍るへからん。然らは左の勝へきにこそ。

二十七番

左持　　左近中将為富朝臣

おもひたに和歌の浦はのさよ千鳥たゝいたつらに鳴ねさめ哉

右　　左近中将實右朝臣

有明の月もおちくる鹽あひにうかふ淡路の千鳥なくなり

左。思ひたにわかの浦は。言葉のつゝきいかにそや聞侍る。右うかふあはちの千鳥も。きゝよからぬにや侍らん。なすらへて持と申へくや。

左。おもひたにわかのうらはと侍る。なにことをおもひわかぬとも。聞えすや侍らん。右も宜は侍を。あはちの千鳥といへるつゝき。かの吹上のちとりなく也といへるにはおとりてや聞ゆらむ。なすらへて爲レ持。

二十八番

左勝　　權右中弁親長朝臣

友千鳥いまやわかれをすかのねのなかゐの浦の明方のこゑ

右　　左近中将季春朝臣

あか月の霜も沖津の濱風に眞砂を寒み立千鳥かな

霜もおきつのといひて。眞砂をさむみなといへる。いひしりてきこえ侍にや。長井の浦のあけかたの聲も。あしからす侍れと。今や分れをなといへるわたり。頗おもひたくや侍らん。右おちや侍らんかし。

右歌。宜は侍るを。曉と云題に。初の句にあか月のといへるや。少おもふへく侍らん。左今や別れをすかのねのなといへる。聊まさると申へくや。

二十九番

左　左兵衛佐永親朝臣

有明の月はさし出のいそかくれこゑのみさえて鳴千鳥哉

右　藏人式部丞源政仲

さえわたるよさの松原明やらて千鳥なくなり天のはしたて

左。聲のみさえてと侍りては。月はさゆましきやうにや聞え侍らん。右さえわたるよさも。夜のさゆる心にや。霜とも風ともなくては。猶ことたらすや侍らん。この番。又おなしほとの事にや。

三十番

左　右近中將房卿朝臣

しかの浦や空に千鳥の聲すみて氷にのこるあり明の月

右　右近少將公澄朝臣

あり明の月もいてその濱風に聲すみのほる千とりなく也

兩首ともに。千鳥の聲すみてはきこえ侍れと。すみのほるなとは。同事のいさゝかかはり侍るへきにや。すなとりのふえ。曉かきぬたの聲なとこそ。すみのほるなと申ならはし侍れ。氷に殘る有明の月なとは。まさるにや侍らん。左右の千鳥まことに何も聲すみたる躰、さひてはきこえ侍るを。友さそふみなとの千鳥聲すみて氷にさゆる明かたの月と云歌のおもかけ。おもひ出られ侍れは。右の勝とや申へからん。

三十一番　遠嶺雪

左　二條〔み賊〕

やよしはし雲なかくしそ峯の雪晴まをふしのおもかけにせん

右　沙彌寂蓮

ふりにけるよゝのむかしもかく山や梢にたかきみねの白ゆき

右かく山たけありて聞え侍れと。遠嶺のこゝろみえ侍らぬにや。左は題の心たしかなるにつきて。勝侍らんかし。

左はれまをふしのおもかけにみんと侍る。心めつらしく侍めり。右かく山のみねの雪。ふりたる事なるへし。仍以レ左爲レ勝。

三十二番

左勝　宰相典侍

まかひにし雲のよそめの花さくらおもひそいつるみねの白雪

右　侍從持爲

けさそしるあけほのいそく横雲は雪にわかれしたかね也けり

右のよこ雲。まことに雪の色も心にわけかたく侍り。左の花櫻のすかた。詞艶に侍れは。可レ勝にや侍らん。

右歌心あるさまには侍るを。左雲のよそめの花さくら。まことに優なるやうにみえ侍れは。勝に侍るへし。

三十三番

左勝　式部卿親王

ふり積る雪も八重たつ雲まよりさゆるよ河のみねの遠方

右勝　法印堯孝

嶺たかみ雪のひかりも月影もおなし雲まに明ほのゝそら

みねの遠かたは。遠方の嶺なと申侍るには。いさゝかかはり侍らんかし。おなし雲まにあけほのゝ空なとは。優に侍れは。右勝へきにや。

左右ともに。宜は侍るを。左、雪も八重たつ雲まよりさゆるよ河のなといへる。詞のよせもさる事ときこえ侍れは。可レ爲レ勝にや。

三十四番

左勝　按察使公保

かつらきやたかまの山をけさみれは雲はよそなる峯の白雪

右　權大納言宗量

雪は今またにみえても葛城の峯にたかまのみねそ明行

兩首ともかつらきの山の峯中の景色。雲外眺望、ことなる勝劣も侍らぬにや。

兩首のたかまの峯の雪。淺深難レ辨侍にや。

三十五番

左勝　右近大將實量

遠方や山たちかくす白雲のたえまに今そみねのはつ雪

右　左衛門督雅親

いく山かふらぬ雪けの雲きえてこし路の嶺に積りそむらん

左歌、心詞難なくきこえ侍り。右歌の終句、いつはかりを積りそむなといふへきにやと、いささか覺束なく侍れと。心すかたはおかしく侍り。又持とや申へからん。

たえまに今そみねのはつ雪といひ。こしちの峯に積りそむらんなと侍る。いつれもあしからす侍れは。左右の新雪。又同科にや。

三十六番

左勝　太宰權帥實雅

見ころは天のかく山雪積りたかねのむすきそれとしもなし

右　權中納言秀任

風はすみなをかきくらしふる雪にへたてはてたる嶺の松かえ

このあまのかく山、又遠き心のみえ侍らぬは、いかにそや。雲ゐにみゆるなとよみたらははし侍れは。かならすあまのかく山とたにいひ出侍りなは。遠望のあるへき事にや。

等貝の翁。いまた證歌をみ侍らぬにつきて。是非にまとひ侍る。右歌は、侍題を盡し侍り。この番しはらく一決せすもや侍らん。

右かきくらしふる雪に嶺の松かえのへたてたる體、さる事には侍れと。遠嶺をとは。とをくふり積たる景氣なり。猶本意成へきと思給へられ侍れは。左のかちにこそ侍らめ。

三十七番

左勝　沙彌淨空

みねたかみのこれる月も遠かたのひかりにたくふ雪の色かな

右　左近中將爲富朝臣

よそめにはつゝく高根をふりわけて隔つる山そ雪にしらるゝ

左歌。をちかたのひかりも。たとらるゝやうに侍り。右つゝくたかねの。分かたくや侍らん。又なすらへて可レ爲レ持。

右、初の五文字。優にしもきこえ侍らす。左ひかりにたくふ雪の色。あしからすみえ侍れは。かちにて侍へし。

三十八番

左持　左衛門督持季

ふるほとは雲のいくへもしらねとも晴てそ嶺の雪の遠方

右　右近中將房[illegible]朝臣

すむさとの梢の冬にあらはれぬほとは雲ゐにみねの白雪

左歌、終句おもひたきにや侍らん。右歌、冬に雲井にのにの字、さしあひては聞え侍らすや。又可レ爲レ持。

左右。同ほとの事なるへし。

三十九番

左

しくれつる夜半もはけしき朝戸出は雪にそむかふ遠方の嶺　権中納言教季

右

かさこしの嶺につれなくみし雲や積れる雪のよそめなるらん　右近少将公隆朝臣

雨首の躰。やうかはりて。おなしほとの事にや。左。夜半もはけしきなといはゝ。あらしとも風ともありぬへくや。右はまさり侍なん。

四十番

左

さたかにはかねてみさりし峯も今あらはれそむる雪の明ほの　権中納言公綱

右

夕日さす嶺もさたかにみえそめて雪にはれ行遠方のくも　左兵衛督有俊朝臣

左歌。さたかにはかねてみさりしと侍る。その故おほつかなく覚侍り。かひかねをさやにもみしかなと侍るも。さやの中山をへたてたるにこそありけれ。右歌。夕日のかけ。少さたかにみえ侍るにや。

左右。又勝劣わきかたく侍り。

四十一番

左

はなならはこえても猶やみよしのゝ里よりをちのみねの白雪　参議政賢

右

遠かたやさえしあらしの跡までもつもれはみゆるみねの白雪　民部権大輔行秀

みよしのゝ里よりをちのみねの白雪。かのふる里はよしのゝ山しちかけれはの本歌の心には。たかひ侍れと。うたはきのみこそよみ侍れは。ことなる難と申かたきにや。右初句の。をちかたやと侍るも。題の心にひかされて。一首の所詮とも覚侍らぬにや。歌の姿は左まさり侍らんかし。

此番。又雨首の嶺のしら雪。等同にや。

四十二番

左

なにはとやあくる朝けに白雲のいこまかたけは雪降にけり　前甲斐守明茂朝臣

右

はれゆけは雪のよそめもあらはれぬたなひく雲のおく深き嶺　権右中弁親長朝臣

右。終句さゝへて聞え侍にや。左。ふるめかしき躰に侍り。

しはらく持とすへし。

いつれもあしからす侍れと。いこまか嶽は。いさゝかまさると申へくや。

四十三番

左

葛城や雲のよそなる明ほのにまかはぬ嶺の雪の白妙　散位伊忠朝臣

右

たえてよも雲はまかはし吹かせのあらちの嶺や雪積るらん　右近中将實右朝臣

左歌。かつらき山の雲めなれ侍り。終句も。いさゝかききにくゝや。右歌。三句そよはく聞え侍れと。思ひ入たるところの侍るにや。勝へきにこそ。

左。雲のよそなるなといへるわたり。あしくも侍らねと。右いさゝか心あるさまなれは勝侍なん。

四十四番

左

けふいくか遠山鳥のをのかねもたえてへたつる峯のしら雪　左兵衛佐永親朝臣

右　　左近中将季保朝臣

いとゝなを雲ゐる嶺の白雪は積りかさなる山とみえつゝ

右歌。雲ゐる峯の初時雨。思ひ出られ侍り。いかゝ。左歌。雪なとには。山鳥のねをたえぬことも侍にや。おほつかなく侍り。いかさまにも秀詞。右にはまさり侍らんかし。

雲ゐる峯と云詞。いさゝかさたあるにや。然らは遠山鳥まさると申へし。

四十五番

左持　　右近中将経秀朝臣

みよしのの峯のしら雪つもらすは春よりさきの花をみましや

右　　蔵人式部丞源政仲

たれすみて軒端の花となかむらんはるけき嶺の雪の梢を

左歌。又遠嶺の心みえ侍らす。上句も古今の歌にいくはくのかはりめも侍ぬにや。右歌。よそたにしるき雪の梢を。木の本にて花とあやまたん事。いかゝよ覚侍り。又定家卿歌。たか里の雲のなかめにくれぬらんやとかる嶺の花のこの本と侍る。かやうの心にて。をしはかり侍れは。たゝ花のうたとこそみえ侍れ。

左右。いつれも雪を花にまかへたる心。聞ふり侍ぬるにや。

四十六番

左持　　忍逢恋　　式部卿親王

かひなしや逢夜は夢とまきるとも浮世語りのうつゝなりせは

右　　右衛門督雅親

猶たとる俤なからわすれしなおほろ月夜のふかきちきりは

左右ともに。源氏物語の心をおもへり。えんにこそ覚侍れ。左歌。初句。かひもあらしなとやうのこゝろにてや。なを始終の心には。かなひ侍らん。右も宜は侍れと。左はなを心ありてきこえ侍るにや。勝とすへし。

左は世かたりに人やつたへんといへる歌の心にかよひ。右はふかき夜のあはれをしるもといひし行ゑをしたへり。いつれも光源氏の心をおもへる。ともに優にきこえ侍れは。持なとにや。

四十七番

左持　　二条

しのふそよ新手枕のむつことを涙なからに露ももらすな

右　　権中納言資任

そよとたに音になたてそ夜ころへて忍ひにかよふ道のさゝ原

左。涙なからに露ももらすな。よろしくきこえ侍り。右。しのひにかよふ道のさゝ原。一ふしなきにあらすや。心姿はおなしからされとも。勝劣はひとしきにや侍らん。

左は露ももらすな。右はをとになたてそなといへる。ともによろしく侍り。

四十八番

左持　　宰相典侍

なかれてのうきなもくるし思ひ川あふせの水の泡と消はや

右　　沙彌浄常

世かたりを思ふにそへて我心ゆるさぬ中にあふはあふかは

左歌。なかれてのうきなもくるしといひて。あふせの水の泡ときえはやと侍る。はしめおはり相叶て。おかしくこそ聞え侍れ。右の終句も。いかゝとおほえ侍り。無下のまけにや侍らむ。

左右ともに宜侍るを。左歌。あふせの水のあはと消はやといへるわたり。おもひ入て聞え侍れは。勝と申へくや。

四十九番

左持　左兵衛督有俊朝臣

あふほとも涙の床のちりならぬ名をはたてしと忍あまりに

右勝　右近中将経秀朝臣

ちらすなよ忍か原のさゝ枕のちうきふしの露のみたれを

両首之詞。得失相交。勝負難レ分。

右。宜侍り。勝へきにこそ。

五十番

左　右近中将実有朝臣

人とはゝあふせをあたにこたへしと我か涙の川おさになる

右勝　民部権大輔行秀

涙川人めつゝみのたか袖もこよひあふせの波なもらしそ

両首之涙川。清濁わかれかたく侍れと。川長になると侍る。きゝよくも侍らぬにや。人めつゝみのたかそても。いかゝと覚侍れと。すこしまさり侍らんかし。

左右之結句。心ゆかす侍り。持なとにや。

五十一番

左　参議成賢

人しれす逢夜の夢の俤に残る契もなをやしのはん

右勝　左兵衛佐永親朝臣

うす氷とけてもつらし池水の鴨のかよひちありとしられは

左。常の事に侍れと。難なく侍り。右いさゝか珍きかたも侍るにや。但二句つらからんなといはまほしくそ覚侍る。なすらへて持とす。

左もあしからすは侍るを。右の鴨の通路。猶心あるさまなれは。まさると申へくや。

五十二番

左勝　散位伊忠朝臣

いかにしてあひみる事をぬるかうちの夢かと計忍はてまし

右　右近中将房継朝臣

忍わひぬ命にむかふ我中の夢の契はまたもむすはて

左歌。後拾遺なとには。うつゝはかりの夢になさはやとこそ申侍れ。年月心の限りつくし侍りて。たまたまもあひみる事の。夢かとはかりたとらん事こそかひなからめ。いかにしてなとこひねかふ計のことは。古人の本意にもそむき侍るへきにや。右歌。命にむかふは。萬葉の詞にて。定家卿も。たひたひ讀侍しにや。但夢の契は人もむすはてなとは。あふてあはぬ戀とこそみえ侍れ。この題には心もとなく聞え侍り。又爲レ持。

右。夢の契は又もむすはてといへる。逢不レ會戀の心にや。

左。珍きふしも侍らねと。勝へきにこそ。

五十三番

左　権中納言教季

えそいはぬ憂も恨もあひみはと思ひしよはのしのふあまりに

右勝　左近中将季春朝臣

相坂の關の清水はあさくともむすひそめつと人にもらすな

右。あふ坂の關の清水。むすひそめつとなと侍る。いとよろしくこそ聞え侍れ。勝とすへし。

左うた心はさにこそときこえ侍れと。末の句なと。今少事たらぬやうに侍にや。右も難なくは侍れと。持なとに

五十四番

左勝　　　　權中納言公綱

とにかくに人めゆるさぬかよひちはこえてもくるし相坂の關

右　　　　權右中辨長輔朝臣

身をさらぬ心の外は逢事をしらせしと世につゝむくるしさ

左。こえてもくるし相坂の關なと。難なくきこえ侍り。勝へきにや。

こえてもくるしといひ。つゝむくるしさと侍る。心はことなれと。歌の科おなしほとゝや申へからん。

五十五番

左勝　　　　右近少將公澄朝臣

しのふるにあはぬ月日を逢夜半はともにかそへてまつ歎は

右　　　　藏人式部丞源政仲

今待さへ物をそおもふ逢事のあるにつけてもおしきうき名に

右。あるにつけてもなとは。たゝ詞にや侍らん。左の中の五文字。おもひたく侍れと。ともにかそへてまつなけくかなといへる。優ならさるにあらす。かち侍らんかし。

五十六番

左勝　　　　侍從持爲

さもあらぬ俤のみや宇治の里まつらん人に夢はかよへと

右　　　　法印堯孝

いつくにか宿りもとらんあやにくにくらふの山のあくる東雲

左勝。心あるさまに侍り。

源氏みさる歌讀は遺恨の事とこそ。俊成卿なとは申侍りしに。この兩首。かの物語の心をとれるにやと。おかしく聞え侍るにつきて。左はうき舟の君の事にや侍らん。にほふ宮のはな心も。今更の名たてかましくや聞え侍らん。右は又ふち壺の中宮の事にや。光君のうき身をさめぬ世かたりも。ためしすくなくこそ覺侍れ。いつれも昔の事をのみ。いひいたされたるはかりにて。我身に引かけたる戀の心とも聞え侍ねは。しはらく持なとにや申なし侍らん。左右の歌。これも源氏物語の心をおもへるにとりて。左の歌のさま。くた〳〵しく侍れと。今少こゝろあるやうに侍にや。勝へきにこそ。

五十七番

左勝　　　　按察使公保

しられすは又もやこえんと計をたのむしのふの山の下道

右　　　　沙彌法然

しられしとくたくは心むらさきのねすりの衣きつゝぬるよは

左は上句おかしく。右は下の句宜聞え侍り。又可レ爲レ持にや。

左は。しのふ山をこゆるはかりにて。逢心いますこしさたかならぬやうには侍れと。歌の様。優には侍るへし。仍爲レ勝。

五十八番

左持　　　　太宰權帥實雅

よひ〳〵に人の心のしるへする我かよひちはせきもりもなし

右持　　　　左近中將爲富朝臣

たつか弓つよき心もなひく夜はきの關守のいをたゆみつゝ

左歌。伊勢物語には。うちもねなゝんとこそ申侍れ。關守のなからむにをきては。さはり所なく出やすく聞え侍と。

題の心には。いたくかなひ侍らぬにや。右の。たつか弓。ふるき歌にも。ゆるす時なくなと申侍れは。もと末たかひて。聞え侍らねと。秀句なと不二庶幾一にや侍らん。あまり秀句にもまとはれ侍れと。左の歌。おほつかなきに付て。勝と申へきにや。

左右の關守。おなしほとの事にや。

五十九番

左勝　右近大將實量

むすひそふる露も湍すなかはしつる枕はかりはよしやしる共

右　左衞門督持季

いかにせん涙もらさぬうき中につゝむかひなき袖のうつりか

左右の歌。おなしほとの事にや。可レ爲レ持。

左むすひそふる露と侍るこそ。なにゝむすひそへたると も聞え侍らね。右も心はさにこそと推はかられ侍れと。猶たしかならぬやうにや。よりて持とすへし。

六十番

左　權大納言宗繼

されかつらくるしきものを人しれす相坂こゆる夜半の關ちは

右　前甲斐守明茂朝臣

相坂の關はへたてぬこひちにも人めもるこそくるしかりけれ

ともに相坂の關をよまれ侍るにつきて。右は。とゝこほるところなくきこえ侍り。かち侍らむかし。

この番の相坂の關も。勝劣不分明にや。

六十一番　松爲年

左　沙彌祐意

和歌の浦の松に六十の老の波かけてそなれぬ道をしそおもふ

右　法印堯孝

七そちや千たひもこえん白川の波よりたかき松のよはひは

左は和歌のうらの松に六十の算をかそへ。右は白川の波に七十のよはひをかけたり。歌の勝劣は暫をく。かれは身つからの述懷に侍り。これは君をいはへるにやと覺侍るにつきて。浪よりたかきなと侍る。承保のむかしにもたちこえたるゆへも侍にや。よくもかそへられ侍るものかなとおほへ侍れは。左右なく。勝の字をつけはへりぬ。

右。白川の波に。猶たちこえん松のよはひには。左歌のよしあしまても。をよはすや侍らむ。

六十二番

左持　式部卿親王

君か代のゆく末とをくおもふには猶も二葉かすみよしの松

右持　權中納言公綱

神世よりありとしきけはいくとせか今はつもりの浦の松かえ

左。猶も二葉かなと。いひおほせぬにや侍らん。右もめつらしからす侍れと。ことはり聞え侍るにや。いさゝか勝へきにや。

左。君か代のゆく末とをきをおもふあまりの心。めつらかに侍るに。右又させる事は侍らねと。難なくきこえ侍れは。持なとにや。

六十三番

左勝　宰相典侍

昔ならてたれかかそへん松のはのみとりの洞につもる千年も

右　太宰權帥實雅

かけたかみ峯に枝さす谷の松へにけん年そかきりしられぬ

峯に枝さす谷の松。あまりにこたかく聞え侍るにや。松の葉のみとりの洞。いひしりてよろしく侍り。以レ左可レ爲レ勝。

右歌、いひしり一には侍るを、左。松のはのみとりのほらの千年は。君ならてけにたれかはかそへつくすへきならねは。尤以レ左爲レ勝。

六十四番

左持　按察使公保

かけたかきはこやの山の松かえに幾世の霜をむすひかされん

右　右衛門督實觀

なれてみよはこやの山の松のかけ君か千年も花も十かへり

左右ともに。藐姑射の松なり。兩株の陰。いつれをたかしとも申かたく侍るにや。

左右の。はこやの山の松のかけ。いつれもすてかたく侍り。持たるへきにこそ。

六十五番

左持　右近大將實量

ふりにけりいく世の霜の色そとも神やしるらん住吉の松

右　權中納言資任

むかしたにふりぬといひし松かけにさていくとせか住吉の神

すみよしの松。ともに神威をかれるにや。しはらく可レ爲レ持。

ふりにける住吉の松。いくよのといひ。いくとせかといへる。ともによろしく侍り。

六十六番

左持　權大納言宗繼

おひそめし昔や遠き松かけにいはほの苔そみとりかさなる

右持　沙彌淨空

我よはひふりさけみれはみかさ山松もいくよの陰そこたかき

この三笠山。永承の例にまかせて。左右なく勝の字をつけ侍るにやと思給れと。歌合に神威をいのる事は、貞永に沙汰ありし事也とおほえ侍れと。たゝ歌のおもてにまかせて。持と定侍りぬ。

左。松の昔をこけの色にみ侍る心。おかしく聞え侍るを。右も、かのみかさの山にいてし月かもといへる歌をおもひて。わかよはひふりさけみれはなと。宜聞え侍れは。勝と申へし。

六十七番

左勝　左近中將爲富朝臣

ちきりきなみとりの洞に風かよふ松は雲井のよろつよのこゑ

右　左近中將季春朝臣

ふりにけりさゝれ石より契てしいはねの松も苔のむすまて

兩首又無二勝劣一にや。

右歌。いひしりてあしくも侍らねと。みとりのほらのかせ。雲井の松の聲なとには。立ならふへくも侍れは、左の勝にこそ侍らめ。

六十八番

左勝　權中納言教季

十かへりの花かあらはか住吉のうらはの松にかゝるしらなみ

右　左兵衛督有俊朝臣

うこきなき岩にねさして玉松のおひはしめけん世々そ久しき

左右兩首、云云。とり〳〵におかしく侍れと。十かへりの

花かあらぬかなと。一しほありて聞え侍れは。まさるにや
侍らん
左右。いつれも宜侍るを。右いさゝか心あるさまにきこえ
侍るにや。

六十九番

左勝　参議政實

たねまきしその世なからの友なれや昔むす岩も高砂の松

右　右近中将通秀朝臣

心あらは神代のむかしとひてまし年をふりぬるすみよしの松

このあひ生の松。年の久近きためかたく。又歌の高下も。
分かたく侍るにや。
右歌は。ふりにける松ものいはゝとひてましむかしもか
くや住吉の月といへる歌に。心もいくほとかはらす侍る
にや。左歌勝なくは侍へし。よりてかちとす。

七十番

左勝　左衛門督持季

かきりなく年をつもりの浦の松おひそめし世も神やしるらん

右　散位伊忠朝臣

へにけるははや十かへりの霜の松花さく後の萬代のいろ

左歌。年もつもりのとこそ。申ならはし侍れ。をの字いか
か。右の初句も。きゝにくゝや侍らん。
左歌。年もつもりのとあるへくや。右も初の五字きゝよか
らす侍れは。なすらへて持たるへし。

七十一番

左持　前甲斐守明茂朝臣

君守る神路の山の松のかけあふく心も千世はへぬへし

右　右近少将公保朝臣

はこや山千年の坂を松も今君とともにやこえんとすらん

右はこゝもまた不審に侍るにや。左も。勝へきにたらすや。
左あふく心も千世はへぬへしといへるや。ふと心得かた
く侍らん。右は。まさり侍りなん。

七十二番

左勝　左兵衛佐永親朝臣

あふきみる蔭もさかゆく松かえのみとりの洞に幾千代かへん

右　民部権大輔行秀

君か世はちよともなにかさゝれ石のなれる岩ねの松に契りて

左。松かえのみとりの洞。言葉のつゝきいさゝかおほつか
なく侍り。右さゝれ石のなれる岩ねも。きゝよからすや。
又勝劣論するにいとまあらす。
右。千代ともなにかさゝれ石のといへるわたり。つゝきて
も聞えすや侍らん。左も。きゝふふりにたる事なれと、勝
たるへくや。

七十三番

左勝　権右中弁親長朝臣

をしほ山ふりぬる松はいかはかり神世にちかき木末なるらん

右　右近中将隆衡朝臣

松かえの千世をや君に手向草さらに霜をく色も染かへす

左。神代にちかき木末。心にわけかたく侍り。右。君にたむけ
草も、このましからぬにや。たむけの事なと、歌のうたに
よむ心地そし侍るにや。
いつれもあしからす侍り。

七十四番

左勝　　　　　　　　　　　　　　右近中將實有朝臣

まれにさくはこやの山の花の色も君にや契る十かへりの松

右　　　　　　　　　　　　　　藏人式部丞源政仲

としをへて君そきくへき桑行みとりの洞の松かせのこゑ

はこやの山の松花の色。みとりのほらの松の聲。またいつれと申かたくや侍らん。

はこやの山の松の花。みとりの洞の松の聲。何れもおなしほととや申へからむ。

七十五番

左勝　　　　　　　　　　　　　　二　條

年つもる我たくひにもふりにけり碧のほらの松の老木は

右　　　　　　　　　　　　　　侍從持爲

幾世へてきゝれはいはほ二葉より根をさす松のおひ登るらん

右歌。きゝれはいはほ二葉よりねをさす松のなと。心姿一ふし有て。おかしくはきこえ侍れと。左の我たくひにもふりにけりみとりの洞の松の老木はなと侍る。上古の風すなほなる姿とも。かやうのたくひをや申侍らん。芦原の末の世といひなから。此道はまた殘りけりと。感情極なくして勝の由を申侍るなり。

抑歌合は寛平の古。ひたり右のつかひをむすはれて。天暦のおほんとき。かちまけの詞をしるしをかれて後。あし原の代々にかはらぬもてあそひ物として。敷嶋の家々に絶さる事わさとなりにたりといへとも。猶かの歌を判する事は。このさかひにたちいりて。ことの心にくらからす。我もうたかはす人にもゆるされたるともからの。難波江のよしあしをわかち、山の井のふかきあさきをくみはかるになん有ける。然に今北の藤浪の流をうけたりといへとも。家に傳る風にしもあらす。中葉の林のかけに遊ふといへとも。詞にさかすへき花もしらす。況此三とせはかりかほとは。よろつの政あつかり申といふはかりに。紫の袖雲井の月をむかふるゆふへ。玉のをひものみきりの露をしのくあしたは。身を稷契のあひたにやとし。君を堯舜の上にいたさむ事をのみ思つれは。纔に五日のいとまをうといへとも。おさ〳〵ちゝのなさけもわすれはてにき。かゝりけれは柿本のかせいよ〳〵心にさかり。山のへの霞遥に望をへたてたる事をも。しろしめしなから。おほん歌合の判つかふまつるへきおほせことをうけたまはるにつけて。これを堅くのかれ申せは。そのおそれまことにふかし。なましゐにしるしつけ侍れは。この道かへりて淺くおほえ侍り。かた〳〵すゝみしりそくにきはまり。いよ〳〵よしあしもまとはれぬへく侍れと。白川のなかれ千年すむへく。みとりの洞のかせ萬代ふへき道のさかひをよろこひ侍れは。面をかきにするはちをわすれ。時に當れる勅を背さるはかりに。後の日の嘲をしらさるものならし。

よしあしをわくる計りの言の葉も

世々の跡にはえこそおよはね

みとりのほらの松の老木。まことにいくとせつもるへきかきりも侍らねは尤以レ左爲レ勝。

群書類從卷第二百八

和歌部六十三　歌合廿九

百番歌合　寶德三年八月十一日

題

雨中萩　秋夕情　松月幽　蘆屋月
暮秋虫　忍涙戀　契待戀　恨絶戀
旅宿夢　名所鶴

作者

左

式部卿宮
前大納言正[illegible]
前大僧正[illegible]
右大臣
權大納言
太宰權帥實[illegible]
沙彌祐雅
權中納言資任
右衞門督雅親
雅康

右

關白
前内大臣[illegible]
内大臣
沙彌淨空
權中納言持爲
權中納言勝光
爲富朝臣
法印僧運
大僧都義觀
法印堯孝

判者

沙彌祐雅

一番　雨中萩

左　右衞門督雅親

風たゆむほとさへさひし秋の雨にしほれてたてる庭の萩原

右　權中納言持爲

庭たつみみとりにすみて雨はらふかけをもうつせ萩のうは風

左歌。秋雨にしほれてたてる。おかしく見えたり。右の歌も心なきには侍らねと。雨はらふ。耳にたちてきこゆ。左いさゝかまさると申へくや。

二番

左　式部卿宮

秋風の音きくよりも萩のはの見るめさひしきゆふくれの雨

右　沙彌淨空

雨にのみなひくと見れは秋かせの吹にしまゝのつゆの下萩

左右ともに心あるさまに見え侍るを。右吹にしまゝのたといへる。よろしきににたり。可ㇾ爲ㇾ勝。

三番

左　右大臣

雨そよく音をはをとゝ萩のはの露ふきあまる庭の秋風

右　法印俊運

夕されは庭のをき原降雨に風もふきあへす露そみたるゝ

左歌、をとをけたゝいへるわたり。あしからすきこえ侍る。露ふきあまな、いかにそ侍る。右はさせる難も侍らねは勝にこそ。

四番

左　前大僧正

風にふし雨にしほるゝ萩のはの露はいかなるひまにをくらむ

右　内大臣

かせの音もさなから露にうつもれて雨にそなひく庭の萩原

左、露はいかなるひまにをくらむとかいへる、よろしきやうにきこえ侍り。右歌も難なくははへれとも。なをひたりにはまけて侍りなむ。

五番

左　權大納言

きゝわひぬはけの風は吹すてゝむら雨さやく庭の萩原

右　關白

風の音のむら雨そよく萩のはもまきれぬ物を秋のおもひは

左右のむら雨さやくといひ。そよくとはへる、ともにおかしく。この萩のかせ勝劣わかれす侍れは持と申へくや。

六番

左　沙彌静業

露と散雫とおちて萩のはにむらさめかゝる秋風そふく

右　前内大臣

吹すさむ風はなかはのそとりにて雨にしほるゝ庭の萩はら

右勝。露雫雨とりあつめたるやうにはへり。右させる難もなけれは勝へきにこそ。

七番

左　太宰權帥資雅

なひきても末こす風の音はなしむら雨おもき露の下萩

右　權中納言勝光

今そしるうれはの雨の夕ま暮風のみならぬ萩のつらさを

左。すゑこすかせのといひ。むらさめおもきなと侍る。優にきこゆ。右も難ははへらねとも。左にはおよひかたくや。

八番

左　前大僧正

露をこそはらふはかりの萩のはに風も吹あへぬ雨の音かな

右　法印尭孝

この夕へ萩のは風のふくなへに雨もふりつゝそよくなるかな

左。雨も降いてゝといひ。右かせも吹あへぬなと。あしからすはへり。左右の萩のかせ。ともにきゝすてかたく侍れは。おなしほととや申へからむ。

九番

左　權中納言資任

むら雨に露はなか〳〵たまらねとみたれそまさる庭の萩原

右　爲富朝臣

東屋の軒の下萩なひく也雨そゝきする露をやとして

左歌、露はなか〳〵たまらねといへる。中々の詞そ。いひおほせてもきこえぬやうにはへる。右も第四句いさゝか耳にたちてきこゆ。頭の字もさたにをよひ侍らぬこともあるやうに侍れは不可申。なすらへて持なとにや。

十番

左　雅康

露とをく軒はの荻のむら雨やはらひもあへぬ風にあらそふ

右　大僧都義觀

むら雨の音をもそよと吹なして露にそなひく荻のうは風

左右ともにことなる難も見え侍られは。またもちにてはへりなむ。

十一番　秋夕情

左　前大僧正義

うきをしる心の外はかこつへきかたこそなけれ秋の夕暮

右　沙彌淨空

立歸り心にとへは身にあまるおもひもむなし秋のゆふへも

左歌。こゝろのほかにかこつへきかたもなし。右は心にとへは身にあまるおもひをのへ侍る。妖艶にしておかしくきこえ侍り。さのみ持に侍らんもいかゝとおほえ侍れと。なをいつれをまさると申かたくや。

十二番

左　權大納言

なへて世に秋をしもうき時そとはゆふ暮にもやおもひ初けむ

右　權中納言持爲

身にをきは何にやとさむ心をもしはしやすめよ秋のゆふくれ

左の歌の下句。ゆふくれにもやおもひそめけむといへる。誠におもひ入たるやうにきこえ侍り。右の上の句そ。ふと心えかたくおほえ侍る。左の勝と申へくや。

十三番

左　雅康

秋風にたゝよふくもは空に消てゆふへさひしき袖の露けさ

右　[illegible]臣

岩木こそ露はをきけれ心なき袖をしほらぬ秋の夕へも

左歌。ことなる難もきこえす。右心なき袖をもしほる秋の夕へとこそあらまほしく侍るに。題の心も無念なるやうにやきこえ侍るへき。これも左の勝にこそ。

十四番

左　權中納言資任

わきてなを夕へは秋としらぬ身もこゝろつきぬる入相のかね

右　法印僧運

むかしよりうきをならひとおもはすは猶いかならん秋の夕暮

左。心つきぬる入相さもときこえ侍るを。右うきをならひとおもはすはなといへる。歌のさま少しまさるとや申へからむ。

十五番

左　沙彌禰雅

身をくたく恨はたれを主ならむ心つからのあきのゆふくれ

右　内大臣

うき物とおもひしるにもなかむるや心つからのあきの夕くれ

左右の心つからの秋の夕暮。いつれもおなしことなるに。右はなを上の句いひしりて侍れは勝へきにや。

十六番

左　式部卿宮

かはらしなたか夕暮もうしとおもふ心ひとつの秋のあはれは

右　關白

いかにせむおもふゝ物をおもふとて詠むれはまた秋の夕暮

左歌。あしからすきこえ侍を。右おもふも物を思ふなと。おかしく侍れは勝にこそ。

十七番

左　　　太宰權帥實兼

夕されは色のちくさに移り行おもひや秋の露とをく覽

右　　　法印堯孝

なかめつゝ春のものとてあくかれし空にかきらぬ秋の夕暮

左。色のちくさになとおかしく侍るを。右春の物とてなかめくらしつといへる歌をおもへるさま。よろしく見え侍り。持とすへくや。

十八番

左　　　前大僧正[illegible]

しゐてたゝ忘れむとおもふ夕暮に秋といふものや浮を告らむ

右　　　前内大臣

なをさりにおもひなれにし哀さも老そまことの秋の夕暮

左歌。秋といふものやなとあしからすきこゆ。右また老そまことの秋のゆふくれも。身にしられ捨かたく侍れは持にてはへりなむ。

十九番

左　　　右衛門督雅親

うきゆへもたれとゝはまし草のはら露ふく風も秋の夕暮

右　　　大僧都義觀

それとなきくさ木の色も詠わひぬ我身ひとつを秋のゆふ暮

左右兩首。ひたりは狹衣といふ物語に。草の原さへ霜かれてたれにとはましといへる歌をおもひ。右は大江千さとか。我身ひとつの秋にはあらねとゝよめる歌をとりませはへる。ともによろしきににたり。可ㇾ爲ㇾ勝。

二十番

左　　　右大臣

山ふかみ世をいとひても淋しさの秋はのかれし夕くれの空

右　　　權中納言勝光

いつはりもなき夕暮のうさなれは今更我を何かうらみん

左歌。心詞いひしりてよろしくは侍るを。かのいつくもおなし秋の夕暮といひ。この里のみのゆふへとおもはゝといへるうたの心にやかよひ侍らむ。右も偽もなきゆふくれはさることに侍れと。うさなれはといひ何かうらみむなと侍るわたり。よはくきこえ侍れはなすらへて持なとにや。

二十一番　　　松月幽

左　　　沙彌祐雅

をく山のまつのははけにもる月やよそなる星の數にみゆらん

右　　　關白

すむ人は出てやよそにみ山への松のははけの月そすくなき

左右のまつの葉はけの月。いつれもかすかに見え侍るを。右なを心あるさまなれはもつとも勝侍るへし。

二十二番

左　　　雅康

晴やらぬ心つくしの月なれやさたかにもなきまつの木の間に

右　　　前内大臣

吹わくるあらしを松の木の間よりもれても月の影そすくなき

松の木のま。左右いつれもあしからす侍る。左は本歌の心いたくかはらすや侍らん。右あらしを松のといへるわた

り。今少しまさると申へくや。

二十三番

左　権大納言

ふり出て木の間まれなる松かえにもるとしもなき月の影かな

右　内大臣

風わたるは山の松のほの〳〵となひくは月のいつるほとかも

左歌おかしく見え侍り。右もうたのさま優ならさるにはあらねと。なひくは月の出るほとかもといへる。欲出月なとの心にも成ぬへきなりと覺侍る。題のこゝろたしかなるにつきて左の勝と申へし。

二十四番

左　前大僧正義

住人のこゝろもさそな月のもる木の間すくなきまつの下庵

右　権中納言持爲

ひともとの松さへ月にさはる夜の旅寝はいかにたかさこの山

右歌。おもひやる高砂の旅ねはさることなから。松の月にさはるはかりにて。題のこゝろいかゝときこえ侍る。幽の字心を得侍るへきかとおほえ侍るに付て。左の木の間少なき。見る心ちし侍れは勝と可レ申。

二十五番

左　右衛門督雅親

絶々にすむとはかりの松の戸はさこそ木の間の月もとひけれ

右　沙彌浄空

待こひてみつといふへき光かはは ま松かえの木の間もる月

左歌。すむとはかりの心。松の戸あしからす侍るを。さこそといひ。とひけれと侍る。いかにそやきこえ侍る。右見つといふへきひかりかはといひ。はま松かえの木の間もる月といへる。優にきこゆ。尤勝侍るへし。

二十六番

左　右大臣

夜半の月はのほるかけは木の本になか〳〵見ゆる峯の松原

右　法印堯孝

くれにけり松ほのかなる岡野へに風さへほそく月そいさよふ

左。よろしくきこえ侍り。右もあしからす。さるにとりてかせさへほそくといへるそ。源氏もの語に風ほそく吹てなと見し心ちし侍れと。これならすとも とおほえ侍れは左勝にこそ。

二十七番

左　式部卿宮

紅葉せぬ松にやならふ木のまもる月のかつらはてる年もなし

右　大僧都義観

松風ももらぬ木の間にはみすもあらすみもせぬ月の影そほのめく

左右ともにことなる難もきこえ侍らす。持と申へし。

二十八番

左　権中納言資任

松高きはけの月はかすかにて木の間さためぬ秋風そ吹

右　権中納言勝光

もるとしもなきまて月にさはるなり軒はの松やは山しけ山

左右いつれも題の心はたしかにきこえ侍り。さしたることも侍らねは同しほとのことにや。これも持にて侍りなむ。

二十九番

左　　前大僧正
月はたゝ秋のよなから照もせすくもりもはてぬみねの松原
右　　爲富朝臣
更ぬらむ立いてゝみむもるかけもらす月夜なる松の下庵
右のうす月よ不レ被二庶幾一左てりもせすくもりもはてぬ春の夜といへるうたをおもへる心。おかしく侍れは勝と申へし。
三十番
左　　太宰權帥實雅
紅葉せぬ松の木のまをもりかねて月さへ秋の色そすくなき
右　　法印僧運
かけふかみ軒はの松をもりかぬる月に物をもふ秋の山さと
左。月さへ秋の色そすくなきといふ。右月に物おもふ秋の山さとなといへる。ともに優美にして勝劣わきまへかたし。可レ爲レ持。
三十一番　　塩屋月
左　　式部卿宮
秋もなをけふりにかすむおもかけの月には春やちかの塩かま
右　　内大臣
月も今くみてしるらしやくとしも見えぬしほやのあまの心を
左歌。月には春やちかのしほかまといへる優に侍るを右も月もいまくみてしるらしなとすてかたく侍れは。また持にて侍りなむ。
三十二番
左　　沙彌祐寂
心あれやくむとは見えし夕しほのけふりなひかぬ軒の月影
右　　法印尭孝
煙たになをうとまれぬ夜はの月にもしほくむなり秋の浦人
左右のけふり。右はたちまさりて見え侍り。
三十三番
左　　右衛門督雅親
更にけりなたのしほ焼やきすてゝ芦屋のあきに月をみるまて
右　　關白
須磨の蜑しほくむ袖にやとる月はてはけふりのくもる成けり
左。なたのしほ焼やきすてゝ月をおもふ心。右しほくむ袖の月にけふりをいとひ侍るも。とり／＼にきこえ侍り。なをさやかなるにつきて左まさるとや申へからん。
三十四番
左　　前大僧正
けふりさへ空にみちぬる塩かまの浦のとま屋の月そくもれる
右　　權中納言持爲
月そとふ塩やくけふり亂れてもすらぬしのふの蜑のたもとを
左。そらにみちぬるしほかまの浦の月。右すらぬしのふの蜑のたもと。ともにおかしくきこえ侍れはもちたるへし。
三十五番
左　　右大臣
かけをくむあたら夜しほの月をさへ煙にうつむさとのあま人
右　　爲富朝臣
月やつすみるめはつらきけふり共しらてしほ木をはこふ蜑哉
左歌。あたら夜しほ。庶幾せられす侍るに。右また月やつす耳にたちてきこえ侍れは持にこそ侍らめ。
三十六番

左　權大納言
たきすさむもしほの煙たちきえて月も軒はにすまの浦人
右　前内大臣
いつかさてさやけきよはの月はみむ煙をたゝぬなたの鹽やき
左。させることはなけれと歌のすかた優にきこゆ。右けふりをたゝぬなたのしほ屋も。あしからす侍れは。持たるへき歟。
三十七番
左　雅康
もしほやく煙の色やかはるらんかけさやかなる月をへたてゝ
右　法印俊運
心なき名にのみたちて蜑人のしほやく煙月に絶ぬる
左。けふりの色かはり侍らむもいかにそやきこゆ。右させることも侍らねは。また同しほとのことゝや申へからむ。
三十八番
左　太宰權帥實雅
もしほ焼けふりは雲にたち消てとまもる月に浦風そ吹
右　大僧都義観
もしほやく煙をすまの浦人やみるめも月にまとを成らん
左。とまもる月にうらかせそふく。右みるめも月になといへる。ともに難なくきこゆ。持にて侍るへし。
三十九番
左　前大僧正義
月にうき煙をまたやこりすまの蜑のしはさももしほ焼覧
右　權中納言勝光
あやなしななたの鹽やきたてそふる烟にやつす軒の月かけ
左。煙をまたやこりすまの蜑のしはさも。いひしりておかしくきこゆ。右けふりにやつす軒の月も。見所なきには侍らねとも。左なをまさるとや申へからん。
四十番
左　權中納言資任
もしほ焼いせをのあまの蓬屋かた軒もる月のかけもやつるゝ
右　沙彌淨空
煙たて月をはめてぬ蜑人もやくやもしほのからく老ぬる
左歌。いせをのあまのとまやかたなとあしからす聞ゆ。右はしめの五もしのけふりこそ。いさゝか耳に立てきこえ侍れ。左の勝にや。
四十一番　暮秋虫
左　權大納言
絶々にむしの音よはきゆふ日影さひしくくるゝ秋の色哉
右　沙彌淨空
ふりすてゝ秋もわかれとなるみ野になきやはとめぬ鈴虫の聲
左。むしのねよはき夕日影なといへる。いとさひしくきこゆ。右も優ならさるには侍らねと。なを虫の音よはき日影。餘情もあはれにきこえてまさると申へし。
四十二番
左　太宰權帥實雅
秋寒み夕霜まよふ草のはらかるれはかるゝむしのこゑかな
右　陽　白
行秋のたむけの錦をるはたをいもせにいそくむしのこゑかな
左。かるれはかるゝなとあしからすきこえ侍るを。たむけのにしきおかしくきこゆ。勝と申へし。

四十三番
左　右衛門督雅親
うらむなり尾はな波こす野分して秋さへすゑの松虫の聲
右　法印堯孝
聞もうき老のねさめのむしのこゑ殘りすくなし秋の霜よに
左歌。尾はな波こすといひ秋さへすゑの松むし。心たくみなるやうに侍り。右もあはれなるやうにはきこえ侍れと。老のねさめのむしのこゑまかけてもはへれかし。

四十四番
左　前大僧正義
きり／＼す老のまくらの露になけ秋よりのちも猶も殘らむ
右　内大臣
行秋の霜のあさちとむしの音といつれか先にかれむとすらむ
左歌。老のまくらの露に秋より後もなをそのこらむなと。心ふかくいひしりて。老のなみたもおさへかたく侍り。右もかの扇と秋の白露とと侍る歌をおもひてよめる歟。あしからすはきこえ侍るを。ゆく秋のしもよりも。左露ひかりそふ心ちしはへれはかちにこそ。

四十五番
左　右大臣
長月の月は秋なき霜にたに露を殘してむしのなくらむ
右　權中納言持爲
秋はいぬ音をなくむしのふるさととあらしなはてそ野風山風
左。いひをほせてもきこえすや。右はしめのもし不二庶幾一やうに侍り。持と申へくや。

四十六番
左　沙彌祐雅
暮て行秋のともしひ影更てかへなる虫のこゑもすさまし
右　大僧都義觀
きり／＼す秋のすゑはの淺ちふにあらそひかねて聲そかれ行
秋のすゑはのあさちふにあらそひかねてなといへるよろし。かちたるへし。

四十七番
左　式部卿宮
野邊ははや露霜ふりて行秋の名殘りをいかゝ鈴虫のこゑ
右　爲富朝臣
草にさく頃よりなれて行秋の霜のはなにもむしそなく成
左。なこりをいかゝすゝむしといひ。右霜のはなにもなといへる。難なけれは持なと申へくや。

四十八番
左　權中納言資任
秋ふかきまかきの草もうらかれて虫の音よはき庭のあさちふ
右　前内大臣
行秋のわかれを慕ふきり／＼すをのかなく音や先よはるらん
右。させることもきこえす。左下の句優にはへれは勝にこそ。

四十九番
左　雅康
かれにけり秋はいなはの山風もかよふふもとの松むしのこゑ
右　權中納言勝光
暮行とめには見えねとなく虫のよはるに秋そおとろかれぬる
左。秋はいなはといひ。かよふふもとのまつむし。よろしき

ににたり。右さしたることも侍らねは左のかちたるへし。

五十番

左　　前大僧正慈

秋の行野はらの草の露霜に殘れるむしのこゑもかれめや

右　　法印俊運

秋もはやすゑ野の草の霜の下にのこるもかるゝむしのこゑ哉

左歌。花こそちらめといへる歌の心をおもへる。おかしくきこえはへり。右のこるもかるゝなとよろしくは侍れと。左にはをよひかたくや。

五十一番　忍涙戀

左　　太宰權帥實雅

あやにくに人めはかりておちやせむ我身はなれぬ涙なれとも

右　　權中納言持爲

人めにはせきやる水も心してほにあらはるゝ袖のみなとに

左。ひとめはからてと侍るそ。心はめつらしくとりなし侍れとも。いかにそやきこえ侍る。右。人まにはとをける歌の躰。優にしもきこえ侍らねはもちなとと申へくや。

五十二番

左　　沙彌寂蓮

涙川いつを瀬にとかせきとめむ袖にとちむるうき名ならすは

右　　法印俊運

つゝむをも人にみえしとひとかたにをさへもはてぬわか泪哉

右。ひとに見えしといひおさへもはてぬなと。おかしく見え侍り。かちにこそ。

五十三番

左　　權中納言資任

涙こそ袖をたよりにつゝむともうきなを何と忍ひはつへき

右　　法印光孝

色にさへくたくる露を人とはゝはきかる秋のそてとこたへん

左歌。させることもなし。つねに此躰侍るやうにきこゆ。右萩かる袖。いさゝか色そひはへれはかちたるへき歟。

五十四番

左　　式部卿宮

しられしな袖より外の水上もすゑもなみたのたきつ心は

右　　前内大臣

何そともとはれぬ先にはらはなむ袖のなみたの露の白玉

左右の袖のなみた。右は何そとひとのとひし時といへる歌をおもへる心。よろしきやうに侍るを。左にまさるとまては申かたけれは持と申へくや。

五十五番

左　　右衛門督雅視

きゝはては夜の涙にくちぬとも人になつけそつけのをまくら

右　　爲富朝臣

袖のうちは淵となるともたへてみんあらはに流す涙ならすは

左歌。はしめの五もし。ふと心えてもきこえ侍らす。右も心ことはいひしりても侍るを。たへてみんといへるや。いかにそきこえ侍れは持たるへし。

五十六番

左　　前大僧正義

洩してやあらぬ泪にまかへましせく袖をこそあやしともみめ

右　　關白

我袖に淸見か波のせきすへてくるしや人のもらぬ日もなし

左右ともによろしくは侍るを。あらぬなみたと侍るや。いかなる泪にかとおほつかなくきこえ侍り。右、清見かなみたちまされるかたも侍りなむ。

五十七番

左　　雅康

せきあへぬ泪の露をもらさしとしのふ袂のくちやはてなん

右　　内大臣

いさゝらは露とこたへてやとしみむ月にとはるゝ袖の白玉

左右いつれもさせることもなく。さしたる難も見えす。持たるへき歟。

五十八番

左　　権大納言

せくかたにむせふ泪の川瀬とやもれぬ先より聞え[illegible]まし

右　　権中納言勝光

心からおつる泪そつゝめなをあまるたもとは身にせはくとも

左。もれぬさきよりなといへる。よろしきににたり。右も下句のわたりあしからぬさまなるをなを。左のなみたの川。ふかくきこえ侍れは勝と申へし。

五十九番

左　　前大僧正[illegible]

とにかくに袖行水をもらさしと人めつゝみのひまもなきかな

右　　沙彌淨雲

流れ出ん人のうき名を思ふにもせくはわかみのなみた也けり

左。ひとめつゝみ。あしからすきこゆ。右も人の名をおもひて我なみたをせく心今少しまさると申へし。右の勝にこそ。

六十番

左　　右大臣

もらさしな我袖のみの下そめを人は木すゑのしくれ成とも

右　　大僧都義觀

袖に行泪の川のみこもりやせきあへぬ時のわかみなるらん

左。我袖のみといひ人は木すゑのなと侍る。あしからすきこゆ。右の歌も難なくは侍れとも。左にはまけても侍りなむ。

六十一番　契待戀

左　　雅康

ちきりをきし人の心のいかなれは待夜むなしき色をみすらん

右　　〔關白〕

今こんと夕への色もさたまらすひとのこゝろのそらのうき雲

左歌の下句。待そら戀とやきゝなされ侍るへき。右させることは侍らねと。左にはまさると申へくや。

六十二番

左　　前大僧正[illegible]

たゝにこそまつへかりけれ更る夜の契となれは猶そくるしき

右　　権中納言勝光

今こんとたのめぬほとの折々もまたてやはありし夕暮の空

左右ことなることも侍らす。またてやはありしよりも待へかりけれは。まさるとや申へからむ。

六十三番

左　　権中納言資任

人しれす契りしことをたのむ身はたゝ大かたにまつ夕へかは

右　　権中納言持爲

かたしきてくちぬ契をたのむ夜も心のうちにはとふのすかこも

左歌。下句心あるさまに侍り。右も心のうちにはとふのすかこもといへるもよろしく侍るを。左なをまさると申へくや。

六十四番

左　前大僧正義

たのめぬをもしやと待し夜はたにも更行雲はおもひわひてき

右　大僧都義観

言のはにかけて待まもあたなりやたのめし露の契りひとつを

左歌。心こまかにきこえ侍り。右もさせる難なければ持なとにや。

六十五番

左　沙彌萠雅

こむといひまたんといひし言のはを一方ならす頼まさらめや

右　爲富朝臣

操ゐしちきりをく夜もいたつらに更なはいかに賤のをたまき

右。しつのをたまき、めつらしきふしは侍らねと。左にはまさりはへりなむ。

六十六番

左　太宰權帥實雅

とはつはゝ待よひ過るかねことを思ひかへせはぬるゝ□かな

右　沙彌淨雲

頼めつゝこぬよのかすはあまたあれと心にたゆむ夕暮そなき

左歌。をもひかへせはといへる、おかしくきこえ侍り。右もこゝろにたゆむ夕暮そなき。あしからす見え侍れは。いつれまさると申かたし。持なとにや。

六十七番

左　權大納言

たのめしをたのみしまゝに待更て心も鐘もつきはつるまて

右　法印尭孝

ちきりきな時もたかへぬ鐘の音かならすさそへことよひ過さて

左右のかねのこゑ。左は耳にとゝまる所まさるとや申へからむ。

六十八番

左　式部卿宮

われをたにとはせしとてや月影の更行程とちきりをく覽

右　法印常運

契りしは僞そともおもはぬにつらくもふくる夜半の月かな

左。我をたにとはせしとてやといへる心。たくみにきこゆ。

右歌。させることも見え侍らねは左の勝にや。

六十九番

左　右大臣

うきちきりこりすや人は椎柴のしゐておもひにたへぬゆふ暮

右　内大臣

頼めをく今宵さへ又空しくはさていつかはとなをそまたるゝ

左の椎柴そおもひかけぬ心ちし侍れと。こりすまやといひ。しゐてなといはん爲にや。上句も心えわきかたくや。

右もさせることも侍らす。持とや申へからむ。

七十番

左　右衛門督雅親

やかて身そうきになれ行契そゐ待よひ過るかねのこゑ／＼

右　前内大臣

今宵たに待れぬほとにとひこかしたのめし月も影そ更行
　左の待よひ過るかね。右のたのめし月。ともにおかしく侍
　れはまた持にて侍りなむ。

七十一番　恨絶戀

左　前大僧正道

恨みこし言のはさへにくちはてゝ思ひまくすの風もかよはす

右　大僧都義觀

うらみしそつらさに歸る眞葛原はや吹たゆる風のたよりは
　左右の眞葛。左はことのはさへにくちはてゝといひ。右
　はつらさにかへると侍る。ともにあしからす侍れはなを
　持と申へし。

七十二番

左　前大僧正慈

恨みてもあかぬ心はますらおか引やゆつるのかけはなれつゝ

右　爲富朝臣

行ゑなきその俤そたち歸るつらさわするゝこゝろよはりて
　左歌。題の心ふかくとりなせり。右の下句なとあしからす
　侍るを。うらみの心そ。つらきはかりにてはいかゝ侍るへ
　き。左にはまけても侍りなむ。

七十三番

左　式部卿宮

諸ゆへのつらさにたへぬ恨とてかこつをとかに忘れはつらむ

右　法印堯孝

身をうらにたきてし繩も朽にけりいさりたにせす物思ふとて
　右の歌左歌の心おかしくきこえ侍るを。下句そ優にし
　も侍らぬ。左たれゆへのつらさにたへぬといひ。かこつ
　をとかになと侍るわたり。いさゝかまさるとや申へから
　む。

七十四番

左　太宰權帥實雅

へたて行里のしるへのあま衣うらみしほとやちきり成けん

右　前內大臣

煙さへさてもたえなは蜑のすむ里のしるへになにをとはまし
　左右のさとのしるへ。題の心たしかにきこえて。ともに心
　なきにあらされは持と申へし。

七十五番

左　沙彌祐雅

終に今かけはなれけりうきことの末や恨みしまゝのつきはし

右　沙彌淨空

ひとすちにかけはなれぬる葛かつら長き恨になしはてむとや
　右のくすかつらには。まゝのつきはしかけてもおよひか
　たくや。右のかちにこそ。

七十六番

左　右衞門督雅親

恨しをことはるほとの情たになかりしよりそおもひたえぬる

右　權中納言勝光

恨みつるゆへと思はゝさもあらて絕ゆくなかをなをなけく哉
　左。うらみしをことはるほとのなといひ。右歌。ゆへとおも
　はゝさもあらてと侍る。ともにおかしく聞え侍るを。ひた
　りなを心あるさまに侍れは勝とや申へからむ。

七十七番

左　權中納言資任

かこちしをかことになしてとはれねは恨に增るうらみ成けり

右　　　　内大臣

思ひきやおもはぬをこそかこちしかそをたに今は忍へしとは

左右ことなる難も見え侍らぬを。左のかこちし恨なと重疊してきこゆ。右おもはぬを社といへるや。いさゝかまさると申へからむ。

七十八番

左　　　　右大臣

露はさも誰ゆかりとかむすふらん絕てふみ見ぬ中の道芝

右　　　　關白

ゆらの戸の里のしるへもかひやなきかちをたえたる沖つ舟人

左。露はさもと侍る。いかにそやきこゆ。右かちをたえたるなとよろしきやらに侍れは勝へきにこそ。

七十九番

左　　　　權大納言

わか中のかきほの眞葛かれはてゝめに見ぬ風の音つれもなし

右　　　　法印俊運

かひなしや契のはては終にたゝうらみをそへて思ひたえぬる

左右。ともにさせる難も侍らす。左かきほの眞葛かれはててなといへる優にきこえ侍るを。右ことなる難なけれは持なとにや。

八十番

左　　　　雅康

恨こし言のはさへにかきたえてまくすの風のをとつれもなき

右　　　　權中納言持爲

立かへり思ひまさ木のつなひきてみせしは絕る中そくやしき

左歌。めつらしきふしも見え侍らす。右も思ひまさ木のといひ。みせしはたゆるなと。くたけたる様には侍れと。心あるさまにや。かちとすへし。

八十一番　　旅宿夢

左　　　　右大臣

たひ衣かさなる峯にかたしきて雲路にかゝる夢の浮はし

右　　　　前内大臣

故鄕を草のまくらにしのふ哉夢ちはせきのなきをたのみに

左の夢のうきはし。右の夢ちのせき。ともに難なくきこゆ。持なとにや。

八十二番

左　　　　沙彌祐雅

さめてこそかきりしらるれ草枕夢のうちなるむさしの原

右　　　　權中納言持爲

臥わひぬ我ふるさとをおもひ草おはなかもとの夢もつたへよ

左。夢中の旅行はさることなから。作者の心せはくもとりなし侍りけるときこゆ。右わかふるさとを思ひ草なといへる。あしからさるへし。右の勝と申へし。

八十三番

左　　　　太宰權帥實雅

見るほとにあしたゆからぬ草枕行もかへるも夢のたゝちは

右　　　　爲富朝臣

雲にふしらきねになれて海山の夢も幾夜かむすひきぬらん

左歌。あしたゆからぬおかしくきこゆ。右もさせる難は侍らねと。左の勝とや申へからむ。

八十四番

左　權中納言資任

故さとを忘れぬ夢もおとろけと松かねまくら風そはけしき

右　關白

故さとの夢にも父や見えつらんたひねのやまの露のころも手

左右させる難も侍らねは持たるへき歟。

八十五番

左　雅康

行するゑをいそくとすれと草枕あとにそかへる夢のかよひ路

右　沙彌浄空

ぬるかうちに見はてぬものを故郷の俤のみそさむる夜もなき

左。あとにそかへるといひ。右おもかけのみそさむるよもなきと侍る。ともにおかしくきこえ侍り。勝劣わきかたけれはまた持とや申へからむ。

八十六番

左　前大僧正

日數ふるたひにしあれと故さとをひと夜の夢に歸りみし哉

右　法印尭孝

しはつ山しはしかりねの夢ちにも通ふとそ見るたななし小舟

左歌。ことなる難も侍らぬを。右しはつ山。左歌の心もきこえてあしからす侍れは持と申へくや。

八十七番

左　右衛門督雅親

たひねにもあはれやかくる古さとの俤かよふゆめのうきはし

右　内大臣

見る夢をさそひてかへる松かねのまくらのあらし又も吹こせ

左。あはれやかくるといひ。おもかけかよふといへる。よろしきにゝたり。右。下句のわたりも。あしからすきこえ侍を。なを左の夢のうきはしめにかゝるやうに侍れは勝と申へし。

八十八番

左　式部卿宮

うつゝまて名残をとむる故郷の人や旅ねの夢の關守

右　權中納言勝光

夢もたゝなれこしたひの草枕うちぬるまゝになくさめそなき

左右いつれもよろしくは侍を。左なをこゝろあるさまに見え侍れはかちたるへし。

八十九番

左　前大僧正義

故さとを見まくほしさの思寐に行てはきぬる夢のかよひち

右　法印僧運

へたてこし我ふるさともかりねする夢や夜毎に行かへるらむ

行てはきぬるゆめのかよひち。よろしく侍り。

九十番

左　權大納言

いつくにか嵐は夢をさそふらむ草のまくらにつゆをのこして

右　大僧都義觀

夢ちさへかよひそかぬる草まくらとをき日かすを故郷の空

左右ともにことなることきこえす。右そ夢にもとありたく侍る。持と申へし。

九十一番　名所鶴

左　雅康

わかの浦やこたかき松の影しめて千世をそ契るたつのもろ聲

右　　法印亮孝

ふたひの例をまなつる君か代につきてかそへよわかのうら波

左歌。めつらしきふしも侍らねとさせる難も聞えす。右ふたたひの例。この頃耳なれ侍るやうなり。但老の僻覺にや。持と申へからむ。

九十二番

左　　沙彌祐雅

わかの浦や身をおもふにも子を思ふ鶴の心はたれかしるらむ

右　　權中納言勝光

すなほなるすかたを君もわかの浦にさそまな鶴の千代の行末

左歌。判者のつたなき詞に侍り。心のやみはあはれとおもひしる人も侍らめと。直なるすかたをまなふ君の行すゑには。なすらふへくも侍らす。もつとも以レ右爲レ勝。

九十三番

左　　太宰權帥實雅

玉の浦にむれゐるたつのよはひもて千代を十度も君そ數へむ

右　　內大臣

天の下おさむる君に契をけるたみのゝ嶋のたつのよはひも

左。玉のうらに君そかそへむなと。いひしりてよろしく侍り。右もあめの下にたみのゝしま。おかしくきこえ侍れは。持にてはへりなむ。

九十四番

左　　權大納言

わかの浦によりくる波の友鶴もともにあらそふ聲きこゆなり

右　　爲富朝臣

かけたのむ松の言のは昔か代にしけきをあふくわかのうら鶴

左。ともつる友になとよろし。右させることも侍らねと。まつのことのはしけきをあふくなといへる。時にあたりてきこえ侍れは持なと申へくや。

九十五番

左　　前大僧正義

高砂の尾上の鶴よ君ならて千とせの友とたれにちきらむ

右　　前內大臣

年へぬるあしへのたつもかゝる世に逢やうれしきわかの浦波

左右ともにあしからすきこゆ。持と申へし。

九十六番

左　　式部卿宮

あま人やしほひのかたにあさるらむ松にむれぬるわかの浦鶴

右　　權中納言持爲

眞砂にはあとつけ玉のかすひろふ君になつさへわかの浦つる

左右のわかのうら鶴。ともにいひしりては侍るを。右第二三句優にしもきこえ侍らねは下句難なく侍り。なすらへまた持とすへし。

九十七番

左　　權中納言資任

人なみにたちはよれともいつまてか汐ちたとらんわかの浦鶴

右　　大僧都義觀

ちきりあれや君か八千世を松かえに齡あらそふわかのうら鶴

左右ともにさせることもなし。なをおなしほとゝや申へからむ。

九十八番

左　　右衞門督雅親

波たゝぬ世を嬉しとやあしたつも安きたみのゝ嶋にすむらん
　右　法印僧運
すゑとをくなをみまもれわかの浦にむれて數そふ千代の友鶴
　左右の鶴。なみたゝぬよをあふき。すゑ遠きみちをおもふ心とりとりにきこえ侍り。これもなを持にや侍らむ。

九十九番
　左　右大臣
わかの浦や君かよはひも濱鵆の千代をはしめんこゑきこゆ也
　右　沙彌浄雲
友鶴の數はかきりなる玉をそなへ六とせひろひし玉つしま江に
　右歌。六とせひろひし玉津しま江と侍るは。此度の撰集のことにや。歌人として六とせの春秋をおくりむかへし事おもひしれて侍り。左歌もさせる難は侍らねと。右にはをよひかたくや。

百番
　左　前大僧正義
松かねのこけもみとりの龜山に鶴の毛衣千代やかさねむ
　右　關白
君か代のなかきためしに契るらし玉のを山の鶴のよはひは
　左。みとりのかめ山につるの毛衣。みとりけをおもひよせ侍る歟。おかしくきこゆ。右もなかきためしに。玉のを山をとりよせ侍り。いつれもあしからす。持にて侍るへし。
　　判者　沙彌祐雅

寳徳三年八月十一日

右百番歌合百花庵宗固本挍合了

内裏歌合康正元年十二月十七日

題
庭殘菊　水鳥　松雪深　忍久戀　祝言

左方作者
女房 勝三 負一 持一
關白 負三 持一
入道前内大臣 勝一 負一 持三
太宰權帥實雍 勝一 持二 負一
左近權中將雅康 負四 勝一
式部卿親王 勝二 持三
右大臣 勝一 負三
權大納言公綱 勝一 持二 負一
左衛門督雅親 負五
前大僧正滿意 勝三 持二

右方作者
准后 勝一 負一 持一
右大將義政 勝四 持一
權大納言親通
沙彌浄空
前大僧正義蓮
前内大臣 勝二 持一 負一
前大納言資任 持二 負二
權大納言勝光
右兵衛督爲富
權少僧都忠雅

左方勝十四 持十六 負廿首
右方勝廿首 持十六 負十四

讀師
講師
判者　左衛門督雅親朝臣

一番　庭殘菊
　左勝　女房
逢にあひてうつろふ菊や見し秋の色にも増る紫の庭

右　　准后

冬きてもまたうつろはぬ庭の菊もとの雲ゐの秋を戀ふらむ

左歌、あひにあひてうつろふ菊の色、あきにも増る心おかしくきこえ侍り。右の歌、時にあたりておもふ心あるにや。しかれとも左には及かたし、仍以レ左爲レ勝。

二番

左　　關白

紅葉せしかきほの蔦は色かれて猶花ならぬ菊そうつろふ

右　　右近大將義政

なしなへて庭の籬の霜かれに殘るも淋し菊の一本

左、菊のうつろふ外にははななからといへる詞は。なくともありなむとやきこえ侍るへき。右、籬の霜かれに。一本のこれる菊のすかた。誠にまひてきこゆ。勝へきにこそ。

三番

左持　　式部卿親王

見し秋に花はうつろひをく霜の色もまかはぬ庭のしらきく

右　　前内大臣

萩の戸の花は殘らぬ冬かれて移ふ菊やむらさきのには

左、菊のうつろはてゝ霜の色まかはぬ心、おかしく見え侍り。右、萩の戸のはなの色、うつろへる菊に殘るすかた。よろしく侍れと、なを左まさると申へくや。

四番

左　　右大臣

雲の上の明れはまれに殘るてふ星のためしに庭の白菊

右持　　沙彌淨宗

たち過し紅葉かけの庭ふりておらぬかさしに殘るしら菊

左、敏行か、雲のうへにて見るきくはとよめる歌をとりて。殘菊のまれなるを、あけゆくそらのほしにたとへ侍る心。たくみによろしくきこえ侍るに、右、源氏ものかたりのもみちのかの巻に。散すきたるかさしのもみちに菊を折てさしかへらせしこと おもへるにや。歌のさま優にきこえ侍れは爲レ勝。

五番

左持　　前大僧正滿意

庭の面に秋なき時も更にまた移ひかはる霜の白菊

右　　前大僧正義運

逢にあひて雲ゐの庭もむらさきの色を盛に菊そ殘れる

左、秋なき時なと。これも古今集のうたよりいてたることけにや、うつろへるきくの色霜にかはる心。おかしく見ゆ。右させること侍らねと歌のすかたよろし。持なとにや。

六番

左勝　　入道前内大臣

花をさへしくれや染る神無月籬の菊の色そうつろふ

右　　前大納言資任

木葉さへうつみはてたる霜の下に秋を殘せる庭の白菊

左歌しくれ。右の霜。ふりにたる下句なるへし。木のはさへは木の葉をさへの心にや。下句猶無下におもひ入たる所も見えす。はなは木のはにまさり侍らん。

七番

左　　左衛門督雅親

千代ふへき花の所やこゝのへの霜よりのちも匂ふしら菊

右勝　　右兵衛督爲富

菊のみそ色も匂ひも霜の下に秋のまゝなる九重の庭

左。庭の心もたしかならす。歌とのみおもひて。そのさましらぬ作者のつかうまつれるにや。右しもの下に秋を殘せる心もおかしく聞えはへる。爲レ勝。

八番

左持　太宰權帥實雅

霜もなをこのひともとやよきぬらん冬枯しらぬ庭のしら菊

右　權大納言勝光

しら菊の花にこほれる露の間に千とせのかすや庭の眞砂ち

左。この一本やよきぬらむなと。いひしりて聞ゆるに。第四句聊優ならすや。右又第三句ふとしたるやうなり。まさこちの地の字。なくともと見え侍れはなそらへて爲レ持。

九番

左勝　權大納言公綱

霜まよふ淺茅か庭の冬枯に秋こそましれ菊の一もと

右　權大納言視通

白菊のうつろふ庭を冬きてもまた咲花の有かとそ見る

古歌をとるに。句のをき所をかへ。あるひは五七の句をさなからもちゆるも。心を引かへなと。さま〳〵によみならはし侍るにとりて。此右の歌。古今集に。色かはる秋の菊をはひとゝせにふたゝひにほふ花とこそ見れと侍るに。一首の心かはる所もなくや。但自然によみあはせられたるか。いかさまにも無念にそ侍る。左ことなることも侍らねと。勝に侍らんかし。

十番

左　左近權中將雅康朝臣

秋よりも人めそかれぬ薄くこく移ふきくのはなのまかきに

右勝　權少僧都思雅

うつろふもまたふかからぬ冬なれやおなむらさきの庭の白菊

左歌。ひとへに移ふきくをのみ賞して。秋よりもなを人めかれぬよし。めつらしからむとにははへれと。なをいかにそやおほえ侍る。右歌。移ふ色もふかゝらぬなとよろし。勝たるへし。

十一番　水鳥

左　左衛門督雅親

月殘る池の玉藻の床のうへに明行夜はやをしのもろこゑ

右勝　前大僧正義蓮

汀より氷ゆくらし池の面にうきねの鴨のとをさかるこゑ

左歌。めつらしからす。右の歌。小夜ふくるまゝに汀やこほるらむ遠さかりゆく志賀の浦なみとある歌をおもへるにや。流を池になし。浪のをとを氷とりの聲にかへたるはかりにて。本歌の作意にいたくかはらすや侍らん。家隆卿。こほりていつる有明の月なとよめるこそ。あらまほしきやうには侍れ。いかさま左歌はおよひ侍らし。

十二番

左　太宰權帥實雅

風寒み氷のひまを夜床にてうきねさためぬ池の水鳥

右勝　沙彌淨空

氷けり友なきをしの思ひわひさそふ水あらはとたのむ入江に

左歌。させることなく難もきこえ侍らぬにや。右小野の小町か。わひぬれは身をうき草のといへる歌をとれり。第四句なかくきこえ侍れと。俊成卿女。さそふ風あらはとおも

ひけるをはとよめるも。撰集に入られ侍りしにや。歌のさまひたりにはまさり侍る歟。

十三番

左持　入道前內大臣

あし鴨のさはく入江のうす氷とけてねぬ夜のこゑの寒けさ

右　准　后

鷺すらもとれはとられし我君の玉の御池になるゝをし鳥

左。あしかものさはく入江。ふるきことはにて。よろしくきこゆるに。この風情。集の中なとにも見をよふ心ちし侍るはいかゝ。右の鷺。聖代にかゝることの侍りしやらん。めつらしく侍れと。歌のさまをしにとりよせられたる心は。ま優美にあらす。なそらへて持とや申へからん。

十四番

左勝　式部卿親王

思ふとち友寢の床のさゆる夜はたゝまくをしの音にやなく覽

右　權少僧都忠雅

池水につかはぬをしの契まてうすき氷のくたけてやおもふ

左。たゝまくをしの音にやなくらむなと。おかしく侍る。右も難なくきこゆれと。歌のさま猶よろしきにつきて以レ左爲レ勝。

十五番

左　女　房

夜を寒みとけすも物を思ふらむつらゝの床のをしのひとりね

右勝　右近大將義政

霜はらふ鴨の羽かひのいかならん沖邊の水も氷ぬる夜に

左。夜を寒みと侍るより終の句に。いたるまて。秀逸のすかたなるに。續拾遺集に。かたしきのしも夜の袖におもふかなつらゝのとこのをしのひとりねと侍るにや。むかしより撰集かすつもりて。今の世に同類なと。さること難治に侍るにや。右の歌。萬葉集の古風より出て。すかたすなをにつよくきこゆ。もつとも可レ爲レ勝。

十六番

左勝　前大僧正滿意

夜もすから床も定めぬ水鳥は氷らぬ方を尋てやなく

右　右兵衛督爲富

うきてすむ方も定す風ふかは浪にしたかふ池の水鳥

右。方もさためすは。貫之か。風ふけはかたもさためすといへる二句をとれるにや。左床も定ぬも。ともに心はかよひ侍れと。こほらぬ方をたつぬるは。いますこし心さたかにきこゆ。以レ左爲レ勝。

十七番

左勝　藤原朝臣

はらひえぬ霜たにあるに水鳥のこほるをいとゝ浮ねとや鳴

右　權大納言親通

いつれなをたえすとかなく水鳥のうは毛の霜と下の氷と

右千載集に。此比のをしのうきねそあはれなるうは毛のしもよしたの氷よとやらむ侍る。左たやすくきこえなから。勝侍るへし。

十八番

左持　權大納言公經

女寢する夜床の水のあさに〳〵に氷へたてゝをしや鳴らん

右　前大納言資任

[illegible]河瀬の水をふみしたきむれゐるをこゑのしけき芦鴨

左下句不快。右上句平懐也。勝劣難決歟。

十九番

左　右大臣

山水の積のとまりかと計にすたく川瀬の鴛のこかれ羽

右勝　前内大臣

冬川のこほりて浪はたゝ山田にわたるあきさのこゑの寒けさ

左不庶幾所あり。右歌はさまなたらか也。勝へきにや。

二十番

左　闕　白

芦原の浦うちきやくなかれ江に風をしきねの水鳥のこゑ

右勝　権大納言勝光

芦鴨の青羽の色そ山川の音はしくれてつひにもみちぬ

あしはらやとおかれたる。なとやらんことくゝしくおもひなされ侍るに。第二句浦うちきやくは。つねのことにて侍りけり。風をしきね。又非二尋常之詞一。芦鴨の青羽。あまりに風情を盡さむとのみよめるにや。歌のすかた優にしもきこえすなから。ひたりにはまさりはへるへし

二十一番　松雪深

左持　式部卿親王

下折の積はさらにあらはれてうつもれかはる雪の松か枝

右　右近大将義政

下折のひゝきに雪や落つらむまた音たつる軒の松風

左下句いまゝすくたけたるやうに侍れと。おかしくこそ。右ひゝきをとおひ聞たることはにや。しかれとも六百番歌合に。雅ねをと三をよめるも侍るにや。此内ねとをとゝは猶いかにそやおほゆるをたに。万人判者ともに難せす。南方の雪の下折。何れ淺しとも見え侍らす。持と申へくや。

二十二番

左勝　前大僧正満意

松をさへとしの寒さにあらはさていくへかつもるけさの白雪

右　権大納言親通

おきつなみひとつにみえて住吉の松をさなからうつむしら雪

左。歳寒貞松も。ふかき雪にはあらはれぬ心のつらしく。下句そよはくきこえ侍る。右下句。題の心ことくゝしくこもり侍るものから。不そくなるやうにおほえ侍れは以レ左爲レ勝。

二十三番

左持　闕　白

吹しほる嵐もをもき山松の青葉にかへるゆきの下折

右　前大納言資任

けさはなを雪に嵐の音たえて松はしつ枝も見えす成ぬる

左歌。あらしもをもきと侍る。短慮不レ思二得山松一も優にしもきこえすや。右歌も難なくは見えなから。勝へきさまにもはへらす。持とすへきにや。

二十四番

左持　権大納言公綱

うつもるゝ松にも音のきこゆるや嵐にはあらぬ雪の下折

右　右兵衛督爲富

はらひかれ松のあらしも今はとや降そふ雪に吹たゆむらん

左右また等同にして無二勝劣一

二十五番

左　雅康朝臣

雪折の峯こそ殘れ埋れて嵐はよそに軒の松か枝

右勝　權大納言勝光

降つみて嵐はよそに立わかれいなはの山の松のしら雪

兩首の歌。松のあらし雪にたえたる風情。たひ／＼になり侍れはにや。いとゝめつらしくもきこえす。さのみ持と申さむもいかゝにて。たちかへり見侍れは。いなはのやまの雪は。いさゝかたかくそおほゆる。

二十六番

左勝　右大臣

かきりあれは枝にも葉にも餘りつゝ獨こほるゝ松の白雪

右　權少僧都忠雅

けさみれはすゑの松山うつもれぬ夜半にやこえし雪のしら波

右の歌。うら近く降くる雪はとある歌に。心いたくかはらすや。左歌すゑつむはなの卷に。松の木のおのれとおきかへりてさとこほるゝ雪なとあるも。思ひいてらるれは。末の松山の心をは、かすかにこもりて。右にはまさり侍る歟。

二十七番

左持　太宰權帥實雅

はらひかねなひく梢は窓とちて猶雪をもし軒の松かえ

右　前内大臣

埋れぬ其とも見すは雪ふかき松をまつともいかてしらまし

左。軒端の松の雪。窓をとちたる心。おかしくきこゆ。はしめの五もしそ。風なくてはいかゝと申す雖もやとおほえ侍れと。これはうちはらふ心にて侍るにや。さもありぬへし。右歌もよろしく見え侍れは爲レ持。

二十八番

左持　入道前内大臣

雪にのみ埋れはてゝ池水のそこにそ松の色は殘れる

右　前大僧正義蓮

はらひかねいくへともなき雪のうれに松を忘て行嵐かな

左歌。池のほとりの松。雪にうつもれて。下葉の色わつかに水底に見ゆる心。おかしく侍り。右歌。松を忘て行あらし哉。又優美なり。殊によろしき持に可レ侍。

二十九番

左　左衛門督雅親

埋めとも猶松の葉のしるきかな降雪さへに散らせすして

右勝　准后

しら鶴のかへるふるすやたとるらむ雪折かはる高砂の松

左。松の葉のちりうせすしてといへることはをとりて。よめるとは見え侍れと。優にしも侍らす。右高砂の松にすむつるの、雪おれに、ふるすをたとる心。おかしく見ゆ。かへすかへす右の勝にて侍るへし。

三十番

左持　女房

あらしこす尾上の雪のひとむらやむもれし松の梢なるらん

右　沙彌淨空

わたつ海の千ひろはしらす松かえにみるめふかくも積雪哉

左。白雪一村。右蒼海千尋。歌体共甘心。勝劣不二分明一。

三十一番　忍久戀

左勝　右大臣

人しれすかそふれは又つもり行年のへたてを打なけくかな

右　　前大納言資任

兵守こへしらすかほして月日には露ゆへ落るなみたならまし

右下句月日をほせられぬにやあらん心得かたし。左。年序かつもるをかそへて。ひとしれすなけくらむさま。あはれに侍れは可レ爲レ勝。

三十二番

左　　雅康朝臣

幾とせか古川のへにたつ杉の上は難面數のみして

右勝　　准后

わかおもひ神さふるまてつゝみこし玉のをくしも涙成けり

左のうへは難面といへることは。しら露のうへはつれなくをきゐつゝとよめるも。萩の下葉の色にかけ。はちす葉の上は難面なと侍るも。うらなる事をいへるにや。此杉の下葉いかならん共おほえす。さためてその證なと侍らむかし。右わかなの巻に。秋好中宮より。さしなからむかしをいまにつたふれはとありしやらむ。繪合の巻よりは。ひさしく成にけることにや。左は不審殘れり。以レ右爲レ勝。

三十三番

左持　　太宰權帥實雅

しられしな絶て忍ふのあま衣うき年波のかけてこふとは

右　　權大納言親通

いつまてかきのみ忍ふのすり衣妻にはあらて年を重ねむ

しのふのすり衣。しのふのあまころも。ともにきゝなれ侍り。歌の科もなしかるへし。

三十四番

左持　　式部卿親王

幾かへり我身を秋の露とたに物をもふ袖に忍ひきぬらむ

右　　沙彌淨空

年月を忍ふのおくにかるすけのしらした長きねのみ鳴とは

左。身を秋の露に袖のなみたをまかへて。としをおくる心詞。おかしく見ゆ。右しのふのおくにかるすけのなかきねをしらしとつゝけ侍るまて。よくいひくたされてきこゆ。左は難ならんとよみ。右はつよからむことをおもへるにや。勝劣さためかたし。

三十五番

左　　關白

うち出る泪の海のはまひさしさしもつゝみし袖もあらはに

右勝　　右兵衛督爲富

うき月日さらにかさねはいかならん袖の外には見えぬ泪も

左。打出るなみたとをけるより。下句みなあらはるゝ戀の心とそ見え侍る。右。さらにといへる詞。其詮なく侍れと。題の心たしかなるに付て可レ勝歟。

三十六番

左勝　　女房

あちきなくつもるおもひも空蟬の世はいつまてと音を忍らん

右　　前大僧正義運

今さらにたゝん名もうしいつまても忍心をおもひよはらし

左。つもるおもひもうつせみの世はいつまてなと。よろしくこそ。右も難なくきこゆれと。なをひたり爲レ勝。

三十七番

左　　左衛門督雅親

心もて猶せきかへすなみた哉さすか人めもおもひなるれは

右勝　右近大將義政

逢ことはかきりしられす年月を絶て忍ふのみたれわひても

左歌。おもひなるれはにて。ひさしき心をもたせたるも。かすかによはくきこゆ。右歌。逢ことはかきりしられすと侍るは。あふことを待かきりのことにや。しのふのみたれ本歌の心たしかに妖艷なるすかたにも侍る哉。可ㇾ爲ㇾ勝。

三十八番

左　權大納言公綱

つゝみしは幾年なみそおもひ川なかれての世の浮名ひとつに

右勝　權少僧都忠雅

思へともいはかきふちのそこひなく幾よつもれる涙とかしる

左。下句なとよろし。右きくのしら露けふことにといへる歌をとれるにや。難なくきこゆ。可ㇾ爲ㇾ勝。

三十九番

左勝　前大僧正滿意

しらせはや今は心も月日のみつもりはてぬる下のおもひを

右　權大納言勝光

とけぬへき心のおくはまたしらていくとし月を忍ひきぬらむ

右歌。心のおくなと侍るにつけては。しのふといはまほしくそ。但作者みちのくまては。おもひやられぬことにて侍るを。せはき心にてをもへるなるへし。左つねのことなれと增り侍るにや。

四十番

左　入道前內大臣

としふれは軒のしのふのかるゝまて我戀草は色そつれなき

右勝　前內大臣

年をつむおもひもくるし世の中に絶て忍ふの種なくも哉

左。としをふる軒端のしのふ草は。しけさも增りぬへきことにこそ。かるゝまてといへる。いさゝかおほつかなし。右年をつむ忍ふのたね。なたらかなれは爲ㇾ勝。

四十一番　祝言

左勝　女房

むへしこそ我世になひけ芦原やおさまる國の民の心は

右　右兵衞督爲富

今そしる神代もおなし日の光さしてくもらぬ君か爲とは

左。非二凡俗之所一ㇾ及。もつとも爲ㇾ勝。

四十二番

左持　前大僧正滿意

大內やよな〳〵ことにいのるてふ法のしるしは君か萬代

右　沙彌淨空

きみかためおなしことのみ祈る身は老ても千世の影をしそ待

左。二局夜居しるくきこえて。萬代の寶算をいのる法のしるしもたのもし。右又老のこゝろあはれに千世まてときみを思ひたてまつれり。心はひとしく。ことはとり〳〵なり。勝劣わきまへかたし。

四十三番

左持　式部卿親王

あし原やみたれぬ人の國までもひとつ我世と君おさむらし

右　權大納言勝光

君はめくみ臣はあふきて芦原や昔にこゆる御代のかしこさ

左右のあしはら。あしからすきこゆ。爲ㇾ持。

四十四番

鶴のうへにふみ見る道も絶すして君萬代のあとならへとや　左　右大臣

右持

神代より三種のたから傳へきて今もうけつく君かかしこさ　右近大將義政

左歌。尙書洪範篇。善書事蹟。共者治世之法。雖レ相叶祝言。右歌。三種神器。我朝無双之重寳也。尤爲レ勝。

四十五番

左持　關白

代を守る身をあはせてや君と臣道の道たる[illegible]とはなる

右　准后

うこきなき大和嶋ねの外までもなを靜なる四方の浪風

左右。同科に侍るへし。

四十六番

左勝　太宰權帥資雅

つかへつゝ祈る身のみか君か代を久しかれとそ神もまもれる

右　前大納言資任

君々のふへきよはひはなか濱の眞砂のかすを千たひかそへむ

右歌。君か代はかきりもあらしなか濱の眞砂のかすはよみつくすともといへる歌をとれるか。あまりにかはれる心もなくや。左歌。させることも侍らねと。勝はへりなむ。

四十七番

左持　入道前内大臣

鶴かめは數限あるよはひにて猶君か代を何にたとへむ

右　權大納言親通

天地の長くひさしきことはりは我大君の御代の爲かも

かすかきりあると侍る。つる龜も千とせののちはしらなくにといへる歌なとをおもへるにや。天長地ひさしく。誠にことはりかなひ侍りぬ。歌の勝劣弁かたし。

四十八番

左　左衛門督雅親

梓弓やふしもわかすあふく也治まる代々にかへるときかも

右勝　權少僧都忠雅

我きみのよはひといつれわかの浦や濱の眞砂も松のはかすも

右。きみのよはひに和歌のうらのまさこをたとへ侍る。よろしくきこゆ。左あつさゆみやふしもわかすなと。いやしきさま也。右尤爲レ勝。

四十九番

左　權大納言公綱

岩ほまて君か見るへきさゝれ石も猶そ數そふ玉しきの庭

右勝　前内大臣

へたてなく君かひかりも玉かきのうちなる國を幾代てらさむ

左。さゝれいしの岩ほ。めつらしけなし。たまかきのうちなる國。無爲に侍れは勝へきにや。

五十番

左　雅康朝臣

きみになひくみかきの竹の幾代とも限しられぬ數そこもれる

右勝　前大僧正義蓮

月日さへしらてや照す君かへむ千世萬代を幾めくりとも

左。竹めつらしきふしも侍らす。右月日さへしらてやてらすなと。いひしりて。終の句までよろしく侍り。可レ爲レ勝。

右康正元年内裏歌合以古本書寫以一本挍正

和歌部六十四 歌合卅

按察使親長卿家歌合 文明五年十一月七日

題

野外霞　暮山花　郭公　曉荻　海邊月
寄雪　不逢戀　恨戀　山家夢　述懷

歌人

左

前右大臣源朝臣
權大納言兼右近衛大將藤原公敦卿
權大納言藤原教秀卿
權大納言藤原實淳卿
右衛門督藤原季作卿
權中納言藤原宣胤卿
參議左大弁藤原實光卿
散位中原師富朝臣
左近衛權中將藤原季經朝臣
彈正少弼藤原信通
藏人左少弁藤原政顯

杉原 伊賀守平賢盛
大和守三善元連

右

前內大臣藤原朝臣實
權大納言源通秀卿
權大納言藤原信量卿
按察使藤原親長卿
正三位藤原高清卿
從二位和氣明茂卿
沙彌春晉
左大史小槻長興宿禰
左近衛權中將藤原爲廣朝臣
左近衛權少將藤原實隆朝臣
藏人右少弁藤原元長
杉原 安藝守平長恒
加賀守三善爲信

判者

一條禪閤

野外霞

一番

左勝　前右大臣源朝臣

花とりの色音もよしやあつま野の千里にかすむ春の曙

右　前内大臣藤原朝臣實

山の端はさらても見えす春霞たてるやいつこむさしのゝ原

左歌。東野の煙の名殘千里をこめてかすめるあけほのゝけしき。花鳥におもひかふるほとの事。おほつかなきにや。京極中納言の。花鳥のにほひも聲もさもあらはあれゆらのみさきの春のひくらし。作意は同事なれと。ゆらのみさきは。名を聞よりおもしろき所と聞えたれは。花鳥の匂ひも聲もと詠せるにこそ。右歌。山のはさらても見えぬは。かすみたる故にいよ／＼みえぬ武藏野の風景也。さる時は。いつこの三字自語相違にや。古今の歌は。吉野の山は春なからまた雪のふれは。霞はいつこにか立らんとうたかへる。其謂あるにや。作者をも知侍らぬゆへに。儲案の事を不載に書載侍り。許否は作者の貴許に任すへし。いかさま得たるへし。

二番

左　右近衛大將藤原公教卿

むさし野はわけつくすとも春霞立行末のはてやなからん

右勝　權大納言源通秀卿

春はまたあさちのゝ草の霜枯にみえぬみとりそ空にかすめる

左の立行すゑの詞。猶おもひたきにや。霞ならはたちゆく中とあらまほしきにや。右見えぬみとりは。霜枯ゆへに見えぬを。空のみとりにかすめる心にや。右聊まさると申侍るへし。

三番

左　權大納言藤原教秀卿

三笠山みねの日かけもはる／＼とさしてそかすむ春日のゝ原

右勝　權大納言藤原信量卿

春日山神代の春もへたてなく三かさの野へに立霞かな

左歌第四句。さしての詞。日影の事にや。又野をさしての心にや。詞をへたてたる故に。ふたつにわたりて聞え侍る。日影の事ならは。峯の日かけはさしなからはるかにかすむと。なとか詠したまはさりつらん。乍レ去。春日野は三笠山の麓なれは。はる／＼の詞いかゝとおほえたれと。霞たる故に近きもとをく見ゆる習なれは。それは難になるまての事はあるましきにや。右の歌。ことなる難なし。組神の事に侍れは。この一首は判者の得分に。又右の勝と申たきにこそ。

四番

左　權大納言藤原實淳卿

春日野や時をたかへすかすむこそ曇りなき世の春と見えけれ

右勝　按察使藤原親長卿

いつくより立ともみえすはてもなし霞のこさぬ野への曙

左。時をたかへすの詞は。春日野によれる子細有や。老耄の身。讃歎なと覺悟に及はす。大方は春は必かすむならひなれは。世の治亂にはよるましき事にや。さのみなるやうなれと。これも右は勝るにや。さりなからかすみのこさぬは。只霞にこもるとありたきにや。

五番

左勝　右衛門督藤原季春卿

あは雪のふるともみえすあらち山やた野の末や今かすむらん

右　正三位藤原高清卿

たちわたる霞も松の一しほに色をやわきて春日野の原

左右ともにことなる事なし。只今まて左の勝なき事。判者の誤に成ぬへけれは。人丸の古風に似して。左の淡雪の。松の一しほよりも色まされるとや申侍らん。

六番

左持　權中納言藤原宣胤卿

おもひやる心はかりはかすか野の霞を袖にかけぬ日もなし

右　從二位和氣明茂卿

春はまたあさ野の霞消かての雪のうへにや立かさぬらん

左。春日野をおもひやる心。何故にかとおほつかなし。又霞を袖にかくるも。春日野につきたる事にや。古歌證に覺悟せす。右。消かての雪。霞と雪とにまたあひて聞ゆ。又春はまたあさ野も以前出現せり。さのみ可レ勝にあらされは。なすらへて持たるへし。

七番

左持　參議左大弁藤原廣光卿

立こむる霞の末をかきりにて春ははてあるむさしのゝ原

右　沙彌春譽

眞間にそまつかすみけるむさし野や限も知ぬ御代の初春

左。霞の末は可レ有レ限とも不レ覺。右歌。むさし野は限しらぬ枕詞なるやうにて。題の心は次になれり。さらては又。むさしのにかきりて御代の初春を祝すへき事。いかゝ。又持たるへし。作レ之、備二末一事を可レ申。左歌。霞の末を關になされたらは。むさし野にたよりありて。はてある心にも相應すへきにや。

八番

左持　散位中原師著朝臣

むさし野やかすみにこもる春風の音はかくれすのこる荻原

右　左大史小槻長興宿禰

あけわたる雲井の春もそことなくうち野をこめて立霞哉

左。荻原は末燒原の事成へし。音あるへしとも不レ覺。右。內野は新撰六帖に爲家卿初て讀侍るほかは。未見及す。大內炎上以後の事このましからす。暫勝負をさしをきぬ。

九番

左　左近衛權中將藤原季經朝臣

春きてはいくかもあらぬとふ火野に深きみとりや霞なるらん

右勝　左近衛權中將藤原爲廣朝臣

大江山雪けの雲はうち消ていくのゝ末や今朝かすむらん

左右ともにことなる難なし。右は聊雪氣のくも。たちまされるにや。

十番

左持　彈正少弼藤原俊通

朝日さす野へのみとりに色はへてくれなゐさをき春霞哉

右　左近衛權少將藤原實隆朝臣

たちまよふ霞そゆらく玉たれのこすのおほのゝ曙の空

左第四句。筆の誤あるにやいかゝ。右歌。ゆらくは。玉のをにたよりあるへし。玉たれにはかゝるなとこそ縁の詞には世常は詠し侍れ。ゆらくはなかき心なれは。霞にはいかかとおほゆ。左の歌の心未二覺悟一勝負を論するにいとまあらす。

十一番

左　藏人左少弁藤原政顯

霞とやふる河野邊の春ことに霞もたてそこ千ゝ杉

右勝　藏人右少弁藤原元長

もえいつる野への草はの烟まて空にまかへて立霞哉

左。ふる河野へは邊の心なり。野にはあらす。落題のうへは不及是非。右かちたるへし。

十二番

左勝　伊賀守平賢盛

玉きはるうち野の春の世々のあとちりの名にのみ立霞かな

右　安藝守平長恒

春をおとかへりみすれはあつま野の烟をさらに立霞哉

右。うち野の事、さきにしるし侍り了。ちりの名も未レ及ニ疊倍ニ。左。萬葉の古風をおもへり。勝へきにこそ。年レ去烟をさらにの詞。猶おもひたきに似たりいかゝ。

十三番

左　大和守三善元連

若草のつまたならなくに春日野やかすむいつこに立こもるらん

右持　加賀守三善爲信

おさまれる都の春の野へみれは霞も四方になひく雲哉

左。若草のつまは。斷春日野ニ事也。ならなくに。又いつこなとの詞。いひおほせす。右之祝言。時にあたりて諸人の本望なれは。しはらく勝に侍るへし。

十四番　暮山花

左持　前右大臣

白妙の花のひかりは猶みえてよそにくれ行みねの松原

右　權大納言通秀卿

入相の聲こそいそけさく花のかけやはくるゝ小はつせの山

兩首の心詞等同也。猶おもひたき所なきにあらす。準て可レ持や。

十五番

左勝　右大將公敦卿

かすめとも匂ひをそれとわきもこか袖ふる山の花の夕かせ

右　權大納言俊量卿

月もかな長き日かけのいとか山くるゝはをしき花の木かけに

左。ことなる難なし。右。十首題の月。未いてさる事なれは。傍題をかせる難もや侍らん。暫左の可レ爲レ勝。

十六番

左勝　權大納言教秀卿

かへるさはやくれはて〻ぬ吉野山よしや一夜は花のしたふし

右　按察使親長卿

奥まてはたつねみるともくるゝとてと山の花の蔭はかへらし

右。第三句。たつねみすともとありたきにや。かけはかへらしも思たきにや。詠歌の道。心の事はなか〳〵不レ及レ申。詞てにはにて艶にも聞え。俗にもなること也。いかさま左は可レ勝にや。但よしや一夜はの字。さゝへてきこゆ。たゝひと夜といひすてたらは。餘情あるへきにや。

十七番

左勝　權大納言實淳卿

くれにけり一樹のかけもちきりそと山路の花に宿やからまし

右　正三位高淸卿

をつゝからねくらもとむる鳥の音も長閑き山の花のかけ哉

左歌。第三句よはく聞ゆ。陰を契にてと有たきにや。右第一句なとをきかねたるやうに見ゆ。花の題には。いかにも花を賞翫して可ㇾ讀事にや。此一首鳥のねにとられたるやうなり。いかさま左の勝とす。

十八番

左持　　　　右衞門督季春卿

物そ思ふあかぬよそめのくれかゝる高根の花の雲のはたてに

右　　　　從二位明茂卿

うへし世をとへとこたへぬあらし山花吹くらす音計して

左。本歌をはとられ侍れと。第二三の詞のつゝきいかにそや聞え侍り。右うへしなとは。吉野山の花には便あるにや。又嵐の吹くらしたるも。花のため無念なるにこそ。持とす。

十九番

左持　　　　權中納言宜胤卿

芳野山尾上の雲はくれやらて花の木末の色そのこれる

右　　　　沙彌春譽

たよりなき山踏くらしつゝ下臥を契もをかぬ花をそふとて

左第三句は。くれはてゝとありたきにや。右便なきはたつきなきにや侍らん。又二のをの字も。さゝへてきこゆ。又持たり。

廿番

左持　　　　左大弁廣光卿

夕日かけいりぬる山の櫻花みらくすくなき色をしそおもふ

右　　　　長興宿禰

葛城やたか根の花の色はれて入日によその雲そくれ行

左右ともに本歌をはおもへるやうなれと。色をしそおもふ。色はれてなといへるわたり不ㇾ宜に似〔た〕り。作文の道に。意到句不ㇾ到と云事あり。いかにも詞のつゝきくたくたしからす。妖艶に餘情ある樣に。沈吟あるへきにや。句つくりわろけれは。いかに意はいたりたれと。歌とは申かたきなり。在中將は其心あまりて詞たらすと云るは。能中にてのよくな(はイ)りなるへし。あしくてたらぬにはあらさるにや。はゝかりなから俳案を申者也。

廿一番

左持　　　　師著朝臣

あすしらぬ世をなけくらし小泊瀨の花も露けき晩鐘の空

右　　　　爲(るイ)廣朝臣

吉野山まかへし雲の色はくれてこゝろにのこす花のおもかけ

左の歌の旨趣は。あすしらぬ世を。入相の空か歎を傍にて。花も感淚をもよほしたる由見皮給へり。いかにも花の題にては。花をもとゝよむへき事なり。哀傷の心又不ㇾ好。かやうのことは。事により時に隨て可ㇾ有二斟酌一にや。右まかへしはまかひしとあるへきにや。又色はの字のひて聞ゆ。は文字を略せらるへし。抑又一首の躰は花散ての後の心なり。花に對しては無念なり。後京極攝政歌。泊瀨山うつろふ花にはるくれてまかひし雲そみねにのこれる。此歌に髣髴似て。しかもにさる事はいかにそや。

廿二番

左勝　　　　季綱朝臣

いかにせん家路はとをし山櫻なを夕はへのみまくほしさを

右　　　　實隆朝臣

なをさりの見るめにはあらすあま小舟泊瀨の山の花の夕はへ

左歌。ことなる難なし。第二句は家路はとをき山櫻とつゝけたきにや。右のあま小舟は。初瀨の枕詞なり。後にみるめなとあれは。海邊のやうに聞えし。但夫も一首の躰によるへき事也。いかさま左はたけありてみえ侍る。まされると申へし。

廿三番

左持　俊通

さきおもるたかねの花の一さかり夕ゐる雲の色そまかはぬ

右　元長

吉野山花のまとゐにはやくれぬいつらはなかき春の日かけそ

左右等同也。勝劣難レ弁。僻案には。左第一句は咲匂ふ。右第三句はくれぬめりとありたきにや。但右は古今の俳諧の躰也。被レ難時もあるへきにや。

廿四番

左　政顕

このくれそまことしられて山櫻まかひし雲のかゝる色なき

右勝　長恒

おりかさしたかゆふくれに歸るらんふもとにくたる花の白雲

左右ともに花を雲に譬れたり。右は聊巧に聞ゆ。可レ勝にや。

廿五番

左勝　賢盛

吉野山花よりひゞく晩鐘のかねのみたけにはる風そ吹

右　爲信

雲ははやかへると見ゆる山のはにまかふ方なき花櫻かな

左の春風。ふかすとものやうに侍れと。花に緣して見聞にふるゝ所を云つらねたれは無レ難にや。右の歌。雲のかへるはかりにて。夕の心有へき事、證歌なと不レ及二覺悟一但歌はさのみある事なれは。くるしからしとそおほゆる。乍レ去右の心は度々出來せり。左たけありて聞えたれは。勝るにやあらむ。

廿六番

左持　元連

あらしのみにほひにくるゝ花の色かへらぬ雲の山のはの空

右　前内大臣

山ふかみさしもいそきし夕くれをこの比しらぬ花のかけかな

左歌。詞のつゝき。くた〳〵しく聞ゆ。右夕くれをいそく心も。何故とおもひわきかたし。準て持とすへし。

廿七番

左持　郭公　前右大臣

待えても心つくしの時鳥木のまの月のあけほのゝ聲

右　權大納言信量卿

したふそよそよや待つる時鳥とはかりきゝし夜半の一聲

左の月の傍題。さきにも出來せり。右の第一二句このましからす。持とすへし。僻案には。左歌まちえての心つくしやとありたきにや。

廿八番

左　右近衞大將公敦卿

いつれ猶鳴まさるらん時鳥むら雨の空ありあけの月

右勝　按察使親長卿

いてかてになとかなくらん郭公かとさせりともきかぬみ山を

左の下句のひて聞ゆ。其上村雨は有明の空にもよみ侍る

へし。一首の心ならは。よひの村雨月のあり明とあるへきにや。右本歌をおもへり。可レ勝にや。但これも出かてに猶や啼らん。かとさせりともみえぬといひたきにや。たゝ太山にて聞たるこゝろ。しかるへくや侍らん。

廿九番

左 持　　權大納言教秀卿

村雨の名殘の雲のたえまより月もほのめく山ほとゝきす

右　　正三位高清卿

をちかへり鳴にもまさる一聲は月さへいつる山ほとゝきす

兩首の月。句の俤も相似たるにや。持とすへし。俳案には。村雨の月は。ふるうちにも雲間はありぬへし。名殘の雲は。五月雨なとに可レ然にや。時鳥はをちかへりなけとこそ。古歌にもよめるに。月はさる事なれと。一聲のまさるらんもいかにそや。

卅番

左 勝　　權大納言實淳卿

ほとゝきす雲のはたてに聲す也あまつ空にもまつと知らん

右　　從二位明茂卿

時鳥なくやと待し夕くれも空たのめなる村さめの雲

右歌。世常の心詞也。左は本歌たしかなるにつきて。勝へきにこそ。但俳案には。左の下句。人や聞らんと可レ有にや。いかゝ。

卅一番

左 勝　　右衛門督季春卿

まてしはし人にもつけん時鳥われのみきくはをしき初音を

右　　沙彌作[illegible]

たつねいるかひにこそきけ山とよみ空もとゝろになく時鳥

右歌。山とよみ空もとゝろになと。おもしろくもなき詞をとりあつめられたり。左聊艶に聞ゆ。可レ勝にこそ。

卅二番

左 持　　權中納言宣胤卿

一聲にさたかにそ聞ほとゝきすかならすとまつ村雨の空

右　　長興宿禰

いさよひの月の雲間の一聲は山の端いつるほとゝきす哉

右の月こそ。さし出たる様なれと。歌の躰に優して持とすへし。左歌。下の詞によらは。さたかにきかんとそありたき。右第三句も。一聲もとあらまほしきにや。

卅三番

左 勝　　左大弁廣光卿

たか中のうきにならひて時鳥まつよひことにつれなかるらん

右　　爲廣朝臣

たへてまつ心の色のくれなひにふりいてゝなけ山時鳥

左右ともに。ことなる難なし。左聊艶に聞たり。可レ勝にや。

卅四番

左 持　　師富朝臣

老にうきならひなからも時鳥まつにねさめそよすか成ける

右　　實隆朝臣

待えても雲井のよそにならし柴のなれはまさらぬ時鳥哉

左のよすかは。便の心にては侍れと。人の所縁をもよすかといへるにや。こと〲によりてつかふへき詞なるへし。右のならし柴も。狩場なともなくて。おもひもかけぬ出所にや。なすらへて持たるへし。

卅五番

左　　　季經朝臣

むらさめもはやふりいてゝ時鳥くれ行空の雲に鳴也

右勝　　　元長

村雨の夜半のまきれの時鳥きゝやもらすと餘所をとはゝや

雨首の村雨。同程の事に侍れと。はやふりいてゝのことは。聊不レ宜。右はその心まされり。勝へきにや。但夜半は。よるとそいはまほしき。

卅六番

左　　　俊通

時しもあれやよ時鳥またるゝもあまりつれなき村雨の空

右勝　　　長恒

なきぬへし聲のかきりを時鳥をのか五月の夜な／＼の空

左のやよの詞。古今のやよやまて。慈鎭和尚のやよ村雨なとは。そのものに對合して言る詞也。耳にも聞ぬ時鳥に。やよといふへき事おほつかなきにや。右はまされるといふへし。第二句は聲の限はとあらまほしきにや。

卅七番

左持　　　政顯

待なれし日數とともにふる聲をかさねてきなけ山子規

右　　　爲信

一聲にあけ行月はのこれともおもかけとめぬ時鳥かな

左歌にはまたいひおほせす。右は歌めきて聞侍り。但月はいかゝ。皆持たるへし。

卅八番

左持　　　賢盛

時鳥わかれしおやのふるすよりかへるかひある聲の色哉

右　　　前内大臣

月をたにおもひかへつゝ子規まつにたよりの村雨の空

右。村雨の月にさはるほとの事。心もとなくおほえ侍り。左のわかれしおや。聊俗に聞ゆ。持たるへし。儕案には。左の第三。それにつけてしなと侍らは。鶯のふるすにはなるへきにや。不レ然は花に木つたふなとはいかゝ。

卅九番

左持　　　元連

きかぬまの心こそあれ時鳥なくねを空に猶まかへとや

右　　　權大納言通秀卿

あか月の夢をかけつゝ一聲にうつゝすくなき時鳥哉

左第一句。右の第四なと。同程の事にや。持とすへし。

四十番　　曉荻

左持　　　前内大臣

ありあけの月の下荻うちなひき光こほるゝ露の秋風

右　　　按察使親長卿

聞すくす時こそなけれ老か身はいつもね覺の荻の上風

左の月。他の季の事は。少々みゆる所も有なん。同季の月の題を。前にあてゝ出來は。ことに無念なるにや。右もかちまての事はいかゝ。さりなから第二句夜はこそなけれとありたきにや。

四十一番

左持　　　右近大將公敎卿

荻のはにあかつき風の音せすは秋のあはれや夢に過なん

右　　　正三位高淸卿

たか袖にあまる泪そきく人のね覺は同し荻の上風

左。あかつき風もきゝならは猶心ちす。右第二句も。おもひたきにや。持とす。

四十二番

左持　　　　權大納言敎秀卿

ね覺せぬ人はあらしなすむやともならふ軒端の荻の上風

右　　　　從二位明茂卿

風にのみまかせて聞は荻のはに曉露のをかんまそなき

左。二三句のつゝき。よはく聞ゆ。又やとはなくともとおほえ侍り。右の露。荻の葉にをかせたく思ひつる。その露おほつかなし。又持たるへし。

四十三番

左　　　　權大納言實淳卿

たらちねのいさめにならふねさめまてつらしとそ聞荻の上風

右勝　　　　沙彌祐譽

あき風にね覺のそては露そひて軒端の荻の音かはくなり

左歌。おやのいさめはうたゝねの事にや。ね覺をもいさめたる事あるにや。不二覺悟一。右ことなる難なし。勝へきにこそ。

四十四番

左持　　　　右衛門督季保卿

吹風を荻のうへときゝなからね覺の袖も露そこほるゝ

右　　　　長興宿禰

あけやらぬ窓のあらしを敷妙の枕の萩に夢そかれゆく

兩首共にことなることなし。左は常に見及ぶ也。右。窓の嵐。枕の萩なとは。くたけて聞え侍れと。難にはあらす。

なすらへて持とすへし。

四十五番

左持　　　　權中納言宣胤卿

秋風の吹たにこすは荻のはもね覺をひしき音もなからん

右　　　　爲廣朝臣

ねさめにはあはれかすそふ荻の音やみはてぬ夢の名殘成らん

左歌第二の句。ふく夜ならすはとありたきにや。右徂句も。只ね覺してと社いはまほしく侍れ。又勝劣難レ弁者歟。

四十六番

左持　　　　左大弁廣光卿

あけかたの庭の荻原ふく風に露こそあらぬ夢も結はす

右　　　　實隆朝臣

夕まくれおきふく風をつらしとはね覺にきかぬ人やいひけん

左右尋同なり。勝劣難レ弁歟。

四十七番

左持　　　　爲害朝臣

ゆふへにはかきらさりけりしのゝめの袖も露ちる荻の上風

右　　　　元長

いとゝしく秋のあはれに吹そへてね覺ものうき荻の上風

兩首の心。世常聞ふるし侍り。左は聊まされるにや。

四十八番

左持　　　　季經朝臣

荻の葉のそよくはつらしうき秋を忘れんと思ふ夜半のね覺に

右　　　　長恒

秋の夜のあさまし草に風すきて袖露はきく荻の音哉

右のめさまし草。秋の夜にとりなされて。袖の心そへられ

たる、萬葉の古風も可ㇾ然にや。左もことなる難なし。きく
へきにあらさるをや。

四十九番　左勝　俊　通

閨はまつ枕そしある荻原や晩露をはらふ音かせ

右　爲　信

おもしろあふつきは萩の音たてゝね覺の窓の月を見しとや

右の月、先度題意の難申畢。左歌、勝歟とすへし。

五十番　左勝　政　顯

ふく風の一かたならぬねさめかな軒はに近き庭の下荻

右　前内大臣

明かたけ月も木葉もかたふきてをく露深き庭の荻原

左歌、下句書歌の躰也。右、月の字さし出さすは勝へきに
や。

五十一番　左勝　賢　盛

身にそしむ露をね覺の枕にて荻の葉しほる秋のさよ風

右　權大納言通秀卿

あり明の月の下荻ふく風にたか見る夢かつれなかるへき

右の歌、書歌の上下の句の躰也。右の月先度に同。可ㇾ爲
ㇾ持。

五十二番　左　元　達

しき妙のね覺の床におとつれて軒端を過る荻の上風

右勝　權大納言信量卿

ね覺とふ鴫の羽かきそれよりも哀數そふ荻の上風

左。第一句いかにそや。右はいさゝかまされる。

五十三番　海邊月

左勝　前右大臣

白浪のよわたる月は秋風にかけすみのほるあまのはしたて

右　正三位高清卿

浪まてもひかりをそへて玉つ島紀のうみ遠く照す月哉

左の秋風は、ふかすとものそらに聞え侍り。右の紀の海も、
あまりなるにやあらん。勝劣ならは、みれともあかぬ夜半
の月なと、萬葉の詞にかゝりてありたき心地そし侍なり。

五十四番　左勝　右近大將公敦卿

しなか鳥ゐなのゝ海のよる／＼は蜑のかるもに月やすむらん

右　從二位明茂卿

こゝろから鹽やくあまの袖の月涙にくもるかけもをしまし

左。ゐなのゝうみのよる／＼のつゝき。浪のあらまほしき
にや。右第五句、不ㇾ宜。かけならうらみそと。なとか讀さり
つらん。持たるへし。

五十五番　左勝　權大納言教秀卿

浪にてる月の桂やわたつ海のかさしにさせる紅葉なるらん

右　沙彌春譽

しほ煙おもはぬ方に吹らしなひけは月の須磨のうら風

左歌、月の桂やわたつ海のかさしになれる風躰宜にや。右
のおもはぬ方も。本歌をとられたるやうなれと。いまたい
ひおほせぬにやあらん。左。勝へきにこそ。

五十六番

左　　　　　　　　　　　　権大納言実淳卿

わたの原雲路のかきり月晴て浪にのこれる浦かせの峯

右勝　　　　　　　　　　　長興宿禰

山のはに月も鏡をかけそふる松浦の浪のよるそさやけき

左。ことなる難はなきにや。右の松浦の鏡。光をましてみえたり。かちとす。

五十七番

左勝　　　　　　　　　　　右衛門督季春卿

しほかまのうらはの煙かせに消て月の光そ空にみちぬる

右　　　　　　　　　　　　為廣朝臣

たこの浦すかけをも波に吹ませて月に背する富士の根おろし

兩首ことなる難なし。左の月の光は。猶見所有にや。可ㇾ勝。

五十八番

左勝　　　　　　　　　　　権中納言宣胤卿

心なきあまの袖にはをしてるや難波の月のかけそやつるゝ

右　　　　　　　　　　　　實隆朝臣

あけはまた浪にやいらん松浦かた月よりにしに山のはもなし

左の上句。右の下句。宜やうに聞ゆ。なすらへて可ㇾ為ㇾ持。

五十九番

左勝　　　　　　　　　　　左大弁廣光卿

うら風にもしほの煙ひまはあれと松をくまなる磯の月かけ

右　　　　　　　　　　　　元長

心あれや浪のよる〳〵こき出て月になるをの沖津舟人

右の上句不ㇾ宜。左可ㇾ勝にや。但三句。立消てとあらまはしきにや。

六十番

左勝　　　　　　　　　　　簡著朝臣

松原の梢も遠くかけはれて月にとたえぬ天のはしたて

右　　　　　　　　　　　　長恒

山みえぬ沖津半天雲晴て月のやとりも浪のうへかな

左。松の事ならは。月にとたゆるとそいはまほしき。右の下句。月のやとりもなきとそへたるやう也。沖津半天もこのましからす。勝劣を論せすもやあらん。

六十一番

左勝　　　　　　　　　　　季綱朝臣

伊勢の海の渚に波のよる〳〵もさやけき月にかひやひろはん

右　　　　　　　　　　　　為信

ふけわたるよさの入海すむ月に松のはしらむ天のはしたて

右。ふけわたるといひて。又しらむ。いかにそや聞ゆ。左催馬楽の曲。歌からつよくおほゆ。勝とすへし。

六十二番

左　　　　　　　　　　　　俊通

いとふへき山のはもなしわたの原八十嶋わくる波の月かけ

右勝　　　　　　　　　　　前内大臣

からろをすひゝきの灘のあまのこや舟出しぬらん秋の夜の月

左歌。山のはゝなくとても。八十嶋わくるは。嶋かくれと申事の侍れは。猶月のさはりに成ぬへくそ覺る。右勝可ㇾ侍。

六十三番

左勝　　　　　　　　　　　政顕

わたつ海の千尋の底もくもらし光をうつす浪の上の月

右　　　　　　　　　　　　権大納言通秀卿

あはれそふもしほの煙一すしになにかいとはんなにはは江の月

右の歌。もしほの煙。月に哀をそふへき事。おほつかなきにや。左はまされるなるへし。但第三句くもりなはとあらまほしきにや。

六十四番

左　　賢盛

あま人の袖ぬらせとて心ある月もすみけり松からしま

右　　權大納言信量卿

むらさきのなたかの浦にすむ月のかけをよる〳〵くたく浪哉

左歌。松から嶋。むへ心あるあま人のすみ所には侍れと。一首の詞のつゝき。いかにそや侍る。右のなたかのうらの月。よる〳〵かけをくたくなと宜にや。勝とす。

六十五番

左　　元述

雲もなく浪さへゆらのみなと舟かちを絶てや月を見るらん

右　　按察使親長卿

浪の下も木のまになりぬすむ月の影よりうへに浮嶋の松

右の。浪の下といへるうへは。上の字はなくてもありなんかし。左浪さへゆらのなと。聊おもひたきやうなれと。かちを絶たるみなと船。よるへある心ちし侍り。勝とすへし。

六十六番

左　　原雪

その原や日數ふりにし帚木のありとはみえぬ雪そかたふく

右　　前右大臣

萩か花めてこし鹿のかよひちも雪にあとなき宮城野の原

　　從二位明茂卿

左歌。日数ふりにしの詞のつゝき。雪そかたふくなと宜からす。右めてこしは。すさめしといひ度にや。又俄に雪のふり出たるも心もとなし。持とす。

六十七番

左勝　　右近大將公敦卿

不二の根もなみちの末もをしなへて雪になり行浮嶋か原

右　　沙彌春譽

まよふなり老ぬる馬はなつみつゝかちのゝ原の雪の通路

右。老馬の道をしれるかひもなきにや。左勝たるへし。

六十八番

左　　權大納言敎秀卿

夜もすからつもれるほとも白雪の朝の原を分やかねまし

右　　長典侍瀰

やすらへは木の下道もうつもれて雪ふみまよふ宮城のゝ原

左。つもれるほともしらぬならは。わけかぬへきにも一定しかたきにや。右の第一句も心得かたく侍り。持たるへし。

六十九番

左　　權大納言實淳卿

春までにきえすはありともたれとはんさむき野原の雪の下庵

右　　爲廣朝臣

夜あらしの音はよはりてこもりえの初瀨のひ原雪つもるらし

左。歌の心は。いまたいひおほせす。又殘雪にもなりぬへし。右夜あらしの音はよはりてなと。このましからす。又持たるへし。

七十番

左　　右衞門督季春卿

うつもるゝその黒つかの名さへいまあたちか原にふれる白雪

右勝　　實隆朝臣

冬こもる三輪の山本人はこて雪やひ原のかさしおるらん

左歌。その里つか不レ宜。三四句のうつりも心えかたく侍り。大方名所こそおほく侍るに。あたちか原の黒塚こそましからす。しらまゆみなとは。雪にもたよりあるにや。鬼拉歌の鉢にをきては。又是非のさたに及へからす。右雪やひ原のかさしおるなと宜侍り。勝へし。第二三句ことに艶思ひたきやらに侍れ。

七十一番

左勝　　權中納言宣胤卿

けふはまつたれふみわけてしるへせん朝の原の雪の通ち

右　　元長

柴人のゆきゝもたえぬ大原やみねよりはらふ雪のふゝきに

右歌。峯よりはらふなと。猶おもひたきにや。左さしたる難なし。まさるにこそ。

七十二番

左勝　　左大弁廣光卿

見し秋のちくさはかれて白雪の花にうつらふ宮城のゝ原

右　　長恒

をく見ゆる淺茅か原の冬かれに雪こそあるしたれか住らん

左の千種はかれて。おもひたきにや。右の歌。淺茅原にて侍るやらん。雪こそあるし。いまた聞ならし侍らす。花月なとは。あるしともいへるにや。まめやかに管をもて天津雲を窺。蛤にてわたつ海をはかるたとへにて侍り。皆勝劣を論せすもやあらん。

七十三番

左　　師著朝臣

ふるまゝにさやくあらしの音までも雪にしかるゝいなの篠原

右勝　　爲信

ふしの根はひとつに見えて白妙の雪もはてなき武藏のゝ原

左。ふるまゝにさやくの詞つゝき。いかにそや聞ゆ。右は聊まされるにや。但富士の根もとありて。雪にといはまほしきにや。

七十四番

左持　　季經朝臣

ふみわくる人こそ見えね降つめるしきみか原の雪のあけほの

右　　前内大臣

ふりつもる朝の原のそのまゝに曇るとみえぬ雪の色哉

左右ともに。上句の詞のつゝき。心許なく侍り。可レ爲レ持。

七十五番

左勝　　俊通

ふれとまたつもらぬほとは風さえて雪にもさやく野への篠原

右　　權大納言通秀卿

松の葉のみとりは消て浪の上に雪そさたからうき嶋か原

左の第一句は。ふれといまたと。一文字あまるへき所なり。又雪にもさやくおほつかなく侍り。風雪の音斷分別しかたかるへし。右の緣は消ても。雪をへつらへる儀也。又持たるへし。

七十六番

左持　　政顯

はゝ木々もありとはみえし冬かれのその原遠くつもる白雪

右　　權大納言信量卿

名にふりしあたちか原のくろ塚もみな白妙につもる雪哉
その原のはゝ木々。あたちの原のくろつか。いつれもさき
に出来て。心詞も相似たるにや。持とす。

七十七番

左持　賢盛

吹おくるあなしの山もかき曇りひ原をかけて淡雪そ降

右　按察使親長卿

泉かは河なみあるゝ風さえてけふこそ雪をはやみかの原

左歌。吹おくるあなしの山。聊珍やうなれと。下にかせのふ
るまひなけれは。たゝまきもくといひても。一首の心は子
細なきにや。右はやみかの原つまりて聞ゆ。本歌の三かの
原は。三日の心にもちひたるにや。これもその心にや。又み
るこゝろによみたまへるやらん。いかさま持たるへし。

七十八番

左　元達

里遠く賤かふせやもをしなへて只白妙の雪のその原

右勝　正三位高清卿

みほか崎みこしの松はうつもれて浪にも雪やうき嶋か原

左の。里とをくは。あまりたる詞にや。ふせやにても事たり
ぬへし。右のうき嶋か原。眺望はまさるへきにや。

七十九番　不遇戀

左持　前右大臣

思ひかねまつこひしなはあひみんと後の世迄も人やまたれん

右　沙彌春誉

後の世にむまれあはゝや戀しにしつらさをいひて心をもみん

左右ともに後世を契る心詞一やうなり。但此世にてたに
もつれなかるへきは。来生とても心もとなく侍り。まつこ
ひしなは。戀しにしの詞。いつれもよろしからす。いかさ
ま持たるへし。

八十番

左持　右近衛大将公敦卿

こひわたるあはれは神もしるらめや天のうき橋かゝる習ひを

右　長興宿禰

はてよいかにほすまも浪に袖朽てあはての浦になるゝ憂身は

左。あまのうき橋は。みとのまくはひの根元にては侍れと。
あまりにこと遠きにや。右はてよいかになとは。いかにも
せんかたたえ忍かたき心もありたきにや。又袖朽ては。
かつ〳〵涙のはてはあらはれ侍るにこそ。いかさま持た
るへし。

八十一番

左持　権大納言教秀卿

つれなしや泪ふりそふ時雨にも染えぬ松の同したくひは

右　爲廣朝臣

おもひせく人の心のよと橋はわたらてつらきふしやつきけん

左歌。時雨もそめぬ。松のつれなき心は。いつもきゝふる
したる風情にては侍れと。此一首の躰。いまたいひおほせ
すやあらん。又忍戀の心にや。いかゝ。右淀橋にふしのつ
きたる證歌不二覺悟。ふしつけし淀のわたりなとよめる歌
あれとも。それにては侍らし。暫勝劣を存畧する者也。

八十二番

左持　権大納言實淳卿

せめて今契をかけは後の世をあふへき中とたのみてやみん

右　實隆朝臣

おなし世になにへたつらんなき玉をみし幻もありとこそきけ

左歌。契をかくるほとの事ならは。後の世を期するにおよはすやあらん。結語の詞もよはく聞ゆ。右の方□も勝までの事はおほつかなし。持たるへし。

八十三番

左 持　右衛門督季春卿

いたつらにたえす心のひくあみをあはての浦に朽はてよとや

右　元長

このまゝにおもひ消なは露の身をつれなき人も哀とやみん

左右の詞等同也。勝劣も侍らぬにや。

八十四番

左 持　權中納言宣胤卿

なからへてあふを限りと思ふ身に人もつれなき年やへぬらん

右　長恒

浪こゆる袖のゆふへは玉くしけかはるふたみのうら風そふく

左歌。めつらしからされとも。詞の心たしかに侍り。右かはるふたみのなとは。あはぬ心に宜やうに侍れと。浪こゆる袖の句そんなるやうにて。聊きゝにくゝ侍り。暫可レ爲レ持にや。

八十五番

左 持　參議左大弁廣光卿

この儘に逢瀬ならすは水無瀬河ありてかひなき名をや流さん

右　爲信

夜ところへて思ひかけにしこすのとにいつまて獨立あかさまし

左の。初句不レ宜。第二句も。逢瀬しらすはにてあらんかし。右猶外にたちあかさん事も。退屈すへき心地す。可レ爲レ持。

八十六番

左　師著朝臣

おもひもやまさ木の露の玉かつらつらなる枝の色も名のみに

右 勝　前内大臣

つれなさそたかひに見ゆる年ふれと靡かぬ人も慕ふうきみも

左歌。愚意おもひわけ侍らす。右は心詞露顯せり。可レ勝にや。

八十七番

左 持　季經朝臣

なひくてふならひもしらぬ槿の花に心をかくるはかなさ

右　權大納言通秀卿

あはれしれよし戀しなん逢ことにかへぬ命も人のためかは

左歌。源氏物語の齋院の事にやと推量し侍れと。一首のしたては。ひとへに槿花の事のみ聞えたり。右歌もいまたいひおほせぬにや。僻案におもひよる分は。第一句はあはれしらはと。一もしあまされ所也。かへぬも。かふるとありたきにや。いかさま持たるへし。

八十八番

左 持　俊通

おもはぬは慰めもせしたのめてふ僞をたにいかてきかまし

右　權大納言信量卿

逢事もなきみちのくのいつまてか心のうらをとふのすかこも

左歌。第二三の句の詞めつらしき。いかにそや。一首の躰も不レ宜ににたり。右もなきみちのく。おもひたきにや。又一首のこゝろ。卜慈の心なるへし。又持とすへきにや。

八十九番

左持　政顯

あふせなき水のあはれと思ひしれわか中河のよとむはかりに

右　按察使親長卿

羨まししちのはしかき錦木もかきりありける日数をそまつ

左の水のあはれ。一句の中の詞にては。頗聞にくきにや。右の。しちのはしかきの句。百夜錦木の千束。誠にかきりあるすらなれと。一首の始末。猶思惟ありたきにや。

九十番

左勝　賢盛

さすはひの心よいかにさもこそはわか紫におもひそむとも

右　正三位高清卿

別れちのうきしらぬのみなくさみに思なせとや人のつれなき

左。初句不レ宜ににたり。又題のこゝろもたしかならす。右のうきしらぬのみも。詞たらさる心ちす。持たるへし。

九十一番

左勝　元連

つゐにさて秋まつ頃のおもひにも紅葉のつとを限とやみる

右　從二位明茂卿

つれなしと恨はつるは前の世の契をしらぬ我身成けり

左歌。何事と弁出しかたし。伊勢物語に。昔かためたおれる枝は春なからの歌をおもへるにや。又源氏の角總の卷に。秋のけしきもしらすかほなる枝につけてやりし文の事にて侍るやらん。いかさま不レ逢戀の心には。ひしとかなへりともおほえす。右歌。契をしらぬは。むくひをしらぬにや侍らん。左の落居せさる間。猶勝劣を不レ定やあらん。

九十二番

左　顯慈

ゆく末のあふせともかな泪川せくにもれぬる袖はうらめし

右勝　長興宿禰

名にそ立忍ふの里の夕けふりきえぬおもひもよそにしられて

左歌の第四句。せくにせかれぬとありたきにや。忍ふのさとの夕けふりは。立まさるれるにやあらん。

九十三番

左　右近衛大将公敦卿

〔涙川カ〕せかれぬ袖のあた浪よたつ名をせめて逢にかへなて

右勝　爲房朝臣

柏木やむすひし露のことの葉をあたにも風の何ちらしけん

左歌。あふにかふる立名ならは。戀の本意は滿足せるにや。せめての云もし。猶も不足なる事あるへくや。右の柏木のことは。茵の下の落文にや。艶なる事の例なれは。しはらく勝とすへし。

九十四番

左持　權大納言教秀卿

名もしるきおほろ月夜の契こそ世にもれいつる例成けれ

右　實隆朝臣

えそしらぬたつ名はきても等閑に我やつゝみし人やもらしゝ

左。これも又彼物語をおもひつるにや。いかさま兩首の躰。勝劣も侍らぬものかな。

九十五番

左勝　權大納言實淳卿

よしさらは浮名にかへて中々に人のとかめぬ契りともかな

右　光長

あさはかにむすひはやらぬ水茎のなにとて跡は流いてけん

左歌。うき名にかへてとありて。人のとかめぬは。いかに心得へきにや。右も水くきのあとゝつゝけられては。聊こころもとなきやうなり。持たるへし。

九十六番

左持　右衛門督季保卿

もらさしの人の契やかはるらんさらてはよもと思ふうき名を

右　長恒

ぬれわふとおさへし袖を楯にて泪そめいたす秋の色哉

左。さらてはよもの詞聞にくし。又人の方よりうき名をもらさん事も情なきにや。右の歌。巧妙には聞え侍れと。袖を楯。おもひたきにや。然は只時雨にてとありても。ことはりは聞ゆへきにや。持たるへし。

九十七番

左持　権中納言宣胤卿

いつのまにうき名ははやくみちのくの忍かひなき中と成けん

右　為信

あさかりし心しられて鳰とりのみかくれはてぬ涙のうへ哉

左歌。うき名のみつる事おほつかなし。右のあさかりしも。いひおほせぬにや侍らん。持たるへし。俊峯にはうき名のみつるは。世にみちたる心にや。然は憂名は世にもみちのくとあるへきにこそ。右の淺かりしも。水の淺にては戀の心にいかに心得へきそや。古今のなをゝし鳥の水をあさみかくるとすれとのやうに。理もやかてきこゆこそよけ侍らめ。抑第一二句を。袖にをく心あさきはなとはいか侍るへき。我も人も稽古のため。所存を申侍るなり。比興々々。

九十八番

左持　参議左大弁廣光卿

せきあえぬ袖よりあまる涙こそなかれ行名のしるへ成けれ

右　前内大臣

いさゝらは同し心にいひ出てかこつかたなきうき名ともみん

左。殊なる難は侍らねとも。朝夕みなれたる心し侍り。右は。あまりに芳心なきやうなり。持たるへし。右のうたの心。たとひ我名はたつとも。人のためにはいひかくさんこそせめての情にはなり侍らめ。又終には本意をとくるたよりにもなりなんかし。次なから愚意の通を申侍るなり。

九十九番

左持　師著朝臣

とし月は忍ふになしてなくさみぬつれなき程そ顯てしる

右　権大納言通秀卿

さても猶たれにかこたんせきかぬる我涙よりなかすうき名を

左歌。未いひおほせす。大方忍ふとの事ならは。あらはれては中々なかく。おもひをたつへき申なるへければ。人のつれなさも。とかなるましきにこそ。右も前番の左の心に同し。持たるへきにや。

百番

左持　季經朝臣

かはり行人の心のおくよりもしのふのさとの名をもらしけん

右　権大納言信量卿

むすひしもうき玉つさの花のえにうつる契の色やみえけん

左。里の名をもらすとは。いかに心得へきそや。里の字はなくとも。おくの忍ふとはしられ侍らんかし。右もくたくしきやうなり。持たるへし。

百一番

左持　　　　　　　　　　　　　　　　　　俊　通

下葉にそ露はむすひし柏木のあやしきまての色は根めし

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　按察使親長卿

うしてたゝ標につけし言のはゝ世にちりそむる初めと思へは

左の柏木。是も物語をとられ侍るにや。あやしきまての色。おもひわかれぬ心ちし侍り　右又おなし物語の心にや。但これも文をたくりし事を賦却せるやうに聞ゆ。可ㇾ爲ㇾ持。

百二番

左勝　　　　　　　　　　　　　　　　　　政　顯

こひわたる人に心をそめ河の深くも色にいてにけるかな

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　正三位高淸卿

霜ならてなみたの露にあらはれぬおもふ心の松のみさほは

左。ことなる難なし。右歟。露はかりにても事たりぬへし。霜のをき所そ證なきにや。左勝たるへし。

百三番

左持　　　　　　　　　　　　　　　　　　賢　盛

うき名さへなかれ出けり涙川おもふ心の底もあらはに

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　從二位明茂卿

いかにせんねにあらはるゝいその松我袖かけて浪はこえつゝ

兩首の躰同條也。持たるへし。管見には左歌初句。うき名にそはてけなかるゝなとありたきにや。右も第一句。うらみかね。終詞浪もこえけるなとやあらまほしき。いかゝ。

百四番

左勝　　　　　　　　　　　　　　　　　　元　連

うきしつみおもひ亂れて難波江や浪によるもの跡を見すらん

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　沙彌宗譽

はかなしやさかてうき名にたち花の小島に見る末ほとをふに

左。題の心はおほつかなきやうなれと。一首の餘情あきて聞え侍り。右も彼うき舟の君の事にや　首尾の詞このましからす。左のかちとすへし。

百五番　　　山家夢

左勝　　　　　　　　　　　　　　　　　　前右大臣

夢にさへ又もうき世をみせしとや枕におつる軒の山かせ

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　爲廣朝臣

山かけはあらしも瀧も聲なれや心とさむる夜半の夢かな

左右ともに。ことなる難なし。左は聊まされるにや。可ㇾ爲ㇾ勝。

百六番

左持　　　　　　　　　　　　　　　　　　右近衞大將公敎卿

きゝなれて夢のうちにも見にも只やま里は松風の音

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　實隆朝臣

夢路さへ身をうき草のたくひとやさそふ水ある山川の音

左歌。夢のうちに松かせを聞む事。おほつかなし。右は山家の心たしかならす。持たるへし。

百七番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　　權大納言季秀卿

山さとにかりねしてたに世のなかをかけはなれたる夢の浮橋

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　元　長

おとろかて夢むすふらん山深みあらしに闘る夜半の枕は

右歌。二三句の詞つゝき。このましからす。又おとろかても剰語なるへし。左勝れるにこそ。但第二句は。かりねせしよりとあらまほしきにや。

百八番

左持　　権大納言實淳卿

山深みすむともしらていかなれは夢ちにかよふ人め成らん

右　　長恒

やすく身をおく山住の夜の夢にさそはぬ友の見えてくやしき

左右の歌。ともにもて夢中に人のとふを厭却せる心なり。一首の躰も等同也。いかさま持たるへし。抑夢といふ事は。夜のおもひなれは。我心にみゆるものなり。すむともしらてなと。人のとかのやうに難二心得一。又山深き住家までも。友を待心はあるへきそかし。人めをいとふも。心もとなきにや。右やすく身をとうち出たる詞。穏便ならす見えてくやしきも。わさとみたる夢のやうに聞え侍り。いかゝ。僻案の至也。恐惶々々。

百九番

左持　　右衛門督季春卿

松の戸にますからき世を思ねの夢をはかなみあらし吹也

右　　為信

すゑかけよ心のいほを山ふかくむすふとみつる夢のうき橋

左。松の戸にさしこもる身の。うき世をおもひねにせん事は無道心に侍るにや。又松の戸をさすかとつゝけたきにやあらん。右歌もいまた夢中の事にて。しかと山居のことろは侍らぬにや。いかさま持たるへし。

百十番

左　　権中納言宣胤卿

故郷の都にかへる夢をたにさそふのきはの山風そうき

右勝　　前内大臣

山里のとはれしにはを今朝みれはあとなき夢の夜はの通路

左。古郷の都。一にて事たりぬへきにや。右殊宜。勝へきにや。但雪なとのありぬへくこそおはえ侍れ。

百十一番

左　　参議左大弁廣光卿

山里にたえてすむ身は夢ならて浮世にかへる道やなからん

右勝　　権大納言通秀卿

をのつからうき世の夢も山ふかみまた住なれぬ程や見ゆ覧

左右ともに浮世を夢に見るにとりて。左は世にかへらまほしき心あり。山住しても益なくや侍らん。右はことはりにかなひ侍り。まされるにやあらん。

百十二番

左持　　師著朝臣

いとひすむ心にもにす山里の夢はうき世になにかよふらん

右　　権大納言信量卿

のかれはとおもひしものを山里もすめは浮世にかへる夢かな

左右のこと葉同躰也。持たるへし。

百十三番

左　　季經朝臣

うつゝには人めも草もかれにけり夢たにみえよ冬のやま里

右勝　　按察使親長卿

夢かよふあとはありとも山ふかみ憂世にかへる道はのこさし

右。冬の山里。人めも草もかれん事に。本歌の心異論におよはす。さらんからに。夢にたに見えよとねかへる事。おほつかなし。又人目はさも社侍らめ。草をも夢みたき心あり。かた〳〵難ニ心得一。右はうたさままされるにや。但踏と道との文字を。上下とりちかへ侍らは。可レ然おほゆるものなり。

百十四番

左　俊通

鐘のをと松の嵐やすてゝすむうき世にかよふ夢をそふらん

右　正三位高清卿

九重の雲井をみすてし夢は覺て軒はの山にのこる松かせ

左。ことなる難なし。但世の常の心なり。右。九重の雲井をみつるかこ子細あるやうなれとも。たとへは忠臣の君をおもふ心夢中に草暫せん事。先賢の有無にはよるへからす。しはらく勝とすへし。但第三句。文字をあまされたるゆへに。さゝへて聞えたり。只はもしをのそかるへきにや。

百十五番

左　家　頼

遁れきてすむなる山の奥まては浮世の夢の見えすもあらなん

右　從二位資實卿

吹夜半もさすかとたえて山里のあらしやみする夢の浮橋

右。上の句のつゝき。いかにそや。作者は夢のとたえにこそ詠せられけめ。あらしのとたえにもまちあひて聞え侍り。左のうたこゝろさし叶ふるによりて可レ爲レ勝。

百十六番

左　具　親

まれにみる枕はよきよ夢の世をいとふみ山のあらし成とも

右　沙彌蓮生

峯の庵にれかすねの雲消て夢もあらしの風そ聞ゆる

左。世をいとふにいたりては。まれにみても無益なるにや。又よきよの言葉は。ふるめきたり。をき所によりて。よくもあしくもなる事なり。右歌。忠岑か長歌をおもへるにや。夢雲の故事。巫山の神女の事にも思なさるゝ様にて。聊俤ある心地す。持たるへし。

百十七番

左　元　達

山里にとひこし人をおもひねの夢ちもたゆる峯の松風

右　長典侍

奥山のあらしや宿にねても猶うき世にかよふ夢のあはれさ

左右の歌。をの〳〵おもふすちをよまれ侍り。いつれをよしいつれをあしともいひかたし。しはらく持たるへし。

百十八番

左　前右大臣

述懐

いかにせん定めなき世になくさめとうきはかはらぬ老の涙を

右　實隆朝臣

あすか川名にこそたてれ世にすめは心の水そ淵は瀬になる

左歌。世間の無常。老後の述懐。事ふたらしきやうなれと。七旬餘の歎箭。泪もろき事にふれて。双襟をうるほすものならし。右あすか川名にこそたてれは。聊心得かたく侍り。心の水淵をも。短慮未思わけす。左勝へきにや。

百十九番

左　右近衛大將公敦卿

遠からぬむかしと今はたち花になれし雲井のみはし戀らし

右勝　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　元長

いつまてそ夕になれはひとりゐて身のうき事をなけく心も

左歌。いかさま右歌のかきの所詠とはみたまへと。一はうの句つくり。いまた沈吟のたらぬとおほえたる所あるにや。右貫之か長歌の心。すてかたく侍り。勝へきにや。

百二十番

左勝　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　権大納言敦秀卿

とし浪のよる〳〵なけくかひもなし雪も螢もあつめえぬみは

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　長恒

さきかゝる色をそたのむ人ことのことはの花のかけの朽木も

左。よる〳〵歎はいかにそや。十二時中比うれへはあるへきにこそ。右歌。他人の閑花をかけの朽木のうらやむ心にや。いまたいひおほせぬ心地し侍り。心は花になさはなりなんとこそ古人もよみ侍れ。かけの朽木とおもひくつをれん事は。うたてあるへきにや。たとひ赤人人丸の神妙の風にこそ。くひすをつかすとも。定家家隆の妖艶の姿に肩をならへむ事は。たゝ心さしのなすわさなるへし。

百二十一番

左持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　権大納言實淳卿

仕ふへき我身ひとつと頼ますはうきにまかせて世をや厭はん

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　為信

おろかなる身は歎くともいにしへに立もめつらし和歌の浦波

左は一流断絶の事をなけくに似れとも。その心たしかにきこえす。右は累代秘蔵の跡をおもへるに似れとも。その詞いまたいひおほせす。なすらへて可レ為レ持。

百廿二番

左勝　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　右衛門督季春卿

位山代々のあとまてのほりきて年たかき身そおとろかれぬる

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　前内大臣

すこしかねて月日そ遅きわひ人は老せぬ門にすむみならねと

左の位山。いさゝかおもひたき事も侍れと。大方子細なきにや。右不老門の日月遅事。さる事にけ侍れと。初五字なと俗に聞ゆ。近日の弊たらく。たれもさこそおもひ侍れと。歌におきては左まされるにや。

百廿三番

左勝　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　権中納言宣胤卿

身をたひと思ひそわふるとしをへてすむ宿とても主ならねは

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　権大納言通秀卿

なをたのめ神もわすれし天地とともにといひし君か代なれや

左歌、これも近日借屋の一所不住の事をなけき侍るにや。三かさ山のふもとに。数年をおくる事なれは。おもひしられ侍り。右天地とともにといへる神代のみことのり。誠にさりともとたのみをかくるはかりなり。なすらへて持とすへし。

百廿四番

左持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　参議左大弁廣光卿

更にまた日に三たひもやかへりみん一かたならす愚なる身は

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　権大納言信量卿

いつまてそうきふし繁きしけ糸の苦しやかゝる乱れあるよは

左、三省の工夫。曾参かあとをつくへき。句かたかるへし。右、あまりに糸の秀句にまとはれたり。又持たるへし。

百廿五番

左持　師著朝臣

わかのうらや世々にのこせしあともなく汐干の千鳥哀に鳴也

右　按察使親長卿

四とせまてなかくふへしとおもひきや君に別し時の心は

左歌。和歌の浦の千鳥。此風情は耳なれ侍り。世々にのこせしもあるへきにや。又世々の詞はかりにて。我みの事になるへき事も。いさゝか心もとなし。右歌。その身にとりての思をのふるうへは。是非をつけかたし。暫勝劣をさためすやあらん。

百廿六番

左持　季經朝臣

あまてらす神そしるらし君か世をいつる日ことにいのる心は

右　正三位高清卿

いたつらに光のかけをくりきて愚なる身よ誰にかこたん

左。君か代をいのる心。普天の下誰かをとることは有へき。乍レ去神かくるまでの事はこと〳〵しきにや。それとても又各の志なるへし。右光陰可レ惜。時不レ待レ人。まことにわれも人も油斷のみにてあかしくらす。なけきてもなけくへき事也。持とすへし。

百廿七番

左持　俊通

うしといふたゝ大方の世の中も人にはなにとかはる思ひそ

右　從二位明茂卿

老の世におもひこそをけ我家のみちをつきては誰かつかへん

左。大方の世のうさも。貴賤貧富によりてかはる心にや。さもありぬへし。右は家業の斷絶をなけくとおほえたり。力なきこととはいひなからも老悔の泪。袂をうるほすものなるへし。持とす。

百廿八番

左持　政顯

雲井にそいそきつかふる天の戸のあけの袂の數ならぬ身も

右　沙彌春誓

すつる身やさすかあはれと三笠山釋迦牟尼佛の出し世なれは

左。天の戸のあけの袂なと。一ふしあるにたれとも。雲井にそいそきつかふるなといへるわたり。宜もはへらす。右の佛號おもひもよらぬ事の出來せるにこそ。かよふの經文佛名なとは。獨吟の五十首百首なとには。雅意にまかすへし。歌合なとには。いかにも詞の中に詞をえらひ。心の外に心をたつぬへきにや。歌の本意にあらされは。よくとても勝ことはありかたかるへし。殊に祖神第一の御殿の垂迹をあらはされたる事なれは。判者の身にあたりて。是非をいはす勝たるへきよし申たきやうなれと。和歌のみちにつきて。持と申侍るへし。

百廿九番

左持　賢盛

しるへせよ淸き渚にことの葉の玉ひろふてふわかの浦人

右　長典宿禰

世のおさめ正しき道をあふきても猶すて難き身そをろかなる

左。しるへすへきわかの浦人も。ともしき時節なれは。心元なくおほえたり。右。治世安樂の時にあたりて。堪忍にをよはさることそ誠に不便にはおほえ侍れ。又持たるへし。

百三十番

左　　　　　　　　　　　元　連

とにかくに限りある身をいとはしな愚かなるにもよらぬ憂世は

右勝　　　　　　　　　　爲廣朝臣

今更に心くたけて和歌のうらやかへらぬ浪の跡をしそ思ふ

左。有涯の境界。賢愚をえらはぬ心にや。右かへらぬ浪なと。舊跡をおもへり。歌合一巻の結句に優にして。しはらく勝とすへし。

右親長卿家歌合以百花庵宗固本及古寫一本挍合

武州江戸歌合　文明六年六月十七日

心敬判

一番　海上夕立

左勝　　　　　　　　　　平　盛

うちさやき夕立雲もはや船はをくれてそ行興津しほ（しら波イ）風

右　　　　　　　　　　　心　敬

しくれめく雨のあら海秋はまた遠嶋かけてめくる雲哉

二番

左　　　　　　　　　　　孝　範

しほをふく興のくしらのわさならて一すちくもる夕立の空

右勝　　　　　　　　　　道　灌

海原や水まくたつの雲のなみはやくもかへす夕立の雨

三番

左持　　　　　　　　　　瑞泉坊

とにかくに舟路そつらき夕立のはれてはくもる興つしほ風

右　　　　　　　　　　　資　常

見るまゝに日かけかたよる遠嶋やかゝりもはてぬ夕立の雲

四番

左勝　　　　　　　　　　好　継

めにかゝる山さへあらぬ海原やなみにたゝよふ夕立の雲

右　　　　　　　　　　　卜　巖

興津なみしほひを遠み色消て雲そみちくる白雨の空

五番

左勝　　　　　　　　　　恵　仲

海原やまきをく舟の篙さへにとりあへぬまの夕立の雨

右　　　　　　　　　　　　　　　音譽

音あらきなたの波路のしほ風に歸れはむかふゆふたちの空

六番

左持　　　　　　　　　　　　　　資俊

たのみこし山の端さへにかきくもる興津舟ちの夕立の空

右　　　　　　　　　　　　　　　資雄

きおひきぬ汐かせはやみ雲かけていそく小舟のあとの夕立

七番

左勝　　　　　　　　　　　　　　長治

いかりうつほともなくてやゆふたちの跡よりかゝる沖つ舟人

右　　　　　　　　　　　　　　　快承

海士小舟夕立波にかへりかね入江をよそにぬるゝ雨かな

八番

左（[illegible]）　　　　　　　　　　　珠阿

海原やつりの小舟になるかみのうをの命をやすめぬるかな

右　　　　　　　　　　　　　　　宗信

見る〳〵も猶かさなりて松陰の海すこしある夕立の雲

九番　　深山納凉

左勝　　　　　　　　　　　　　　卜巖

み山ちやむすはぬ水もをのつからこほるはかりの袖のしほ風

右　　　　　　　　　　　　　　　瑞泉坊

身にしめと秋夜はまたんみ山邊の夕の陰に槇の下かせ

十番

左　　　　　　　　　　　　　　　資常

風かよふ道さへたゆるしけ山も我からならすすゝの篠原

右勝　　　　　　　　　　　　　　好繼

風のをと水のひゝきも笹の葉のみやまは夏のかけともなし

十一番

左持　　　　　　　　　　　　　　長治

かけふかく槇立山の高ねより落くる水の音そ凉しき

右　　　　　　　　　　　　　　　惠仲

奥はたゝむすふともなき山の井の淺くはおもひいらぬ物から

十二番

左持　　　　　　　　　　　　　　音譽

いかにせん又そとひこむ夏の日ももらぬ深山の槇の下庵

右　　　　　　　　　　　　　　　資俊

夕まくれしらぬみやまのやすらひに夏をわするゝ槇の下風

十三番

左勝　　　　　　　　　　　　　　平盛

世中をおもひとらても山ふかみいてかてにする木々の下かせ

右　　　　　　　　　　　　　　　道灌

なをさりのすゝのあみめをならせとも嵐の枕秋とたになし

十四番

左持　　　　　　　　　　　　　　快承

わすれてそ秋におとろく篠のはのみやまかくれの露の夕くれ

右　　　　　　　　　　　　　　　珠阿

うつり行月日もわかぬ山なから秋やゝちかき槇のした風

十五番

左勝　　　　　　　　　　　　　　資忠

夏の日をよそにみやまのから衣たもとすゝしき瀧の音かな

右　　　　　　　　　　　　　　　資雄

これ秋に露もこぼれてさゝの葉の深山のあらし面かけにたつ

十六番

左　心敬

春も猶松の雪たに消さりしみ山はまたき秋かせそ吹

右勝　孝範

さゝのはに霜こそあらめみしかよをいつとみやまの月の下風

十七番　連夜待戀

左勝　宗信

恨みしなさても一夜のへたてなくまつと計りの月日へよとや

右　瑞泉坊

誰ためにに名をはとゝめん夕月夜有明までに影をならへて

十八番

左(勝)　好継

きりともと待に聞こそかなしけれこぬ夜つもりの浦風の聲

右　資雄

いきてよにあすやはまたん恨てもいく有明にこりぬ命そ

十九番

左勝　恵仲

有明の月はかりたにつれなくはふくるよことの空もかこたし

右　音譽

いつをさて限ならましよな〳〵を月にかこては有明のそら

廿番

左勝　貴侠

夜をかさね待しかひなくこぬ人は我なみたこそかたみ成けれ

右　卜厳

今こむと頼めかたらひしみか月を有明の空に待ならへとや

廿一番

左持　長治

敷妙のしのふの衣よることにまつをならへてとかぬひもかな

右　快承

衣を重ねくつるはかりの小夜衣いかゝは夢にかへしてもみん

廿二番

左　珠阿

習ひこし心の程もわすられてあすとうらみんわか身ともなし

右勝　資忠

山のはにいく夜むなしき涙ともわか有明は人しれすして

廿三番

左(勝)　道灌

かきくとき数へし夜はの心さへいかによはりて言の葉もなき

右　心敬

有明にめくるやいくよ小車のしちをむなしき床の月影

廿四番

左持　孝範

今夜はと月のすかたのかはるまてたのめぬ空を詠なれぬる

右　平盛

いくめくり有明になる月そとも見さらん人は猶やまたまし

心敬　持一　負二

平盛　勝二　持一

太田 道灌　勝二　持一

孝範　勝一　持一　負一

資範　負三

音譽　持一　負二

珠阿　持一　負二

貴侠　持一　負二

四番右

好継　勝二　持一　　　　　　快承　持三

卜巖　勝一　持一　負一　　　資常　持一　負二

宗信　勝一　持一　　　　　　瑞泉坊　持一　負二

恵律　勝二　持一　　　　　　資忠　勝二

長治　持二　負一

判者

心敬

講師

平盛

古諺云。種桃無李實。夫太田道灌者。源三位頼政十代之後胤也。右文右武之美譽芳 名顕于世。故於武城一興行於此歌合。招心敬法印爲判者。自歌英雄挽肝也。而今從道灌公六代之孫枝。太田備中守源朝臣資宗。令臨写之次。八番右之和歌一篇漏脱可補之云々。寔墨假補剪尾此番當持歟。若依之可免其罪。但後生翻塵可笑耳。

寛永十三年五月十八日　　　　　光(印)　亞槐藤判

右武州江戸歌合以屋代弘賢本校

和歌部六十五歌合三十一

文明九年七月七日七首歌合

題

海邊七夕　折草花　晴夜月　數無名戀

[illegible]戀　山家雨　磵下有松

作者

左

女房　式部卿邦高親王

入道親王貢永　前左大臣守

入道前左近衛大將藤原公數女　權大納言藤原季春

按察使藤原親長　勾當内侍

參議左近衛中將藤原季經　藏人頭右近衛權中將藤原實隆朝臣

右

前左大臣　安禪寺宮

[illegible]法親王　入道前左大臣女

内大臣　權大納言藤原敦秀

從一位藤原高清　參議右大弁藤原量光

左近衛權中將藤原爲廣朝臣　右近衛權中將藤原實興朝臣

判者

一條禪閤兼良

一番　海邊七夕

左　女房

心なきあまも今夜は藻鹽草かきて手向よ星合のはま

右　前左大臣

鵲の翅にかけよ七夕の今よひ行あひの天のはしたて

左。ふ月七日は。よの中の事として。星合の空を詠め。水かけ草のことの葉に。おもひの露をしたてつゝ。手向にかふる日なりけり。心なき浦のあま人も。世にしたかふ習ひなれは。とはたる船のかちのはに思ひをよせて。藻鹽草かきあつむる程のしわさはなとかなからんとなるへし。右あまの橋たては。神代のむかし。女神おかみのあまくたり給ひしあまのうきはしといへる一說有。しからは二の星の行あひのかよひち。たよりありといふへし。鵲のはしは。二の鳥の翅をならへて橋とせるにや。又橋は別に有て。翅

に是をかくるにや。いつれときたゐかたけれは。詞のたよりにしたかひて。ともかくもよからむは。行かたなるへしとも覺えす。またかさゝきは。まつは鳥を申侍れと。さむきすさきの翅をも。源氏物語に鵲と名付侍にや。是によりて家隆卿歌にも。鵲のわたすやいつこ夕霧の雲井にしろき峯のかけはしとよみ侍にこそ。

二番

左勝　式部卿邦高親王

浪こさむ恨はあらし七夕の絶ぬちきりのすゑの松山

右　安禅寺宮

星あひの手向に須磨のあま衣かすてふ事もまとをなるらん

浪こさむうらみはあらしと侍る。彼あたし心もなき星のちきりを。松山のなみにかけてよまれ侍り。又かすてふまとをなるは。須磨のあまの鹽燒衣おさをあらみといへる歌をとられ侍れと。手向とあまりて。又かすと侍れは。同し事のやうに聞え侍り。かすてふ事のまとをなる心に取なされ侍しは。昔かきまさぬといへる和歌の心にかゝりて。歌の儀侍も侍らんかし。愚なる心には思ひよる一ふしを申侍るなり。左ことなる難なきにや。

三番

左持　入道親王道永

けふといへは手向はよその星鴫やあらぬかちとそ秋の舟人

右　惠厳法親王

人なみに袖をかすてふけふのみやあまの衣もほしあひの空

手向はよそのほし鴫や。作者の心には。手むけは姿のほし鴫にはなき心によまれ侍れと。詞のうつり。いかにそや聞え侍り。又手向には袖をきるなとゝ。古人も讀れ侍れと。此歌に取ては。袖はかりをかすやうにきこゆ。如何。持たるへし。

四番

左勝　前左大臣室

心なきあまもや今夜人なみに鹽たれ衣ほしにかすらん

右　入道前左大臣女

七夕はいかに契て松山にこすてふ波のなきよなるらん

人なみにあまの心をかす衣は。うへにもみえ侍れと。心なきあま人と侍れは。人なみにかす心は同し事なから。いひおほせて聞え侍り。又鹽たれ衣星にかすらむも宜侍り。松川のなみも。すきつる番に打出侍れは。此歌にとりては。かならす波のこゆへきやうにきこゆ。本歌の心に相違し侍り。左まされるとや申侍らむ。

五番

左勝　入道前左近衞大將藤原公數女

七夕に今夜かしてやしほたるゝあまの衣も片時ほすらん

右　内大臣

星あひのやすの川原に伊勢の海の神代の昔思ひ出らん

左。有のまゝに云くたされて。思ひ入たる所侍らぬにや。右。神代のむかしは天照太神のそさのおの尊。あまの八十川原をへたてゝ。いせの海にもよりきたらぬことに侍れは。よもさまては侍らし。かの國に星あひの濱といふ所のあるにつきて。もし子細ある事にや。もとよりつりをもて。あまつくみをはかる事にて侍れは。それまでの事もいまた及侍らす。左。たしかなるにつきて。しはらく可ㇾ爲

レ勝哉。

六番

左持　權大納言藤原季春

星あひの空にはたれか鵲のよりはにゝたる天の橋たて

右　權大納言藤原敎秀

暮ぬとて釣する海士はかへる也今やいつらむ天の川船

天の橋立。かさゝきのよりはに似たる事は。空にはかりかたかるへし。にたるの文しにては。なくともありなんかし。又天川は。かた野にちかき名所にて。業平朝臣も。七夕つめに宿からむとは。おなし名につきてよみ侍り。七夕のこころなくは。ひさかたのなとゝいはすは。なを名所のあまの川にや成侍らん。しはらく持とすへし。

七番

左持　按察使藤原親長

けふといへは名にもあひあふ星嶋や馴なれ衣海士もかすらん

右　從二位藤原高淸

四方の海の波にや今夜七夕のとわたる船のかけを漕らむ

左。一二句よろしからす侍り。右かけを漕らむも。誰にてもこきてをいはすは。猶大やうにや侍らん。勝負わきまへかたし。

八番

左持　勾當内侍

伊勢のあまも苅て手向よ七夕の年に稀なる中のみるめを

右　參議右大弁藤原量光

名にしおふ空にかよひて星合の濱へ凉しき秋のはつかせ

左。としにまれなる中のみるめを。右。濱邊凉しき秋の初風。いつれも優に聞え侍れと一二句なを思ひたき心地す。にしきのはかまをきたるとは。かやうの事をや申侍らん。

九番

左持　參議左近衞中將藤原季經

浦風や浪のをすけてからことを手向にすらん星あひの空

右　左近衞權中將藤原爲廣朝臣

袖の上やこよひほさまし七夕の逢瀨の浦の秋のはつ風

浪のをすけてからことをなとは。和歌の詞といひ。一首の躰もあしからす聞え侍り。七夕の逢瀨のうら。みみとをき名所にては侍れと。よりきたれるやうには侍り。たゝし七夕のあふせのうらによる浪のよるとはすれとたちかへりつゝ。中務卿宗尊親王の歌と。ある草子に見及ひ侍り。作者はしらすして。讀合侍れと。歌合なとには引出さるゝか不幸とも申。又高名になることの侍るなり。すてに同類あるうへに。始の五七もいかにそや聞え侍り。左無難につきて勝へきにや。

十番

左持　藏人頭右近衞權中將藤原實隆朝臣

枯はてぬ江にこそありけれ難波かた芦のひとよの星の契りは

右　右近衞權中將藤原實興朝臣

手向とや空に聞えし星合の折からことの浪のしらへは

芦はかるゝ草なれは。枯はてぬ江には。いかてかはり侍るへき。からことの調も。さきにはや耳にふれ侍れと。是は調子もひきく聞ゆ。亦二句のてにはも。聞えんにてあるへきにや。しはらくなすらへて持とすへし。

十一番　折草花

左勝　邦高親王

秋風のよそはぬさきと折袖に露はみたすな花の萩原

右　入道前左大臣女

おらは落とらはけぬとも萩か枝のつゆ外にみん花の色かは

折は落ぬへき萩の露。源氏物語の詞には侍れと。詞のつゝき。いかにそや聞え侍る。つゆほかにみむも。よろしからさるにや。左ことなる難なかるへし。

十二番

左勝　女房

月草の花も咲野の女郎花移るこゝろに手折侘ぬる

右　尭胤法親王

秋萩の色に心を盡してもあかすや袖に猶手折まし

月草のはなに移ふ心なから。女郎花を手折かね侍り。兩人を思ひ。こひの心にかよひておかしからさるにあらす。右も。さしたる難はみえ侍らねとも。珍しからぬ心地し侍れは。月草の色は猶そめまして侍るにや。

十三番

左持　前左大臣室

いつれとも折そわつらふ花の色の千種にみゆる野への錦は

右　前左大臣

まてしはし萩かるおのこ一枝を折たに惜き岡のへの秋

千種の花のにしきは。折わつらふ心。まことにいひおほせ侍。右かの岡に萩かるおのこは。戀の心なるを。季に取なされ侍。又おるたにおしきなとは。花にめてたるこゝろ。わりなく聞え侍り。持とすへくや。

十四番

左持　入道親王道永

手折てもたゝ露の間の色やけにやかて移ふ槿の花

右　安禅寺宮

手折ともつきしとそおもふ武藏野や限もみえぬ花の千種は

左の槿。源氏の移るてふ名はつゝみともなと侍し事。おもひ出ぬには侍らねとも。露のまの色と有て。やかて移ふは。同し事のやうに聞え侍り。右むさし野のかきりも知らぬ千種は。たとひ朝な夕なに。あけまきなとを入てかるとも。つきぬへきことにあらさるを。手折ともつきしとそおもふなと。あらましことにもいふへきことにあらさるにや。經信卿の。君か代に此ことはをよみ侍る。かやうの事は。まことにことはりにかなひ侍るへし。

十五番

左持　季經卿

過かてに折てそみつる女郎花つよき心もあらしと思へは

右　量光卿

手折より風にしらせぬ秋萩のちらて移ふ色やみてまし

つよからぬは女の心なれは。女郎花によそへられ侍る。一ふしなきにあらす。ちらて移ふも。其ことはりなきにあらす。なすらへて持とすへし。

十六番

左持　親長卿

置露はみたれにけりな誰しかも認て折つる秋萩の花

右　内大臣

をのつから分る野風に袖かけてなひけは手折女郎花哉

誰しかもとめて折つる秋萩は。古今の歌を思へる。そしりところは侍らねと。もとめての詞。かの本歌は。春霞たちかくすと侍れは。認てことはりきこえ侍り。是も其心。上の詞に有たきにや。又女郎花なひけは手折は。心ならす。ゆくてに手折やうにきこゆ。さらすとも。名にめてゝは手折へき花にこそ侍らめ。

十七番　左勝　入道前左大将公敷女

袖ふれて手折まかきの萩か花殘すかたえは露もちらさし

右　政秀卿

落ぬへき露のかす／＼心地して其まゝ手折野への秋萩

左。のこすかた枝はおふのうらなしなとの心ちす。露もちらさしもいかゝとおほえ侍り。右歌。折ては落そしぬへきとこそ。萩の露をはふるくも讀侍るを。露のかす／＼おとさす折へきことは。よにありかたかるへし。又萩の露玉にぬかむとゝれはけぬとも申侍るは。いかにも折らてこそ露の見所は侍らめ。

十八番　左持　實隆朝臣

白妙の袖に手折は女郎花尾花こきませかさすとやみむ

右　爲廣朝臣

折からにきえなむとする玉さゝのあられもしるし萩の上の露

花すゝきをは。ほに出てまねく袖とはよみ侍れと。白妙の袖。なくはこそあらめ。それを尾花と見なさむ事いかゝ。又尾花はかさす程のはなにも侍らぬにや。右消なんとする玉篠のあられ萩の露なとは。かの物語に。いたくかはりたる所も侍らぬうへ。あられもさしいてゝ聞え侍り。いかゝ。

十九番　左　季春卿

百敷の花の錦になをさりの我袖ふれて折もはつかし

右勝　高清卿

手折きてうき名やたゝん女郎花はなの心もしらぬ物ゆへ

左。なをさりの袖は。たとへは大貳三位か。たかなをさりの袖かふれけむと。梅の歌によめるに。おもひなすらへ侍れと。はつかしの詞。是又松のおもはむ事もと。古へも讀侍れと。このましからぬらへ。此一首にとりては。恥かしと侍らすとも。其心はきこえ侍るへきにや。右女郎花仇の名にやたちなんと侍れは。うき名やたゝんは。さもこそ侍らめ。心もしらぬなとは。いひおほせぬやうに侍れと。歌めきて侍れは。増るとや申侍らん。

二十番　左持　勾當内侍

立よりてさのみ手折は秋の野の花の錦の色やつすらん

右　實興朝臣

今日といへは分ても手折ひこほしの其名にかよふ槿の花

秋の野の花のにしきは。いくはたはりともいふへきかきりにあらぬを。色のやつるゝはかり手折ん事は。いかゝと覺え侍り。ときにむさしのゝ花の千種の歌と。其心おなしきにや。牽牛花は朝かほの名に侍れと。七夕の題侍りし上。又ひこほしを出され侍りしは。傍題をおかすとや申侍らん。

廿一番　晴夜月

左勝　　入道親王道永

高見渡空のみとりもひとつにて雲こそなけれ秋のよの月

右　　實興朝臣

かくはれわたる空へはるゝ夜半はあらし秋とて月の又は霞とも

左歌。空のみとりもひとつにては。秋水共長天一色なるといへる心に叶侍り。右雲をへの詞。心得かたく侍り。秋とて月の又はすむともと。今夜ならては晴る事のあるましきやうに聞え侍り。左勝に侍るへし。

廿二番

左勝　　前左大臣室

あきらけき光ならへて雲の上にいく夜の月の影かすむへき

右　　内大臣

秋風に晴る雲井の月はなをすむ空たかく行としもなし

あきらけきひかりならへて雲の上には。わか君の明徳てらさぬ方もなき心にや。亦いくよの秋は月もすむへきといひすてられ侍る。たけたかき躰なるへし。右の雲井の月も。同しやうに侍れと。下の句なとは。左まされるにや侍らん。

廿三番

左勝　　女房

一むらの雲も残らぬ久堅の空の限や月はすむらん

右　　高清卿

代を照す君か光もをのつから空に曇らぬ秋のよの月

左。一村の雲も残らぬ空のかきりは。清光何處にか無と作れる詩の心。おもひ出され侍り。右。代をてらす君か光も。祝言なれは負へきにあらぬにや。

廿四番

左　　邦高親王

秋よいかに隈なき影の添ぬらん同しみ空に月はすめとも

右勝　　前左大臣

照もせすくもらぬよりも秋の月さやけき影そしく物もなき

秋よいかにくまなきかけの添ぬらんとありては。月はすめともとは。有ぬへくも覚えぬてにはに侍るへし。右照もせすくもりもはてぬ朧月夜を。さやけきかけにとりなされて。しく物そなきと侍。まことに可レ然にや。さはありとも。春を好心に。おほろ月夜を。なをしく物もなしと申人もや侍らん。それも八月九月の空の光にたいしては。同心する人こそ有かたく覺え侍れ。

廿五番

左　　親長卿

身には今心のくまの有なしもしらてさやけき月にめてつゝ

右勝　　量光卿

大空は雲こそなけれ千里にも心のまゝの月やみるらん

左。心の隈なからむたにも。おほつかなく侍に。有なしもしらぬやいかゝ。さやけき月にめてしも。心もとなくこそ覺え侍れ。右。一天に雲なくして。千里の月あきらかなる心。おもふさまにて。めてたくこそ覺え侍れ。

廿六番

左　　勾當内侍

秋かせのあたりの雲を拂ふよは心もはるゝ月をみるかな

右勝　　爲廣朝臣

みる儘に心の隈もなかりけり月やうきよの外にすむらん

心もはるゝも。心の隈なきと。おなしほとの月のひかりに

侍れとふきよの外に澄らんは。難歌のたけありて聞え侍り。

廿七番

左持　實隆朝臣

さはるへき雲なきよはゝ月のうちのかつら計そ隈と見えける

右　敎秀朝臣

月のうちのかつらも今夜なかりけりたゝ浮雲の晴るのみかは

杜子美か詩に。斫却月中桂。清光應更多と作るは。桂をきらは月のひかり増らんと。いへるこゝろなれは。隈となるへき事は。もろこしの詩歌の心に叶侍るにや。又古き歌に。紅葉すれはや照増るらんといひ。光を花とちらすはかりをなとゝよめるは。月の桂のあるへきうへにて。さま〳〵に風情をめくらし侍り。然に天地と共にねさしそめし久かたの中の樹の。今夜しもなかるへき事。頗理にそむき侍るへし。左の持に折もたる家の風を吹ならふへくこそ覺え侍れ。

廿八番

左持　季春卿

浮雲は跡なき空に殘月をさそひ殘して秋風そふく

右　安禪寺宮

今夜獨隈なき月にあくかれて千里の外も思ひやるかな

殘月殘して秋風そ吹。又千里の外もおもひやるかな。ともにことなる難なきにや。持とすへし。

二十九番

左持　入道前左大將公敦女

秋風のふけゆく儘に詠れは月に消ぬる四方のうき雲

右　入道前左大臣女

影たのむ人の爲とやみかさ山さしてくもらぬ月の光は

左はふけ行とあらは。秋のよにや侍らん。右影と光とはふるくも病に申侍れと。かけは山のかけになし侍らは。三笠の月。作者の身にあてゝ。まくへしとは申かたし。暫く持とすへし。

三十番

左持　季經卿

かねてよりひはらの末もくもらぬに積る雪みる秋の夜の月

右　尭胤法親王

雲風もおさまる夜半はをのつから遠くも月の更にけるかな

檜原の雪。家持歌。まきもくの檜原もいまたくもらねは。小松かはらに淡雪そ降と侍る俤あるやうに覺侍れと。兼てより五文字。第四句つまりて聞え侍り。右。遠くも月の更にける哉は。をそくふくるを。ほいなきやうに聞え侍り。いかゝ。

三十一番　寄無名戀

左持　前左大臣室

あやしとや猶も涙を人のみむ無名に朽る袖としらすは

右　爲廣朝臣

つらしともうしとも誰と夕けふりたつな計のむろのやしまは

左の歌。おもひ入たるさまにて。よろしく侍るにや。右たつ名計の室の八しまは。是は。名に立ちたるはかりにて。いまたその實もなけれと。誰をかこつへきとも覺ぬ心なり。しからはたゝ名の立戀の心なるへし。無名とは一向に人をこふる事もなきを。其人々こそ。心をかよはし侍れと。虚名をいひつけらるゝをいふへきにこそ。但證歌なとも。

心中に覺悟し侍らす。抄物なとも。座右に安置し侍らす。なを一に儲案をもて申侍れは。必しも信用し給へきにあらさるへし。

三十二番

左持　　入道親王道永

なき名のみ浦のもしほの夕煙おもはぬかたにたつそくるしき

右　　教秀卿

契てふ言の葉のみか何のうき名にさへも有世なりけり

左。おもはぬ方のけふり。本歌のことはをとられ侍りて。大方難なきにや。右。契てふことのはのみかなとは。はや僞のあるよをしれる心なれは。是も無名の戀とは申難かるへし。

三十三番

左持　　邦高親王

せめて其あふにかへても慰さまはうき名計は歎かさらまし

右　　内大臣

身のとかとなけくうちにも慰まむ契し人に立名なりせは

左右ともに。ひたゝけたる戀の歌なり。無名の心は分明ならぬにや。

三十四番

左勝　　女房

身にしらぬ歎にぬらす袂さへいとゝ立名にいひやなすらむ

右　　入道前左大臣女

かにかくに名に立へしや吹風も餘所なる花の袖に匂ふを

左歌。三十二番の左歌と。其心同しやうに侍れと。下句なと思ひたき所や侍らん。右よそなる花の袖に匂ふによりて。名にたつへき事おほつかなく侍り。人の移香なとゝ思ひよそへられ侍るにや。思ひわき侍らす。持とすへくや。

三十五番

左勝　　季春卿

何とかくあふせもしらぬ陸奥に有てふ川よ袖ぬらすらん

右　　前左大臣

いかゝせむ戀しなは又うき命あふにかへつといひやなされん

右のうき命あふにかへつなとは。虚名とはいかゝ申侍るへき。左みちのくにありといふなる名とり川。本歌たしかなるにつきて勝とや申侍らむ。

三十六番

左　　實隆朝臣

あふ事のあるになしてもつらき名の立をは人の數く習ひを

右勝　　高清卿

神よけにあはれと思へすか原やふしみぬ中に無名立身を

左の歌。是も無名の心たしかならさるにや。右なき名かなしむ人そきこえぬと侍る聖作を思へるにや。勝へきにこそ。

三十七番

左持　　勾當内侍

身ひとつにいかにせましと思ふこそあひみぬ中に立名也けれ

右　　堯胤法親王

一かたに歎し物を別ての後のあしたにたつ名なりせは

左のあひみぬ中。右の別ての後。共に無名の戀とは申かたくや。

三十八番

左持　季經卿

我戀の心つくしにたのむかな無名かなしむ神のちかひを

右　實興朝臣

あふ事の有世に責てなけかはやとてもかくても立名也せは

我戀の心盡しにたのむかなは。虚名とはいひかたきにや。右あふ事の有にせめては。是も名たつ戀の心なるへし。持とす。

三十九番

左勝　親長卿

思ひ花きえなはつゐになき名ともたれにいはせの山の端の雲

右　安禪寺宮

浮名のみ立ともせめて一よたに逢にかへなはなけかさらまし

誰にいはせの山の端の雲。心詞優美に。題の心たしかに侍り。爲レ勝。

四十番

左勝　入道前左大將公數女

いかなりし世々のむくひの殘てか無名たつ身をかく歎くらむ

右　量光卿

ふしのねにたくふおもひの煙ゆへ空しき名のみたつ空そうき

右。むなしき名とは侍れと。ふしの根にたくふ思ひとありては。是も無名のこゝろたしかならさるにや。左歌。第三の句よはく侍れと。しはらく勝とや申侍らん。

四十一番

左持　不憑戀　親長卿

仇にちる人の心の花よはやかねておもひし春風そふく

右　實興朝臣

今更にうきをもいかゝ恨へき頼むともなきあたし契は

かねておもひし春風は。心のはなにといかゝ吹侍へきやらむ。いまた案し得侍らす。秋風なとも。戀の歌によみ侍るへきには。かはり侍へきにや。小町か歌に。色みえて移ふ物は心の花と侍れは。風をも移ふ心にをしこめてみなし侍るへきやらむ。右今更にうきをもいかゝうらむへきも。戀の本意をうしなひ侍り。持とすへくや。

四十二番

左勝　季春卿

よるとなく音にこそたてね行末をたのむの雁にあらぬ我身は

右　爲廣朝臣

たのめても頼まぬ中や僞のかねてしらるゝちきりなるらん

左右ともに。ことなる難は侍らす。よるとなくたのむのかり。むかし物語の心。聊まされるにや侍らん。

四十三番

左勝　勾當内侍

僞の言の葉さへも絶やせむ頼まぬほとを人にしられは

右　安禪寺宮

僞のかすのみ積る夕暮を頼るとてもなにかまたまし

右。僞とおもひなからも。人の言のはゝ。猶きかまほしく思ふ。眞にこそきこえ侍れ。右たのむるとてもなにかまたまし。あまり情なきにや侍らむ。是も左。増れるにや。

四十四番

左勝　實隆朝臣

ありとしも頼まむ物かかけろふのはかなくみえし人の契は

右　堯胤法親王

此くれとちきらは身にやたのまゝしあすはしらねと行末の空

源氏宇治のまきに。浮舟の君。物に氣とられて。ゆくすゑもしらす成てのち。かほる大將の。ありとみて手にはとられすみれは又ゆくゑもしらす消しかけろふ。とよみ侍る。左の歌はこの心をよまれ侍るにや。猶無常の歎にや叶侍らん。右此暮とたのめは。よきなく賴へき事にこそ。あすしらぬ行衞まておもひあつかひては。益なき事にや侍らん。

四十五番

左持　女房

さためなき世にはまことの言のはも思へは仇の中にたのまし

右　内大臣

年月を思ひくらへて賴まめやかはらしといひこぬと契るも

左歌。定なき世なれは。人はまことをいふ共。世にひかされて。心ならすかはる事もやあらん。されは賴がたきこゝろにや。右かはらしといひ。こんとたのむるうへには。年月をおもひくらふへき事。前後の相違こそ侍れ。前の番の右と心同しきにや。左勝に侍るへし。

四十六番

左　入道前左大將公敦女

身にはまたたのまぬ程や僞のあるをもさのみ恨さるらん

右持　前左大臣

ひたすらにちきりたのまむ僞の有世をしらぬ我身ともかな

左は。いかにもたのまぬ程なりとも。僞のあるをは恨みんこそ戀の本意には侍らめ。かやうに得意しては。戀の心も覺えぬへくや侍らむ。右ことなる難なし。まさるにや侍らむ。

四十七番

左持　前左大臣室

僞のある世ならすは一かたにたのみやせまし人のことのは

右　量光卿

かはすより心をかるゝ言の葉の露のかことはいかゝたのまん

左。本歌たしかなるうへ。下の句なと優に侍る。右第一句このましからす。左まされるにや。

四十八番

左持　季經卿

身のほとをおもひしるにもいとゝ猶たのまぬ物を人の僞

右　入道前左大臣女

たかまこと賴まむ身共しら雲の靡くを見るもあとしなけれは

左。よのつねの心ことは。又ことなる難も侍らす。右たかまことをか今はたのまむの本歌。心おかしくは侍れと。下の句なと上にかけあはぬやうに侍り。然とも思ひかけぬ白雲立いてゝ。餘情あるやうに侍れは。なすらへて持とすへくや。

四十九番

左持　入道親王道永

さらに又何かたのまむ僞もおもひもわかぬ身とや知るらん

右　高淸卿

ちきりても身にたのまれぬ夕暮をかならすと待人や有らん

左右の歌。何かたのむる。身にたのまれぬ。大畧同しほとの事にや。歌合の判の詞。ほめもそしらすと。古人の申侍れと。しはらく持とすへし。

五十番

左勝　邦高親王

僞にならふよころの秋風は身にさむくともいかゝ頼まん

右　教秀卿

契こそうつろひかはれ泊瀬川人の心の花の形見に

左歌。身にさむくともいかゝたのまむ。素性か歌をおもへり。心詞おかしからさるにあらす。右。題のこゝろたしかならぬにや。左勝に侍るへし。

五十一番　山家雨

左勝　季經卿

人はこて軒のかけひの水はかり音信増る雨の暮哉

右　内大臣

柴の戸は雲のみ閉て奥山に雨さへ見えぬ音のさひしさ

かけひの水の音信まさり。柴の戸の雲のみとつるさひしさ。いつれともわかちかたきやうに侍れと。雨さへみえぬの詞。雨をみたくおもひても。詮なき事にや。しからは左の雨の音は猶心すみてや侍らむ。

五十二番

左勝　勾當内侍

詠やる向ひの山も雲閉て庵さひしき雨のうちかな

右　高清卿

聞侘ぬ桐の葉さそふ秋風にふけ行山のよはのむら雨

前山の雲の色。一庵の空をこらし。桐の葉の風のこゑ。半夜の闇をいたましむ。いつれをよし。いつれをあしとも。申かたきにや侍らん。

五十三番

左勝　季春卿

すみやらぬ心の水に山の井のにこりを添ふる雨のうち哉

右　量光卿

世をうしと思はてすまは秋の雨夕よいかに山かけのいほ

夕よいかに山かけの庵。未いひおほせすやはんへらむ。心の水のにこりは。すまさはすむとや侍らん。いさゝか勝にや。

五十四番

左勝　入道前左大將公數女

世のうきにかへて住てふ山里も堪て聞へき夜半の雨かは

右　安禪寺宮

山かけや暮行雨にさひしさもいとゝましはの庵の内かな

左右ともに難なく侍る。勝劣わかちかたきにや侍らむ。

五十五番

左勝　實隆朝臣

夕ま暮軒端の山にかへりくる雲も其まゝはれぬ雨かな

右　入道前左大臣女

山ふかみ軒端も雲に埋れて降空さへもみえぬ雨哉

棲山の雨。主人谷の軒端をならへ。雲にほとなれる閑寂のすまひ。いつれとおもひさためかたく侍れは。しはらく持とすへくや。

五十六番

左　女房

うき世にてきかはさひしき雨の音を思ひもいれぬ山陰の庵

右勝　教秀卿

さしおほふ山の岩尾の下庵に音せぬ雨も猶そさひしき

きくはさひしき雨の。音せぬ雨もさひしきなと。大かた同し類ひのことはにや。たゝしさしおほふは。みかさの山のこすゑなとの心地は。右勝にや。

五十七番

左勝　前左大臣室

さひしかれと世をのかれこし柴の庵になを袖ぬらす夕暮の雨

右　實興朝臣

山の端も雨かけもみす降雨に暮ぬふもとの雲のした庵

山の端もおもかけも見すふる雨といひては。はれぬ麓はあまりたる詞にや侍らん。又鐘山なとの歌の心ちして侍れは。かた／＼左のよをのかれこし柴の庵は。雨のきゝ所もあるにや侍らむ。

五十八番

左　邦高親王

さひしさは馴て住こし山にてもなをうきときかふかき雨のよ

右勝　爲廣朝臣

山ふかみ柴の戸たゝくよるの雨を袖にこたふる我泪かな

山にてなをうき時。本歌の置所をかへられぬ。無念にや侍らん。ふかきよの雨も。さゝへて聞へ侍り。袖にこたふるわかなみた。おかしくこそ侍れ。

五十九番

左持　親長卿

雲はなを立こそ残れ山ふかみ軒端の雨はよそにすきても

右　堯胤法親王

あらしたに音せぬ柴の戸を閉て雨降くらす嶺の庵かな

左歌。詞あまりくたけて聞所侍らぬにや。右の柴の戸。嶺の庵。かさなり侍るにや。持とすへし。

六十番

左　入道親王道永

うき世をはいとひすむ身の柴の戸に又袖ぬらす夕暮の雨

右勝　前左大臣

いにしへも思ひのこさす山陰に夜るの雨聞草の庵かな

右歌。大賓客の身にかはりて思ひ給へは。蘭省花時錦のとはりのたのしみは。さこそ思出にても有けめ。それに引かへて。盧山の雨の夜草の庵。物さひしさは。いかにも古をこふる心なるへしとこそ覺えす。さりなから俊成卿の郭公の歌。ふとおもかけにたちて侍り。歌はさのみこそ侍れは。同類まてはなり侍るましきにや。左歌。ことなる難は侍らねとも。夜雨のさひしさは。なを身にしみて覺侍り。

六十一番　砌下有松

左持　入道前左大將公數女

千年へん友とちきりて植置や君かみきりの松の行末

右　實興朝臣

千代のかけを玉の砌と契つゝいや木たかくも松そふりゆく

君か砌の千とせの色。玉の砌のちよのかけ。歌のたけも木たかさ同し程のことなるへし。

六十二番

左持　親長卿

限なきよはひありとは君をこそ知る人にせむ庭のたま松

右　入道前左大臣女

末とをき君か砌にうつし植は千とせの後を松も限らし

兩首のてには。左は知人にせめと有へきにや。右は千世の

後も松はとありたきにや。

六十三番

左勝　季經卿

千々にしく玉の砌に聲添て君よろつよとよはふ松風

右　敎秀卿

玉敷の庭の玉松ちとせへん君かひかりの花も十かへり

君かひかりの花の色よりも。君萬代の松のこゑは。目をいやしみ。耳をたたふるとや申侍らん。

六十四番

左勝　入道親王道永

底きよき玉の砌の池水に風のかけみる松のすゝしさ

右　量光卿

移しうふる君か砌の松風ややかて千とせの聲よはふらん

移しうふる程の松ならは。いかにも二葉なとにてこそ侍らめ。やかて千とせの聲よはふへき事いかゝ。風のかけみる。いさゝかめつらしく聞え侍るにや。

六十五番

左持　邦高親王

陰たかきみきりの松の深みとりいく萬代の霜をへぬらむ

右　高淸卿

陰たかき雲井の庭も年ふりて空に聞ゆる松風の聲

いく萬代の霜を經ぬらむ。空にきこゆる松風の聲。共に陰たかき調の色かはらぬにつきて。しはらく優劣をさためすや侍らむ。

六十六番

左持　勾當内侍

仕へつゝたちよる人も千世やへん君か砌の松のした陰

右　内大臣

百敷やふるき砌にとしをへて君をや松の木たかかるらん

左は新皇居の松陰にして。千よまてつかへん事思ひ右は舊内裏に木たかきをみて。百敷の古をしたへり。なすらへて持とすへし。

六十七番

左勝　女房

住すてし雲井の松のとしを經て木たかき色は餘所にみえけり

右　爲廣朝臣

砌にやなれてかそへん君も臣も世にあひ生の松のゆくすゑ

住捨し雲井の松。たゝうち人のいふへき言のはにも侍らぬこそあやしく思ひ侍れ。もし女房の歌なとに。御製をやとりまゐらせられ侍つらん。木たかき色も。よそに見えけりなとも。當時の御在所。さこそと思ひやられ侍れは。老涙をさへて。かくそ思ひつゝけ侍。いかなれは千よをは君かちのさかへをは。かへり見すして。嵐の庭のおち葉の塵を。朝淸めして。君か御幸を待奉らは。心なき草木にてはあるましきを。いたつらに木たかき色はかりを。雲井のよそにみせ奉るは。人の思はむ事を。恥かしくは思ひ侍り奉らぬにやあらん。右のうたの是非は。さたに及はす。左の勝にては侍らんかし。

六十八番

左持　季春卿

松かえも露や置らむ言のはの玉をつらぬるけふの砌に

右　堯胤法親王

色かへぬ砌の松にたちなれて千代よろつ代のかけやたのまん

餘に耳にみちて侍り。左の結句も。砌はとあるへきにや。

六十九番

左　實隆朝臣

雲のうへや砌にたかき松か枝のみとりそ空の色にかよへる

右　前左大臣

いつのよの庭の眞砂のたねならん霜むすいはほ松そふりぬる

左。みとりそ空の色にかよへる。右。霜むすいはほ松そふりぬる。共によろしく侍にや。

七十番

左　前左大臣室

萬代の君かよはひに及はめや千とせふる木の庭の松か枝

右　安禪寺宮

吹風も治る御代に立かへり君そみきりの松にちきらん

左歌。よろつよと。千とせとは。同し事のやうに侍れと。萬代を松にそ君をいはひつる千とせのかけにすまむと思へけ。といへる歌の侍れは。とり分たるも。くるしからさるへし。右も。祝言にては侍れとも。左はなを歌のすかたつよく侍るにや。

一卷の奥に。白紙の二ひら三ひら殘けれは。筆のつかとる次に。長歌のやうなる物をそかきつけ侍ける。

あはれいかに　ふ月七日の　雲のうへ
ほしまつるてふ　ともし火の　光さやかに
あるへきに　かゝくる人も　なきまゝに
むかしを忍ふ　もしすりの　亂れたちにし
よのなみは　はやいくとせに　成ぬらむ
かゝりしほとに　いとたけの　手向にかふる
夜半なれと　秋のしらへも　中々に
折にもあはぬ　閑居とて　とゝめたまひし
おほみきの[さみイ]　そのみこゝろの　かしこさを
あふかぬ人こそ　なかりけれ　さりとてとし／＼
ひとたひの　行あひのよを　いたつらに
ねてあかさむも　さすかにて　廿の人を
えらひつゝ　けふの日數の　やまとうた
ほの／＼よめの　勅なれは　仰をかしこみ
人々は　和歌の浦半の　もしほ草
かきあつめてそ　たてまつる　其か中にも
わたのはら　星合のかけを　うつせとも
なかむるあまも　なきさなる　ふねのかちのは
とるとたに　しらぬ事こそ　うらみなれ
けにこゝろある　しわさにて　野への千種を
けふのため　手折もてきて　かめにさし
うしひく名ある　はなをさへ　女郎花にそ
あはせける　かくても中の　はるゝよは
星か川邊の　ほたるかと　見えし光も
みかくれて　月はかりこそ　そらにすめ
かくはありとも　ものおもふ　袖のなみたは
かきくもり　我身にしらぬ　名とり川
無名とりても　こりすまの　恨もたえす

恋しさに 頼まぬものと いひなから
またてもあらぬ 夕くれは せむかたなみに
よし野川 よしやよの中 今はとて
いもせの山に のかれても 瀧のひゝきに
あらそへる 木の葉の時雨 松のあめ
袖をぬらさぬ 夜半もなし 薪こるてふ
身なからも 玉のみきりを わすれぬは
君ちよませの ことの葉を 松にかけてそ
祈りける かゝる情の おほかれは
みかける玉の こゑ〳〵に をれるにしきの
いろ〳〵に 聞みる人を おとろかす
これを七十に つかひつゝ 左右にと
あらそへは 文のみちにも ものゝふの
たけき心は 有ぬへし 是そ時代に
あふ坂の 山ちにはへる さねかつら
永きよまてや つたはらむ さてしもひろき
國のうち 我敷嶋の 道しれる
人のなくやは 有へきに みかさの山の
やまかけの 紫の庵に すみそめて
ころもの玉を かけまくも かしこき君か
鳥のあと 此ひとまきに 巻そへて
難波のうらの よしあしを こゝろに分て
はりまなる しかまの市に かちまけを
しるしつけよの 御ことのり いかにせむとも
またしらす つら〳〵つはき つら〳〵に
思ひほとけは いなみのゝ いなみ申さん

道なくて 人のみるめけ はつかしの
森のくちはを ひろひあつめ さほの川行
水くきの 跡にまかせて かくとしらなん

右七首歌合。年代所藏也。少々雖有不審依無類本不能挍合

文明十年八月二日歌合

題

江月　紅葉　秋祝

作者

左方

女房　参議左中將季經
權大納言季春　權大納言實行
實隆朝臣　權大納言與侍
內大臣

右方

從三位基綱　民部卿忠富
按察使親長　前左近衛大將公數女
元長朝臣　權大納言教秀
勾當內侍

判者　禪閣

一番　江月

左勝　女房

玉をしく光とみえて津の國の堀江の浪に月やとるなり

右　從三位基綱

御舟漕し跡はむかしの堀江にも猶玉敷てすめる月影

右方申云。萬葉集の古風を思へり。よろしき歟。左方申云。左方のおなし本歌をとれり。無二殊難一左右の堀江の月に玉しける心詞。本歌といひ。風躰といひ。いたくかはりたるところは侍らねとも。左の玉をしく光とみえて津の國のなと。やすくへといひくたされて。しかもたけありて聞え侍り。右にははるかに增れるとや申侍らん。

二番

左持　参議左中將季經

影やとるなこの入江の秋の波夜はすからに月そくたくる

右　民部卿忠富

打出て誰かみさらん曇なきたこの入江の浪の月影

右申云。秋の浪はたてつゝなり。左陳云。秋の波讀て耳にたゝす。秋水漲來なと。古詩の詞にもいへり。秋浪可レ爲二准據一歟。左方申云。田子のうらにうち出てみれはといへる本歌を。田子の入江にとりなされたる。おほつかなし。又曇りなき田子の入江も。つゝきこゝろゆかす。右方陳云。月を詠せんには。いつくをも曇なきといはん。有二何難一乎。秋の浪は。古詩をひかるゝまても有へからす。あなかち聞にくきまての程はあらしとこそ覺え侍れ。右くもりなきの詞も。此一首に取ては。あしからす侍り。月そくたくるこそ猶おもひき（[illegible]）きやうに侍れと。まくるまての事はあるましきにや。仍持とすへし。

三番

左勝　權大納言季春

松風のこゑ打そへて更る夜に猶住の江の浪の上の月

右　按察使親長

埋もるゝ雪かとみれは住の江の松はさたかに晴るゝ月哉

右申云。無二別難一歟。
左申云。埋もるゝ雪かとみれはと侍る。雪をうつみたるや
うに聞ゆ。又松はさたかにも。みのゝお山。から崎の松な
らて。木ふかき住の江の松なと。さまてさたかならん事も
いかゝ。
左歌。朝恒か歌を思へり。三代集の作者にあらすは。取す
こしたる難もあるへきにや。右の歌も。ことなる難なし。但
初の五文字の。降つもるとありたきにや。いかさま是も持
たるへし。

四番

左持　權大納言雅行

夏かりの比よりは猶露深き玉江のあしに月そ隈なき

右　公敷卿女

やとれ猶光かはしてをく露の玉江に清き秋の夜の月

右方申云。難二散有心之躰一。蜂腰病之難侍云々。
左方申云。かはしての詞。先達難知レ難歟。第三句。露のをき
所。又おほつかなし。蜂腰病なんふるくは申侍れと。中比
よりは。事によりて時にしたかひて。そのまたも侍らぬに
や。かはしての詞も。枝かはすなとは子細なきよし。定家
卿も申侍り。
左。夏かりのあしも。とし出たるやうに聞ゆ。右歌のをき
所もいかゝと覺え侍り。さのみなるやうなれと。これも持
たるへきにや。心きたなき判者に侍るへし。

五番

左持　實隆朝臣

更にけりあちの住江の冷しくあら磯てらす浪の月影

右　元長

時雨つゝ過ゆく跡に色そふやつたの細江の波の上の月

右申云。あちの住江のすさましく。いひしりて聞ゆ。但江
の外にあら磯無用。無念。
左陳云。すみの江にあら磯を詠すと云々。
左申云。色そふ蔦の細江とそへられたる傍題に。紅葉をを
きて。猶おもひたきにや。月の時雨に色そふもいかゝ。
右陳云。紅葉とも。不レ詠之上。强不レ苦乎。
左。あちのすむ江いかゝ。手つゝに聞え侍り。あちのすむ
す崎の入江なとは。いくたひよむとも。はゝかるへからさ
るにや。右歌。傍題を犯すまての難は侍らす。色そふは。月
の事とこそ覺え侍れ。第一句つゝの字あまりたる詞也。さ
夜時雨なとあらまほしきにや。さのみ持とのみ申へき事
やいかゝ覺え侍り。
左。萬葉の古風に優して。しはらくかちと申侍るへし。

六番

左持　權大納言典侍

浪の上ははるかにみえて住の江の松をくまなる秋の夜の月

右　權大納言教秀

難波人入江の芦のほの〳〵とあくるまてみる浪の上の月

右申云。無二殊節一無二殊難一。
左申云。殊無下可二難申一之事上。
住の江の松。難波の芦。所に付たる名木なるへし。兩首の
躰もあしからす。勝劣を論するに遑あらす。

七番

左持　内大臣

鐘の音に霧身そ近き山下風ねられぬ月の江に更にけり

右　　勾當内侍

浪の玉みかきそへつゝ難波江の藻に埋もれぬ月の影哉

右方申云、海寺の氣色。古詩の風躰なとを思へるにや。但第二句有所レ思之。上句くたけたる躰に見ゆ。

左方申云、千載集俊頼朝臣の歌を、本歌と　　て詠レ之歟。然者於二歌合一猶いかゝ。

右方陳云、堀川院百首作者歌。猶以爲用。近代連綿之事歟。詞の舊を用る事は。照もせすくもりもはてぬなと。まゝよむ事ははへれと。あなかちこのみよむへからさるにや。鐘の音山おろしも。あまり耳かましく聞え侍るにや。江に更にけりも。ありありて常態にならしと讀るやうにみえ侍り。俊頼歌堀川院の百首までは。ことによりて本歌にとるへき事何當也。浪の玉と。第一句に打出され侍る。頗是も手つゝなるにや。月の影を藻にうつもれぬなとも。事あたらしきやうに侍り。たすらへて持とすへくや。

一番　　紅葉

左　　權大納言典侍

織かくる錦とみれと時雨のみしつはた山に染るもみち葉

右持　　元長

枝かはす松も煙の龍田山峯の紅葉の色やこかるゝ

右申云、しつはた山の紅葉珍らしからす。

左陳云。時雨のみしつはた山のつゝき。珍しからぬまては侍らぬにや。

左申云、松も煙も。文字心ゆかす。又火といふ事なくては。こかるゝといふ事。もとより紅葉に詠ならはしては侍れと猶穩かならすや。

右陳申云。も文字は枝かはすにて。道理かなひぬへし。上句の松の煙にて。下句こかるゝ火の心。こもるへきにや。たつ志豆機山の紅葉。珍しからぬなんはいかゝとおほゆ。たつ田はつ瀬のもみちは。いくたひ詠せり共難たるへからさるにや。但時雨のみの詞こそ心得かたく侍れ。又もみちにこかるゝとよむ事は。たとひ火とも煙共いはす共。もみちのうへはかりにても。子細あるましきにや。松の煙は。なかなか紅葉の色をけつかたもや侍らん。

二番

左勝　　女房

此比はしくるゝ雲のはてもなしいつを限りと染るもみちそ

右　　勾當内侍

ふかく我心にそめし紅葉はを時雨のみとは何おもひけん

右方申云。古今集。わか戀はゆくゑもしらすはてもなしといへる歌を思ひて宜由を申。

左方申云。無二指難一。但第二句染しの過去の詞いさゝかおもひたき也。左歌、山めくりする時雨なれは。雲のはてもなしと侍る。所詮あるに似たり。右歌。そめしの過去の詞。誠に左の難におち侍るへし、又露霜なとは。しくれにあらそふ事は侍るへし、心の染るはかりにて。紅葉の色のまさるへき事もいかゝ。左勝たるへし。

三番

左持　　内大臣

木の葉こそ時雨降出て行秋の末摘花の色に成ぬれ

右　　従三位基綱

みる人のこゝろの花はもみち葉のふかき梢そうつりはてつゝ

右方申云。木の葉こその五文字聞よからす。又暮秋落葉の躰。頗無念歟。

左陳云。紅葉の時節。暮秋に相當の上は。不レ可レ及レ難歟。

左方申云。心の花秋によまん事いかゝ。秋の心は大かた愁を本としたるにや。

右陳云。心の花は。只こゝろのみをいへるなるへし。木の葉はちらぬ時も申侍るへし。是くるしかるへからす。又心の花。秋なれはとて。いふましきにもさたまるへからす。秋このむ人にをきては。かならすしも愁の時とは申侍へからす。但兩首の躰は。いつれをいつれと申かたく侍り。

四番

左　實隆朝臣

あたにをく露より色に出そめてもろかりけりな秋のもみち葉

右勝　按察使親長

心なきいは木の山はいつのまに時雨をかけて紅葉しぬ覽

右申云。風躰よろしく聞えなから。紅葉に落葉のおもむき。頗無念。

左陳云。此歌紅葉の始終を讀り。紅葉にかきるへからす。

左申云。時雨をかけて。様ありけにきこゆ。紅葉しぬらんも。近代好士時により。事にしたかひ。斟酌する詞にや。

左。第四句のけりなの詞。頗好ましからす。右こゝろなきいは木の山。しくれをかけて紅葉する心。殊なる難は侍らぬにや。しぬらん。しにけりなとの詞は。時によりて難にもなり侍らん。右はいさゝかまされるにや侍らん。

五番

左持　參議左中將季經

いかてかはたちもさらまし時雨つゝ錦織なす山の木陰を

右　公數卿女

立田姫四方の梢を紅におるや錦の色をふかめて

右方申云。山のにしきにて。紅葉を顯す作例連綿歟。但歌合にをゐては。からにしき枝にひとむらといふ歌を。紅葉たしかならすと難すと云々。但證歌あらは可レ被レ出歟。

左申云。右歌。さしたる難なく。又さしたるふしなし。兩端の錦の色。老眼のふるゝ所。あやめもわかす侍れと。左歌。木陰を立さらぬ子細は。時雨にぬれしとの心にや。又錦をもてあそふゆへにや。いさゝかまちあひて聞え侍り。右の第五句の。ふかめての詞も。あまりて侍るにや。又立田姫のにしきそむる事。紅葉にとりては珍しからぬ風情にや。さのみなるやうなれと。是も持と申侍るへし。

六番

左　參議左中將季經

しくれても松は強顔き岡野へにましる紅葉や錦なる覽

右勝　民部卿忠富

龍田山過る時雨の跡晴て紅葉の錦色そてりそふ

右申云。無二殊難一歟。

左申云。風情珍しからさる上。過る時雨の跡はれて。重疊したるやうに聞ゆ。

左。時雨に松のつれなき事も。もみちをにしきになす事も。珍しからぬ事にや。右。過るも晴ても。誠に重疊したるやうに侍れと。照そふの末の句にて。日影をふくみたるやうの心も侍れは。右いさゝかまされるにや侍らん。

七番

左勝　權大納言季春

露霜の染るもみちの色みてもふかく成ゆく秋そしらるゝ

右　權大納言教秀

露霜も葉おかすとや立田姫時雨を急く紅葉成らん

右申云。無別子細。

左申云。後京極摂政の立田姫今はの頃の秋風に時雨を急く人の袖かな。といふ歌。第四句をき所かはらす。いかゝ。

左歌。第五句いさゝかよはく侍れと。殊なる難なし。右。立田姫の時雨を急く心。かの摂政の歌のおもかけ。誠に侍りけれは。しはらく左可レ勝にこそ。

一番　秋祝

左　内大臣

君か代は猶長月の秋津洲の外まてあふく恵とそきく

右勝　公數卿女

幾秋も老せぬきくの花の色を君か千とせにたくへてそみる

右方申云。本文慥に侍り。無レ失乎。

左方申云。殊替なく又珍しからす。

左歌。本文は古今集眞名序の事にや。聞の字は。作者の心は外國の事をきくとよまれ侍るやうなれと。現量に取てはいかゝと覺え侍り。只恵みなるへしと侍らは。一首の躰。もしつよくや侍らん。

右歌。さしたる難なし。まさると申すへきにこそ。

二番

左　權大納言典侍

あひにあひて君か齢は長月のいくめくりともかそへしらまし

右勝　元長

めくりあはん限もしらす我君の御代なか月のきくの盃

右申云。一ふしの難も侍らす。一ふしのよろしき事も侍らす。

左申云。めくりあはんかきりもしらすとうちいてたる。末をうけ給はらぬほとは。いかにそやと聞ゆ。

左右の歌。君かよはひの長月。御代長月。又いくめくり。めくりあはんなとの詞。つくりあはせたる躰にこそ侍れ。去なから左歌。初句。終句。おもひたきやうに侍り。右は。かきりもしらしとあるへきにや。いかに勝侍らん。

三番

左勝　權大納言季春

星とみる雲井の菊や行末もはるけき君かかさし成らん

右　勾當内侍

秋毎に汲て齢を延よとや菊の下水なかれいつらん

右方申云。星をかんさしにするなとは。漢語には申侍れと。和歌には。よみならはさゝるにや。但歌のさま。あしからさるにや。

左方申云。殊難なし。但第三句猶思たきにや。

左陣云。星はむかしより菊にたとへ侍れは。あなかちに異朝の作例にもをよはさるにや。

右ほしをかんさしにする謬難は。心得かたく侍り。菊をかさしにせさらんにをきてこそ此難は侍らめ。右第三句は。あしからす侍り。出らんの詞。事あたらしきにや。なかれ絶せぬと侍らは。秋毎の道理も。猶立侍るへきにや。左ことなる難なし。星とみるくものきくなとは。よろしく侍

り。勝たるへし。

四番

左　　　　　　　　　　　實隆朝臣

四方の國堪ぬ田面も更に今年ある秋とくらしつくらし

右勝　　　　　　　　　　従三位基綱

我君の惠の露を分てまつ色こき稻に民やうけゝん

右方申云。秋祝に。不堪田奏無二子細一。

左方。よろしきよし申。

左。堪ぬ田面は。證歌侍るやらん。つくるにたへぬと。申侍らては。不堪田のこゝろ覺つかなく侍り。次には。下句の有レ年は。さる事に侍れと。好土なきにはしかしと申侍れは。祝の題に。不堪の愁を申出しては。無益とこそ覺え侍れ。右うけゝんの過去のこゝろいかゝ。うくらむとありたきにや。いかさま不堪の愁なきにつきて。右を勝とすへくや。

五番

左　　　　　　　　　　　權大納言雅行

いく千世そ惠みの露の數々に君か齢も長月の空

右勝　　　　　　　　　　民部卿忠富

幾秋を星なきてか草木にも惠の露の色をそふらん

右申云。eq無二殊旨一。

左。ミ、一申旨なし。

雨首の惠み露ふかきあさゝ、思ひ分かたく。一般の思風。かちまけ定めかね侍れと。右。契りをきてと侍りて。露の色をそふるは。よろしく侍るにや。但第三句。草も木もと侍らは。草木といへるよりは増るへきにや。

六番

左持　　　　　　　　　　女房

斧のえの朽し所や九重の秋をし千度おくりむかへて

右　　　　　　　　　　　權大納言敎秀

をく露は民の草木も打なひき惠あまねき御代の秋かな

左方申云。をく露はのはの字。にの字たるへき歟。

左。をのゝえの朽しところ。友則か歌を思へり。右初句。はの字。にの字。ことなる勝劣あるへしとも覺え侍らす。持とや申侍らん。

七番

左持　　　　　　　　　　參議左中將季經

百敷や砌にうふる菊の花千年も君か袖やふれまし

右　　　　　　　　　　　按察使親長

君か爲九かさねにつむ菊の匂（祝イ）ふよはひや萬代の秋

右申云。禁中祝言之外。無二珍氣一。

左申云。存二古躰一歟。指無下可二難申一事上。

左右共に禁中の祝言也。勝劣を申さは。慮外の怨言もありぬへし。仍これも持と申侍らんかし。

勝負付

左方

女房	勝二	持一
參議左中將季經	持三	
權大納言季春	勝二	持一
權大納言雅行	持一	負二
實隆朝臣	勝一	負二
權大納言典侍	持一	負二

內大臣　持二　負一

右方

從三位基綱　勝一　持一　負一

民部卿忠富　勝二　持一

按察使親長　勝一　持二

前左近衞大將公敦卿女　勝一　持二

元長　勝二　負一

權大納言典侍　持二　負一

勾當內侍　持一　負二

右文明十年八月二日歌合以奈佐勝皐本挍合

文明十年九月盡歌合

題

遠山鹿　暮秋　寄弓戀

作者　隱名

左方

宮御方　（滋野井）從二位藤原朝臣教國

新大納言典侍　入道前左大臣女

權大納言典侍　（勸修寺）權大納言藤原朝臣教秀

（姉小路）從三位藤原朝臣基綱　（甘露寺）藏人左少弁藤原元長

（大炊御門）左近衞大將藤原朝臣信量　（白）民部卿源朝臣忠富

右方

式部卿親王　權大納言藤原朝臣季春

勾當內侍　女房

左衞門佐橘以量　（甘露寺）按察使藤原朝臣親長

（冷泉）從三位藤原朝臣爲廣　（庭田）權大納言源朝臣雅行

（三條西）參議右近衞權中將藤原朝臣實隆

參議左近衞權中將藤原朝臣季經

講師　元長　以量

讀師　勸修寺大納言

判　衆議

一番　遠山鹿

左持　宮御方

棹鹿の聲きたまらす聞ゆなりあらしはけしき山のをちかた

右　式部卿親王

山深みいまやをしかの帰るらん遠さかりゆくあけほのゝこゑ

左右共讃申之後。各可レ申二所存一之由有レ仰。

右方申云。左歌。姿やすらかにてよろしとす。

左方申云。右歌。心詞優美のよし申て。被レ定レ持訖。

二番

左　従二位藤原朝臣教國

さそひくるかたはあらしの山風もにしこそ秋とをしかなく聲

右勝　權大納言藤原朝臣季春

そなたそと思ひこそやれ春日山かすかに鹿の聲をきゝても

右申云。左歌もよろしきやうに侍れと。右歌。藤氏の輩おほく侍りしかは。あらし山。春日山。あひならふるにつきて。いかてか春日山まけ侍るへきよし。つのり申によりて。

勝とさためられ侍りぬ。

三番

左勝　權大納言典侍

棹鹿のなく聲よいかにたかまとの山より遠のさとにきくまて

右　勾當内侍

心すむゆふへにそきく小男鹿のつまとふ山のはるかなる聲

右歌。遠山鹿にはるかなるこゑと侍るあまりに平懐にや。左歌。なくねよいかにたかまとのなといへるわたり。いさゝか心こまかなるやうに侍りとて。勝になり侍りぬ。

四番

左持　入道前左大臣女

つまやうき身をうらみてや思ひ入山もととをき棹鹿の聲

右　女房

こやたかき山のかひとてさをしかの幾里かけて聲のおちくる

右方申云。思ひ入山とはかりこそあるへきに。山本のもとの字そあまりてきこえ侍る。又思ひいる山のおくにもと。いへる歌に。いたくかはらす侍にや。

左方申云。右歌。五文字こそ思ひたく侍れ。但左。重疊の難侍るよし申侍しかとも。依二天氣一持とさためられ侍り。

五番

左持　新大納言典侍

すむかたの山ちや遠きさを鹿の霧にこもれるこゑほのかなる

右　左衛門佐橘以量

つれもなきつまを尋て山遠くかよふか鹿のこゑもきこえす

左歌。幽閑。首五句。終の字重疊。いかゝのよしを申。

右歌。遠山鹿の題にて。こゑもきこえすとよまむ事如何。

山遠くも。此題にてはあまりに無二其詮一。仍稍持とすへしとさたまりぬ。

六番

左　權大納言藤原朝臣致秀

秋さむき嵐のつてに聲はして太山はるかに鹿そなくなる

右勝　按察使藤原朝臣親長

なく鹿や曉までもこぬつまを遠山かつらかけてこふらん

右歌。あかつきまてもこぬつまをといひ。とを山かつらかけて戀らんなと。詞のつゝきいひしりてきこえ侍れは。左にはまさり侍へきよし各申レ之。

七番

左持　　　　従三位藤原朝臣基綱

里遠くもみち吹おろす山風に身にしむ色をさそふ鹿の音

右　　　　従三位藤原朝臣為廣

まつ山のすゑこすなみを吹風にうきてなかるゝ棹鹿の聲

左歌第二句。禁中にて可ㇾ斟酌ㇾのよし右ニ申出人々。そのうへ。此本歌。をき所もいたくかはらすや。左方申。右歌。うきてなかるゝといへる。あまり風情にや侍らんとて持と定ぬ。

八番

左　　　　藏人左少弁藤原元長

里近きおき田はかりて棹鹿のをしねかけほすと山木鳴

右勝　　　　權大納言源朝臣雅行

鳴聲にとな山鳥にあらねともおのへへたつる鹿のつま戀

右申。左歌。をしねかけほす外山。所からあまりにこと〳〵しきやらに侍り。

左申。鹿のつま戀といひはてたる優ならす。しかれとも左にはまさり侍るへきにて。勝の字を付られぬ。

九番

左勝　　　　左近衛大將藤原朝臣信量

山鳥の尾上をなれもへたてゝやつまとふ鹿の聲のはるけき

右　　　　參議右近衛權中將藤原實隆朝臣

奥ふかくこもれるつまやこひ衣かさなる山のさをしかの聲

右申。山鳥のをのへへたつる事。みゝなれ侍り。

左申。上句に。おくふかくといひて。又下句に。かさなる山といへる。重疊したるやうにきこゆるうへ。こもれるつまやといへるは。つまもこもれりなといへるよりは。きゝにくゝ侍り。仍山鳥勝になり侍り。

十番

左持　　　　民部卿源朝臣忠富

あり明のかけとともにや入ぬらん山の端遠きさをしかのこゑ

右　　　　參議左近衛權中將藤原朝臣季經

をのかつまとを山もとの花すゝきまねくかひなき鹿の鳴らん

右申。在明のかけのいらん事いかゝ。たゝ月とこそいはまほしく侍る。下句も平懐に侍り。

左申。花薄まねくと侍れと。鹿のまねくやうにきこゆ。鹿をこそまねけとも。きたらぬものには申侍れと。勅定もありしやらん。仍持になり侍りぬ。

十一番　　暮秋

左勝　　　　女　房

したひえぬ秋の名殘も水瀨川いつくにしはしありてゆくらん

右　　　　為廣卿

暮ふとてかく言のはや草も木もかれゆく秋のかたみたらましたるやうに侍り。

左方申。右歌。したふとてかくことのはといへる。ふとしたるやうに侍り。

右方申。左歌。本歌といひ風躰といひ。みなせ河。河のなかれきよく聞えて。よろしく侍るよし一同に定申。

十二番

左　　　　信量卿

秋も今歸る道をやしたふらんはひまつはるゝ野邊のまくす葉

右勝　　　　新大納言典侍

有明のかけものこらてゆく秋の別れはなにをかたみなるらん

左第四句。ふるき詞には侍れと。おもはしからさるうへ。秋かへる道を。したふやうにきこえ侍り。いかゝ。右かけものこらてゆく秋のといひ。別はなにをかたみなるらんなといへる。優なるよし方人申て。勝にさたまり侍り。

十三番

左　　季經卿

ゆく秋の名殘とみれは道のへにはらひかねつる草のうへの露

右勝　　親長卿

なをさりにおしむゆへかと行秋の別をよその人にとはゝや

左右方人。をの／＼右まされるよしを申て。是も勝になり侍り。

十四番

左持　　季春卿

限りありてとまらぬ秋よもろ人のおしむ名殘やさすか苦しき

右　　基綱卿

草も木もうつろひはてゝ哀てふことはいろにもくるゝ秋かな

左は。心あるさまにみえ。右は。も文字かしかましく侍るよし申いたす輩侍りしかとも。本歌をおもへりとて。持に侍るへきよしを申す。

十五番

左　　式部卿親王

なこりのみ我身ひとつにしたはれて千々に物思ふ秋の暮哉

右勝　　權大納言典侍

いかにせんうらむるかたも浪こえてかへらぬ秋のするの松山

右申。くれゆく秋をしたはん事。我身ひとつと侍る。心せはきやうに聞ゆ。本歌の詞もおなし秋と侍る。無念にや。右すかたよろしとて。勝とさためらる。

十六番

左　　雅行卿

ちり浮ふ谷のを河のもみち葉をくれゆく秋のかたみとやみん

右勝　　勾當内侍

うきことも淋しき事も今は身になれつゝ秋のくれしたふ哉

左下句。きゝふりたるよしそのさたあり。右いさゝか左にはまさり侍るへきよしさためられし。

十七番

左持　　入道前左大臣女

見るからになに心なき空まてもあはれしられて秋や行らん

右　　致秀卿

けふのみと思ふもつらしくれぬれはとまる習ひも長月の秋

なに心なきといへる。物語なとの詞のやうにて。きゝにくきにや。長月の秋。心ゆかす。空なとにて侍るへきにや。第三句くれぬれはも思たきにや。いかさま歌の様。おなしほとにやと人々申されし。

十八番

左　　實隆朝臣

あかてこそ秋は別るれこれそこの思はん中にあらぬものから

右勝　　宮御方

花すゝきまねく袂そしほれゆくとまらぬ秋の露の名殘に

右方申云。本歌をとれるとはきこえ侍れと。終句のつゝき。思はしからす侍るうへ。右首尾相應。優美のよし各定申す。

十九番

左勝　以量

さま〳〵の千草の花もくれてゆく秋には殘る色そすくなき

右　忠富卿

くれてゆく秋をとまれとまねきてもお花か袖は霜かれにけり

左はことかなく侍るへし。右は。お花のかれて後。まねかんこと不審のよしさたありて。左に勝の字すくなきによりて右まけ侍り。

二十番

左勝　敎國卿

うき物と思ひなれにし夕暮のこゝろのはてや秋の別路

右　元長

うしといひおしといひつゝゆく秋を心ひとつに定めかねぬる

右歌。古今集に。いせの海につりするあまのうけなれや心ひとつをさためかねぬると。いへる下句おなしと云々。左歌。新古今集に。恨わひまたしいまはの身なれとも思ひなれにし夕くれの空と。いへる下句を。上に引なしたる。いかゝと。申出す輩ありしかは。後日に禪閤に尋ねられしに。二句つゝきては。本歌にとりたるやうにきこゆ。かやうの事は。當座思ひ出されて難申侍れは。陳答にをよはぬ事なり。但し左歌。卿まさりたるやうなれは。可レ爲レ勝歟と申されて。治定畢。

廿一番　寄弓戀

左持　新大納言典侍

つらきにも思ひよはらて梓弓をしかへしてもひくこゝろ哉

右　實隆朝臣

うき中の末は名にのみたつか弓人めを關と引へたてつゝ

右歌第五句。ひきへたてつゝと侍る。いかにそや。心えかたし。左は第一第四句の終のも文字。十四番の右の歌にさた侍し。よりて持とさたまり侍り。

廿二番

左持　宮御方

つれなしと人の心はしらまゆみ思ひよはらてなにしたふらん

右　權大納言典侍

をしかへし契れはとても梓弓末の世かけていかゝたのまん

左右とかなくきこゆとて。又持になり侍りぬ。

廿三番

左勝　季經卿

契りつる末こそかはれあつさ弓たれにひかるゝ心なるらん

右　信量卿

うきにしも思ひよはらて梓弓やよいかにしてこゝろひかれん

右下句よろしからす。左の弓つよくきこゆるよしさためらる。

廿四番

左持　元長

又いつのちきりもしらすしらま弓引とゝめはや今朝の別路

右　忠富

いかゝせんなひきもやらて梓弓心つよくもすくる月日を

兩首申二同等之由一。

廿五番

左持　爲廣卿

末つゐに我名はかりやたつか弓ひくてあまたの人はよはらて

右　　　親長卿
いかにせん人のつらさもしら眞弓つよき心のひくによらすは
左。光明峯寺攝政家續十首歌合に。人心あたちのま弓たのますよひくてあまたにかはる契はと侍るを。判者定家卿。弓にひくてあまたとつゝき侍らん事。理かなはすと難し侍るよし。李部王申いたさるゝむねあり。右。人のつらさもしらま弓。いひおほせられてもきこえす。

廿六番

左　　　季春卿
いかにせんしのひ／＼にひきみれとあたちのま弓つよき心を
右勝　　　入道前左大臣女
我方によるとはなしに梓弓なとか心のひかれそめけん
右。古今集の歌をおもへるにや。左第二第三の句のつゝき。おもはしからさるよし申て。右勝にさたまりぬ。

廿七番

左勝　　　以量
いつかさて思ひよはらんあつさ弓ひくにつれなき人の心は
右　　　雅行卿
をしかへし思へはつらしあつさ弓又よそ人にこゝろひくやと
左右同科之由。定申。

廿八番

左勝　　　女房
よそにみる人の心もしら眞弓をしてはいかゝいひもいつへき
右　　　式部卿親王
つらしとは思ひとりても梓弓もとのあはれにひく心かな
右。もとのあはれいかにそやきこゆ。左。詞のつゝきよろしくきこえて侍るよし。をの／＼さため申す。

廿九番

左　　　基綱卿
ことかたに心つよくはいひよれと誰に弓弦のかけはなるらん
右勝　　　教國卿
契のみあたちのま弓引かたの心あるともしゐてたのまん
左。上句きゝ心えかたく侍るうへ。たれにゆつる。また誹諧の躰に侍るへし。右のみの字。あまりてきこえ侍れとも。詞のつゝきよろしく聞ゆるよしさため申す。

三十番

左持　　　教秀卿
人しれぬ契もあらしうちならすゆつるの音のたえぬよ比は
右　　　勾當內侍
末かけていかゝたのまんあつさゆみ引もあたなる人の心を
左。定而思二故事一歟。無二殊難一。右又風躰無二過失一。仍持と定申畢。

右文明十年九月盡歌合以奈佐勝皐本校合

群書類從卷第二百十一

和歌部六十六歌合三十二

將軍家歌合 文明十四年六月十日

題者中納言入道宋世

原上霞　見花忘歸　簾納涼　田早秋
月似鏡　芦間氷　不叶心戀　互恨戀
山家戶　祈世神祇

作者

左方

	勝	負	持
前關白二條殿	三	四	三
權大納言義―河方田所	三	三	五
天台座主尊應青蓮院	一	八	一
前大納言爲富冷泉	三	六	一
入道前左大臣轉法輪三條實量公	四	一	五
右衞門督爲廣冷泉	三	三	四
前内大臣大炊御門殿信量公	三	四	三
權中納言實隆三條西殿	三	三	四
散位源尚氏[illegible]	三	三	四
釋正廣	二	四	四

右方

	勝	負	持
關白近衞殿	二	四	四
沙彌宋世飛鳥井中納言入道雅康卿	五	二	三
前大僧正道興聖護院殿	三	三	四
前大僧正增運實相院殿	五	三	二
左大將冬良一條殿	三	四	三
按察使親長甘露寺	三	三	四
權大納言高淸	一	五	四
參議基綱	四	二	四
左衞門大尉藤原政行	五	四	一
沙彌宗伊	六		四

判者

大納言入道榮雅

一番　左　原上霞　前關白

霜かれの尾花かすゑの春風にかすむ浪よるむさし野の原

右　關白

いつまてかありとは見えしその原や春は霞にきゆる箒木

此歌合。判申へきよし承に。ことなる難も侍らす。しかれ

は左右のかたはらに。勝負の字を付侍るへきにやと。おも
ひたまへと、さすかことたらぬ儀にやはへらん。例なきに
しもあらねは。假名の五字を句の上にをきて。三十一字を
つらね侍りて。雌雄をあらはし侍るへし。尋常の歌をた
に。はか〴〵しくつゝけ侍らぬ身に。まして句ことに文字
をかんとはかり。かたのやうに書侍るなるへし。凡おろ
かなる心に。和歌の浦のよしあしを分かたきのみにあら
す。浪のしはにおほゝれは。かたはらいたきひかこ
とのみそおほかるへき。

み吉野はきのふに變る春きぬと先うち霞むけふやみゆ覽

二番

左　権大納言義―

ふるさとは霞にこむるみよしのゝみかきかはらに春や立らむ

右　沙彌宋世

春といへは霞も八重のあしふきにひまこそみえね小屋の松原

我園にきなく鶯かへるなよ竹のまかきのしはしすみかに

三番

左　天台座主尊應

来る春のすかたや遠きみかの原久邇のみやこの山はかすみて

右　前大僧正道興

ゆふしめの外にみたれてたなひくやしのふか原の霞なるらん

雪は猶ふる野の澤に袖はへてかたみをおもみつむ若菜哉

四番

左　前大納言爲富

泊瀬路やあけゆく春の色もなし霞にくもるひはらまきはら

右　前大僧正増運

春やたつきのふは雪もふる里のみかきか原のうちかすみつゝ

嶺の雪かつや春とて消ぬらん霞そ今朝は千重にみえける

五番

左　入道前左大臣

そことしもわかの松原たつの鳴しほひも遠く立霞かな

右　左大將冬良

わたの原立ともしらぬ浪の上にかすむこすゑの浮嶋の松

ちる匂ひとゝめもあへすさても風たか袖契る梅さそふ覽

六番

左　右衛門督爲廣

ありとたに春は見えなてその原や霞のよそにきゆるはゝき木

右　按察使親長

みとりなる色をふかめてかすむなりのとけき春にあふの松原

まやの軒月こそかほれ春の夜はかきほの梅の近き匂ひに

七番

左　前内大臣

花のいろにうつりし袖も春といへは霞にすれるまのゝ萩原

右　権大納言高清

その原や程をしちかみはゝき木のなか〴〵見えすたつ霞かな

鳰の海やくるゝ霞に暫しこそ見えつる船のきえて跡なき

八番

左　権大納言實隆

春の色はまたあさちふの霜かれに霞みもはてぬ小のゝしの原

右　參議基綱

もえ出る淺茅に見えし春の色のつゝきの原は今朝そかすめる

咲花に埋もれゆけはおく山に猶そ分いるしるもしらぬも

九番　左　散位源尚氏

吹よはるしのふか原の春風にみたれもはてすたつ霞かな

右　左衛門大尉藤原政行

みかの原ふるきみやこの春霞はるをいく夜かへたてきぬらん

かくはかりちり行花に春風と峯にもきくは恨めし

十番　左　釋正廣

春のきる衣を空にみかの原ひとつに山もたつ霞かな

右　沙彌宗伊

山かつら霞をかけてまきもくの檜原に春の空そ夜ふかき

みな人のきてもとへかし山にても櫻うゑをく柴の庵を

十一番　見花忘恥

左　權大納言義ー

山櫻春はいかなるならひとて人めもしらぬ花の木のもと

右　前大僧正道興

人なみにたちましるへき身ならねはうき名にかふる花の影哉

とはれねは物さひにけり庭の花よし我のみと靜にそみん

十二番　左　天台座主尊應

かつらきや山分衣よるはきてあくるもしらぬ花の下かけ

右　前大僧正増運

今はわれはつへき老の姿をもわすれては又花になれぬる

をる枝をいかてか暫し殘さまし風し誘へはちらぬ花なき

十三番　左　前大納言爲富

はらひえぬかしらの雪の姿をもわすれてくらす花の下陰

右　左大將冬良

山かつも花の陰にはやとれともをのか姿のえやはかくるゝ

夢なりやきのふ盛の花の陰かつけは移ろふちりはてねとも

十四番　左　入道左大臣

花見れはせはき袂もわすられておほふ計におもふ比かな

右　按察使親長

かすならぬ身をはいかゝと思ひしも花みぬさきの心なりけり

しめし野に中空たかくひはり立床やいかなる芝生なる覽

十五番　左　右衛門督爲廣

まなふさへおろかなる身を春はなと花に光のかけおくるらむ

右　權大納言高清

數ならぬ身をはつかしの杜の名もわするゝ花の影になれつゝ

年積るうき身の春はとにかくに恨てそ見るかすむ夜の月

十六番　左　前内大臣

移ろはん後よいかにと身のうさの見るに忘るゝ花もはつかし

右　參木基綱

身に積る年のおもはんことわりもわするゝ花の雪の木のもと

行儘にきゝす立なるのへの草かくろへかねて妻やとふ覽

十七番　左　權中納言實隆

朽木にもたくふ姿はさもあらはあれ心は花にうつしはてにき

右　左衛門大尉藤原政行

心たゝ身には離たる花そともしらていくとせ春になれなん
すめる夜の門田の水にたくひきて蛙の聲そ近くきこゆる

十八番　左　散位源尚氏

おろかなる心の色も春はたゝ我身わすれ（にしらイ）てむかふ花哉

右　沙彌宗伊

またもこん春をそちきるなれ〳〵し命なかさを花に忘れて
池の面はのとけき風に塵もなくまつの藤浪すめるかけ哉

十九番　左　釋正廣

人なみに我立いてゝ高砂のまつのおもはん花のかけかな

右　關白

人なみにたちよるまくもあらぬ身を忘れて花の影にくらしつ
なれもまた峯のつゝしを折そへて名殘の春と柴に付ぬる

二十番　左　前關白

いろもかも我ことのはにしらぬ身を花に忘るゝ春の木のもと

右　沙彌宗世

心たにあかすはよしや咲はなのかけのくち木と人はみるとも
よしの川しはしは春をやとしけり水に移ろふきしの山吹

廿一番　納涼

左　天台座主尊應

高根よりおろすま柴の涼しさはあらぬあらしを麓にそきく

右　左大將冬良

松たてる麓の里の夕すゝみ秋にもあらぬ秋風そふく
都人きかへてけりなはな衣よはみな夏としらかさねして

廿二番　左　前大納言爲富

夏山の麓のましはをりしきて風まつかけのゆふすゝみ哉

右　按察使親長

外山より麓の里に吹おちてすゝしさわくる木々の下風
早苗まつ植渡せるはわさたそとかつ〳〵見ゆる末の秋風

廿三番　左　入道前左大臣

山の名の朝日はとをくかたふきてふもとすゝしき宇治の川風

右　權大納言高清

小倉やま麓の野へはゆふ日かけかたふくかたそわけて涼しき
みはしにてなれし橘おもひ出てかこそのこらね□

廿四番　左　右衛門督爲廣

陰ふかみこゝや氷室の山風と麓につくる庵のすゝしさ

右　參議基綱

かけふかき山の麓の夕すゝみ袖におちくる風そ露けき
五月雨に埋もれはてゝ日をふれとゝふ人もなき柴の庵を

廿五番　左　前内大臣

里遠くすゝむ麓の夕くれに山口しるくかよふ秋かせ

右　左衛門大尉藤原政行

山風のかよふ麓のならしはのなれまさるへき夕すゝみかな
見渡せは滿くすゝしく軒はまてかゝらに咲る露の夕顏

廿六番　左　權中納言實隆

立よるは麓なからもすゝしさやまたうへもなく通ふ山かせ

右　沙彌宗伊

風の聲は秋をもまたぬならのはのそよく麓にしかはなかねと

時きぬと鵜舟のつなてときかけてうかひそ出る篝火の影

廿七番

左　散位源尙氏

すゝしさは麓のましはしはしなを折しく袖にかよふあきかせ

右　關白

日の入し山のあなたは秋たれの麓の野へのまたき涼しさ

短夜にきけはあまの戸はや明ぬ槇のやをのみ水鷄敲きて

廿八番

左　釋正廣

音羽山ふもとのたきつなみかけて都の袖そかろくなりぬる

右　沙彌宗世

しはしとてすゝむ麓のなら柴のなれはまさらぬ秋風そ吹

水くらき岸の草葉に風すきて露も螢もかけそみたるゝ

廿九番

左　前關白

山人のかへるふもとに分入てましは折しく夕すゝみ哉

右　前大僧正道興

山水もおつるふもとの岩かねにすゝしさそへて〔左歟〕まつ風そ吹

池にさく蓮の花の松風にけちかく匂ふかさへすゝしき

三十番

左　權大納言義｜

風かよふ麓の野へのくすかつらうらはの露に秋そちかつく

右　前大僧正増運

一とほり峯行雲に雨落てふもとすゝしき野への夕露

くりかへしすゝく心も底淸き川へのはらへ千年いのらむ

三十一番　田早秋

左　前大納言爲富

稲葉ふく音は今朝とてかはらねとにしよりなひく小田の秋風

右　權大納言高淸

きのふ今日色こき稲に露落て秋を告こすをのゝ山風

またきより景色秋なるよひの空みか月の影淸くほのめく

三十二番

左　入道前左大臣

をく露もほにあらはれてみたる也なひくいな葉の秋のはつ風

右　參木兼綱

秋の色もほに出てをくしら露の分てなひくやわさたなるらん

わくらはにさそな今夜は七夕のまちにまつらん雲の通ち

三十三番

左　右衞門督爲廣

浦風の色になり行みなと田やほに出てくる秋を見すらん

右　左衞門大尉藤原政行

いなは吹音かはりぬるみなと田に浦風なから秋はきにけり

荻原に夏きゝつるはしかはあらす更にも風のまさる音哉

三十四番

左　前内大臣

わさたこそほにはいつれと白露のをくてもなひく秋の初風

右　沙彌宗伊

植し田のいなはの山路秋くれはまつ穗に出る松風の聲

我せこかきぬにをすらんかるな草ねての朝けの露の萩原

三十五番　左
つくは山けさはたしけくなる露のしつくの田井の秋の初風　權中納言實隆
右
穂に出ぬ小田の稲葉に昨日まてかくやはきゝし秋の初かせ　關白
露そふすつれなき妻はくる夜はも稀なる野への草の莚に
三十六番　左
秋そまつ松にをとして住よしの小田のいなはになひく初風　散位源倚氏
右
つくはねの嶺より落る一葉にやすそわの小田の秋をしるらん　沙彌宗世
道そうかへる月に昔すみて鏡かけみかく志賀の山風
三十七番　左
露のほる岡へのわさ田いかならんねてのあさけの秋の初風　釋正廣
右
夜もすから稲葉を風に分させてあくる門田に秋はきにけり　前大僧正道興
あま人もさそな月みる潮たえ夜半の空すむしほかまの浦
三十八番　左
秋の風稲葉になひく露のまにきのふのさなへ色そかはれる　前關白
右
このねぬる夜のまに露干をかへなるわさ田色つきそ秋はきに鬼　前大僧正増運
三山一にきくも悲しな月みれは夜はすからに鹿のなく聲
三十九番　左　權大納言義—
今朝みれは露をき初る小山田のかりほの庵に秋は来にけり
右　左大将冬良
小山田のいなはそよきて吹風も身にしみそむる秋そきにける
水さむくきりの晴行野澤よりかすかすゝ鴫の月にたつこゑ
四十番　左　天台座主尊應
鳥はまたしらてをとせぬ小山田にはつ穂を渡る今朝の秋風
右　按察使親長
風渡るわさ田の稲のうちなひきいえつきそむる秋はきにけり
峯の雲きえてのこらぬ空なからかすかになりぬ月の有明
四十一番　月似鏡
左　入道前左大臣
山の端にかゝれる月や見る人の影をうつさぬかゝみなるらん
右　左衛門大尉藤原政行
ますかゝみ岩戸にかけしかけとめて幾夜かてらす久かたの月
槙ひ原杉たつ山の葉をしけみまた影みせすくるゝ夜の月
四十二番　左　右衛門督爲廣
まさかきにかけしかゝみの面影も月にそのこるあまのかく山
右　沙彌宗伊
秋はたゝ空行月の舟の内にみかき出せるますかゝみかな
限りなく千里くもらて望月のなかはの秋はしるき影かな
四十三番　左　前内大臣
さかきはにかけし鏡もかく山のこのまをのほる秋のよの月
右　關白

雲間よりさす月影はあまたとも袖をかゝみにおほえとやみん

一本にたくひまれなるりうたんのかれ行花につきて咲比

四十四番

左　　權中納言實隆

山鳥もねにやたてましますます鏡それかと月のすめるおのへに

右　　沙彌宗世

むかへともしらぬ翁かますかゝみかけて出たる月ひとおとこ

夜やあくる砧の音は千聲して庭鳥もはや八たひ鳴也

四十五番

左　　散位源倚氏

心あれやくもらぬ月のますかゝみひかりをみかく夜はの嵐に

右　　前大僧正道興

月そとて夜はにむかへは影きよくすめる鏡そ雲にかゝれる

折見はやもみつる山の日にそへて枝染重ねすくる時雨を

四十六番

左　　釋正廣

かたみとてのこすかゝみをすまの浦の波より出す秋の夜の月

右　　前大僧正增運

くもりなき玉嶋川の月見れはいまもかゝみの影そのこれる

徒に誰かいをねんすむ月に松風すさひくるゝ秋の夜

四十七番

左　　前關白

なれきつるむかしの秋の面影もうかふを月のうらみとやみん

右　　左大將冬良

誰ためそわれしかゝみの面影を月にもうつす秋の夜の空

散はてゝとまらぬ秋の宿の花せめては殘る虫のねもかな

四十八番

左　　權大納言義ー

み空ゆく月は鏡とみえなから手にはとられぬ物にそ有ける

右　　按察使親長

いかゝせん月をかゝみとみるたにも人の心のくもりやはする

したへとも長月は早おくりきてなか〳〵なれや東雲の月

四十九番

左　　天台座主尊應

いかにみて手にとるはかりむかふらん鏡をかくる月の宮人

右　　權大納言高淸

くもりなき昔おほゆる世かたりに月をますみの鏡とそ見る

砌なる菊の白露葉にをくはまたその色みけちめ見えけり

五十番

左　　前大納言爲富

水の面にむかふかゝみの曇らぬはてりそふ月の光なりけり

右　　參木基綱

むかふうちに涙そくもる月はたかのこすかたみの鏡なるらん

神な月ちかき空とて初時雨みちゆきふりにきほふ山風

五十一番

左　　葦間氷

右衞門督爲廣

あしの葉は冬かれはてゝ行舟のさはる入江や氷なるらむ

右　　關白

風渡るあしのかれ葉にのこりけりこほる入江の浪のひゝきは

冬たつやねぬる朝けにはけしくて風のおとそひ散木葉哉

五十二番

左　　前內大臣

浦風のこほりはてたる入江にも芦のほなみそかれてのこれる

右　沙彌宗世

冬をあさみ入江にかるゝ芦つゝのひとへはかりに凍る比かな

見し秋の木毎の色ははかなくてよにも寂しく時雨ふる也

五十三番

左　權中納言實隆

池の面は芦まをせはみ行なやむ水よりまつや氷そむらん

右　前大僧正道興

しほれ芦のほすゑかたより風吹は氷の上にさはくしら浪

とこ〳〵浮寝の鴨もせはしとやむれて立らんかるの池水

五十四番

左　散位源尚氏

難波江や汀のなみのこほるより芦の葉風の音そまかはぬ

右　前大僧正增運

難波江やこほりを蟹のいとまにて芦かり小舟こきもかへらす

興津風なには江さはき白波のほか行千鳥ともしたふ聲

五十五番

左　釋正廣

芦間のうすきを冬にあらはして今朝かつこほる浪の上哉

右　左大將冬良

池水は汀のほかもこほるらむあしまのなみの遠さかる聲

うす雪や末葉の風のきこえしもよふくる儘に下おれの聲

五十六番

左　前關白

浦風にかれはそよきて湊江のあしまはなみの音そこほれる

右　按察使親長

芦のはにかくれてすめる鳥もなしこやのひまなく氷る入江は

道は雪になきまてみ山かきくれぬたれ迷ふらん松の下陰

五十七番

左　權大納言義―

みしま江や霜にかれふす芦のはもなひかぬまてに氷る比哉

右　權大納言高清

こほらすはありとも見えし白妙にあらはれ出るあしの下水

戸さしせて物凄ましき庭の月よな〱そ見る師走なれ共

五十八番

左　天台座主尊應

よる舟も日をへて遠く三嶋江やあしねの氷とちやまされる

右　參木基綱

みなと川なかれ入江のしほあひに凍りこほらぬ芦間をそ見る

峯の雪積ふりつめは時をえてまなくもたくか炭かまの山

五十九番

左　前大納言爲富

難波江やをきそふ霜にしほれ芦の下ねも見えす氷とちつゝ

右　左衛門大尉藤原政行

さよ風や入江の芦に吹つらんみたれてむすふ朝こほり哉

まて暫しけふくれぬとも歸らしよ御狩の原は雉の猶たつ

六十番

左　入道前左大臣

冬かれのあし分小船よを寒み江にしさはるや氷なるらん

右　沙彌宗伊

氷ゆくかれはの霜もとちそひて芦間のみつの音そすくなき

哀わかしらすことしも又暮ぬかくしつゝのみ積る老かな

六十一番　不叶心戀

左　　　內大臣

右　　　前大僧正道興

人心おもひかけてもたまたすきいかてむすはん契りならまし
せく袖に浮ふ涙の深けれは名そたちにける忍ひきぬれと

六十二番

左　　　權中納言實隆

今は身のこひしねと思ふ命たに心にもあらすなからへにけり

右　　　前大僧正增運

ことはりと思ひもなさて數ならぬ我につらきをなと歎くらん
いかにして後ともせめて契り置ん影ふむ計近きかひなき

六十三番

左　　　散位源尙氏

戀しなんと計り思ふ命さへつれなきなかのたくひとそなる

右　　　左大將冬良

須磨の浦のもしほの烟いつかさて思ふかたには立なひくらむ
よしさらはきてとふことは難く共なと哀共かけぬ言のは

六十四番

左　　　釋正廣

いかにせん花にあらしのことはりはしれともらす我涙かな

右　　　按察使親長

つらからは思ひたえねと歎くたに心にかなふ世ならぬそうき
思ひをはなしとそいはん忍ふれと外にやはしる床の涙も

六十五番

左　　　前關白

したひわひなにか別のふることは戀よはる身も思ひいてつゝ

右　　　權大納言高清

つらきをもさのみ歎かし心には我身のうへもまかせやはする
しられしなたくひや思ふ日に添て影社見えねつきぬ歎は

六十六番

左　　　權大納言義―

つらくともあふをかきりと思はすは人に命をなにかゝへまし

右　　　參木基綱

うきなかにいかゝたへまし思ふには情たにこそ仇になりぬれ
みしめひく貴船の神の守あらはけちね玉散よはの思ひを

六十七番

左　　　天台座主尊應

夕霧のはれぬおもひに消わひぬ雲井の雁の聲をへたてゝ

右　　　左衞門大尉藤原政行

なとてかく人は心に任せつゝいとへは厭ふ身になりにけん
かくつらき契の程をはちやせん身の報にや君かつれなき

六十八番

左　　　前大納言爲富

人をおもふ我心さへかなはねはいきてあふへき頼たになし

右　　　沙彌宗伊

いふことはいはてもあらん思はしと思ふ心そせんかたもなき
みま草を君かためにと苅をけと契たかへはかひもなき哉

六十九番

左　　　入道前左大臣

心たにこゝろにかなふ身なりせは人もしたはし物もおもはし

右　　　關白

つれなきに思ひたえなんとはかりの心も身には任せやはする

陸奥のなき名取川よしさらはきまさぬ君かか言にもせん

七十番

左　右衛門督爲廣

忘れなんとはかりおもふ心たに身をやいとひて猶したふらん

右　沙彌宗世

猶たのめ人のつらさもかくて世にありはつましき習と思へは

見し夢におとつれつるもやかて早さめて淋しき敷妙の床

七十一番　互恨戀

左　權中納言實隆

せめてさはなかにことわる人もあれな恨むるふしの誰か優れる

右　左大將冬良

まくす原ふきかふ音もつらきかなわかなかかきに通ふ秋かせ

又いつのくる夜頼みにすかはらや稀に伏見の今朝の別路

七十二番

左　散位源尙氏

へたて行心くらへのうらみをはたかつらさよりおもひ初けむ

右　按察使親長

まくす原我かたにのみしけりしに人の庭にも秋かせそふく

ともすれは恨をふかみせく涙むかしの袖はかゝる色かは

七十三番

左　釋正廣

最上川ともに心はいな船ののほれはくたるなかとなりけり

右　權大納言高淸

いかにせんかたみにふかく恨てもしたにはさすかよはき心を

忘草きしを尋てかつゝまはたれ住の江にしるへたにせん

七十四番

左　前關白

くらへ見よ鹽やくあまの里の名もかゝるおもひにたつる烟を

右　參木基綱

人もさそ我なかゝきにはふ葛のつゆのへたてをしほる秋風

亂る共きかせてしかな逢けえぬよるの涙の忍ふもちすり

七十五番

左　權大納言義—

君とわれ二見の浦のうらみゆへ波かけ衣ほすひまもなし

右　左衛門大尉藤原政行

我袖もかはらす波はこすとみよいく夕くれかよその浦風

深き夜に誰とかむへき道ならす通へる夢は近きゆきゝと

七十六番

左　天台座主尊應

吹よはる風こそなけれまくす原我なかゝきのかなたこなたに

右　沙彌宗伊

くらへ見よめかり鹽くみかた〳〵にほすよもしらぬ袖の浦人

しはしたにほさぬ袖哉月影もよはる思ひのしる人にして

七十七番

左　前大納言爲富

つれなさの心もおなし心にてうらむれはまたうらみられぬる

右　關白

いつかたに恨はいろもふかゝらんわか中垣のまくすしら露

宵のまにきてたに歸れかた時もみそなくさまん君か面影

七十八番

左　入道前左大臣

いつかたか恨みよはらん人はまた我ことわりと思ふならひも

右　　沙彌宗世

いかにせんよその恨ははるけても我をことはる心ならすは

　身の歎き聞せん使まつ程にけふくれまたやよはも聞なん

七十九番

左　　右衞門督爲廣

よしさらは恨みもはてし恨むるや我身にならふ人のことのは

右　　前大僧正道興

うしといへはつらしとかこつ我中の心つかひそ休むまもなき

　おも出る名殘も悲し忍はすはしはしと袖を猶やひかへん

八十番

左　　前内大臣

まとふてふ同し心の恨をは誰とかそともよひとさためよ

右　　前大僧正增運

人もまたかこつは同しことの葉にふかき心をいかてしらせん

　かき分て言とひけりな露深み蓬生ふかくしけるやとりに

八十一番　　山家戸

左　　散位源尚氏

おのつから松の戸たゝく嵐をもうき世の外の聲にきく哉

右　　權大納言高清

住人のありとは見えす雲にとち嵐にあくる柴の戸の中

　横雲のきえ行かたの其まより峯より明るきはゝみえけり

八十二番

左　　釋正廣

我たれをまつのとほその夕嵐むかしをかたれしる人にせん

右　　參木兼綱

雲にとち嵐のたゝく松の戸に浮世のつてはいつかきくへき

　塵ひちの年積る山に杉村のへにける世をはしる人もなし

八十三番

左　　前關白

山陰の竹のあみ戸のひまをあらみ浮世へたゝて住は見えけり

右　　左衞門大尉藤原政行

夕まくれ峯のあらしは柴の戸をたゝくにしもそさし籠りぬる

　見れはまた絹をも岩にかけてけり千ひろに落る布引の瀧

八十四番

左　　權大納言義—

さらてたにあれまくおしき山里の柴の戸たゝく峯の松かせ

右　　沙彌宗伊

さしこむる峯のとほそも苔むして問人かたくなる山路かな

　身は浮世きても距つる山深みさし籠りぬる篠のあみ戸に

八十五番

左　　天台座主尊應

稀にきてたゝくにあけぬ柴の戸や嵐になるゝ山かけの庵

右　　關白

あやにくに嵐そたゝく世のつかひいとふみ山の松のとほそを

　かりはてし千町の山田もる人もなくて庵はしもむすふ比

八十六番

左　　前大納言爲富

たゝくとて誰をかさてもまつの戸に人たのめなる山風の聲

右　　沙彌宗世

山深く住る心をとちはてはしはのあみ戸はあはらなりとも

　嵐夕に峯の嵐のとふ宿はかゝれる雲のつきぬ窓かな

八十七番　左　入道前左大臣
柴の戸のあけてもくらき山陰は雲ふたかりて露しくれつゝ
右　前大僧正道興
まてしはし柴のあみ戸の明くれもいくよ嵐の山かけにして
露分て行野の末そはるかなるかりの枕に月やまたまし
八十八番　左　右衛門督爲廣
たゝきぬるをのへの嵐たゆむまは明ても雲のとつる柴の戸
右　前大僧正增運
山深み住身のたれをまつの戸にたゝく嵐をきゝもまかへす
見る夢はきくにたえけり袖かへす枕も波のくたく浮寝に
八十九番　左　前内大臣
誰かはと立出て見れは山風のたゝく音のみのこる柴の戸
右　左大將冬良
住わひぬ世のうきふしにきゝかへむ竹のとほその山水の聲
白妙に浪も立きてひかたより時のまにさすしほ風そ吹
九十番　左　權中納言實隆
山里は立出てとはんかたもなしとちていくかの草の戸さしそ
右　按察使親長
しはしとも思はてかこふ松の戸にをくりてけりな明暮の空
汀よりきこゆる音は濱風に松の波そふ志賀のから崎
九十一番　前世神祇
左　釋正廣
憫な〳〵天照神にむかひても君千代まてと手をそあはする
右　左衛門大尉藤原政行
千代ませとおもふ手向は君かため同しことをや神もうくらん
嶺の寺きえ行かねそ山かつらかけてそ月のちかく落ぬる
九十二番　左　前關白
春日やま老木の松の朽やらて君千代まてとまた祈るかな
右　沙彌宗伊
神代よし人の世よしとつき〳〵に猶まもりませあし原のくに
我むかし君に仕へしかす〳〵は立ゐにつけて忍はるゝ哉
九十三番　左　權大納言義—
君か代も猶すくなれと祈るそよたゝすの竹に賀茂の瑞籬
右　關白
天下いのるを神もまもれとやみかさの山にあとはたれけん
松のはしら竹あめる垣同しくは猶奥山にしのひはてめや
九十四番　左　天台座主尊應
代をいのる心ことはの玉津嶋たま〳〵あへる法のしるしに
右　沙彌宗世
祈るそよ神のましはるちりひちの山となる迄よをすなをにと
身にあまる君か恵の春にあへとよしあししらぬ敷嶋の道
九十五番　左　前大納言爲富
君か代を猶すてやらてすなほにと祈る心や神もうくらむ
右　前大僧正道興

讀人のいのるしるしに春日山くたれる代とも見えぬ時かな

かくらこそ末榮えめれ神に祈る世の人心しろしめすまて

九十六番

左　入道前左大臣

いのるてふ昔にこえておとこ山とかゆく今の代こそおさまれ

右　前大僧正増運

天地の神にいのれは君か代やなかく久しく猶さかへまし

世の中をきゝてそ絞る塵のみはとてもかくても墨染の袖

九十七番

左　右衞門督爲實

守れ猶かしこところのかしこさは千代もといのる君か日嗣を

右　左大將冬良

まもれ猶世も住よしのみやはしらすくなる道も神そしるへき

見ても思ひきくも危しそむきえぬ世を渡る身は木その倸

九十八番

左　前內大臣

石淸水ひとつ流を神もまもり君もちきれる代々のかしこさ

右　按察使親長

やすかれと代を祈るこそちはやふる神も心にまつかなふらん

日本に賴む初瀨の利生あれはかのもろこしに傳てやきく

九十九番

左　權中納言實隆

しきしまの道につけても君か代を猶すみよしといのる神かき

右　權大納言高淸

君か代はいのらすとても石淸水すまんかきりは猶そまもらん

忘れすそ聞より思ふかの國やたゝこゝのつの品に漏しと

百番

左　散位源尙氏

神もしれ四方の國まて君か代をいのる心の隔てなきをは

右　參木基綱

男山松のみさほの千代の影君になひけと神はみそなへ

四方の國君になひきて月も日もかきりはあらし久方の空

将軍家歌合 文明十四年閏七月

一番

左持　梅香留袖　　親王御方

我袖に色こそみえね手折つる名残はしはし梅かかそする

右　萩香近枕　　前関白

軒近くうへしもつらし手枕の外にはきかぬ萩のうはかせ

右方申云。畢韻病いかにそや侍る。

左申云。無下可二難申一之旨上。

右方人難申。畢韻病。さる事には侍れと。春の夜のやみはあやなしといへる歌を思ひて。わか袖にとをかれたるいとおかしくこそ。左方人。難なきよし申さる。しかれとも第四句なと優にしもきこえす。左は。そしりあれとも。歌のさまおかしく。右は。とかなけれとも其躰不二庶幾一。なすらへて持とそ申へからん。

二番

左　水郷柳　　関白

青柳の岸におふてふ淀川のよとむ計にうつるかけ哉

右勝　故郷萩　　前大僧正道興

むかしたれきて歸りけんさく萩のにしきを残す露の故郷

右方申云。青柳の岸に生てふよと川と侍る。つゝき如何。

左方申云。朱買臣か故事耳なれ侍るうへ。露もそのたよりなくきこえ侍るか。いかゝ侍らん。

左の柳。すみよしの岸の忘草の心ちそし侍る。下句も心ゆかす。右の萩。朱買臣か故事耳なれて。露もそのたよりなきよし申さる。古事は。一たひに成ぬれは。無念なるも侍れと。これは。耳なれてもにくからす。但如此事。いくたひもとるへきことを本意とするにはあらす。萩の錦。故郷の叢には。露もをき所ある心ちす。仍以レ右爲レ勝。

三番

左　春曙　　天台座主尊應

わかるなよ曉月の雲にあふ雲は花なるあけほのゝ山

右勝　秋夕　　前大僧正増運

大かたの秋をいつまてかこちけん老のなかめのゆふくれの空

右方申云。曉と曙の句をへたてゝ侍るいかゝ。五文字もすゑにかけあひ侍らぬにや。

左申云。平頭の病歌合の例として難申歟。又大方。なかめ。ともに先達有二申旨一哉。

左の歌。難あるよし申さる。右の歌も平頭病なきにはをとり侍るへし。大かたといへること。正治の比歌合にありしをは。ことはよろしなと判せられたる。ありしやうに侍れは。さてもありなん。又なかめといふことのきたわすれ侍り。六百番の歌合に。有家卿歌に。春ともみえぬなかめ哉と侍るを。俊成卿判に。なかめ哉といふ詞の近來見え侍る。末二叶心一と侍る歟。か様の事にや老のなかめをは。歌のさま優なるにつきて。勝と定申へき事いかゝ侍らん。

四番

左持　盛花　　入道左大臣

昨日まて雲のとたえに峯の松のあらしをうつむ花の明ほの

右　明月　　前内大臣

空の海や迷ふ雲なくいとはれて月のみるめそさらにはれたる

右申云。一首終。大方優に侍り。但聲韻の病さきの番におなし。いかゝ。
左方申云。第三句きゝよからす侍るにや。本歌は最晴の字なから。題の心したにもふくみ。うへにもよまれて侍り。今晴の心のみにて。題詞不二優美一歟。
左は嶺松雲にうつもるゝをみて。花のさかりなる事をしり。右は雲海雲一つをさぬるによりて。月のあきらかなるにたかへり。春の花。秋の月。心をまとはし侍て。勝劣わきかたしといへとも。曙の雲は。面影いさゝかたちまさる心ちし侍り。

五番

左勝　暮春鶯　權大納言義—
暮行は身をうくひすのねにたてゝなく計にもおしき春かな

右　晩秋鹿　權大納言教秀
つま戀のつれなきのみかくれて行秋のなこりをしかなく聲

右方申云。殊難なく宜く侍り。
左方申云。下句。ちかき歌に見をよふ心ちし侍り。
左歌。右方人無レ難宜よし申さるゝにもすきて。暮春の名殘を黄鳥のかなしむによせて。なく計にもなと侍る。心詞おかしくも侍るかな。右歌。これも首尾よくいひしりて。よろしくきこえ侍るに。ちかき歌に見及よし左方より申さる。定たしかなることにや。凡撰集の外。とりわきたる歌ならすは。事によりて。さのみさるへきにもあらさるか。いか樣左には及へからす。

六番

左　早苗　權大納言高清
苗代にとりこそ殘せさなへ草千町をひろみうへわたしても

右勝　寒草少　左大將冬良
冬かれのまかきの菊の霜の色は花にそうつむはなの一本

右方申云。同字の病侍り。いかゝ。
左申云。さもとは推せられ侍れとも。いひおほせても聞えさる歟。
右歌。殘菊の白妙の光にうはゝれて。霜の色きゆる心さもときこえ侍り。題の心そ猶思ひたく侍る。左の歌は同字の難有よし申さる。仍右可レ爲レ勝歟。

七番

左　雲間郭公　按察使親長
入日さす山ほとゝきすなのるらしとよはた雲に聲のきこゆる

右勝　雪中待人　沙彌宋世
埋れぬこゝろの松もふる雪に色し見えねはとふ人もなし

右申云。ことなる難なくきこえ侍り。
左方申云。ことなる申詞なし。
左の。とよはた雲なとやらん。こと〳〵しく聞ゆるともあるも。大かた勿論なる樣にや侍らん。右の心の松。ふるき詞にて。しかも色みえぬことを雪中によそへられたる心もすかたも。左にはまさり侍へし。

八番

左持　照射　權大納言廣光
よひよりもほくしさしつゝ山かつら曉かけて鹿やまつらん

右　網代　權中納言實隆
あしろもる袖いかならん川かせのふかぬ程たにさゆる霜夜に

右方申云。殊難なし。

左方申云。題を五文字にいたせる無念にや。又第五の五文字。いかにそや侍。

左。山かつらあかつきかけて鹿や待らんなと。心もことはもよろしく侍るに。第一第二句や。いさゝかいやしくきこえ侍るへき。右初の五文字に題を打いたせる事を難せらる。さもあることなから。これも作例不レ可レ勝計。但第四句。猶おもひたく侍り。持なとにや。

九番

左持　曉蚊遣火　参議永継

たてそふる賤かふせやのかやり火のけふりにおしき有明の影

右　深夜埋火　参議政爲

うつみ火はあさきのみさや閨の内に殘るも難くふくる夜半哉

右申云。ことなる難なく侍り。

左申云。いさゝか誹諧の躰に侍るにや。

左さしたる事なく。又めつらしからす。右爲二誹諧躰一之由左方より申さるゝ。頗風情のすきたる歟也。左いさゝかまされり。

十番

左持　貴賤夏祓　参議基綱

賤ならぬ淺茅か露のみそきとてすかぬくわさを神はへたてし

右　都鄙歳暮　右衛門督爲廣

としなみはみやこより先こえ行やつもる日かすのするゑの松山

右方申云。［　　　］。

左方申云。殘事なし。但歳暮の題には。ことしも今は末の松山と。いへる歌にあひにたる歟。

左歌。賤の字の心。事たらぬよし申さる。賤ならぬ露の身。賤心にて侍らは。それをもへたてしと侍らんは。賤のいたを事とせられたるかとも見えぬへし。右歌。ことしも今はと侍る。歌の同類を申さる。又春從レ東來といへる様に。都より年のくれぬへき事もおほつかなし。たとひ賤の心かすかなりとも。左は勝侍るへきにや。

十一番

左勝　寄風戀　尚氏

人しれすおもふ心の松になとさはきいつらん秋の夕かせ

右　松風入琴　高秀

閨からに心もすむや引ことのしらへにかよふ松かせの聲

右方申云。第四句不レ叶レ心歟。

左方申云。めつらしけなし。

右歌。まことにめつらしけなし。又無二氣力一心ちす。左第四句。僻なる様に侍れと。右にまさり侍るへし。

十二番

左勝　寄煙戀　政行

うき名たつけふりの末をおもふにそ我下もえの空にくるしき

右　遠村煙纖　貞頼

たかやとにたつるけふりの末ならん山もとめくる雲の一すち

右方申云。うき名たつ煙のすへのつゝきおもひえさる様に侍る歟。

左申云。ことなる事なし。但第一第二句のたもし。病にや侍らん。

左。うき名たつけふりのするゑのつゝき。おもひえさるよし侍れと。下句なと心ふかきに似たり。右は。さしたることなし。猶左の勝と申へき歟。

十三番

左持　寄山戀　政茂

分迷ひ思ひ入よりさはるらん身をつくはねのこのもかのもに

右　山路旅行　玄蔵

つたかゝる木々の下みちくれ初て露分かぬるうつの山こえ

右申云。初五文字不二甘心一。ことはつゝきおもはしからす侍る歟。

左方申云。平頭の病の外殊なることなし。

左寛喜根。右宇津山。其以五文字不二庶幾一歟。

十四番

左勝　寄草戀　宗伊

たきりしはあさはの野らの霜枯にくれなゐふかくなる袂哉

右　草庵睹夢　頼行

あたに見る身をうき草の庵なれはさそふ道ありとかへる夢哉

右申。一首の姿。やさしく聞え侍り。

左申云。絶無下可二難申一事上。

左あさはの野ら。萬葉集より出たり。紅はすゑつむ花なるへし。なみたの見する色にそ有けると云歌侍れと。これは只あさはのとつゝけられて。紅ふかくなるたもと哉と。いへるすかた。よろしく見え侍り。右さそふみちありとなといへるわたり。はかなけにきこえて。艶なるさまには侍れと。猶左は。つよき所も侍り。可レ爲レ勝歟。

十五番

左持　寄鏡戀　明親

かひそなきたえにし後の面影は我身をさらぬかゝみなれとも

右　對鏡悲老　光清

よしやなを泪にくもれます鏡さてもや老のかけもかくれん

右方申云。殊難なく侍り。

左方申云。無レ可無二不可一。

左右鏡可レ爲二同科一。

榮雅上

此歌合　文明十四年七月上洛之時。自二大納言殿一給二短册卅枚一。可レ献レ題之由蒙レ仰之間。則進レ之。併被レ與二配卅人一被レ成二歌合一云々。後七月於二比叡山東坂本旅宿一依レ仰早速加二判詞一。不レ及二思案一任レ筆。恐怖々々。

殿中十五番御歌合

判者　前大納言入道榮雅

一番

左　會坂關　　近衛前關白

杉むらはうつもれはてゝ逢坂も春は霞の關と見えけり

右　小鹽山　　沙彌榮雅

小松原はやほの〳〵とみえてけりをしほの山の春の明かた

左歌。相坂の關の杉むら埋れて。かすみの關の名に立ぬるこゝろ。首尾よくとゝのほりてよろし。右うた。指燭一すまてもなき歌様なり。ことに小松原小鹽。小の字なるへし。かた〳〵是非に及ふへからす。左の勝にて侍るへし。

二番

左　芹河　　式部卿宮

せり河やみゆきも今は遠き世のはるをのこしてたつ霞哉

右　老曾森　　左大臣

今年猶わか身おいその森のかけ一しほはなの名殘をそおもふ

左。せり河の御幸。ゆへ〳〵しく侍り。下句やかけあはす侍らん。右これも下句同前の心地す。なすらへて持にや。

三番

左　鳥羽　　左大將冬良

春はたゝ花のふかみやそことなく鳥羽田のみなみたつ霞かな

右　志賀花園　　左衛門督爲廣

さくからに浦半のなみの面影もむかしに匂ふしかのはなその

左の歌。下句いかにそやきこゆ。右のうた。五文字そ。ふとしたるやうに侍れと。歌のさまよろし。又定家卿のうたに。さゝなみやしかの花そのかすむ日のあかぬ匂ひにうら風そふく。と侍るやらん。かやうのうたも。とるとはなしにおもへるこゝろの侍るなり。いかさま勝侍るへし。

四番

左　野路　　德大寺前内大臣

漣とこれも見えけり野ちのさとや風ふきたつる春のあは雪

右　神山　　沙彌宋世

あふひくさひくてあまたに神山の椎柴かくれ誰かさすらむ

左歌。よのつね也。右うた。さ衣に。神山のしゐ柴かくれしのへはそと侍るか。第二句。おもひたく侍れと。勝侍るへきにや。

五番

左　清瀧河　　宗山

夏衣織てやきまし清瀧のなみのしらいと風そすゝしき

右　辛崎　　權大納言敎秀

夕風やなみのちさとにかよふらむ一木もすゝしからさきの松

左の清瀧河。夏衣織てやきまし。かの山分衣に思ひそへられたるかよろしく侍り。右のうた。ことなる難は侍らねと。左勝侍るへし。

六番

左秋　鴨川　　前内大臣

秋にはやたゝすの木末うつろひて月も色なる加茂の河なみ

右　眞野入江　　按察使親長

たつ波もをとすさましき夕かなまのゝ入江をわたる秋風

左右共。無レ可無ニ不可一勝劣難レ決乎。

七番

左　嵯峨野　　閑　全

色にそむ衣の玉のをみなへしなひくさか野の露の明ほの

右　小倉山　　沙彌常祐

出ぬまのほとはかけのみ小倉山ふもとの野への月のさやけさ

左。衣頭眞珠の緒に女郎花をそへられて。あたなるさか野の露の明ほのになひくすかたをいさむる心も侍るや。右。小倉山のふもとの野へに光を先たてゝ山本に月を待ことゝ侍へし。しかはあれとも。玉の光は月にもいさゝか增り侍ぬへし。

八番

左　栗栖野　　兼　俊

かり人やいまかへるらむ鶉なくくるすの小野のあきの夕くれ

右　桂里　　堯　盛

すむ月のかつらの里の秋風そところからなを露はらふらむ

栗栖のをのゝ秋の夕くれ。桂のさとの秋のよの月。いつれも景氣おなしく侍り。

九番

左　宇治川　　衛　氏

見わたせはをちの河風ふきならし霧わけいつる秋のしはふね

右　高嶋山　　權大納言高清

なかぬ日は雪に積て棹鹿のかよふ跡見るたかしまの山

右。なかぬ日はと打出されたる。如何と聞え侍り。左。聞にくき所も侍らす。勝侍るへきにこそ。

十番

左　田上河　　權中納言政爲

聞あかすあしろの床の友ちとり田上河にいく夜なくらむ

右　比良山　　衛　俊

今宵よりは氷にとつるさゝ波もかへるをとなきひらの山風

左右歌難。但同科。

十一番

左　打出濱　　政　行

いかにせむつゝむとすれと打出のはまの名もうき袖の漣

右　床山　　權中納言實隆

はらはしな我近江路と待し夜も今はむなしき床の山かせ

左は。打出濱の名を袖のなみたにかこち。右は。近江路の名をむなしき床にうらむ。其躰ひとしく無二差別一。

十二番

左　方田浦　　參議基綱

逢みるも片田の浦によるふなのはかなきえにも身をや捨まし

右　守山　　宏　行

いかにせむ浮名はよそに守山のやまぬ思ひのかひもなき身を

右。うき名もる山。めつらしけなし。左。歌の躰やさしからねとも。勝侍るへし。

十三番

左　篠原　　平貞頼

夕まくれ袖よりあまる白露のしのにみたるゝ野ちの篠はら

右　伏見野　　左近中將宣親

たれと又ふしみの里に蹴にけむわか床のみのあれまくもおし

左歌。かさねる詞。かやうにも侍れとも。猶しのにみたる篠原なとつゝけたる。よくそ侍るよし聞侍し事也。右歌。誰と又ふしみのさと。よろしく侍。可レ爲レ勝歟。

十四番　左　　井手里　　参議左大弁政顕

つゝみえぬおもひも今は我袖のなみたの色に井出のたま人

右　　波都賀偏杜　　才法師

人めなを身ははつかしのもり始て露きえかへる袖もうらめし

左うた。おつらしきふしは侍らねと。右にはまさり侍なむ。

十五番

左　　安川　　藤原尚隆

袖のなみなをせきかねて安河や数かく水に戀わたりつゝ

右　　浮田杜　　右大将

露もうらし時雨もつらし身を秋のうき田の杜に袖はくつとも

左歌。やす河すと侍るよけしもつかた。いさゝか思ひえさるやうに侍り。右うた。露もうらし時雨もつらしなといひしりて。上句艶にきこえ侍れは。尤可レ為レ勝。

文明十八年三月十六日。各々詠進之。仍後日被レ書進判詞一。作者之書様等事。勧修寺大納言家于時傳奏被(ママ)之筆。

二十六番歌合　文亀三年六月十四日

題

樹陰夏月　　水邊納涼　　寄道祝言

作者

左方

女房

准后

入道親王

前左大臣

（花山院政長）前左大臣

（三条）権大納言実隆

（冷泉）左衛門督為廣

按察使俊量

（中山）権中納言宣親

権中納言季種

（甘露寺）権中納言元長

（冷泉）左近少将為和

右方

（伏見）式部卿親王

尭胤法親王

前関白

左大臣公

（室町）参議左近中将義澄

（冷泉）民部卿政為

（中御門）権大納言宣胤

（四辻）右衛門督季経

沙弥宗世

参議尚俊

権中納言政顕

（冷泉）左近中将為孝

讀師

講師

判者　　左衛門督藤原朝臣為廣

一番　樹陰夏月

左勝　女　房

繰る暮しくれし跡に待出て木の葉色つく月そもりくる

右　式部卿親王

明やすき空たに有を夏山の木の間の月は見る程もなし

左歌。聞二[illegible]一。[illegible]之在一。言[illegible]見二月影於瑞枝一。[illegible]之人。[illegible]可二其心一之者歟。右歌。[illegible]宵早[illegible]。[illegible]見二月之景一。林樹。風体[illegible]。[illegible]及二左者歟。

二番

左　准　后

吹分る風ならねとも木の間よりもりくる月の影の涼しさ

右勝　道覚法親王

影ふかき木の間わつかになく霜をのみ[illegible]移ろふ夏の夜の月

左。納涼の題有に涼しさと侍る。傍題とや申へからん。右。[illegible]霜へを[illegible]侍るに。月の霜を結ひ侍ること。月照二平沙一夏夜霜なと侍るは。沙に影の映したる心にて。面白く侍るを。木の葉の色つくなともいはて。月の霜且許なく見え侍れと。左は傍題をたかへるうへ。[illegible]歟から。右に勝り侍るもの歟。

三番

左　入道親王

半天にしはしやすらへ短夜の月は木の間にならの下陰

右勝　前関白

茂りあふ山はみとりの[illegible]簾すさま[illegible]むる月を見るかな

左歌。しはしやすらへなと侍る。短夜と計侍りては。夏の餘情少く侍る歟。又ならの木の間は。いつかたにか侍らん。すへて一首の心。ことはり叶ひても聞え侍らぬにや。右の歌。みる哉といへるわたり。少思ひたく侍れと。山為二碧玉簪一と。からの歌にも侍るうへ。玉簾おなし様にたをやめのなと。定家卿も讀侍るを。思ひよそへられけるにや。一首のしたて。いひしりて侍れは。勝へきにこそ。

四番

左　前左大臣

ならの葉のはもりの神はうけすとも手折てや見ん夏のよの月

右勝　左大臣

茂りあふ木の間を分る小夜風やもりくる月の光なるらむ

左。うけすともと侍る。後撰集の歌の心は。しらてそ折したゝりなさるなと侍れは。[illegible]たと侍るを。此歌は。をして手折んと侍る歟。[illegible]かたくや侍らん。右は一首のすかた宜見え侍り。可レ謂レ勝。

五番

左勝　前左大臣

茂りあふ木の間の月はみすもあらすみもせて明る夏の夜の空

右　参議左近中将義澄

影やとす岡への松よいつとかは分て木の間も夏の夜の月

左歌は。見すもあらす見もせぬ人のと有をとり。右の歌は。夕月夜さすや岡邊のといへるを思へり。いつれも古今集より出たるに取て。右の歌。いつとかはといへる。いさゝか分別なきやうに聞侍れと。つら〳〵見給へるに。松はときはの色なれは。木の間にかくるゝ月。四時も同事なれは。分て夏としもなき心にこそ。持なとゝや申侍らん。

六番

左勝　　　　　　　　　　　　權大納言實隆

待出る月もこふかき夏山に猶暮かたき日くらしの聲

右　　　　　　　　　　　　民部卿政爲

隈なきをしたふもつらし短夜の月をはよしや木の間にもみむ

左。待出る月もと侍る。もみてにたゝは。月をはいかゝ出したる計にて。夏山の日暮しの聲。おもてにや聞え侍らんうへ。歌合にとりては。暮月の心も少いかゝそや。右くまなきをしたふもつらしと侍る。かくはいつも申侍らんすれは。短夜はかりにては。是も夏の月の色うすくや侍らん。又木の間の月をは。かならすしもしたふましき事にや侍らん。心つくしの秋は来にけりなと詠るも。木の間のうへにて猶月を思ふ風情のさまさまに侍るへきにや。なすらへて持とすへし。

七番

左勝　　　　　　　　　　　　左衞門督爲廣

松木の影いかならんさらてたに有にもあらぬ短夜の月

右　　　　　　　　　　　　權大納言宣胤

夏衣かろき袂のひとへ山月も影すく松のしたみち

右歌。夏衣といひて。月も影すくなとは宜様なるを。影すくにて侍らは。一重なる計にて。ことたるへきを。かろきと侍る一重なきうへ、衣の季句、かろき、一重、すくなと。あまりに重疊せる歟。左歌。猶き判者かにて侍り。源氏物語は。歌よりは詞をとれなと沙汰有事に侍れと。歌をとる例。めつらかならさるをや。はゝきゝの月。まことにあるにもあらす侍れと。千五百番歌合の判に、俊成、自歌の事を申侍るとて、たまたま判者にあたり侍るにより。勝負を付すなと、侍れは。先賢後愚の差別は。すへて侍るへけれと。彼芳躅にまかせ。雌雄を決せすや侍らん。

八番

左持　　　　　　　　　　　　按察使俊量

蟬の羽のうすき衣の袖の露に月もうつろふ木々の下陰

右　　　　　　　　　　　　右衞門督季經

茂りそふ程もしられて夏木立もりくる月の影そすくなき

左右ともに。ことなる見所もなき月にて侍るうへに。左袖の露。分て詫有とも見え侍らす。右月影なとにも。すくなしといはんやと。いさゝか思ひ給へれと。微月なとのかたに見侍らは。それもさも有ぬへくや。又夏木立。少沙汰有事に侍れと。新拾遺集に。鶯のわすれかたみの聲はあれと花は跡なき夏木立哉と侍れは。是もさも有つへけれと。左に勝までの事は。いかゝと思ひ侍れは。持よとゝにや。

九番

左　　　　　　　　　　　　權中納言宣親

夏の夜の霜を梢にをきなから檜の下葉そ月につれなき

右勝　　　　　　　　　　　　沙彌宗世

茂るなり秋にはいつかならの葉をならし顏にも月はもりこす

右歌。後撰集に。我宿をいつならしてか檜の葉をと侍る歌をとれるにや。かの柏木の巻にも。此歌をとりて。人ならすへき宿の梢かなとも侍り、なにかほと云ること。六百番歌合判に色かほと云る、尤不庶幾一よし申侍る、但文永の夏。仙洞の御歌合に。爲家卿有かはなと云歌を不難例も侍れは。すへて歌からによるへきをや。此ならしかほは。

本歌一首にて侍れは、大かた難侍ましくや侍らん。左歌、月を霜に似せ。橘の下葉そ月につれなきと云る。いひしりて侍るも、秋といふ文字に、夏の夜の霜と云と云出したる計にて。末に夏の餘情侍らす。月の霜はいつも有へきにこそ。又此歌。平頭病にて侍り。千五百番歌合に。はかなくそ朝ゐる雲にまかへけるとある歌を、上下の初五文字をとかむる時も侍れと。さまてをもき難にはあらさるへしとて。結句に侍る例もあれと、又同歌合に、ふかき難にてはあらねと、少の勝劣をもとむる時にはとかに申よし侍れは、右は。本歌をおもへるうへ。その難あさきにつきて勝たるへし。

十番

左　權中納言季經

いかゝせん千里はれ行月たにも影は木の間に短夜の雲

右　參議雅俊

鳴蟬のは山の楢暮初てもりくる月もうすき影かな

左、千里晴ん月木間に短夜を歎心、さもやと思給れと、月たにもと侍るに、こと葉心あかさる賦、只月もの心にて侍るやらん。右鳴蟬のはやまといひて。うすき影なと侍る、さまを見所なく侍らへ、春月の心も、前に申たる事にて侍れと。又はさもやと思給ふるにつき。左よりは。いささか歌から增るへくや。

十一番

左　權中納言兼長

短夜は一木の陰にかくろふもしはしの影とおしき月かな

右　權中納言貞顯

茂りあふ青葉もりくらし木間より光を花の夏の夜の月

右歌、光を花とさへなす計そと侍る歌を取て。一首のしたておかしき様に見え侍る所に。新拾遺集そらんに。かすむ夜の月の桂も木間より光を花と移ろひにけりと侍る歌。ふと思出侍る。春夏の差別計にてこそ侍れ。等類なとにもや成侍らん。左歌、陰影同調の詞、さたかに作例も侍るらん。されと耳に立て聞え侍り。又かくろふと云ること葉も。さまて不レ好思給るはいかゝそや。「持とすへし」。

十二番

左　左近少將爲和

枝茂みもりこぬ月も橘の花ゆゑしたにこそ光みすらむ

右　左近中將爲孝朝臣

夏の夜の月の霜より秋の色に移ろひ初る杜の下風

右、夏の夜の月、霜より秋の色にうつろへ初る杜の景氣。おかしからさるにしもあらす侍るに取て、此秋の色、紅葉か。又は秋の明月の心にやと。いさゝか思給れと。いつれにてもあらんかし。左萬葉集に。橘の下てるなと侍る賦。夏木立の枝茂きにより、もりこぬ月の光を橘の花の光に見せたる作意。いひしりて侍り。持なとにや。

十三番　水邊納涼

左　爲廣

涼しさは底ゐもしらぬ廣瀬川袖つく計何思ひけむ

右　義澄

結ふ手にはやくの夏そわすらるゝこむ秋風もいさらゐの水

左歌は萬葉集に、廣瀬川袖つく計淺きをや心ふかめて我思ふらんと侍る歌を取。右歌は源氏物語に。いさらゐはは

やくのこともわすれしをもとのあるしやおもかはりせる
と侍る歌を思へり。左は。何のかたくななる判者かつかう
まつりける歌也。廣瀬川よりも淺くや侍らん。右は。心詞
美麗にして。首尾相應せり。尤以勝たるへし。

十四番

左勝　准后

夕涼みいつくに夏をせり水のあたりは秋のこゝろ成らむ

右　宗世

流れをそ枕にすらむ楸おふる清き河原の陰に暮して

左彼中川わたりの心も。何となくうかみ出て。いつくに
夏をせり水なといへる詞つゝき。宜様にこそ。右枕流嗽
石とすらん侍ること葉をとれり。歌からはいひしりたる
様に侍るを。枕にすとらは侍らんと計にて。枕にすらむと
侍る詞つゝき。尤不レ好歟。又楸おふる清き河原にと。ふ
るくよりつゝきたる詞にては侍れと。前の題に樹陰とあ
るに。楸おふる陰いひ出すともありなんかし。以レ左爲
勝。

十五番

左　元長

夏そとは洪ぬれ衣にいひやせん結ふいつみにあつき日もなし

右　季經

白衣袖に水下なる浪のあやは涼しきものと浦風そふく

左右ともしたる事なきつかひにて侍るに取て。右歌。風雅
集に。早苗とる山田の水のあさみとり涼しき色に山風そ
吹と侍る歟下句とまて不レ相替歟。左歌も下句。あまり
によはく聞え侍れは。なすらへて可レ爲レ持。

十六番

左持　前左大臣

夏はまたこゝをやしめん水結ふこの手かしはの陰の涼しさ

右　宣胤

立よれは波の露ちる濱楸夏をわするゝ浦風そふく

兩首の樹陰の心。さきに申をはりぬ。ことに左歌。近き世
の御製に。水むすふ兒の手柏の木陰こそとにもかくにも
涼しかりけれと。侍るやうに承及は。ひか覺にて侍るやら
ん。右も第二第四の終のる文字。いさゝか不レ好思給るう
へ。歌からよはく侍れは。かちまてはあらしかし。持なと
にもこそ。

十七番

左　道永

涼しさのかきりをいかて岩波の瀧の白玉數にとりても

右勝　尭胤法親王

心より瀧つ岩波音立てわかまつかひの秋かせそふく

左歌。瀧の白玉數に取てもと侍る。君か代のかす。我戀の
數なといふことは聞なれて侍れと。涼しさの數。とりかた
くや侍らん。右歌。伊勢物語に。涙の瀧といつれたかけん
と侍る歌をとれり。左の岩なみよりは立まさりてや侍ら
ん。

十八番

左　前左大臣

田子の浦や夏ともいはす秋の風さそふ浪よりたゝぬ日そなき

右勝　式部卿親王

鷺のゐる川邊の白洲末遠み入日ををくる水の涼しさ

左。するかなる田子の浦なみたゝぬ日はと侍る歌を取て。夏ともいはす秋の風なと侍る詞つゝき。優なる様に侍るを。〔右〕入日をそくる水の涼しさと侍る。水邊遠望おかしくこそ侍れ。以レ右爲レ勝。

十九番

左勝　女房

瀧の音は山風なからはけしくて打ちる程の波そ涼しき

右　前關白

落瀧津たきの白淡に夏消て秋をそ結ふ水引の糸

左歌。瀧の音は山風なからはけしくてなと侍る。涼氣はなはたしく。心高光艶に見給へるを。右又後撰集やらんに。水引の白糸はえて織はたはなと侍る歌を思ひて。瀧の白淡に夏消て秋をそ結ふ水引の糸といへる。尤いひしりて聞え侍れは。よき持と申へくや。

二十番

左持　實隆

詠やる夕浪涼し川風の舟は一葉の秋をうかへて

右　左大臣

山陰や岩まをつたふ水の音もめに見ぬ秋の外に涼しき

左舟は一葉の秋をうかへてなと侍る風体は。いひ知たるやうに侍るを。歌と竟とは。いつれも類宜かるへしと。先達申ならはし侍るに。なかめやるといへる。常に有こと葉にては侍れと。此歌に取ては。少思ひ度や。千五百番歌合に。なかめやる花やいつれそ白雲の立田の山の暁の空なといへるやうには見え侍らぬ歟。右めにはさやかにみえねともと侍る歌をとれりと聞え侍り。ことなる難なくは侍れと。又ことなる事も見え侍らねは可レ謂二同科一。

廿一番

左　季種

夕暮は水音すみて涼しさもこゝをせに聞川風の聲

右勝　政爲

夏むしも思ひけたれてよな〳〵の涼しき影や庭のやり水

左歌。涼しさもこゝを瀬になと。大方いひしれるやうに侍るを。音聲上下句に侍る事。千五百番歌合に。たえ〳〵の木葉か下の音信も霜にとわたる虫の聲々。あるは六百番歌合に。谷水の岩もる音は埋れてすたく蛙の聲のみそするなとゝ侍るを。いつれも判者不レ難レ之歟。しかはあれと。歌合の例。吹毛の難を申ならひにて侍れは。なきにはしかさるへし。また水をとゝ云へる。いさゝか沙汰し侍れと。玉葉集に。庭の上の水音ちかきうたゝねに枕涼しき月をみる哉と侍れは。是は不レ苦哉。右歌。かの物語の中川の宿なとの事歟。夏虫も思ひけたれてなと侍る。涼しきやり水のさま。有し昔の心まてさしくまれ侍る。但第四の句いさゝか思ひ度侍れと。これはかくも有へくこそ。以レ右爲レ勝。

廿二番

左勝　俊量

水結ふ契もあれや爰にきて涼しさあかぬ中川の宿

右　政顯

吹音も聞えぬ水の涼しきや岩まを風のいつみなるらん

右。第四第五句のうつり。岩間を風のおとにや。しかれは風の音水の聲。いつれも耳に遮り侍らんを。聞えぬと侍るいかゝそや。若又納涼の心。ひたすら風のことく。水はな

きに涼しきとにて侍らは。風のかた面に成て。水邊の題ほいなき歟。それもいつれに有は有ぬへくこそ。左水結ふ契もあれやは。源氏の君と。空蟬の君との事歟。一姿には侍れと。第三句思度侍るらへ。第四句のあかぬなとも。此歌にとりては少詞よはく聞え侍れと。岩まよりは。中川のやとりとらまほしくや侍らん。

廿三番

左勝　爲和

袖かけて夕浪涼しいつみ川秋の心やわきてなかるゝ

右　雅俊

結ひあへす袖に涼しき池水の心の秋や先かよふらん

右歌。無二殊難一提之上。[illegible]池亭納涼之淺一酌二山水遠流之深一宜然哉。左歌。累二奇韓嶂泉川綺語一而其躰俊逸也。匪レ拘二古家之遺流一。猶得二流暑之風味一者乎。

廿四番

左　宜親

涼しさは秋もやくると行水にとへとしら玉いはそゝくなり

右勝　爲孝

すゝしさよ猶いつくとて行水のさそふ心そせくかたもなき

左。ぬしすたれとへと白玉いはなくにと。侍る歌を取て。下句なとおかし。但定家卿歌に。夏か秋かとへと白玉岩ねよりはなれて落る瀧川の水と侍れは。等類たるへき歟。右も初五文字いさゝか思ひ度侍れと。心やさしく可レ爲レ勝哉。

廿五番

左持　寄道祝言　道永

ことの葉の盡ぬ種もや君か代のためしを契る敷嶋のみち

右　式部卿親王

家の風吹つたへきて道々の塵をつきける御代つかしこさ

左歌。ことの葉の盡ぬ種を。君か代のためしといへる。筑波山の陰よりも高く。ありその濱の眞砂よりも數あるへく覺え侍るに。右歌。家々の風吹傳へ。道々の塵を繼ける心。御代の賢もいやまさりに侍らんと思ひ給れは。なそらへて持とすへし。

廿六番

左持　前左大臣

代は千世のはしめと思ふ石上ふるきにかよふ道も有けり

右　堯胤法親王

君か代にひろけん敷か玉鉾の道はかた〳〵和歌のうら人

左歌。代は千世の初とおもふをなといひくたし。すへて一首のしたていひしりて。延喜天暦の昔にもかよはむ道にこそ「と」思ひ給るを。右下の帶のみちはかた〳〵わかるともと侍る歌を取て。道はかた〳〵わかの浦人といへる。又宜侍るらへ。梼才の判者なからも。大樹の陰廣きおほんめくみの露にかゝり。和歌の浦浪昔に立かへる宗匠の識。勅令いともかたしけなく侍れは。此御代になとか。撰集をもなからんと思給へられ侍る。仍又無二勝劣一。

廿七番

左持　實隆

今そみむ大津の宮の定め置し天つ日嗣の道のためしも

右　前關白

よくふせきよく守るこそ君か代をたすけし道の始成けれ

右勝。日本紀神代卷に。天照大神天兒屋根命に勅ましまし〳〵ける詞に。善防護と侍る事にや。いひしりて聞え侍り。左歌。大津の宮のさためおかれし天日嗣と侍る。昔天智天皇近江の大津宮にうつり住せ給ひ。是にて御即位なとをこなはれしよりうけ給侍る。即位と書て。あまつひつきとよみけるとかや。抑御即位のおこりを申は。神武天皇橿原宮に御位につかせ給ふを。ここに濫觴とも申へきに。大津宮に定をきしと侍るは。彼御時に正儀儀式なと定おこなはれたる事の侍るやらん。日本紀なとをさへ委うかゝひ侍らねは。今の宣命の詞にも。近江の大津宮にはしめ給ひ。定給ふ法のまゝにと侍れは。ことはりたかへては侍らし。凡君臣の間父子の儀も。禮にあらされはならすとかや侍るにこそ。是はさしもの大禮にて侍れは。世中にありとしある人。たれかよくみたてまつらさらんや。然に第二三の句。彼宣命の詞にては侍れと。歌に取ては。いさゝか平懐なるやうに覺え給れと。今そみむなとゝ侍る。當時相應し侍れは。是も又持とすへき歟。

廿八番

左勝　宣親

いにしへにかへるとみれは萬代の末にも遠き君か道かな

右　左大臣

立かへる堯の代々のまつりことと君にしらるゝ道のかしこさ

判。南首之首見二於レ堯一。堯風舜日之首見一者。共兼レ美二優劣一。至レ期二萬歳千秋之賀辭一者。左可レ謂レ勝。

廿九番

左勝　爲和

木こりにもことゝふ道をためしにて千歳の山や君か行末

右　宣胤

八隅しる君か代よしと國栖等もつかふる道に今や入らむ

右歌。國栖等とあるは。神武天皇。又は應神天皇より始り侍るなと申歟。萬葉集なとにまゝ見え侍り。くすらまても出てつかへ奉らん事。まことに八隅しる君か代のしるし成へし。新撰六帖やらんにも。十津川や吉野の國栖等いつもかもつかへまつらん春の初になとゝよめり。左歌。木こりにもことゝふ道と侍るは。毛詩やらんに詢二芻蕘一と侍る。蕘の字の心を思ひて。木こりといへるにつき。千歳の山なと侍る。首尾相應せり。國栖等もつかふる道は。さることにて侍れと。君を千とせの山といはひ侍れは。勝とや申へからん。

三十番

左　准后

のかれすむ人やなからん誰も今道ある御代に出てつかへは

右持　政爲

さま〳〵の道をいさむる君か代を身にわきて今や誰も仰かむ

左。賢人の世に出てつかへむことゝ。傳說呂望かたくひ。今も侍るへきにやと思ひ給へり。右君のおほんいつくしみのいさめ。さま〳〵のみちなるを。誰も身にわきて仰かむ事。ことはり聞え侍り。可レ爲レ勝。

三十一番

左　前左大臣

まつり事道ある君か代にしあれはしゐてもいはむ諫言そなき

右勝　季經

家々のたのしむ道もくらからし千世もと仰く君かひかりに

左歌。句をは隔て侍られと。有の字二あり。自然此作例も侍らんすれと。わさとつゝけてよめることゝは見え侍らねは。このましからさるに。第四句も。いさゝか思ひ度や。右歌。道もくらからしと侍て。君か光[に]なと侍るうへ。難なきにつき。勝とや申へからん。

三十二番

左　勝　季種

我君の恵をうけて國廣く道ある時やよもにしるらん

右　政顯

道を知り人を知世の治りて君になひかぬ草も木もなし

左右させしたる難なく侍るにとりて。右草尚レ風則必偃と。君子の徳にたとへたる詞を思へるにや。しかはあれと下句なと。常に聞馴たる様に侍るうへ。第三句。殊思度侍り。左難なきにつき勝侍らんかし。

三十三番

左　勝　爲廣

すなほなる君をしるへと千世の坂こえてつかへむ敷嶋の道

右　宗世

時しあれは絶たるをつきすたれたる道おこす代に逢か嬉しき

左歌。何の所見の判者へかにて侍り。歌道の御歌合にて侍れは。至愚の身なからも。唐秋津嶋のいかなる古き道をも。抹出しつかふまつらん事は。さもありつへけれと。幾度も家業にはしかしと。君を嘉瑞にことよせ。心緒を述侍る計也。右歌。儒道興廢と侍る故事。おきは耳馴侍るうへ。下の文をとり過したる體に思ひ給るはいかゝ。是も上の番に申侍ることく。勝負をつけすや侍らん。

三十四番

左　元長

世にひろくあふかさらめや古に又立かへる敷嶋の道

右　雅俊

神も人もやはらく國の姿にはいつれの道かしき嶋の道

兩首の敷嶋のみち。いつれもさしたる事なく侍るに取て。右は。少いひしりて侍れは。勝の字をつけ度思給れと。左歌。いにしへに又立かへる敷嶋の道と侍る。作者は只歌の風躰。昔に歸復するとそ。詠し侍るらん。されと當時身にあたりては。何となく思ひあはせらるゝ事侍れは。無下に負とは申かたくや。持にても侍れかし。

三十五番

左　女房

かくてしも我世は經なんふりにける人にたゝ敷道を殘して

右　義澄

もろ人のつかふるわさも安かれやたゝ敷道を君に任せて

左。かくてしも我世は經なんと侍る。何となく凡人の詞とは見え侍らぬうへ。ふりにける人にたゝ敷道を殘してなと侍る言葉つゝき。いひしりて優美に聞え侍り。述而不レ作。信而好レ古といへる心なとにや侍らん。又ふりにける人と侍る。當時耆老なとの事にもかよひ侍りて。いかさまにもおかしきやうに侍り。右。君にまかせてと侍る。左に贈答の姿。意とよめるらむやうにて。尤宜も侍る哉。抑聖明の御上にても。猶賢佐を用給ふ御心をきては。いともかしこく思ひ給へられ侍りなから。猶御みつからつとめお

こたへ給はんは。正治の道も爛あらはれ。衆人帶をゆるくして。關雎麟趾の化をうたひ。理世太平の聲。隆周の昔のことくならんと侍る事。誠に君も臣も身をあはせたる御契りは。此道の言葉にも思ひ合られて。あやしくおもひ給へ侍るはかりにて。難波江のよしあしをわかたすなり侍りぬるにこそ。

三十六番

左　俊量

あふくそよをしへし跡の庭に生る草も其名の道し有世を

右勝　爲孝

しらぬ代の遠きを忍ふ道もあらしあへるを時と君に仰きて

左歌。例の稽習。少分明ならす侍り。をしへし跡の庭は。庭訓の心歟。又鯉趨過。庭なとゝいへる心を思へるか。草もその名のみたしある代をと侍るは。伯魚か義なとに付ては。何事とも不レ聞歟。あるは指。佞草。あるは堯の時の蓂莢のことなとをいへるにやと。思ひ給れと。これらにてもよも侍らし。つら〳〵思給ふるに。催馬樂曲に。庭におふるからなつなはよき菜なりと。侍る事なとをとり出せりけるにや。庭におふるはかりにて。聞え侍るへきに。草もその名のと引出さるゝは。草の名に付て。子細有けに聞え侍る。もしからなつなはよき菜なりと侍るを。善名の方へ文字を取なしけるにやなと愚推をやり侍る。大方歌からは。いひしりて侍れと。くた〳〵しくや侍らん。右歌一首のしたてとゝのほり聞え侍るうへ。逢期時なと侍る心。よくことはり聞え侍り。以右可爲勝。

左

女房	持二勝一
准后	負一勝一持一
入道親王道永	負二持一
前左大臣	負二持一
前左大臣	持二負一
權中納言實隆	持三
左衛門督爲廣	持二負一
按察使俊量	持一勝一負一
權中納言宣親	負二勝一
權中納言季種	負二勝一
權中納言元長	持三
左近少將爲和	持一勝二

右

式部卿親王	持一勝一負一
尭胤法親王	勝二持一
前關白	勝一持二
左大臣	勝一持一負一
參議義澄	持二勝一
民部卿政爲	持二勝一
權大納言宣胤	持二負一
右衛門督季經	持二勝一
沙彌宗世	勝一負一持一
參議雅俊	勝一負一持一
權中納言政顯	負二持一
左近中將爲孝	持一勝二

和歌部六十七 歌合卅三

蜷川親孝家歌合

一番　夏月易明

左　親孝

みしか夜はかやか軒はも柴の戸もあけなからなる月をみる哉

右　昭淳

なかめてもあかぬ心はなか月の月さへあるをみしか夜の空

左歌。あけなからなる月をみるかな。柴の戸はかりにて。ことたりぬへし。かやか軒はや。なくてもと見え侍らん。右は月をおもへるこゝろふかしといへとも、歌合のならひ。一番の左は。おほくは勝ことのやうに申侍るにつきて。しはらく持とすへし。

二番

左　景都

入かたの山のはにけはとはかりもみるへき月のみしか夜の空

右　定祐

夏の夜の庭のまさこにをく霜をはらひもあへす明る月影

左歌第二句。伊勢物語をおもへるにや。但彼は座にあたりての逸興に侍るへし。歌合の歌なとには。すこし誹諧にことよりて。とり用かたくや。殊にけはと詞を替たる。無下におとりてきこえ侍る。なとか本歌のまゝ。にけてとはかりもと。詠せられさりけん。右歌。ことなる難なし。仍為レ勝。

三番

左　親順

またよひのひかりなからにたま手箱とりあへす明る空の月哉

右　家藤

浪のうへも光はいつらたまくしけ明るふたみのみしか夜の月

玉手箱。玉匣ふたかたなから。捨かたきにとりて。左は下句はるかにまされりと申へし。

四番

左　職行

月影は山のはなからあけにけりいてしもよひのみしか夜の空

右　親忠

夏かりのあしわけ小舟さすさほの雫にみるもみしかよの月

両方の月。さほのしつくよりも。山のはのかけは。たかくみえ侍るにこそ。

五番

左　長頼

空のうみや涼しき比はあかなくにいとゝみるめも短夜の月

右　　　　　　　　　　重嗣

扇をもとりあへぬまにあくる夜のなにゝたとへん山のはの月

右は。[illegible]の嚳をおもへるにや。よしなからさるにはあらす。左の歌。そらのうみのすゝしき色をもてあそふうへに。みるめほとなき月をかこてるこゝろ。なをみところあるへし。

六番

左　　　　　　　　　　有康

鐘のをともはや聞ぬとや難波潟あしのかりねのみしか夜の月

右　　　　　　　　　　親世

またよひのそらに明行ほとみえて雲井にのこる月のみしか夜

右歌。初五字よひと侍るに。結句のみしかよ。同字甚不レ可レ然。左の鐘のをとそ。きくことにたかゝるへし。

七番

左　　　　　　　　　　重祐

短夜の月のみふねもこきあへすさほなくるまにあけわたる空

右　　　　　　　　　　長悦

たちはなの名残すくなきみしか夜は月の昔もあけやすき空

左歌。さほなくるまとは。物縦をさといふ物を。かなたこなたへなくるまの。ほとなきにつきて。流年一擲梭なと。唐人の詩にもつくれるにや。それをふねのさほにとりなさむは。おほきにことたかひてや侍らん。右又月のむかしもあけやすきそら。心得わきかたし。なすらへて持とす。

八番　　水邊納涼

左　　　　　　　　　　景信

風わたる柳のいとに袖ふれてむすひもあへぬみねの下水

右　　　　　　　　　　宗薫

ゆふすゝみ枕をたれかむすふらんなつと秋との中川の水

左歌上句は。はるのけしきをみる心ち侍るに。むすひもあへぬみねの下水。そのほとありても覺す。右中川の宿は。納凉も其寄ありぬへし。但夏と秋との中川の水といへるには。榮花物語。源氏物語なとにも。方たかへのやとりにて。上句かけあひてもみえすや。ともにおもふところあるにつきて。しはらく勝負をさためす。

九番

左　　　　　　　　　　親顯

かゝみ山風そすゝしきこぬ秋のおもかけさそふ水のさゝ波

右　　　　　　　　　　親忠

あふ坂やせきのし水はゆく人もこゝろをとむる夕すゝみ哉

兩首優美。よき持に侍るへし。

十番

左　　　　　　　　　　職行

手にふれてむすはぬ水も山の井のあかなくなるゝ夕すゝみ哉

右　　　　　　　　　　重嗣

凉しさの秋はくるともわすれめやむすひなれにし山の井の水

左第四句。手つゝなるやうにきこえ侍り。右は。ことなることなくよろし。

十一番

左　　　　　　　　　　長頼

たちよれは川そひ柳かけうつす水のみとりそみえて涼しき

右　　　　　　　　　　昭淳

よそめさへたをすゝしさやあまるらん暮て舟さす袖の川かせ

水のみとりそみえて涼しき。よくいひなされて。感情あさからず。可レ爲レ勝。

十二番　左　有康

ゆく水の音もすゝしきゆふ浪はたちかへりてや又もむすはん

右　長悦

うたかたそきえて涼しきたかれには寄みな月の谷川の水

右の初の五字。舊つきなく歌冬つたかたも。はなれそにたてるむろの木。うたかたもなと。ふるくいへるやうにはあらて。はしめにふとうちいてたる。いかゝと覺え侍る。左は。石間ゆく水のしらなみたちかへり。といへる本歌につきて。あかすむすはんとの心。艶に侍り。勝へくや。

十三番　左　重綱

しけりあふ山下水のなみたえてむすひて涼し木々の下風

右　親世

せきいるゝ庭のやり水かせたちて秋にはあらぬ音のすゝしき

左歌。中ノ五文字。さゝへてきこえ侍り。右は。まさり侍るへし。

十四番　左　親孝

山かけに遠をなかれのすゑ落て池水すゝしよするさゝなみ

右　定祐

むすふてもすゝしく成ぬまたれつる秋もや水の中川の宿

秋もや水の中川の宿よろし。可レ爲レ勝。

十五番　夏草露滋

左　親順

さゆり花さくやなてしこましりあひて露も色ある野への夏草

右　重嗣

ゆくかたも猶夏草のしけき野をいく一むらに露のをくらん

左歌。色々とりましりたるや。かへりてみところすくなからん。右のうたからなにとなくよろしく侍るを。しけき野をいく一村に分なしてさらにむかしをしのひかへさんといへるは。西行法師か歌なり。本歌にはとりかたく侍るにや。二句のつゝきいかゝと覺え侍れは。持とさたむへし。

十六番　左　職行

しけりあふ草はみなから夕露のをきかさねたる色そ涼しき

右　昭淳

朝な〳〵うれ葉をゝもみ置露のむすふはかりになひく夏草

左歌。幽玄にみえ侍り。

十七番　左　長頼

夕立はこわたの山にくもきえて涼しき露のふか草ののへ

右　親世

朝な〳〵夏野の草のしけりあひてはことにをける露の白玉

左歌大句。野へととまれる不レ可レ然也　連歌なとにさへ嫌事にや侍らん。右めつらしからすといへとも。難すへき所なきによりて、爲レ勝。

十八番　左　有康

しけりあふ草葉に秋のうつるかとみえしは露の深さのみかは

右　定祐

秋の野もかくやはをかむ夏草のはすゑたはゝにやとる白露

左歌。草葉に秋のうつるかとは。秋のうつりきたるかとうたかへるにや。しかれは。たゝ露のふかきにて事たりぬへし。かはといへる其心得かたくや。右は。題の正中には侍るへし。歌から常のものなから。左にはまさるへきにこそ。

十九番

左　重祐

夏ふかき野もせの草のした葉まてをきものこさぬ露の朝あけ

右　視忠

みるたひに花のさゆりは露ふかみ野嶋かさきの波やよすらん

左歌。あさあけといふ詞。此比人々よむことに侍り。ふるくはあさけと三字によみきたれり。四字になしてよむことは不二庶幾一のよし京極黄門も申されしとや。これはことにあさあけといひなとゝゐたる可レ然とも覺えす。野しまかさきのなみは。かへる〳〵もたちまさりてこそ見え侍れ。

廿番

左　視孝

かよひちは夏と秋との色ふかみつゆより露のしけき草むら

右　宗藤

きゝそふるむしの音あらは露深き夏野の草や秋の夕くれ

右歌。むしのねそはん秋おもひやらるゝとかいへる物語の詞も覺えて。なにとなく艶なる心ちし侍り。左右なく。勝とさたむ。

廿一番

左　景郁

ほにいてむ秋にしもやは涼しさはつらぬく露の玉のをすゝき

右　長悦

草ふかみわけゆく露の玉はゝきはらひもあへぬ袖のすゝしさ

左。つらぬくつゆのといへる詞のつゝき。ふつゝかなるやうにきこえ侍り。右の玉はゝき。彼初子のけふのといへるは。優にも侍るを。これはいかなる掃除のためにかと。用意のほともおほつかなくこそ侍れ。持とすへし。

廿二番　夢中契戀

左　有康

すゑたえすうつゝにかよへ今宵まつかけし契りの夢の浮はし

右　親世

むは玉のよるの契のゆめたにもわかれはおしき人のおもかけ

兩首殊難なく。よき持に侍るへし。

廿三番

左　景郁

あふとみし夢はさめても藤はかまおもかけ殘す袖のうつり香

右　定祐

人めをもよきさらましを夢とたにしらてさめぬる曉はうらし

左は。夢斷燕婉曉枕薫といへる詩の心をおもへるにや。右はおもひいれたる所あるににたり。但題は契戀に侍るを。契心かすかなると申へくや。左も。あふとみしにて。契心は勿論たるへしといへとも。逢契戀と題をわかつ時は。歌合にとりては。其差別をも。すこしはとかめいてつへき事にや侍らん。此たくひ末にもあまたみえ侍れは。吹毛の中

狀難なしといへとも。こゝにて思存の一はしを申述はかりなり。いかさまにも。先以ㇾ左可ㇾ勝。

廿四番

左　親孝

したひものとくる一夜のかり枕いかに結ひし夢にかあるらん

右　親忠

うつゝには思ひたえぬるあふせとてかけしもはかな夢の浮橋

左歌は。只逢戀を詠せるに似たり。夢中戀とはみえ侍らねは。夢のうきはしには。かけてもおよふへからすや。

廿五番

左　重祐

うたゝねに契りし人はみすもあらすみもせて覺る夢そ儚なき

右　（名闕）

おもひねの人をなみたのさよ枕ねさしとゝめよ夢のうき草

右。一ふしあらんと。ふるまへる風情にこそ侍りけれ。第二句。人をなみたのとは。つゝき。いかにをかれけるか。左は。よのつねの歌にて。めをとろくふしも侍らす。穩便なるにつきて勝とすへくや。

廿六番

左　長顯

忘るなよ忘れしといひしごとのはの夢にかはらぬ現ともかな

右　長悦

袖ひきてまたいつかはとたのめしはなか／＼つらき夢の面影

右歌。やさしく／＼きこえ侍るを。初五字無下に俗にちかく。おもひこめたる所なくみえ侍り。此五文字なたらかならましかはとそ覺え侍る。左は。五條三品の。わすれしよわするなよとたにいひてまし雲井の月のこゝろありせはといへるは。人の口にある歌にや。かゝることは尤思慮あるへし。かれこれをかよはして持とすへし。

廿七番

左　職行

末かけておなし心に契りつる夢のたゝちはさめさらましや

右　重嗣

夢の中にかはせし露の言葉もおきあへぬまにきえんとやする

右第二句。いかにそやきこえ侍り。左。題のこゝろたしかにて。殊なる難なし。宜可ㇾ勝。

廿八番

左　親顯

ゆくすゑをかけてたのまむ契とはさためかたしや夢のうき橋

右　（名闕）

夢にさへみすはいかにと慰めてたのむ契そいやはかななる

左歌。させるとかなく侍れとも。右のうた。いやはかなにも成まさるかなといへる。心詞に侍るへし。爲ㇾ勝。

廿九番　不知栖戀

左　長賴

そことしも宿はわかねと君かあたり便もかなとうかれてそ行

右　親忠

里の名も忍ふらんこそかなしけれ心のみたれみえしとやすむ

左は。たゝありに。右は。こゝろふかけにみえ侍り。勝劣辨しかたし。

卅番

左　景都

頼めても蜑の子なれはあた波のよるへいつこと尋ねわひぬる

右　　　　明淳

よゝ帰りそこともしらてたとる身をこゝよ雲多と人や恨みん

左歌。あまの子なれはとは。その身しら卑下のことはなるへし。されは源氏物語夕かほの上も。我身のうへになしていへるにこそ。此歌は。人をさして。あまの子といへるは。侍るへきにか。但作者の心はかりかたしといへとも。右は趣向一ふしあるに似たり。まさると定申さんはいかゝ。

卅一番

左　　　　親順

蜑の子のたくひてなしてそことしも定めぬ宿をいかにとはまし

右　　　　定祐

あけしとの心のおくはしりなからしらぬは忍ふ宿りなりけり

左あまの子は。ことはりも可レ然。右も過失なしといへとも猶以レ左可レ勝。

卅二番

左　　　　親孝

住かへて千里の外に隔つともありかさたむときかはたのまむ

右　　　　宗藤

蜑のすむ里とひ侘ぬみをつくし深きえにしのしるしともかな

左は歌さまおとなしく見え侍り。右にはまさるへくや。

卅三番

左　　　　重祐

たつねても住かゆくゑは白糸のみたくかたみえぬさゝかにの跡

右　　　　重嗣

さしこもるすみかやいつこ白雲のたちうかれゆく夕くれの空

右歌は。三輪の明神の本縁なとをおもへるにや。右のしら雲。たちをよひかたきにこそ侍らめ。

卅四番

左　　　　有康

あたにのみたてまよふらんあま雲のわか入山と告しつけねは

右　　　　親世

たつねてはありかをたにも白雲のきゆる思ひに袖そしほるゝ

両首同科にや。左第四句。わか入山の風はやみなりは。居の字に侍り。入の字もし書生の失錯にや。

卅五番

左　　　　職行

花とみてやとりたつねん人もなし身を鶯の音にはなけとも

右　　　　長悦

君かすむ宿りをそことつけこすは螢や夜半のしるへならまし

左歌。はなとみては。何を花とみるへき心にか。おほつかなし。右のほたるも。さして光ありともみえす。持とすへし。

判者

道誉院殿

左

親孝　勝一　持一　負三

貫禰　勝一　持二　負二

親順　勝二　持二　負一

職行	勝三	持一	負一
長顯	勝二	持二	負一
有慶	勝二	持三	負一
重祐	勝二	持一	負二

右

昭淳	勝二	持一	負二
竹田法印 定祐	勝三		負二
宗藤	勝一	持一	負三
親忠	勝二	持二	負一
重嗣	勝一	持一	負三
蜷川三郎 親世	勝二	持二	負一
長悦		持四	負一

大永三年六月日

右蜷川親孝家歌合得一本挍合

十五夜三首歌合 永祿六年八月

題

月前松風　　湖上月明　　月前鷹

作者

左方	右方
中納言	法印兼智
權大僧都兼俊	覺源
沙門宣僧	小弁
少納言	釋宗璉
大和	釋玄孝
僧意洵	僧光祐
法橋紹正	源頼辰

判者

一位日野大納言

一番　　月前松風

左持　　中納言

月にうき雲たに拂へよしや身にとはるとしても軒の松風

右　　法印兼智

松にのみ風は殘りてはらふへき雲もかゝらぬ峯の月影

左歌。月にうき雲たにのこと葉。文龜三年の御歌合。いかゝせん千里はれゆく雲たにも影は木のまにみしか夜の空。判者月たにもとはへるたにのこと葉〔心〕ゆかさるか。た

たた月もの心にて侍るやらんと難ㇾ之。此歌も。月吹はらへにてあるへきか。右は新古今に。雲はみな拂ひはてたる秋風をまつに殘して月を見るかなといふ歌に其心おなし。但松にのこりて雲もかゝらぬと侍れは。前後相違のやうに聞えはへり。仍なすらへて可ㇾ爲ㇾ持歟。

二番

左勝　權大僧都宗俊

松に吹風の音より秋更て身にしみ初る夜はの月影

右　覺源

すみわたる空もひとつに峯の松更ゆく月の秋風のこゑ

左。秋更てとありて。身にしみそむる月影。時分いさゝか相違にやはへらん。身にしむは。また初秋のころよりも讀ならはせり。秋更ては。八月末つかたのことにこそ侍れ。右も。第四の句よはくて。今少しおもひたくはへれは。是又可ㇾ爲ㇾ持にや。

三番

左勝　沙門宣僧

詠あかぬ空なりけりな松風も月にはさらに音のさやけき

右　小弁

月よりはなかむる友もなき物を誰まつかせの絶す吹らん

月よりはなかむるとも。今すこしいひ仰せても聞え侍らさるにや。又詠なといふ事は。六百番歌合の判にも。すへて詠は豈不ㇾ可二庶幾一にやと有。されは世間小謌にても侍れは。心あるへきか。但さしつめての難にはあらされは。

四番

左可ㇾ勝歟。

左　少納言

ふる宮の月ははるかに影おちて夜も更ゆく庭の松風

右勝　祐宗珪

月影のうすき軒はの松か枝を吹わく風の音そさやけき

左。古宮のと有て。其よせすくなきうへ。新古今のうたに。今は又ちらてもまかふしくれかな。ひとりふり行庭のまつかせ。下句かはることなし。月影にてや侍らん。右月影のうすき軒端のまつ。見所侍らねとも。よく思ひいれられたるところはへれは。勝るとや申侍らん。

五番

左勝　大和

くもりなきかけは木の間に住の江の月そ更ゆく松風のこゑ

右　釋玄孝

さらてたに月に寝られぬ秋のよを猶まつかせの吹すさふらん

左。影は木のまにすみの江のとありて。松風の聲。これは。まつの木のまの心にや。此事六百番歌合に。木のまより日影やはるをもらすらむ松のいはねの水のしらなみと讀るを。俊成卿判に。木のまよりとをきて。まつの岩ねは。やかて此松の木のまにや。何れにても病たるへきよしをしるせり。このこゝろと同し義理。右ことはりは聞え侍り。但すさふに南北あり。右は。風のふきいてたると聞ゆ。月にあらまほしき風の音。その感すくなく侍れとも。難なきによりかちとや申侍らん。

六番

左持　僧意洵

峯高みなかむる月のしはしたに雲もかゝらぬ松風そ吹

右　　　　僧光綸

吹はらふ空にもくまや殘らん月のかつらにまつかせのこゑ

左。なかむる月のしはしたに。是もたにの詞。よくかなひても聞え侍るか。定家卿の歌に。時雨つゝ袖たにほさぬ秋の日にさこそ三室の山はそむらめ。これらにて分別あるへきか。杜子美か詩に。斫却月中桂。清光應更多とつゝれる心に。月のかつらやくまとなるらんとは侍れと。松風のこゑと。いひ捨たる所。事たらぬやうに侍り。仍又可レ爲レ持歟。

七番

左勝　　　　法橋紹正

雲ならぬ夢さへたえて松風にひとり更行月をみる哉

右　　　　源頼辰

うしと聞風たにもなし松原やおとに晴ぬる夜はの月影

右。うしときく五文字。何事のうきにや。又風たにもなしと有て。音にはれぬる。此音。風ならて何の音とも聞えさるにや。左くもならぬ夢さへ。是も夢路もと有たきにや。但優美に聞ゆれは左勝とす。

八番　湖上月明

左　　　　宜僧

鳰のうみやいつくはあれと鹽竈[　　]さゝなみのかけ

右勝　　　　玄孝

いかはかり吹はらふらん秋風の月にくまなき鳰の海つら

左。みちのくはいつくはあれと鹽竈の歌をおもへるにや。宜侍るを結句のさゝなみのかけ。つまりて聞ゆ。右は。こともなくてよろし。勝にや侍らん。

九番

左持　　　　意洵

鏡山うつる光もにほてるや月にみかける志賀の浦波

右　　　　宗玹

天津空なみのうへまてくもりなき月すみわたる鳰の海つら

左は。月にみかけるといひ。右月すみわたるといへる。にほの海つらのくもりなき眺望のさま。いつれおとりまさるともわきかたけれは。よき持にはへるへし。

十番

左勝　　　　紹正

さゝ波やにほてる月にさそはれて急かぬ旅をしかの浦舟

右　　　　光綸

今宵とて照そふ月を水底にうつるも淸き鳰の海つら

こよひてりそふの詞。八月十五夜のうたの心地し侍り。左は。月にさそはれていそかぬ旅をしかのうら船。いひくたしてよろしく侍れは可レ勝。

十一番

左持　　　　少納言

辛崎やにほてる月のうす氷音せぬなみに秋風そ吹

右　　　　頼辰

照そふや比良のねおろし今宵しも月吹拂ふさゝ波のこゑ

左歌。月の薄氷と分別のうへにては音せぬ咎侍り。秋風の波の音に。さては月のうすこほりにて有けるよと。さとりしるへきことにては侍らぬにや。右も。比良のねおろしも。今宵しものもの字むつかしく聞ゆ。なすらへて可レ爲レ持。

十二番

左持　　　　權大僧都

霧はれてさゝなみにほてる鏡山なみよりいつる月はさやけき

右　法印覚智

鳰のうみやよるよるゆく月影に秋なる波の花も咲らん

左、海かけての名もしもいみにそや。右は、秋なる波のはな宜はへるを、新古今家隆の歌に。にほの海や月のひかりのうつろへは波の花にも秋は見えけり。心こと葉相似たり。同類にてこそ侍らめ。しかれは持なとにてや侍るへき。

十三番

左　中納言

空のみと見しはおろかや鳰の海のなみち遙に照す月影

右　覚源

よせかへる鳰のうら波いくたひかうちかへる月の影そさやけき

左第二句、見しはおろかや。聊俗にちかきやうに侍れと、秋水共長天一色といふ心におなへり。右は、にほの浦波いくたひかのこと葉、正緑なきやうに侍れと、眼前の景気さもとをしはかられ侍りぬ。仍不レ決二勝負一

十四番

左勝　大和

秋のよのなかはを近み照月の波にうかへるにほの海面

右　小弁

雲もなくにほてる月の影なれはよるとは見えぬしかの浦波

左。秋のよのなかはをちかみといひて。末にちかきことはりなきやうをしはかるに、たゝ月の清光をいはんためとそ申侍る。右よるとは見えぬなといふわたり、金葉集歌に。有明の月もあかしのうら風に波はかりこそよるとみえしかとよめる歌おもひ出られ侍りぬ。但にほてる海、志賀のうら同事にや。作例有とも歌合にはいかゝとおほえ侍れは。左まさるとや申侍らん。

十五番　月前雁

左勝　少納言

秋風に雲は残らて天つ雁月を翼にかけて鳴なり

右　少弁

来雁のはかせに雲も晴やせん空すみわたる秋のよの月

左。歌からは宜はへれと。翼讃の病有。昔は四病八病とてきらひしかとも。今は平頭霽韻はかりを病とするにや。右羽風に雲もはれやせんも、うたかひて空すみわたる月。いかゝと覚え侍り。愚意、はかせに雲もはれぬらんにては。無二相違一もやはへらん。又持とすへくや。

十六番

左　意洵

月見つゝ昔おほゆる床のうへに天とふ雁も音信て行

右勝　頼辰

行雲にみえみみえすみ雁かねの猶おも影や有明の月

右、月に有明のとたあることとなから、近ころはさしてとかめ侍らぬなり。雁金おなしくは鳴かはいと有たきか。左。月みつゝとは侍れと。あまとふ雁の音つれのみにて。月の餘情すくなく侍れは。是にて右勝へくや。

十七番

左勝　宜僧

影更て月も夜寒の山のはに落くる雁の峯のさやけさ

右　覚源

出やらてまた影うすし鳴わたるかりのは山の月の夕暮

左。月もよそむの山のはにわたる雁のは山の月のゆふくれ。中秋中は。夜の美景さもとおほえ侍りぬ。右も。歌からけ宜はへるを。月前といふ題にて。出やらてまた影つすき夕の月。うた合にはいかゝにや侍らん。左も。下の句。紙燭一寸の歌なとのやうに侍れと。咎むへきふしなきにより勝と申へきや。

十八番

左勝　中納言

月更て影すさましき袖のうへに涙そへつゝ雁そなくなる

右　光福

跡さきになるをも月に数みえてわれ一つらと渡る雁かね

あとさきになるをもは。たゝ。なるも月にかす見えてにて侍らんか。しかれは。なか字あまりて聞え侍るか。左月更て影すさましきも。前のものゝ影あるやうに侍れは。すむ月のにてあるへきか。泪そへつゝなといふあたり。俊成卿郭公の歌に似たり。されとも是は月の感情相かはり侍れは。左の勝にてこそ侍らめ。

十九番

左勝　紹正

秋の夜の哀をこめて月になく雁の泪そ袖に露けき

右　玄孝

大かたのこゑもあやしき雁金のわたる影さへ月にくまなき

大かたの聲もあやしき。こゝにて容様のところにや。大かたは月をもめてしのうた。業平朝臣の秀歌にて侍り。惣して大かたといふ五文字にては。一首の首尾大事なるよし。先達しるしをかれ侍りぬ。しかれは是も小瑕にてそ侍る。

左。なきわたる雁の泪のおちつらんの歌に似たり。しかれとも置ところかはり侍れはくるしからす。月夜のかりのこゑには。袖の露けきも。さもと思ひ給ふれは。以レ左爲レ勝。

廿番

左持　大和

月清み雲も残らぬ秋風にさそはれ渡る初雁のこゑ

右　兼智

契りしも雲井の月にかはらすも秋はたのむの雁はきぬらん

左。いさきよき月のひかりに。天とふ雁のこゑ。さやかなる風の前けしき宜侍る。右も。秋をたのむのかりは来ぬらんといへる。しかるへきにや。但契りしやを。ちきりてやとありたくおもひ給ふはいかゝ。此番又正鵠の雌雄をわきまへかたくて。筆をさしをき侍りぬ。

廿一番

左持　兼俊

くる雁の翅かはさん雲もなく晴わたるよは月のさやけき

右　宗琺

聲なくは一行わたる雁金を月にかゝれる雲かとやみん

左。晴天の月。しつかなる夜はの空。ことなること侍らす。右も。よろしくはへるを。聲かりかね病たるへきか。但六百番歌合に。谷川のいはもる音はうつもれてすたく蛙の聲のみそすると侍るを。判者不レ難之歟。しかれとも歌合のならひ。吹毛の難に及ふ時は。なきにはしかさるへき。左の歌も。第四の句。いさゝかおもひたらすはへれは。是又持にて有へきか。

此一巻。ある人のこりかたきすゝめにより。難波津のよしあしをわきまへ。敷嶋のみちしりかほに。荒涼の申詞をくはへはへる事。まことに。つゝをもて。そらをうかゝひ。はまくりをもて。わたつ海を計ることにて侍るうへに。よはひ七十のおいの波によつみぬれは。朝に見きく事も。夕には跡なくわすれはてゝ。さなから。くらき闇ちをたとる心地し侍れは。春のあら田のかへす〳〵。とりあけ見給ふへきこゝならねと。さすかに。いなみ野のいなみ難くて。いさゝ川の。難思ふ心のかたはしを。印つけ侍ること。道の冥慮もおそろしく。かたへの人の思はんも。はつかしくて。汗顔に堪なきことにこそ侍れ。

判者　日野一位大納言

右十五夜三首歌合以奈佐勝皐本挍合

秋十五番歌合 永祿六年八月廿三日

題

秋花　秋戀　秋祝

作者

義俊　義景
顯生　覺阿
立好　宗因
俊世　親秋
永純　吉仍

判者

老法師

一番　秋花

左勝　義俊

いとみつる春より秋は咲花も花さかぬ野も色つきにけり

右　義景

わけなるゝ花の野もせの袖の露しほれもはてよ秋のかたみに

左の歌。凡春秋のあらそひは。古來優劣を決しかたきにや。これはひとへにかたぬきたり。花さかぬ野へまでも。一もとゆへの心やさし。五文字すこしこは〳〵しくきこえ侍る。右の歌。秋の花ゆへ野もわけそめて。秋のすゑつかたまでおもひいれて。なさけふかくみえけり。すてかたくは侍れと。歌合のならひ。一番の左なれは。勝の字をつ

け侍らうへ、歌からもよろし。以左爲勝。

二番

左勝　顯生

一とせの四方の眺めは秋の野のさける千種の花にそありける

右　覺阿

野邊の露分ものこさす折花の千種にあまる袖のかへるさ

左の歌。これも前のことく。秋をのみとこゝろさせり。右の歌。花にのみ食着の心わけものこさすおらん事。なさけなくや。梵網の一草不與取戒のいましめともや成侍らん。

左勝ぬへし。

三番

左勝　立好

秋風に尾花なみよる野へみれは錦をひたす江にこそ有けれ

右　宗因

ぬれつゝも猶わけゆかむ咲花は千種なからの野への夕露

左歌。尾花なみよる野邊を。濯錦江にとりなされたる。興ありとみえたり。されと尾花を錦とまて云へくこそあらめと。紅葉花のやうにはありかたくや。右歌千種なからの詞。草はみなからなとの心にや。聊いひおほせさるやうにや。よき持たるへし。

四番

左勝　俊世

にほはすはそれともいさやしら菊の花の露は霜こめてけり

右　視秋

わきてなをめかれもやらし咲て又花もなこりの秋のしら菊

南方のきく。左、霜にこめられたるさま。風情もなくみえたり。右歌第二句。やらしとの詞。短慮分別しかたし。やましなと云心にや。是も持とや申へき。

五番

左勝　永純

露わけておらはやおらん花のえに宿れる虫のねはたえぬとも

右　吉仍

小萩原色こきませてなひく野のうす花すゝき露やわく覽

左歌。大かた虫は草根なとにある事とのみおもひしに。草の枝にてなく事眼前にはあることなからめつらしくや。右色こきませてと有て。うす花すゝきと候は。濃淡の心にとりなされたる。たくみにはきこえけり。但うす花薄。常にきゝなれすやありけん。左。歌からよろしとや申へき。

六番　秋戀

左勝　義景

夢路とふ月もうらめしかきつめて物おもふころの秋のね覺は

右　俊世

秋は猶物おもへとのゆふへかなをきそふまゝの袖のうへの露

左歌。かの落月滿二屋梁一なといへる餘情。思ひいてられて感慨ふかし。右は。就中斷腸是秋天と吟したる心もうかひてあはれなり。左は。歌のさまたけたかし。仍以爲勝。

七番

左　立好

うきまゝに眺むる空そかこたるゝ思ひは秋のわさならねとも

右勝　義俊

うき秋と思ひなしたる夜なかさはわかひとりねの心なりけり

南方のうき秋の心。右歌。今夜鄜州月。閨中只獨看なとい

へるさま。あはれふかし。尤右爲レ勝。

八番

左　吉仍

秋はきぬ小鹿はつまに辭たてつしのふる袖やよはりゆかまし

右　親秋

夢もやは人の心のあきの風身にさむくなるよるのころも手

左。鹿をきゝて。しのふる袖をなけくよりは。右。身にさむき秋風のおもひは。まさるへくや。

九番

左　覺阿

待わひて夜なかき空を秋の虫の鳴こそあかせねにはたてねと

右　永純

雲井よりうきをしりてや秋風の涙も月も袖におつらん

むしの音よりも鹿のなくたはふかゝるへし。右下句。なみたも月もといへる優にして秀逸の趣あり。尤勝ぬへし。

十番

左勝　宗円

月もわか袖にうつれはかきくもる涙あやなき夜な〳〵の空

右　願生

大かたの夕きへらき袖の上に秋は一しほの露なみたかな

右下句頗平懷也。左。歌からよろし。

十一番　侍親

左　俊世

木すゑみな秋の色なる中にしも一樹の松の千世をふるかけ

右　吉仍

君かへむよはひに契れときは山千秋萬世の霜をかさねて

右。下句祝詞にをきては。此うへはあらしとみえけれは。勝の字を付へし。

十二番

左勝　願生

仙人のたをれる菊をそのまゝに老せぬ君かかさしにやせむ

右　永純

秋の夜の月こそしらめ高砂の松より後の君かよはひは

左。祝の心よろし。右は。いま行末は秋の夜の月。名歌候哉。おなし事とおほゆ。左勝とすへし。

十三番

左持　親秋

千世の秋を宿に契て露霜の後も葉かへぬ庭の松かえ

右　宗円

天津空めくる月日を君か世にかそへてとをき秋そしらるゝ

左右よき持にや。

十四番

左勝　義景

から人のひしりをまつるむかしにも立かへるなり九重の空

右　立好

明らけき御代はかきりもしらま弓ひくやためしの久かたの月

左。から人の聖をまつるとは。釋奠の心にや。うるはしく先聖先師の道ならては。まさしき治世の術はなき事なるを。此比の都なとは。あけくれのことわさは。力をもちてあらそふ事のみにて。數ならぬ此判者の老法師までも。白頭時節見二干戈一とやらんにて。なからふるも物うく侍に。聖人の道にたちかへる事を。あけくれのねかひなるに。

かやのことの葉をみては。なくさみ侍る。しかるに此題
歟題也。但今は二月八月南庭あり。連歌にも年中南庭の事
をは。春にもちひけり。しからは時にのそみての歌なれは。
結句を九重の秋と續は〻難なかるへし。右は式をもちて。
明らけき政道もあらはれぬへし。文武は兩輪と申なから。
あつさ弓には。心もひかれすこそ。

十五番

左持　義俊

豊もまつ世をいはふらし豊年の行幸いそく秋をむかへて

右　曉村

いく秋かとをつ國より目をさしておさまる御代に出る駒ひき

左以二行幸一祝二豊年一。右以二駒迎一祝二治世一。共以可レ爲レ持

左

義俊　勝二　持一
顯□　勝二　負一
之好　持一　負三
俊□　持一　負二
[illegible]　勝二　負一

右

[illegible]　勝二　負一
曉村　持一　負三
宗円　勝一　持三
親秋　勝一　持三
吉仍　勝一　負三

右以屋代弘賢所藏古寫本挍合畢

後陽成院御歌合　文祿三年八月

題

虫　月　戀

一番

左勝　御製

初霜にうらみはてたる虫の聲をきそふまてに絶しとやする

右　內大臣

燃えたる思ひにもえし跡も又ほにあらはる〻野へのむしの音

右申云。聞虫聲以初霜總知字秋闌。心詞珍重之由滿座申之。左申云。燃と云。ほにあらはる〻心こ〻もしからすや。判云。左。初霜に恨る虫の聲絶さらん。行衛を思ひやれる心。不可思議に詞と〻こほらす。姿やさしかるへし。右歌。左方申狀相當せり。歌さまも　ことのほの　ことにこそ不レ及二沙汰一。以レ左爲レ勝。

二番

左　雅敎卿

身にあまるゆふへの露をむしの聲尾花か袖をたのみてやなく

右勝　重保卿

露なから分こし野へはむしの音も袂にのこる心地のみして

右申云。第二第四の末のを耳にたつ。尾花か袖をたのむ如何。左申云。心地のみしてといへる。いひおほせす。判云。左歌。尾花をたのみて。身にあまる露を置る。あまりなく侍るへし。右歌。結句なと云とめぬ。さりなから。聊勝はへらん。

三番

左持　公遠卿

たれしかも露の行てに分出てむしの音遠き野への夕くれ

右　經光卿

としをへてとはれぬかけの蓬生にさてもよはらぬ松むしの聲

右申云、道のゆくてにと云、むしの音とをきこゝろ、いひおほせす。左申云、無何念。判云、左右一手にして、なれたるやうなから、さしたる難はなかるへし。但いさゝかともに無念の所侍り。よき持にや。

四番

左持　永相卿

露をきへいとゝうらむる名にしおはゝ霜にもたえす松虫の聲

右　資成卿

分る野の道一すちやをく露もむしのなく音もとたへなるらん

右申云、此心めつらしからさるものなり。左申云、第二句連歌詞のさま歟。判云。左右申狀ともに相當せるなり。持とす。

五番

左持　基孝卿

野を分し小鷹かり人駒なへて歸るにまかふくつはむしかな

右　言繼卿

虫の音のをるや錦の機ならてはたものをたつこゝちこそすれ

右申云、も機虫を讀て、響むし何の故ともなし。左申云、散事の心不二相應一歟。歌様も不レ宜。判云。歌様左右分かたくして又爲レ持。

六番

左　重通卿

夕まくれさそはれ出し道分てむしの音あかぬ野へのかへるさ

右勝　親綱卿

ゆふ露をあかすやしたふなく虫の聲もはのほるをのゝ淺茅生

右申云、なにゝさそはるにか。左申云、葉のほる露にむしの音も末葉になれる心宜歟。判云、左歌、つねのみなれたるやうなり。右歌、露と虫との心おもしろく見いたされ侍り。此夕暮のむしを我心にもしたひつゝ、勝と申へし。

七番

左持　光宣卿

うらかれのまくすか下のきり／＼す秋の根にかつよはりつゝ

右　輝資卿

籠のうちに音をは知しむしの幾秋をへたて秋根をやなく

右申云、常にみる心地し侍り。左申云、霜をへたてぬといひて。秋をへたてぬ如何。判云、左常のことなから、難はなかるへし。右心えぬ所侍り。負侍れかし。

八番

左勝　兼勝卿

長夜の更行まゝにをく露もふかきうらみの虫の聲々

右　爲仲卿

我からのなく音はしらす海士のかるもにすむ虫の秋はしる覽

右申云。無下におもへる所なし。左申云、もにすむ虫、秋たるへき例おほつかなし。右陳云。もにすむ虫も秋はしるらんといへる、ひとつの作意なり。たのむの雁たにもといへる類なるへし。判云、左歌無下におもへる所はなかるへし。右にもにすむ虫をわりなく秋によみなせるよりは、左まさ

ると申へし。如何。

九番

左持　　尊雅僧正

風の色もはつかなりけり虫の音のよをまつほとの初秋の空

右　　爲滿朝臣

露分し跡はさか野のむかしにて殘れはのこる虫のこゑ哉

右申云。むしの音の夜をまつ心。月のこゝちす。左陣云。初秋なとは書はなかめ也。仍初秋のこゝろを云へり。右又申云。此こゝろおほつかなし。又時節不二相應一。左申云。下句いかゝ。判云。左歌。右方申狀尤歟。右もまた左方申所相當せり。持とや申へからん。

十番

左　　時通朝臣

さしこもるかた山陰の柴の戸のこゝろもしらぬむしの聲哉

右勝　　永孝朝臣

露も袖にしたひやきぬる野への虫を砌にうつすやとの夕暮

右申云。一首の趣向。月花なとの心地す。左陣云。松虫の心をとりなり。右申云。その心さたかならす。いかゝ左。申云。露の袖をしたふこゝろわりなし。判云。左。心詞分かたくして。おもへる所なし。右勝侍らむ。

十一番

左勝　　月　　御製

雲の上の昔にあらぬ影みても我身ひとつの秋のよの月

右　　兼成卿

ふり殘る跡は水無瀨の秋の月すみこしまゝの影としもなし

右申云。雲上の明月。猶舊時をしたひ。こゝろことは相叶尤宜歟。左申云。右歌。仙洞の舊事不レ加レ難。判云。左は。文武の德をそなへても。猶堯舜の化をしたふ。是則聖王の習ひなるへし。歌にをきて。六儀相叶。尤珍重成へしと申侍るも忝なむ。右又水無瀨の月。綠の洞のむかしも。今の月かけにかはらん事。誠にあはれもふかゝるへし。作者も老の德をのへ侍らむ程。情あらはれ侍れは。むかしの皇居に優して。持と定申侍らんはいかゝ。

十二番

左持　　雅敎卿

雲のうへの影をも袖にやとしきぬ我老らくの秋の夜の月

右　　爲滿朝臣

ひとりあへる今宵の月をしるへにて昔にかへれわかの浦波

右申云。無二指難一。左申云。定而おもへる所有そ。判云。左過こしを思ふ心。老者優せらるへし。右又故侍らむかし。依不レ加二勝負字一。

十三番

左持　　公遠卿

待出し心にかゝるやまの端や月みるほとのうき世なるらん

右　　重保卿

雲のうへの秋はありともみとせみし御池の月の影はわすれし

右申云。待出し心にかゝる山の端。ふりにたり。左申云。可相思所。判云。左ふとしたることにおもひより成へし。又うき世成らんなと。述懐もいかゝ。右又おもふ所侍れは。勝負定めかたくこそ。

十四番

左持　　永相卿

はなかける御階は花の色のみか月も名高き雲の上の秋

右　　親綱卿

三笠山下草かけてすむ月影の露にもれぬ御代とて

右申云、左月の名高は勿論、花何の用にか。左申云、三笠山の月難なし。判云。右玉階の月をよめり。右三笠山の神威をかる。ともに准て持とす。

十五番

左　　基孝卿

月影も身にしむ庭におきゐつゝねられぬまゝに明す長き夜

右勝　　経元卿

ます鏡神代をかけて照らす也高まの原を出る月影

右申云、おもへる所なし。左申云、ことゝゝしきさまなり。判云。左、誠とおもへる所なし。右ことゝゝしきやうなから。神代のさま勝はへらん。

十六番

左持　　重通卿

なかめつゝ嶋かくれ行舟の中に月も明石のうらつたふ也

右　　内大臣

こゝろをはいく千里までさそふらん長きかきりの秋のよの月

右申云、絹中の何ことにか。左申云。無二難事一。判云。左。慕二柿本古風一、右、思二千里月影一。ともにあしからす持にや。

十七番

左勝　　光宣卿

君か代のくもらぬ空の月なれは光も露の玉しきの庭

右　　為仲卿

天地とわかれしよりそきたの昔てすめるを月の光ともせし

右申云、無二申旨一左方。無二指難一判云。左歟、祝の心甚しくて。右負侍らん。

十八番

左勝　　兼勝卿

松風も身にしみけりな高砂の尾上の月にかねひゝく空

右　　永孝朝臣

露むすふ軒のしのふの秋風にみたるゝ月もかきりしられす

右申云。無二指難一左申云、みたるゝ月のかきり如何。判云。右歟、いと艶なる様なから、第四の句誠にこゝろゆかすや。左、たけ高き躰なり。勝と申へし。

十九番

左　　尊雅僧正

秋といへは心つくしの空ならし夜をまつ月も月をまつよも

右勝　　輝資卿

身をてらす影こそなけれ秋の月桂を折しあとをへたてゝ

右申云、宜歟。左申云、述懐也。但心よろしき歟。判云。左歟、右方宜とてさも侍りなむ。但右歟。家業慶之後。折桂の跡をへたゝりて。身をてらさぬ心。やさしくつからまつれり。勝とそ申へき。

廿番

左勝　　時通朝臣

萩の葉の音さやかなる秋風にねさめよふかき月をみる哉

右　　言経卿

もろこしをおもふも西の水海や月の入さのわけてことなる

右申云。無二難一。左申云。心おほつかなし。判云。右。西湖の月ことゝゝしけに侍れとも。左は。いさゝか身にしむこ

こちす。

廿一番　左勝　御製

ほのかなる軒はの荻を吹風のをとに聞ても露そこほるゝ

右　親綱卿

しるへする人は有ともしのふ山こゝろの奥をいかにとはまし

右申云、源氏物語歟、頗珍重に候。左申云。右歌殊宜。判云。左歌。本詞幽艶にして見ところ侍る。右の歌も。あしからすつからまつり侍れと。左なをまさるへし。

廿二番　左　雅敦卿

今は又袖の泪も色に出ぬ木々の時雨をしたそめにして

右持　爲仲卿

しられしな野分する野の夕露の消かへるとも色しみえすは

右申云、無指事。左申云、宜歟。判云。木々の時雨の下染よりも。野分の露こゝろくたけ侍り。

廿三番　左　公達卿

秋といふ中に時雨の名もつらし松につれなきならひなりせは

右勝　兼成卿

たのましとおもひぬる夜の袂もつれなき床の上にきえつゝ

右申云、此しくれふりたり。左申云。無殊事。判云。左歌。ふりたる條は勿論。歌さまもことなる事なかるへし。右こころやさし。勝侍らん。

廿四番　左　永相卿

我戀は秋の林の色とりの色には出しなにはたつとも

右勝　重保卿

つれなきもきうも昔の契りにてなにをえにしに思ひそめけん

右申云。色とりの色に出しとはいかゝ。左申云。無難。判云。右歌いとおかし。左の色とりめつらしけには侍れと。右の方の申ことく。第四句いかにいへるにか。又右の爲勝。

廿五番　左持　基孝卿

ふみ分てゆく末まよふ戀の道なにをしるへに思ひ入けむ

右　永孝朝臣

なにゆへにうき夕そとなかむれは袖に泪の色そこたふる

右申云、顔荷事歟。左申云。色のこたふる如何。判云。左右之狀相當せり。よき持成へし。

廿六番　左持　重通卿

なをさりのゆふへもかゝる露や置と物思ふ袖を人にみせはや

右　經光卿

身のほとをおもひきゝたる袖の上に己つれなき夕暮の露

右申云。ふるし。左申云。無互難。判云。左歌。ふりたりともかゝるこゝろつねに詠する事。難にはあらさるへし。右又難なければ。能持と申へし。

廿七番　左　光宣卿

ひとりぬる袖の泪と秋ふけて身にしむ程の比そかなしき

右　内大臣

まくすはふ同し岡へのおもひ草こゝろつくしの秋風そふく

右申云。甘心。左申云。無レ難。判云。左歌。右方人甘心々々。右又無レ難。たゝしこゝろは聊ふりたるにか侍るへし。左。下句なと宜侍れは。右方人申狀にまかせて。左爲レ勝。

廿八番

左　　兼勝卿

海士のかるみるめもあらぬものゆへに秋にそかゝる袖の浦波

右　　爲滿朝臣

祈りてもかひなかるへき行衞かと契りむすふの神にとはゝや

右申云。右ニ病氣一左申云。古躰也。判云。右歌。古躰なから。病氣有にはまさり成へし。

廿九番

左持　　尊雅僧正

天地とわかれしよりの戀の道いのるに神もしるしあらなん

右　　言經卿

かきなかすためしをそ思ふ御溝水秋の一葉にあとをゝこして

右申云。天地開てよりの戀のみち。いかゝ以二何躰一書可レ爲二流暢一歟。左申云。古事ことく〳〵し。判云。左歌右方申狀相當歟。右の歌も。戀のこゝろさたか成事とく〳〵しとは。いかゝ左方人申にか。但うたから勝る句はなかるへし。

三十番

左持　　時直朝臣

秋かけて色にな出そわか戀の松の下草露はをくとも

右　　輝資卿

袖そまつ色にはいつる大かたの時雨は木々のこすゑなれとも

右申云。文字不審。左申云。別事。判云。松の下草。木々の梢なき色にて淺深難レ分者乎。

讀師

講師

判者　　内大臣三條西

右後陽成院御歌合以百花庵宗固本写合了

和歌部六十八歌合卅四

近江御息所歌合

題

梅　やなき　花櫻　かにはさくら
棟　火櫻の花　庭さくら　なしのはな
もゝのはな　岩つゝし　梶の木花　山ちさのはな
さるとりの花　楓　山なしの花　岩柳
みつゝしの花　うきくさ　山ふきの花　ふちのはな

みやすところのさうしにて。宮の花といふうたをあはす。
右はあはせす。

梅

香をとめて折こそしけれ梅のはな春の霞はたちかくせとも

柳

いつれをか枝ともわかむ青柳の花もひとつにあさみとりなる

花櫻

花さくらちる山川ははるも猶ともまちかほの雪かとそみる

かにはさくら

ふかれくるかには櫻そそひて散はるをくれぬ匂ひなるへし

あふち

鶯の木の花とのみいふなれはあふちとりをはすへんともせす

火櫻の花

あつさゆみ春の山邊に煙たちもゆともみえぬ火さくらのはな

庭櫻

あるしとか我はく宿の庭さくらはな散ほとはてもふれてみん

なしの花

春立はいつくともなし野はなりぬ若菜摘へくなりそしにける

もゝの花

咲しとき猶こそみしかもゝの花ちれはおしくそ思ひなりぬる

いはつゝし

枝しあれはおひそしにける岩つゝし花咲迄にならんとやみし

かちのきの花

わたつ海をこきゆく舟のかちの木の花とは更に波そたちける

山ちさの花

いたつらに散やしぬらん山たかみ人もかよはぬ山ちさのはな

さるとりの花

鳴こゑはあまたすれとも鶯にまさるとりのはなくそ有ける

かへて

春霞たちそめしより色かへて野はならしてよわかなつむへき

やまなしの花

よの中をうしといひてもいつくにかみをは隱さむ山なしの花

いはやなき

いはやなき花いろみれは山川の水のあやとそあやまたれける

みつゝしの花

君をおもふ心にみつゝ忍はなん戀しきおりはあまたすくれと

うきくさ

水のうへによるへ定めぬうき草もこのは流れておもふへら也

やまふきの花

いろにふかく思ひそめしをひとしほに咲そしにける山吹の花

ふちのはな

紫にいろあかりゆくふちの花こするたかくもなりにけるかな

四條大納言公任卿以二手跡本一寫留者也。

右近江御息所歌合以流布印本挍合了

源順馬名合

一番

左　山葉緋ヤマノハノアケ

ほの〳〵と山のはのあけ走りいてゝ木の下蔭を見てもゆか南

右　木下鹿毛コノシタカケ

山のはのあけて朝日のいつるには先木の下のかけそさきたつ

二番

左　海河原毛アマノカハラケ

久堅のつきけそらよりわたるとも天のかはらけ草とゝめてん

右　比佐加多の月鹿毛ヒサカタノツキケ

雲まよりわけや出らんひさかたの月け空よりかちて見ゆるは

三番

左　葦原鶴駮アシハラツルフチ

波まよりとふあし原の鶴ふちは難波のあしけおひつゝかんやは

右　何葉葦毛ナニハノアシケ

いてかてにとふ芦原の鶴ふちはあしけの浦はくり見てそゆく

四番

左　安佐千不之虎毛アサチフノトラケ

淺茅生の虎毛かみたるけし（古にはあなくわかたのイ）みわかたのいとのくりけや

右　白糸之栗毛シライトノクリケ

白糸の栗毛ひきいてゝみるからにふす淺茅生のとらけなり鬼

五番

左　烏玉黒ムハタマノクロ

かたきまつ緑のあをにくらふれはかみとそみゆる烏玉のくろ

右　緑乃青ミトリノアヲ

みねのまつ緑のあけのなたかきをよる烏玉のくろやなからん

六番

左　神人之鬘木綿鹿毛カミヒトノカケツルユフカケ

ゆふかみのなりて渡らは遅れつゝとりめは雲のよそに社みれ

右　相坂木綿付鳥毛アフサカノユフツケトリノケ

ゆふ神のとくもあらしをなにし負は翔る鳥毛を合せさらまし

七番

左　梅花糟毛ムメノハナノカスケ

にけなくもくらふめる哉いちしるく匂すくれて早きかすけを

右　久留志木鼠毛クルシキニヽケ

散にける花のかすけも色増るにけにしあなはかひなかりけり

八番

左　海乃積磯菜草アマノツムイソナクサ〔マヽ〕

すまのあまの朝けに摘る磯菜草今日かちふちは波そうちつる

右　天奈留鶴鹿毛アメナルヒハリカケ

なに立てふりて天なる雲雀かけいとゝあしこそ増るへらなれ

九番

左　無底井淵ソコヒナキフチ

栲縄たえてやみね底ひなき淵にはかつくあまもあらしを

右　海乃多久奈者返淵アマノタクナハノクリケ

千早振神のくろといへとわたのはら白〔き〕雲ゐの空にすててき

十番

左　和多都美乃腹白ワタツミノハラシロ

千早振神ノろてへとわたつみのしろきくもゐの空そすてゝき

右　千者也不留神黑チハヤフルノカミクロ

わたのはら白妙の波のうちてこし其神くろはかちはみえにき

或本左右くらふる馬のあしはやみわかかたにうつかちふちをみよ

右源順十番馬歌合。一巻傳云。端忠家卿後成卿祖父奥俊忠卿俊成卿父眞蹟。今觀二其書一疑第四番。左歌以下俊忠卿手跡矣。寛政五年癸丑春日摸二寫之一。即日一挍加二朱書於レ傍了。

藤原貞幹

右源順馬名合以藤貞幹本書寫雖不審不少依無類本不能挍正

一條大納言家歌合

題

石名取

左

數まさるかたに拾へる石なれはてにかゝりぬる千代にも有哉

右

底の石の顯はれてゆく水無瀬川みきはのおとるしるしなり鬼

左

あまたたひひきつむ石の數はみな君か千年のためしなりけり

右

勝負を何かいふへきたちゐするまひのけしきを人はみよかし

左

とほ／＼に思ひこそやれなか濱の眞砂の中にすたつつるのこ

右

しら波のたちゐにいのるかひあれとは津鶴ての神のしるらし

左

君か代の數にとり置さゝれいしのうらふの山とまつなれる哉

右

天地のふくろのかすし多かれは思ふ事なきけふにもあるかな

左

みとりこの手毎にとれるさゝれ石の行末遠きためしなりけり

右

汀には石のみならすとりつめは濱のあなたはかひもあらしな

左

いとゝしくみにもやさりて見ゆるかな荒磯波も心よすれは

右

右一條大納言家歌合以古寫一本挍合

多武峯往生院歌合 正月庚申夜

題

家梅始開　　池氷一倍殘

歌人

一番　　家梅始開

左　　美作

みちゆきの人もとひけり珍らしく梅さきそむる宿のかきねは

右　　中務

めつらしく梅の花けさ咲にけり宿のあるしもにほひことなり

二番

左　　宣旨殿

春まちしかひも有かないつしかと我花その〻梅さきにけり

右　　出羽

さきそめて宿をにほはす梅のはな誰かたちえを折にこさらむ

三番

左　　武藏

我宿にひらけそめぬる梅花にほはん春そ數もしられぬ

右　　左門

あさとあくる風の匂ひにおとろけはよのまに梅の花咲にけり

四番

左　　讃岐

かは岸のわか枝の梅も咲にけり岡へにいまはゆきて折はや

右　　式部

梅花さき初ぬれは我宿に鶯のねもともしからめや

五番

左　　左門

ちりはかゝり咲そむるよりわか宿の梅の匂にしる〔く歟〕物そなき

右　　小馬

梅のはな匂ふさかりの宿なれは梢をのみそなかめつ〻をる

六番　　池氷一倍殘

左　　讃岐

春風やまたうちとけてふかさらむうすく氷の池にのこれる

右　　出羽

曇りなき春のかゝみとみゆるかなひとへ殘れる池の氷は

七番

左　　美作

春の池にひとへ殘れるうす氷あをもたまも〻隱れさりけり

右　　武藏

うす氷のこりすくなく成にけり池のかゝみと冬はみしかと

八番

左　　中務

春風やぬるく吹らむ池水のみきはの氷ひとへのこれり

右　　左門

にほとりもみなそこ深くかよふめり池ほの氷むら／＼にして

九番

左　　宣旨

こち風にとけゆく池の氷らすみをしのはふきも春めきにけり

右　　式部

はる風の吹そめしよりいつしかと池の氷のうすくもある哉

十番

左　美作

春かすみ冬を隔てたちぬれと池の氷そひとへのこれる

右　小馬

こち風にとけはてぬかし薄こほり池の藤浪あやかみゆへく

右多武峯往生院歌合以猪苗代謙庭本書寫一挍了

西國受領歌合

題

盧橘　五葉　薔薇　眞薦

田子　照射　神祭　蚊遣火

釣船　鵜竈

歌人

判者

西國の受領の舘に四月はかりに庚申しけるに。ものゝ名ともかきて。いたしたりけるを。歌よみけるに。いさあはせんなといひて。かきいたしける。

一番　盧橘

左勝

まちかうも花橘の木をうゑて古き年よりみそならしつる

右

なにまさる花橘を頭挿にてさかゆる昔かみよとこそみれ

かみのみてさためたる。左は。ふるきとしよりみそならしつると。いふおかし。右いはひのことは。よのつねなり。

我を祈る事はよのつね立花の年ふる程のかすはまされり

二番　五葉

左勝

峯をこえ吹くる程の松風は千とせとのみそとほく聞ゆる

右

千代の聲をえたちならねと聞えける峯をこえ吹谷のまつ風

左右おなしころになんある。

遠近の峯の松風わかすしていつれの方も千代とふくなり

三番　薔薇

左（[illegible]）

ことし植てみるかおかしさうひに咲花の枝々くれなゐにして

右

色ふかくわきてか露の置つらんけさうひにさくはつ花のいろ

左。くれなゐの色ふかくよめり。右ば。色といふこと。もと末に置して。かきあやまりてけり。

もと末にことのはをやはしたるへき紅色は深さまされり

四番　眞薦

左勝

澤水になひくまこものすゑしけみゆく我駒のたちとまりつゝ

右

春駒のすたきはてゝしまこも草みきはも茂みおひにけるかな

左は。末なとおかし。右は。すたきはてゝしといひて。すゑにしけみいつる。なつみたることになん。

まこも草茂さそまさる春駒のすたきはてゝし汀おとれり

[illegible]番　田子

左[illegible]

我君の御代なかひこの苗をしもひきつらねてもうゝるたこ哉

右

常よりも今年は殊に手もたゆく苗ひきそふる田子のいとなみ

左は。君をいのり。右は。國をほめ。いつれもすてかたし。

ひきつれはゆふてもたゆくうゝなるも田子のいつれもにくからぬかな。

六番　照射

左勝

おのかしゝ手毎に燈す御狩人のをたひ〳〵のしるくもある哉

右

夏山はともしの松のたひことに鹿のたちとそさやけかりける

左は。手ことにともすといへるおかし。右は。ふるめきたり。

鹿のすむたちとはふりて狩人の手毎に燈す數はまされり

七番　神祭

左

夏冬の神をまつるといそきしにはかなくきねの年はおいつゝ

右勝

みな人のこのて柏をさゝけつゝまつらんくにの神そさかえむ

左は。きねのよをかけたるに。右は。神をかけたるにまされり。

きねもいさこのて柏をさしはてゝ人の祭れる神は畏こし

八番　蚊遣火

左勝

ひをみてはみなくる虫もある物をふすふ計りに疎むかやなそ

右

夕されはほのにふすふる蚊遣火の下こかれつゝ上はつれなき

左は。おかし。右は。ゆふされはみたれと。すゑさまになん有ける。

夕されにされとみゆれと蚊遣火のふすふる人は思ひ増れり

九番　釣船

左

わたつみの浦にとはゝや釣舟の浮たるよをはいつよりかへし

右勝

たなゝしのあまの釣舟波まよりとわたる程そはるけかりける

左は。よけれと。はかなたちてそある。右は。とわたるほとそなといへる。まされり。

うきてふる事ははかなし釣船の遠けき程の渡りまされり

十番　竈

左勝

あま人のかた／＼にやくしほかまの煙たえせぬ君か御代かな

右

あまたやく人やすむらんしほかまの煙たえせすみゆる浦かな

左のかた／＼とあるも。右のあまたやくとあるも。おなし（已下判歟）こゝろなり。

あまたやく浦も遠けし竈の煙たえせぬかたもおとらす

右西園受領歌合以山本甲斐権守季鷹本書寫一挍了

源大納言家歌合 一日之内合之

左勝　小忌衣

年をへてひかけにみれと小忌衣すりめことにもめつらしき哉

右

きてなるゝとはなけれ共をみ衣ゆきすりにみて年そへにける

左　竹

年をへて色もかはらぬ呉竹のふしにも千代をこめてけるかな

右勝　左近

節ことに千代をこめたる竹なれはかはらぬ色は君そみるへき

左勝　網代　弁のめのと

網代にてひをのみくらす宇治人は年のよるをそ歎かさりける

右（名闕）

ひをへつゝ散もみちはもこの里は網代によりてみるそ嬉しき

左勝　霰　こせち

とふ人もなき山里の槇のとはあられのみこそうれしかりけれ

右　宮内

降かゝる音はおとろく霰かな旅のやとりのいたやなれはか

左勝　氷　中将

風さむみとこさへさゆる冬のよは池の氷もとちやますらむ

右　新衛門

おとは川遠かた人も袖たれてわたるはかりにこほりしにけり

左（判闕）芦　弁のめのと

つの國の難波わたりはしらねとも芦をしるへに尋ねてそゆく

右

左勝　水鳥　　なかつかさ
水鳥は河邊のかせと思ふらんおのかたちゐにさはく波おと
右　　新衛門
川近き宿のすみかは水鳥のたちゐにつけて夢そさめける
左(同聞)平野　　五　節
花もみなかれぬる野へにかはらぬはまねくを花の心なりけり
右　　(名聞)
春秋の花の折にもまさりけり霜かれわたる野へのけしきは
左勝　鷹狩　　弁のめのと
みかりのゝ高く聞ゆる鈴の音にしのふるきしを思ひこそやれ
右　　宮　内
はし鷹のとふ尾の鈴の音すなりのへの雉子はたつ空もあらし
左持　待春　　安　子
降雪はきえあへすともよしの山いつしか春の霞たちなむ
右　　(名聞)
梓弓はるこそひきてまたれつれ花にこゝろのいれはなるへし

右源大納言師房卿家歌合以一本挍合

播磨守兼房朝臣歌合

題

高砂松　明石月　秋風　秋霧
萩　女郎花　鹿音　初雁
白露　紅葉　戀　祝

歌人

一番
左持　高砂松　　内記大夫
高砂の尾上のまつは君かへむためしにとてやおひはしめけむ
右　　李　頭
たかさこの尾上の松にまつの□た借か代にこそ生そへにけれ
二番
左　明石月　　右京進
いにしへもかくみえけれは久堅の月をあかしといふにや有覽
右・　　李　頭
秋のよの月をみつゝやいにしへの人もあかしの浦といひけむ
三番
左　秋風　　藤内記大夫
まつ人のくるとそおもふ夕暮にすたれ吹いるゝ秋風のこゑ
右　　藤大夫
荻の葉のはをふきみたる秋風はよふかくめをも覺しつる哉
四番
左々　秋霧　　觀算君

逢坂の關はとめねと秋霧にたちこめられてこそそかねつる

右　法性君

霧きりに道はまとひぬたつた川いつれの程かわたりなるらん

五番　萩

左　源内記大夫

秋くれはいとよりかくる萩の枝はむらこに花そ咲みたれける

右　佐渡守

春はまつ我しめ置しみやきのゝ小萩に秋は花咲にけり

六番　女郎花

左

色に出て露むつましき女郎花ことに花よりもなつかしきかな

右　清大公

女郎花露なつかしみおもへとも我ひとりのみしぬそかひなき

七番　鹿音

左　武藏守

くる人もなき山里にあきゆふは鹿の音のみそみゝなれにける

右　右兵衛尉

秋はかり妻をこひつるさをしかは心みしかきこゝろ也けり

八番　初雁

左　永好君

秋ことにくる初雁のこゑきゝてあはれといはぬ旅のなきかな

右勝　兼偉君

ふる里やおもひいつらむ雁金はさよふけかたに鳴わたるなり

九番　白露

左　源別當頼宗

かくなから消せさりせは白露を秋のかたみに置てみてまし

右　藤先生惟賞

霜またきおきてしみれは竹の葉によをこめてこそ露は置けれ

十番　紅葉

左　佐大夫

秋よりもふてしにける紅葉はを尋ねぬ人はまたやみさらん

右　弁君

たつたひめたつたの山の紅葉はをしくれて又も染てけるかな

十一番　戀

左　監物君

ま葛はふをのゝ篠原したにのみ人をこふるけくるしかりけり

右　新三源視宗

みの上になるへき事もしらるかは戀せし人をもとかさらまし

十二番　祝

左　備前前司

君か代はから異鹿の深き色にやちとせつはき紅葉するまて

右　民部大夫惟連

君か代はかそへやるへきかたもなし濱の眞砂を數にとるとも

右播磨守兼房朝臣歌合以古寫一本校合了

禖子內親王家庚申夜歌合

題

春夜月　歸雁　蛙　呉竹

早蕨　菫菜　躑躅

歌人

左

小弁君宮の　出雲

中務　甲斐

右

小式部　美作

武藏　式部

兵衞

一番　春夜月

左　宮小弁君

曇りなく梢にうつる月かけの花の盛をみることゝちする

右　小式部

みても猶おほつかなきは春のよの霞をわけて出る月影

二番

左　出雲

春のよの月に浮るゝたましひはいる山のはにおくれやはする

右　美作

君か代の久しかるへきしめの内はのとかに月の影もすみけり

三番　歸雁

左　中務

かきつらねかへる雁かね霞わけ花の都のはなをみすてゝ（名聞）

右

霞たち立かへりゆく雁かねは花に心をとめぬなるへし

四番

左　宮の小弁

いつこをかすみかとは思ふ年ことにゆきてはかへる返かり金

右　小式部

霧わけておのかとこよはたちしかと霞のまよりかへる雁かね

五番　蛙

左　小弁

山吹の花や咲らむひまもなくかみたみかはに蛙なくなり

右　武藏

春のよはねられさりけりおとろかす蛙の聲にめのみさめつゝ

六番

左　中務

今よりは井てのわたりに家ゐせし蛙の聲に夢のさめけり

右　武藏

歸るへきみちもわすれて蛙なく井てにもやかてすむ心哉

七番　呉竹

左　甲斐

ふしことにちよをこめたる呉竹の末葉てもみゆる宿哉

右　美作

春雨も時雨もふれとむかしより色もかはらぬ宿のくれ竹

八番　左　早蕨　小式部

さわらひのもえ出る春のゆふ暮は霞のうへに煙たちけり

右　式部

いつしかともえにける哉早蕨の野へはいかなる思ひなるらん

九番　左　菫菜　中務

ひまもなくすみれそ咲るしめのうちは庭紫にみえわたるかな

右　美作

目にそへて紫ふかきつほすみれふる春雨ははひにそありける

十番　左　躑躅　小式部

君か代をのとかに匂ふいはつゝし花のさかりに也にけるかな

右　兵衛

岩つゝし咲る盛け紅のいろにそみゆる春の山へは

右禖子内親王家庚申夜歌合以百花庵宗固本書寫依無類本不能挍正

禖子内親王家櫻柳歌合

題　櫻　柳

歌人

左　中務　小式部　甲斐

右　式部　美作　兵衛

三月十よ日。櫻のさかりに御前の香いみしうめてたく咲たるを。おなしうは。かたわきて。櫻柳あはせて御らむせさせんとて。ほかのも。めてたきともを尋て。植あつめさせて。

一番　櫻

左　中務

隙もなくたつねて折る山櫻ならふ匂ひはあらしとそ思ふ

右　式部

散こともならはてそさけ風ふけと梢のとけき宿の櫻は

二番

左　小式部

雪かとそよそにみつれと櫻花折てわきたる色のなき哉

右　美作

足引の山のはよりはいてねとも花こそ春のひかり也けれ

三番　柳

左　甲斐

春ことにみる青柳のいとなれとかゝるなひきの枝はなかりき

右　兵衛

くりかへし過にし春も行すゑもかゝる柳のいとやなからむ

四番

左　小式部

玉ひかる糸かとみゆる青柳になひかぬ人はあらしとそ思ふ

右　美作

ねぬなはのこゝちこそすれ汀にて柳のいとはくれとつきせす

右禖子内親王樓柳歌合以古寫一本挍合了

禖子内親王家夏歌合

題

時鳥曉聲　晝の聲　夕暮の聲　夜中聲

小鷹狩　擣衣　露　雁

霧

歌人

中務　宣旨

美作　さいも

駒

小式部　播磨

式部　出雲

兵衛　武藏

一番　時鳥曉聲

左　中務

ほとゝきす待あかしたる東雲に鳴ひとこゑは身にそしみける

右　小式部

郭公いかなる里に旅ねしてまたしのゝめに鳴て過らむ

二番　晝の聲

左　宣旨

時鳥なきつる空を詠つゝ遠の山かけかたふきにけり

右　はりま

時鳥ひるねの夢のこゝちしてもりの梢を今そ過なる

三番　　夕くれの聲

左　　　　　　　　　　　　美　作

かたらふも中々也や子規たそかれときのあかぬ一こゑ

右　　　　　　　　　　　　式　部

二こゑと鳴てを過よ子規たそかれときはおほめかれけり

四番　　夜中聲

左　　　　　　　　　　　　さいも

時鳥よはの一こゑきゝしよりやかてねかたき物をこそおもへ

右　　　　　　　　　　　　出　雲

郭公ぬる程もなき夏のよをねさめよとてや鳴とよむらむ

五番　　小鷹狩

左　　　　　　　　　　　　小式部

故里の人はまつらんかりにきてけふは野へにもくらしつる哉

右　　　　　　　　　　　　武　藏

あけくるゝ日數もしらて過に鬼たゝかりにとて出し野へにて

六番　　擣衣

左　　　　　　　　　　　　美　作

ころも打宿のとなりにすむ人はまとろむ事そすくなかりける

右　　　　　　　　　　　　兵　衛

あはれ今は峯のあらしにおとろきて衣うつなり遠の里人

七番　　雁

左　　　　　　　　　　　　小式部

鳴なく〳〵ぬく白玉とみゆる萩千草の露もぬれぬかきりは

右　　　　　　　　　　　　出　雲

花すゝきのきけにかゝる白露をやかてきえせぬ玉かとそみる

八番　　雁

左　　　　　　　　　　　　小式部

かりかねはくる秋ことに草枕旅のそらにそあかしわふなる

右　　　　　　　　　　　　式　部

ひきつらね旅の空なるかりかねは雲のうへにや宿はかるらむ

九番　　霧

左　　　　　　　　　　　　こ　ま

おほつかな行ゑもみえす霧立ていかゝたつねん音なしのたき

右　　　　　　　　　　　　さいも

秋霧のはれまもみえて山彦のことふるかたにわれはきにけり

右無類本不能挍合

山家三番歌合

題

梅　池柳　歸雁

歌人

一番　梅

左

あさみとり春のそらよりちる雪に梢のむめのまかひぬるかな

右

梅かゝは雪なからこそかほりけれしつれも花の色にみゆれは

二番　左

にほふ梅の花の衣にしら雪のあまたかさねてふりかゝるかな

右

梅の花ゆきけのそらににほひつゝちるにふりそふ春のやま里

三番　左

白妙の雪にまかへる梅の花くれなゐな□いろはみえまし

右

ふりをらす雪にちりかふ梅の花きえぬをみては人はわくとも

一番　池柳

左

春はなを柳の糸のたよりにや池のみきはに人もたえせぬ

右

春のくる柳のいとやぬきつらん池のちりなみ玉にみゆれは

二番　左

はるの池のみきはの柳いとよはみたえぬは糸の心なりけり

右

池水のなみはかゝれと青柳の糸のはなたはかへらさりけり

三番　左

春風に池の氷のとけしよりむすひかへたる青柳の糸

右

青柳の梢の糸は池水のきしのねにのみかへりくるかな

一番　歸雁

左

玉つさはちりもやするとかりかねの聲に心をかけてやる哉

右

古郷をかすみへたては雁金のそなたの空にゆきやかへらん

二番　左

春くれはひきくらへつゝかりかねの歸る聲こそことに聞ゆれ

右

雁かねにかくる玉章いかならんゆく方は秋のたひをまつかな

三番　左

幾たひか行かへるらんかりかねの心をとむる春もあれかし

右

かへるかり聲こそ遠く過ぬなれつけてとふへき人はなけれと

右山家三番歌合以大納言忠家卿眞蹟書寫挍合了

源宰相中將家歌合

一番　初戀

左（持歟）　宰相中將

いろみえし心はかりはしつむれと泪はえこそ忍はさりけれ

右　刑部卿

いつしかとしほるゝ我か袂かな泪や戀のしるへ成らむ

二番

左　左京權大夫

風ふけはたちろく宿の板しとみやふれにけりな忍ふ心は

右勝　前左衛門佐基俊

人しれぬ戀にはまけしと思ふにもうつ蟬のよそ悲しかりける

三番

左持　若狹阿闍梨

いはてたゝ思ひやりにてしらせはや人しれすのみこふる心を

右　備中守仲實

なるかみの音に聞つる君なれは思ふこゝろをそらに知なむ

四番

左　筑前七郎

君のやめしのゝ小篠ひまをあらみもらしてしかなかくる心を

右勝　攝津三郎

けふこそはいはせの森の下紅葉いろに出ねはちりもしなゝめ

五番　會戀

左　宰相中將

あひみても夜こそ戀は増りしかけふは晝をそくらしかねつる

右勝　刑部卿

うたゝねの夢かとのみそ歎かるゝ明ぬるよはの程のなけれは

六番

左持　左京權大夫

契りありて渡りそめなは泪川かへらぬ水の心ともかな

右　前左衛門佐

月草にすれる衣の朝露にかへるけささへ戀しきやなそ

七番

左勝　阿闍梨

いつのまにひなとしらみて白波のかへる空より戀しかるらむ

右　備中守

しら波にほかくる船もあるものをけさの沖をは何にたとへむ

八番

左　筑前七郎

くれまつと照日のかけを詠れはいるへき山のは社遠けれ

右勝　攝津三郎

わかれぬるあしたのはらの忘水ゆくかたしらぬ我心かな

九番

左勝　宰相中將

あふ事も我心よりありしかは戀はしぬとも人はうらみし

右　刑部卿

中々に袖そ朽ぬる思ふともあはす泪のかゝらましやは

十番

左　左京權大夫

こひしさに絕す流るゝ我袖のなみたを人のこゝろともかな

右勝　前左衛門佐

たはれにし妹にあふやと道のへにとひし夕けそ人たのめなる

十一番

左　　阿闍梨

こえなれし逢坂山のなそもかく戀路になりてまとふなるらん

右勝　　備中守

くみみてし心ひとつをしるへにての中の清水わすれやはする

十二番

左（持）　　筑前七郎

つれなくは戀てつれなく成はてゝまた更々につれなきやなそ

右　　攝津三郎

いつとたにまた逢事を契せは日をかそへてもなくさめてまし

十三番　夜戀

左勝　　宰相中將

思ひあまり詠るそらの〔もイ〕かき曇り月さへ我をいとひつる哉

右　　刑部卿

あらし吹よさむの里のねさめにはいとゝ人こそ戀しかりけれ

十四番

左勝　　左京權大夫

よと共に玉ちる床のすか枕みせはや人に夜はのけしきを

右　　前左衞門佐

浪のよる岩ねにたてるそなれ松またねもいらて戀あかしつる

十五番

左勝　　阿闍梨

戀わひてかたしく袖はかへせともいつかは妹か夢にみえける

右　　備中守

我心ときそともなくみたるれと日たにくるれは戀そはりけり

十六番

左（持）　　筑前七郎

わかこひはかたうら染のから衣かへしてぬるや色にみゆらん

右　　攝津三郎

ねぬまゝに月を詠てあかすかなやみには戀もなくさましかし

十七番　經年戀

左勝　　宰相中將

年をへて落る泪を衣手にたまゆらかけぬ時のまそなき

右　　刑部卿

おもふ事いやとしのはにつもる哉また打とくる人しなければ

十八番

左（持）　　左京權大夫

戀しさになるみの浦のはまひさきしほれてのみも年をふる哉

右　　前左衞門佐

人こゝろ何をたのみてみなせ河せき〔せイ〕のふるくゐ朽はてぬらむ

十九番

左勝　　阿闍梨

年をへて戀に朽ぬる吾みこそみ山かくれの朽木なりけれ

右　　備中守

つれなきをまけしと年のふけしかな我くろ髪に霜のをくまて

廿番

左（持）　　筑前七郎

しめ〳〵て岡邊にはやすくり芝の年にそへてもしける戀かな

右　　攝津三郎

歎きつゝおほくの年をこゆるきのいそきあはむと思ひし物を

作者

左方

宰相中將國信
左京權大夫俊頼
若狹阿闍梨
筑前七郎

右方

刑部卿顯仲
前左衛門佐基俊
備中守仲實
攝津三郎

右宰相中將實歌合以一古寫本合畢

雲居寺結縁經後宴歌合

題

風　萩　苅萱　露　月
虫　霧　秋田　菊　九月盡

歌人

左

皇后宮攝津君
大進君
上人
散位道經
三宮相摸君
前越前守仲實
散位顯仲朝臣
筑前權守爲忠
覺勢入道
前下野守經兼
琳賢
皇后宮權亮顯國
前木工頭俊頼

右

基俊
左近中將師時
散位忠隆
三宮甲斐君
皇后宮少進兼昌
帥殿
三宮甲斐君
上總君
木工助敦隆
覺入道
大貳君
常陸君

判者　前左衛門佐基俊

一番　風

左勝　皇后宮攝津君

おきの葉のそよともすれはまつ人に驚かれぬる秋の夕風

右　　基俊

秋にあへすさこそは葛の色つかめあな怨めしの風のけしきや

萩のはの。まつひとかとおとろかるらんもこそあるさま
おかしうはへめり。右の。秋にあへぬくすの。まけぬらむ
も。まことにうらめしけに。いとをしうそはへる也。

二番　萩

左　　大進君

おるからに袂つゆけき萩か花ころもすりきるなをやたちなむ

右勝　　左近衞中將師時

朝またきたをらてをみむ萩の花うは葉の露のこほれもそする

ころもすりきむよりは。うはゝの露のこほれむも。おかし
けれは。まされるにやはへらむ。

三番

左勝　　上人

秋されは花の錦といはれのも小萩からへにしくなかりけり

右　　散位忠隆

萩か花もとのふるえに咲にけりみしにかはらす秋の夕暮

左は。いはれのもとよめる。めつらしき事はなけれとも。
こ萩からへにしくなかりけりといへる、歌の心そ。はな
はなしくしたゝかなるやうにはへるめり。右の。もとのふ
る枝にさきにけりみしにかはらすなとよめる。ひと通に
萩をよめる心にはあらて。むかしをおもひいつる心にて
そある。題の心ならは。ことしおひのはきにても、ありな
むとそおほゆる。みつねか。ふるえに咲るとよめるは。秋
のゝをゆきけるに。むかしのともたちに逢てよめれは。こ
そいふる枝に咲るといへるも。ことはりにて。おかしけ
れ。これは思ひもかけぬやうなれは。左勝とや申へから
む。

四番　苅萱

左勝　　散位道經

ふみしたきあさ行鹿や過つらんしとろにみゆるのちの苅かや

右　　三宮甲斐君

のへことにみたしてみゆるかるかやに露吹むすへ秋の山かせ

左の。朝ゆくしかやなといへる。いひしりておかし。但過
つらむそ。すこし文字つゝき。いかにそやおほえはへる。
右の。野へことにといひて。秋の山風といへる。ことたか
ひてそみえはへる。けにの山はちかきことにはへるに。む
かしもふもとの野へのなとそよめるかし。女四の宮の歌
合。つゆ吹むすふこからしにとよめる歌に。いくはくもた
かはす。猶さやうのことは。さるへくやはへらむ。されは
いますこし。左は。增るにやはへらむ。

五番　露

左勝　　三宮相摸君

夕されはお花をしなみ吹風に玉ぬきみたるのへのしら露

右　　皇后宮少進徐昌

稻妻の光にまかふゆふ露をひとる玉とも思ひけるかな

左のうた。すこしふるめきたるやうにはへれと。させる難
とすへき處なし。右の歌の。夕露のひとる玉とみゆらんこ
そことのほかの目に侍れ。ひとる玉はかりならん露は。す
くなきたとひには。ひきかたくや侍らん。又露はかりあら
ん玉は。ひとらむことかたくや侍らん。歌の詞も。あまり
あたらしけれは、左のよきにや侍らん。

六番　月
左勝　上人
みるまゝに心もすみぬ天の河なに流たる秋のよの月
右　前越前守仲實
たつはらいさよふ雲も吹はれて光すみそふ峯の月かけ
こゝろもすみぬといへるは。吹はれてには。いますこし。
まさりてやはへらむ。

七番
左勝　師　殿
としをへていつも詠る秋なれといさまたかゝる月をこそみれ
右　〔名闕〕
雲のゐる峯のふもとに今宵きてみれはなには月こそ隱れさりけれ
左のは。いさまたかゝるなとよめる。すくれてはあらねと。
よくもしりたり。右の。雲のゐるふもとにといへるは。山の
名にはあらて。里のなとこそ聞はへれ。なと山とよみて。
ふもとはいへ侍らはや。名には月こそかくれさりけれと
よめるは。みつねか。たみのゝ嶋を分行はといふ歌に。お
なしやうにも侍る哉。歌合のうたには。かゝる事はよまね
は。左の勝にやとこそ見えはへるめれ。

八番
左勝　二宮甲斐君
ふく風やみそらのくもをはらふらん秋しも月のさやかなる哉
右　筑前前守顯忠
いつとなく同し空ゆく月なれとことよひをはれと思ふなるへし
風は。春夏秋はそらにはふかて。たゝ秋のみ吹にやはへら
ん。又秋しも月の照まさるかなと。いへるふることに。か
はりてもみえはへらぬものかな。さて右の。こよひをはれ
と思なるへしとよめるこそ。殊におかしう侍れ。月の一條
のおほちわたるにこそはへるなれ。思なるへしも。いとひ
そのことはにもあらねは。こよひの月にも。勝まけも。み
さためはへらねは。持とや申へからむ。

九番　虫
左　師　殿
よもすから啼もことはり露寒みいかてか虫のいをやすくねむ
右勝　上總君
聲たえす秋のよすから鳴虫はあさちか露そ泪なりける
左の。いかてかむしのいをやすくねむとよめる。いみしう
おかしけなり。されと。あさちか露そ泪なりけるとよめる
は。いますこしの。あはれさ増る心ちすれは。右まさると
や申へからむ。

十番
左　覺勢入道
いはすとてなをさてなけやきり〳〵す花の宿りの枝移りすな
右勝　木工助敎隆
眞葛はふよもきか宿のゆふ風にうらみもまさる虫のこゑかな
いはすとてなをさて鳴やと。いへるわたり。ことはゆきて。
けにともみえす。花のやとりの枝うつりすなといへる。春
の鶯の。たかきにうつることゝちす。右の。まくすはふよも
きかなといへる、よもき。くすもかすなりて。いふせく侍
れと。うらみもまさるむしのこゑかなといへる。あはれに
おほゆ、是はまさりてそみえはへる。

十一番　雪

左　　前下野守經兼

夕霧にすまのわたりはみえねともふな人よはふこゑきこゆ也

右勝　　散位道經

河霧にゐせきもみえすゆふされはいはこすなみの音計して

左のかた。うたはあしうはへらぬに。すまのわたりとよめるそなさけなきこゝちする。これは。業平の朝臣の。いさことゝはむとよみて。すみた川のほとりにおりゐてとそかきつかし。それに思ひそめて。おほゆるにやあらむ。右の。いはこす波。したゝかにはへれと。ゆふされなくもあらましかはとそおほゆる。されはとて。右は。今すこし増りてやはへらむ。

十二番　秋田

左持　　覺入道

小山田や鹿の妻にもあらねともほに出る秋はかきほにそなく

右　　琳賢

秋のよの露にそほつのみたやもりひた引ならせ稲葉そよめく

此歎。左も右もおなし程にこそみえ侍れ。持と申へし。

十三番　菊

左　　大貳君

きえかたみ雪かとみゆる白菊のうつろふときに花としる哉

右勝　　皇太后宮權亮顯國

白菊も八へ匂ひけりこの里にうつろひぬへき心ちこそすれ

きえかたをはとみゆらむよりも。さかへにほふらむさとは。まさりておほえはへる。

十四番　九月盡

左勝　　常陸君

こからしのかせもとまらぬ山さとに秋も過ぬときくそ悲しき

右　　前越前守仲實

秋くれぬよはのあらしも心あらはかたみにのこせ峯の梢葉

こからしのかせもとまらぬ山里は。かたみにのこらむもみちよりも。物あはれにこそおほえはへれ。いますこし左の方にそ。よりぬへく思ひたまふる。

十五番

左持　　上人

からにしき幣にたちもて行秋もけふやたむけの山路こゆらん

右　　前木工頭俊頼

あけぬとも猶秋風は音信てのへのけしきよ面かはりすな

から錦ぬさにたちもてゆく秋はとよめる。もみちすこしあらまほしけれと。なをあきかせはをとつれてと。いへるけしき。たをやかならねは。これも。かれも。おなしやうにそみたまへ侍る。

右雲居寺結緣經後宴歌合以猪苗代謙証本書寫挍合了

爲兼卿家歌合

一番　左持　春朝　前權中納言藤原朝臣爲兼
またかには其色となき景色にもたゝ春ありける今朝にそ有ける
右　前右兵衛督藤原朝臣爲相
いつるよりうつろふ雲はそら高てまつより下の山そかすめる
左歌。朝霞之躰也。右ハたゝふる事ありて。又よろしき爲レ持。

二番　左勝　藤大納言典侍
風かるく春雨そゝけ今朝のあさき軒端の花は笑そめにけり
右　前權中納言平朝臣經親
なを殘る月かとみれは山のはの花の梢のそらそしらめる
左歌。姿詞宜。爲レ勝。

三番　左　春夕　藤大納言典侍
花かすみ色わかれつるをちかたは薫るはかりに暮る也けり
右(時點歟)　爲兼卿
梅の花くれなゐ匂ふ夕暮にやなきなひきて春雨そ降
擬古花前也單體。令レ鼓二興於樽中之韻一。猶少二比類一。

四番　左　經親卿
くれかたを匂ふ日かけのうつろひて風しつかなる春の夕はへ
右勝　爲相朝臣
ゆふへとも思はてみつる花のかけにうきこゑをくる入相の鐘
左歌。上句は心ありて聞え侍るを。第四句。あなかち肝心せすや。右歌。姿心よろしく侍るを。是も聲をくるなといへるうきの字。いさゝか思はまほしくや侍らむ。然とも何心おかしく侍り。爲レ勝。

五番　左持　春夜　藤大納言典侍
花しろき梢のうへはのとかにて霞のうちに月そ更行
右　爲相朝臣
花薫り月かすむ夜の手枕にみしかき夢そ猶別れ行
右艶なる躰にて。おかしく侍るを。左。しろき梢のうへ。猶心うつり侍るによりて。勝と申へし。

六番　左勝　爲兼卿
かつ散も梢もいまをさかりにて月もる庭の花の下かけ
右　經親卿
さたかにはみぬさへふかき情かなそこはかとなく霞むよの月
兩首ともによろし。可レ爲レ持。

七番　左持　夏朝　爲兼卿
あさあけのまかきの竹の淺みとりなひくわか葉に露そ涼しき
右　經親卿
よるの雨の名殘の露にぬれしほれけさもまた□となつの花
わかはの竹の露。ことにけしきありて。みるところ侍るめり。右のふたこそ宜は侍るを。第四句。此躰見及事侍。古風情同事に侍へし。但此作者存せすもや侍らん。そのところなつのつゝき。よせある樣に侍れは爲レ持。

八番

左持　藤大納言典侍

夏あさき青はの山の朝ぼらけ花に薫しはるそわすれぬ

右　爲相朝臣

夏をあさみ露をくとしはみえねとも草葉涼しき朝明の庭

左右。いつれもいひしりて聞え侍り。又持と申へし。

九番

左持　夏夕　藤大納言典侍

さそはれていまきなけかし時鳥夕くれかけて月いつる空

右　爲兼卿

月よりも先さきたちて時鳥ゆふ山いつるむら雲のこゑ

これまたいつれも。とり〳〵におかしく侍。猶可レ爲レ持。

十番

左持　經親卿

ちかくなる秋をしらせて風の音もかつ〳〵涼し夕くれの空

右　爲相朝臣

みたれ行螢のひかりなさけみえて月におとらぬ夏の夕やみ

左。ことなる難なく侍へし。右も。おもへる所みえて。猶難レ決二勝負一歟。

十一番

左持　夏夜　爲兼卿

庭しろく袖に涼しく影みえて月は夏とて又おもはるゝ

右　經親卿

袖にうつる影をすゝしみはしちかく詠る月ぞ明る程なき

左右。袖の月。面かけ同しことに侍れと。下句なと増るへくや。

十二番

左勝　藤大納言典侍

ぬれて鳴こゑそしほれぬ郭公さ月のあめのくらきよの空

右　爲相朝臣

打ふすもしはしはかりの夏のよにかゝけ盡さて殘るともしひ

左歌。上下句ごとによろし。右も。あしからぬ事に侍るを。猶左勝と申へし。

十三番

左　秋朝　爲相朝臣

今朝よりは吹くる風もをく露も袖にはしめて秋そしらるゝ

右勝　爲兼卿

あさ風は梢にあらく吹過てくもりもあへぬ秋のむら雨

左。よろしく侍るを。右まことにかゝるけしき侍りけりと。驚レ目み侍れは。猶爲レ勝。

十四番

左勝　藤大納言典侍

小倉山みねの朝きりたちしらみ松やもみちの色そみえ行

右　經親卿

山ふかき霧のあさけの朝露に草木の色もぬれしほれつゝ

兩首。朝の霧みなおかしく侍れと。左猶たちまされるにや。

十五番

左　秋夕　經親卿

めくりあふうき身の秋の心よりおなし哀の夕をそ見る

右（缺）　爲兼卿

左もおもふ處なきにはあらねと。右のかた宜にや。

十六番

左勝　爲相朝臣

さびしさの色のみ秋にあらはれて染あへぬ山のきりの夕暮

右　藤大納言典侍

虫の音もむしのうらみも聞えてし秋にあきそふこの夕かな

左歌。上下句心詞ともにおかしく聞ゆ。可レ爲レ勝。

十七番　秋夜

左　藤大納言典侍

月みてはちゝにうれへし我心雨よの秋に又こほりぬる

右勝　爲兼卿

秋かせはしき〳〵吹て月影のふけたるよはにきり〳〵す鳴

左歌。宜侍るに。右歌。詞心よく。姿うためかしくして。しかもやさしく。やすらかに聞え侍る。殊雖レ有はへるへし。尤可レ爲レ勝。

十八番

左　經親卿

鳴よはる淺茅かはらの虫の音を秋更て聞よはそ悲しき

右勝　爲相朝臣

庭の虫よそのきぬたのこゑ〳〵に秋のよ深き哀をそきく

左。やすらかに聞え侍れと。右の歌。庭のむしの根。遠時〔所也〕のきぬたの音。ともに秋のあはれをすゝむる心。やさしく侍るへし。仍可レ爲レ勝。

十九番　冬朝

左　經親卿

ねぬるよのふけしまてには降もせて思ひもよらぬけさの初雪

右勝　爲兼卿

けさしはや雪は降きぬ山風のあれつるよはゝこれにそ有ける

左も心ありては聞ゆ。右詞つよくして。猶勝侍るへし。

廿番

左勝　爲相朝臣

しはしたゝ朝めくりする尾上より時雨をわけてさす日影かな

右　藤大納言典侍

降やらぬ雪をしまては朝な〳〵めつらしけなき霜のいろかな

右。詞たゝしく宜侍れと。時雨をわけてさす日影。なをめつらしく。まさるへきにや。

廿一番　冬夕

左持　爲相朝臣

雲まなきゆふ山あらし吹たちてこよひや雪とみゆる空かな

右　爲兼卿

秋の名殘なかめしそらの有明に面かけ近き冬のみか月

左。心詞たくみなるさまにて。歌躰。誠に宜侍へし。右のみか月風情めつらしく。思ひかたきさまにて。又おかしく侍れは持と申へし。

廿二番

左勝　經親卿

霜かれの草や落葉に夕しくれふれとも今は色もかはらす

右　藤大納言典侍

あはれさは荻の葉そよく秋よりも木葉の庭の冬の夕風

右もおかしく侍れと。左歌の心。猶勝るへし。

廿三番

左持　冬夜　藤大納言典侍

風のゝち霰一しきり降過てまたむら雲に月そもりくる　爲兼卿

右

こしかたのこひしきうちに戀しきは豐のあかりを月にみし頃

左歌。句ことに。心をふくみて。景氣あらはに面白く侍に。右のうた。なへて戀しき中にも。わきてわすれかたく侍。豐明のおもかけ。戀の心に。ひそかに通て。往事の泪。袖にそゝき。懷舊の思。胸にみちて。勝負さたむるにも及ひはへらす。

廿四番

左　經親卿

深草のうつらの床もあらはれてかれのみさひし冬のよの月

右勝　爲相朝臣

今しはゝ霜をくらしもさよ更て星の光の窓にさやけき

左歌。無二殊難一歟。右歌。殊尚可レ勝。

廿五番　戀朝

左勝　爲兼卿

戀まさる心のまゝになかめしてしくれぬ時をけさうつしつる

右　爲相朝臣

きぬ〳〵もまた我しらぬみちしはに朝の露ははらふ日もなし

左歌。心詞に優艷にして。更におもひよりかたき處にも侍かな。右も詞いひしりて聞え侍れと。しくれぬ時をうつせる心。可レ謂二拔群一歟。

廿六番

左　經親卿

かへりける今朝そ悲しき人めをも猶もわすれてそはまし物を

右持　藤大納言典侍

夜のうちは猶ももしやと頼みにて明はつる空そ更にかなしき

左。心なきにはあらぬを。第四句。忘れて猶も。とやあるへかりけむとみえ侍。右勝に侍るへし。

廿七番　戀夕

左持　爲兼卿

暮かゝる空にむかひぬ物を我思はしとても入あひのこゑ

右　藤大納言典侍

うかれたる心のさらにあられぬをさそへやさらは夕暮の空

左。くれかゝる空にむかひぬといへる心。殊に。おほきにたくみにて及かたし。右又戀の心。優におかしく聞え侍り。勝負さためかたきにや侍らむ。

廿八番

左(勝歟)　經親卿

まれにたに情もみせてこぬ人をさのみなとうき夕なるらむ

右　爲相朝臣(かイ)

たか契り誰うらみにかかはるらむみはあらぬよのふるき夕暮

以下欠

右爲兼卿家歌合依無類本不能挍合

卅番歌合

題

霞隔遠樹　霧中見花　雨後郭公
松下晩涼　山家秋月　澗上晩霧
嵐吹寒草　雪似白雲　逢不遇戀
寄神祇祝

作者幷

左

伏　勝八　負　持二　點六
右衛門督法印　勝三　負三　持五　點一
大僧都律師　勝四　負一　持五　點一

右

尊憲　勝二　負四　持四　點
三位法印　勝　負六　持四　點
兵部卿律師　勝一　負五　持四　點

判者

良信

三十番歌合　當座

一番　霞隔遠樹

左勝　　　　　　　　　　　　右　法

あさみとり色こそみえねをしほ山小まつかはらは霞こめつゝ

右　　　　　　　　　　　　　三　法

花さかぬ梢はよそにみえわかす霞むやいつこかつらきの山

右歌。小塩山。こまつかはらの霞。ふるきおもかけも立そひて優に聞ゆるうへ。右第一句。心ゆかす侍は以左爲勝。

二番

左　　　　　　　　　　　　大　律

高砂の尾上の梢をしなへて夕くれふかくたつ霞かな

右持　　　　　　　　　　　兵　律

高砂のまつはさなから埋れてふかくもたてる霞かすみかな

左右。朝暮の霞。いつれとわきかたく侍れとも。右歌。いますこしまさると申へくや。

三番

左勝　　　　　　　　　　　上

消やらぬ雪たにあるを高砂の松は霞そうつみはてける

右　　　　　　　　　　　　尊　憲

かさしおる人もやたとるをしなへて梢はらも霞むみわの山本

右のうた。かさしおる三輪の檜はら。柿本の餘風。すてかたく侍れとも。左。雪たにあるを假て。松は霞そうつみはてけるといへる。ことはり相叶て侍は勝侍へし。

四番　霧中見花

左勝　　　　　　　　　　　上

花になをくるゝ山路をあくかれて春はたひねの宿も定めす

右　　　　　　　　　　　　三　法

けふ幾日花に旅ねをかさぬらむあかぬ心のゆくにまかせて

左。心詞よろしく侍るへし。右花下忘歸ことをよめるにや。霧中の心にはあらす。古先達の題をよく〳〵心得へしといへるも。かやうの事にこそ侍らめ。又左爲勝。

五番
左持　　　右　法
過かてに行もやられす日は暮に花こそ春のとまり也けれ
右　　　尊　熊
なかき日もあかぬ色かに詠きてくるゝ山路の花の下ふし
左歌。旅宿を春のとまりといへる。いかゝと聞ゆ。古歌に。はるのとまりはしらねともと詠し。湊や秋のとまり成らんとよめる。今の心にはかはりはへらむかし。右又。暮山路の花の下ふし。あまりにいきたなく侍るうへ。前番の難ゝ遁かたく侍は准而爲レ持。

六番
左持　　　大　律
いそくへき道をわすれて旅人も花にやすらふしかの山越
右　　　兵　僧
逢坂の山の關守ゆるせとも花にそとまる春のたひ人
しかの山越。逢坂の關も。花にやすらふ心。同し樣に侍へし。

七番　雨後郭公
左持　　　上
むら雨のすきぬる雲の時鳥猶ふりはへてねをそ鳴なる
右　　　兵　僧
はれてたに猶きゝわかね郭公いくこゑ雨のうちになきけむ
右歌。下句あまりにたしかに侍るにや。左歌。めつらしけなく侍れとも。村雨のふることなから。勝へきにこそ。

八番
左持　　　右　法
雲はるゝ雨の餘波の夕くれは山子規またぬ日そなき
右　　　尊　熊
むら雨の過行空は子規しはしやすらふ程たにもなし
第五句。またぬ日そなきといへる。さのみゆふ暮ことに雨の晴まにしもあらしとそ覺え侍る。右又。むら雨のそらの子規。ことはりもさたかに聞えはへらねは。勝負いつれと申かたし。

九番
左持　　　大　律
村雨のはれぬるあとは有明の月にかたらふほとゝきすかな
右　　　三　法
かき曇りふれはまきれて五月雨のはれまになのる子規かな
此番。又可レ爲レ持。

十番　松下晚涼
左持　　　右　法
まつ陰のすゝしさまさる夕暮は夏もあらしの音そ身にしむ
右　　　兵　僧
ゆふつくひまつの梢にかたむきて下陰すゝし夏のした庵
左歌。夏のあらし。みにしまむことも。あまりなるやうに聞ゆるにこそ。右歌。夏の下庵も。聞なれぬやうにはへれは。猶勝負不分明。

十一番
左勝　　　上
凉しさは秋をもまたす夏衣日もゆふくれのまつの下かせ
右　　　尊　熊
夕付日いりぬるかたの松か根にあと吹をくる風そ凉しき

右ゝゆふ付ひも。涼風もゝ梢こそたよりありぬへく侍に。まやかねにと侍る。おほつかなくこそ。左。詞やすらかにつゝきて聞ゆれは。目もゆふ暮の夏衣。ひとへに勝と申へし。

十二番

左持　大律

風の音はまつに殘て涼しさの秋に先たつゆふくれの空

右　三法

まつたかき木の下陰はたえ〳〵に夕日へたてゝ風そすゝしき

左右の歌。不可有高下歟。

十三番　山家見月

左勝　右法

山里に又あくりあふ秋そとはあはれをそふる月にこそしれ

右　韋蕪

なかめしやみ山の庵の秋の月またうきよにもかへる面かけ

右歌。初五文字。はなれて聞ゆるにや。童子のかふし。無下にあれてこそ侍れ。左のうた。ことはりさたかに聞え侍らす。月日のうつりゆくもしらぬ山里に。月の哀より。秋をおとろくよしをよめるこそ。如何樣にも右にはまさり侍るへし。

十四番

左勝　大律

これも猶こゝろそとまる山のおく月みる秋はすみやかへまし

右　兵僧

とはれけるならひなければ終夜ひとりみ山の月そさひしき

左依物事之淺膚。剰挽山月之興味。隠遁のこゝろも。あらまほしくこそ侍れ。右も。ひとりみ山の月そさひしき。優に侍るに。けるければ。病にて侍けり。又爲左勝。

十五番

左持　上

なかめやる月に心のさそはれてわれさへ山のおくやいてまし

右　三法

誰かまたおなしみ山に庵しめて我ことひとり月をみるらん

左右歌。ともに。心なきにあらす。よろしき持にや侍らむ。

十六番　湖上曉霧

左勝　大律

曉のうらのとも舟漕わかれきりにやたとるしかのあま人

右　韋蕪

鳰の海やなみ路ひとつにたつ霧もそらのしるしは有明の月

左。無殊難。右。空のしるし。心ゆかす侍れは。左勝へきにこそ。

十七番

左持　右法

さゝなみやにほのわたりは霧こめて影かすかなる有明の月

右　兵僧

にほの海やあかつきかけて舟人の霧の下行聲きこゆ也

左右歌同。

十八番

左勝　上

詠れは霧たちこめて鳰の海や波のいつくにあり明の月

右　三法

さゝ波やよるたつ霧も有明の月にそみゆるしかのからさき

右。よるたつ雲。餘りにたしかにこそ侍れ。左。浪のいつくに有明の月。景氣浮レ眼。風情銘レ肝。左爲レ勝。

十九番　嵐吹寒草

左勝　　上

よをさむみ霜をきあまる篠の葉のみ山もさらに嵐吹也

右　　兵　衛

霜もなをむすひそあへぬ荻はらやことのはもなきよはの嵐に

左歌。古風をしたひて。霜をきあまるさゝの葉。さら〳〵不レ混二凡俗一者也。右歌。おきはらや。ことのはもなきといへる。いとも心得られはへらす。又左可レ爲レ勝。

二十番

左　　右　法

しら露は消ぬるあとのこからしに霜こそむすへ庵のあさちふ

右勝　　寂　蓮

かれはつる軒はの荻をしゐて猶あきより後もとふあらしかな

左。木枯非レ嵐。右第三句。難レ不二珍重一。聊爲レ勝。

廿一番

左勝　　大　律

あらし吹かれのゝ薄しもさえて秋みし色はおもかけもなし

右　　三　法

するかろき枯のゝ尾花秋よりもなひきやすしと吹あらしかな

右歌第一句。不二庶幾一。ふくあらし哉と先達よむへからさるよし申さるゝうへ。近ころまねきやすきは。秋よりもけにといふ歌の聞え侍りしに。心詞かはらさるにや。左かれのゝ薄。秋のおもかけも殊に思ひ出られぬへくこそ侍るを。面かけもなしといへるそ。おほつかなく聞ゆれとも。せめても霜かれはてぬるよしにや。思ひなされ侍れは。すこし勝侍るへし。

廿二番　雪似白雲

左勝　　上

朝ほらけ空ゆく雲のひとつにて山よりたかくつもるしら雪

右　　兵　衛

きのふまて雲をいとひし生駒山おなしつらさにつもる雪かな

左歌。すかた高。詞豔に侍るにや。右古歌。雨は降とも雲な隔そとよめるは。君かあたりみつゝもこえむため也。雪のおなしつらさにつもらむこと。おほつかなくこそ侍れ。朝ほらけの山の雪は。いろもさやかにあらはれて侍れは。勝と申へし。

廿三番

左持　　大　律

まかへてら風には消ぬしら雲や尾上の雪の明かたのそら

右　　寂　蓮

山風にうきたつ雲とみえつるや尾上の雪のふゝきなるらん

兩首ともに第五句。おもふへきにや。難レ定二是非一。

廿四番

左勝　　右　法

よそにみる高まの山に降雪はあらしにきえぬ峯のしら雲

右　　三　法

しら雲のかゝるとみれは朝日かけさすやをのへの雪そ消行

右は春のうたにこそ侍れ。左爲レ勝。

廿五番　過不逢戀

左　　右　法

袖はるゝ事を心にとゝめすはあはぬたえまのうさやなからむ

右　勝　　尊　　蕉

白露のむすふ契やあさかりしうつるもやすき月草の色

左のうた。上句いひおほせられす侍るにこそ。右も第三句。靈ならす侍れとも。月草の色に心うつりて。勝ると申へし。

廿六番

左　勝　　大　　律

うきものといとなし鳥の聲までもいまはかたみの有明の空

右　　三　　法

つれなさは逢みて後も玉くしけ二度おなしみをそうらむる

右。玉くしけ。ふたゝひおなしなといへる。明くれ聞こゝちして。めつらしけなくや。左。今はかたみの有明の空。心婉靈にして。詞花靈に侍れは。返々勝たるへし。

廿七番

左　勝　　上

たちかへるいろをそたのむうき人の心の花のうつりやすさは

右　　兵　　僧

をのつからまとろむ程の夢にたにありしまゝなる情をはみす

左。小野小町か餘波。捨かたく侍るうへ。心の花のうつりやすさは。中々たちかへる色をたのむよし。ことに聞えて。まとろむ程の夢よりも。みるかひある心地し侍れは。左なを可レ爲レ勝。

廿八番　　寄神祇祝

左　勝

神たのむひえの杉のしるしあらは末のよまても神そ守らむ

右　　法

まもるらし七の社の七度もかきらぬ千世の君かゆくすゑ

小ひえの杉。七の社。いつれと申かたし。

廿九番

左　持　　上

新こし神のみむろの榊葉にたちさかへ行君か御代かな

右　　三　　法

神はみな曇りなきよを守れともわきて日吉の名にやいのらむ

左は。榊葉によせて。榮行きみをいはひ。右は。ひよしの名にかこちて。くもりなきよをいのる。ともに思ふ處なきにあらす。よき持にや侍らむ。

三十番

左　勝　　大　　律

日吉山くもらぬみ代にかけそへていやさかへなむ神の惠も

右　　兵　　僧

萬代を神にいのれはから崎や松かきりなき松かせのこゑ

左右。祝言勝負叵レ弁贊。匪三啻決二卅番之雌雄一剰合點七首。令三金玉有二惡俗一不レ可レ痛而已。

右頓阿判三十番歌合以加賀美遠清本挍合了

群書類従巻第二百十四

和歌部六十九　歌合三十五

公武歌合

一番　湖上月

左　　　　　　　　従二位藤原高清 海住山

すはの海や浪路はれたる秋風に月のこほりをわたる船人

右　　　　　　　　三善清房 [illegible]

にほの海やしかの山風吹おちて月のみふねをよするさゝ波

右方申云。無二殊難一左を勝とし侍り。

左方申云。下句きゝなれたる心地す。

抑一年撰集のみことのり侍し時。和歌の浦の波の。よりうとのかすにさたまり侍しに。おもひの外。九重のうちもしつかならさる世のさはきいてきて。上も下もをのかさまさまなるにつきて。撰者もみやこの外あふみのかしは木とかやにしるよしして。かりにいほしめ侍れは。いとゝこの道みたれはてゝ。たつきもなく侍れとも。なを大和歌のみちに心をよせ侍る。余執もつきせさるゆへ。つはものゝまきれをもかへりみす。軍よはひのおりふしをもいはす。同し心さしの人々をあつめて。この四とせはかり。月次のやうなることをおもひたちて侍るに。あるおりのつれつれの時々は。褒貶なとをもましへて。愈けいこをはけまし侍らはやと申すゝむる輩侍しを。一度は壁に耳ありて人のきかん事をはちていなみ。一たひは。石の物いひて。よそのそしりあらん事を恐れ侍れ共。道にふけるおもひをさきとして。同心せしめ侍りて。一両度その席にのそみ侍しも。例式は。左右の方人をわかちて。善あくをあらそひ侍れとも。これは座にあたりても。勝負をさたむへき道しれる人もなけれは。たゝ札をうちて。をよはぬ心におもふところをのへ。かなはぬ詞に。あらはさぬ風情を。をの〳〵さたし侍りて。札の多くかたひき侍るを。勝とさため侍しやらん。しかはあれとも。同類をも病気をもおもひより侍らすして。札をうち侍るを。ひとりもさかしき人の見出し。きゝもらさて所存をのへ侍れは。その方につき侍りて。勝負持をつけ侍りぬれとも。此まゝうち置侍らん事は。念なきよし申出すやから侍りて。御覧にかけて治定し侍りたきよし申侍り。人々の申処。たかひたかはさるむねを。一はしのへたまはゝ。かつうは老のなくさみとし。かつうはわかきともからの後のけいこにもなし侍らんといふ事しかり。

左の歌無二殊難一之由被レ申か。但氷のかち渡勿論事なりといへとも。此一首にとりて。月を氷にのせられたる子細何

事そや。氷には舟のゆくゑも難ㇾ在。渡海の煩もなきにや。又秋風をそへられたるうへは。さゝら浪もたつへき歟。しからは月の氷ににたる。所詮おほつかなし。

右歌。下句きゝなれたる様に申さるゝ也。七々の二句叅分同類事は疊倍に及けす。かやうの事は幾度も可ㇾ出来ㇾにこそ。さりなから。上の詞に晩陰夜景の心なくして。俄に月の御舟を出されたるこそ。如何とおほえ侍れ。愚存には。右歌。聊まされるやうに覺ゆ。儲案の至なるへし。

二番

左　三善元連

唐崎や松吹風によるの浪のあとにはひとり月そくまなき

右方申云。あとにはひとり月そくまなき。いひおほせてもきこえすや。陳云。なみのよせてあとに月ひとり隈なきこゝろ歟。

右　源則遂

やとせ袖かたち野の月を分すしてつゆもまたひぬ波の枕に

左方申云。やとせ袖。なみの枕。やとし物重疊歟。又野邊の月を賞して。湖上の心かすか也。持とさためぬ。

左の。浪のあとこそ。汐干の跡なとにいかけかり侍るへけれ。聊おほつかなきやうら也。右の歌。袖と枕とやとし物重疊の由被ㇾ申歟。誠可ㇾ然。抑又勝野の波枕はいかにそや。近江一國の中なれは。いつくも湖水にとりをきたるにや。大方壽花の歌こそ見え侍るに。持とさためられぬる覺束なきにや。

三番

左　按察使藤原親長卿

松のみとおもひし志賀の唐崎にすむてふ月や又たくひなき

右方申云。一木の松に。又月のすむ心。たくひあるにてこそ侍れ。陳云。松のたくひなきにおほせて。又月のひとりすむ心を。又たくひなきといへるなるへし。

右　左大史小槻長興宿禰大宮官務

平の海や明ゆく空はをち方のたかねもなみにうかふ月かな

左申云。千載集にみし心ちす。又峯を浪にうつして。月を賞する心不足歟。左を勝と定め侍りぬ。

右歌。千載集に同類の侍らん事。愚僣にをよはす。左歌。一木といふ詞なくして。類なきはかりにては。不足なるやうにおほえ侍れと。勝と定められぬるうへは同心申者なり。

四番

左　法眼良世

すはの海や秋は氷を月影のまつしきそむるなみのうへかな

右方申云。秋は氷を月影のまつしきそむる。いかにそや。陳云。氷より先に月の氷を敷心也。又すはの海氷規摸也。

右　權大納言源通秀卿

さのみやはにほてる月にうかれましふけゆく秋のよこの浦舟

左方申云。月を賞する心不足歟。右陳云。なとか月にあくかるらんといへは。賞心なり。又左申云。然はよろしき歟。

右歌。更行秋のよこの浦とは優に侍り。左さのみやはの詞。思惟の心まことにおほつかなし。月を賞する心不足申さるゝ歟。一往此理あるにたり。左歌。無ㇾ殊難ㇾにや。

五番

左　散位藤原俊通

鹽やかぬしかのから﨑ひともとの松の煙は月もくもらん

右方申云。しかのからさき一もとのつゝき。おもはしからさる歟。

右　沙彌寂譽

七度の秋そおほゆる葦原や國つみかみの浦の月かけ

左方申云。何事そや。本文の心ならは。歌の面たしかならさる歟。陳云。さのみ社よむならひなれ。子細きこえ侍る歟。左を勝と定め侍りし。

左歌。しかのからさき一本のつゝき。おもはしからさるよし沙汰ある歟。愚存には力量あるやうに覺悟をいたせり。定て儁捷なる物歟。右。さゝ浪や國つみかみの浦とは聞及へり。あし原の詞おほつかなし。又七度の秋。下句よせある事にや。覺悟にをよはす。其子細承はらん間は。しほやかぬ松のけふり。たちまされりと申たきにや。

六番

左　三善爲信使尾

みちひなき鹽津の浦の秋のよに影もくもらぬ浪上の月

右方申云。無二殊事一。

右　右衞門督藤原季春卿

波ちの月にあこかれてぬる夜かた田の浦の船人

左方申云。無二殊事一申旨。右を勝とさため侍りぬ。

左。みちひなき鹽津の浦。右の。ぬる夜堅田の浦なと。ともに優美に聞侍り。左右の方人。無二殊事一のよし被レ申うへは。なとや持とつけられさるらん。

七番

左　藏人左少弁藤原元長廿壽寺殿御方

しかの浦や松の煙は見えなから浪路さやけき月の影かな

右方申云。無二殊事一無二指難一。

右　權大納言藤原敎秀卿勸修寺殿

蜑人の月にあかてもなをよるやおひぬ浦はのみるめなるらん

左方申云。題の心かすかなり。又こと葉つゝき。いと心得かたき歟。左を勝とさためき。

右歌は。粉骨をいたされて。あんしられたるとはみたまひつれとも。おひぬ浦はの詞。みるめよりさきに申出されたるによりて。前後して頗きこえにくゝ侍り。左は。あまりをさなかましく侍り。なそらへて持とや申侍らむ。

八番

左　沙彌長光

鹽ならぬ浦のみちひとみえぬるや霧まに薄き秋の夜の月

右方申云。鹽のみちひ。霧間にうすき月。いひおほせてもきこえす。將又月にきりいひ出ん事無念歟。

右　權中納言藤原宣胤卿中御門殿

志賀の浦や月の氷を布妙の枕すゝしきとこのやまかせ

左方申云。無二指難一右を勝とさためぬ。

左歌。鹽ならぬ浦にさたまりぬるうへは。みちひのさた無用なるに似たり。右の歌枕。涼しの詞。いかにそや。志賀の浦に床の山をむすひたるは。同國の事にて侍れと。いさゝか覺束なきやうなり。歌枕。無案内なる事にて候。さりなから決定勝とは愚按の分にては申かたきにこそ。

九番

禁中月

左　沙彌寂富

宮人のあふきみるより月の名もいや高からしもゝ敷の山
右方申云。百敷の山きゝなれす。陳云。俊頼朝臣口傳抄
云。百鋪山禁中なりと侍る歟。

右　高淸卿

桂をる人をやてらす秋風にはるゝ雲井の庭の月かけ
左方申云。無二殊難一持とさため侍し。

百敷山まことに聞なれぬやうなれと。俊頼口傳抄にあらんには。異論に及さるにや。但歌合なとには。かはかりの珍敷名所古事なとをは。あなかちに用捨とせさるにや。右桂の事。御前の試に及第する心にや。さるにても無術の。忍光の折桂の人はかりてらさん事も如何。持とさためられたる事。しかるへきにや。

十番

左　親長卿

あはれはや四十年雲ゐの秋になれぬ老となる物月もことはれ
右方一同申云。よそち雲ゐの秋になれぬ。あはれもふかく。かんせいをもよほし侍り。

右　沙彌長光

影めくる月にとはゝやすみなれしもとの雲井の秋はいかにと
左方申云。住なれしの詞。凡俗斟酌あるへき歟。左かちゝと侍し。

左歌。老となるものといふ七文字は。結句にならてはよみかたきやうに。愚意にはかくこせり。さらすは五七の二句にわけては。第一第三の句に置えて子細あるへからす。右もとの雲井の月。近日の風躰にはそのよせあるに似たり。但故郷月なとの題には可レ然にや。愚案の所存はなを持たるへきにや。

十一番

左　宣胤卿

あふきみる九かさねのうちにても雲しへたてぬ月そさやけき
左方申云。九かさねはかりにては。禁中の心不足歟。陳云。九重は凡禁中の事賦。

右　元長

よそよりも影そさやけき九重や君かみきりの秋の夜の月
左方申云。無二指難一持と申侍りぬ。

九かさねは。只こゝのへ同事也。忠岑歌、九かさねの中にては嵐の聲もきかさりきは。禁中といへるなり。左右同品の歌なり。持とさためられたる。愚意同前なり。

十二番

左　爲信

秋はなを君か光やいのるらしわきて照そふよるの月かけ
右方申云。二間夜居。護持の宣旨を蒙侍らてはいかゝと覺ゆ。將又光と影と同心病歟。陳云。いのるらしと侍れは。護持の身をおもひやる心なるへし。光と影と。光は月影各別事歟。不レ可レ爲レ病歟。

右　長貞宿禰

宮人の駒引わくる袖のうへに今宵そ秋も望月のかけ
左申云。駒迎を面にして。月の心不足歟。又八月十五夜にあらすして。明月を詠事も如何。持とさたまりぬ。

左。夜居の月。二間參候の人の所詠かと見たまふるに。その人にてなきよし。判詞にのせられたり。しからは夜居の僧と贈答には可レ然。さらては無二所詮一にや。右歌も、駒ひ

きの題に似侍れと。禁中の事望月の比なり。難たるへからさる歟。今夜そ秋も望月なとは。いひしれるにや。月の望は。十六日にあたる事も有にや。

十三番

左　俊通

久かたの雲のうへよりなかれきて月もみかはのみつにすむ覧

右方申云。雲のうへよりなかれきてとをきて。みかは水にすむらん。別の在所あるやうなるらん。みかはのみつも如何。

右　良世

秋はなをとものとのもりいとまあれや月のきよむる九重の庭

左申云。九重の庭の月。くまなきによりて。とのもりいとまあらむ事。あまりにや。持とさたまりぬ。

左。みかは水。まことに如何と覚え侍り。三河の國のなに混合せり。右とものみやつことは申侍れと。ともの殿守きならはぬやうに侍り。又朝きよめとは申侍れと。夜までの掃除もいかゝ。持と判せる可レ然哉。

十四番

左　清房

名も高き雲井の庭の秋風に御はしの月や澄のほる覧

右方申云。無二殊難一歟。

右　則遠

袖にすむ月の桂の下紅葉おらてやかさすくものうへ人

左申云。泪なくて袖にすむいかゝ。袖にすむ。あまりたしかにきこゆ。又月のかつらの下紅葉。かつらのうへとはきこえす。別の物のやう也。いかにそや。

右の下紅葉は。一本の木のうへにても。梢下枝をわけて申せは。難たるへからす。すむの字。誠におもはしからす。袖にてるとあらまほしきにや。左歌。無二殊難一之由。右方定申歟。愚意同前。

十五番

左　元連

神代よりかはらぬ空の秋の月かけも雲井の庭のさやけさ

右方申云。病気重畳歟。右勝と侍りき。

右　季春卿

さやかなる月に色そふ萩の戸やよるとはみえぬ錦なるらん

左申云。月の事とはきこえなから。なを萩をせんにしたるやうにきこゆる歟。陳云。月故に萩の色そふかと侍れは。月を賞するにて侍へき。　さたまりぬ。

右の。萩のと月にいろそふとよめるうへは。月をよすかに花のいろもまさるにや。其段はさのみ難はあるへからす。これ又持とさためられしかるへきにや。

十六番

左　通秀卿

萩のとの露の月影ところえて猶光そふむらさきの庭

右方申云。萩のと紫の庭。月かけ傍になり侍る歟。陳云。所をえたるはかり也。又難云。影と光と同心病歟。

右　敦秀卿

百鋪やなかめあかしておしむ夜の月にもいそく朝まつり事

左申云。朝まつり事をいそく。臣下の歎に如何きこゆ。陳云。君臣ともに朝まつり事をいそかん事。有二何難一なり。又難云。題の心不足の上。詠あかすといひて。月にも

いそくと侍らは、一首の参本歟、左を勝とさため侍し、

左露の月影つまりて聞ゆ、又光と影と共にもつて月をいへり、同心の難あるへき歟、右おしむといひて、又月にもいそくは病心あるに似たり、但君臣ともに朝まつりことをいそかむ事、不可有難之由陳答あり。こゝにいたりては筆を指をきぬ。衆議にまかすへし。

十七番　月下竹

左　為信

葉分もる影をさすかに河竹のなかるゝ月もなかき夜の空

右方申云、な文字か文字につきて、病氣重疊歟、陳云、近代さたにをよひ侍らぬ事歟、

右　俊通

袖をとて月にそ見る秋のよの千夜を一夜のそのゝくれ竹

左申云、一首の首尾心得られす、持と申歟。

蜂腰鶴膝等之病、近来者不及沙汰歟、左右歌、心詞おなし躰也、持　可然、

十八番

左　元遠

吹すくる風に軒端のくれ竹も月にいく夜のかけなひく覧

右方申云、吹すくる風に軒端の竹、月にいく夜のかけなひくいひおほせても聞えす、陰なひくも有其謂事歟、

右　良世

影さむき玉の光をよることの月にそみかくそのゝ秋かせ

左申云、かけと光と両所に侍る歟、陳云、玉のひかりならはくるしかるましき歟、其上句ならひ也、又難云、異名をのみよむ事、歌合には如何、又陳云、つねの事也、左勝とさたまりぬ、

右竹の異名の事、不及沙汰管窺の至也、玉のひかりなとは、夜光の玉とこそとり置侍りしか、寒玉なとの詞、竹の異名にて侍るやらん、物の異名をも歌によむ事勿論也、とりもとめたる事。先賢このまさる事也、

十九番

左　元長

呉竹のさ枝をよそに吹分て風にはれたる夜半の月かな

右方申云、さ枝をよそに吹わけてと侍る、けしからす侍り、陳云、强難にあらす、

右　寂譽

くれ竹のもとくたちゆく秋風やをとなき月の雪の下折

左申云、下折のをとこそたてねくれ竹の夜半の雪しく秋の月影、家隆卿歌也、陳云、是ほとの同類つねの事也、持とさためき、

左の歌、よその字あまりて侍り、右雪折の竹、家隆卿の歌侍らは、誠に同類とも申へし、然はしらすしてよめらは、還て高名なるへきにや、但此うたにとりては、秋風を一首の中にむすひいれられたり、幸の事なり。なとか、をとおる月のとよまれさりつらん。しからは家隆卿のをとこそたてねの同類をものかるへきにや。

二十番

左　通秀卿

かすかなる光もさひし古さとのまかきの竹のさゐたもる月

右方申云。故郷の月なとのやう也、陳云、月下竹の題にては竹をよみ侍り。別のとはきこえす。

右　　敦秀卿

中空の月はさ枝のひまもりて影もすくなる竹の一むら

左申云。さ枝もる影のすくならん事如何。又さえた無益歟。連歌を二句合たるに似たり。陳云。亭午の月なれは。竹の陰の直ならむ事。有二何事一哉。右を勝と申侍し。

左歌。故郷の心。それはくるしかるへからす。竹月にてあら(ハロ歟)在所はよりくるにまかせ侍るへし。右歌。影もすくなる竹。ともこそ侍らめ。衆議として勝に定けるうへは。子細を申あらたむへきにあらさるへし。

廿一番

左　　親長卿

呉竹のかけまて袖にうつる也まとのむかひに月めくるらし

右方申云。無二殊難一。

右　　長貞宿禰

世々をふる竹の木葉にすむ月やとよらの宮の古のかけ

左申云。無二指難一。左方人おほくて。かちとさたまりぬ。

左歌。月めくるらしの詞。庶幾せさるにや。右いにしへの影もいかゝ。大方は兩首同品なりといへとも。方人おほくて。左の勝に定るらん。しはらく衆議にまかすへし。比興比興。

廿二番

左　　季通卿

我友とみしもわすれて月影のさはれはいとふ軒の呉竹

依レ無二右方人一勝となりぬ。

右　　則達

月をよもかくろへとては植をかしかしこくすみし竹の林に

左申云。七賢も自然竹の林にすみ侍るか。あなかちうへ侍らし。

右歌。難破誠に可レ然。左歌。碁にとらは聖目計の无興。

廿三番

左　　清房

くれ竹のかはらぬ色にをく露の光をうけてやとる月かな

右方申云。をく露の光をうけてやとると侍る月は。つきにきこえ侍り。

右　　高清卿

吹わくる軒端の竹をもる月や風にもきえぬ窓のともし火

左申云。月を灯にたとへむ事。あまりにや。陳云。燈にたとへむ事有二何難一哉。右を勝とし侍り。

左。光をうけての詞。誠に心得られす。光をそへてとこそあるへき事なれ。右。月を灯にたとへ侍る事は勿論なり。たゝ風にもきえぬなとは。月燈にいたりては不足なるにや。左は。なへらかなる躰也。負まての事は如何。

廿四番

左　　宣胤卿

吹わくる風にまかせてもる月の陰さためなき竹のした道

右申云無二殊難一

右　　長光

月やとる竹の葉分の秋風になひくや影のくまとみえぬる

左申云。なひくやかけのくま。おもはしからす。左を勝と申侍りぬ。

兩首の優劣衆議に同心訖。

爾下兵亂之後、且南遷居之間、老衰相加、身但ニ病兒、不レ携ニ一首之抄物一、直要レ忘ニ書僕之風躰一、只依ニ来責一、難レ默、雖レ注ニ短冊用ニ及、此一卷一覽後、於ニ晨昏得意同一者、早被ニ削除一、豈不幸之甚哉。

南華老人　御判

武家歌合

一番

左持　原上霞　前伊豫守源尚氏

春きてはなをそはてなき朝な〳〵霞にわくるむさしのゝ原

右　伊豆守源政識

雪きえぬ高ねも春になる澤や浪に霞のうきしまか原

左歌。むさしのゝ原、霞になをはてなきさま。めつらしきすかたは侍らねと。詞なたらかにいひくたされ侍る。右歌。上句よくつゝき侍るを。下句いさゝかよはくや聞え侍らん。一番の左は。大かた勝へきやうに侍れと。兩方得失あり。なすらへて持とす。

二番

左勝　遠江守藤原宗基

春はなを霞へたてゝまきもくの檜原かおくそふかみとりなる

右　大和守三善元行

若草のあをみか原の色もまた霞てうすき春のあけほの

左は。霞に檜原かおく。何みとりふかく。右は。若草の色もこそかすみて。曙の景氣をかんせり。何れも心あるさまには侍れと。右の。あをみか原こそ。きゝよからす侍れ。たとひふりてよみたることあるにても。このむへき詞ならぬにや。左勝侍へし。

三番

左　散位藤原基雄

春きてもふしのねおろしさえかへりむら〳〵霞む浮嶋かはら

右持　　　　　　　　　権少僧都兼賀

みたるゝ霞の袖のすり衣しのふか原の春のあらしに

左。首尾あひかなひて。きよけには聞え侍り。右かすみの袖のすり衣。しのふか原と侍る。なをよろしく侍るにや。かつへきにこそ。

四番

左　　　　　　　　　散位神貞説

春はまたあさ野の原のかすめるや残る雪気の雲の俤

右勝　　　　　　　　越智康通

見わたせはいり海くらく立こめて霞に残るよさのまつ原

左。詞つゝきなひやかには侍れとも。春の淺きかたに淺野をかすかに　　　たまにきこゆ。可爲勝。

五番

左　　　　　　　　　右京進親衡

はる〳〵と見えし浪路も埋れて霞にたてるよさの松はら

右勝　　　　　　　　左衛門尉宮道親孝

月残るあしたの原のおも影も春の名にのみ立かすみかな

左。かすみにたてるよさの松原。上句平懐なから。いひしりてよろしく侍るに。右。月残る朝の原のおも影もといひ。春の名にのみ立かすみ。詞といひ。すかたといひ。優にきこゆ。左には勝へきにや。

六番

左勝　　　　　　　　釋奎藤

春は色にあまりてなひく曙や霞にわかぬ小野の篠はら

右　　　　　　　　　豐前守平頼亮

くる春の色を霞にさきたてゝなひきそめたる青柳の原

左歌。古今集にあさちふのをのゝしのはらと侍るを本歌と定。やさしくとりなされ侍り。右歌。色をかすみにさきたてゝなと。いひしりてきこえなから。青柳の原こそ。いたくこのみ詠へき名所ならねをのゝしの原勝侍るへし。

七番

左持　遠歸雁　　　　　貞説

ゆく雁の聲のかきり　　　名残や峯のくもの一すし

右　　　　　　　　　兼賀

鳥の跡しはしはとめよ行雁の雲につらなるもしの關もり

鳥の跡もしのせき守なと。悉皆雁字を詮と作たてたる外。ことなる心も侍らす。ゆく雁の聲をかきりにといひ。名残やみねの雲の一すちと侍る。わかれの雁ゆくかたをしたひて。なかめやる心もあさからす。聊勝へきにや。

八番

左　　　　　　　　　宗基

みるかうちに消て跡なく行雁を霞にたとるはるのあけほの

右勝　　　　　　　　政誠

別ゆくすかたのみかは天津雁はては霞に聲もきえつゝ

左右の歸雁。かすみにきゆるけしき。いつれもおかしく侍れと。聊右は勝へきにや。

九番

左持　　　　　　　　倚氏

遠よりかすみそめつゝ見るかうちに聲さへきえて雁かへる也

右　　　　　　　　　頼亮

歸る雁すかたは雲にかけろふのあるかなきかとたち霞つゝ

左歌。前の番の右の歌に心詞いたくかはらすや。右歌。か

文字七侍る歟。天の原ふしの煙の春の色の霞になひくあけほの丶そらと侍る歌も。の字七侍れとも。か文字あまり多くや。歌合かやうの事難し申事にや。

十番

左持　親継

雲をわけ霞を分て姿をは誰にしのふのころも雁かね

右　康通

つれてこし秋もまとをに歸る也猶やくあまの衣かり雁〔かねイ〕

左右とも下句優美。歌非無二勝劣一歟。

十一番

左勝　金藤

ゆくかたもとこ世の雁の跡とをみ身をなか空の春やうからん

右　親孝

雲に入こゑには秋をおもひ出てかすめる月や雁かへるらむ

雲に入聲には秋を思ひいて丶といへる上句も。いかなるゆへともきこえす。下句。かすめる月や雁かへるらむと侍るも思量にたへす。短慮のをよはぬにや。中空に春を恨る心たしかにきこゆれは。しはらく以レ左爲レ勝。

十二番

左勝　基雄

歸るてふうらみはしるや天雲のよそに成行はるのかりかね

右　元行

行雁の聲をしるへにみし影もいやとをさかる夕くれのそら

聲をしるへにみしかけもと侍る。雁の事にや。歌にはきかぬやうなれと。詩には雁影深とやらむ侍れは。さも侍らん。天雲のよそにも人のといへる本歌も。たしかに□侍る。されと。右にかち侍へきにや。

十三番　庵春雨

左持　親継

春雨はこけのみとりに色そへていはかきためむ庵そ露けき

右　政誠

庵むすふ草の根さしとおもふまて亂てか丶る軒の春さめ

左の。こけのみとり。右の草のねさし。勝負分かたく侍り。

十四番

左持　尙氏

よしやふれ松の下庵まつ人もうきみにうとき春雨の空

右　〔兼賀〕

露霜にあれにしま丶の草の庵を春降雨や又かこふらん

左。松の下庵の春雨の頃。まことにさひしくいひなされ侍り。右。露霜雨とり集めたるやうにきこえ侍れと。歌のすかたは。あしからぬにや。持にても侍れかし。

十五番

左　宗基

をのつから霞の袖のいと雨にむすひそへたる草のいほかな

右勝　親孝

まはらなる草の庵の灯のひかりやしめる夜半の春さめ

いと雨にむすひそへたる草庵と侍る。いとによせてむすひそへたる。妖艶に侍れとも。いと雨よむへき詞ならすや。灯の光やしめると侍る。ことなる難なきにや。

十六番

左持　金藤

春風の吹とはなくて草の庵まとうつ雨や霞なるらむ

音さへもみたれにけりな春の雨のふるはしのふの草の庵に　　康　通

左歌。蕭々暗雨打レ窓声といへる詩をおもへる歟。猶第五句。こゝろゆかすそ侍る。右歌。音さへもみたりにけりと侍る下句にしのふといはんため歟。春雨の音は如何。あらしなとの心ちし侍り。持にて侍るへし。

十七番

左　　基　雄

打しめりふきめもあはぬさゝの庵にもるとしもなき春の雨哉

右勝　　頼　亮

草の庵にもる春雨にくれぬまも露のやとりも袖しほるなり

草の庵の露に潤くたけてはきこゆれと。かの廬山のふるきむかしもおもひ出られて。おかしく侍り。うちしめりふきめもあはぬさゝの庵。いひしりてはきこえなから。もるとしもなきといはむ事いかゝ。春の雨はをともほのかにありぬへく侍れと。もらすとはいふへからすや。

十八番

左持　　貞　説

冬かれしひまあらはなる軒に生る草のみとりも春雨の空

右　　光　行

時わかぬすまゐなからもふる雨にみとりを春の松のした庵

左右とも。以二草色松色一添二春雨一美景歟。等同歟。

十九番　　月前花

左勝　　基　華

春の夜はたゝ一時もおしめなを花の香こめてかすむ月影

右　　政　誠

明ぬとて月ふきをくる春風の峯にわかるゝ花のよこくも

月吹をくる春風。心あるやうに侍れとも。花の横雲さたかならぬ心地し侍り。春のよの一時をおしむすかた。猶心ひき侍るへし。

廿番

左勝　　尚　氏

花さかり色も匂もふかき夜のあはれをこめてかすむ月哉

右　　康　通

あかなくに春の幾夜を惜きぬ月も折しる花の下ふし

左歌。ふかき夜のあはれをこめてと侍る。いひしりて聞え侍り。右のうた。月も折しるなと。やさしくみえ侍れと。左の霞には。あはれもおほくこもる心地し侍り。可レ為レ勝。

廿一番

左持　　宗　甚

吉野山月にはなにといとはましかゝるは花の□のしら雲

右　　頼　亮

かすみあへす櫻に匂ふ春の月花にそむかて夜もみよとや

芳野山の櫻に月をさへよみくはへぬれは。春の景色たくひありかたくや。されと詞のつゝき。猶心ゆかす侍り。櫻ににほふ春の月も。美麗には侍れと。花にそむかてといへる詞。此歌にとりては。いかにそやきこえ侍る。ともし火なと詠くはへ。又捨身の述懐なとにそへては。おもしろく侍るへし。そむくといふ字のあしきにはあらす。此歌に。いさゝか耳にたつやうなり。左右思ふ所あり。おなしほとにや。

廿二番

左　　親　祐

身にしむはいつれの色そ咲花の木間をわくるはるの夜の月

右　元行

詠れは空こそかすめかけくれて月にさはらぬ花の白くも

左。花と月との身にしむ色をあらそひ侍る。心あるさまには侍れと。右月にさはらぬ花の白雲。なをたちまさりておかしく侍る。

廿三番

左　登藤

天きるかとはかり月はおほろにて雪と見る夜の花にうつろふ

右　兼賀

「さくらや」[ ]「行月のかつらの花の下」[ ]

左歌[ ]樺本の[ ]櫻花に[ ]侍る歟

よろし。右歌。下句優にきこゆ。勝劣さため申かたし。

廿四番

左　貞説

月影にわかれぬ花の色も香も吹てしらせよ庭の春風

右勝　親孝

雲間より花の梢に影おちてにほひにやとるはるの夜の月

吹てしらせよ庭の春風と侍る。花の爲には無念にこそ聞え侍れ。其上。月影に花の色香のわかれ侍も。ことはりかなはすや。匂にやとる春のよの月。花の梢にてりそふこゝちし侍る。一段勝侍るへし。

廿五番

左持　登藤

鳴歟冬

河嶋や岩ほの苔も染かへて花色衣きしのやまふき

右　武蔵

山吹の花の浪そふ嶋かけにほそき枝くふ池の水とり

左、いはほのこけを。花色ころもにそめかへられ侍る。とへとこたへすといへる本歌の心はあしからねと。花いろ衣きしの歟冬は。花をきたるとつゝけられたる歟。このましからすきこゆ。右源氏物語胡蝶の卷に。水鳥ともつかひはなれすあそひつゝ。ほそき枝ともをくひてとやらん。物語に[ ]やうにきこゆ。左右ともにおもふ所有。可レ爲レ持。

廿六番

左持　尙氏

立花のこしまの色を夏かけて匂ひに殘せ山ふきの花

右　元行

春の色にさける小嶋の山吹はなにたち花の折たかへつゝ

左右橘小嶋。歟冬色香淺深難レ分。可レ爲レ持。

廿七番

左持　貞説

春をさそふ水や心をかは嶋にうつろひかゝる山吹のはな

右　顯亮

いろ〳〵にさける小嶋の山吹はうへけん君や宇治のはし姫

春をさそふ水の心。やさしくきこゆるに。うつろひかゝるといへる。こゝにてはかゝらすともと覺侍る。うへけん君やといへる。ふるめかしく侍る歟。又持にて侍るへし。

廿八番

左(勝歟)　宗基

山吹の花色衣きてみれは染ぬ波なきうちの川しま

右　康通

侍としもうつしてにほへ橘の名をかる嶋に咲る山ふき
　左歌。めつらしきすかたは侍らねと。下句なといひしりて
　難なきにや。右歌。むかしをもうつしてにほへといひ。橘
　の名をかる嶋と侍る。たくみなるやうなり。

廿九番

　左持　基雄

川水のはやく暮行春の色を小嶋に殘すやまふきのはな

　右　親孝

河風や昔よりなもたち花の小嶋に匂ふやまふきのはな
　左河水。右河風。又わきかたく侍へし。

卅番

　左勝　親祐

うち河や岩こす波の花までもおなし小嶋に匂ふ山ふき

　右　余賀

心有てうへやをき鈫山吹の花の籬かとをつ嶋ひと
　浪の花までも。こしまに匂ふ心。いとおかしく侍り。花のま
　かきか遠つ嶋人と侍る下句。かのみちのくのまかきの嶋
　をおもひそへられたるか。短慮懵に覺知し侍らす。遠つ嶋
　人の。心なれてしらぬにこそ侍らん。左可レ爲レ勝歟。

卅一番　待空戀

　左勝　宗基

さりともと賴めし人はとひもこてまたぬ八聲の鳥の音そうき

　右　余賀

我は待心はつきぬさりとものたのみむなしき鐘の響に
　さりともといひ。さりとものとをかれ侍る。又とりのね。
　鐘のひゝき。同科にはみえ侍れと。右。我そまつ心はつき
　ぬといへる。いひかなへてもきこえす。左勝へきにや。

卅二番

　左持　親祐

いつはりはまさしかりけり待人の心のうらはあはて更ぬる

　右　賴亮

さはるてふ又此夜半もなからへて身は有明の月もはつかし
　左歌古今集に。心のうらそまさしかりけるといへる本歌
　をひきかへて。僞はまさしく心のうらはあはてといへる。
　心あるさまには侍れと。本歌も同戀の歌にて。無念なるや
　うに侍る歟。右歌。有明の月。ふとしたるやうに侍れと。又
　この夜半の長くてと侍る。たひかさなれる空たのめもあ
　はれにきこゆ。左右たかひに得失あり。勝劣難レ弁。

卅三番

　左持　倚氏

たのむ夜は波こす床に松山の待とはかりのあらましもうし

　右　親孝

有明のかけはむなしき床のうへに猶かたしきの袖したふ也
　左。波こす床にまつ山のといへるすかた詞いひしりて。首
　尾相應せり。右。むなしき床に月影はかり。かたしきの袖を
　したふといへる。やさしく侍れと。有明のかけはむなしき
　やうに聞ゆれは。左倚やすらかなりと申へし。

卅四番

　左勝　基雄

[　　　　]をおもひたへねと[　　　　]の鳥そわかれの外に□

　右　康通

明ぬとてこぬよをつくる鳥のねは言葉殘らてかことたになし

左歌詞とゝこほる所なくよろしきにや。右千夜を一夜にといへる歌をとりてよまれたる。優美には聞えなから。かことたになしといへる終の句や。此うたにとりて。いひかなへてもきこえす侍らん。左聊まさるへし。

卅五番

左勝　　全藤

せめてさは跡なき人の言の葉に暁露のむすふ身をはや

右　　元行

たのみこし夜半もいまはの鳥の音を又別路に誰なけく覧

左歌。あしからすきこえ侍る。されと跡なき人のと侍る。聊おもひたくや。右歌。夜半もいまはのなと。優に侍るを。下句ちからなくそ侍る。持なとにや。

卅六番

左持　　貞詮

かひなしやまつとせしまのやすらひに夢もたのめす有明の空

右　　政誠

鳥のねもおもひたえねとなく涙わかれにかゝる暁もかな

夢もたのます有明の空。別に懸る暁もかな。ともにやさしくきこゆ。よき持にて侍へし。

卅七番　　難忘恋

左　　尚氏

おもかけの離れもやらぬ人よなと我身をよそに忘れはつらん

右勝　　頼亮

我涙行衛はしるや忘られぬ花の俤あをやきの眉

左。人よなと我身をよそにわすれはつらんといひて。我身のわすれかたき恋の よく聞え侍りぬ。歌からも心有さまに侍り。右。長恨歌の芙蓉如面柳如眉といへる句をおもへるにや。尤力ありて。花の俤柳のまゆ。ともにみつへき句にも侍られは。左に劣と申かたし。

卅八番

左　　基業

露の間も忘れぬ物を我中にあふことなしの草の名はうし

右勝　　政誠

住吉のきしはむかしの袖ぬれてつまはや我も結わすれ草

あふ事なしの草の名。いかにそや聞え侍る。作者いかにおもひてよまれたるやらむ。ことなし草なといへるは常のことにや。ことなしの草。このみよむへからす。わすれ草。下句ふるめかしく侍れと。左には勝侍るへし。

卅九番

左持　　宗基

かへりみる心も身をも忘れくさわすれぬかたに思ひみたれて

右　　元行

ともにみし影はかりたに忘れしの言の葉そへしあり明の月

この番。左も右も心ありてきこゆ。

四十番

左勝　　貞詮

人はさもあたしことはの契そと思ひしりてもえやは忘れん

右　　俊實

いかにせんたつきもしらぬ玉鉾の道行ふりの袖の別を

玉ほこの道行ふり。深くきこえ侍り。題の心もたしかならすや。左。させる難もきこえ侍らす。

四十一番

左勝　親　祐

我もきえんこむ世をかけて忘れしの契むなしき夕貝の露

右　康　通

かへりかね心そひきし琴の音のほのかなりつる蓬生のやと

左は。ゆふかほの露にこんよをかけ。右は。蓬生の宿にことの音をしのふ。ともにかの物語のむかしをかりて。今のわすれかたき戀にとりなされ侍り。されとなを左は心ふかきやうに聞え侍れは。勝へきにこそ。

四十二番

左持　全　藤

たゆみなき思ひにかけて今そしる有し野分の夕くれの空

右　親　孝

袖ふれしそのうつり香や更になを忘れかたみの行衞ならまし

左歌。野分の卷に。かせさはき村雲まよふといへる歌をおもへるにや。題の心にはかなひてきこえ侍り。たゆみなきとをかれ侍るこそ聊耳にたち侍れ。右歌。袖ふれしうつり香なといへる難なく侍り。持なとにや。

四十三番

左　貞　説

つれなさをまけぬ心にこひ衣身にも恨の年やかさねん

右勝　頼　亮

今はたゝねになけとてや空蟬のもぬけのきぬの恨そふらん

左。つれなさをまけぬ心にと侍る。いひおほせても聞えす。右。源氏物語うつせみの卷に。かのもぬけをいかに伊勢おのあまのといへる心にや。おかしくきこゆ。かち侍るへし。

四十四番

左持　全　藤

あさりする汐干のかたにぬれそふや恨しかひも浪のたもとは

右　元　行

初秋の色たにつらき眞葛原なを吹しほる露の夕かせ

源氏物語の心。たひ〳〵になり侍るに。伊勢嶋やしほひのかたにあさにてもいふかひなきは我身なりけりといへる歌をとる事。このましからさるにや。このしほかひ。くたけたる詞つゝきにも侍るかな。葛のかせもことなるめつらしきふしも侍らす。同しほとにや。

四十五番

左持　尙　氏

はや幾夜つもる恨となりぬらんなくさむ夢にかへす衣は

右　政　誠

いとゝしく露ふきむすふ夕かな玉まく葛のよその秋かせ

露ふきむすふなといへる。あしからす侍るに。第五句いかにそやきこえ侍る。かへす衣も。はやいく夜といへる五文字。心ゆかす侍れと。風躰なたらかに侍る歟。持とや申へからん。

四十六番

左持　基　雄

恨をはなをうちそへて歸る也かけもなさけの淺瀨しらなみ

右　〔康　通〕

せきそふる泪をとへは海も淺く山もほとなきわか恨かな

あさ瀨白なみと侍らは。河なとのたくひありたく侍り。恨とをかれ侍るは。浦によそへられ侍らは。第五句いかにそや侍る。右拾遺集に。うみもあさしやまもほとなしといへ

[illegible]歌をとられ侍り。泪をとへはと侍る。心ゆかすや。依可
と爲持。

四十七番　左持　宗　基

今はなを根にしける眞葛原人のつらさや種となりけむ

右　親　孝

ことの葉やあたになりゆくいやましに積る恨を何とかこたむ

左右ともに。めつらしき詞も侍らす。又持なとにや。

四十八番　左勝　俊　祐

袖の露にはらふたよりとなりもせて人の心の秋風そふく

右　家　賀

そのまゝにつれなきよりも中絶てかはる恨そ限しられぬ

袖の露はらふはかりにや。恨をますこゝろいかゝ侍らん。
下句いかゝふきたる心ちと侍り。つれなきより□
心ゆかす。同しほととや申へからむ。

四十九番　古渡船

左勝　宗　基

ありし事とへはいはせの渡舟こきゆくかたのよゝへいそくな

右　政　誠

こき消てよそになるとのわたし船そこのみるめをたれ借らん

左右の歌の心。さる事にてそとをしはからるゝ程には侍
れと。措むかひてよく聞ゆるやうに侍らすや。勝劣わけか
たし。

五十番

左持　衛　氏

舟よはふ聲はかりして明やらぬよとのわたりにのこる月影

右　康　通

さしとめて汀につなく船はあれとかちよりみゆく淀のつき橋

左。難なく殘月の影も優に侍り。右かちより橋をゆくへき
に。便宜あらは舟を求へきにあらす。舟の題にて橋を詠に
せるも無念也。以レ左爲レ勝。

五十一番

左勝　基　雄

をひて吹風にまかせてゆらのとのとをきもしらすよする船人

右　榮　賀

いつよりか舟出すらむこほりゐてかちわたりせしすはの入海

ゆらのとのとをきもしらすと侍て。よする船人□
おもへる□おほつかなし。又諏訪入海□きゝ
なれ侍れとも。こほりてかち渡□渡の名所な
とにてよむへしともおほえす。證歌侍らすは勝と申かた
く。持たるへし。

五十二番

左　仝　藤

まよふらしこのよは舟にあかし瀉とわたりはてぬ浪のゆく末

右勝　頼　亮

わたし守舟ないそきそ角田河すみうかれても都をそ思ふ

左歌。とわたりはてぬ。きゝよからす。たとひ先達よめる詞
にても。用捨あるへきにや。まよふらしこの世は舟にあか
しかたと侍るも。心ゆかすや。右歌。在中將の都鳥の名をと
ひけん心に。いたくかはらす侍れと。角田河すみうかれて
もなといへる。わたりよろしくそ侍る。勝へきにこそ。

五十三番

左持　　　　　　　　貞説

舟とむるよとのまこものかりまくら都にちかき夢やむすはん

右　　　　　　　　親孝

たひ人やけふもありその渡守浪に小船のつなてとくらむ

この淀のわたり有磯のわたり。歌のしなおなしほとにやみえ侍り。

五十四番

左勝　　　　　　　　親祐

日もくれぬ人もわたらぬ程なれや舟さしかへる淀の河長

右　　　　　　　　元行

□舟のさほのわたりの夕月夜さすかけ□よする白浪

□薄暮の□さほのわたりきゝなれ侍らす。さためて證歌侍らん。よする白浪もよせなくきこゆ。よとの川長勝侍るへし。

五十五番　　曉神祇

左持　　　　　　　　尚氏

神やしる誰曉もわきてまつ世をいのるてふ事はかはらし

右　　　　　　　　元行

空はれて明かたちかき天の戸にあふけは高き月よみの神

左。たゝ曉も世を祈る心よろしくきこゆ。右。あまのとに月よみの神。より所有て。あふけはたかきなといへる。あしからす。共によき持とや申へからむ。

五十六番

左勝　　　　　　　　全藤

法まもるしらきの神の玉垣やその曉もかねてすむらむ

右　　　　　　　　政誠

雲のうへのとかにてらせ今も世に猶有明の月よみのみや

左。新羅の神詠。から舟に法まもりにと侍るをとりて。三會曉にとりなされ侍る。よろしきにや。右。有明の月よみのみやきよけにみゆ。しかれとも左は猶首尾相應して。ゆゝしけに聞え侍る歟。かちたるへし。

五十七番

左持　　　　　　　　親祐

宮人も神につかふる道とてや星をいたゝく夜半に出らむ

右　　　　　　　　頼亮

□ひいつやはや曉□神につかふるみち。ほしをいたゝく□あしからすきこえ侍り。岩戸のむかしをおもへる□しきにや。勝劣わけ難し。

五十八番

左　　　　　　　　宗基

神代よりあつめし鳥の聲々にうたふ榊はいまもかはらす

右勝　　　　　　　　兼賀

いそけ猶七のみや人曉のときもうつきの神のまつりを

あつめし鳥の聲々にうたふと侍る。いかにそや聞え侍る。七の宮人。日吉祭。曉の時も卯月なとそへられ侍るにや。難なくや。かつへきにこそ。

五十九番

左持　　　　　　　　基雄

おもひいてぬ榊葉うたふ聲ふけて天の岩戸のあけの玉垣

右　　　　　　　　親孝

白浪にあらはれそめし住吉の松に南風あけわたるそら

左あけの玉かき。右あけわたる空。ともに以曉よりはあけ過てきこえ侍り。歌合の例として。かゝる事吹毛の難なと
と申事にや。様持たるへし。

六十番

左　　　　貞説

瑞籬のまつの嵐もほの〳〵としらむ庭火の明かたの影

右勝　　　　康通

［　　　　］かつらいく世を［　　　　］
［　　　］さゝ竹に［　　　　］下句も。よくつゝき
侍り。かちたるへし。

作者

左方

前伊豫守源尚氏　勝三　持六　負一
近江守藤原宗泰　勝二　持五　負三
散位藤原基雄　勝三　持四　負三
散位曽貞説　勝二　持四　負四
右京進平親甫　勝三　持五　負二
釋全藤　勝三　持六　負一

右方

伊豆守源政誠　勝二　持六　負二
大和守三善元行　勝一　持六　負三
權少僧都兼賀　勝二　持四　負四
書智法満　勝三　持四　負四
右衛門尉菅道親孝　勝三　持五　負二
豐前守平頼亮　勝四　持五　負一

地下歌合

一番

左持　　泉夏栖　　　　明充

たかむしろのへし岩ほに凉しさも猶まし水に暮すなつかな

右　　　　直定

夕日影松も命のなかゝれとつきぬ泉の木もとのやと

左。たか莚をいはほの上にのへ侍る事。古事なと侍るにや。さらすは詮なし。右又松のいのちなかゝれと侍るも。何事そや。いつれも相應しても聞えす。持とや申へからむ。

二番

左　　　　正廣

せきなかす庭の泉やみなの川はやまもありて袖そすゝしき

右勝　　　　良甫

瀧殿やよるさへ月にふしなれて此頃うとき閨のうちかな

左。庭の泉にみなの川をとりいたされたる事ことかましく。右。月に臥して閨へもいらぬさま。誠に納凉に亡。心引侍る。

三番

左勝　　　　義春

すゝみとる淺瀨をふかくせきとめて結ひそなるゝ庭のやり水

右　　　　信友

夕立のはれ間の月の影分て人やりならぬ庭のまし水

左は。姿よくするくと侍り。右。夕立の月のはれまより出。人やりならぬなとは。その心をえす。先をろかなる心

にまかせて。左に勝の字を付侍る。

四番

左持　直重

世のうさをおもふに似たる通路や山下水に涼とるころ

右　有盛

むすふより夏の日なみはやり水に秋の風せく松かけのやと

左の上下句。更に覺悟に不レ及。右又させる事も侍らす。持と申へくや。

五番

左持　義直

我ならす秋をよせくとむかふらん千里を渡る庭のやり水

右　政照

袖ふれてむすふし水かもとつ葉のそよくや秋にならの夕風

左。上句は。おかしく聞えなから。下の句に。千里を渡る庭の遣水。ふと心え難し。風なとほしく侍る。右ならの葉の風にそよかん事。もとつ葉に限るへからす。これ詞の寄にや。歌の肝要とすへき所はみえす。取合持になし侍る。

六番

左　直繁

いほしむるし水かもとの夕日影さなから秋をむすふそて哉

右勝　直家

いつしかになれにし床を夏の日は清水かもとのこけの小莚

左。秋をむすふ心いかにそや。右其心あらはれ侍れは。勝へきにや。

七番

左持　宗伊

秋風もやとりにけりなかり枕むすへは寒き山の井の水

右　直俊

むすふまに夏の日なみは立水や露ちる秋に庭の夕かせ

左。秋風とともにやとりをとり。右。立水の露ちる秋に緣を結ふすかた。捨かたくおほえて。勝負をつけ侍らす。

八番

左勝　伊忠

せきいるゝ庭の遣水袖はへてはしゐに夏をゝくる宿かな

右　元盛

くみあかぬし水に夏をわすれ草生る野へにやけふもくらさむ

左。袖はへての詞いかにそや。袖かけてと有たくこそ。右。忘草生る野へ。伊勢物語の歌にや。泉の題にては。庭のやり水。又瀧殿なとやよく侍らむ。野へなとは似あひても聞えす。左を勝とや申へからむ。

九番

左持　明猷

むすひきていてしとおもふ奥山に岩もるし水なかるゝもおし

右　重孝

わすれては秋とそおもふ岩枕水せきなかす庭のすゝしさ

左。いてしとおもふおく山。ことかましく聞えて。下句さしたる事も侍らす。右又餘にやすく侍れは。いかゝにて勝負侍らす。

十番

左持　宗瑞

ことの葉もかはす計に松かねの枕なれ行水そすゝしき

右　近員

やり水に涼しくすめる中川の宿から夏の日をやおくらむ

左松にこと葉をかけすへき事如何。右。中川にむかしすみたらん人の詠したらんや。よく侍らん。さしても聞えす。又持にこそ。

十一番

左持　桂久

むすひよる庭のなかれに月おちて水のさなみの影そすゝしき

右　雅純

松かけに水のさなみの玉たすき秋風かけてむすふやと哉

左の月落て。ことかましく。玉たすき又相應しても聞えす。思案にまかせて持になし侍る。

十二番

左（勝）　親元

清水ゆく松かね枕こけむしろなつは木陰にしく宿もなし

右　直忠

瀧殿や消こ夏とはしら浪に秋の心のわくいつみかな

左。する〳〵ときこゆ。右又夏は消。秋の心のわくと侍るも。すてかたくて。勝負をつけ侍らす。持にこそ。

十三番

左　春清

風かよふしみつかもとの草の露なる涼しさになるゝ山かけ

右勝　直雅

中川やむすふ泉の跡とめていまもそのよにかゝるなみかな

左。優すく侍り。右の中川の泉により。その世にかへる浪。さまよく侍りて。こゝろをよせ侍る。

十四番

左持　直有

風をたに夏のものとて松かもとむすひそへたる水のすゝしさ

右　直祐

涼しさは水さへすみて秋風のかよふか庭にむかふたき殿

左右さしたる風情もなし。持よく侍らむ。

十五番

左勝　信忠

すゝしさに袖うちふれて永日の暮るゝをしらぬ山の下水

右　有員

うつりゆく日なみもはやし瀧殿に程なく落る月のみしか夜

これ又同前に侍る。

十六番　寄石戀

左持　元盛

世のなかよ此身をしれは石の火のひかり待まを人そつれなき

右　桂久

あひかたき石の鳥居のこはしらふたつの袖も亀井をそせく

左。石火の光まつま。電光朝露なとは。ほとなきたとへにや。右のかたは。そはにや成侍らむ。右又石の鳥居。本歌なと侍るにや。それも鳥居計の上にて。はてたく侍り。亀井なと。ことおほくて。させる事もみえす。詮とすへき所なし。持にこそ。

十七番

左　近員

浪ならぬ身そあひかたき立ゐにも心をふかく沖のしら石

右勝　明猷

あふ事のかたきうらみのあまりてや思ひの山の石となるらむ

白石よりは。おもひの山の石により侍らん。結句石となりけむよくこそ。

十八番

左　直忠

それと見よこひしなん世の後までも石にかく碑の空し我名を

右勝　宗伊

わたつみとなれる袂のしつく石うかふしほせもなき思ひかな

左の。石にかく碑。歌にはきゝならはす。さこそ侍らめ。うらみなとには。身をすて。苔の下。三瀬川。後の世なと詠し侍も。半は題による事にや。右の題にては。つねの石にて難レ逢事をねかはまほしくこそ。墓所の石よりも。しつく石をとり侍らむ。

十九番

左　直祐

つれなさを思ふ心のあらそひはうちみたれ碁の石をみるにも

右勝　義直

うき中よかゝる思ひにはかりあらは千引の石も輕しとや見ん

左の。おもふ心のあらそひ。人を思ふにあらそふへき事にはあらす。いかにも人の心をとりてあひ見む事こそ。右。人の心のあひかたき事を。千引の石にたとへられ侍る事。さも侍るへし。たゝ歌は。やすやすとして。姿よきを取侍らむ。勝にこそ。

廿番

左　良祐

これそ此千引の石のうこきなき人の心をいつちかもせむ

右勝　義春

浪かゝる沖の白石さなからにしられぬ中のそての海かな

左の。いつちかもせむは。いかにとかせむの心歟。いひおほせられても聞えす。山にても猶うき時はいつちかもせむはよく侍り。人の心をいつちかもせむ如何。右勝へきにこそ。

廿一番

左持　信友

かくて身の涙の水の玉かしはうかはぬえにやしつみはつへき

右　明充

つらしとて身はおく山の石の上にすみ隔つとも忘れやはせむ

右。なみたの水の玉かしは。いかゝ侍らむ。藻にうつもるゝとこそ侍れ。なみたを海にもたとへ侍れは。さこそはあらめと。作者の心に有へけれとも。それはちかひ侍り。右又人のあはねはとて。樹下石上のすまゐ迄はけしからす。左右持にこそ。

廿二番

左勝　政照

戀しなん我もくらへは後の世や石よりおもき罪とならまし

右　信忠

我なみた海となれとも人心ゆるきもやらぬ沖のしら石

此番さしても聞えす。同前に侍る。

廿三番

左持　直俊

白黒の石のあらそひしらは人我にはよはきこゝろともかな

右　春清

我中よ沖の白石しられぬをせめてはうつせ袖のうらなみ

左の。白黒のあらそひ。おきの白石も耳なれ侍り。おなしほ
とにこそ。

廿四番

左勝　　重孝

せきかぬる袖にや見えむ石はしる瀧津心のあまる思ひは

右　　正慶

水もらぬためしにかけよ玉かつら昔もなひく石のやま風

左右はしる瀧なくもかなと。花の歌をこひにとりなされ
侍る。いとやさしくこそ。勝侍るへし。

廿五番

左持　　有員

いしなこをとる手より猶うら表見ゆる心のかはることの葉

右　　直重

みよや人石もうちあふ習をはありとしらする火の光哉

左右の初の五文字。そきせす。歌のさまも。同ほとにみ
ゆ。

廿六番

左　　直兼

おもひ川なみたの淵の玉かしは逢瀬の浪にいつからかはむ

右勝　　伊忠

うち出ていははやおもひみたれ菲の石の数々くたく心を

左の玉かしは。うかひかたし。心をくたくかたにより侍ら
ん。

廿七番

左持　　兼統

しらさりきうきも始めはさゝれ石やすく岩ほとなる思ひとは

右　　親元

いかてわれ手にとる石をかこみても心つよさは思ひかたまし

左。さゝれ石やすくいはほとなると侍り。一滴大海となる
たとひにや。右も其心顕れ侍り。すてかたくて勝負なし。よ
き持にや。

廿八番

左勝　　直定

いつまてとたえす我身をくたきても猶ひきかぬる石のかけ縄

右　　直繁

我思ひ高野の山の石のむろその曉をまつちきりかな

右の歌は。釋教の題にやよく侍らん。左は申事侍らす。爲
レ勝。

廿九番

左勝　　有盛

かくはかり思ひあかるを石神のちかひにかけていのるなか哉

右　　直有

あふ事をとへとつれなき石神のおもき心をいかゝたのまん
おもき石神よりは。かろくあかるをとり侍らん。

卅番

左持　　直家

石はしる瀧津川よりはかりなきおもひの袖の波やまさらん

右　　宗珊

はかなさよ見るめも浪のおきの石に思ひあらはす袖の海かな
いつれも子細に及はす。持になし侍る。

卅一番　名所關

左持　　直重

むかしさへあれぬといひし不破の關思ひやらるゝ板ひさし哉

右　元盛

あふ坂や關のこなたの白川にまつこそむかへみちのくの山

左。第四句きゝよからす。右又。關のこなたの白川に。奥の白川おもひ出たるにや。さしたる風情ともきこえす。持にこそ。

廿二番

左　正廣

關の名のもしにて國はおさまりぬ殘るをあらせふはの山かせ

右勝　直忠

あふさかや御代の關守神心なをきを杉のもとたちにして

左。關の題にて殘るをあらせ。曲なき事にや。右のなをきをとり侍らむ。

廿三番

左　直繁

人の世はいく世かはりて浪なれむ月は昔も須磨の關守

右勝　政照

學ひえぬ心つくしの文字の關をろかなる身のいつかこえなむ

左。ふと心得かたくこそ。右は身にしられ侍りて。勝の字をつけ侍る。

廿四番

左勝　義直

あふさかの木の下蔭きやすらひや峯のせきもる山郭公

右　信友

かり枕ねられぬ夢をいくたひかむすひかへぬる下紐の關

左。時鳥のきかまほしきに。峯の關もる。誠にさも有ぬへき事や。右はかりねの夢みえすとて。下紐をむすひかへむもしらす。左のほとゝきすを聞侍らん。

廿五番

左持　明充

みたれつゝ又立なをるかるかやの關や世にふく風を知るらん

右　近員

春といひ秋とたち行程なさをなとかはとめぬ白川の關

左の。かるかやの關。なにともしられす。右又光陰を白川の關のとゝめん事も不審に侍り。勝負なくや。

廿六番

左　信忠

おもひやれ我身もおなしもる人のかゝるうき世に逢坂のせき

右勝　直祐

杉たてる色そさひしき逢坂や關路にかゝるゆふくれの雨

かゝるうき世にあへると侍る歌よりは。さひしく共夕暮の雨をとり侍らむ。

廿七番

左持　春清

見るからに心清見か關のとをやすくな越そ後の月かけ

右　直家

須磨の浦やもしほの煙風はらへなひくにくもる關の月影

左。關までにて戶はいらすともきこゆ。右の三の句。風はらへも。きゝにくゝ侍り。歌のさまもおなしほとにや。

廿八番

左持　桂久

音あらき不破の山風さよ更てひとり關もる弓はりの月

右　　　　良蕭

旅の空山口しるくくるしきやまつ逢坂のせきの岩かと

左の弓張りしてもきこえす、右又關の岩かと、くるしからむ事も如何、同前に侍り。

廿九番

左　　　　明儀

和歌の浦に心をとめぬ人もなし紀の關守やいとまあるらむ

右　　　　有員

清見かたせき路の棹歌まよふ嵐やのほる富士の浮くも

左の下句、ふところ得かたし。いとまあるらむの詞もきゝよからす、右又關路のわつかなる煙、富士の浮くもとならむ事も、餘ことかましくきこゆ、持にや。

四十番

左勝　　　　親元

不破の山いく世の春をせきとめて岩ほにかゝる藤河の浪

右　　　　直定

白波のたつたならねと關の名のなこそと聞は誰かこゆへき

左歌、よろしくきこゆ、右は近江の昔の歌の姿、おもひいてられ侍り、左尤爲勝。

四十一番

左勝　　　　宗伊

寢ねもふ夜半のまくらの山風や夢をなこその關のせきもり

右　　　　有盛

あるゝとも誰かいとはん人すまてひとり關もる不破のやま風

左。みやこをおもふ夢を通さぬなこその關。さもこそ侍らめ。右の不破のせきのあるゝともたれかいとはむ、勿論の事にや侍らん。左ははるかにまさりてきこゆ。

四十二番

左持　　　　直有

すまの浦關のたひ人とまるまて浪おりかくる夕嵐かな

右　　　　直雍

玉ほこの道のみちたる君か世に今逢坂のせきのせき守

左の歌。子細侍らす。又右も祝言なれは。すてかたくて勝負つけす侍り。

四十三番

左持　　　　義春

逢坂や關路の月に空はれていふきにうつる風の浮雲

右　　　　雍統

相坂やあふ人絶て關のとをすきの葉くらき夕くれの雨

左右のあふ坂。とりとりに侍り。年ふ杉のはくらき夕の雨よりも。いふきにうつる雲に心を引侍る。

四十四番

左　　　　宗瑞

逢坂や關路さはらすはしり井の水も程なくすくる夕立

右勝　　　　直俊

法のみちもるや衣の關の戸をやすくはこえぬ遠の旅ひと

左はしりゐよりも。衣の關に心をそめ侍る。

四十五番

左勝　　　　伊忠

こはた山越るかち路のくるしさそもる人もなき關となるらん

右　　　　重孝

清見かたうしほくもらて夜半の月よせくる浪の關のあら垣

左右の歌。とり／＼に侍る。又軸にて侍れは。勝負つけかたく侍り。珍重々々。

愚案點十首

正廣

判者

作者

作者	勝	負	持
明充			持三
直定	勝一	負一	持一
正廣		負三	
良喆	勝一	負一	持一
義春	勝三		
信友		負一	持一
直重			持三
有盛	勝一	負一	持一
義直	勝二點一		持一
政照	勝一		持二
直繁		負三	
直家	勝一		持二點一
宗伊	勝二點一		持一
直俊	勝一		持二
伊忠	勝二		持一
元盛		負一	持二
明献	勝一		持二
重孝	勝一		持一
宗瑨		負一	持二點一
近員		負一	持二
桂久			持三
兼統		負一點一	持二
親元	勝一		持二點二
直忠	勝一	負一	持一點一
春清		負一	持二
直兼	勝一	負一	持一
直有		負一	持二
直喆	勝一	負一	持一
信忠		負一	持二
有員			持三

右一帖者蜷川新右衛門尉親元以自筆之本不違一字令書寫了

群書類從卷第二百十五

和歌部七十歌合卅六

前十五番歌合

公任卿撰

一番

櫻ちる木の下風は寒からて空にしられぬ雪そ降ける　紀貫之

我やとの花みかてらに來る人はちりなん後そこひしかるへき　凡河内躬恒

二番

いまこんといひし計に長月の有明の月を待出るかな　素性法師

ちりちらすきかまほしきを古鄕の花みて歸る人もあはなん　伊勢

三番

世中に絕て櫻のなかりせは春の心はのとけからまし　在中將

末の露もとの雫や世中のをくれさきたつためしなるらん　遍昭僧正

四番

春たつといふはかりにやみよしのゝ山も霞て今朝はみゆらん　壬生忠岑

千年まてかきれる松もけふよりは君にひかれて萬代やへん　大中臣能宣

五番

行やらて山路暮しつ郭公今一聲のきかまほしさに　源公忠朝臣

さ夜更てね覺さりせは郭公人傳に社きくへかりけれ　壬生忠見

六番

人の親の心はやみにあらね共子を思ふみちにまよひぬる哉　堤中納言兼輔

あふことの絕てしなくは中々に人をも身をもうらみさらまし　土御門中納言敦忠

七番

夕されはさほのかはらの河風に友まとはして千鳥鳴也　紀友則

天津風ふけ井の浦にゐる田鶴のなとか雲ゐにかへらさるへき　藤原淸正

八番

色見えてうつろふ物は世中の人の心の花にそ有ける　小野小町

秋の野の萩のにしきを我やとに鹿の音なからうつしてし哉　淸原元輔

九番

みよしのゝ山の白雪つもるらし古さと寒く成まさる也　坂上是則

年每に春のわかれをあはれとも人にをくるゝ人そしりける　藤原元眞

十番

有明の月の光をまつほとにわかよのいたくふけにける哉　藤原仲文

またしらぬ古里人はけふまてにこんとたのめし我を待らん　輔昭

十一番　齋宮女御

琴の音に峯の松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけん

小大君

岩はしの夜の契りも絶ぬへしあくるわひしきかつらきの神

十二番　傅とのゝ母上

なけきつゝ獨ぬるよのあくるまはいかに久しき物とかはしる

帥とのゝ母上

わすれしの行末まてはかたけれとけふをかきりの命とも哉

十三番　源重之

やかすとも草はもえなん春日野をたゝ春の日に任せたらなん

源順

水の面にてる月なみをかそふれはこよひそ秋の最中成ける

十四番　平兼盛

かそふれは我身につもる年月をゝくりむかふと何いそくらん

中務

うくひすの聲なかりせは雪きえぬ山里いかて春をしらまし

十五番　人丸

ほの〴〵とあかしの浦の朝霧に嶋かくれ行舟をしそ思ふ

山邊赤人

和歌の浦に汐みちくれはかたをなみ芦へをさして田鶴鳴渡る

後十五番歌合

一番　實方

五月やみくらはし山の郭公おほつかなくも鳴わたるかな

道信

限あれはけふぬきすてつふち衣はてなき物は涙也けり

二番　馬内侍

こよひきみいかなる里の月をみて都にたれを思ひいつらん

和泉式部

くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかに照せ山のはの月

三番　藤原爲頼朝臣

世中にあらましかはと思ふ人のなきはおほくも成にけるかな

相如

夢ならて又もみるへき君ならはねられぬいをも歎かさらまし

四番　助忠

もろともに出すはこしと契りしをいかゝなりにし山のはの月

橘爲義朝臣

君まつと山のは出て山の端の入まて月をなかめつるかな

五番　爲政

こゝのへのうちまて照す月影にあれたる宿を思ひ社やれ

みちすみ

行末のしるしはかりに殘るへき松さへいたく老にけるかな

六番　齋院宰相

引わかれ袂にかゝる菖蒲草おなしよと野におひにしものを

赤染衛門

我やとの松はしるしもなかりけり杉むらならは尋ねきなまし

七番　嘉時

夏の夜をまたせ〳〵て郭公たゝ一聲もなき渡るかな

よしたゝ

わきもこかきませぬ宵の秋風は[　　　　　]

清少納言

八番

よしさらはつらさは我に習ひけり頼めてこぬは誰かをしへし

中宮大輔

いにしへのならの都の八重櫻けふこゝの重ににほひぬるかな

九番　戒秀

かきつめしねたさもねたしもしほ草思はぬかたに烟たなひく

寛祐

あまたみしとよのみそきの諸人の「君しも物を思はする哉」

十番　兼隆

春のうちにちり積る共きよめせし花にけかるゝ宿といはせん

すけちか

あし曳の山ほとゝきす里馴て「たそかれ時に名のりすらしも」

十一番　爲基入道

詠むるに物思ふことのなくさむは月は浮世の外よりや行

なかたふ

さはへなす荒振神もをしなへてけふはなこしのはらへなり鬼

十二番　勝觀

忍ふれはくるしかりけりしの薄あきのさかりに成やしなまし

惠慶

八重むくらしけれる宿のさひしきに人社しられ秋はきにけり

十三番　清胤僧都

君すまはとはまし物を津國のいく田の杜の秋の初風

觀教法橋

水のうへに秋の山邊をうつしてははたはりひろに錦とそみる

十四番　四條中納言

春來てそ人もとひける山里は花こそ宿のあるし也けれ

大宰大貳高遠

あふ坂の關の岩かとふみならし山たちいつるきり原の駒

十五番　花山院御製

木のもとを住家とすれはをのつから花みる人になりぬへき哉

中務卿具平親王

世にふれは物思ふとしもなけれとも月に幾たひ詠めしつらん

右前後十五番歌合依無類本不能挍合

時代不同歌合

以二古今。後撰。拾遺等作者一爲レ左。以二後拾遺。金葉。詞花。千載。新古今等作者一爲レ右。

作者

左方

柿本人麿
山部赤人
中納言家持
小野篁
中納言行平
僧正遍昭
小野小町
在原業平
藤原敏行
伊勢
元良親王
素性法師
在原元方
延喜
平定文
中納言兼輔
紀友則
紀貫之
凡河内躬恒
壬生忠岑
參議等
大江千里
坂上是則
清原深養父
蟬丸
清愼公
權中納言敦忠
齋宮女御
右近
中務
源信明朝臣
謙德公
平兼盛
源順
右大將道綱母
大中臣能宣
清原元輔
源重之
高内侍
花山法皇
惠慶法師
曾禰好忠
源道濟
藤原長能
藤原實方朝臣

右方

大納言經信
法性寺入道前關白太政大臣
藤原清輔朝臣
權中納言國信
皇太后宮大夫俊成
前大僧正慈圓
正三位家隆
西行法師
丹後
後京極攝政太政大臣
權中納言定家
修理大夫顯季
中院右大臣
後法性寺入道關白
大宰大貳重家
中納言俊忠
良暹法師
左京大夫顯輔
紫式部
源俊頼朝臣
一宮紀伊
參議雅經
俊惠法師
藤原範永朝臣
能因法師
崇德院
相摸
式子内親王
小式部内侍
花園左大臣
刑部卿範兼
白河院
藤原秀能
寂然法師
小侍從
祝部成仲
隆信朝臣
寂蓮法師
讃岐
後德大寺左大臣
藤原基俊
前中納言匡房
右近中將公衡
大藏卿有家
待賢門院堀川

藤原信實朝臣　　大僧正行尊
中務卿具平親王　　愚老
馬内侍　　權中納言師時
赤染衛門　　殷富門院大輔
泉式部　　宮内卿

一番

左　　柿本人麿

（[illegible]）たつた河紅葉はなかるかみなひのみむろの山に時雨ふるらし

右　　大納言經信

（[illegible]）夕されはかとたのいなはをとつれてあしのまろやに秋風そ吹

二番

左

（[illegible]）足引の山鳥のおのしたりおのなか〳〵し夜をひとりかもねん

右

（新古今秋下）秋のよは衣さむしろかさねても月の光りにしくものそなき

三番

左

（[illegible]）乙女子かそてふる山のみつかきの久しき世より思ひそめてき

右

（[illegible]）おきつかせ吹にけらしな住吉の松のしつえをあらふ白浪

四番

左　　山邊赤人

（新古今春上）あすからは若なつまんとしめし野に昨日もけふも雪は降つゝ

右　　法性寺入道前關白太政大臣

（千載雜上）漣やくにつみかみのうらさひて古き宮こに月ひとりすむ

五番

左

（新古今春下）もゝしきの大宮人はいとまあれや櫻かさしてけふも暮しつ

右

おもひかねそなたのそらを詠むれはたゝ山のはにかゝる白雲

六番

左

（續古今雜中）和歌の浦に汐みちくれはかたをなみ芦へをさしてたつ鳴渡る

右

（詞花雜下）わたの原こき出てみれは久方の雲ゐにまかふ興津白波

七番

左　　中納言家持

（新古今春上）まきもくのひはらもいまたくもらぬに小松か原にあは雪そ降

右　　藤原清輔

（千載秋上）たつた姫かさしのたまのをゝよはみ亂れにけりとみゆる白露

八番

左

新古今秋上　かみなひの三室の山のくすかつら裏ふきかへす秋は來にけり

右

千載雜上　今よりは更行までに月はみしそのことゝなく涙おちけり

九番

左

新古今冬　かさゝきのわたせる橋にをく霜の白きをみれは夜そ更にける

右

冬かれの森のくちはの霜の上にをちたる月の影のさやけさ

十番

左　小野篁

古今羇旅　わたの原八十嶋かけてこき出ぬと人にはつけよあまのつり舟

右　權中納言國信

新古今春上　かすかのゝしたもえわたる草の上につれなくみゆる春の淡雪

十一番

左

古今雜下　思ひきやひなの別れに衰へてあまのなわたきいさりせんとは

右

金葉冬　なにことを待とはなしにあけくれて今年もけふに成にける哉

十二番

左

新古今雜下　かすならはかゝらましやは世中にいと悲しきは賤のをたまき

右

新古今秋　山ちにてそほちにけりな白露のあかつきおきの木々の雫に

十三番

左　中納言行平

古今離別　立わかれいなはの山の峯におふるまつとしきかは今歸りこん

右　皇太后宮大夫俊成

新古今雜上　年くれし涙のつらゝとけにけりこけの袖にも春や立らん

十四番

左

古今雜下　わくらはに訪人あらはすまの浦に藻鹽たれつゝわふと答へよ

右

新古今冬　立かへりまたもきてみむ松嶋やをしまのとまや浪にあらすな

十五番

左

後撰雜一　さかの山みゆきたえにしせり河のちよのふる道あとは有けり

右

千載雜中　世中よみちこそなけれ思ひいる山のおくにも鹿そ鳴なる

十六番

左　僧正遍昭

いそのかみふるのやまへの櫻花うへけんときを知人ぞなき

右　前大僧正慈圓

そむれともちらぬたもとに時雨きて猶色深き神な月かな

十七番

左

古今哀傷

みな人は花の衣に成ぬなりこけのたもとよかはきたにせよ

右

千載雑中

おほけなく浮世のたみにおほふかな我たつそまに墨染の袖

十八番

左

新古今哀傷

末の露もとのしつくや世の中のおくれさきたつためし成らむ

右

新古今釋教

願はくはしはし闇路にやすらひてかゝけやせましのりの燈火

十九番

左　小野小町

古今春下

花の色は移りにけりないたつらに我身よにふる詠めせしまに

右　正三位家隆

新古今秋下

したもみちかつちる山の夕時雨ぬれてや鹿のひとり鳴らん

廿番

左

古今戀五

色みえてうつろふものは世中の人の心の花にぞ有ける

右

新勅撰秋上

松のとをしあけかたの山風に雲もかゝらぬ月をみる哉

廿一番

左

後撰雑一

あまのすむ浦こく舟のかちをなみよをうみ渡る我ぞはかなき（かなしきイ）

右

新古今雑二

ふしのねの煙もなをぞ立のぼる上へなきものは思ひ成けり

廿二番

左　在原業平

古今戀五

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身一つはもとの身にして

右　西行法師

新古今春上

ふりつみしたかねのみ雪とけにけりきよたき河の水の白波

廿三番

左　よみ人しらず

古今雑下

たかみそき夕つけ鳥ぞから（か古今）衣たつたの山におりはへてなく

右

新古今冬

秋しのや外山の里やしぐるらむ生駒のたけに雲のかゝれる

廿四番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　伊　勢

（後撰戀）いとゝしく過行かたのこひしきにうら山しくも歸るなみかな

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　後京極攝政太政大臣良經

（千載戀五）なけゝとて月やはものをおもはするかこちかほなる我涙かな

廿五番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　藤原敏行

（古今秋上）秋きぬとめにはさやかにみえねとも風の音にそ驚ろかれぬる

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　丹　後

（新古今秋上）わすれしななにはの秋のよはの空こと浦にすむ月はみるとも

廿六番

左

（古今秋上）秋萩の花さきにけり高砂のをのへのしかは今や鳴らむ

右

（新古今羇）おほつかな宮こにすまぬ都鳥ことゝふ人にいかゝこたへし

廿七番

左

（古今戀三）明ぬとてかへる道にはこきたれて雨も泪もふりそほちつゝ

右

（新古今雜）なにとなくきけは涙そこほれぬるこけの袂にかよふ松かせ

廿八番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　伊　勢

（古今戀五）あひにあひて物思ふ比の我袖にやとる月さへぬるゝかほなる

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　後京極攝政太政大臣良經

（新古今秋上）ふるさとのもとあらの小萩咲しよりよな／＼庭の月そ移ろふ

廿九番

左

（古今戀五）三輪の山いかに待みむ年ふとも尋ぬる人もあらしとおもへは

右

（新古今秋下）たくへくる松の嵐やたゆむらんおのへにかへるさを鹿の聲

卅番

左

（後撰戀一）思ひ河たえす流るゝ水のあはのうたかた人にあはてきえめや

右

（新古今戀二）もらすなよ雲ゐる峯のはつ時雨このはゝしたに色かはるとも

卅一番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　元良親王

（後撰春下）花の色はむかしなからにみし人の心のみこそうつろひにけれ

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　權中納言定家

（新古今秋上）さむしろやまつよの秋の風ふけて月をかたしくうちの橋姫

卅二番

左

（拾遺戀三）あふことは遠山とり（すロイ）のかり衣きてはかひなきねをのみぞなく

右

（新古今秋下）ひとりぬる山鳥のおのしたりおにしもをきまよふとこの月影

廿三番

左

〔後撰戀五〕わびぬれは今はたおなし難波なる身を盡してもあはむとぞ思

右

（新古今戀四）きえわびぬうつろふ人の秋の色に身をこからしの森の下露

廿四番

左　素性法師

（古今秋上）我のみやあはれと思はん蟋なくゆふかけのやまとなでしこ

右　修理大夫顕季

（拾遺秋）大井河いせきの音のなかりせは紅葉をしけるわたりとやみむ

廿五番

左

（古今戀一）をとにのみ菊の白露よるはをきて晝は思ひにあへずけぬへし

右

（新古今冬）松かねにをはなかりしきよもすからかたしく袖に雪は降つゝ

廿六番

左

（古今戀四）今こんといひし許りに長月の有明の月を待出るかな

右

（千載戀二）嬉しくはのちの心を神もきけひくしめ縄のたえじとぞ思ふ

廿七番

左　在原元方

（古今春下）霞たつ春のやまべはとをけれど吹来る風は花のかぞする

右　中院右大臣

（千載春上）尋ね来てたおる櫻の朝露に花の袂のぬれぬひぞなき

廿八番

左

（古今戀一）をとは山をとにきゝつゝあふ坂の關のこなたにとしをふる哉

右

（新古今夏）ありすかはおなしながれはかはらねとみしや昔の影ぞ忘れぬ

廿九番

左

（古今戀一）たちかへりあはれとぞ思ふよそにても人に心を興津白なみ

右

（千載戀）あふことはいつとなきさの濱千鳥波のたちゐに音をのみぞ鳴

卅番

左　延喜

拾遺夏　足引の山郭公けふとてやあやめの草のねにたてゝなく

右　後法性寺入道關白

千載秋上　夕されはをのゝあさちふたまちりて心くたくる風の音かな

卅一番

左

新古今戀一　むらさきの色に心はあらねともふかくそ人を思ひそめぬる（つるイ）

右

新古今戀一　しのふるに心のひまはなけれ共なをもるものはなみた也けり

卅二番

左

新古今戀三　はかなくもあけにけるかな朝露のをきての後そきえ増りける

右

千載戀四　なからへてかはる心をみるよりはあふに命をかへてましかは

卅三番

左　平定文

古今戀三　まくらより又しる人もなき戀を泪せきあへすもらしつるかな

右　太宰大貳重家

千載春上　をはつせの花のさかりを見わたせは霞にまかふ峯のしら雲

卅四番

左

後撰戀三　昔せしわかかね言のかなしきはいかに契りしなこりなるらん

右

新古今哀傷　かたみとてみれは歎きのふかみ草なになか〳〵の匂ひ也らん

卅五番

左

古今雜下　ありはてぬ命まつまの程たに（はかり今古）もうきことしけくおもはすも哉

右

新古今戀二　のちのよをなけく涙といひなしてしほりやせまし墨染の袖

卅六番

左　中納言兼輔

後撰夏　みしかよの更行まゝに高砂のみねの松風吹かとそきく

右　中納言俊忠

新古今哀傷　さらてたに露けきさかののへにきて昔のあとにしほれぬる哉

卅七番

左

後撰戀三　あふさかのこのした露にぬれしより我衣手は今もかはかす

右

千載戀三　わか戀はあまのかるもに亂れつゝかはくときなき波の下草

卅八番

左

新古今戀一　みかの原わきて流るゝ泉川いつみきとてか戀ひしかるらん

右

千載雑下
岩おろすかたこそなけれいせの海のしほせにかゝる蜑の釣舟

四十九番

左　紀友則

古今恋二
ゆふされは螢よりけにもゆれとも光りみねはや人のつれなき

右　良暹法師

後拾遺春下
たつねつる花も我身もおとろへて後の春ともえこそ契らね

五十番

左

古今恋一
東路のさやのなか山なか〳〵になにしかひとを思ひそめけん

右

後拾遺秋上
淋しさにやとを立出てなかむれはいつくもおなし秋のゆふ暮

五十一番

左

古今恋三
したにのみこふるもくるし玉のをの絶て亂れん人なとかめそ（ハロ古今ナシ）

右

新古今冬
今はとてねなましものを時雨つる空ともみえすすめる月かな

五十二番

左　紀貫之

古今秋下
しら露も時雨もいたくもる山はしたは残らす色つきにけり

右　左京大夫顕輔

千載春上
かつらきやたかまの山の櫻花雲井のよそにみてやすきなん

五十三番

左

古今離別
むすふての雫ににこる山の井のあかても人に分れぬるかな

右

後拾遺恋上
あふとみてうつゝのかひはなけれ共はかなき夢そ命也ける

五十四番

左

古今恋一
吉野川岩波たかくゆく水のはやくそ人をおもひそめてし

右

千載恋一
思へともいはての山に年をへてくちやはてなん谷のむもれ木

五十五番

左　凡河内躬恒

後撰春上
いつくとも春の光はわかなくにまたみよしのゝ山は雪ふる

右　紫式部

後拾遺春上
みよしのは春のけしきにかすめとも結ほゝれたる雪の下草

五十六番

左

拾遺雑秋
住吉の松を秋風吹からにこゑうちそふるおきつしらなみ

右

千載哀傷
なきよはる籬のむしもとめかたき秋のわかれや悲しかるらん

五十七番

左

いせの海に塩やくあまのふち衣なるとはすれとあはぬ君かな

右

みし人のけふりとなりし夕へよりなもむつましき塩かまの浦

五十八番

左　壬生忠岑

春たつといふはかりにやみよし野の山も霞てけさはみゆらん

右　源俊頼朝臣

山櫻咲そめしより久方の雲ゐにみゆる瀧のしら糸

五十九番

左

夢よりもはかなき物は夏の夜のあかつきかたの別れ也けり

右

うかりける人を初瀬の山おろしよはけしかれとは祈らぬ物を

六十番

左

有明のつれなくみえし別れよりあかつきはかりうき物はなし

右

思ひ草葉末にむすふ白露のたま／＼きてはてにもたまらす

六十一番

左　參議等

（後撰戀一）淺ちふのをのゝ篠原しのふれとあまりてなとか人の戀しき

右　一宮紀伊

（新古今秋上）置露もしつ心なく秋風に亂れてさけるまのゝはき原

六十二番

左

（後撰戀二）かけろふのみしはかりにや濱千鳥行衛もしらぬ道〔戀イ〕にまとはん

右

（新古今冬）浦風の吹あけにたてる濱千鳥波立くらしよはに鳴く也

六十三番

左

（後撰戀二）東路のさのゝふなはしかけてのみおもひ渡るを知人そなき

右

（金葉戀下）音にきくたかしの濱のあた浪はかけしや袖のぬれもこそすれ

六十四番

左　大江千里

（古今秋上）月みれはちゝに物こそ悲しけれ我みひとつの秋にはあらねと

右　參議雅經

（續千載秋下）秋の夜の月にいくたひ詠めして物おもふことの身に積るらん

六十五番

左

古今哀傷 紅葉はを風にまかせてみるよりもはかなき物は命也けり

右

新勅撰秋上 花すゝき草の袂をかりそなく涙の露やをきところなき

六十六番

左

古今恋三 けさはしもおきつる(けんイ)方もしらさりつ思ひ出るそ悲しかりける(きえてかなしきイ)

右

新勅撰恋二 恨みしなにはのみつに立けふり心からやくあまのもしほ火

六十七番

左　坂上是則

古今冬 みよし野の山のしら雪つもるらしふる里寒く成まさる也

右　俊恵法師

新古今春上 春といへは霞にけりなきのふまてなみまにみえしあはち嶋山

六十八番

左

古今冬 朝ほらけ有明の月とみるまてに吉野の里にふれる白雪

右

千載冬 もしほ草しきつの浦のねさめには時雨にのみや袖はぬれける

六十九番

左

新古今恋一 をしかふす夏のゝ草のみちをなみしけき恋ちにまとふ比かな

右

千載恋四 思ひかね猶恋ちにそかへりぬるうらみは末もとをらさりけり

七十番

左　清原深養父

古今夏 夏のよはまたよひなから明ぬるを雲のいつこに月やとるらん

右　藤原範永朝臣

(詞花春) 散花もあはれとやみむ(見ずや詞花)いそのかみなりはつるまて(よ歟)おしむ心を

七十一番

左

古今春下 光なきたにゝは春もよそなれはさきてとく散る物思ひもなし

右

後拾遺秋上 すむひともなき山里の秋のよは月の光りもさひしかりけり

七十二番

左

新古今恋五 嬉しくは忘るゝ事もありなましつらきそなかきかたみ也ける

右

千載秋 あり明の月もしみつにやとりけり今宵はこえし逢坂の関

七十三番

左　蝉丸

後撰雑一 これやこのゆくもかへるも別れつゝ知もしらぬもあふ坂の関

右　能因法師

新古今冬
夕されはしほ風こしてみちのくののたの玉河千鳥鳴也

七十四番

左

新古今雜下
世中はとてもかくてもありぬへし〔同しことイ〕宮も藁屋もはてしなけれは

右

新古今哀傷
命あれはことしの秋も月はみつわかれし人にあふよなきかな

七十五番

左

新古今雜下
秋かせになひくあさちの末ことにをく白露のあはれよの中

右

後拾遺旅
みやこをは霞とともにたちしかと秋風そ吹く白河のせき

七十六番

左　清愼公

後撰戀三
今さらに思ひいてしと忍ふるをこひしきにこそ忘れわひぬれ

右　崇德院

千載春上
尋ねつる花のあたりに成にけりにほふにしるし春の山風

七十七番

左

拾遺戀一
人しれぬ思ひは年を〔ふイ〕へにけれと我のみしるはかひなかりけり

右

新古今雜下
うたゝねはおきふく風におとろけと長き夢ちそさむる時なき

七十八番

左

拾遺戀一
あなこひしはつかに人を水の泡のきえ返る共しらせてしかな

右

詞花戀上
せを速み岩にせかるゝたき川のわれても末にあはんとそ思ふ

七十九番

左　權中納言敦忠

後撰冬
物おもふとすくる月日もしらぬまに今年もけふに成にける哉（はてぬとかきくイ）

右　相撲

後拾遺夏
五月雨はみつのみまきの眞菰草かりほす暇もあらしとそ思ふ

八十番

左

後撰戀五
いせの海のちひろの濱に拾ふとも今はなにてふかひか有へき

右

後拾遺戀二
諸共にいつかとくへきあふことのかた結ひなるよはのした紐

八十一番

左

拾遺戀一
身にしみて思ふ心の年ふれはつゐに色にもいてぬへきかな

右

後拾遺戀四
恨みわひほさぬ袖たにある物を戀にくちなんなこそおしけれ

八十二番

左　齋宮女御

袖にたゝ秋の夕はしられけりきえしあさちかつゆをかけつゝ

右　式子內親王

眺めわひぬ秋よりほかの宿もかなのにも山にも月やすむらん

八十三番

左

新古今雜上
なれ行は浮世なれはやすまの蜑のしほやき衣まとをなるらん

右

新古今秋下
わたひらつ昔のをとに夢さめて物おもふ袖の露そくたくる

八十四番

左

新古今戀五
見る夢にうつゝのうさもわすられて思ひ慰むほとそはかなき
〔ぬイ〕

右

いきてよもあすまて人はつらからし此夕暮をとはゝとへかし

八十五番

左　右近

おほかたの秋のそらたに悲しきに物思ひそふきのふけふかな
君にもあるこイ

右　小式部內侍

千載戀四
思ひ出てたれをか人のたつねましうきにたへたる命ならすは

八十六番

左

あふことを待に月日はこゆるきの磯にいてゝや今はうらみん
〔とイ〕

右

後拾遺雜三
しぬ計り歎きに社は歎きしかいきてとふへき身にしあらねは

八十七番

左

わすらるゝ身をは思はすちかひてし人の命のおしくも有かな

右

金葉雜上
大江山いくのゝ道のとをけれはまたふみもみす天のはしたて

八十八番

左　中務

秋風の吹につけてもとはぬ哉おきのはならは音はしてまし

右　花園左大臣

ちらぬまは花をもみてもすきぬへき春より外に知人もかな
とゝにてイ　しイ　〔後のイ〕

八十九番

左

ありしたにうかりし物をあかすとて幾程そふるつらさなる覽
〔ロイ〕　〔いつこにイ〕

右

今はおし人はこよひと賴むれは思ひわつらふけふのくれかな

九十番

左

うきなからきえせぬ物は身なりけり羨しきは水のあは哉

右

新古今戀一　我戀は〔もイ〕いまはいろにや出なまし軒のしのふも紅葉しにけり

九十一番

左　　源信明朝臣

新勅撰春下　あたらよの月と花とをおなしくは心〔あはれイ〕しれらん人にみせはや

右　　刑部卿範兼

新古今賀　君か代にあへるはたれもうれしきを花は色にも出にける哉

九十二番

左

新古今冬　ほの／＼と有明の月の月かけに紅葉吹おろす山おろしの風

右

千載戀四　月待と人にはいひてなかむれはなくさめかたき夕暮の空

九十三番

左

新古今哀傷　物をのみおもふ〔ひイ〕ね覺のまくらには涙かゝらぬ曉そなき

右

新古今戀五　忘れゆくひとゆへ空を眺むれはたえ／＼にこそ雲もみえけれ

九十四番

左　　謙德公

拾遺戀五　哀ともいふへき人はおもほえて身のいたつらに也ぬへき哉

右　　白河院

新古今夏　庭の面は月もらぬまてなりにけり梢に夏のかけしけりつゝ

九十五番

左

新古今戀三　かきりなく結ひをきつる草枕いつこのたひを思ひわすれん

右

後拾遺冬　大井河ふるきなかれを尋ねきて嵐の山の紅葉をそみる

九十六番

左

新勅撰戀三　悲しきも哀れもたくひあるものを〔多かるをイ〕人にふるさぬことのはも哉

右

後拾遺戀一　あふさかのなをもたのまし戀すれと〔ロイ〕關のし水に袖は〔もイ〕ぬれけり

九十七番

左　　平兼盛

拾遺秋　くれて行秋のかたみにをくものは我もとゆひの霜にそ有ける

右　　藤原秀能

九十八番

左

拾遺別　たよりあらはいかて都に〔へイ〕つけやらむけふ白河の關はこえぬと

右

新古今哀傷　露をたに今はかたみのふちころもあたにも袖を吹嵐かな

九十九番

左

拾遺戀一 忍ふれといろにいてにけり我戀はものや思ふと人のとふまて

右

新古今戀二 もしほやくあまのとまやの夕煙〔い　そイ〕たつ名もくるし思ひたえなて

百番

左　源　順

拾遺春 春ふかみゐての河波立かへりみてこそゆかめ山ふきの花

右　寂然法師

千載秋上 秋は來ぬ年もなかはに〔ロイ〕過ぬとや荻吹風のおとろかすらん

百一番

左

拾遺秋 水の面にてる月なみをかそふれは今宵そ秋の最中也ける

右

新古今尺教 けふくれぬ〔すきイ〕命もしかとおとろかす入相の鐘のこゑそかなしき

百二番

左

拾遺秋 名をきけは昔なからの山なれとしくるゝ秋は色まさりけり

右

新古今尺教 昔かすは孰れのよにか廻りあひて思ひけりとも人にしられん

百三番

左　右大将道綱母

拾遺戀四 歎きつゝ獨りぬるよのあくるまはいかに久しき物とかはしる

右　小侍従

新勅撰秋下 いくめくりすき行あきにあひぬらんかはらぬ月の影を詠めて

百四番

左

新古今戀四 たえぬるか影たにみえはとふへきを形見の水はみ草ゐにけり

右

新勅撰戀三 雲となり雨となりても身にそはゝ空しき空をかたみとやみん

百五番

左

新古今戀四 吹風につけてもとはんさゝかにのかよひし道は空にたゆとも

右

新古今戀三 つらきをも恨みぬ我にならふなようきみをしらぬ人も社あれ

百六番

左　大中臣能宣

拾遺夏 きのふまてよそに思ひしあやめ草けふ我宿の妻とみるかな

右　祝部成仲

千載秋下 立田山ふもとのさとは遠けれと嵐のつてに紅葉をそみる

百七番

左

詞花戀上 御垣もり衛士のたくひのよるはもえ晝はきえつゝ物を社思へ

右

千載雜上 あふさかの關には人もなかりけり岩まの水のもるにまかせて

百八番

左

新古今戀一 我ならぬ人に心をつくは山したにかよはむ道たにやなき

右

新古今雜中 あけくれは昔をのみそしのふくさ葉末の露に袖ぬらしつゝ

百九番

左　清原元輔

後拾遺戀四 契りきなかたみに袖をしほりつゝ末のまつ山波こさしとは

右　隆信朝臣

千載秋下 うきねするいなのみなとにきこゆなり鹿のねおろす峯の松風

百十番

左

新古今戀二 大井河井堰の水のわくらはにけふは頼めしくれにやあるらん〔にあらぬイ〕

右

新古今離別 たれとしもしらぬわかれの悲しきはまつらのおきを出る舟人

百十一番

左

新古今雜下 うしとてもよをひたすらに厭〔そむくイ〕はねは物思ひしらぬ身とや也南〔いひてイ〕

右

千載戀二 われゆへの泪とたれ〔これをイ〕もよそにみはあはれ成へき袖の上哉

百十二番

左　源重之

後拾遺夏 夏かりの玉江のあしをふみしたきむれゐる鳥の立空そなき

右　寂蓮法師

新古今春上 かつらきや高間のさくら咲にけり立田のおくにかゝる白雲

百十三番

左

詞花戀上 風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくたけて物を思ふ比哉

右

新古今戀四 恨みわひまたしいまはの身なれ共思ひなれにし夕暮の空

百十四番

左

新古今戀一 筑波山はやましけ山しけゝれと思ひいるにはさはらさりけり

右

千載雜中 淋しさにうきよをかへて忍はすはひとりきくへき松の風かは

百十五番

左　高内侍

拾遺雜賀 夢とのみおもひなれにし世中をなに今さらにおとろかすらん

右　讃岐

新古今秋下
ちりかゝるもみちの色は深けれと渡れはにこる山河の水

百十六番

左

新古今恋三
獨ぬるひとや知るらむ秋のよをなかしとたれか君につけゝん〔つるイ〕

右

こふれともみぬめの浦のうき枕波にのみやは袖のぬれける〔にイ〕

百十七番

左

新古今雑上
忘れしの行末まてはかたけれはけふをかきりの命とも哉

右

千載恋四
一よとてよかれし床のさむしろにやかても塵の積りぬるかな

百十八番

左　花山法皇

詞花秋
秋のよの月に心のあくかれて雲井にものを思ふころかな

右　後徳大寺左大臣

千載夏
郭公鳴つるかたをなかむれはたゝ有明の月そのこれる

百十九番

左

後拾遺恋
旅の空よはの煙とのほりなはあまのもしほひたくかとやみむ

右

新古今雑上
うき人の月はなにそのゆかりそと思ひなからもうち眺めつゝ

百二十番

左

新古今雑三
朝ほらけをきつる霜のきえかへり暮待ほとの袖をみせはや

右

千載恋五
はかなくもこんよをかねて契る哉二たひ同し身とはならしを〔りイ〕

百二十一番

左　恵慶法師

新古今夏
我宿のそともにたてる楢のはのしけみにすゝむ夏はきにけり

右　藤原基俊

金葉夏
夏のよの月まつほとのてすさみに岩もる清水いくむすひしつ〔イ〕

百二十二番

左

拾遺秋
やへむくらしけれる宿の淋しきに人こそみえね秋はきにけり

右

百二十三番

左

拾遺冬
天の原空さへさえや渡るらむこほりとみゆる冬のよの月

右

新勅撰雑三
且みれは猶そ戀しきわきもこかゆつのつま櫛いつかさゝまし〔ハイ〕

百二十四番〔ニ〕

左　曾禰好忠

續古今夏　かりにくとうらみし人のたえにしを草はにつけて忍ふ頃哉

右　前中納言匡房

後拾遺春上　高砂の尾上の櫻咲にけりとやまの霞たゝすもあらなん

百二十五番

左

拾遺秋　神なみのみむろの山をけふみれは下草かけて色付にけり

右

拾遺冬　はしたかの白ふに色やまかふらんとかへる山に霰ふるなり

百二十六番

左

新古今秋下　入日さすさほの山へのはゝそはら曇らぬ雨とこのはふりつゝ

右

新古今冬　風寒みいせの濱おき分行は衣かりかね波になくなり

百二十七番

左　源道濟

金葉冬　ぬれ／＼もなをかりゆかんはし鷹のうはけの雪を打拂ひつゝ

右　右近中將公衡

新古今冬　狩くらしかたのゝましはおりしきて淀の河せの月をみるかな

百二十八番

左

詞花雜上　思ひかねわかれしのへをきてみれはあさちか原に秋風そふく

右

千載戀一　ますかゝみ心もうつる物ならはさりとも今はあはれとやみん

百二十九番

左

後拾遺戀一　身をすてゝ深き淵にもいりぬへしそこの心のしらまほしさに

右

新勅撰戀五　思ひかね我のみかよふ夢ちにもあひみて歸るあかつきそなき

百三十番

左　藤原長能

新古今秋上　日くらしの鳴く夕暮そかりけるいつも盡せぬ思ひなれとも

右　大藏卿有家

新古今春上　朝日かけにほへる山の櫻花つれなくきえぬ雪かとそ見る

百三十一番

左

詞花冬　あられ降かたのゝみのゝかり衣ぬれぬ宿かす人しなけれは

右

新古今雜中　久かたのあまつをとめか夏衣雲ゐにさらす布引の瀧

百三十二番

左

後拾遺戀四　我心かはらむ物かかはらやのしたゝくけふりしたむせひつゝ

右

（新古今戀四）物おもはてたゝおほかたの露にたにぬるればぬるゝ秋の袂を

百三十三番

左　藤原實方朝臣

（新千載雜上）暮來ぬこころもうき世の花さかりおりわすれてもおりてける哉

右　待賢門院堀河

（千載春上）雪ふかきいはのかけみちあとたゆる芳野の里も春はきにけり

百三十四番

左

（後拾遺戀二）浦風になひきにけりな里のあまのたくものけふり心よはくも（さロイ）

右

（千載戀一）あらいその岩にくたくる波なれやつれなき人にかくる心は

百三十五番

左

（詞花戀上）いかてかは思ひありともしらすへき室のやしまの煙ならては

右

（千載戀五）うき人を忍ふへしとは思ひきや我心さへなとかはるらん

百三十六番

左　藤原道信朝臣

（新古今秋下）秋はつるさよふけかたの月みれは袖も殘らす露そおきける

右　大僧正行尊

（新古今雜上）春くれは袖の氷りもとけにけりもりくる月の宿るはかりに

百三十七番

左

（拾遺哀傷）かきりあれはけふぬきすてつふち衣はてなきものは涙也けり

右

（金葉雜上）もろともにあはれと思へ山櫻花よりほかに知人もなし

百三十八番

左

（後拾遺戀二）明ぬれはくるゝ物とはしりなからなを恨めしき朝ほらけかな

右

（金葉雜上）草の庵をなに露けしと思ひけんもらぬいはやも袖はぬれけり

百三十九番

左　中務卿具平親王

（千載秋下）命あらは又もあひみむ春なれとしのひかたくて暮すけふ哉

右　愚老

（新古今春下）櫻さく遠山鳥のしたりおのなか〳〵し日もあかぬ色哉

百四十番

左

（新古今秋上）夕暮はおき吹風の音まさるいまはたいかにね覺せられん

右

（新古今秋上）秋の露やたもとにいたくむすふらん長きよあかすやとる月哉

百四十一番

左

續拾遺戀上
よにふれは物思ふとしもなけれ共月に幾たひなかめしつらん

右

新古今戀四
袖の露もあらぬ色にそきえかへる移(りイ)れはかはる眺めせ(なけきイ)しまに

百四十二番

左　　　　　　馬内侍

千載冬
ねさめしてたれかきくらむ此比の木葉にかゝるよはの時雨を

右　　　　　　權中納言師時

新勅撰春下
立かへり又やとはまし山風に花ちる里の人のこゝろを

百四十三番

左

後拾遺戀一
いかなれは知らぬにおふるうきぬなは苦しや心人しれすのみ

右

千載戀四
立歸る人をもなにか恨みましこひしさをたにとゝめさりせは

百四十四番

左

新古今戀二
あふことはこれやかきりの旅ならむ草の枕も霜かれにけり

右

新古今戀一
追風にやへの鹽路をこく舟の(ゆくイ)ほのかにたにもあひみてしかな

百四十五番

左　　　　　　赤染衛門

詞花冬上
神な月有明の月の(そらイ)時雨るゝをまた我ならぬ人やみるらん

右　　　　　　殷富門院大輔

新古今春下
花もまたわかれん春を思ひ出よ咲ちるたひの心盡しを

百四十六番

左

後拾遺戀三
やすらはてねなまし物をさよふけてかたふく迄の月をみし哉

右

新勅撰雜一
今はとてみさらむ秋の末(そらイ)までも思へはかなしよはの月かけ

百四十七番

左

新古今雜上
五月雨の空たにすめる月影に涙の雨(はイ)のはるゝまもなし

右

續古今哀傷
きえぬへき露(うきイ)の我身の置ところいつれのゝへの草は成らん

百四十八番

左　　　　　　泉式部

拾遺哀傷
くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかに照せ山のはの月

右　　　　　　宮内卿

新千載秋上
色かへぬ竹のはしろく月さえてつもらぬ雪をはらふ秋風

百四十九番

左

もろともに苔の下にはくちすして埋もれぬる〔名をイ〕をみるそ悲しき

右

露をまつまかきの菊の宵のまに置まよふ色や〔にイ〕山のはの月

百五十番

左

物思へはさはの螢も我身よりあくかれ出る玉かとそみる

右

からにしき秋のかたみそ龍田山ちりあへぬ枝にあらしふく也

右時代不同歌合以百花庵宗固本挍合

新時代不同歌合上

作者

左自萬葉集至金葉集
右自詞花集至續古今集

左	右
大納言旅人	大納言忠良
天智天皇	光明峯寺攝政左大臣道家公
坂上郎女	八條院高倉
惟喬親王	惟明親王
文屋康秀	正三位知家
大伴黒主	鴨長明
兼覽王	鎌倉右大臣実朝公
光孝天皇	土御門院
在原棟梁	民部卿成範
源宗于朝臣	從三位賴政
三條右大臣定方公	西園寺太政大臣公經公
藤原興風	藤原信實朝臣
天曆御門	順德院
太宰大貳高遠	大納言通具
壬生忠見	藤原隆祐朝臣家隆息
源公忠朝臣	藤原光俊朝臣
祭主輔親	法橋顯昭
西宮左大臣高明公	雅成親王
本院侍從	新院弁内侍

小大君　大納言隆房
藤原高光　俊成卿女
藤原義孝　中納言典侍
大納言公任　前内大臣家
安法法師　源師光
清少納言　大納言基良

一番

左　大納言旅人

橘の花散さとの時鳥かたら〔こ歟〕ひしつゝなかぬ日もなし
こゝにありてつくしやいつこ白雲の棚ひく山の西にあるらし

右　大納言忠良

いさやこらかしゐの方に白妙の袖さへぬれて朝なつみてん
あふち咲外面の木かけ露おちて五月雨はるゝ風わたる也
夕つくひさすや庵の柴の戸にさひしくも有か日くらしのこゑ
たのめ置しあさちか露に秋かけてこのはふりしく庭の通路

二番

左　天智天皇

秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我衣手はつゆにぬれつゝ
梓弓ひきのゝつゝらすゑつゐにわか思ふ人にことのしけゝむ
朝倉や木のまろとのに我をれはなのりをしつゝ行はたかこそ

右　光明峯寺攝政左大臣

音羽川瀧のみなかみ雪きえてあさひにいつる水のしら浪
いせ嶋やわかの松はら見わたせはゆふしほかけて秋風そふく
いかにせん袖より外にもる山の下草かけて色に出なは

三番

左　坂上郎女

こもりくの初瀬の山はいろつきぬ時雨の雨はふりにけらしも
しかのあまの釣にともせる漁火のほのかに人をみるよしも哉
鹽みては入ぬる磯の草なれや見らく少なくこふらくのおほき

右　八條院高倉

神なひのみむろの梢いかならんなへての山も時雨ふるころ
曇れかしなかむるからにかなしきは月に覺ゆる人のおもかけ
いかゝふく身に入いろのかはる哉たのむる暮のまつ風のこゑ

四番

左　惟喬親王

櫻花ちらはちらなんちらすとて故郷人のきてもみなくに
夢かともなにか思はん浮世をはそむかさりけん程そくやしき
白雲のたえすたなひく峯にたにすめはすみぬるよに社有けれ

右　惟明親王

鶯のなみたのつらゝうちとけてふる巣なからや春をしるらん
み山邊のまつの梢を渡るなりあらしにやとる小男鹿のこゑ
さのみやは人の心にまかすへきわするゝ草のたねをしらはや

五番

左　文屋康秀

春の日の光りにあたる我なれとかしらの雪となるそわひしき
吹からに秋の草木のしほるれはむへ山風をあらしといふらん
草深きかすみの谷にかけかくし照日の暮しけふにやはあらぬ

右　正三位知家

神無月しくるゝ頃といふことはまなく木の葉のふれは成けり
むさしのは行末ちかくなりにけり今夜そみつる山のはの月
あふ坂のゆふつけ鳥も我ことやこえ行人のあとに鳴らん

六番　左　大伴黒主

春雨のふるはなみたかさくら花散をおしまぬ人しなけれは

思ひ出てこひしきときは初鴈の鳴てわたると人は知らすや

鏡山いさ立よりてみてゆかん年へぬる身は老やしぬると

右　鴨長明

なかむれは千々に物思ふ月に又我身ひとつの峯の松風

袖にしも月やとれとは契りをかす涙はしるやうつの山こえ

まくらとていつれの草にちきるらん行をかきりの野への夕暮

七番　左　兼覧王

立田姫たむくる神のあれはこそ秋の木葉のぬさとちるらめ

雨やまぬ軒の玉みつかすしらすこひしき事のまさる頃かな

あし引の山したしけくはふ葛のうらみてこふる我としらすや

右　鎌倉右大臣

和田の原八重のしほちにとふ雁のつはさの波に秋風そふく

秋はいぬ風にこのはのちりはてゝ山さひしかる冬はきにけり

夕されはしほかせさむし波間よりみゆる小嶋に雪は降つゝ

八番　左　光孝天皇

君かため春の野にいてゝわかなつむ我ころもてに雪は降つゝ

逢すしてふる頃ほひのあまたあれははるけき空に詠をそする

君かせぬわか手枕は草なれや涙のつゆのよな／＼そをく

右　土御門院

伊せの海の天の原なる朝霞そらに塩やくけふりとそみる

みわたせは松もまはらに成にけり遠山さくら咲にけらしも

憂世にはかゝれとてこそ生れけめことはりしらぬ我なみた哉

九番　左　在原棟梁

春たてと花も匂はぬ山里はものうかるねにうくひすそなく

秋のゝ草の袂か花すゝきほにいてゝまねく袖とみゆらん

わか戀の數にしとらは白妙のはまの眞砂はつきぬへら也

右　民部卿成範

古郷の花にむかしの事とはゝいくよの人のこゝろしらまし

あらし吹はゝその森をけさみれは木すゑより社冬はきにけれ

鳥へ山おもひやるこそ悲しけれひとりや苔の下にくつらん

十番　左　源宗千朝臣

常磐なる松のみとりも春くれは今ひとしほの色まさりけり

山里は冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬと思へは

東路のさやの中山なか／＼にあひみて後そ戀しかりける

右　従三位頼政

太山木のその梢とも見えさりし櫻は花にあらはれにけり

住吉の松のこまよりなかむれは月落かゝるあはちしまやま

人はいさあかぬ夜ことにとゝめつる我心こそわれを待らめ

十一番　左　三條右大臣

秋ならてあふ事かたき女郎花あまのかはらにおひぬ物ゆへ

名にしおはゝ逢坂山のさねかつら人に知られてくるよしも哉

春ことに花はちるとも咲ぬへしまたあひかたき人のよそうき

右　西園寺太政大臣

高せさす六田の淀の柳はらみとりもふかく霞むはる哉

かつらきや花吹わたす春風にとたえもみえぬ粂の岩はし
なにと又まくらのちりを拂ふらん習ひなき身のねやの秋風

十二番

左　藤原興風

いたつらにすくる月日はおもほえて花みて暮す春そすくなき
ちきりけん心そつらき七夕のとしに一たひあふはあふかは
たれをかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

右　藤原信實朝臣

くもれとは思はぬ物を秋の夜の月に涙のなとこほるらん
下おれの音のみ杉のしるしにて雪のそこなる三輪の山本
里遠みしほやく浦はみえわかてけふりにかゝるおきつ白なみ

十三番

左　天暦御門

今宵さへよそにやきかむわかための天の河原は渡るせもなし
ふるほともなくてきえぬる白雪は人によそへて悲しかりけり
ねられねは夢とも見えす春の夜を明しかねつる身社つらけれ

右　順德院

秋風にまたこそとはめ津の國の生田のもりの春の明ほの
いかはかり麓の里の時雨らん遠山うすくかゝるむら雲
百敷やふるき軒はの忍ふにも猶あまりあるむかし也けり

十四番

左　太宰大貳高遠

うちなひき春はきにけり青柳のかけふむ道に人のやすろふ
しら雲のかゝれる山と見えつるはこほれて花の匂ふなりけり
浦風にもの思ふとしはなけれとも波のよる社ねられさりけれ

右　大納言通具

あはれ又いかに忍はん袖の露野はらのかせに秋はきにけり
霜こほる袖にも影はやとりけり露よりなれし有明の月
我戀はあふをかきりのたのみたに行衛もしらぬ空のうき雲

十五番

左　壬生忠見

やかすとも草はもえなん春日のをたゝ春の日に任せたら南
さよふけてね覺さりせは時鳥人つてにこそ聞へかりけれ
戀すてふ我名はまたき立にけり人しれすこそ思ひそめしか

右　藤原隆祐朝臣

かきりあれはかすまぬ浦の波間より心ときゆる蜑の釣舟
かつらきやたかまの雲をにほひにてまかひし花の色そ移ろふ
けふは猶宮古も近しあふ坂の關のあなたに知人もかな

十六番

左　源公忠朝臣

とのもりのとものみやつこ心あらは此春はかり朝きよめすな
行やらて山路くらしつ時鳥いま一聲のきかまほしさに
萬代も猶こそあかね君かため思ふこゝろのかきりなけれは

右　藤原光俊朝臣

時しらぬ身ともおもはし秋くれはたか袖よりも露けかりけり
月をみは同し空ともなくさまてなと古郷の戀しかるらん
いかにせん死なはともにと思ふ身におなし限りの命ならすは

十七番

左　祭主輔親

いつれをかわきておらまし山櫻こゝろうつらぬ花しなけれは
くも間より星あひのかけを見渡せはしつ心なき天の川なみ
程もなくこふる心はなになれやしらてたに社年はへにしか

右　法橋顕昭

水草の岡のくす葉も色つきてけさうらかなし秋のはつ風

人しれぬなみたの川の水上やいはての山のたにの下みつ

たらちねやとまりて我を歎かましかはるに替る命也せは

十八番

左　西宮左大臣

うち忍ひなくとせしまに君こふる涙は色に出にける哉

目に添て憂事のみも増る哉くれては続て明けすもあらなん

さりともと思ふ心にひかされて今まて世にもふる我身かな

右　雅成親王

秋の田のをしね色つく今よりやねられぬ庵の夜寒成らん

月のいる槙はたかくあらはれて川霧ふかき遠のやまもと

うけ難き身のむくひさへ忘られてなを先のよそ悲しかりける

十九番

左　本院侍従

身をうしと思ひしりぬる物ならはつらき心もなにかうらみむ

しる人や空になからむおもひいる心のそこのこゝろならねと

にはたつみ行方しらぬ物思ひにはかなきあはのきえぬへき哉

右　新院弁内侍

雲井より続ねさりせはほとゝきす初音も山のかひやなからむ

をく露は草葉のうへとおもひしに袖さへぬれて秋はきにけり

あちきなくなとしたもえに成ぬらんふしの煙も空にこそたて

二十番

左　小大君

ちるをこそあはれとみしか梅花はなや今年は人をしのはん

岩はしのよるの契りも絶ぬへしあくるわひしきかつらきの神

あるはなくなきは数そふ世間に哀れいつまてあらむとすらん

右　大納言隆房

たまさかに秋の一夜を待えてもあくるほとなき星合の空

うきなからみし面影のかはらぬやさすかになれし形見成らん

こひしなはうかれん玉よしはしたに我思ふ人の妻にとゝまれ

廿一番

左　藤原高光

かくはかりへかたくみゆる世の中に羨ましくもすめる月かな

神無月風にこのはのちる時はそこはかとなく物そかなしき

年をへて思ふ心のしるへにそ空もたよりの風はふきける

右　俊成卿女

ことはりの秋にはあらぬなみた哉月の桂もかはるひかりに

下もえに思ひきえなんけふりたに跡なき雲のはてそ悲しき

夢かとよ見し俤もちきりしも忘れすなから現ならねは

廿二番

左　藤原義孝

つらからは人にかたらん敷たへの枕かはして一夜ねにきと

君かためおしからさりし命さへなかくもかなと思ひけるかな

いつまての命もしらぬ世中につらき歎きのやますも有哉

右　中納言典侍

冬さむみ忍ふの山の谷みつはをとにはたてすさそこほるらん

ちかひてし命にかへて忘るゝはうき我ゆへに身をや捨らむ

身をさらぬうさを忘れてよの中に知られぬ山となに尋ぬらん

廿三番

左　大納言公任

春きてそ人も問ける山里は花こそ宿のあるしなりけれ

朝またきあらしの山のさむけれは紅葉のにしききぬ人そなき
霜をかさねてたにきゆる冬のよに鴨の上毛を思ひこそやれ

右　前内大臣

なかめきて年にそへたる哀さも身にしられぬる春のよの月
松かけの入らみかけてしらすけのみとり吹こす秋の鹽風
草も木も時にあひける春雨にもれたる袖はなみた也けり

廿四番

左　安法法師

夏衣またひとへなるうたゝねに心してふけ秋のはつ風
世をそむく山のみなみの松かせに苔の衣や夜さむなるらん
天くたるあら人神の相生を思へはひさし住よしの松

右　源師光

山のはも空もひとつにみゆるかなこれやかすめる春の曙
わひ人の宿にはうへし櫻花ちれはなけきの數まさりけり
うきなから猶おしまるゝ命かな後の世とても頼みなけれは

廿五番

左　清少納言

忘らるゝ身はことはりとしりなから思ひあへぬは涙なりけり
よしさらはつらさは我に習ひけり頼めてこぬは誰かをしへし
夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に逢坂の關はゆるさし

右　大納言基良

春雨のあまねき御代のめくみとは思ふ物からぬるゝ袖かな
たらちねの心のやみをしる物はこをおもふ時のなみた也けり
ますかゝみしらぬ翁はみなれにき今更たとる面かけそうき

新時代不同歌合下

作者

左

一條院
弁乳母
中納言定頼
上東門院
三條院
大江嘉言
藤原惟成
源頼綱朝臣
堀川右大臣頼宗公
道命法師
伊勢大輔
津守國基
周防内侍
大貳三位
橘俊綱朝臣
小弁
中納言通俊
康資王母
權大納言公實
瞻西上人
輔仁親王

右

一院
源具親朝臣
藻璧門院少將
式乾門院御匣
守覺法親王
大僧正覺忠
從三位行能
道因法師
常磐井太政大臣實氏公
土御門院小宰相
右京大夫行家
寂超法師
平政村朝臣
土御門内大臣通親公
參議教長
源家長
民部卿爲家
後久我太政大臣通光公
衣笠前内大臣家良公
僧正行意
中務卿親王

大納言成通　安嘉門院高倉
権僧正永縁　道助法親王
神祇伯顕仲　権中納言長方
上西門院兵衛　大納言爲氏

廿六番

左　一條院

くらきよの雨にたくひて散花を春のみそれと思ひつるかな

秋風の露のやとりに君をゝきてちりを出ぬる事そ悲しき

右　一院

野へまてに心ひとつは通へともわかみゆきとはしらすや有覽

廿七番

左　弁乳母

大かたの春のけしきにさそはれてしるへもまたぬ鶯のこゑ

わすれしの言の葉なくは中々にとはぬ月日は恨さらまし

いはし水こかくれたりしいにしへを思ひいつれはすむ心哉

右　源具親朝臣

時鳥みやまいつなる初こゑを何れの里のたれか聞らん

戀しさはつらさにかへてやみにしをなにゝ殘りて物は悲しき

こひすとも涙の色のなかりせはしはしは人にしられさらまし

難波かたかすまぬ浪も霞けりうつるも曇るおほろ月よに

はれ曇るかけを都に先たてゝしくるとつくる山のはの月

今はとて思ひたゆへき眞木の戸をさゝぬや待に習ひなるらん

廿八番

左　中納言定頼

朝ぼらけうちの川霧たえ〳〵にあらはれ渡るせゝのあしろ木

今よりは又さく花もなき物をいたくなをきそきくの上の露

鯛津風よはに吹くらしなにはかた曉かけて浪そこすなる

右　待賢門院少將

たえ〳〵にたな引雲のあらはれてまかひもはてぬ山櫻哉

をのか音につらき別のありとたに思ひもしらて鳥や鳴覽

待なれし夕のそらもかはれたゝ人の心のあらすなるよに

廿九番

左　上東門院

別ちをけにいかはかり歎らんきく人さへに袖はぬれけり

あふことも今はなきねの夢ならていつかは君を又はみるへき

思ひきやはかなくきえし袖の上の露を形見にかけむ物とは

右　式乾門院御匣

同しよにたのむ契のむなしくは身をかへてたに逢事もかな

すきにける昔も今のつらさにてうき思ひてになるゝ袖哉

過わひておもひ入なん奥山に猶うきときの行かたもかな

三十番

左　三條院

あし引の山のあなたに住人はまたてや秋の月をみる覽

心にもあらてこの世にながらへは戀しかるへき夜半の月哉

古の近きまもりをこふるまにこれは忍ふるしるし也けり

右　守覺法親王

たちぬるゝ山の雫も音たえて眞木の下葉にたるひしにけり

つれなさに今は思ひも絶なまし此よはかりの契り也せは

長らへて世にすむかひはなけれともうきにかへたる命也けり

三十一番

左　大江嘉言

秋のよの月支ちかれて思ひやる心いくたひ山をこゆらん
忍ひつゝやみなむよりは思ふ事ありけりとたに人に知らせむ
君か代はちよに一たひゐるちりの白雲かゝる山となるまて

右　大僧正覺忠

ときはなる青葉の山も秋くれは色こそかへね淋しかりけり
神なつき木々のこの葉はちり果て庭にそ風の音は聞ゆる
今夜我をはすて山の麓にて月まちわふと誰かしるへき

三十二番

左　藤原惟成

きのふかも霰ふりしかしからきの外山の霞はるめきにけり
しはしまてまたよはふかし長月の有明の月は人まとふ也
風ふけはむろのやしまの夕けふり心のそらにたちにける哉

右　從三位行能

うつろへは人のこゝろそ時もなき花のかたみの峯のしら雲
なからへてあるたに身にはつれなきに恨むる迄は人に聞れし
かきなかす言の葉をたに沈むなよ身こそかくても山川のみつ

三十三番

左　源頼嗣朝臣

夏山のならの葉そよく夕暮はことしも秋の心ちこそすれ
夕日さすそのゝ薄かたよりにまねくや秋を送るなるらむ
古の人さへけさはつらきかなあくれはなとか歸りそめけん

右　道因法師

晴くもる時雨はさためなき物をふりはてぬるは我身なりけり
鴫のゐるいり江のあしは霜かれてをのれのみ社青は也けれ
いつまても身のうき事はかはらねと昔は老を歎きやはせし

三十四番

左　堀川右大臣

櫻花あかぬあまりに思ふかなちらすは人やおしまさらまし
人よりも心のかきりなかめつる月はたれともわかしものゆえ
あふまてとせめて命のおしけれは戀こそ人のいのちなりけれ

右　常磐井太政大臣

分行はそれともみえすあさほらけ遠きそ春の霞也ける
湊川あき行水のいろそこきのこるやまなく時雨ふるらし
しりなから厭はぬ世こそ悲しけれわか僞つらき身を思ふとて

三十五番

左　道命法師

山里のかひこそなけれほとゝきす都の人もかくや待らむ
しほたるゝ我身のかたはつれなくてことうらに社煙立けれ
都にてなかめし月のもろともに旅の空にも出にける哉

右　土御門院小宰相

里わかすなけや五月の時鳥しのひし頃はうらみやはせし
はかなくて見えつる夢の俤をいかにねしよと又やしのはん
長き夜のね覺におもふ程はかりうき世をいとふ心なりせは

三十六番

左　伊勢大輔

古のならのみやこの八重櫻けふ九重ににほひぬるかな
見るめこそあふみは海のかたからめ吹たにかよへ志賀の浦風
とはれとも同し都はたのまれき哀雲井にへたてつるかな

右　右京大夫行家

あすかには衣うつなりたをやめの袖の秋かせ夜寒なるらし
なか月のつゝきの原の秋くさにことしはあまり置るつゆかな
よにもらは我心をやうたかはんまたしらせたる人もなけれは

三十七番

左　津守国基

うす墨にかく玉章と見ゆるかなかすめる空に帰るかり金

あるしなきまきすさひに残るさくら花哀むかしの春やこひしき

鴨のゐる野沢の小田を打かへし種まきてけりしめはへてみゆ

右　寂超法師

古郷の宿もる月にことゝはん我をはしるやむかしすみきと

有明の月よりほかに誰をかは山路の友とちきりをくへき

物はつゝ袖にはいかゝ包むへきむなしとゝける御法ならては

三十八番

左　周防内侍

春のよの夢はかりなる手枕にかひなくたゝむ名こそおしけれ

契りしにあらぬつらさもあふことのなきにはえこそ恨さりけれ

住わひて我さへ軒のしのふ草忍ふかた／＼しけき宿かな

右　平政村朝臣

吉見野一本のしたふかき夕露もなみたにまさる秋やなからん

月をこそ山のあなたもおしむなれ我といそかぬ草のとかな

ならはねとあふ夜も稀に涙かならきにたれに一猶の名積に [illegible]

三十九番

左　大貳三位

遙なるもろこしまても行ものは秋のねさめの心なりけり

うたかひし時はかりは有なから契りし中のたえぬへき哉

ありま山猪名のさゝ原風ふけはいてそよ人を忘れやはする

右　土御門内大臣

散つもる苔の下にもさくら花おしむ心や猶のこるらむ

わかみしは昔語のうつゝにてその [illegible] を夢になすとや

朝ことの汀の氷ふみわけて君につかふる道そかしこき

四十番

左　橘俊綱朝臣

あふさかの関をや春のこえつらん音羽の山の今朝はかすめる

久かたの月すみわたる木からしにしくるゝ雨は木の葉也けり

みやこ人暮るれはいそく今よりは伏見の里の名をは頼まし

右　参議教長

わかなつむ袖こそみゆれ春日野の飛火の野への雪のむらきえ

よしさらは君に心を尽してんまたもこひしき人もこそあれ

三日月の又あり明になりぬるや浮世にめくるためし成らむ

四十一番

左　小弁

なきぬとも人にかたらし郭公たゝ忍ひねは我にきかせよ

うたゝねと思ひつるまに冬の夜の鶏鳴まて更にける哉

思ひ知人もこそあれあちきなくつれなき戀に身をやかへてん

右　藤原家長

はつ時雨ふりさけみれはあかねさす三笠の山は紅葉しにけり

けふは又しらぬ野原にゆきくれぬいつれの山か月は出らむ

藻しほ草かくともつきし君か代の数によみをくわかのうら波

四十二番

左　中納言通俊

もしほやく須磨のうら人打たえて厭ひやすらん五月雨のころ

とへかしなかたしく藤の衣手になみたのかゝる秋のねさめを

右　民部卿為家

情あらはいかはかりかは思はましつらきにたにもしのふ心を

天川遠きわたりになりにけりかたのゝみのゝ五月雨のころ

冬きては時雨る雲のたえまたに四方の木のはの降ぬ日そなき

をのつからあふを限りの命とて年月ふるもなみた也けり

四十三番

左　康資王母

紅のうす花さくらにほはすはみな白雲とみてやすきまし

東路のみちの冬草茂りあひて跡たにみえぬ忘水かな

榊はや立まふ袖のをひ風になひかぬ神もあらしとそ思ふ

右　後久我太政大臣

三嶋江や霜もまたひぬ芦の葉につのくむ程の春風そふく

雲のゐる遠山鳥の花かつら霞をかけて吹あらしかな

いくめくり空行月もへたてきぬ契りし中はよそのうき雲

四十四番

左　權大納言公實

槇戸あけて春の梢の雪みれは初花ともやいふへかるらん

とことはに吹夕暮の風なれと秋たつ日こそ涼しかりけれ

嶺をはうちの川きり立こめて雲井にみゆる朝日山かな

右　衣笠前内大臣

あさほらけ濱名の橋はとたえして霞をわたる春の旅人

夕されは露吹おとす秋かせに葉末かたよるをのゝしの原

うかりけるたかあふ事のならひより夕つけ鳥の音に別けん

四十五番

左　瞻西上人

ちる花のなかるゝ水につもらぬもそれさへ雪の心ちこそすれ

いほりさすならの木陰にもる月のくもると見れは時雨ふる也

法の爲になふ薪にことよせてやかて浮よをこりそはてぬる

右　僧正行意

山城の常磐の松の夕時雨そめぬみとりに秋そ暮ぬる

ころも手に夕風さむしさゝ原やしくるゝ野へに宿はなくして

夜をこむるすゝの篠屋の朝戸出に山影くらき峯の松風

四十六番

左　輔仁親王

五月雨に入江のはしのうきぬれはおろす筏の心ちこそすれ

つなかれとなかれもやらす高瀬舟むすふ氷のとけぬかきりは

いかにせん暮行としをしるへにて身を尋ねつゝ老はきにけり

右　中務卿親王

おほとものみつの濱松霞む也はやひのもとに春やきにけり

焼しほの煙も見えす月すみて難波のみ津に秋風そふく

晴かたき身の思ひこそうかりけれかすめる月も秋は待らん

四十七番

左　大納言成道

冬ふかくなりにけらしな難波江の青葉ましらぬ芦の村立

人しれすくれ行としを惜むまに春といふ名の立ぬへき哉

悲しきはいひつくすへきかたもなし我心にて人をしらなむ

右　安嘉門院高倉

ひとりのみかたしく袖の手枕によかれぬものは涙なりけり

夢にたにかよはぬ中のしのふ山こゝろのおくを誰にとはまし

とはるゝにつけてそ人はつらかりし思ひ絶ては恨みやはする

四十八番

左　權僧正永縁

聞たひにめつらしけれは時鳥いつも初音の心ちこそすれ

いかなれは秋はひかりの増るらむ同しみかさの山のはの月

まつ人の大空わたる月ならはぬるゝ袂に影は見てまし

右　道助法親王

白露の玉江のあしのよひ〳〵に秋風ちかく行螢かな

荻の葉に風の音せぬ秋もあらは涙の外に月はみてまし

とゝめはやなかれてはやき年浪のよとまぬ水は關もなし

四十九番

左　神祇伯顯仲

夏の夜の庭にふりしく白雪は月の入こそきゆる也けれ

五月雨に水まさるらし澤田川まきのつき橋うきぬ計に

物思ふといはぬはかりは忍ふともいかにかせまし袖の雫を

右　權中納言長方

あすか川せゝになみよる紅やかつらき山の木からしの風

これも又むくひあるらん先の世に我ゆへ君も物や思ひし

紀の國や由良の湊に拾ふてふたまさかにたにあひみてし哉

五十番

左　上西門院兵衛

かへりては身にそふ物としりなから暮行年を何したふ覽

なにせんにそらたのめとて恨けむ思ひたえたる暮も有けり

限りある道こそあらめこのよにて別るへしとは思はさらまし

右　大納言爲氏

乙女子かかさしの櫻さきにけり袖ふる山にかゝるしら雲

いはて思ふ心ひとつの頼みこそ知られぬ中の命なりけれ

さりともと我あらましを頼まれて行末しらぬ身こそおしけれ

新時代不同歌合後。九條内大臣基家撰之云々。

右新時代不同歌合以百花庵宗固本挍合

和歌部七十一　歌合三十七

定家家隆兩卿撰歌合

一番

左　　　　　　　　　　　　権中納言藤原朝臣定家

さとの海士のしほやき衣たち別れ馴れしもしらぬ春の雁かね

右　　　　　　　　　　　　従二位藤原朝臣家隆

春もいまた色にはいてすむさし野やわかむらさきの雪の下草

二番

櫻かり宿の下にけふくれぬ一夜やとかせはるのやまもり

このほとはおられぬ雲そかゝるらん尋ねもゆかし嶺の櫻木

三番

花の色に一はるまけよ帰る雁ことしこしちのそらたのめして

櫻はなさきぬる時はかつらきの山のすかたにかゝるしら雲

四番

名もしらし嶺のあらしも雪とふる山さくら戸の曙の空

けさみれは梢の花は散にけり風のしたなる庭のしら雪

五番

名取川春の日數はあらはれて花にそしつむせゝの埋木

高砂の山にも花やみつしほのあらはにみゆる松のはもなし

六番

ふみしたく淺香の沼のした〔なつイ〕草にかつみたれ行忍ふもちすり

あしかもの跡も定めぬみつのえに猶すみかたき春や行みむ

七番

なきぬ〔なイ〕めり夕つけ鳥のしたり尾のをのれにも似ぬよはの短さ

秋はいまたとほ山鳥のしたり尾のあまりておしき有明の月

八番

芦のやのかりねの床のふしのまもみしかく明る夏のよな〳〵

みしまえのにほのうきすも亂れ芦の末葉にかゝる五月雨の比

九番

打なひくしけみかしたのさゆり葉のしられぬ程に通ふ秋かせ

むは玉の闇のうつゝのうかひ舟つきのさかりや夢にみるへき

十番

秋とたに吹あへぬかせに色かはるいく田の森の露の下草

軒ちかき山下荻の聲たてゝ夕日かくれに秋かせそふく

十一番

須磨の海士のなれにし袖もしほたれて關吹こゆる秋の浦かせ

秋かせに山のは渡る村雨をことそともなく出る月かけ

十二番

なとてけふ小野の浅茅にをく露の草葉に余る秋のゆふかせ〔くれイ〕
其もはましらく鹿行藪かえに村雨かゝる秋の夕くれ

十三番

浅茅生の小野の篠原打なひき遠方人に秋かせそ吹
露はらふ袖吹かへす秋かせにうらさへ荻の色そ移ふ

十四番

うつりあへぬ色〔花イ〕の千種にみたれつゝ風の上なる宮城の原の露
又こはむまたて秋やらん白露の玉をきしける秋はきの花

十五番

詠つゝおもひしものを〔ことのイ〕かす〳〵にむなしき空〔のイ〕に秋夜月
くれぬまに山のは遠く成てけり空より出る秋のよの月

十六番

昔たに猶故郷の秋の月しらすひかりのいくめくりとも
有明の月のかつらのもみち葉を嶺に残して鹿鳴也

十七番

川かせによわたる月の寒けれはやそらゆく人も衣うつ也
ふけあらし雲の衣のきぬ〳〵は月におしまぬ有明の空

十八番

伊駒山あらしも秋の色に吹手そめのいとのよるそ悲しき
朝ひさす高ねの白雪雲晴てたゝもおよはぬ富士の川きり

十九番

高砂の外にも秋はあるものを我夕くれと鹿はなく也
天川あきの一夜の契たにかたのに鹿のねをや鳴らん

廿番

夕つくひむかひの岡の薄紅葉またきさひしき秋の色哉
さをしかのよはの草ふしあけぬれと帰る山なき武蔵野の原

廿一番

小倉山しくるゝ比のあさな〳〵昨日は薄きよものもみち葉
秋風はさてもや物のかなしきと荻の葉ならぬ夕暮も哉

廿二番

秋はいぬ夕日かくれの嶺の松よもの木のはの後もあはれみん
萬代より小倉の山のもみち葉はしたてる錦や染はしめ劔

廿三番

花すゝき草の袂もくちはてぬ馴て別し秋をこふとて
草のはにくらせる宵のきり〳〵す秋風ふきぬせ〔ねイ〕むかたやなき

廿四番

浦かせやとはに浪こす濱松のねにあらはれて啼千鳥哉
よや寒き里は雲井のこからしに嶺さへうすく衣うつ也

廿五番

志賀の浦や氷も幾重いるたつの霜のさ〔うはけイ〕はまに雪そ降つゝ
あしへ行鴨のはかひの夕霜をよそ〔にイ〕にもなかぬ小夜千鳥哉

廿六番

雪おれの竹の下道跡もなしあれにし後の深草の里
かへすとも雲の衣はうらもあらし一夜夢かせ嶺のこからし

廿七番

小初瀬や嶺のときは木吹しほりあらしに曇る雪のやまもと
さえのほるこしのしらねは冬の月雪のこほりも麓成けり

廿八番

高砂の尾上の鹿のなかぬ日も積りはてぬる松のしら雪
白妙のたなひく雲を吹分て〔まぜてイ〕雪にあまきる嶺の松かせ

廿九番

しられしな千入の木のは焦るともしくるゝ雲〔のイ〕に色しみえねは

霜かゝる人の心のあさは野にたつみはこすけねさへくちめや

卅番

逢みての後の心をまつしれはつれなしと社〔たにイ〕えこそうらみね

なき名のみ夕つけ鳥の相坂にすてられてのみ〔たに玉二集〕ねをもなかはや

卅一番

露時雨した草かけてもる山に色かすならぬ袖をみせはや

なきにふも袖にはいかゝ宿すへき曇りならはぬ秋のよの月

卅二番

俤はをしへし宿に先立てこたへぬかせの松に吹こゑ

曇れけふ入相の鐘も程遠したのめてかへる春の曙

卅三番

よとともに吹上の濱の塩風になひく眞砂の〔もイ〕くたけてそ思ふ〔にイ〕

時過て小野の淺茅に立煙しりぬや今は思ひ有とも

卅四番

津の國の松のねたくやよる浪のよるとて歎く夢をたにみて

床は海まくらは山となりぬへし涙もちりも積るうらみに

卅五番

芦のやに螢やまかふ海士やたくおもひも戀もよるはもえつゝ

我戀はまた末遠しはし鴫のよるさへやすくいやはねられぬ

卅六番

白玉のをたえの橋の名もつらしくたけて落る袖の泪に

末をひゆすかのあら野にかる草のゆふてもたふくとけぬ昔哉

卅七番

忘れすはなれし袖もやこほるらむねぬよの床の霜のさむしろ

おもひ川影みし水の薄氷かさなるよはの月もうらめし

卅八番

こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくやもしほの身も焦れつゝ

山川の紅葉にましる水の淡の色にいてゝもぬるゝ袖かな

卅九番

誰もこのあはれみしかき玉のを〔にイ〕の亂れて物を思は〔すイ〕すも哉

千早振神のみむろのます鏡かけていくよのかけをみるらん

四十番

心をはつらき物とて別にしよはの俤なにしたふらむ

つくは山□〔山もあせねとイ〕もあけぬ吹かせに人の心のひまそつれなき

四十一番

よもすから月にうられ〔ぬれイ〕へてねを〔をイ〕そなく命にむかふ物思ふとて

何となく我ゆへ馴し袖の上はあさ「かりける」と月やみるらむ

四十二番

なく涙やしほの泪〔こゝろイ〕それなから馴すは何の色かしのはむ

人心何につなかむ色變るまさきのつなのよるもたまらす

四十三番

せめて思ふいま一度の逢事はわたらむ川や契りなるへき

床はあれぬいたくな吹そ秋のかせめにみぬ人を夢にたにみむ

四十四番

命たにあらは逢〔せイ〕よをまつら川かへらぬ浪もよとめとそおもふ

はきの葉に〔のイ〕末吹なひく秋風にたまらぬ露のくたけてそ思ふ

四十五番

やすらひに出ける方〔んイ〕も白鳥のとは山松のねにのみそなく

はかなしなみつの濱まつをのつから「見えこし夢も浪の通路」

四十六番

忘れかひそれも思ひのたね絶て人をみぬめのうらみてそぬる

おもひ川まれなる中になかる也これにも渡せかさゝきのはし

四十七番
世中を思ひのきはの忍ふ草いくよの宿とあれかはてけむ〔なんイ〕
谷川の朽木の橋の埋木も人にしられぬ道や絶なむ
四十八番
帰るよの夕つけ鳥に立別れうらなみ遠く出る舟人
興津浪よする礒へのうき枕遠さかるなり篇〔やイ〕のみつらむ
四十九番
わかの浦やなきたるあまの〔[illegible]〕澪標朽ねかひなき名たに残らて
春日山おとろの道も中絶てみをうちはしの秋の夕くれ
五十番
おもふ事むなしき夢の中絶にたゆともたゆなつらき玉の緒
おきなさひ人なとかめそこのうちに昔をこふる露の毛衣

此歌合者。於二後鳥羽院御遺所〔隠岐国〕一御閑居之間定給。

右定家宗隆両卿歌合也有不審無類本不能校合

〔以一本校合了〕

閑窓撰歌合　建長三年閏九月盡

左方　東河禪　撰
右方　西山隱侶撰

一番
左　藻壁門院少将
眞木の戸をあけて夜深き梅かゝに春のねさめをとふ人もかな
右　尚侍家中納言
霞む日もくれはとくとやまたれましとをちの里の昔なりせは
二番
左
今はとて風吹山のさくら花うしといひても春をみるかな
右
をのか身の翅にかける玉章をやらてもみはや春のかりかね
三番
左
おもひ川いかれる比の五月雨にせかても水の淵となるらん
右
咲ぬれはかならす花のおりにとも頼めぬ人のまたれける哉
四番
左
草の葉の露も我身の上なれは袖のみほさぬ秋の夕くれ
右

今こそは聲たてゝなけ子規忍ひあまるや夕くれの空
五番　左
露しけき庭の淺茅生我ならぬ思ひもありと虫の鳴らん
右
おりたちて鹿はなけとも澤水の淺き心をつまや賴まむ
六番　左
鳴むしのこゑの色にはあらねともうきはみにしむ秋の夕暮
右
さならてもなけかぬ時のあり顏に秋とやわきて物のかなしき
七番　左
とふ人もあらしと思ふを三輪の山いかにまちみむ秋の夜の月
右
かくはかり月を哀となかめすはいかに久しき秋のよならん
八番　左
山里は嶺のあらしの絶す吹音をともにて月をみるかな
右
物思ふ袖のみぬらす時雨哉よもの木の葉はなとかそむらん
九番　左
月宿るをしまのとまやとふ人にみせはやと社あまもいふらめ
右
哀にもめならふ色の草はみなかれての後に匂ふしらきく

十番　左
なかむるにぬるゝ袂をうらみても身のとかならぬ秋の夕暮
右
我ためとことさらに社わけすとも降つむ雪の上をたにとへ
十一番　左
跡おしむたかならはしの山ちとて積れる雪をとふ人のなき
右
誰もみに積りて年の暮行は人の上さへけふはかなしき
十二番　左
をのつからとひこん人を思ひやる道もかなしく積る雪かな
右
たのめしは今宵もいかになりぬらむ更ぬるものを山のはの月
十三番　左
過來つる何の名殘のおしさにかくれ行年を猶したふらん
右
たくひなき思ひの程もみえなましあさまの山の烟たゝすは
十四番　左
人しれぬ涙の色はかひもなしみせはやとたに思ひよはらは
右
おきて行人は待ける鳥の音をなとあやにくに我いとふらん
十五番

左

をのか音につらき別のありとたに思ひしらてや鳥のなくらん

右

寝さむなる哀有明の月影にいかにせむとかをき別るらん

十六番

左

あさき瀬やはしめなりけむ飛鳥川思ひそめてそ淵と成ける

右

うたゝねにみ習ひにける夢をさへみもはてさせぬよはの風哉

十七番

左

思ひねのなみたなそへそよはの月曇るといはゝ人も社しれ

右

いつまてかたのめし事を命とも慰むほとゝ人にこひけむ

十八番

左

偽とおもひとられぬゆふへ社はかなきものゝかなしかりけれ

右

逢みけむ契そつらきよそにてはうしとも人の思はれやせし

十九番

左

有明の月はかたみとたのまれす暮まつまてのみにもそはねは

右

たくひなくほさぬ袖哉草も木も露うち拂ふかせはあるよに

廿番

左

こひしなはまよはぬ闇を思ふにも月はしはしのかたみ成けり

右

たのみける心ならては今更につらき物とも誰をうらみむ

廿一番

左

色に出て袖のよそめはふりはてぬいかにをさへし涙なるらん

右

廿二番

左

俤をうき身にそへて戀しなは後のよまてのつらさをやみん

右

何とかは頼みわたらん吉野河はやくみえにし人のうきよを

廿三番

左

ひと筋に身をうき物と思ふ社人のつらさのあまり成けれ

右

跡絶て人こぬ宿のさひしさはもとめぬ山の奥かとそおもふ

廿四番

左

すむあまも哀はしるや煙たつをのかしほやの夕くれの空

右

こひはよの常なりけれとみな人のみに始てはさそな悲しき

廿五番

左

さらぬたに夕暮つらき山里にとふ人かへる岩のかけはし

よそにては思ふ計にみゆるかとうきみの上を人にとはゝや

廿一番

左　寂西

草かれと思はゝみにもつみてましよそなる物はわかな也けり

右　眞観

よは春と誰もしるらし鶯のなきゝかせたる今朝の初音に

廿二番

左

吹かせをいはゝいはなむ櫻花散かふ時のはるの山もり

右

春かさてやみにしみをそ思ひしる霞める月のよはの哀に

廿三番

左

きてもみぬ故郷人のをそ櫻散残れりと猶や告まし

右

いとせめて物うく成ぬを鹿鳴山里いかて秋をすくさむ

廿四番

左

おもふよりいとゝいく野の道遠みまたふみもみす積る雪かな

右

いそのかみふるの山への秋の月いつれのよにか住はしめけむ

廿五番

左

とふ人のなきほとみゆる故郷の庭の白雪いく重なるらん

右

いつとなき松の風さへ秋のよは寢覺すれはやみにけしむらん

右

いかにして夢をさまさむ人のよに久むまるへき身とも頼ます

廿六番

左　少將内侍

久かたの天つみ空の朝霞たち社わたれ春やきぬらん

右　前攝政家民部卿

きてみすと人も恨みしいつくにもかく社花は盛りなるらめ

廿七番

左

みる人のうきにはよらぬ春の空かすめは月そおほろなりける

右

をのつから移ふ花に人とはゝすまの浦風わふとこたへよ

廿八番

左

いかにせむさならぬ事も思ふみにまして別の春の夕くれ

右

ありてよのはてしうけれは花の爲うしろやすくそ風は吹ける

廿九番

左

はかなしな我心なる槇の戸をさゝぬたのみに人はまたるゝ

右

身をなけく心に道はなき物をいつちいかにと思ひなるらん

卅番

左

山里は淋しきものとしりにけりきゝてもいとへ嶺の松風

右

卅六番
左
しらせはやとはかり物を思ふ社ならはぬ戀のはしめ也けれ
右
けふも猶いかにそめんとしくるらん早紅葉にし山の木のはを
卅七番
左
煙たつ空にもしるや富士のねのもえつゝとはに思ひ有とは
右
わひ人の涙とともに神無月まなくしくるゝ空はいかにと
卅八番
左
我戀はなたかの浦のなひきもの心はよれとあふよしもなし
右
さひしさはよそにてもしれ朝夕にたく冬柴の煙りけふらす
卅九番
左
こひせしと月にやすかてちかはまし曇る涙のうきにつけても
右
さゆれともこほらぬものか水鳥のうかふの池の曉の空
四十番
左
待やする我やゆかむと思ふまにはるかにさ夜の更にける哉
右
過きつる月日のはての報ひとてまたそことしもけふに成ぬる
四十一番
左
せめて猶したにはなひけ夕煙もえて我名の空にたゝすは
右
いかなれはさても心の慰まて逢夜も袖のあやにぬるらむ
四十二番
左
秋風はいたくな吹そ今はとてこさらむ後の夕暮もうし
右
いかにせむよもとは思ふ夕くれの秋風吹は人そまたるゝ
四十三番
左
一こゑは聞もかくしつ曉のわかれはあまり鳥そ鳴なる
右
今はたゝさらぬ別になしはてゝまた逢みむとまたれすも哉
四十四番
左
あすしらぬ命に人をとひわひて秋の夜なかく思ひける哉
右
戀しきをとてもかくても慰むる心のなとかみになかるらむ
四十五番
左
むは玉の夢はさめぬる床の上に猶俤のみえもするかな
右
をのつから年月へなはこひしさの限りありやと思ふ計そ
四十六番
左

をさふへき袖は昔に朽はてぬ我くろかみよ涙もらすな

右

こすはこす猶も頼まむ忘るとも忘れはてぬと我にきかすな

四十七番

左

忍ぶるにひとり〳〵かあらはさは誰をたれとはいひも隱さむ

右

心かへする世なりとも人はこひ我つらからはさてもかひなし

四十八番

左

山のはに夜更て出る月よりもまち遠になるみの契りかな

右

かきりそと別れし時にいはぬ社おもへは人のなさけなりけれ

四十九番

左

こひ人の心は遠く成にけりわする計の月日ならねと

右

かくてよにあらはやとしも思はぬにそむきはてぬは何の心そ

五十番

左

わすられぬ物からつらき年月はいかなる中のへたてなるらん

右

よのつねと思へはいとゝうき事のやるかたもなく歎かるゝ哉

右閑窓撰歌合依無類本不能挍合

三十六人大歌合 弘長二年九月

左方	右方
三品親王家尊	前內大臣基家
入道前太政大臣實氏	衣笠前內大臣家良
關白前左大臣家經	沙彌顯惠
前攝政左大臣良實	土御門院小宰相
前太政大臣公相	權大納言通成
左大臣實雄	三品親王家小督
九條前右大臣忠家	鷹司院帥
前權僧正	僧正隆弁
沙彌緣空	沙彌如舜
前大納言資季	藤原基政
皇后宮大夫師繼	權律師公朝
按察使顯朝	平長時
中納言爲氏	侍從行家
源具氏朝臣	藤原能清朝臣
法印實伊	素暹法師
沙彌寂西	平政村朝臣
院中納言	藻壁門院少將
沙彌融覺	沙彌眞觀

やまとうたは。我國のはなの春。たかきいやしき家々のことわざそなはり。しきしまの月の秋。しるしらぬ夜な〳〵のもてあそひ物となれり。これによりて。みちをふかくわきまへしれる

むかしの人麿赤人のたくひより。近きころの定家家隆に及まて。難波津にたち出て。ふるき芦原のみつほをひろひ。つくは山にわけ入て。しけきはやしの一枚をたおれり。すへて此道の事。人の心まち〳〵なるゆへに。海ありとみても。そこをさとらす。山有ときゝても。おくをしらさるともからの。やはらかなるつとめのてにしたかへるにははかられて。やすく道にいれる思ひをなしつゝ。みをゆるせるたくひおほくきこゆれと。神實にはそま山にたてるふしきは。きれはことさらにかたく。神代の森の雲は。あふけはいよ〳〵たかきものなり。しかはあれとも。車踏の詩山あらし。よをなひかし。和歌の浦。波まの月。道をてらせるところなれは。闕のひんかしの。かしこき事つてをうけて一都のうちに。あつめしるせる事あり。則いける諸人のかすをさためてよめる歌、五首をつかふへきよしなり。然にこれをいなひ申さは。あらはれたる本意を失ひ。かくれたる恨も有ぬへし。又しりかほにもてなさは。未得為レ得。未證為レ證のつみものかさなるへけれは。なましゐに。寛狗の理をおひ。昔嵯峨の燈にたはふるゝたくひになすらひて。をの〳〵三十一字の妙なるをえらひつゝ。三十六人と名つけてつかふる事は。前大納言公任卿しるしはしめたるより。すてにたひかさなれるわさ成るへし。つら〳〵今のいきをひをうかゝひみるに。いつかたも君をつかさまつ〳〵みおける中に。一番の左の歌。猶いひしらすすくれたるすかたふるまひ。ふるきにはちさる所なり。かの歌の山風たかくして。ことはの花は。雲の跡をつたへ。竹のその露わかれて。心の色。むくさのたまをむすへり。爰に。かしこかりし代々の跡に残りて。つたなきおいのつとめをましへつる事。さためて道のやつれをもあらはし。みのはちをもまねき侍らん、かつは家のかゝみ。影あれとも。一巻のたはふれ。塵に曇る浦のもくす道くらけれは。むそちのまよひ霧ふかし。たとひふりにしことわさをとゝむといふとも。さらにあらたなるなさけと。もちゐられかたかるへし。時に弘長二年長月のころ。筆を染てこれをしるしおはりぬ。

一番

左　三品親王

はれかたきみの思ひ社悲しけれかすめる月も秋やまつらん

右　前内大臣

明かたのあまの戸わたる月影にうき人さへや衣うつらん

左

焼すてしあとゝもみえぬ夏草に今はたもえて行螢かな

右

秋草のかれはか下のきり〳〵すいつまてあかて人にきかれむ

左

たなはたの戀や積りて天の川まれなる中の淵と成らん

右

まつ陰の入海かけてしらすけの湊ふきこす秋のしほかせ

左

遠さかる海士の小舟も哀なりゆらの湊の秋のゆふくれ

右

秋の雨に（庭の面イ）桐のはおつる夕くれは思ひすつるそ待にまされる

左

みをすつる人やみるらん唐國のとら伏野への秋のよの月

右

左

山もとの末野の里のあけほのにまた人わけぬ雪をみるかな

右

日影さすかれ野の眞葛霜とけて過にし秋にかへる露哉

左

山人は出たる跡の秋の庵殘れる鶴や夜半になくらん

右

何といく色變るらんきにもあらす草にもあらぬ人のことのは

左

心なきいはねにをける露までも秋とはいかて思ひいるらん

右

逢事はいつにならへる心とてひとりぬるよの悲しかるらん

左

また宵のは山のほくしもえそめて鹿まつとたにいかて知せん

右

いとへこも後をいかにと思ふ社猶よにとまる心なりけれ

左

世やはらき人やはつらき大方のみを思はぬは心なりけり

右

この里はすみた河原も程遠しいかなる鳥に都とはまし

左

渡りする人も哀やまさるらんすみた河原のはるのあけほの

二番

左　入道前太政大臣

分ゆけはそこともみえす朝ほらけ遠きそ春の霞成ける

右　衣笠前内大臣

みよしのゝ山のはかすむ春ことにみは新玉の年そふり行（ぬるイ）

左

いせのあまのたまものすそやまかふらん霞に遠き興つしら浪

右

年ことに後の春ともしらさりし花はいくたひ馴てみつらん

左

村雨に秋の露かる玉篠のみしかき夜はは曉もなし

右

さしも草さしもひまなき五月雨に伊吹の嶽のいかにもゆらん

左

吹かよふ音たにかはれ山城のときはの森の秋のはつかせ

右

夕されは露吹おとす秋かせに末葉かたよる小野のしの原

左

置露も哀はかけよ春日野に殘る古枝の秋萩の花

右

いせ嶋や鹽のひかたのみわたりにいそかすやとる秋のよの月

左

湊川秋行水の色そこき殘る山なく時雨ふるらし

右

もみち葉を染てしくるゝ秋山におくてのをしねほしや侘らん

左

庵さす稻葉の雲も打なひき山田の原は時（ニイ）雨てそゆく

右

うかりける誰あふ事のならひより夕附鳥のわれにわかるらん

左

しりなからいとはぬよ社悲しけれ我ためつらきみと思ふとて（なけくイ）

右
深き夜に人しらしとてしほりつゝ袖の泪を月にみえぬる
左
秋つはのすかたの國に跡たるゝ神のまもりは我君のため
右
いかにせむ曇る涙のます鏡うらみしよりそ影はたえにし
左
ふりぬとて何歎くらん昔か代に老といふ物そみはさかへける
右
忍ひかね涙の玉の緒を絶てこひのみたれそ袖にみえゆく

三番

左　　關白前左大臣
大河あさ瀬ふむまに七夕の待つる夜はも更やしぬらん
右　　沙彌顯惠
まくす原うら葉も白く亂れつゝ風のまゝなる秋の夕露
左
霜枯の野もせの草は我ことやみにふりはてゝしほれ侘らん
右
きえ殘るためしも悲し春日山春のひかりにもるゝしら露
左
いかてかは唐土舟のほのかにも我こふらくをしらせそめまし
右
小男鹿も木のまの月の影みてや心つくしの妻をこふらん
左
梓弓はるかにとはぬ日數をも心つよくやうらみはてまし
右
君におふるためしを何に頼けむつゐにつれなきまつの色哉
左
みことのりうけてつたへし我心くもらぬ程は神そしるらん
右
蓮葉の露のうきよとしりなからにこりにしむは心なりけり

四番

左　　前攝政左大臣
鴈かねの翅にかくる芦原の露はまよはぬしほりなるらん
右　　土御門院小宰相
あすしらぬ我みなからも櫻花うつろふ色そけふは悲しき
左
かく計なこりおしくはみにそふる秋ともさらに何歎らん
右
我ためになく虫のねにあらねともね覺なれはや悲しかるらん
左
待人はむなしきくれに何と又あしたゆくゝるさゝかにの糸
右
しらま弓いるさの山の夕霧に立かくれてや鹿（のイ）はなくらん
左
おなしくは浦にかきをけもしほ草はては煙も立はなれし
右
みのうさを數にあまる涙こそ忍ふにたへぬ色はみえけれ
左
いつまてか夜寒の衣ぬきかけて哀と民を思ひしりけむ
右
年をへてつらき心の限をもみはてゝよはる玉のをもかな

五番

左　前太政大臣

たちかふるけふは卯月の始めとや神のみ室に榊とるらん

右　權大納言通成

いく秋かかはらぬ影の月に又萬代かけて猶契るかな

左

よしさらは越路を旅といひなさむ秋は都にかへる雁かね

右

秋の夜は須磨の關守もりかへて月やゆきゝの人とゝむらん

左

すくもたく藻汐の煙なひけたゝ恨し末のしるへともみむ

右

よそにのみみつゝの濱松年をへてつれなき色にかへる浪哉

左

はかなくも思ひなくさむ心かなおなし世にふる頼みはかりに

右

をのつから日影もしらぬ谷河の岩まの氷いくへともなし

左

あらし吹嶺のさゝやの草枕かりねの夢はむすふともなし

右

千年ふるためしは今そしら雪のかさねて積る庭の松かえ

六番

左　左大臣

おきつかせ吹上の濱の白妙に猶すみのほる秋のよの月

右　三品親王家小督

いかにせん散にし花のおもかけを忘れんとすれは嶺の白雲

左

ときわかすいつも夕はあるものを秋しもなとか悲しかるらん

右

うたかひし命のうちに咲にけり哀なりけるやとの花かな

左

しはしたに猶立かへれまくす原うら枯てゆく秋のわかれち

右

つらかりし時こそあらめあひみての後さへ物はなそや悲しき

左

まつ嶋やあまのもしほ木それならてこりぬ思ひに立煙かな

右

人を社つらしと思ふに涙さへなとうきたひにみを離るらん

左

いかなりし秋に涙の露そめてみはならはしと袖のぬるらむ

右

定めなくさても世にふる此頃の時雨のやとや我み成らん

七番

左　九條前右大臣

大空に吹くる風の匂ふかな雲のうへにもはなやさくらむ

右　鷹司院帥

昔しより移ふからに恨むるをくるしきよとや花の散らん

左

よの常のみより外なる秋ならはなへての露に袖はぬらさし

右

したもえやくるしかるらん鳴聲もきこえぬ虫のよはの思ひは

左

これはてゝいとひもはてぬよの中をうきたひ毎に何歎くらん

右

偲のまたれし事も今はなしそれたにいつと頼みをかねは

左

哀なる草のかけにもしら露のかゝるへしとは思はさりしを

右

秋かせに雲の塵をそ拂ふらん空のかゝみの夜はの月かけ

左

何とてか間にふたつわかるらんよきもあしきもひとつ心を

右

あかしかた浪の音にやかよふらん浦より上の岡の松かせ

八番

左　前權僧正澄覺

天地のほかなる山にのかれねはかくても花に物やおもはむ

右　僧正隆弁

富士のねは咲ける花の背まてけに時しらぬやまさくら哉

左

天の河もみちのはしや秋をへて渡れとたえぬにしき成らん

右

うきをしる涙のとかといひなして袖よりかすむ春のよの月

左

物おもはていつれの年の秋まてか露に袂のしられさりけん

右

秋まてもいはねの床のつれなきに涙色つく昔の袖かな

左

眞木葉にありける物を花ゆへに春もうかりし風のやとりは

右

いかにして涙は袖にとまるらん通ふ心はひまもなきみに

左

ともの浦のいそお〔おか〕にたてる室の木につなける舟の主は誰そも

右

なからへはしはしも月をみるへきに山のは近きみ社つらけれ

九番

左　沙彌縁空

春雨のあまねき御代のめくみとは頼む物からぬるゝ袖哉

右　沙彌如舜

難波かたかすまぬ浪もかすみけりうつるも曇る朧月夜に

左

山のはのつらさ計やのこるらん空より外にあくる月かけ

右

はれ曇る影を都にさきたてゝ時雨るとつくる山のはの月

左

物ことに忘れかたみをとゝめをきて涙のたゆむ時のまそなき

右

中〳〵にまた頼まるゝ世なりけり變るへしとは契りやはせし

左

今は又みさへ朽木の杣山に何ことの葉をかきあつめまし

右

いまは又ちらてもまかふ時雨哉獨ふり行庭のまつかせ

左

今さら（いつらイ）に海士のいさり火たくなはの苦しき程を知人そなき（もなしイ）

右

ほの〱〱とあけのそほ舟こき歸り煙しらめる海士(うらイ)のもしほ火

十番

左　前大納言資季

しめゆひしまかきやたはに成ぬらん花をもけなる庭の山吹

右　藤原基政

散るをうしと思ひし花そまたれける春くることに物忘して

左

あし曳の山下風のいつのまに音吹かへて秋はきぬらん

右

天河まなしかたのゝ女郎花秋と契りて誰をまつらん

左

獨ねはなかきならひの秋の夜をあかしかねてや鹿も鳴らん

右

山里にいつしか人のまたるゝやすみはつましき心なるらん

左

夕しほや遠つひかたにみちぬらん鳴てちかつく友千鳥かな

右

いとへとて思ひしらする世中をうきたひ毎に何うらむらん

左

白妙の我衣手をかたしきて獨やねなんいもにこひつゝ

右

みしよにそ思ひいてゝも忍はるれしらぬ昔のなとや戀しき

十一番

左　皇后宮大夫師繼

かく計くるゝ別をしたふとも思ひもしらて春やゆくらん

右　權律師公朝

をのかすむ越路の花はまたさかしいそかてかへれ春の鴈かね

左

またれつる時は五月に成にけり小田の早苗もいまいそくらし

右

五月雨のふりわけかみはかた過て(のイ)井筒にあまる水のしら浪

左

としなみもさこそこゆらめ降雪の積る日數の末のまつ山

右

長月の菊のしら露淵とならはまかきの嶋は外にもとめし

左

おもひ侘うきおもかけやなくさむとみれは悲しき有明の月

右

春日野の野もりの鏡これやこのよそに三笠の山のはの月

左

かはらやの下にこかるゝ夕煙たえぬ思ひのありとたにみよ

右

浦人のあし火たくやのすゝけたるみには難波のことも物うし

十二番

左　按察使顯朝

霞めともまよはてかへる鴈かねはこその越路や空にしるらん

右　平長時

一枝は折てかへらん山櫻家つとなからみぬ人のため

左

櫻花匂ふやいつこみよしのゝきさ山きはに霞立らし

右

春霞かすむとみれは山のはの雲まも曇る夜はの月影

左
またみねは面影もなしなにしかもまのゝかや原露みたるらん
右
しのひねと誰いひそめて郭公きくへき頃を又過すらむ
左
みことのり道にそむかぬゆへとてや海の外にも守りあるらん
右
吹からに雲もかゝらし紅葉する嵐の山はいつしらるらん
左
いかならん時かあらはにしらるへき國に報ゆる心ありとも
右
黑髪をてならすたひにいとふ哉哀いつかと思ひみたれて

十三番

左　中納言爲氏
をとめこかかさしの櫻咲にけり袖ふる山にかゝるしら雲
右　侍從行家
きてみよと何かは人につけやらん我宿にのみ月はすましを
左
今よりの衣かりかね秋かせに誰夜寒とかなきてきぬらん
右
時わかぬこしのしら根の雪をみて秋とはいかて雁のきぬらん
左
よそにきく我ねさめたになかき夜をあかすや誰か衣うつらん
右
あすかには衣うつなりたをやめか袖の秋かせ夜さむなるらし
左
山のはに更ていてたる月影のはつかにたにもいかてしらせん
右
長月のつゆきの原の草の葉にことしはいたくをける露哉
左
さりともとわかあらましに頼まれて行末しらぬみ社おしけれ
右
いか計身のあやまちの積るらん哀我よのありのすまひに

十四番

左　源具氏朝臣
天津空なとて神代のはしめより春はかりたつ霞なるらん
右　藤原能清朝臣
梅の花それとみえねと折袖のぬるゝや雪のしるし成らん
左
涙にはさらてもぬるゝ我袖をしらてや秋の露はをくらむ
右
もしほやく煙は空に消ぬれと春とや月の猶かすむらん
左
忘らるゝうき名を外にしられしと人まち顔にくらすころ哉
右
村雨のやかてはれぬるを山田のまさらぬ水に早苗とるなり
左
つらからはいかにせんとか行末の心もしらす思ひそむらむ
右
木の葉こそ風のさそへはもろからめなとか涙の秋は落らん
左
うかりける人の言の葉なけゝとてなと僞のある世成らむ

右

河とかは人にも今はかたるへきみのうき程はよそにみゆらむ

十五番　左　法印實伊

みる人のなきか數そふ春毎に花もあたなる世をやしるらん

右　素暹法師

おきつかせうきねの袖を吹かへし浦つたへ行秋の夜の月

左

ほたる飛きしの木陰や天河ほしのはやしの名にやたつらん

右

木の葉散かたのゝ原に秋くれて舟なかしたる天の川浪

左

冬河の淵ともならてよとめるはいかにせをせく氷なるらむ

右

みよしのゝ瀧津はや瀬に澄月や冬も氷らぬ氷成らん

左

なからへてあるもつらきか僞なれはうきや我みの命成らむ

右

こぬ人をいくよの月にうらむらん我影にのみ枕ならへて

左

そむくへき浮世の中のことはりをしりてまとふは心なりけり

右

もみち葉の色なる袖のみなと社心の秋のとまり成らめ

十六番　左　沙彌寂西

雲よりもよそに成行かつらきの高まの櫻あらし吹らし

右　平政村朝臣

なへて世の思ふか中の習には別ありとやはるも行らん

左

秋の野の尾花にましる鹿のねは色にや妻を戀渡るらん

右

いつくより哀をかせのさそひきて荻の上葉の音と成らむ

左

手にならすかひこそなけれ梓弓ひけは中のみ遠さかりつゝ

右

あはてこそ戀をいのれと頼しか今はたなにか命なるへき

左

きぬ〳〵の袂に分し月影は誰涙にかうつりはつらん

右

すてやらぬ心からにやいてさらん浮世の關はもる人もなし

左

里遠み鹽やく浦はみえわかて煙りにかへる沖津しらなみ

右

憂も猶さこそはあれとことはりを世に慰めてみそふりにける

十七番　左　院中納言

人にのみつらさはみえて吹風の心にかなふ山さくらかな

右　藻壁門院少將

たえ〳〵にたなひく雲はあらはれてまよひもはてぬ山櫻かな

左

冬寒み忍ふの山の谷水は音にもたてすさそ氷るらん

右

かへりみる程そ雲井（雲ゐの外のイ）の大江山いくのゝ道や末になりぬる（るらんイ）

左

みる夢の覺てもさめす悲しきはいかにねしよの名殘なるらん

右

あふ事のたえまかちなるつらさかと思ひし程の契りたになし

左

いとせめて待にたへたる我みそとしりてや人の難面かるらん

右

いかにせむ戀路の末に關すへてゆけとも遠き相坂のやま

左

ちかひてし命にかへて忘るゝはうき我からにみをやすつらむ

右

をいかねにつらき別のありとたに思ひもしらて鳥や鳴らん（しらてや鳥のイ）

十八番

左　沙彌蓮覺

なかき日の杜のしめなれはくりかへしあかすかたらふ郭公哉

右　沙彌眞觀

あはれをはいつくにそふる影ならんつらさ霞める春のよの月

左

しほれつる夜のまの露のひるまたに草葉やすめぬ秋の村雨

右

さほ姫の我袖ひとつ大空に有とや春の霞たつらん

左

月ならて夜川にさせるかゝり火も同しかつらの光成けり

右

月たにもかすみかへたる春の夜に山のはてらす花の色かな

左

かた岡の杜の木葉も色つきぬわさたのをしね今やからまし

右

難波かた夕しほさしてあま衣すへまの山に秋かせそふく

左

あらしこす外山の嶺のときは木に雪けしくれてかゝる村雲

右

おもふ事けになくさむる月ならは昔の袂は秋やほさまし

左

さゝ波や遠さかり行にほの海は氷そ浦のしほひ成ける

右

さりとても有はてぬよのはかなきになとしぬ計戀しかるらん

左

忘れねよ夢そといひしかね事をなとそのまゝに頼まさりけん

右

衣〱にならはいかにと思ふより夜ふかく落る我涙かな

左

たらちねの親のみるよと祈りこし我かねことを神やうけけん

右

いかにせん死なはともにと思ふみのおなし限の哀ならすは

左

あら磯にこけむす計年へたる岩ほはいつの眞砂なるらん

右

今まてもあるは思ひの外なれはみを歎くへきことはりもなし

左

みしめひく三輪の杉村ふりにけりこれや神代のしるし成らん

右

をこたらぬみにこそおもへ住吉の神はまことに道まもりけり

右三十六人大歌合以一本校合了

女房三十六人歌合

左　小野小町

花の色は移りにけりないたつらに我身よにふる詠めせしまに

思ひつゝぬれはや人のみえつ覧夢としりせはさめさらましを

いとせめて戀しき時はむは玉のよるの衣をかへしてそきる

右　式子内親王

詠れは衣手すゝし久方の天のかはらの秋のはつかせ

玉の緒よ絶なはたえねなからへは忍ふる事のよはりもそする

山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえ／＼かゝる雪の玉水

左　伊勢

としをへて花の鏡となる水は散かゝるをや曇るといふらん

あひにあひて物思ふ頃の我袖にやとる月さへぬるゝかほなる

おもひ川絶すなかるゝ水の泡のうたかた人にあはて消めや

右　宮内卿

うすくこき野への緑のわか草に跡まてみゆる雪のむらきえ

心あるをしまのあまの袂哉月やとれとはぬれぬものから

聞やいかにうはの空なる風たにもまつに音するならひ有とは

左　中務

鶯の聲なかりせは雪消ぬ山里いかて春をしらまし

秋風の吹につけてもとはぬ哉荻のはならは音はしてまし

ありしたにうかりし物をあはすしていつくにそふる辛さ成覧

右　周防内侍

夜をかさね待かね山の郭公雲ゐのよそに一こゑそきく

契りしにあらぬつらさも逢事のなきにはえ社恨みさりけれ

春の夜の夢はかりなる手枕にかひなくたゝんなこそおしけれ

左　齋宮女御

袖にさへ秋の夕はしられけりきえし淺茅か露をかけつゝ

なれ行も浮よなれはや須磨の海士のしほやき衣まとを成らん

ぬる夢にうつゝのうさも忘られて思ひなくさむ程そはかなき

右　俊成卿女

梅の花あかぬ色かも昔にておなしかたみの春のよの月

露はらふねさめは秋の昔にてみはてぬ夢に殘るおもかけ

夢かとよみし面影も契りしも忘れすなからうつゝならねは

左　右近

大かたの秋の空たに悲しきに物思ひそふきのふけふかな

逢事をまつに月日はこゆるきの磯に出てや今はうらみむ

忘らるゝみをは思はすちかひてし人の命のおしくも有かな

右　待賢門院堀河

雪深き岩のかけ道跡たゆるよしのゝ里も春はきにけり

うき人を忍ふへしとはおもひきや我心さへなとかはるらん

なかゝらん心もしらす黑かみの亂れてけさは物を社おもへ

左　右大將道綱母

都人ねてまつらめやほとゝきす今は山へをなきていつなり

吹風につけてもとはんさゝかにの通ひし道は空にたゆとも

絶ぬるか影たにみえはとふへきをかたみの水はみくさゐに鬼

右　宜秋門院丹後

吹拂ふ嵐の後の高ねより木の葉くもらて月や出らん

忘れしのことの葉いかに成ぬらんたのめし暮は秋風そ吹

何となくきけは涙そこほれける苔の袂にかよふ松かせ

左　馬内侍

時鳥しのふる物をかしは木のもりても聲のきこえぬる哉
逢事のこれやかきりのたひならん草の枕も霜かれにけり
こよひ君いかなる里の月をみて都にたれをおもひ出らん

右　嘉陽門院越前

神つ風夜寒になれは田子の浦の海士のもしほ火焼まさるらん
夏引の手ひきの糸の年をへて絶ぬ思ひにむすほゝれつゝ
いく夜かは月を哀と詠めきて浪に折しくいせの濱荻

左　赤染衛門

神無月有明の空のしくるゝをまた我ならぬ人やみるらん
移ろはてしはし信田の杜をみよかへりもそするくすのうら風
いかにねてみえしなるらんうたゝねの夢より後は物を社思へ

右　二條院讃岐

よにふるはくるしき物を槙のやにやすくも過る村しくれ哉
一夜とてよかれし床の小筵にやかてもちりのつもりぬる哉
散かゝる紅葉の色はふかけれとわたれはにこる山川の水

左　和泉式部

櫻色にそめし衣をぬきかへてやま郭公けふよりそまつ
物思へは澤の螢も我みよりあくかれいつる玉かとそ見る
くらきよりくらき道にそ入ぬへき遙にてらせ山のはの月

右　小侍従

いくめくり過ぬる秋に逢ぬらむかはらぬ月の影をなかめて
つらきをも恨みぬ我にならふなよ浮みをしらぬ人も社あれ
待宵に更行かねの聲きけはあかぬ別の鳥はものかは

左　三條院女藏人左近

大井川杣山かせの寒けれはたつ岩浪を雪かとそみる
七夕にかしつと思ひし逢事のその夜なき名の立にけるかな
浪ことに袖そぬれけるあやめ草心ににたるねを求むとて

右　後鳥羽院下野

あふ人にとへと變らぬおなし名のいくかに成ぬむさしのゝ原
行末もうきよの中に何をかは昔はとては人にかたらむ
心していたくなゝきそきり〳〵すかことかましき老のね覺に

左　紫式部

みよしのは春のけしきに霞めともむすほゝれたる雪の下草
めくり逢てみしやそれとも分ぬまに雲かくれにしよはの月哉
みし人の煙となりし夕よりなそむつましきしほかまの浦

右　弁内侍

小山田にまかする水の淺み社袖はひつらめ早苗とるとて
逢までの命を人にちきらすはうきに堪てもえやは忍はん
置露は草葉の上と思ひしを袖さへぬれて秋はきにけり

左　小式部内侍

大江山いくのゝ道の遠けれはまたふみもみすあまの橋たて
しぬ計歎きにこそは歎きしかいきてあふへきみにしあらねは
おもひ出て誰をか人の尋ねましうきに堪たる命ならすは

右　少將内侍

吹かせものとけき花の都鳥治れる代のことやとはまし
しらせはやと計物を思ふ社ならはぬ戀のはしめなりけれ
恨みてもなきてもいかゝ卿たましみし夜の月の幸さならては

左　伊勢大輔

いにしへの奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬるかな
別にしその日計はめくりきて又もかへらぬ人そかなしき
はやくみし山ゐの水の薄氷打とけさまはかはらさりけり

右　殷富門院大輔

もらさはや思ふ心をさてのみはえそ山城のゐてのしからみ

何か厭ふよもなからへしさのみやはうきに堪たる命なるへき

今はとてみさらん秋の末までも思へはかなし夜はの月かけ

左　清少納言

たよりあるかせも吹やと松嶋によせて久しきあまのはしたて

忘らるゝ身はことはりとしりなから思ひあへぬは涙成けり

よしさらはつらきは我に習ひけり頼めてこぬは誰かをしへし

右　土御門院小宰相

春は猶かすむにつけてふかき夜の哀をみする月の影哉

いかてまたあはてやみにし奥山の岩かき清水かけをたにみん

なかき夜のね覺に思ふ程計うきよをいとふこゝろ有せは

左　大貳三位

はるかなるもろこしまても行物は秋のね覺の心也けり

有馬山いなのさゝ原かせふけはいてそよ人を忘れやはする

うたかひし命計は有なから契りし中の絶ぬへきかな

右　八條院高倉

一聲はおもひそあへぬ時鳥たそかれ時の雲のまよひに

いかゝ吹身にしむ色のかはるらんたのむる暮の松風の聲

我さとは小倉の山し近けれはうきよをしかとなかぬ日そなき

左　高内侍

曉の露は枕に置けるを草葉の上となにおもひけむ

獨ぬる人やしるらん秋の夜をなかしと誰かきみにつけゝむ

忘れしの行すゑまてはかたけれはけふを限りの命ともかな

右　後嵯峨院中納言典侍

秋のよをことそともなく明ぬとは七夕つめや思ひしるらん

いつはりとおもはて人も契けむかはるならひのよ社つらけれ

人にのみつらさはみえて吹風の心にかなふ山さくら哉

左　一宮紀伊

袖かせに吹あけの濱のはま千鳥涙たちくらし夜はに鳴也

置露もしつこゝろなく秋かせにみたれて咲るまのゝ萩原

音にきく高師の濱のあた浪はかけしや袖のぬれも社すれ

右　式乾門院御匣

忘られぬ昔の秋を思ひねの夢をはのこせ庭の松かせ

みをさらぬおなし浮世とおもはすは岩ほの中も尋みてまし

同しよに頼む契りの空しくはうきみにかへてあふこともかな

左　相模

みわたせは浪のしからみかけてけり卯花さける玉川のみつ

うらみ侘ほさぬ袖たに有物を戀に朽なむ名こそおしけれ

もろともにいつかとくへき逢事のかた結ひなる夜はの下紐

右　藻壁門院少將

さひしさは眞柴の烟そのまゝに霞をたのむ春の山さと

それをたに心のまゝの命とてやすくや戀にみをもかへてむ

をのか音につらき別の有とたに思ひもしらて鳥やなくらむ

右女房三十六人歌合於柳堤市店得之依未求類本不能挍合

群書類從卷第二百十七

和歌部七十二　歌合一

御裳濯川歌合

作者　西行法師
判者　俊成卿

一番

左　山家客人

岩戸開しあまつみことのそのかみに櫻を誰かうへ初めけむ

右　野徑亭主

神路山月さやかなるちかひ有て天の下をはてらす成けり

豐あし原の國のならひとして。なにはつの歌は。人の心をやはらくる中立と成にければ。是をよまさる人はなかるへし。しかはあれとも。よしとはいかなるを云。あしとはいつれを定むへしとは。我も人もしる所にあらさるものなり。そのゆへは。あをによし奈良のみやこのとき。えらひをかれたる萬葉集は。世もあかりひとの心をよひかたけれは。昔くをく。それよりこのかた。紀貫之。凡河内躬恒等かえらひける所の古今集こそは。歌のもとゝは仰へきことなるを。同筆のうちのうたをも。或ゑにかける女にたとへ。しほめる花の匂ひのこるによそへ。或商人のよき衣をきたるといひ。田夫の花のかけにやすめるかことしといへり。是等のこゝろをおもふに。撰集は。さま／＼の歌のすかたをは。わかすそのすちにとりて。よろしきをとりえらへる成へし。彼ときより後。四條大納言公任卿。さま／＼のうたの道をみかき。あるはとをあまりいつゝかひの歌を合。あるは三十あまり六つかひのうたをたゝかはしめ。九しなの歌をさためたり。これすなはち。おほくは古今集の内のうたを。あるは上か上の品にあけ。あるは下か下の品にをけり。此等のたくひは。疑心のむすほゝれぬへけれと。先達のことはをよふ處にあらす。今の世の人は。歌のよしあしをいはむにつけて。さかひに入さるほとに。しらさるものなり。抑歌合といふものは。上古にはありけむを。しるしつたへさりけるにや。亭子のみかとの御ときより。しるしをかれたれと。あるときは。勝負をつけられす。あるおりは。勝負をはつけなから。判の詞はしるされす。村上の御とき。天徳の歌合よりそ。判のことはかきしるされて後。永承。承暦の歌合。ならひに。私のいへにいたるまて。勝劣をつけしるすことになりにたる。あるは佛事によせて結緣と稱し。或は靈社によせて。神感をかけてつかひをむすひ。判をうけしむる間。かつは今の愚老にいたるまて。かたのことく。古きあとをまねひつゝ。をよはぬこゝろにまかせて。勝負をさたむること。すてに數なく成にけむ、つ

らつらこのことをおもふに。かつは此道の先賢のなきかけにも。みおもはれむこと。その耻かきりなし。いかにいはむや。住吉明神より始奉りて。照しみそなはすらんこと。そのおそれいくはくそや。しかるのみにあらす。齢かたふき。老にのそみて後け。朝に見ること。夕にわすれ。夜半の莚におもふこと。あかつきの枕にとまることなければ。古き時の言歌。今の世の作法。見ることきくこと。ひとつも心に殘事なし。つよりてちかきとしより此かた。なかくこのことたちをはりにたれよ。今ただ人目代。壯年のむかしより。たかひにをのれを。しれるによりて。二世のちきりをむすひをはりに。今各老にのそみて後。隣居は山河を隔るといへとも。むかしの芳契は。旦暮にわするゝことなし。そのうへ。これはよの歌合の儀にはあらさるよし。しゐてしめさるゝ趣をつたへ承によりて。例の物覺えぬひかことゝも。注し申へきたり。をおもふやうの事のつゐてには。哀におもひつゝけられ侍ることをとゝめかたくてなん。むかし天承長承の比ほひより。かくのことく此道にたつさひて。或時は。はこやの山の花のもとにつらなり。ある時は。雲井の月の前に見なれしとも。むかしの夢にのみなりぬる世にもひとの數にもあらす。桑の門のすて人と成なから。今まて世になからへて。かやうのすゝろことを書付侍るにつけても。竹の窓に露しけく。苔の袂しほりあへかたく侍るを。かゝるもくつのみたれたることのはなから。かけまくもかしこき神かせのつてにも。みもすそ川のみきは。玉くしのはのかけにも。ちり侍らは。おほうち人の中にも。をのつから露の哀にかけられ侍らむや。

一番の一つかひ左のうたけ。春のさくらをおもふあまり。神代のことまてたとり。右歌は。天の下をてらす月をみて。神路山のちかひをしれるも。ともにふかくきこゆ。持とすへし。

二番　左

神風に心やすくそまかせつる櫻の宮のはなのさかりを

右

さやかなる鷲の高ねの雲井より影やはらくる月よみのもり

左のさくらの宮。右の月よみのもり。又勝劣なし。なを爲持。

三番　左

をしなへて花のさかりに成にけり山のはことにかゝるしら雲

右

秋はたゝ今宵一夜のなゝりけりおなし雲ゐの月はすめとも

左歌。うるはしく長高く見ゆ。右のうた。是も歌のすかたいとおかし。十五夜の月をめつるあまりに。今夜一よの名なりけりといへる。心ふかしといへとも。なを殘りの秋をすてむことといかゝときこゆ。左こともなくうるはし。勝と申へからむ。

四番　左

なへてならぬ四方の山への花は皆吉野よりこそ種はとりけめ

右

秋になれは雲ゐのかけのさかふるは月の桂に枝やさすらむ

左右ともに。心有て聞ゆ。但左の初の句。右の中の五もし。

殊歎美のことはにあらすや侍らん。持なるへし。

五番

左

思ひかへす悟りやけふはなからまし花に染をく色なかりせは

右

身にしみて哀しらする風よりも月にそ秋の色はみえける

左の。さとりやけふはなからましといひ。右の。月にそ秋といへる心すかた。ともにおなし。又爲持。

六番

左

春をへて花の盛にあひきつゝおもひ出おほき我み也けり

右

浮身こそいとひなからも哀なれ月をなかめて年をへにける

左右歌。春秋月はことなりといへとも。歌の心はおなしすちなるを。思ひ出おほきといへるより。月を詠てとしをへにけるといひすてたる。今少まさり侍らむ。

七番

左

ねかはくは花のもとにて春しなむそのきさらきの望月の比

右

こむ世には心の中にあらはさむあかてやみぬる月の光を

左の花の本にてといひ。右の來む世にはといへる。ともに深にとりて。右は打まかせて宜歌の躰なり。左は。ねかはくはとをきて。春しなむといへる。うるはしきすかたにはあらす。此躰にとりて。かみしもあひかなひ。いみしく聞ゆる也。さりとて。ふかき道にいらさらむ輩は。かくよまんとせはゝかなはさることありぬへし、これは又、いたれるときのことなり。姿は雖レ不二相似一。なすらへて持とす。

八番

左

花にそむ心のいかて殘けむ捨はてゝきと思ふわか身に

右

更にける我世のかけを思ふまに遙に月のかたふきにけり

右歌。いとおかし。但左歌。なをこともなく宜。かちとや申へき。

九番

左

よしの山こそのしほりの道かへてまたみぬかたの花を尋ん

右

月を待高ねの雲ははれにけり心あるへき初しくれかな

去年のしをりといひ。たかねの雲はといへる。姿こゝろともにおかし。持とす。

十番

左

よし野山やかていてしと思ふ身を花ちりなはと人や待らん

右

ふりさけし人の心そしられける今夜みかさの月を詠て

今夜みかさのとをける詞は。優に聞ゆ。ふりさけしといへる。初の句や。いかにきこゆらむ。左歌。こともなく宜。勝と申へからむ。

十一番

左

立かはる春をしれともみせかほに年をへたつる霞成けり

右

岩まとちし氷も今朝は打とけて(とけそめイ)苔の下水道もとむらん

左歌。姿心相叶てみゆ。但みせかほにといへる詞。我も人もみなよむことはなり。さはありなから。猶歌合なとには。ひかふへきにやあらむ。かつは。歌のさまによるへし。右歌。心詞おかし。勝とや申へき。

十二番

左

色つゝむのへの霞のしたもえて心をそむる鶯のこゑ

右

とめこかし梅さかりなる我やとをうときも人は折にこそよれ

左右。春の歌。ともに艶なるにとりて。右は今少おかしきさまにみゆる。左うた。詞いひとめぬさまなから。心なをおかし。今少まさるとや申へからむ。

十三番

左

山かつのかた岡かけてしむるのゝさかひに立る玉のを柳

右

降つみし高ねのみ雪解にけり清瀧かはの水のしら波

左うた。さることありとみる心ちして。めつらしきさまなり。すゑの句。をの字や少いかゝ。さもよみてはへるかとよ。右うた。すかた面白みゆ。まさると申へし。

十四番

左

つく〳〵と物思ひをれは郭公心にあまる聲聞ゆなり

右

うき世おもふわれかはあやなほとゝきす哀こもれる忍ねの聲

雨首のほとゝきす。ともに心こもりて。よき持なり。

十五番

左

鶯の古巣よりたつほとゝきすあゐよりもこき聲の色哉

右

きかすともこゝをせにせむ郭公山たのはらの杉のむら立

古き歌合の例は。花をたつぬるにも。みるをまさるとし。ほとゝきすを待にも。きけるを勝とすることなれとも。是はたゝ。うたの勝劣を申へきなり。あゐよりもこき。心おかしく聞えなから。又おり〳〵人よめる成へし。山田の原のといへるすかた。凡俗及ひかたきに似たり。勝と申へし。

十六番

左

ほとゝきす深き峯より出にけり外山のすそに聲の落くる

右

五月雨の雰間もみえぬ雲路より山郭公鳴て過なり

右歌。驚とすへき所なく。高く聞ゆ。左うた。ほとゝきすふかきみねよりいてゝ。外山のすそにこゑのおつらんほと。今まさしく聞心地して。めつらしくみゆ。左まさると申侍らむ。

十七番

左

哀いかに草はの露のこほる覧秋風たちぬ宮城のゝ原

右

たなはたの今宵の別れの涙をはしきりそかゝる天のは衣

左右の初秋の歌。ともに艶なるへし。但右は。かやうの心聞なれたるへし。左はみやきのゝはら。おもひやれるこゝろ。なをゆかしく聞ゆ。まさるへくや。

十八番

左

大かたの露には何の成ぬらん袂にをくは涙なりけり

右

心なき身にもあはれはしられけり鴫立澤の秋の夕暮

鴫立澤といへる。こゝろ幽玄に。すかたをよひかたし。但左のうた。露には何のといへる詞。あさきに似て心殊ふかし。勝と申へし。

十九番

左

あし曳の山陰なれはと思ふまに梢に告る日くらしの聲

右

山里の月待秋の夕くれは門田のかせの音のみそする

左のうた。こすゑにつくるといへる。心ふかく。ゆへありて聞ゆ。但此まにといへる詞は。又人常によむことなれと。なをおもふへくやとおほえ侍る。かやうの事は。人かへりてわらふへきことなり。しかあれとも。一身思ふ所を。此次てに申出るなり。右歌は。難とすへき處なくはみえなから。又よみつへきことにや。なを左末の句。心まさると申へきなり。

廿番

左

長月の月のあり明のかけふけてすそのゝ原にをしか鳴也

右

月見はと契りをきてし（いてしイ）古郷の人もや今宵袖ぬらす覧

すそのゝはらといへる。心ふかくして。姿さひたり。但人もや今宵といへる。詞をかさらすといへとも。哀殊にふかし。右なをまさるへし。

廿一番

左

蛬夜さむに秋のなるまゝによはるか聲の遠さかり行

右

松にはふまさのはかつらちりにけりと山の秋は風すさふらん

左右ともに。すかたさひ。詞おかしく聞え侍り。右のまさのはや。少いかにそ聞ゆれと。やまの秋はなといへる末の句。優に侍れは。持と申へくや。

廿二番

左

霜さゆる庭の木のはをふみ分て月はみるやととふ人もかな

右

山河にひとりはなれて住をしの心しらるゝ波の上哉

右歌。いみしく艶にはきこゆれと。左歌。心すかた殊宜。勝。

廿三番

左

大原やひらの高ねのちかけれは雪ふる里を思ひこそやれ

右

枯野うつむ雪に心をしらすれはあたりの原に雉子鳴也

左歌は。たゝ詞にして哀ふかく。右は。こゝろこもりて姿

かけ有。なすらへて爲レ持。

廿四番　左

数ならぬ心のとかになしはてししらせてこそは身をも恨みめ

右

もらさてや心の底をくまれまし袖にせかるゝ涙なりせは

両首の戀。共にこゝろふかしといへとも。右のうた。なをよし有てきこゆ。まさるへくや。

廿五番　左

あやめつゝ人しるとてもいかゝせむ忍ひはつへき袂ならねは

右

たの[illegible]に[illegible]行[illegible]の更[illegible]只明[illegible]しかは

左。しのひはつへきなといへる末の句は。いとおかし。初の五もしや。いかにそ聞ゆらむ。右歌。心ふかくやあらむ。又勝とすへし。

廿六番　左

世をうしと思ひけるにそ成ぬへき吉野ゝおくへ深く入なは

右

斯る身をおほしたてけむたらちねの親さへつらき戀もする哉

左の。よしのゝおくへ入。右の。親さへつらきの心。ともに[illegible]こゆ。大かたは。此いつこへと云への字に。こ[illegible]人よむことにはあれと。こなれか[illegible]にはあら[illegible]思ふ所をこめて申出る[illegible]両歌の[illegible]持[illegible]

廿七番　左

人はこて風のけしきも更ぬるに哀に雁の音信て行

右

物おもへとかゝらぬ人も有ものをくやしかりける身の契り哉

左も。心ありておかしくはきこゆ。右猶宜。まさると申へし。

廿八番　左

なけゝとて月やは物をおもはするかこちかほなる我涙かな

右

しらさりし雲井のよそにみし月の影を袂にやとすへしとは

左右両首。ともに心ふかく。姿優なり。よき持と申へし。

廿九番　左

あくかれしあまの河原と聞からにむかしの浪の袖にかゝれる

右

津の國の難波の春は夢なれやあしのかれはに風渡る也

ともに幽玄の躰なり。又爲レ持。

卅番　左

しけきのをいく一村に分なして更にむかしを忍ひかへさん

右

枝折せて猶山ふかく分いらむうきことききかぬ所有とや

左。こゝろことにふかし。右いとふ心またふかしなを可爲レ持。

卅一番

左
曉の嵐にたくふ鐘の音を心の底にこたへてそ聞

右
よもすから鳥の音おもふ柚の上に雪は積らて雨しはりけり

右歌。末の句なとおかし。但左歌。ことに甘心す。仍爲レ勝。

卅二番

左
花咲し鶴の林のそのかみをよしのゝ山の雲にみる哉

右
風かほる花の林に伴くれて積るつとめや雪の山みち

左。鶴林をよしのゝおもかけにそへし。右。春風の花前に雪山を思へる。心すかた無二優劣一可レ爲レ持。

卅三番

左
鷲の山思ひやるこそ遠けれと心にすむは有明の月

右
あらはさぬ我心をこそ恨むれ月にはうときをは拾の山

二首。共以のこゝろ。左は靈鷲山をおもひ。右にをはすて山をひけり。天竺和國雖二各別一。所詠は。心月輪を觀せり。歌の品も又同心。仍なを爲レ持。

卅四番

左
わか葉さすひらのゝ松は更にまた枝にやちよの數をそふ覽

右
澤邊よりす立はしむる鶴の子は松の枝にや移り初覽

左歌は。ひらのゝ松にわかはをまゝしあたり。定てそのふへありけんかし。右歌は。たゝ澤への鶴の子の。松にうつりそめたるは。似のこゝろ。左には及かたくやと覺え侍れと。うたのほとは。なを持成へし。

卅五番

左
くもりなき鏡の上にゐる塵をめにたてゝみる世とおもはゝや

右
たのもしな君々にます折にあひて心の色を筆に染つる

左右ともに。由緒ありけむとはみえなから。左は。詠誦のこゝろ有。右。理智にあへるにゝたり。仍右爲レ勝。

卅六番

左
ふかく入て神ちのおくを尋れは又うへもなき峯の松風

右
流たえぬ波にや世をはおさむらん神風涼しみもすそのきし

左歌は。心詞ふかくして。愚意難レ及。右歌も。神かせ久しく。みもすそのきしに冷からんこと。勝劣の詞くはへかたし。仍持と申へし。

まことにや。此歌はしめに。もゝ枝の松と侍るは。愚詠たてまつるへきにやとて。

ふちなみもみもすそ川のすゑなれはしつえもかけよ松の百枝に

副進二首

契りをきしちきりの上にそへをかむわかのうら浪のあまのもしほ木

このみちのかたきさとりをおもふまに
蓮ひらけはまたゝつねみよ

かへし

わかのうらにしほ木かさなる契りをは
かけるたくものあとにてそしる
さとりえて心のはなのひらけなは
たつねぬさきに色そゝむへき

表紙にかける歌

藤なみをみもすそ川にせきいれて
もゝえの松にかけよとそおもふ

此歌諸本闕今據古今著聞集補之

宮河歌合

作者　西行法師
判者　定家卿

一番

左　玉津嶋海人

萬代を山田の原のあや杉に風しきたてゝ聲よはふ也

右　三輪山老翁

流れ出て御跡たれますみつかきは宮川よりやわたらひのしめ

左右歌。義隔二凡俗一興入二幽玄一。杉上之風聲。摸二柿本之露詞一。見二宮河之流一。深二蒼海之底一。短慮易レ迷。淺才難レ及者歟。仍先爲レ持。

二番

左

くる春は峯に霞を先たてゝ谷のかけひをつたふなりけり

右

わきてけふ逢坂山のかすめるは立おくれたる春やこゆ覽

左。さきたつ霞に。谷の道の春をしり。右は。おくれたる春を。關山のかすみにみる。詞はかはれるに似て。心はすてにおなしければ。峯に霞をとをきて。谷のかけひをといへる。よき歌にも。おほくよめることには侍れと。此右のうたは。今少とゝこほる所なく。いひくたされ侍れは。まさるへくや。

三番

左

若な摘のへの霞そ哀なるむかしを遠く隔と思へは

左

世中を思へはなへてちる花のわかみをさてもいつちかはせん

右

花さへに世をうき草になりにけり散をおしめはさそふ山水

右歌。心詞願て。姿もいとおかしくみえ侍は。山水の花色心もさそはれ侍り。左歌。世中をおもへはなへてといへるより。終りの句のすゑまて。句ことに思ひ入て。作者の心ふかくなやませる所侍れは。いかにもかち侍らむ。

十番

左

風こしの峯のつゝきに咲花はいつさかりともなくや散らん

右

風もよし花をもちらせいかにせん思ひ出れはあらまうきそよ

左は。よのつねのちるはしき躰のさまなれと。右は風をよしとをけるより。終の句のすゑまて。心詞たくみそ人のおよひかたきさまなれは。勝と申へし。

十一番

左

かそへねとこよひの月のけしきにて秋のなかはを空にしる哉

右

月のすむ淺茅にすたく蛬露のをくにや夜をしる覽

仲秋三五夜天。歌のすかたたかく。詞きよくして。二千里の外のもの。顔に清るくまなくみらむと思ひやられ侍れは。淺茅か下のむしの音。月の光けにたくひたるに覚いふよき。露ことの葉は。なを劣に侍かたくやはへらむ

十二番

左

きよみかた興の岩こすしら波に光をかはす秋のよの月

右

月すみてふくる千鳥の聲すなり心くたくやすまの關守

清みかた。すまの浦。關の名所の様。左まさる。右おとるとは。まことに申かたく侍れと。歌につきては。なを岩こすなみによする心をおもへは。又夜ふかく關にとまり旅へく侍を。崇徳院の百首御製の中に。浦半のかせに空はれてと侍れは。近き世の事なれと。玉のこゑ久敷とゝまりて。今はむかしといふはかり。時隔り侍にけれは。なを右の勝とや申へからん。

十三番

左

山かけにすまぬ心はいかなれやおしまれて入月も有世に

右

いつくとて哀ならすはなけれとも荒たる宿そ月はさひしき

左右の。こゝろすかた。うるはしくたりて。いつれと申かたけれと。あれたるやとそ月はさひしきと。いひはてたる。よろしくも侍る哉。

十四番

左

月の色に心をふかく染ましや都をいてぬ我身なりせは

右

わたの原波にも月はかくれけり都の山を何いとひけむ

両首歌。洛外の月色。海上之晩影。又しみてわきかたく侍れと。右。浪にも月はといへる。今少つよくきこえ侍らん。

十五番

左

世中のうきをもしらてすむ月の影は我みの心ちこそすれ

右

かくれなく藻に住むしはみゆれとも我からくもる秋のよの月

右歌。みるへき月をわれはたゝと云。古きこゝろおもひてられて。くもるなみたもあはれふかく。藻にすむむし。かくれぬ月の光も底清く侍れは。まさるとや申へき。

十六番

左

うき世には外なかりけり秋の月詠るまゝに物そかなしき

右

すつとならは浮世を厭ふしるしあらん我みは曇れ秋のよの月

月はうきよと云歌のことはに付て。こゝろをおもへは。ともに心ふかく見え侍れは。持とや申へからむ。

十七番

左

秋きぬと風にいはせてくちなしの色にそ淳る女郎花哉

右

花か枝に露のしら玉ぬきかけて折袖ぬらすをみなへしかな

左歌。かせにいはせて口なしのなといへる。いと宜はみえ侍を。右歌のすかた心なを尤優なり。仍爲レ勝。

十八番

左

山里はあはれなりやと人とはゝ鹿の鳴ねを聞とこたへん

右

小倉山麓をこむる夕霧に立もらさるゝさほしかの聲

立もらさるゝさほしかの聲。きかぬ袂までつゆをく心ちしはへれは。なを勝と申へし。

十九番

左

白雲をつはさにかけて行鴈の門田の面の友したふなり

右

鳥羽に書玉章の心ちして鴈なきわたる夕やみの空

からすはの玉章。跡なきことにはあらねとも。近き世より人々このむことに侍へし。左歌。こゝろ詞。こひねかはれはへれは。勝と申へし。

廿番

左

秋しのや外山の里やしくるらんいこまの嶽に雲のかゝれる

右

なにとなく心をさへは盡すらむわかなけきにて暮る秋かは

心をさへはつくすらんなといへる。ことはのよせありて。ことなるとかなく侍れと。いこまのたけに雲をみて。外山のさとまて時雨を思へる心。なをゆかしく聞え侍れは。左の勝とや申へからむ。

廿一番

左

ますけおふる荒田に水をまかすれはうれしかほにも鳴蛙かな

右

水たゝふ入江のまこもかりかねてむなてに過る五月雨の比

左右のこゝろすかた。おなし様のことに侍へし。あら田に

水をといひ。むなてに過るといへる。何もいひしりて聞え
侍には。よき持に侍り。

廿二番

左

ほとゝきす谷のまに〳〵音信て哀にみゆる藤つゝしかな

右

人聞ぬふかき山へのほとゝきす鳴音もいかにさひしかる覧

左歌。面影ありて。優にこそ侍めれ。右歌も。鳴ねもいかに
なといへる。誠にさひてはきこゆれと。左の詞。谷のまに
まに。なをふかく思ひ入たる所侍れは。勝と申へし。

廿三番

左

しのにをるあたりも涼し河社榊にかゝる波のしらゆふ

右

楸生てすくあとなれる陰なれや浪うつきしに風渡りつゝ

左右歌。波のけしき。納涼の心。わくへきところ侍らぬに
や。

廿四番

左

霜うつむむくらの下のきり〳〵す有かなきかの聲きこゆなり

右

をくら山ふもとの里に木葉ちれは梢にはるゝ月をみるかな

両首歌。左。暮[illegible]霜底聞ニ暗蛬殘聲一右。寒夜月前望ニ黄葉落
色一。意趣各宜。歌品是同。仍爲レ持。

廿五番

左

よしの山ふもとにふらぬ雪ならは花かとみてや尋いらまし

右

風寒てよすれはやかて氷つゝかへる波なきしかのから崎

右も。うるはしき様に宜侍れと。歸浪なきといへるより
は。花にまかふよしのゝ雪。ふりてや聞え侍らむ。仍以レ左
爲レ勝。

廿六番

左

をしなへて物を思はぬ人にさへ心をつくるあきのはつかせ

右

たれ住て哀しるらん山里の雨降すさむゆふくれの空

左の秋風。右の夕雨。心かれこれにみたれて。又わきかた
く侍れは。持とや申へからむ。

廿七番

左

我こゝろさこそ都にうとからめ里のあまりになかゐしてける

右

ほとふれはおなし都のうちたにも覺束なさは問まほしきを

右歌。姿さひて。いと哀にも聞え侍るを。左なをとゝこほる
所なく。いひなかされて侍れは。まさるとや申へからむ。

廿八番

左

時雨かは山めくりする心かないつまてとのみうちしほれつゝ

右

わかやとは山のあなたにある物を何とうき世をしらぬ心そ
しくれかはとをけることも。いつまてとのみしほれつゝ

へるゝなをゝとるゝと申かたくや。

卅六番

左

逢とみしその世の夢のさめてあれな長き眠はらかるへけれと

右

哀々此世はよしやさも有はあれこむ世もかくや苦しかるへき

兩首の歌。こゝろともにふかく。詞およひかたきさまにみゆ侍るを。右のこの世とをき。こん世といへる。ひとへに風情を先として。詞をいたはらすはみえ侍れと。かやうの歌は。此歌合に取ては。すへて右ましきことに侍れは。なすらへて。又持とや申へからむ。

神風や宮河の歌合。勝劣しるしつくへきよし侍しことは。重くしけ二とせあまりにも成ぬれは。かくれては。宮をまもる神の。ふかく見そなはさんことも恐れあらはれては。家につたはらむことのはにしあさき色たに見えむことをかつはおのみにあらす。わつかにみそもしあまりをつらね侍き。いまた六のすかたの趣をたにしらす。をのつから難波津の跡をならへとも。いつも八雲の行衛。くらくのみ侍るうへに。もろこしのむかしいにしへたにも。いく百とせのうちにや。詩人才子。文輝三變あらたまりにけれは。まして。やまと詞のさたまれる所なき心姿。いつれをあしよしといひ。いかなるをふかしあさしと思ひはかるへしとは。たれにしたかひて。なにをまことゝしるへきにもあらす。時により所につけ。このみ。よみし。ほめ。そしるならひにてそ侍へきし。さるを此歌合は。わさとしくおもひて。合つかはれたるにもあらす。たゝおほくのとし比。つもれることのはをひろひてならへ侍し。ひとふし〳〵。かよへるところとこそ思ひ合つゝ。左右にたてられて侍れは。ことの心葉に。歌のすかた高くして。昔よりもはかりかたし。つもゝ哀はふかけれと。寄閑の草のみしかき言葉にみたれてかきあらはさむかたもなく。おもふふししけゝれと。浪路のあしのうきたる心のみ。たゝよひてうち出へきことも。おもひたかへられぬれは。春のあらたのかへし。思ひやみぬへくなりぬれと。ひしりのちきりをあふき奉ることゝも。此代ひとつのあたのよしみにもあらす。佛の道に。さとりひらけむあしたは。ひるかへす縁と。むすひをかむためにとも思ひ。又は高きいやしき。そこら道をこのむともからをゝきて。よはひいまた三そちにをよはす。位猶いつゝのしなにしつみて。三笠山の雲のほかに。ひとり拾遺の名をはうち九重の月のもとに。久しく陸沈められへにくたけたる。淺茅の末。葎の下のちりの身を恐て。うらのはまゆふのかさなれるあと。まさきのかつら。たえぬみちはかりをあはれみて。鈴鹿の關のふりはへ。八十瀬の波のたちかへりて思ゆゑあり。なをかならすつとふをけしと侍しかは。宮河の淸きなかれに。ちきりをむすひ。位山のとゝこほる道まても。御しるへや侍るとて。今きゝ後みむ人のあさけりたもしらす。むかしをあふき。古きを忍ふこゝろひとつにまかせて。かきつけ侍りぬるになん。

昔はまつうき世の夢はさめぬとも

おもひあはせむのちの秋

かへし

春秋をきみおもひ出はわれはまた

月と花とをなかめをかなむ

文治五年八月日書之寫之　清書伊經朝臣云々。銘左大將殿。此本。烏丸殿御本申請也。

古今著聞集云

圓位上人。昔よりみつからかよみをきて侍歌を。撰出して。卅六番につかひて。御裳濯川歌合と名付て。色々の色紙をつきて。慈鎮和尚に清書を申。俊成卿に判の詞をかゝせけり。又一卷をは。宮川歌合となつけて。これもおなし番につかひて。定家卿の五位侍從にて侍けるとき判せさせけり。諸國修行の時も。おひに入て身をはなたさりけるを。家隆卿のいまたわかくて。坊城侍從とて。寂蓮か聟にて同宿したりけるに。來ていひけるは。圓位は往生の期すてに近付ぬ。此歌合は。愚詠をあつめたれとも。秘藏の物なり。末代に貴殿はかりの歌よみは有ましきたは。おもふ所侍れは。付屬したてまつるなりといひて。二卷の歌合をさつけゝり。けにもゆゝしくそさうしたりける。彼門非重代の身なれとも。よみくち世のおほえ人にすくれて。新古今の撰者にくはゝり。重代の達者定家卿につかひて。其名をのこせるいみしき事なり。まことに後鳥羽院。はしめて歌の道御さた有ける比。後京極殿に申合まいらせられけるとき。彼殿奏せさせ給けるは。家隆は末代の人丸にて候也。彼か歌を。まなはせ給ふへしと。申させたまひける。これらをおもふに。上人の相せられける事思ひ合せられて。めてたくおほえ侍なり。彼二卷の歌合に(いまた)宰相局のもとに傳はりて侍にや。

右二歌合以古寫二本校合畢且拔出古今著聞集以備考證也

和歌部七十三　自歌合二

慈鎮和尚自歌合

大比叡十五番　小比叡十五番
聖眞子十五番　八王子十五番
客人十五番　十禅師十五番
三宮十五番

大比叡十五番日吉社歌合

一番

左持

しかの浦や波まにかけをやとすかなわしのみ山のあり明の月

右　　　　　　　　摂政

いにしへの鶴のはやしに散花の匂ひをよするしかの浦かせ

歌のみちは。あきつしまのならひ。日のもとの国のことわざとなりにければ。此世にむまれ出るおとこ女。我国にあとをたれたまふ明(神脱歟)ほとけも。このみちにてあそひ給ふなるへし。世中にも。いにしへより此道をこのみへるともから。折々に絶てるへし。いはゆる。あかりては。柿本人麻呂。山邊赤人。それよりくたりては。在原業平朝臣。花山僧正并素性法師。紀貫之。凡河内躬恒。忠岑等なり。歌のよしあしきをも。かやうの人々やおもひわくへかりけむ。今のよにはいかなるをよろしきといふへきそとも。しれる人はかたかるへし。しかるに今二百首の和歌を百番につかひて。七の御社の寶の御前に。おの／＼十五番にてたてまつり給ふことあり。よりてこのおとりまさりをしるしたてまつるへきよし仰かうふること。かつはかむことにことをよせ。且は結縁のためなり。しゐていなひ申さは。ほいなくもなりぬへく。かくれてのおもひもありぬへし。またしりかほにして申せは。既未得謂得。未證謂證の罪をさりかたく成ぬへければ。神事といひ。結縁といひ。のかれかたきによりて。天狗のつねくれなくひ。犛牛の尾をあひするかことし。おろかなる心。みしかき詞にまかせてしるし申へきなるへし。ねかはくは。和光同塵のあはれみにてらして。みそなはしゆるされむことをなむ。かしこみも申といへることしかり。扨一番のつかひ。左。鷲の峯の秋の月光をやとし。右は。鶴の林の春の花匂ひをよせたる。両方の本地。春秋の花月。いつれを勝と申かたきによりて。同し品とす。

二番

左勝

しかの浦にいつゝの色の波たてゝあまくたります古への跡

右

おほけなくうき世のたみにおほふかな我たつ杣のすみ染の袖

定右歌は。はしめの五文字より。心おほきにこもりて。末の句ひまで。いみしくおかしくは侍るを。左方。志賀のうら波の色。ことに身にしむこゝちして。いにしへのあと。猶たちまさるへくや侍らん。

三番

左持　立春

あさみとり春は霞のたつた山よはにや年もひとりこゆらん

右　[illegible]

よしの山はつ春風のけさはまつ櫻かえたをいかゝとふらむ

左は。たつたの山のよはの霞。右は。よし野山の春風。ところさまも。歌のすかたも。ともに艶には侍るを。猶左の。よはにや年もといへる。まさると申へくや侍らむ。

四番

左　　山ふかくすむころ花をみて

柴の戸に匂はむ花はさもあらはあれ眺てけりな恨めしのみや

右勝　すけののち花をみて　　釋　　阿

雲のうへの春こそ更にわすられね花はかすにも思ひいてしを

左のうたは。心かきりなくふかくこそみえ侍れ。右の歌。是はむかしよめりけむ歌七首。結縁のためしるしたてまつれと侍しうちの歌にこそ侍りけれ。此歌。ことなることと侍らす。たゝ花は數にもといふ末の匂ひにこそ。よろしくおもひ給ひて。しるし奉りけるに侍れ。たゝいさゝかもかきりたる所なく。申へきよし侍りしかは。末の匂ひはかりはすこしよろしきにや侍らむ。かへすく〵も。かたはらいたく侍り。

五番

左持　更衣

散はてゝ花のかけなき木下にたつことやすき夏衣かな

右　　卯花

このころは櫻か枝に雲はれて卯の花かきに月をみるかな

左は。かのみつねか春をおもはぬときたにもといふ歌を。更衣にひきよせたり。たつことやすき夏衣かなと侍り。誠におかしくこそ侍れ。右又。櫻かえたに雲はれて卯花垣に月をみむこゝろ。いみしくみえ侍れは。いつれを勝と申かたくなむ。

六番

左勝　秋の歌の中に

草木まて秋のあはれを忍へはや野にも山にも露こほるらん

右　　同

野へことにくさの袂のしほるれは露にそみゆる秋の哀は

左右のうたの哀は。心すかたいつれとなく侍れと。しゐて吹も侍れは。右の歌の中に。しほるれはといひ。下句に秋のあはれはとはへりけるを。みたまへいたして。歌合にかやうのことまては。とかとせぬことも侍れと。是にことをよせて。左まさると申へくやとそ。おほえ侍る。

七番

左[illegible]　大宮のはし殿にて

照月の光とゝもになかれきておとさへすめる山川の水

右　　月あかきよ大嶽をのほるとて

大たけの峯ふく風に霧はれてかゝみの山に月そくもらぬ

峯ふく風に霧はれてといひて。かゝみの山みわたされむほと。誠にすかたもたかく侍るを。左の歌。光とゝもになかれきて。音さへすめる山河のけしき。かきりなくや侍らむ。

八番

左持　月の歌の中に

月かけの入ぬるあとに思ふかなまよはんやみのゆくすゑの空

右　おなし

かへりいてゝのちのやみちをてらさなん心に宿る山のはの月

此左右のうた。又いりぬるあとにおもふかなといひ。心に宿る山端の月と侍る。すかた心ともにふかくして。およひかたく侍り。よりて持と申へくや。

九番

左勝　冬のうたの中に

なかめわひぬたつたの里の神無月この葉ふみわけとふ人も哉

右　おなし

霜さゆる山田のくろのむら薄かる人なしに殘るころかな

左のうた。立田のさとの神無月。まことに心ほそくおもひやられ侍り。この葉ふみ分といふこそ。古今にも侍るを。圓位上人も。よみて侍りしか。これはたつたのさと。めつらしくも侍れは。猶左まさりはへらむ。

十番

左勝　冬のうたの中に

難波かたまつのあらしに雲消て月の氷にをしそたつなる

右　千鳥

よさのうらひとりうきねのかち枕たゝ我ための友千とりかな

左。なにはかた。右よさのうら。所のありさま。ともにおかしくはおもひやられ侍るを。猶月の氷にたつらんをしの羽風。こゝろすかたいますこし艶にや侍らん。左の勝と申へからん。

十一番

左持　初戀

君か宿の荻の上葉のいかならんけふきゝそむるこひのはつ風

右　寄風戀

心あらは吹すもあらなむよひ〳〵に人まつ宿の庭のまつ風

左右歌。けふきゝそむる戀の初風。人待宿の庭のまつ風。ともにすかた心かきりなくみえ侍り。いみしき持と侍へし。

十二番

左勝　述懐

よの中をいまはの心つくからにすきにしかたそいとゝ戀しき

右　同

よをいとふ心のふかくなるまゝに過る月日をうちかそへつゝ

兩首の述懐。いつれを勝と申かたく侍れと。おなしとのみいかゝとて。左のいまはの心。いま少し勝と申へくや侍らむ。

十三番

左勝　無常

なかきよの夢のわかれと思へとも又此世にはあはんものかは

右　同

きのふみし人はいかにと驚けは猶なかきよの夢にそ有ける

左右の無常心すかたともに。ありかたくこそみえ侍れ。又このよにはといひ。人はいかにとおとろけはといへる。いつれをかちと申かたく侍れと。猶左の歌。別の心哀はかきりなく覺え侍るにや。よりて勝と申へくや。

十四番

左勝　報恩舍利講に

けふの法はわしの高根に出しひのかくれて後の光也けり

右　同

諸人のうつもれしなをうれしとや苔の下にもけふはみるらん

左の。わしの高根の歌。まことに及ひかたし。右の。苔の下にもといへる。哀もかきりなくは侍るを。猶かくれての後の光也けりと侍る。ことにめつらしく侍るにや。勝と申へくや。

十五番

左持　塵點本

ゐる塵のつもりてたかくなる山のおくよりいてし月をみる哉

右　未顯眞實

むねの月はけふのみそらをまつとてや四十の雲に雲隱れけん

左の塵點の山。右よそちの雲。ともに勝劣難レ分。おなし科とす。

身のうさはひよしの山も雲やおほふ心の闇に

なをまよふらむ

小比叡十五番

一番

左持

やはらくるかけそ麓にくまそなきもとの光は峯にすめとも

右　攝政

あさ日さすそなたの峯の光こそ山かけてらすあるし也けれ

左の歌。和光の影ふもとにくまなく。右の歌。東方の光。地主とあらはれましますす心。共に無二勝劣一おなし科とす。

二番

左勝　述懷　入道殿

をのつからちかひの塵をさとりえて人にすきたる恵をそまつ

右　同

まつのかとあとを思はぬ身也せはまことに家を出ましものを

右の。まことに家をといへるこゝろも。誠にさることに侍れと。猶左のちかひの塵。ふかくや侍らむ。よりて勝とすへし。

三番

左持　春の歌の中に

田兒のうらの波に霞の色さえて春のみなとのあり明の空

右　同　釋阿

又やみむかたのゝみのゝ櫻かり花の雪ちるはるのあけほの

此右の歌。又恭侍し內也。是は櫻かりと申ことを。人のあしく申方の侍れは。とのついてに申來らんとて。つかふまつられしうへに。すこしはよろしきにやと。おもふ給へ侍りしを。此左のうた。波に霞の色さえて。春のみなとにあり明の月と侍るこそ。いみしくおかしくみえ侍れ。まさると申さまほしく侍れと。かたのゝみのも。さすかにおほえ侍りて。おなし科にや侍るへからむ。

四番

左勝　花の歌の中に
はな散にとひくる人の別まておもへはかなし春の山かせ
右　同
散る花のふる里とこそなりにけれ我かすむ宿の春の暮かた
左。とひくる人の別まてといへる心。春の風のうらみ。まことにしかるへきことなり。右の歌。又末の句なと。いとおかしくはみえ侍るを。なを左はすこしまさるへくや侍らむ。
五番
左持　郭公
郭公きゝつとやおもふさみたれに雲の外なる夜半の一こゑ
右　夏草(本ノマヽ)
ほとゝきすなく一こゑのよはなれは秋にはよひの有明の月
左右両首。心ともにふかくして。勝劣不分明。持とすへし。
六番
左勝　秋の歌の中に
身にとまるおもひを荻のうはゝにて此頃かなし夕暮の空
右　鹿の歌
むへしこそ此頃物はかなしけれ秋はかりきくさをしかの聲
両方のこゝろ。いつれまさるとおもひ分かたく侍れと。猶左。おもひを荻のといへる心。まさるへくや侍らむ。
七番
左勝　月の歌の中に
きよみかた月の光のさえぬれは波のうへにも霜はをきけり
右　同
うちよする波にあり明の月さえて秋やかなしきすまの關守
左。きよみかせき。右。須磨のせき。所のさまの。月の光も。あはれふへき方侍るにとりて。左波のうへにも霜はをきけりといへる心。猶めつらしさもかきりなくみえ侍り。勝とすへし。
八番
左勝　秋田
わきてなと庵もる袖のしほるらんいなはにかきる秋の風かは
右　秋の歌の中に
あはつのゝ尾花かもとに吹こめて風になみこす山おろしかな
此両首。又さらに甲乙わかちかたく侍り。右尾花か下に吹こめてといへる心。ことにおかしく侍を。しゐてのことに。初の五文字や。すこしさゝへて侍らんとて。左のすかたことは。はしめおはり。をろかなる所なきにやとて。猶左まさるへくや侍らむ。
九番
左持　冬の歌の中に
月をおもふ秋のなこりのゆふ暮に木陰吹はらふ山颪のかせ
右　月あか・りけるよ三位入道のもとへ
霜結る籬のすゝき秋にうへておなしみそらの月をみるかな
右のうた。もとよりかきりなくおもふ給へ侍しを。左歌。木陰吹はらふといへるこゝろ。又おとるへしともみえす。同科とす。
十番
左勝　寄雲戀
戀しぬる夜はのけふりの雲とならは君か宿にや分てしられん
右　同

雲さはく夕のそらを君はよも我たくひとやなかめさるらん

左右の戀。心ともに甚深にして。勝劣なくは侍れと。左の。わきてしられんといへる末の句。猶まさり侍らむ。

十一番

左　述懷

ひとかたに思ひとりにし心には何そむかるゝ身をいかにせん

右勝　同

おもはれとよをそむかんといふ人の同し數にや我もなりなん

兩首の述懷の心は。ともにふかく侍れと。右の歌。まさるへくや侍らむ。

十二番

左　同

草の庵をいとひてもまたいかゝせん露の命のかゝるかきりは

右勝　同

みやこにも猶山里はありぬへし心と身とのひとつなりせは

左の歌。いとひても又いかゝせんなといへる。こゝろすかたおかしくは侍るを。右の。みやこにも猶山里はありぬへしといふ心。ことにめつらしもみえ侍り。右まさるへくや。

十三番

左　やまひにわつらひけるころ

賴みにし我ふる里の苔の下にいつしかくちむなこそおしけれ

右勝　よをいとふ心ふかきよしなとかたりしことをおもひいてゝ圓位上人のもとへをくりける

世を厭ふしるしもなくてすきこしを君やあはれとみはの山本

此番。又ともにしかることには侍るを。右の。三輪の山本。なをおかしくきこえ侍る。また右まさり侍らむ。

十四番

左勝　月の歌の中に

この本に月も光をやはらけて神さひわたるみねの松風

右　九月無動寺より報恩講をこなひて

さとりゆく雲は高根にはれにけりのとかにてらせ秋のよの月

右の。雲はたかねにといへるすかた心。およひかたくは侍れと。左の。月のひかりをやはらけてといへる嶺の松風。猶身にしむ心ちし侍り。よりて左まさると申へくにや。

十五番

左勝　金剛界五部をよみける中に

今はうへに光もあらし望月とかきるとなれはひときはの空

右　菩薩十度をよみける中に智惠波羅密を

これそさはうき身をやかて佛そと心えつへきこゝちこそすれ

右の。うきみをやかて佛そと侍るも。まことにたとくは侍れと。なを左十五夜の月。うへなくや侍るへからむ。

深山河はやきしるしをたのむとてたにのつらゝのなをむすふらん

聖眞子十五番

一番

左持

九品の玉のうてなの光こそ三のひしりのかけとなりけれ

右　攝政

道かへて此よにあとをたるゝ哉おはりむかへん紫の雲

左ハ玉臺光。右ハ紫雲色。難レ分之上。共に爲二神事一勝劣なくや侍らむ。よりて可レ爲レ持。

二番

左勝

もろ人のねかひをみつのはま風に心すゝしきしての音哉

右

我かねかふその古へに吹かへせひしりのあとをはらふ谷風

左濱風。右谷風。ともに心もすゝしき。いにしへもまことに吹かへらんとみえ侍れは。おなししなとすへし。

三番

左　霞

春かすみふしの煙にやとかりていくへの山をへたてきぬらん

右勝　橋上霞

かつしかやむかしのまゝのつき橋を忘れすかゝる春霞かな

兩方の霞。左は。富士のけふりにやとかれる心。めつらしくみえ侍るを。右は。かつしかやまゝのつきはし。ことふりたるやうに侍るを。むかしのまゝのとつゝけるに。末の句もことふりすきこえて。右勝とす。

四番

左持　花

よしの山猶しもおくに花さかは又あくかるゝ身とや也なん

右　同

おもふへしことし計となかめきてよそちの春の花になれぬる

左右の花。右は。はしめの句おかしくをかれ。よそちの春になれぬる心も。哀おほく侍るを。左の。なをしもおくにといへる心。ことにめつらしくも侍るにや。よりて左まさるへくや。

五番

左勝　五月雨

山里の雪にはあともいとはれきとへかし人の五月雨のころ

右　夏のうたとて　釋阿

匂ひくる花たちはなの袖のかに涙つゆけきうたゝねの夢

此右歌。七首のうちに侍りけり。是はたゝうつゝとなく。むかしをしのふはかりに侍り。左雪にはあともといひて。とへかし人のなといへるすかた。ことにいみしくおかしく侍り。尤以レ左可レ爲レ勝。

六番

左勝　七夕

たなはたの心やそらにはれぬらん雲の衣に秋の初かせ

右　同

なか〳〵にやみなるへしと思ひけり秋の七日のほしあひの空

兩首七夕。すかた詞。ともにえんに侍るを。左の末の句。ことにおかしさまさるへしと申侍へし。

七番

左勝　古郷鹿

古さとの庭のあるしと成にけりのこりし野への棹鹿の聲

右　秋の歌の中に

移しうへしもとの野へにそ歸りゆくあれて嬉しきませの内哉

左右の秋歌。ともにすかたおかしく。心ふかくは侍るを。猶残りしのへのさをしかのこゑ。おかしくきこゆ。又以レ左可レ爲レ勝。

八番

左　　月のうたの中に

あけ闇の月のゆくゑをながめてその寺のかねは聞へかゝりける

右勝　同

人ぬれよなみたの露に影とめて月はたもとに有明の空

両首ありあけの月。又ともにおかしくは侍るを。右の。月はたもとにとあり聞のそら。猶ありかたく侍るにや。よりて右勝侍へくや。

九番

左　　冬のころ山さとにて

冬かれの梢にあたる山風の又吹たひは雪のあまきる

右勝　同

み山木ののこりはてたる梢より猶しくるゝはあらし也けり

左歌。心詞閑寂の風情也。但右歌。のこりはてたるといひ。猶しくるゝはなといへる。すかた心ともによろしく聞え侍り。まさるへくや侍らん。

十番

左　　後朝戀

歸るさの月そかなしきまとろまてやかて有明を眺めしよりも

右勝　曉戀

あかつきの涙や空にたくふらん袖におちくるかねのをとかな

両首の戀のすかた同。無二勝劣一は侍るを。右の。袖におちくるかねのをとかなといへる心。猶かきりなく侍るへし。又右爲レ勝。

十一番

左持　述懐

世中をおもひつゝけてねをなけは心の月の袖にうつれる

右　　同

いかにして今まてよには有明のつきせぬものをいとふ心は

左の心月。右の有明。ともに心ふかくして。勝劣難レ分。同科とすへし。

十二番

左持　無常

とりへ山よはの煙のたつたひに人のおもひやいとゝそふらん

右　　同行におもひける人うちつゝきはかなくなりければおもひいてゝ

古さとをこふる涙やひとりゆく友なき山の道芝の露

左右の歌。心すかた。又おなし科に侍へし。

十三番

左　　七宮かくれ給ふて雲林院に後のわさなとしてかへりてのち

かなしさを雲の林にとめしより涙の雨そはるゝまもなき

右勝　同周忌の日御はかにまいりて

そこはかと思ひ續けてきてみれは今年のけふも袖はぬれけり

左。雲の林に涙の雨なと。よせある風情。おかしく侍るへし。右ことしのけふもといへるすかた。猶まさると申へくや侍らむ。

十四番

左持　秋のころ故内大臣のさかの墓所にて念佛おこなひけるに

山さとは袖の紅葉の色そこきむかしをこふる秋の涙に

右　　勸性法橋かくれてのち西山往生院にて如法經行せんとてまかり入たりけるに

たつね入我たもとには露おちて昔のあとに秋風そ吹

雨首。左は。むかしたこふるあきのなみた。右は。むかしのあとの秋風。ともに哀あさからす侍り。勝劣なかるへし。

十五番

左勝　金剛界五部の中に蓮花部を

半天のおなし光の迦いる丞字の蓮のむねにひらけん

右　妙法蓮花を

わしの山八とせの法をいかにして此花にしもたとへそめけむ

左の。きりくの字。右の。妙法蓮花。勝劣におよふへからすや侍らむ。よりておなしなとす。

いかにみる西にこゝろはかくれともなをたちかへるしかのうらなみ

久置レ願二西土之蓮一轉可レ留二東湖之御一故云。

八王寺十五番

一番

左持

山河の底にやたれもしつまらしちゝのてことに渡さゝりせは

右　攝政

枯はつる梢に花も咲ぬへし神のめくみの春の初かせ

左歌。千手の誓願の心。まことにたのもしく侍る事なり。右歌。神のめくみの春の初風。又そのしるし。忽にみえぬへくおほえ侍る上。神事のつかひは。しゐて勝劣あるへからすと侍るなり。

二番

左勝

をしなへてひよしのかけは曇らぬに涙あやしき昨日けふかな

右

ねかはくはしはしやみちにやすらひてかゝけやせまし法の燈

此両首こそ。まことになみたあやしきほとにおほえ侍れ。おほかた歌合の判は。ことにほめす。ことに難せすとかや。やうやうしく申者は。申ことに侍れと。よろしきを不二稱讃一無レ謂事也。右歌の心。又愚老か心願。やゝをこるところの趣なり。其心已に聖眞子の十五番のおくに申出侍り。但左の。涙あやしきと侍る末の句。まさると申さすは。いかゝとおほえ侍りて。勝と申へくや。

三番

左持　春のころ大乗院より人のもとへ遣しける

みせはやなしかの唐崎ふもとなるなからの山の春のけしきを

右　春の歌の中に

かほりくる花の春風身にしめて山こえくらす志賀の里人

左の。なからの山。右の。志賀の里人。ところのさま。おもかけおかしく。歌のすかたことはも無二勝劣一侍れは。おなしなとす。

四番

左勝　春のうたの中に

空も海もひとつに霞波ちかなあまの釣舟かへるかりかね

右　歸鴈

なみたをや霞の袖にかしつらむ春に別てかへるかり金

春にわかれてといへるすかた。まことにかすみの袖に。涙

かゝるらむとおほえ侍るを。左の。ひとつにかすむらん。
浪路眺望の心おもかけ。ことにおかしくや侍らん。

五番

左勝　夏歌よみける中に

曇るよの月にたとへん時鳥なかてはれぬる五月雨の空

右　夏夜

なつの夜の數にもいれし郭公きなかぬさきにあくるしのゝめ

左歌。月にたとへんといへる心。又ことにめつらしく侍るにや。勝と申へし。

六番

左勝　月の歌あまたよみける中に

みかつきのほのめきそむる高ねよりやかて秋なるそらの通路

右　海邊夕月

なにはかたみちくるしほを光にてあしへにやとる夕月夜哉

ほのめきそむるたかね。やかて秋のかよひちなるらんこと。これもことにおかしくきこゆ。まさると申へし。

七番

左勝　雁

いかにせんふしみの里のあり明にたのむの雁の月になく也

右　秋の歌の中に　釋阿

夕されは野への秋風身にしみてうつらなく也深草のさと

此右の歌。崇德院の御時の百首の中に侍り。これ又ことなることなく侍り。たゝ伊勢物語に。深草のさとの女のうつらとなりてといへることを。はしめてよみて侍しを。かの院もよろしき御けしき侍りしはかりに。註し申て侍りしを。左の歌。ふしみの里の月になくらん田面の雁。いみしくおかしくこそ侍れ。尤左勝侍るへし。

八番

左勝　秋のくれに

なか月もいくあり明になりぬらんあさちか霜のいとゝさえ行

右　秋霜を

紅葉はゝをのかそめたる色そかしよそけにをけるけさの霜哉

よそけにをくらむ霜も。まことにおかしく侍るを。左の歌いくあり明にといへる心。なを豔におほえ侍り。又左まさるへくや。

九番

左勝　冬の歌の中に

初せ山霜にことふるよはのかねもろくもさそふ風のをとかな

右　同

しなかとりいなのたひねのさゝ枕霰にたとる夢ちなりけり

いなのたひねのさゝ枕。いみしくおかしく侍るを。初瀨山のよはの鐘を。もろくさそふらん風の音。所のさまも。たちまさりてや侍らむ。

十番

左勝　寄關戀

人こふる我なかめよとおもひけりすまのせきやの有明の月

右　旅戀

東路のよはのね覺をかたらなん都の山にかゝる月かけ

須磨のせきやのありあけの月。歌のすかたも。所のさまも。豔に侍るへし。

十一番

左勝　海路

なかむれは霞も月もはてそなき春と秋との波の通路

右　同

ときいてゝ今は興にもなりぬへし峯の松風聲よはる也

兩方の海辭。心詞勝劣なくは侍るを。左の春の霞。秋の月。波ちさひしくなれたるほと。猶心ほそさまさるとや申へからむ。

十二番

左　山家

人はなし嶺に松風まとに月しめえてすめる山の奥かな

右勝　同

岡のへの里のあるしをたつぬれは人はこたへす山おろしの風

左の。峯の松風。窓の月。山のおくのすみか。たのもしくは侍るを。右の岡のへは。さまてふかゝらす侍れと。人はこたへさらん。山おろしの身にしみて。すこしはまさるへくや。

十三番

左持　山里

山ふかみ淋しさ宿の主とはなりおほせたる身にもあるかな

右　同

山里にとひくる人のことくさは此すまゐこそうらやましけれ

二首の山居。左なりおほせたらん心もおかしく。右のとひくる人のことくさも。さそ申おもひけんと共に無勝劣。

可レ爲レ持。

十四番

左勝　百首歌の中に

人はみな哀もしらてやみなまし秋のゆふ暮春のあけほの

右　無常

よもきふにいつかをくへき露の身はけふの夕暮あすの明ほの

左右の兩首。すかた詞おかしく侍れと。左の。あはれもしらてやみなましといふ心。なをまさるへくや侍らむ。

十五番

左持　心念不空過

をしなへてむなしき空とおもひしにふち咲ぬれは紫の雲

右　内秘菩薩行

いにしへの鹿なくのへのいほりにも心の月は曇らさりけり

左。心念不空過。右。内秘菩薩行。紫雲心月。詞よせおかしく侍り。勝劣なかるへし。よりておなししなとす。

らくひすのえたのうつりにまよふかな
かれたる木たに花はさけとも

客人十五番

一番

左

數々にあはれふもとを頼むかなこしちの雪の深きちかひに

右勝　攝政

こゝに又光をわけてやとすかなこしの白根や雪のふる鄕

左右ともに。こしちの雪によせて。弘誓のふかきこゝろ。おかしく侍るを。右の。こしの白根や雪のふる鄕は。すこしまさるへくや侍らむ。

二番

左

數ならぬみくつもすてすてらすこそ塵にましはる光也けれ

右勝

ふるき風をいかて御山にふかせまし葛のうらはの返す〳〵も

有歌。心猶弘誓なり。深山古風定吹返侍らん。勝と申へくや。

三番

左　花の歌あまたよみける中に

咲そむる花の梢をなかむれは雲になりゆくみよしのゝ山

右勝　同

よしの山雲の岩ねにちる花はかせよりおつる瀧の白いと

雨首吉野山。左。雲になりゆくらんこゝろも。おかしく侍るを。右。雲の岩根にちる花。かせよりおつらん瀧のしら糸。ことにおもしろくや侍らん。

四番

左　同

松風になかめし秋は花ゆへにいとふへしとは思はさりしを

右

花さかり霜も時雨も露もなしひとりつらきは春の山風

左歌。時につけつゝ心もかはりゆく事。まことにあはれなる物に侍り。山家秋は。桂の月すこくてらし。松風しつかに吹をくりたり。まことに身をわくるこゝちこそし侍れ。すへて春の風は。いとはしかるへし。左まさるへくや侍らむ。

五番

左持　夏の歌の中に

雲まよふ夕に秋をこめなから風もほにいてぬおきのうらへ哉

右　同

夕まくれ野澤に夏を忘水けに秋ちかくとふほたる哉

左。夕にあきをこめなからといへる心。いとおかしく侍り。右又野澤に夏をわすれ水なと。詞つゝきいつれを勝と申かたし。持に侍へし。

六番

左　待月眠山

いとはしな山のはもなき波ちにもまたては月のいつる物かは

右勝　月の歌の中に

ゆめかとておとろく計はれにけり雲の衣をかへす月かけ

左。またても月のなといへるすかた。えんにこそ侍るめれ。右。雲の衣かへす心。なをおかしくや侍らむ。

七番

左勝　秋歌の中に

夜半にたくかひやか煙たちそひて朝霧ふかしをやまたのはら

右　同

もしをやくけふりも霧にうつもれぬすまの關屋の秋の夕暮

須磨の關屋は。すへて折につけてをろかならぬを。まして秋の夕くれ。おもひやらるゝを。左。小山田のかひやの煙たちそふらん朝霧。心ほそくや侍らむ猶かちと申へくや。

此間闕

九番

左　雪の歌の中に

庭の雪に我あとつけて出つるをとはれにけりと人やみるらん

右勝　同

今朝みれは雪もつもりの浦なれや濱松かえの波につくまで

左。とはれにけりといへる。いとおかしくみえ侍り。右の。つもりの浦の松の雪。ところもさまも。猶おもかけおほえ侍りて。まさると申へくや。

十番

左勝　恋の歌の中に

うちかへし思ふ心になくさめて恋にやとかる我涙かな

右　忍恋

たゝたつめたとへは人の僞をかさねてこそは又もうらみめ

左右の恋。ともに心ふかくきこえ侍るを。なを左。恋に宿かるらん末の句。めつらしくも侍るにや。まさるへくや侍らむ。

十一番

左持　旅歌

東路やきよみかせきの月のよをかそへてこそは思ひたちしか

右　同

契つゝ雲ゆく月のゆく末を思ひもいてようつの山もり

南方の旅の心。いつれをまさるゝ申かたし。左。清見か関の月の夜。まことにきこそかそへて。おもひたつへくとおほえ侍り。右うつのやまもりに。月のゆくゑまておもひ出よと。まことにいはまほしかるへし。よりておなししなとす。

十二番

左　同

たひのよに又たひねして草枕ゆめのうちにも夢をみるかな

右勝　百首歌の中に

いける身の浮世の波にたゝよひてくるしき海の舟をしそ思ふ

左。夢のうちにもゆめをみるらん心。おかしく侍るを。右うきよの波にたゝよひてと侍るも。とり〳〵におほえ侍れと。右末の句。あかしのうらの朝きり。思ひ出られて。おはりの句の。心ことはこもりて。まさると申へくや。

十三番

左　述懐

哀にも心のすむによせし身のやかて心の宿となりぬる

右勝　同

せめて猶うきよにとまる身とならは心のうちに宿はさためむ

左右の述懐。ともに心ふかくはみえ侍るを。右うきよにとまるといへるをろかなる心にも。所存侍るにやと申へし。

十四番

左持　同

さし離れ三笠の山をいてしより身をしる雨にぬれぬ日そなき

右　同

法の門に心をいれておもふかなたゝうきよをは出へかりけり

左。三笠の山をはなれて身をしる雨にぬれ。右。法門に心をいれて。うき世をいつへかりけりといへる心。ともにとはもかなへり。同科とすへし。

十五番

左持　或住不退地

わしの山けふきく法のみちならてかへらぬやみに行人そなき

右　金剛界五部の中に金剛部を

たのもしなうきよの中のやふれやにひとりくたけぬ法の里人

両方又勝劣なかるへし。

よるの鶴かた／＼おもふ籠のうちを
かたちをわけてあわれともみよ

十禪師十五番

一番　左持

木の本のちりにましはる影ならは朝日待まのやみいかにせん

右　摂政

木のもとにうきよをてらす光こそくらき道にも有明の月

左、朝日まつまのやみに。忉利天の御付囑たのもしく侍ことも也。右また。くらき道にもあり明の月。すかた詞もおかしく侍り。勝劣なかるへし。

二番　左持

我たのむ日吉のかけは奥山の柴の戸まてもさゝさらめやは

右　山こもりして侍りけるころ騒動出来てのこりもなく離山しけるにたゝひとりゐて初雪のあしたに靜圓法師かもとへ

いとゝしく昔のあとやたえなんと思ふもかなしけさの初雪

此左右の歌。もとより愚意難忍して。集に注入侍りし様にこそおほえ侍れとて。更勝劣なかるへし。よりて猶おなしなとす。

三番　左持　花

梢には花のすかたをおもはせてまつ咲ものはらくひすの聲

右　同

花の色や猶こからまし匂ふ枝に山ほとゝきすすへてみたらは

両首の花の色。左の鶯の聲まつさま。右は郭公すへんも。おかしく侍るを。猶左の鶯のまつさく花ならん。ことことにめつらしく侍らんや。以左爲勝。

四番　左　殘春

山のはに匂ひし花の雲きえて春のひかけはあり明の月

右勝　三月盡

紅に霞の袖もなりにけり春のわかれのくれかたの空

くれかたの空。かすみ色ふかき。ことに艶に侍るへし。仍以右爲勝。

五番　左　夏の歌の中に

山かけや岩もる水の音さへて夏のほかなるひくらしのこゑ

右勝　同

夏ふかき嶺の松かえ風こえて月影すゝし有明のやま

左。夏のほかなる日くらしの聲。いみしくおかしく侍るを。右の有明の山。ことにありかたく聞ゆる。勝に侍るへし。

六番　左持　立秋

それもなをけふこそぬしの身にはしめ心より吹秋のはつ風

右　秋の歌よみける中に

人わかぬ荻のうは風吹ぬ也山風ならす秋の夕くれ

両首の秋風。左心より吹。右山風ならす。更無勝劣。おなしなとす。

七番

左　　月の歌の中に

秋のよの月のあたりのむら雲を拂ふとすれはおきのうはかせ

右勝　同

月かけの身にしむをとゝなる物は光をわくる峯の松かせ

左。はらふとすれは荻の上風。いみしくおかしく侍るを。光をわくらむ峯の松風。ことに身にしむ音とならむとおほえ侍れは。右なを可レ爲レ勝。

八番

左持　鹿

山里のあかつきかたの鹿の音はよはの哀のかきりなりけり

右

鹿の音をゝくるあらしにしられけり山のおくなる秋の哀は

兩首の鹿の聲。左の。よはの哀のかきり。右の山のおくのあはれ。ともに無二勝劣一。

九番

左　　冬のころ人のもとへつかはしける

ひきかへて淋しさみかく野への月こほらぬ露にやとりし物を

右勝　女御入内屏風に加茂の臨時祭かきたるところ　　釋阿

月さゆるみたらし川にかけはみえて氷にすれる山あゆの袖

左。こほらぬ露にとゝいへる。いみしくおかしくこそ侍れ。右又。屏風の歌のうちを。注し申て侍りけるなり。みたらし川に月さえなとは。つねのことなるを。こほりにすれるといへる心はかり。すこしおもかけおほえ侍る。よりて御屏風の歌とりてたてまつれと侍りしにも。つたなき歌の中には。是偏點をあはせ侍りし也。よりて猶左の歌に勝ると申侍らむ。かたはらいたきこと。よろしからすこそおほえ侍れ。

十番

左持　戀

玉つさのあしたになしと詠つゝゆふへの空にかり鳴わたる

右　同

わか戀は庭のむら萩うらかれて人をも身をも秋の夕暮

兩首の戀。左の玉つさの朝になかりける。夕の空の鴈書のつらなりけんこゝろ。いみしくおかしく侍るを。右の歌。ひとをも身をも秋の夕くれ。又其心深。同科也。

十一番

左勝　百首の中に

昔おもふ高津の宮のあとふりて難波の芦にかよふ松風

右　同

秋風にふしの煙のなひけるを待とる雲も空にきえぬる

右。難波のあしにかよふ松風。ことにさひてきこゆ。勝侍らむ。

十二番

左　　述懷

思ふへき我後のよはあるかなきかなけれは社は此世にはすめ

右勝　同

世の間のうつゝの闇にみる夢のおとろく程はねてかさめてか

左右の述懷。ともにふかくはみえ侍れと。右おとろくほとは。ねてかさめてかといへる。ことにおかしくきこゆ。まさると申へくや。

十三番

左■　圓位上人横川より此たひ待人つることのむかしすけし侍しその月日にあたりて侍ると申かへせしに

うきよ出し月日の蔭のめくりきてかはらぬ道を又てらすらむ

右　同行にちきれる人さきたちて大原にこもりけるに

世をいとふ心のそらの廣ければ入こともなき月もすみなん

左。月日のかけのめくりきてと侍る詞の露。いますこし岩本ノマヽ、ふるさうにみえ侍り。

十四番

左　無常

我もいつけあらましかはとみし人を忍ふとすればいとゝ添行

右■　同

はかなさにいかて耐まし是そ此よのことはりと思ひなさすは

左右ともに。すかた詞おかしく侍るを。おほくもといふ歌なとも侍るを。右の歌。世のことはりといへる心。ことはりしかるへし。めつらしくも侍るにや。勝と申へくや。

十五番

左■　菩薩十度中檀波羅密

今は我山のはちかき月をたにおしむましとそおもひしりぬる

右　法師品

心すむ草の庵の法の水にうれしく月の影やすむらん

南方■方なく侍るにや。よりて持とすへし。なを歌のみち。かやうにしりかほに申侍る事。かへすかへすかたはらいたく侍れと。且は冥慮をおそるゝによりて。所存かきれて申のふへく侍るなり。おほかた歌は。かならすしもおかしきよしをいひ。ことのことはりをいひきらんとせされとて。もとより詠歌といひて。たゝよみあけたるにも。打詠したるにも。なにとなくえんにも。幽玄にもきこゆることのあるへし。よき歌になりぬれは。其詞すかたのほかに。景氣のそひたるさうなることあるにや。たとへは。春の花のあたりに。霞のたなひき。秋の月のまへに。鹿の聲をきゝ。かきねの梅に春風の匂ひ。みねのもみちに。時鳥のうちそゝきなとするやうなることの。うかひてそへるなり。つねに申やうには侍れと。かの月やあらぬ春やむかしといひ。結ふ手の雫ににこるなといへる。なにとなくめてたくきこゆるなり。かやうなるすかたことはに。よみにせんとおもへるうたは。ちかきよにはありかたきことゝなるを。このちかきとし（上既歟）りこのかた。見え侍る御百首にも。かつはこの御歌合そ。誠にありかたき事とはみえ侍れ。すへてこのみちは。いみしくいはんとおもひ。ふるきものをも見つくさむとするにも。さらによらさるへし。且はたゝ前世のちきりなるへし。すへて詩歌のみちも。大聖文殊の智惠よりをこれることとなれは。文殊の垂跡も。此みきりにはあとをたれ。社檀をならへておはしませは。此歌合をは。いつれにもいかはかりもてあそひ。御納受侍らむすらん。當來普賢如來も。ひかりをやはらけて。あまねくみそなはすらむとそおほえ侍る。

うけかたきうき身なりとてまよはする

みのりの月のいりかたのそら

三宮十五番

一番

左勝

三の山散しく法の花みれは我ちからそとしたひきにけり

右　　　　　　　　　　播　政

みな人のつねにしたかふちかひよりあまねく匂ふ法の花哉

左右。法花守護の心。ともに勝劣なかるへし。たゝし左。猶三の山にちりしくらむ心。少しまさるへくや侍らん。

二番

左勝

わかたのむなゝの社のゆふたすきかけても六の道にかへすな

右

末をくめ我山河の水上にみのりの淵はあるとしらすや

左。七の社のゆふたすきかけてもむつのみちなといへる心。ことにおかしくや侍らん。

三番

左　春の歌の中に

むさしのゝ春の景色もしられけり垣根にめくむ草のゆかりは

右勝　同

霞しく松浦の沖にこきいてゝもろこしまての春をみる哉

左。かきねにめくむ草のゆかり。おかしくは侍るを。右まつらのおきに。もろこしまてに春をみるらむ心。なをおよひかたく侍へし。

四番

左勝　花の歌の中に

花はによし野の山はみわの山春のしるしはたちまさるらん

右　同

雲は花はなは雲とてけふ過ぬ高ねはるけし春の夕暮

兩首のすかた心。ともにおかしくきこえ侍るを。なをよしのゝ山はみわの山といへるこゝろ。春のしるしまさるへくや侍らん。

五番

左勝　鵜河

鵜かひ舟あはれとみゆるものゝふのやそうち河の夕やみの空

右　家々納涼

宿からやすゝむけしきもかはるらん板井に清水庭に松風

右。納涼ともにすゝしからんとおほえ侍るを。左やそうち河の夕やみ。歌のたけすかた。ことにみえ侍り。勝と申へくや侍らむ。

六番

左　草花

露むしもはれて哀はそふのへに萩こそよるの錦也けり

右勝　苅萱

ぬしあれと野となりにける籬かな小萱か下にうつら鳴也

左草花。萩こそよるのにしきといへる。おかしく侍るを。野となりにけるといひて。をかやか下にうつらなく也と侍るすかた心。なをふかくみえ侍り。勝と申へくや。

七番

左勝　秋の歌の中に

秋の野のすゝのしのやの夕暮も猶身におはぬすまゐ也けり

右　月の歌の中に

おもひ出る心の末に月さえて深いろある山のおくかな

左。しのや。右山のおく。ふかき心あらん。ともに淺からすみえ侍り。

八番

左　月の歌の中に

山のはにあかて入ぬる月かけは松のあらしにのこる也けり

右勝　月のあかゝりけるよ三位入道のもとへ

もみちふく風のたよりに月落て霜にうらある庭の面かな

左右兩首。左。入ぬる月の松のあらしにのこる心。いみしくふかく侍るを。右もみち吹風に月落霜にうらある心。かきりなくおほゆ。可ㇾ勝哉。

九番

左勝　時雨を

宵のまはもらぬ木葉に袖ぬれて時雨になりぬ曉の空

右　落葉を

しくれつる峯のむら雲はれのきて風よりふるは木葉也けり

風よりふるはといへる心。いみしくおかしく侍り。但左の。時雨になりぬと侍る曉のそら。猶ことにきこえ侍り。左まさり侍らん。

十番

左勝　寄戀

心こそ行衞もしらねみわの山杉の梢のゆふくれの空

右　戀の歌の中に

ふしのねもあさまの山もをのつからたえ〳〵にこそ煙立なれ

兩首の戀。又ともに勝劣なくは侍るを。杉の梢の夕くれのすかた。猶勝へくや。

十一番

左持　百首の中に

とく御法菊の白露夜はをきてつとめてきえんことをしそ思ふ

右　菊を

うきよかなよはひのへても何かせんくますはくます菊の下露

兩首の菊の心。ともに無二勝劣一おなし科とすへし。

十二番

左　述懷

何ゆへに此世を深くいとふそと人のとへかしやすくこたへん

右勝　同

みな人の知かほにしてしらぬ哉かならすしぬるならひ有とは

左右の述懷。又おかしくみえ侍れとも。猶右の末句。まさると申へし。

十三番

左　旅の歌

草枕かりねの夢にいるものはいてし都のあり明の月

右勝　同

かへりにはかさなる山の峯ことにとまる心をしほりにはせん

いてし都のあり明の月。まことに夢にもわすれかたくは侍るへけれとも。とまる心をしほりにせんも。ことにめつらしく侍る。勝へし。

十四番

左持　百首の歌の中に

春も秋もふとにはしかし夏かりのあしのまろやの雨の夕暮

右　旅歌の中に　釋阿

夏かりのあしのかりねも哀也玉江の月のあけかたの空

此たひの歌。又玉江のあしをふみしたきといふ歌ののち。

いともみえ侍らぬとおもひたまへて。玉江の月はよろしきにやとおもふ給へ侍りしを。昔のまろやのあめのゆふ暮と侍りけり。あり明の月にさらにおとるましく侍れは。例のかたはらいたきことかきりなく侍り。

十五番

左勝　乘湛賓車

今そしるけふの車に法の道は門よりほかにありける物を

右　不求自得

身の中にとしつむ人を思ふにももとめてこそは猶えさりしか

左。門よりほかの。右身中。又無二勝劣一同科に侍るへし。

夢にまよふ心のやみもあはれかけて

かならすさそへにしにゆく月

此歌合者。判者俊成入道自筆。判書之正本也。以二信定少納言一令レ書之。爲二七卷一今貽。去建久初比。後京極攝政爲二少納言一之時。予詠歌中。撰二定二百首一（撰百九十首歟）。爲二歌合一七社各十五番。第一番右歌。各詠被レ加レ番レ之。則令二清書一之給。又判者俊成卿所詠歌中。可レ撰二加七首一之由相語開撰進之。仍每社加レ番之。則大宮四番右。二宮三番右。聖眞子五番右。八王子七番右。客人八番右。十禪師九番右。三宮十四番右歌等也。就中當世第一也。予本歌法施之餘。假二世俗法樂一。神國凡俗尤爲レ珍歟。講此法樂被從殊取捨有二沙汰一。如此備レ之。今納二于社寶殿一畢。嚴親攝政（在二法性寺一）。又令二一首給二二宮第二番左歌是也。又判者每侍奥書付二一首詠歌一者也。其後爲書。家攝錄遣。以假來畢任二天台座主一判者入道又保二九十算一納受之至也。又其後上皇令レ好二和歌道一給之間。仁和寺御室守覺法親王等被レ詠二進百首一。其中蒋有二和歌召一。又予餘命及二七旬一之際。詠二百首法樂一剩上皇令レ撰二新古今一給之時。予所詠歌。被レ撰二入八十餘首一。現存之人無二此例一歟。其新古今之後。所詠之百首七ケ度。其中歌定勝レ於二昔詠一歟。仍各申請珍重清書等納二神殿一者也。三十餘年之後。承久三年五月雨之比。亂並（于時天下不レ靜）。後人勿二嘲弄一努々。

右慈鎭和尚自歌合以古寫一本挍合

日吉社歌合 嘉禎元年十二月廿四日奉納之

九條三位入道知家自歌合

判者中納言入道定家

一番　春

左勝

天津空日かけや春をいそくらん霞まぬさきの雪のむらきえ

右

時しあれは袖ふりはへて白妙の雪も消あへすつむ若菜かな

両首ともに。心詞よろしくきこえ侍るを。右は終句や。平懐に侍らむ。仍以左爲勝。

二番

左

古里のみかきか原も今よりは春のうちとや霞こむらん

右勝

我ならぬ人もみるらむ芦かきのあまりに匂ふ春の梅かえ

みかきかはらの春のうち。詞のよせありて優には侍れと。あしかきのあまりに匂ふ春の梅。面影なをえんにや侍らむとて爲勝。

三番

左勝

吹風の袖のやとりの名殘まて匂ひそ花のかゝ(たイ)み也ける

右

今はまた雪とふりつゝ鏡山みしにはかはる花のかけかな

吹かせの袖のやとり。すかたことに美麗にきこえ侍はれ。雪とふりつゝ鏡山も優に侍れと。猶左かつへくや侍らむ。

四番

左持

すかの根のなからの山にいつる日の行かた遠くかへるかり金

右

ちる花のみち行ふりの春風にあともとゝめすかへるかりかね

菅の根のなからの山。行かた遠く。ちる花のみちゆきふり。あともとゝめぬ心。いつれとなくよろしくきこえ侍れは。爲持。

五番

左[持]

山高みうつろふ花を吹風に空にきえ行峰のしら雪

右

おほかたの名こりはかりやつらからん花なき春の別れ也せは

此つかひ。又ともに艶におかしくきこえ侍れは。猶勝負申かたくや。

六番　夏

左

時鳥猶さりともとまたれつゝなかぬにあくる夜をかさぬらん

右勝

此里はこれそはつねの時鳥いつれの山に鳴ふるしけん

なかぬにあくる心。ゆうに侍れと。右は音にあらはれ侍りにけれは。勝へきにや侍らん。

七番

左

村雨のすき行空のほとゝきす雲にとまらぬ遠の一こゑ

右勝

郭公しはしかたらへ柴の戸をあくるほとなき夜半の名殘に
　雨首ともにはしめおはりかなひて。いとよろしくきこえ
　侍れと。あくるほとなき夜半のなこり。猶優にや侍らむ。

八番

　左持

難波江のあしのうきねのみしか夜に枕定［め］す明る空かな

　右

風にちる夜半のほたるの空にのみ思ひみたれて過る比かな
　このつかひ。又ともによろしくきこえ侍れは。爲レ持。

九番

　左勝　秋

木の葉ちる秋のはしめを吹風に我さへ袖に露もとまらす

　右

いつくにか枕さためん袖ぬらす露のひまなきをのゝ篠原
　右の歌も。いとえんには侍れと。左猶こゝろにそむ色や。
　まさり侍らん。

十番

　左

いくかへり山した茂き葛の葉の世を秋風にうらみきぬらん

　右勝

草の原あさ［秋イ］行袖も色つきぬ衣するてふ花のさかりは
　くすの葉の世を秋風。また、いとおかしくきこえ侍るを。い
　くかへり山したしけきとつゝける所や。右の上下かなひ。
　心詞たへなるにはおとりはへらむ。

十一番

　左持

里人の秋のころもやいそくらん夜寒になりぬとこ［よもイ］の山風

　右

篠原や夕霧ふかき道のへに里はるかなる鐘［かりイ］の一こゑ
　雨首また優美なり。爲レ持。

十二番

　左持

すみのほる月ははるかに高砂の峯の木からし夜や更ぬらん

　右

あつさ弓いつるは山の月影にをくほとみゆる野への夕露
　左右の秋月。景氣詞花。又いつれと申かたし。すへていと
　よろしくも侍かな。

十三番

　左持

はかなさを夢にみつゝも秋の夜の永きねふりのはてそ悲しき

　右

山風に紅葉やふかくつもるらんねやもる月の影そすくなき
　左。觀ニ世中如レ夢。秋夜滿ニ長眠ニ有。嵐吹ニ紅葉ニ閇月罷ニ清
　光ニ云レ彼云レ是。又足ニ採覧ニ仍爲レ勝。

十四番

　左勝　冬

秋の色に霜のふりはを吹かへし根もはてぬ庭の木からし

　右

瀧津瀬の音にもたてす氷る夜を猶［にイ］袖さえて夢そむすはぬ
　吹かへす霜のふりは、うらみもはてす。音たてぬ瀧津瀬夢
　そむすはぬ。心すかた又いと優にはきこえはへれと。さの
　みおなしことも興なかるへけれは。以レ左爲レ勝。

十五番

　左

おしますはふみわけつへき庭の雪を心つからに跡やたえなん

右勝

月影のさえしほとそつもりける尾上の松の雪の下道

両首。また風情めつらしく。おかしくきこえ侍れと。雪の色月の影なを見ところおほくや侍らむ。以右為勝。

十六番

左勝

朝な〳〵よそにやはみるますかゝみむかひの岡につもる白雪

右

暮ぬとて身はいそけともあら玉の作をはよそにつもる年かな

右は。そのかみひさしくしつみ侍しとしの暮ことに。なけきをそへはへりし身のうへに。ふかくおもひしられて侍れと。左またはしめをはり。すかたことは。優にあはれにきこえはへれは。為レ勝歟。

十七番　述懐

左〔持〕

時雨つゝ身をしる袖をほし侘ぬ神は日吉の名を頼めとも

右

うれしさをいかなる袖に包むらんうき涙のみ身にあまりつゝ

両首いつれと申かたし。神はひよしの名をたのむ心のすゑ。なからふれは猶うれしさの身にあまる時に。なきには侍られは。自他感應かならすむなしからすこそ侍らめ。只奉レ任ニ神明之加護一。

十八番

左勝

思ひ侘つもる泪のつかねをもたえすそいのるもりのしめ縄

右

〔とのも〕

あら玉のすこか竹かき折ふしに一かたならす世をやなけかん

たえすいのりをかくるもりのしめ縄。心も引かたく侍れは。為レ勝歟。

十九番

左勝

玉簾恒明たつ雲にしくれつゝ身のいたつらに段れぬ日そなき

右

かくてのみ猶有明のつれなさに〔ママイ〕暁よりもうきわか身かな

両首久可レ謂ニ秀逸一。尤是足ニ乎稱ニ讃神道一矣。納受不レ可レ疑。

二十番

左

をのつから行末とてもたのまれす我世中にありてなけれは

右勝

思ふより露そとまらぬ小萩原みさらん後の秋の夕風

ひさしく七社の和光をあふく人。かならす二世の願望をとくるならひなり。小萩原の行すゑ。榮花さためてひらけ。ことの葉の色々光あらはれて。長生久視の神流。靈驗炳焉にはへるへし。

二十一番

左

思ふ事かなはてすくる身をしらて厭ふにおしき世をおしむ哉

右勝

今はいかて衣の色を墨染のくらきにいらぬ道をたつねん

あふきこし日吉のひかりてらしみはいつれのやみかはるけさるへき。有レ憑。可レ憑。

神儒餘身桑門明静注之。

右日吉社歌合以百花菴宗固本書寫一校了

群書類從卷第二百十九

和歌部七十四 自歌合三

後京極殿御自歌合

百番歌合 俊成判

一番 春

左 立春

あら玉の年も神代に歸るらんみもすそ川の春のはつかせ

右

みよし野は山もかすみてしら雪のふりにし里に春はきにけり

左の歌。みもすそ川のはるかせ。まことにつねの春にあらす。神代にやかへるらんと聞え侍し。右の歌は。忠岑か。いふはかりにやみよし野のといへる歌は。山もかすみて。といへるもの字。ことに心こもりておほえ侍しを。今又。やまも霞てと侍る。年來の所存に計會して。兩方勝劣不分明。なそらへて持と申へき也。

二番

左 餘寒

そらは猶霞もやらす風寒て雪けにくもる春の夜の月

右

此ころは谷の梅むら雪[同イ]とえてかすみもしらぬ春の山かせ

左右の餘寒。心すかた共に玉の聲あることゝおもし侍るに。猶かすみもやらす風さゆらん春のよの月。ことにやおほえ侍にや。仍勝と可レ申哉。

三番

左 文治六年女御入内の月次の屏風に住吉の松にかすみのかゝれるかた書たるところに

なかめやる遠里小野はほのかにてかすみに殘る松の風哉

右 春の歌[こえてイ]あまたよみける中に

氷ゐし水のしら波たち歸り清瀧川にはるかせそふく

右清瀧川の春風も。かみしも相應して見え侍れと。左の。すみよしの松かせ霞にのこるらん。ことにや侍らむ。仍左を勝と可レ申哉。

四番

左 春の歌あまたよみける中に

雲消てうち出るなみやこたふらんかすめる山の曉のかね

右 同

ねぬる夜の程なき夢そしられける春のまくらにのこる燈

左。かすめる山の曉の鐘。右の。ほとなき夢そしるらん。殘りのともし火。ともにほのかなる心。かた〳〵移て。持にやと申へく候や侍らん。

五番

左　同

千里まてけしきにこむる霞にもひとり春なき越のしら山

右　同

春はたゝおほろ月夜とみるへきを〔にイ〕〔一イ〕雪にてまなきこしの白山

雨方の越のしら山。ひとり春なきといひ。雪にてまなきと侍り。又ともにおもひわきかたくは侍れと。猶雪にてまなからん春の月。ふかく身にしみて覺え侍らむ。

六番

左　春の歌の中に

はるの花〔色イ〕は花ともいはし霞よりこほれてにほふ鶯のこゑ

右　梅をよめる

難波津に咲やむかしの梅花いまも春なるうら風そふく

左。霞よりこほれて匂ふらん鶯の聲。殊に艶に侍るにや。仍まさると申へし。

七番

左　花の歌讀ける中に

九重に花の盛になりぬれは雲そくもゐのしるしなりける

右　春の歌よみける中に

久かたの雲井にみえし伊駒山春はかすみの麓なりけり

春は霞のふもとなるらん。面影ありておかしく侍れと。猶九重の雲のしるしは。なへての山の櫻。およひかたくやと覺え侍れは。又左勝へくや侍らむ

八番

左　歸鴈

今はとて山飛こゆるかりかねのなみた露けき花のうへかな

右　同

わするなよたのむの澤をたつかりもいなはの風の秋の夕くれ

此左右。又山とひこゆるらむ雁のなみたも。たのむの澤を立らんいなはの風も。共に露かゝる心地し侍れは。わきかたくて。同し程とや可レ申侍らん。

九番

左　春曙

みぬよまて思ひのこさぬなかめより昔にかすむ春の明ほの

右　同

ふるき跡そ霞はてぬる高圓の尾上の宮の春のあけほの

雨方の明ほの。むかしにかすむらんも。尾上の宮も。かたかた心あくかれて思ふ給へなから。猶見ぬよまて。おもひ殘さぬ心ふかくや侍らん。仍左勝とや申侍らむ。

十番

左　花のうたあまたよみける中に

むかしたれかゝる櫻の花をうへてよしのを春の山となしけん

右　同

春はみなおなし櫻となりはてゝ雲こそなけれみよし野の山

左の歌。むかしたれと侍るより。吉野をはるの山と侍る心も。まことにおかしく侍るを。右のうた。雲社なけれといへる。猶めつらしく侍るにや。

十一番

左　春の歌とてよめる

あたら夜のかすみゆくさへおしき哉花と月〔月と花イ〕との明かたの山

右　花の歌よみける中に

明わたる外山の梢はる〳〵と霞そかほる遠〔うちイ〕の春風

此かすみそかほると。侍るも。遠の春風。袖にしむ心地し

て侍れと。左の。花と月との明かたのやま。たちまさり侍らん。

十二番　左　野遊

都人宿を霞のよそに〔はかイ〕見てきのふもけふも野へにくらしつ

右　中宮の女房宇治にて舟に乗てあそひ侍しに舟の中にて見る花といふこゝろを

漉ゆく舟路は花になりはてゝ浪に波そふ山おろしの風

左の。宿を霞のよそにみてといへる心。おかしく侍るを。右の波になみそふ山おろし。猶おもかけことに侍るにや。仍右勝と申へし。

十三番　左　花の歌あまたよみける中に

みよし野は花の外さへ花なれや横たつ山のみねの白雲

右　同

はれくもる〔りイ〕みねさたまらぬ白雲は風に雨きる櫻成けり

風にあまきるらむ櫻。みるやうには面影おほえ侍れと。左の花の外さへ花なるらんみねのしら雲。立まさりてや侍らむ。

十四番　左　同

泊瀬山おのへのかねの明かたに花よりしらむ横雲の空

右　同

花はみな霞のそこにうつろひて雲にいろつく小初瀬の山

左右のはつせ山花よりしらむ横雲の空も。おかしく侍れと。猶くもに色付らんを初せの山。心うつりて侍にや。

十五番　左　同

けふこすは庭にや跡のいとはれんとへかし人の花のさかりを

右　春の歌あまたよみ侍る中に

山里の人も梢に春くれて淺茅か原にはなはうつりぬ

左の歌。庭にや跡のと侍る。心すかた。いみしくおかしく侍るうへに。末の句なとも。猶まさり侍らむ。

十六番　左　殘花

よしの山花のふるさと跡たえてむなしき枝に春風そふく

右　花の歌あまたよみける中に

高砂の尾上の花にはるくれて殘りし松のまかひゆくかな

左の殘る春。むなしき枝に春風。心ほそくも侍るを。右の殘し松のまかひ行らむ心。なを勝て覺え侍にや。

十七番　左　三月盡

おとろかす入相の鐘になかむれはけふまてかすむ小初瀬の山

右　同

春やいまあふ坂こえて殘るらんゆふつけ鳥の一こゑのする〔そするイ〕

此ゆふつけ鳥は。かの谷のうくひす一こゑそする。とよめりし面影のこりて。いみしき事にあれと。左の。けふまてかすむ小初瀬の山。まことにかんしむせられ侍る。左をまさると申へくや侍らん。

十八番　左　夏　更衣

さほ姫〔ミイ〕のなれし衣をぬきかへて戀しかるへき春の袖かな

右　同

山のはゝ霞のこゝろもなれ／＼て一夜の風にたちわかるなり

左のうた。さほひめになれ／＼て。春の袖の戀しからん事。いみしく艶に。めつらしくも侍を。右の歌。山のはも霞のこゝろも立別。又心ほそくも、かた／＼名殘覺え侍る、仍持と申へくや。

十九番

左　郭公

うちもねす待よ更行ほとゝきす軒にかたふく月に鳴なり

右　同

橘の花ちるさとの庭の面〔前イ〕に山ほとゝきすむかしをそとふ

花ちる里のほとゝきす。昔とふらん哀あさからす侍り。左の軒にかたふく月に鳴らむ時鳥猶かきりなくや侍らん。

廿番

左　夏夜

うたゝねのゆめよりさきに明ぬ也山郭公一こゑのそら

右　夏のうたとてよめる

うちしめりあやめをかほる郭公なくや五月のあめの夕くれ

左の歌。うたゝねの夢よりさきにといひ。右。雨の夕くれと侍るすかた心勝劣已難分。尤爲同等。

廿一番

左　菖蒲

小夜ころもこは身にしらぬにほひ哉あやめを結ふ夢の枕に

右　盧橘

行すゑに我袖のかや殘るへき手つから植しのきの橘

あやめをむすふゆめのまくら。なつかしさもかきりなくけ侍なから。手つからうへし軒のたちはな。行末までのその香。哀つくしかたく侍るにや。

廿二番

左　夕立

入日さす外山の雲ははれにけり嵐に過るゆふたちの空

右　雨後夏月

夕立の風にわかれて行雲にをくれてのほる山のはの月

左の。あらしにすくる夕立のそら。右をくれてのほる山の端の月。いみしくおかしく。勝劣難分。同等なるへし。

廿三番

左　女御入内月次屏風に山井に納涼したる所

山陰やいつる清水のさゝ波に秋をよすなるならの下かせ

右　納涼

かけふかき外面のならの夕すゝみ一木か本に秋風そふく

出る清水のさゝなみに。秋をよすらん楢の下風。誠に涼しく聞え侍る。右の陰ふかゝらむ一木か本は。今少一からに涼しくや侍らん。

廿四番

左　舟中夏月

夏のよをやかて明石の梶まくら浪にかたふく月をしそ思ふ

右　蟬

鳴せみの羽にをく露に秋かけて木陰涼しき夕立〔くれイ〕のころ

左の。やかて明石のといひ。波にかたふくといへる末の句まておかしく侍を。又羽にをく露に秋かけてといへる心。ことに艶に聞えて。勝劣難分侍。仍持とすへし。

廿五番　秋

左　　初秋の心を

下草に露置そへて秋のくるけしきの森に日くらしのこゑ

右　同

袖にちる萩のうは葉の朝露になみたならはす秋の初かせ

左の歌。下草にといへるより。すへて初終おろかなる所なく侍るを。右の歌。袖にちるとをきて。涙ならはすといへる末の句まて。いみしく艶に覺え侍れは。また勝劣難レ分見え侍れと。左のみ持と申も。又無念に侍る上に。なみたならはす心。袖もしほる心地して侍る。今少可レ勝哉。

廿六番

左　　秋夕

物おもはてかゝる露やは袖にをくなかめてけりな秋の夕くれ

右　同

何ゆへと思ひもわかぬ袂かなむなしき空のあきの夕くれ

此左右のつかひ。又かゝる露やはと侍る心姿。いみしくおかしく侍を。猶むなしき空の秋の夕くれ。心つくしかたくや侍らん。勝と申へきにや。

廿七番

左　　秋の歌あまたよみ侍る中に

暮かゝるむなしき空の秋をみて覺えすたまる袖の露かな

右　同

袖の露はたゝ此ころの露をきて世をは恨す秋そ悲しき

左の覺えすたまるといひ。右の世をは恨すと侍る末の句なと。まことに袖に露をきそふ心地し侍て。いつれをまさると難レ申侍れは。持と申へくや侍らむ。

廿八番

左　同

遥なるとこよはなれてなく雁の雲の衣に秋風そふく

右

みな人はせみのは衣ぬきかへて今は秋なる日くらしの聲

今は秋なるといへる心。いみしくおかしく侍るを。とこよはなれてなくらむかりの。くもの衣の秋風。今少身にしみて覺え侍るにや。

廿九番

左　同

足引の山かけならぬ〔すイ〕夕暮にこのは色つく日くらしのこゑ

右　同

村雨はほとなくすきて日くらしのなく山陰のはきの下露

左の。山陰ならぬといへるひくらしの聲。けに色ある心地し侍を。右の鳴山かけの萩の下つゆ。といひすてられ侍る。猶そてにかゝる心地し侍りて。勝と可レ申哉。

卅番

左　　鶉

獨ふす芦の丸屋の下つゆに床をならへてうつらなくなり

右　同

秋ならはとはかりみまし我宿のまかきの野へは鶉ふすまて

左の歌。床をならへて鳴らん鶉。まことに歌さまおかしく侍り。右のうた。籬の野邊はうつらふすまてと侍は。すへてかくは。人申かたく見え侍れは。猶勝と可レ申哉。

卅一番

左　　鹿

たくへくる松の嵐やたゆむらん尾上に歸るさをしかのこゑ

右　同

秋かせの尾上のまつにことゝへは人はこたへすさをしかの聲

左の。尾上にかへるといひ。右の人はこたえすと侍るこゝろすかた。いつれをとりまさると申へき事に侍へし。

卅二番

左　秋のうたよみける中に

闇き夜の窓うつ雨にをとろけは軒端のまつに秋風そふく

右　野分

きのふまてよもきにとちし柴の戶も野分にはるゝ岡のへの里

左の秋のうた。雨に野分のあしたの。又ともにおかしくのみきこえ侍れは。分かたく侍れと。猶軒端の松に秋風そ吹。といへる末の句。ことにまされると可レ申哉。

卅三番

左　月の歌あまたよみける中に

さらぬたにふくるはおしき秋の夜の月よりにしに殘る白雲

右　同

月たにもなくさめかたき秋の夜の心もしらぬ松のかせかな

心もしらぬまつの風かなと侍る心。誠に難レ有見え侍るを。左の月より西にといへる姿心。猶限なくみえ侍るにや。仍左勝と可レ申にや。

卅四番

左　同

雲きゆる千里の外に空さむく〔えてイ〕月よりうつむあきのしら雪

右　秋田

山遠き門田の末は霧はれてほなみにしつむ有明のつき

此番も。山遠き門田の末は。なといへるわたりも。心詞いみしくおかしくは侍を。又月よりうつむと侍るすかた心。猶勝へくやと見え侍る也。

卅五番

左　初昇月

山かけの水にひかりもみちぬらん峯をはなるゝ秋のよの月

右　八月十五夜に人のもとより歌つかはしける返しに

晴そめて又たなひかぬ雲までも思ひのまゝの山のはの月

此左右。心風情共勝劣なく侍。同等と申へし。

卅六番

左　月の歌よみける中に

袖の上に宿かす露のたまらすは〔ヒイ〕たか雲ゐなる秋のよの月

右　同

秋よ又夢路はよそに成にけり夜わたる月の影にまかせて

是又兩方共に。心のふかさも姿のおかしさも。おなしくはおほえ侍と。右の歌。尙かきりなく侍。勝とや申へからん。

卅七番

左　同

秋そかし今夜はかりのね覺かは心つくすなありあけの月

右　同

槇の戶をさゝて有明になりぬるを〔ゆくイ〕いく夜の月ととふ人もなし

左の歌。あきそかしと。をかれて侍より。末の句まて。いみしく覺侍を。右の歌。いく夜の月といへる心姿。尙まさるとや申侍らん。

卅八番

左　擣衣

かへるへき越の旅人まちわひて都の月にころもうつなり

右　同

ひとりねの夜寒にはなれる月見れは時しもあれや衣うつ聲

左後匡房卿。寡妻家擣衣匡南。樓月浪久人未レ歸。と書る句なと。思ひ出られて。いみしく見え侍る。右の。時しもあれやと侍る心。限なく侍り。猶左まさるへきにや。

卅九番

左　秋の歌あまたよみける中に

片岡の麓のいなは末さはき月よりおつるみねのあきかせ

右　同

とけてねぬ鹿の音悲し小萩原露ふき結ふ太山おろしに

此左右。又月より落るといひ。鹿の音悲しといへるすかた心。ともに勝劣難レ分侍り。仍持と申へし。

四十番

左　女御入内月次屏風に相坂關の駒迎書たるところ

あつまよりけふ相坂〔山イ〕のせきこえて都にいつる望月のこま

右　同屏風に仙家に菊咲たる所

君か代に匂ふ山路のしらきくはいくたひ露のぬれてほす覽

左の歌。都に出ると侍末の句なと。いみしくおかしく侍るを。初の五文字や。すこし體にや聞ゆらんと覺え侍るを。右のうた。いくたひ露のと侍る心限なく。祝の心の上に。體にも聞え侍れは。右可レ勝や侍らむ。

四十一番

左　月の歌よみける中に

村雲のしくれてすくる梢より嵐にはるゝやまのはのつき

右　秋のうた讀ける中に

見る月の〔はイ〕山よりやまにうつりきぬねぬ夜のはての暁の空

左の。あらしにはるゝ山の端の月。人もあくかるゝ様に覺え侍るを。又右の。ねぬ夜のはての暁のそら。すかた心。いかにかくのことく侍るにか。右の歌。猶むねにあまる心地し侍る。

四十二番

左　蔦をよめる

宇津の山こえしむかしの跡ふりてつたのかれはに秋風そふく

右　秋のうたあまたよみける中に

まのゝ浦の波まの月を氷にて尾花かすゑにのこるあきかせ

おはなかすゑに殘るらん秋かせ。おかしく侍るを。左の蔦の枯葉に吹らん秋風。いみしくおもひやられ侍。勝と可レ申や。

四十三番

左　秋霜

霜むすふ秋のすゑ野の小篠はら風には露のこほれしものを

右　月の歌あまたよみける中に

秋のいろはては枯野と成ぬれと月は霜こそひかりなりけれ

霜むすふといへるより末句まて。いみしくおかしく見え侍るを。月はしもこそと侍る姿心。猶かきりなく覺え侍。ひか覺えを申にや侍らん。

四十四番

左　暮秋

しけき野は虫の音なから霜かれて〔空しきイ〕むかしの薄いまも一むら

右　同

立田山いまはの比の秋風にしぐれをいそぐひとの袖かな

左の歌。むしのねなから霜かれてと侍る上の句。右の歌。時雨をいそぐ人のそて後といへる下の句。両方共に勝劣なく思侍れは。仍持と申へし。

四十五番　左　初冬の心を

月やとす露のよすかにあきくれて霜あし庭はかれ野成けり

右

見し秋をなにゝ残さん草の原ひとつにかはる野邊のけしきに

露のよすかに秋くれてと侍る。いみしくありかたく見え侍るを。何に残さむ草のはらと。いへるはたはり。殊に聞え侍る。心今少は勝と申へく哉。

四十六番　左　田家時雨

おしねつむ山田の庵は秋過て袖を時雨にほさぬころ哉

右　庭霜

故郷のはらはぬ庭に跡たえて木のはや霜の下に朽らむ

左の袖をしくれにといひ。右の。この葉や霜のといへる。共に勝劣難ㇾ分。持と申へくや侍らん。

四十七番　左　冬の比宇治にまかりてよみ侍る

秋のいろの今は残らぬ梢より山風おつるうちのかはなみ

右　冬のうたあまたよみける中に

夜もすから氷れる露を光にて庭の木のはにやとる月影

四十八番

山風落るうちの川なみ。猶まさりてや侍らん。

左　同

なかれよる谷の岩まの紅葉はに小川の水の末そわかるゝ

右　同

木の葉ちりて後にそ思ふおく山の松には風もときは成けり

小川の水と侍るも。寔におかしく侍るを。右の木のは散てと云。まつには風もと侍る。めつらしさも限なく侍るにや。

四十九番　左　同

片岡のまさ木の下は〔後イ〕色付ぬ山のおくにはあられふるころ

右　寒

風寒みけふもみそれの古郷はよしのゝ山の雪氣成けり

けふもみそれのふるさとはといへる。古今のうた覺えて。いみしくおかしくは侍るを。左の山のおくにはあられ降ころと侍る末の句。猶殊に覺え侍る。勝と可ㇾ申哉侍覽。

五十番　左　冬の歌あまたよみける中に

照月の影にまかせて小夜ちとりかたふくかたに浦つたふ也

右　同

風さむし友〔ミミイ〕なし千鳥今夜たけ我も岩ねに衣かたしく

左のうた。かたふくかたに浦つたふ也と侍る。ことに聞え侍る。又勝と申へきや。

五十一番　左　同

おほふへき袖こそなけれ世中にまつしき民の寒きよなく

右　同

枕にもそてにも涙つらゝゐてむすはぬ夢をとふあらし哉
左の心ことはすかた。限なく覺え侍り。右の。むすはぬ夢をと侍る。猶たくひなくみえ侍るにや。

五十二番

左　寒松

清水もる谷の戸ほそもとちはてゝ氷をたゝく峯のまつかせ

右　女御入内調繪屛風に池上の氷書たる所

池水に宿る光をたよりにて氷は月のむすふなりけり

左の歌。氷をたゝく峯の松かせ。姿心猶有かたくみえ侍る。

五十三番

左　冬の歌あまたよみける中に

消かへり岩まにまよふ水の淡のしはし宿かるうすこほり哉

右　冬をよみ侍る

寒る夜におしのふすまをかたしき〔ふさねイ〕て袖の氷を拂ひかねつゝ
袖の氷を拂かれつゝと侍るも。誠におかしく覺え侍るを。猶しはし宿かる薄氷か。見るやうに覺え侍りて。可レ勝や侍らん。

五十四番

左　冬の歌あまたよみける中に

うす雲を峯に嵐の吹ためて月のなこりを雪にみる哉

右　雪中山居

雪おれのみねの椎柴ひろふとて跡見せそむる冬の山里
跡みせそむる冬のやまさと。又殊におかしくは見え侍り。但左の歌の。月のなこりを雪にみる哉とは。いかにもえ申かたくや侍らん。

五十五番

左　冬朝

雲深きみねの朝日〔けイ〕のいかならむ槇の戸しらむ雪のひかりに

右　冬のうたあまたよみける中に

淋しさはいつもなかめの物なれと雲まの峯の雪の明ほの
左の。くもふかきといひ。槇の戸しらむと侍る冬の朝。まことにおもかけあまりておほえ侍にや。

五十六番

左　同

しもとゆふかつらき山のいかならん都も雪はまなくときなし

右　歳暮歌よみける中に

雪つもる梢に雲はへたつれと花にちかつくみよし野の山
左。しもとゆふかつらき山。おかしく侍るを。花にちかつく三吉野の山。猶ことに覺え侍る。

五十七番

左　歳暮

山川のこほりもしらぬ年なみの流るゝかけはよとむ日そなき

右　同

石上ふる野の小さゝ霜をへて一夜はかりに殘るとしかな
左の。氷もしらぬ年なみ。右。ふる野の小篠霜をへてと侍る。共に勝劣なく見え侍る持とすへし。

五十八番

左　戀

忍戀のこゝろを

しのふるにまけぬと人や思ふらんうち忘れてはなけ〔はしきイ〕く心を

右　同

人とはゝいかにいひてかなかめまし君かあたりの夕くれの空
君かあたりの夕暮の空。餘情猶つくしかたくや。

五十九番

左　同

もらすなよ雲ゐる峯の初時雨この葉はしたに色かはるとも

右　戀の歌あまたよみける中に

たかためそ契らぬ夜半をふし侘てなかめはてつる有明の月

左の木のはゝ下にといへる心。殊に色ふかく覺え侍る。

六十番

左　同

物おもふ唯ひとりねのさむしろにあたりの塵よいくよ積りぬ〔らんイ〕

右　逢戀

夢〔ーイ〕信たゝおもひねに見し事の床も枕もおもかはりせて

左の歌の。さむしろに。右のうたの床もまくらもと侍こゝろすかた。共に勝劣なかるへし。同等とすへし。

六十一番

左　後朝戀

今はとて涙のうみに梶をたえおきそわつらふ今朝の舟人

右　寄雲戀

曉の風にわかるゝ横雲を起行そてのたくひとそ見る

左涙の海。かの狭衣と申物語なんと。おもひ出られて。殊に艶に覺え侍。まさると申へきや。

六十二番

左　戀の歌あまたよみける中に

今こんと宵々ことになかむれは月やはおそき長月の末

右　同

朽ぬへき袖の雫をしほりても馴にし月や影はなれなん〔けんイ〕

月やはをそきと侍る末の句。殊に侍にや。又左勝と可レ申哉。

六十三番

左　同

見し人の袖にうきにし我玉のやかてむなしき身とやならなむ〔りイ〕

右　過不逢戀

忘るなよとはかりいひて別にしその曉やかきりなるらむ〔りけんイ〕

兩首共に甚深。可レ爲二同等一。

六十四番

左　戀心を

秋の夜〔日イ〕のかりねのはても白露に影みし人〔はとイ〕やよひのいな妻

右　待戀

蓬生の末葉の露の消かへり猶此よにとまたんものかは

影みし人のよひのいなつま。今少猶まさりてや侍らん。

六十五番

左　戀心を

よせかへる荒礒なみのしき浪にまなく時なくぬるゝ袖かな

右　旅戀

枕にもあとにも露の玉ちりて獨おきゐるさよのなかやま

あらいそなみのよそひ。寔にまさり侍らんとは。思ふ給へなから。露の玉ちるらんさよの中山。心ほそくや侍らむ。

六十六番

左　戀のうたあまたよみける中に

涙せく袖におもひやまさるらんなかむる空も色かはるまて

右

吹風も物やおもふとゝひかほにうちなかむれは松の一こゑ

泪せくと侍るより。なかむる空も色かはるらん心。猶ふか

くや侍るへからん。勝と申へく候や。

六十七番

左　　尋戀

たつねつる〔とりイ〕山路にさよは更にけり杉の梢にありあけのつき

右　　祈戀

いく夜われ波にしほれて貴船川そてに玉ちる物おもふらん

左。杉のこすゑに有明の月。いみしくおかしく侍を。右の貴舟川袖に玉ちるらん心。かたく心もみたれて。いみしく侍。持と申へく哉侍らむ。

六十八番

左　　寄川戀

吉野川早きなかれをせく岩の難面中にみやくたくらむ

右　　舊戀

末まてといひしはかりに淺茅はらやいまも〔とゝ我身もイ〕別も朽や果なむ

はやきなかれをせく岩のといへるすかた心。けに身をくたく心地し侍を。又末まてといひしはかりにと。いへるあさちか原も。しほるゝ心地し侍とも。さのみ持とのみもいかにと。しゐて思ふ給へれは。猶よしの川ふかくもや侍らん。

六十九番

左　　遇不逢戀

うつろひし心の花に春くれて人も梢にあきかせそふく

右　　寄風戀

いつもきくものとや人のおもふらんこぬ夕くれの松かせの聲

此つかひ。又心の花にといひ。物とや人のなといへる心。をの〳〵えんにして。勝劣又難分。仍持とすへし。

七十番

左　　夜戀

見し人のねくたれ髪の面影になみたかきやるさよのたまくら

右　　顯戀

袖のなみむねのけふりは誰もみよ君からうき名の立そ悲しき

涙かきやるさ夜の手枕。殊に艶にみえ侍。まさると申へきや。

七十一番

左　　寄海戀

よさの海のおきつ鹽風うらにふけまつなりけりと人に聞せん

右　　寄松戀

思ひかねうちぬる宵も有なまし吹たにすさめ庭の松かせ

左。よさのうみまつ成りけりといへる心。殊におかしく侍るを。右うちぬるよひもといひ。吹たにすさめと侍るすかた。猶有かたく見え侍にや。勝と可申哉侍らん。

七十二番

左　　寄關戀

古郷にみし俤もうつるらん不破のせきや〔やとりけりイ〕の板まもる月

右　　寄海人戀

鹽風の吹こす海人のとま庇したにおもひのくゆるころ哉

吹こすあまのといひさし。すかた詞。いみしくおかしく侍を。左の。みしおもかけもうつるらん板間もる月。猶かきりなく覺え侍り。

七十三番

左　　別戀

忘れしの契りをたのむ別かなそら行月の末をかそへて

右　　舟中戀

浮舟のたよりもしらぬ浪路にもみし面影のたえぬ日そなき

此番勝劣分かたく見え侍り。大方は申も恐れ侍共。歌はよそへ。其よりえんなる所の名なんと侍られと。左のわすれしのといひ。右は。たよりもしらぬ波路にもなんといへる言詞つかひ。何となく。えむにも優にもきこえ侍るを。世の人は心えす侍なるへし。いつかたも。おとると申かたし。持とすへし。

七十四番

左　　祝

今上一品宮生れ給ひての其夜人々かはらけとりて侍りしに

光そふ雲井の月を三笠山ちよのはしめそ〔ロイ〕今夜のみかは

右　　女御入内月次屏風に更衣をよめる

けふよりは千世をかさねんはしめとて先一重なる夏衣かな

此左右勝劣わきまへかたく侍へし。但雲ゐの月を三笠山といひ。今夜のみかはと侍る末の句まて。殊に有かたくや侍らん。

七十五番

左　　神祇

公卿勅使にてありけるに

神風やみもすそ川のそのかみに契りしことの末をたかふな

右　　春日御社

水上にたのみはかけきさほ川のすゑのふちなみ波にくたすな

兩方のうた。みもすそ川のそのかみ。さほ川の藤浪。ともに末の句たかふへからす。兩社の御めくみ。御神もさためて勝劣なくそ。見そなはしおはしまし侍らん。

七十六番

左　　公卿勅使にてくたり歸て後よめる

すゝか川八十瀬しらなみわけ過て神路の山の春をみし哉

右　　昔熊野へまいりし事をおもひ出てよめる

まれになる跡をたつねしくまの山みし昔より憑そめてき

神路山春。熊野山奇なる跡。是又いつれとなく覺ゆ。めくみも久しく侍らん。又勝劣なかるへし。

七十七番

左　　月の歌よみける中に

朝日さす春日のみねの雲はれて其名かりなる秋のよの月

右　　神祇の歌よみける中に住よしの社を

宮居せし年もつもりの浦さひて神代おほゆる松の風哉

春日峯。津守浦。是又神慮に可任侍。

七十八番

左　　旅

公卿勅使に伊勢へくたされける道にて

杳なる三上のたけをめにかけていく瀬わたりぬやすの川なみ

右　　物へまかりけるに天川といふ所を過ければ

むかしきく天の川原に寄〔をイ〕きて跡なき水をなかむ計そ

やすの川なみ。天の川原。是もともに勝劣申かたく見え侍り。持とすへし。

七十九番

左　　旅のうたよみける中に

岩かねの苔のこころも〔むしろイ〕露けきにあらぬ衣をしけるしら雲

右　　同

また人のむすひすてける野邊の草ならふ枕とみるかひそなき

結ひすてける野への草も。いみしくおかしく侍れと。猶苔のさむしろ露けかるらんに。あらぬ衣しくらむしら雲は。

立まさりてや侍らむ。

八十番

左　海路暁別

忘るなよいまはの月をかたみにて波にわかるゝあまの友ふね〔おほイ〕

右　月の歌あまたよみける中に

むしあけのせとの潮干のあけかたに浪の月さへ遠さかるかな〔かけイ〕

左の、今はの月をかたみにて波にわかるゝ友船。右の、むしあけのせとの明かたに浪の月さへ遠さかるらんほと。さらに、いつれおろかにと思はれす侍。又同等とすへし。

八十一番

左　海路眺望

行ふねの跡のしらなみ消つきてうすきり残る須磨の明ほの

右　旅のこゝろを

あしからの關ちこえ行しのゝめに一むら霞む浮嶋の原〔松イ〕

須磨の明ほの所〻まは。いみしく思ひやられ侍と。猶一村かすむらんうきしまの原。まさると申へくや侍らむ。

八十二番

左　同

もろともにいてし空こそ忘られね都の山のありあけの月

右　須磨の關をよめる

すまの關ふけ行なみの浮枕ともなふ月そ消つたひぬる

左の、都の山の有明の月。右の深行波のうき枕。ともにむかしの袖にも。かはきかたくみえ侍れは。同等に侍へし。

八十三番

左　月の歌よみける中に

清見かた波のちさとも雲消ていはしく袖によする月かけ

右　旅のこゝろを

きよみかたひとりいそねの秋の夜に月もあらしの比そ悲しき

左右の清見かた。月もあらしのと侍るも。けにさる方には侍れと。猶岩しくそてによすらん月影。かきりなく侍らむ。

八十四番

左　同

出しよりあれまくおもふ古郷にねやもる月を誰とみるらん

右　同

忘れすは都の夢やをくるらん月は雲ゐをうつの山こえ

月は雲井をなと侍る。うつの山越。猶以心ほそくや侍らむ。

八十五番

左　花のうたよみける中に

しおりせてよしのゝ花や尋ねましやかてと思ふ心ありせは

右　同

哀なる花の木陰のたかねかな嶺のかすみのころもかさねて

峯の霞の衣かさねて。花のかけ。ことに艷にや侍らん。

八十六番

左　秋の歌よみける中に

住しらぬむかしの人の心まてあらしにこむる夕暮のそら

右　山家の歌よみける中に

まつ人のしるへ計りのしおりせは歸り出へき身とやしらなん〔たえイ〕

しるへはかりの枝折も。まことに心おかしく侍るを。左の。あらしにこむる夕くれの空。心ことは猶ふかく侍れは。勝と申へくや侍らむ。

八十七番

左　風破曉夢

見る夢はみやまおろしに絕はてゝ月は軒はの松にかゝりぬ

右　月の歌あまたよみける中に

うき世いとふ心のやみのしるへ哉我思ふかたにありあけの月

左の心。いみしくみえ侍るを。右歌。我おもふかたに有明の月と侍末の句。猶ことにや侍らん。右勝と申へくや侍らむ。

八十八番

左　山家のこゝろを

此さとは雲の八重たつ峯なれや麓にしつむとりの一こゑ

右

またしらぬ山よりやまにうつりきぬ跡なきくもの跡を尋ねて

雲の八重たつといひ。鳥の一聲。いみしく見え侍るを。山より山にといひ。あとなき雲の跡をたつねての心。猶まさるへくや侍らん。

八十九番

左　山家の歌よみける中に

麓まておなし篠原あともなしみ山の庵のつゆの下道

右　野亭

我宿はのちのさゝ原かきわけてうちぬる下にたえぬしら露

深山のいほの露の下道。うちぬる下に絕ぬしら露。兩方共に。いみしくおかしく見え侍。持とすへし。

九十番

〔よしイ〕左　山家

四方の山くもしくみねに跡とちてうき世をきかぬ風の音哉

右　同

瀧のをと松のひゝきのけはしき〔にけイ〕につれなくあかす岩枕かな

左の。雲しくみねにあとゝちてといへる姿心。ふかく侍を。右の。つれなくあかすいは枕。いかにかく侍けるにや。猶まさりてや侍らむ。

九十一番

左　座主無動寺に侍ける頃十首むかし歌つかはしける返事の中に

なかき夜の更行月をなかめてもちかつく闇をしる人そなき

右　述懷

月のすむ都はむかしまとひ出ぬいく世かくらき道にめくらむ

左の歌。ふけ行月をなかめてもと侍。ことに有かたくみえ侍り。左勝と可レ申哉侍らん。

九十二番

左　月の歌あまたよみける中に

わか宿はをは捨山にすみかへて都のあとを月やもるらむ

右　古鄕のこゝろを

ふる里はあさちか末になりはてゝ月に殘れる人のおもかけ

月にのこれる面影。まことに有かたく侍れと。左の都の跡を月やもるらんと侍るこゝろ。すみかへてとをかれて侍ること。限なく侍るにや。猶勝と申侍へきにや。

九十三番

左　述懷こゝろを

我なから心のはてをしらぬかな捨〔られぬイ〕かたき世の又いとはしき

右　無常

後のよは明るともしらぬ夢のうちを現かほにも明くらすかな

左。心のはてをしらぬ哉と侍。おかしく侍を。右の。うつゝかほにもといへる心。又さる事ときこえ侍れは。同程と申へく哉。

九十四番

左　山家の歌よみける中に

終おもふすまひかなしき山陰に玉ゆらかゝるあさかほの露

右　無常うたよみける中に

鳥部山いくよ〔おはくイ〕の人のけふりまてきえ〔たちイ〕行末はひとつしら雲

右。とりへ山の烟。まことにあはれつきせすは侍るを。左の山かけに玉ゆらかゝらん朝かほの露。猶袂にかゝる心ちし侍にや。

九十五番

左　述懐〔へイ〕の歌よみける中に

埋れぬ後のなさけやとめさらんなすことなくて此世くれなは

右

うきよかなひとり岩屋のおくにすむ苔の袂も猶しほるなり

苔の袂も猶しほる事。誠おもひ知られ侍る事にこ。かきりなく覺え侍り。

九十六番

左　故内大臣かくれ給ひて後夢にみえ給ひしかは

みし夢の春の別れの悲しきはなかきねふりのさむときくまて

右　定家朝臣の母の思ひにてこもり侍りけるに三月盡の日忌あけ侍れはつかはしける

春かすみ霞し空のなこりさへけふをかきりの別れ也けり

左右の歌。ともにおもひわきかたく見え侍るうへに。かのことの春の夢は。またさめすのみみえ侍り。心いよ〳〵めてたく侍り。いつれをまさると申かたく成侍りぬ。

九十七番

左　百首歌よみて無動寺座主のもとへつかはしけるおくに

和歌の浦のちきりも深しもしほ草しつむ心をすくへとそ思ふ

右　三位入道のもとへ消息して侍ける返事に成家朝臣沈淪のことなとありておくに秋の時捨てし谷の埋木を嬉しくもとふ松の風かなと侍る返しに

君そとふかひなきころの松のかせ我しも春をよそに聞かな

左の歌。契りもふかしもしほ草と侍る。心ことは相叶ひて侍を。右の歌の本歌。すてし谷の埋木をと申狀。直はおそれと覺え侍しかは。かひなき比の松かせに。心のとけき我しも春をと侍心。いみしく有かたく覺え給へられ侍る事にて。猶まさる心ちし侍るなるへし。

九十八番

左　尺敎　毗梨耶波羅蜜

朝夕に三世のほとけにつかふれは心をあらふやまかはのみつ

右　禪波羅蜜

心をはこゝろのそこにおさめをきてちりもうこかぬ床の上哉

右。ちりもうこかぬ床の上。誠にしかりと覺え侍るを。猶左の。心をあらふ山川の水。かの泉客雨花驚夢といへる詩の心を思ひ出られて。文の心の上。姿詞もおかしく侍るにや。仍左勝と可レ申哉侍らん。

九十九番

左　十界の歌よみける中に

夢のよに月日はかなく明くれてまたは得難き身をいかにせむ

右　　　縁覺

おく山にひとりうき世はさとりてき常なき色を風にまかせて

常なき色を風にまかせてと侍る。猶いみしくみえ侍る。

百番

左　　佛

くらかりし雲はさなから晴つきて又上もなくすめる月かな

右　　菩薩

秋の月もは〔らイ〕ては一夜のへたてにてかつ〳〵影そ残るくまなき

かつ〳〵影そと侍る。誠に十四五夜の月のたとへ、いくはくのへたてなく見え侍るを、左の雲はさなから晴つきてと云。上もなくと侍。佛菩薩の位。寔にいかゝはとて。左勝侍らん。

三品禪門者、當世之貴老、我道之師匠也。仍爲レ蒙二其芳命一。以二愚詠一因二結縁一也。未レ關二樗木之廓一、定類二梧臺之石一。努英レ及二外見一

于時建久九年仲夏二日

結ひをく〳〵ことは山の露のいかなれはさのみは玉の緒ゆらくら〔く歟〕は

依レ仰作レ恐注二付之一　　老比丘釋阿生年八十五

玉ならぬことはも君にみかゝれてとまらん代々の光とそなる

凡歌合判詞、自二天德一始。于レ今不レ絕。然而上古末代不レ可レ有二此類一哉。

貞和五年七月十二日。於二今小路宿一書二寫之一。

右依禪門各判之詞書加、　　定家

右後京極殿御自歌合以月清集校合

和歌部七十五 自歌合四

後鳥羽院御自歌合

寛喜二年四月廿二(一イ)日 家隆朝臣之判進云々

一番

左　　初春

谷風に山のしつくもとけにけりけふより春の立やしぬらん

右　　おなし

うちなひき石間の水も氷とけ行もなやまぬ春の山川

左。谷風と侍るより。句ことのつゝき。誠にとゝこほるところなくめつらしく。こと葉はふるきさま。たけ有て。秀逸のすかたかきりなく見え侍るにや。春のたちぬる心もいかてむかしよりよみのこし侍りけむ。右又えんにやさしく。思ひわきかたくはみえ侍れとも。左猶上下句をはりも。今すこしにほひありて見え侍れは。しつくにぬるゝ春。たちまさるとも申侍るへきにや。

二番

左　　鶯

鶯のなく音を春にたくへつゝかへりて花をさそふ春哉

右　　落花

をはつせや宿やはわかむ吹匂ふ風のうへ行花の白雲

左、谷風のたよりにたくへてこそといへる歌をひきかへて。かへりて花をさそふはるかな。心詞おもしろく。思ひよりかたく侍へし。右吹匂ふ風のうへ行花の白雲。又たけありて。はなのにほひも。まことに遠く思ひやられ侍れは。なつらへて秀逸の持と申へし。

三番

左　　暮春

よし野河せかはや春のやすらはむおられぬ水の花のうたかた

右　　おなし

さほ姫の春の別れの涙とや露さへかゝるきしの藤なみ

せかはや春のとて。末におられぬ水のはなのうたかた。心こと葉めつらしく有かたく侍にや。佐保姫の春のわかれの涙。きしの藤波にもをきそふらん心も。やさしくすてかたく侍れと。なをうたのたけ。よし野川せきとめかたく侍るへし。

四番

左　　時鳥公

過ぬるか有明の峯の郭公もの思ふとてもいとひやはせぬ

右　　海邊霧

難波かたいそへの浪の音すみて夕霧よする秋のしほかせ

先夏と秋のうたは。ともによろしきにとりても。秋の歌は

まさる事にて侍れと。有明のみねのほとゝきすは。物おもふとてもなと。心すかた又いかに侍へしともおほえ侍らす。夏山にとをけるは。猶何となく。なへて景気もすくなく侍けんかし。夕霧よする秋のしほ風。又いかにも物にまかせかたくみえ侍り。持と申へきにや。

五番

左　月

月かけもうき身からとやかこつらん人をはわかぬ袖の涙に

右　萩

古郷のもとあらの小萩いく秋かあるしよそなる花匂ふ覧

此番又心詞とりどりにいつれいかにと申わきかたく侍り。人をはわかぬと侍る。こゝろ深くいひしりて。誠に有かたく聞え侍るへし。又あるしよそなるはなにほふらん。詞をかさり。心をもとめたるさまにて。見ひとつのすかたにて侍るうへに。こその秋此こゝろあくかれ侍しまゝに。ふるき玉の砌を。遠くたつねまいりて侍しかは。花のいろ露もかはらす思ひ出られ侍れは。をとるとも申かたく侍へし。

六番

左　鴈

初かりのつらきすまゐの夕霜ををのれ鳴つゝ涙とふらん

右　雨後月

大かたの雲も涙もかきあへぬ月かけぬらす袂のむら雨

初鴈のつらきすまゐと。つゝきたるすかたこと葉。まことにたくみにきこえ侍るうへに。をのれ鳴つゝなみたとふらんと。一句にあたの言葉なく。あはれに聞え侍るに。月かけぬらす袂のむら雨。また、めつらしくえんに有かたく見え侍れは。わきかたく侍るへし。

七番

左　山時雨

露しくれもる山かけのうす紅葉下草かけて秋そ枯ゆく

右　菊

なからへてみるもはうけれと白菊の離れかたきは此世なりけり

下葉かけてかれ行らむ。もる山の秋のしくれ。三室の山にも色まさり侍るにや。たゝしみるはうけれと白菊のとて。はなれかたきなと。心こと葉すかた。菊の露もすてに袖にうつろひて。かきりなくかなしくきこえ侍れは。をしてまさると申侍也。

八番

左　海邊時雨

わたつみの波の花をは染かねて八十嶋遠く雲そしくるゝ

右　鴈

さらぬたに老は涙もたえぬ身にまたく時雨と物思ふころ

なみの花をはそめかねて。八十嶋とをくしくるらん雲こころことはたけ。かきりなく秀逸にこそ侍るめれ。又老はなみたのたえぬ身にまたくしくれと物思ふころ。これは愚老かこゝろのうち。あひかよひて。時雨袖をあらそひ侍れは。尤可為持也。

九番

左　戀

人はよもかゝる涙の色はあらし身の習ひにそつれなかるらん

右　待戀

うつゝにもたのめぬ人の佛に名のみはふかぬ庭の松風

人はよもかゝるなみたのつゝきに身のならひにそつれなかるらむ。まことにあはれに。をよひかたくみえ侍るほとに。たのめぬ人のおもかけになのみはふかぬといへる。こゝろもふかく。なをおりかたく見え侍れは。〔上下闕〕

十番

左　　法文

としなへてむなしき空のうす緑まよへはふかき四方のむら雲

右

袖のうへにあたにむすひし白露やうらなる玉のしるへ成らん

左右の法文。いかにも心をよひかたく被二注付一ふかきさとりも。猶まよひ侍りぬれと。まよへはふかきよものむら雲。末句すこしまさると申侍るへきにや。大かたはかくえらひつかはれ侍りにける。秀逸ともは。みしかき心いよいよをよひかたくて。わきまへ申やられす侍れと。さのみ持とのみつけ侍らんも。おそれ思ひ給ふゆへに。せう〳〵しるし申旨。一向更に不レ可レ被レ用之事也。

昔以二異様一其上幸爾之間。撰定偏事多異。事宜物不レ過二兩三首一也。其中。法文歌難レ無二指事一皆得二其意一候者。爲二出離至要一也。

左歌心者。

法性の空。念來清淨なれとも。妄想の雲おほひぬれは。正因佛性ありともしらす。このことはりをしらては。佛になることかたし。一卽一微塵の中に。法界こと〳〵くおさまる。況卅一字のあひたに。實相のことはりきはまれり。

右歌心者。

或一切諸法悉是佛性といひ。或一色一香無レ非二中道一と釋すれは。霜露のあたなる思ひも。色にあて。香にふけるも。皆是佛法。しかしなから中道乃理なり。しかれは袖の上の露をみても。此思ひをなさは。衣の裏の珠。たちまちにあらはるへき因緣也。あなかしこ。

建保四年十月十三日終功畢。

遺老藤原朝臣定家上

以二一樂院書寫之本一又寫レ之。加二一挍一畢。

永正七年三月日

右後鳥羽院御自歌合一卷以濱田侯秘藏古鈔本書寫畢

定家卿自歌合

予少年のむかしより。暮齢のいまにいたるまて。前後詠する所の和歌。つもりて箱のうちにみてり。しかれとも口業の因縁となりて。更身後の資糧にあらす。因に然いま讃歎華生善にはかり事をめくらさむかために。愚詠の中より四十八首の歌をぬき出て。一巻の歌合とす。其形を叢圖にうつして。左右にわかつ。道俗ことなりといへとも。愚身これひとつなり。うたの数四十八にさたむる事は。かの彌陀の本願になすらへて。攝取不捨のちかひなとたのむ故なり。子孫のためにして。是をしるす。外人のために。これなとしるさす。なかき世のかたみに用ひて。反古にしよする事なかれと云事しかり。

四十八首歌合

定家

一番

左　早春梅

春さむき梢は雪にうつもれてとかぬもまかふ軒の梅か枝

右　海邊霞

浦人のあしわけを舟こき出てさはるかたなくかすむ春哉

二番

左　湖霞

蜑人のたつる煙は見えわかて霞そ春のもしほやきける

右　花似雪

時しらぬ花の雪峰此ころはよしのも富士の山と見えけり

三番

左　古寺花

かつらきやとよらの鐘暁にけりかすみの西にかゝるしら雲

右　山路霞行

すゑにみし雲を心に分とめて花にさたむる春の山越

四番

左　同題

尋入山ちやふかくなりぬらん跡より送るはなの下風

右　山家花

山さとをさひしき物と思ひしは花みぬほとの心なりけり

五番

左　海上春望

遠しまの一本の松にゐる雲をはなかとみてや歸る雁かね

右　河落花

大井河みきはもしろく花ちれは春も情たるあしの村立

六番

左　春夜雨

おほろなるならひをかこつ春のよの雨さへかすむ有明のはて

右　三月盡

名残なく心もつきてかなしきは今を限りの入相の鐘

七番

左　河邊早夏

難波江や蘆の軒はのひまをなみふかぬにしける夏はきにけり

右　杜郭公

みちのへの杜のこするの郭公またぬになのる雨のたそかれ

八番

左　水郷夏望

夏なからと見えて月影の涼しく下るうちの川舟

右　夏草

庭しけき草葉の下の道たえてとはぬ人めは夏もかれけり

九番

左　夕立

夕立のむかはむかたは峯晴て日かけ分たる遠山の色

右　納涼

しけりそふ庭の木かけの夕露にみさりし秋をさそふかせかな

十番

左　初秋

はつ秋の雲間のやまの雨そゝきはるれはすゝし三日月のかけ

右　月前風

むら雲の月にわかるゝ山かつらかけはなれてもすめる月哉

十一番

左　嵐吹月

吹かへすあらしにさよや更ぬらん雲にちかひてすめる月影

右　故郷月

あれわたる軒の板まの影もりて月さへこけの衣きてけり

十二番

左　山路月

深き夜の山路の月のをくらすはつらかりぬへき旅のそらかな

右　同題

をのつから山すゝ木にわけ出て月にむかへは明る空かな

十三番

左　海邊月

月の行かきりもさらにしら浪のまねきもとめぬまつらさよ姫

右　同題

いさりひの烟きよみの浦風に月より外はよる波もなし

十四番

左　八月十五夜

さやかなる秋もこよひの中空に雲をはみせぬ月の影かな

右　九月十三夜

うき事をわすれてそみる秋の月なみたのひまやこよひ成らん

十五番

左　海邊擣衣

衣うつうらの笘やに秋ふけてよさむに成ぬ八重の鹽風

右　暮秋露

ゆく秋の尾花か袖は月もなしをのれそ殘る露のほの／＼

十六番

左　冬山月

風こしの峯たちのほるうき雲を時雨のうへや月のかけはし

右　山初雪

里まてはをくらぬ雲の絶にて遠山はかりみゆる初雪

十七番

左　行路雪

行なやみあらしに駒をかるもかく猪なのゝ雪のさむき夕暮

右　旅宿雪

旅人のかりねの床に雪つみてたゝひと夜なる冬こもり哉

十八番

左　海邊雪

跡おしむならひもしらし降雪のつもらぬなみにかよふ舟人

右　窓雪

くれ竹の窓のひまもる山風に人もあつめぬ雪のさむけさ

十九番

左　初逢戀

いつはりに過しは夢の日數にてこよひそむかふ袖の涕

右　旅宿戀

草枕一夜のなごり跡たえて明るをいそく夢の山越

二十番

左　寄月戀

うらみ侘おもひたえにしその比の月にむかへはうかむ涕

右　月前遠懷

靜なる心のうちのあらましにいくたひかみしさらしなの月

廿一番

左　夕待戀

まつほとはなくさむ事も有へきに涙ゆるさぬ我ゆふへかな

右　述懷

野も山もくるしきまては尋ぬへき誰にうき世の外をとはまし

廿二番

左　冬戀

雲そうき色にはみせぬわか袖もしくると人にしらせぬる哉

右　山路

いかにしてこゆへき道の末なれは雲にひとしき山のみゆらん

廿三番

左　曉別戀

しはしともとまりかたしや啼鳥のわかれを告るこゑ〳〵の里

右　山家

世中のうかりし宿をおもふには深きも淺き山の奥かな

廿四番

左　社頭鐘

今はとてもよふす鐘の男山神代の月の明方のそら

右　社頭松

神かきにみつのくらゐやをくるらん雲ゐの風のかよふ松かな

爲家卿自筆之以本書寫畢。

文龜二年臘月念二日　玄國在判

右定家卿卅八首自歌合一卷以濱田侯秘藏　鈔本書寫畢

家隆卿百番自歌合

一番　春

左　　仁和寺宮五十首建久元年

あら玉の年もかはらて古郷の雪のうちにも春は來にけり

右

冬なから花散そらのかすめるは雲のこなたに春やきぬらん

二番

左　　院百首初度正治三年八月

今日もなを雪は降つゝ春霞立るやいつこ若なつみてむ

右　　内大臣家百首建保三年九月

朝氷たかため分て此河のむかひの野へに若菜つむらん

三番

左　　院百首初度

谷川のうち出る波も聲たてつ鶯さそへ春の山風

右　　宸勝四天王院障子建久元年（三イ）

春に今あふ坂山のいはし水木かくれ出る鶯のこゑ

四番

左　　私詠建久六年

おほかたの雪のけしきはかすめとも月影さゆる春のよの霜

右　　三宮十五首

はし姫の霞の衣ぬきをうすみまたさむしろの宇治の山風

五番

左　　院百首初建久八年

梅かゝにむかしをとへは春の月こたへぬ影そ袖にうつれる

右　　私春十首建久五年

難里か月のひかりも匂ふらん梅さく山の峰の春風

六番

左　　私百首建久八年

住人もうつれはかはる古郷のむかしに匂ふ窓の梅かえ

右　　左大將家歌合建久五年

おもふとちそこともしらす行暮ぬ花のやとかせ野への鶯

七番

左　　院百首建久四年

朝ほらけとふ火かくれの生駒山それともみえす春の霞に

右　　内裏百首名所建久三年

志賀の浦やしらゆふ花の浪の上に霞を分て春風そ吹

八番

左　　左大將家歌合建久五年

霞たつ末の松山ほの〳〵と浪にはなるゝ横雲のそら

右　　内裏百首名所

ときしあれは櫻とそ思ふ春風の吹上の濱に立る白波

九番

左　　院百首

此ほとはおられぬ雲そかゝるらんたつねもゆかし山の櫻木

右　　内大臣家百首

人傳に咲とはきかし櫻花よし野の山に日數こゆとも

十番

左　　院百首

歸る雁秋こし數はしらねとも寢覺の空に聲そすくなき

右　　私百首

なかなれは曇るともなき春のよの月にかすみて帰る鴈かね

十一番

左　内大臣家百首建保三年

うつしうふる霧は老の八重櫻しらぬ命の春そ稀なる

右　院百首

さくら花咲ぬる時は葛城の山のすかたにかゝる白雲

十二番

左　内裏詩歌合建保二年

櫻色の雲のま山霞をおもみららみぬ山そ宿の關もの

右　院百首

あけ置し山櫻戸もとちてけりをのれ雲なる春のさかりは

十三番

左　仁和寺宮五十首建久六年

この日はしるもしらぬも玉鉾の行かふ袖は花の香そする

右　内裏歌合建保二年六月

泊瀬山うつろはんとや櫻花色かはり行峯のしら雲

十四番

左　院五十首

さくら花夢かうつゝかしら雲のたえてつれなき峯の春風

右　内大臣家百首

櫻花おもふもつらし風の上にありかさためぬちりのまかひは

十五番

左

今朝みれは初瀬の檜はら雪白し峯の櫻に嵐吹らし

右　院百首

さくら狩かた野の雉子妻こひて鳴すらつらふ花の下草

十六番

左　院百首

よし野川岸の山吹咲にけり峯のさくらは散はてぬらん

右　仁和寺宮五十首

暮て行やよひの空をなかむれは霞にまかふ有明の月

十七番　夏

左　内大臣家百首

昨日かも濡つゝ折し花の色にけふさへしゐて村雨そふる

右　仁和寺宮十五首

夏衣春にをくれてさく花のかをたに匂へおなしかたみに

十八番

左　院五十首

郭公まつとせしまに我宿の池の藤なみうつろひにけり

右　私詠建久五年

いかにせんこぬ夜あまたの郭公またしとおもへは村雨のそら

十九番

左　院百首(初度)建久五年

五月雨の雲のあなたはいたつらに人もなかめぬ月やすむらん

右　同

むは玉のやみのうつゝの鵜飼舟月のさかりや夢もみゆへき

廿番

左　最勝四天王院障子

短夜のまたふしなれぬ芦の屋のつまもあらはに明るしのゝめ

右　同

あかなくにやすらへ空の子規夏くはゝれる年もまれ也

廿一番

左　院百首

おもひあれやたか白妙の夏衣日も夕かほの花の下草

右

松むしもまた音つれぬ淺茅生に野中の杜の日くらしの聲

廿二番

左　内裏百首名所

夏引の糸もてをれる永き日のみもすそ川は千代もすむらん

右

御秡する八十氏人の夏衣河かせすゝし秋や立なん

廿三番　秋

左　私百首

昨日たにとはんと思ひし津の國の生田の杜に秋はきにけり

右

聞ぬなり衣手さむし菅原や伏見の里の秋の初風

廿四番

左　院百首歌合イ建保三年

玉ほこの道もやとりもしら露に風の吹しくをのゝ篠原

右　内裏五十首歌合建保二年

をとめ子か袖ふる山の玉かつらみたれてなひく秋の白露

廿五番

左　内大臣家百首

袖の色もひとつに成ぬ萩原や遠かた人とよそにたにみし(むイ)

右　内裏秋十首

鳴わたる雁の涙をこきませて本あらの萩に秋風そ吹

廿六番

左　院百首

花すゝきほむけの糸のかたよりにくるれは野へに秋風そふく

右　攝政家詩歌合建仁三年

月清み有明の霜の萩か枝に白きをみれは嵐なりけり

廿七番

左　水無瀬殿秋十首建保三年

秋風はさてもや物のかなしきと荻の葉ならぬ夕暮も哉

右

のき近き山のした荻に聲立て夕日かくれに秋風そ吹

廿八番

左　水無瀬殿秋十首

かへる山いつはた秋と思ひこし雲ゐの鴈も今やあひみん

右　仁和寺五十首

秋の夜は窓うつ雨に明やらて雲ゐに鴫の聲そ過ぬる

二十九番

左　水無瀬殿秋十首

妻かくす矢野の神山立まよひはふへの霧に鹿や啼蘭

右　内裏百首名所

須磨の浦に秋やくあまの初鹽の烟に霧の色はそめゆく

三十番

左　院百首

くれぬまに山のは遠く成にけり空より出る秋のよの月

右　私百首

さらしなやをは捨山の高根よりあらしを分て出る月かけ

卅一番

左　私月百首

なかめつゝ思ふもさひし久かたの月のみやこの明かたの空

右　水無瀬殿秋十首
真もれは明なむとする鐘のをとになを長き夜の月そ残れる

卅二番

左　同
すまの関あまとをい衣夜やさむき浦風なから月もたまらす

右　和歌所歌合建久元年
鳰の海や月の光のうつろへは浪の花にも秋は見えけり

卅三番

左　内大臣家百首
をとめ子か玉ものすそにみつしほの光をよする浦の月かけ

右　二百五十首建保五十首イ
しら雲はよそにもみえす葛城やたかまの月に嵐吹らし

卅四番

左　内裏十首
深草や竹の葉山の夕きりに人こそ見えね鶉鳴也

右　水無瀬殿秋十首
はし鷹のはつかり衣露わけて野草の萩の色そうつろふ

卅五番

左　内裏秋十首
忍ひわひて小のゝしの原をく露にあまりてたれを松虫の聲

右　水無瀬殿秋十首
有明のつれなくみえし浅茅生にをのれも名のみ松むしの聲

卅六番

左　仁和寺宮五十首
むしの音もなかき夜あかぬ古郷に尚思ひそふ松風そ吹

右　内大臣家百首
山里ははた織虫のかた糸のよるさへやすくねられさりけり

卅七番

左　内大臣家百首
川上のゆつはの村のうす紅葉した草かけて露や染らん

右　和歌所歌合
下紅葉かつ散山の夕しくれぬれてやひとり鹿の鳴らん

卅八番

左　千五百番歌合建仁元年
をくら山西こそ秋と尋ぬれは入日（タイ）にまかふ峯のもみちは

右　粟田宮歌合承元四年
色かはる今や木の葉のうへにをく霜といふへのかつらきの山

卅九番

左　内裏歌合
手向山紅葉のにしきぬさはあれと猶月影のかくるしらゆふ

右　内裏建仁二年
いつるより心もつきす木からしの下吹はらふ山のはの月

卌番

左　内裏歌合寛喜三年
月影もすめはすみけり白雲のたえすたなひく峯のこからし

右　西行ニ見百首
さえ渡る光を霜にまかへてや月にうつろふしら菊の花

卌一番

左　内大臣家百首
長月の十日あまりのみかの原河なみ清くすめる月かけ

右　私百首
秋ふくる月の光に夜やさむき衣うつなりさらしなの里

卅二番

左　三百十五首

世にふれは賤のをた巻はては九月にいくたひ衣うつらん

右　院百首

古郷や冬はあすかの河風にいたつらならすうつ衣哉

卅三番

左　千五百番歌合

露しくれもる山かけの下紅葉ぬるともおらむ秋のかたみに

右　私百首

月かけの露のやとりになにしきてわかれにたへぬ秋の空哉

卅四番　冬

左　内大臣家百首

もみち葉を萩の錦に敷かへて今は時雨の山田もる庵

右　同

露霜とうつろふ袖もくちぬへし篠わくるの丶冬のかよひち

卅五番

左　和歌所建仁二年

なかめつ丶幾度袖に曇るらん時雨にふくる有明の月

右　内裏歌合建保元年

鵲のわたすやいつこ夕霜の雲ゐにしろき峯の梯

卅六番

左　院百首

みそれふるは山か下のをそ紅葉一むら見ゆる冬の夕暮

右　院二十首建暦二年

立田川もみち葉とつるうす氷わたらはそれも中や絶なん

卅七番

左　私百首

[illegible]の日かけもさえくれて[illegible]の落葉に霰ふる也

右　千五百番歌合

夕つく日さすかにうつる柴の戸に霰吹まく山颪のかせ

卅八番

左　内大臣家百首

あしへ行鴨のはかひの夕霜をよそにはなかぬさよ千鳥哉

右　同

まつ人のゆき丶の岡もしら雪のあすさへふらは跡や絶なん

卅九番

左　内裏十首

草の原出にし人は音もせてあらぬ外山の松の雪折

右　内裏七首建保五年

和田のはら八十嶋しろく（かけてイ）降雪のあまきる浪にまかふ釣舟

五十番

左　或處五十首

みよし野の薜の下葉のかれしよりは山もみ雪ふらぬ日はなし

右　仁和寺宮五十首

明わたる雲まの星の光まて山のはさむし峯の白雪

五十一番

左　摂政家歌合正治元年

しかの浦や遠さかり行浪まより氷て出る有明の月

右　[illegible]十首

さしのほるこしのしらねの冬の月雪は氷の麓なりけり

五十二番

左　私百首

谷川の音は此ほとたえはてゝ氷に残る峯の松風

右　　　　三宮十五首

たか嶋やみをの杣山跡たえてこほりし雪も深き冬かな

五十三番

左　　　　家隆四天王院障子

けぬかうへに降しける雪白川の関のこなたに春もこそたて

右　　　　千五百番歌合

雪のうちにつゐにもみちぬ松の葉のつれなき山も暮る年かな

五十四番

左　　　　院百首

とりとむる物とはなしに行雲のことしもはやく暮る空かな

右　　　　内大臣家百首

むかふへき春の名残の末のかけ身にあらたまの年もすくなし

五十五番

左　戀　　私百首

いたつらに人はしらてや暮すらんけふこそ（よりイ）我を思ひそむとも

右　　　　三宮十五首

しらすへき煙も雲にうつもれぬあさまのたけの夕くれの空

五十六番

左　　　　千五百番歌合

白浪の入江にまかふ初草のはつかにみえし人そ悲しき

右　　　　内大臣家百首

我袖は色に出ぬへしかくれぬの初瀬の山も打時雨つゝ

五十七番

左　　　　或處五十首

逢も見いかなる夜にか契りけんつゝむほたるの袖にうきぬる

右　　　　院百首

いかにせん深山かくれの秋の草しけさまされは露そ置そふ

五十八番

左　　　　同

山河に風のかけたるしからみの色に出てもぬるゝ袖かな

右　　　　或處五十首

よし野川岩とかしはのをのれのみつれなき色も波（ソイ）はかけつゝ（けるイ）

五十九番

左　　　　内大臣家百首

葛城や高まの山にさすしめのよそにのみやは戀んと思ひし

右　　　　或處

契置し千木のかたそきむなしくは行合のまの霜と消なむ

六十番

左　　　　内大臣家百首

時過てをのゝ淺茅に立けふりしりぬや今（けふイ）も思ひ有とは

右　　　　同

長きねのすかのあら野にかる草のゆふてもたゆくとれぬ君哉

六十一番

左　　　　院百首

よそにたにみぬめの浦にすむ蜑（ハイ）の袖にたまらぬ玉やひろはん

右　　　　私戀百首

海人のすむ里のしるへに立けふりこと浦風に誰なひくらん

六十二番

左　　　　三宮五十首

思ひ川みをはやなから水のあはの消てもあはん浪のまも哉（なしイ）

右　院二(三イ)十首

東路のさのゝ船はしさのみやはつらき心をかけて頼ん

六十三番

左　戀百首

なかめてもうらみぬ袖はいかならん雲路の浪にあくる月影

右　院庚申(建保五年四月)

おもひかね積れはおふる月をみてつれなき人に年はへにけり

六十四番

左　戀百首

たれか世につれなき種をまきもくの檜原の山の色もかはらす

右　院百首

果はあれぬいたくな吹そ秋風のめにみぬ(えイ)人を夢にたに見ん

六十五番

左　同

山川の紅葉にましる水のあはの色に出ても消やわたらん

右　万名所清輔名所

おきて行袖のみぬれてあさかしはぬるや川邊の夢にたに見す

六十六番

左　院百首

くもれけふ入あひの鐘もほと遠したのめて歸る春の曙

右　院百首

今はたゝ待しと思ふよひ〳〵の(にイ)ふくるもつらき鐘の音哉

六十七番

左　戀百首

夕暮のわか魂はおもひする袖の中にやいりなやむらん

右　院百首

あふとみてことこともなく明にけりはかなの夢の忘れ形見や

六十八番

左　内大臣家百首

つくは山やまもあせねと吹風に人の心のひまそつれなき

右　左大將家歌合百首

おもひかねたかむれは又夕日さす軒はの山の(をカイ)松もうらめし

六十九番

左　内大臣家百首

千はや振神の三室のます鏡かけて幾代のかけを戀らん

右　或人五十首

大方のくるゝまつまも定めなきたまのをよはみ戀つゝそふる

七十番

左　内裏歌合(建保四年)

人こゝろあら磯なみにおりかねてよそにやねなん伊勢の濱荻

右　内裏歌合名所

しく涙ひとりやねなん袖のうちさはく湊はよる船もなし

七十一番

左　三宮十五首

もろこしもちかの浦半の夜の夢思はぬ中そ遠つ舟人

右　歌百首

心から我身こす浪うきしつみうらみてそふる八重の塩風

七十二番

左　戀百首名所

伊勢の海の蜑のまてかたまてしはし恨に浪のひまはなくとも

右　内裏百首名所

うちわたす濱名の橋の人しほにたなゝし小船讃をこふらん

七十三番　左　　水無瀬殿十五首

おもひいる身は深草の秋の露たのめし末や木枯の風

右　　院百首

菅はらや伏見の里のあれまくらゆふかひもなき草の霜哉

七十四番　左　　左大将家百首

風吹は峯にわかるゝ雲をたに有し名残のかたみとも見よ

右　　同

富士の根の烟もなをそ立のほるうへなき物は思ひなりけり

七十五番　左　　私百首

わするなよ今はの心かはるともなれし其夜の有明の月

右　　院百首

何となく我ゆへぬれし袖の上にあさかりけりと月やみるらん

七十六番　左　　内大臣家百首

岩の上に波こすあへの嶋つ鳥うき名に濡て纒つゝそふる

右　　院百首

池にすむをし明かたの空の月袖の氷になく／＼そみる

七十七番　左　　同

さめやする今やとみえし秋の夜の夢路かたしくさよの手枕

右　　内裏百首名處

逢事はぬるをたのみの夢路にてをたえの橋に月そ深行

七十八番　左　　内大臣家百首

思ひ川かけみし水のうす氷かさなるよはの月もうらめし

右　　同

音にのみきくのはま松下葉さへうつろふ頃の人はたのまし

七十九番　左　　内裏百首名所

たゝたのめ時雨も露もをく霜のあはての杜の秋の夕くれ

右　　大輔百首 文治三年

まてとやはこゝにたのめし鶉なくいは田の小のゝ秋の夕暮

八十番　左　　私百首

今こむとたのめてとはぬ秋のよの明るもしらぬ松虫のこゑ

右　　和歌 壽久元年

さても猶とはれぬ秋のゆふは山雲吹風も峯にみゆらん

八十一番　左　　院百首

有乳山矢田のゝあさち色つきぬ人の心の峯の淡雪

右　　同

しらさりきこしの菅原あれはてゝ折にもあはぬ思ひ有とも

八十二番　左　　同

霜かるゝ人の心のあさは野に立みは小菅根さへくちめや

右　　戀百首

さりともと待こし物をあら玉のとしの三とせの冬の夕暮

八十三番　左　　千五百番歌合

思ひ出よ誰かねことの末ならん昨日の雲のあとの山風

右

人こゝろ何につなかむ色かはる正木のつなのよるもたまらす

八十四番　持

左　　院百首

もろこしの空もひとつに雲消てたれかみかさの山のはの月

右　　私百首

濱松のこすゑの風に年ふりて月にさひたる鶴の一聲

八十五番

左　　同

紅葉はにうつもれてこそ立田河ふるきみゆきの跡は見えけれ

右　　或處

さゝ浪やおほつの宮のみや木守しらすみし夜の雲の月影

八十六番

左　　院百首

瀧の音松のあらしも馴ぬれはうちぬるほとの夢は見せけり

右　　和歌所三首

その山と契らぬ月も秋風もすゝむる袖に露こほれつゝ

八十七番

左　　和歌所三首建仁元年

古郷に聞し風の聲もにす忘れぬ人をさやの中山

右　　和歌所六首

旅ねする夢路はゆるせうつの山關とはきかす守人もなし

八十八番

左　　仁和寺宮五十首

野邊の露浦半の波をかこちても行衞もしらぬ袖の月かけ

右　　内裏三首建保二年

月きよし氷ふみわけ玉しまの此河上に宿はたつねん

八十九番

左　　内裏詩歌合

たかしまやかちのゝ原に宿とへはけふやはゆかん遠の白雲

右　　同

たゝくれぬ關の戸さゝぬ比なれは月にも越んあしからの山

九十番

左　　院五十首

あけは又こゆへき山の峯なれや空行月の末の白雲

右　　院詩歌合

秋風の袖に吹まく峯の雲を翅にかけて鴈もなく也

九十一番

左　　内裏歌合七首

さえくらすさやの中山なか〳〵にこれより冬の奥もまさらし

右　　内大臣家百首

もみちする雲の林も時雨なり我そわひ人たのむかけなし

九十二番

左　　春日社歌合元久元年

春日山谷のむもれ木くちぬとも君につけこせ峯の松風

右　　内裏詩歌合

春日山おとろの道も中たえぬ身をうちはしの秋の夕暮

九十三番

左　　二見百首

いつかわれ苔の袂に露をきてしらぬ山ちの月をみるへき

右　　内裏三首建暦二年

高砂の尾上の松の夕しくれかくてふり行身をやつくさん

九十四番

左　元久三年三月

かなしさの昨日の夢にくらふれはうつろふ花もけふの山風

右　内大臣家百首

和歌の浦や立うは浪の跡をたちおきをふかめて見し人そなき

九十五番

左　元久三年三月

玉きはる命は露もなきものを忘れぬ心思ひかへして

右　承久四年夏

きのふ見し跡なき山のあとゝては入相の鐘に雲そかゝりし

九十六番

左　三宮十五首

なにけ有此頃の世の數に入てうき身のはても人や忍はん

右　私百首

うきなからみし世は猶も忍れて聞は戀しきむかし也けり

九十七番

左　内大臣家百首

おもふかた山は富士のね年をへて我身の雪そふりまさり行

右　同

今日もうし昨日もつらし飛鳥河みの（をイ）いたつらに月日かそへて

九十八番

左　和歌所述懷三首

和歌の浦や沖つ汐あひに浮ひ出る哀れ我身のよるへしらせよ

右　最勝四天王院障子

君か代にあふくま川の埋木も氷の下に春をまちけり

九十九番

左　内裏十首

おもひきや御世のはしめの秋の霜ふりて雲ゐの月をみんとは

右　和歌處述懷三首

おほかたの秋のねさめの長き夜も君をそ祈る身を思ふとて

百番

左　内裏建保二年（三イ）

なかきよの月のみゆきの影なれは雲ゐの竹の末もたはます

右　内裏十首

君か代の千とせも秋そあらはるゝ四方の時雨にのこる松か枝

寛元三年五月廿九日以ニ入道二品家隆卿自筆本一書ニ寫之一。合點者。京極黄門禪門也。

此一帖。依レ仰雨卿歌風書寫。以不レ捨ニ藤身躰一然而園城寺佛地。院僧都。於ニ此道一多年爲ニ同友一之間。任ニ競望一奉レ許ニ書寫一。拙者年來歌道工夫不レ出ニ此一帖一者也。若有下通ニ愚意一輩上尤可ニ讃提一而已。

文安二年七月三日　千松末葉正徹判

右家隆卿百番自歌合以猪苗代謙誼藏本書寫畢

隆祐朝臣百番自歌合

一番　春

左　立春　　春日社百首中に

春の日の名にあらはるゝ山よりや空も長閑に霞そむらん

右　同題　　九條前内大臣家百首中

もろこしも同しみ空のかすみてや吉野の里に春はきぬらむ

二番

左　早春　　私　會

あつさ弓春しきぬれは足曳の山のあらしも聲よはる也

右　殘氷　　九條前内大臣家百首

あなし河氷つれなし巻向の檜原やいまた曇らさるらん

三番

左　春歌中　　祝部忠成日吉社會

例しとや千世のふる木のこの本に老そふ松をけふはひくらん

右　子日　　十禪師社會

春の野に殘る小松のおほかれはひかても千世の陰そまたるゝ

四番

左　浦鶯　　九條前内大臣家百首

鶯の春にきなけは難波津にうらはの浪もさくや此花

右　鶯　　春日社百首

谷深きふるす出ても鶯のなを光なき宿に啼也

五番

左　殘雪　　十禪師社會

常盤木の陰にかくるゝ山里はまたふるとしの春の白雪

右　同題　　春日社百首

春も猶とはぬ人めはかれはてゝ垣ねの雪そ友を待ける

六番

左　若菜　　同百首

宮古まで飛火の野守つけねとも若菜つみにとけふそ出ける

右　朝若草　　九條前内大臣家百首

朝またきまたうらわかき草の原おもへは秋の露もほとなし

七番

左　霞　　春日社百首

しほかまや昔の烟あともなし霞はすゑに立かはれとも

右　原上霞

いにしへの霞の袖や立かへりみかきか原の猶しほるらん

八番

左　春歌中に　　入道大政大臣家住吉社三十首會

暮かゝる霞のうちの山のはを人にしられて出る月かけ

右　同題　　右大弁光俊朝臣古今詞百首

此頃はかすみの袖やむすふ手の雫ににごる山の井の水

九番

左　河上霞　　千首中遠所三十六人撰歌に被入

あさ日山うつろふ影もかすみつゝ遠さかり行宇治の川浪

右　春湊月

湊入の月のみ舟もさはりおほみ芦間の波にかすむ比哉

十番

左　霞五首中　　大殿百首御會

難波人かすみの下にやくしほをしはしたき見て春や知らん

右　棧路春雨　　九條前内大臣家百首

天原かすまぬ空の雨にたに人やはみえし峯のかけはし

十一番

左　梅　春日社百首

霞かすむ嶺にみぬ里としる物は風のつてなき春の梅かえ

右　野宿梅　九條前内大臣家百首

誰をかも知人にして梅のはなかりねの野へに匂ひそめけん

十二番

左　柳　春日社百首

春風に木の下[illegible]ふ玉柳いとはぬ春の[illegible]きとめ哉

右　田家柳　八幡宮若宮會

小山田のきしの柳も打はへて引しめ縄にかけそあらそふ

十三番

左　帰雁　春日社百首

定めなき花の盛の[illegible]きり散行ては帰る春の雁かね

右　春歌中　光俊朝臣古今詞百首

穐風にあひみんことはいのちとも契らてかへる春のかりかね

十四番

左　河帰雁　同家百首

時わかぬ山川瀬の浪の花にさへわかれて帰る春の雁かね

右　花有遅速　九條前内大臣家百首

つれもなきかたへの櫻待わひて春やをそきと花や咲らん

十五番

左　尋山花　前但馬守家長朝臣會

花とみて山ちは末になりぬれとまた[illegible]の峯の白雲

右　春山朝　住吉社會

よし野山松も二たひ埋もれぬ花咲つもる雪の朝けに

十六番

左　花歌五首中　大殿百首

山さくらおられぬ峯もなかりけり雲の衣の花染のそて

右　春歌中　侍従中納言為家百首會

こゆるきの磯山さくら咲しより沖津なみまにとまる舟人

十七番

左　曉花　私會

山櫻有明の月にうつろはゝつれなき色にちらすもあらなん

右　落花未遍　九條前内大臣家百首

春風のいかに吹はか山櫻散もちらぬも盛なるらん

十八番

左　花歌中　或處會

春の嵐吹にけらしなかつらきや高まの櫻雪と降まて

右　庭落花

今朝まては木々に見えつる花の色を雪に吹なす庭の春風

十九番

左　春歌中　光俊朝臣古今詞百首

いかにせんやよひの末の山風にさらぬわかれのみよしのゝ花

右　同題　同百首

しるしらすうきて思ひのみえつらん花散山のむら雲の空

廿番

左　水邊藤　九條前内大臣家百首

しらさりきやとの藤波影みえてせき入し水を春の物とは

右　暮春　春日社百首

うつり行やよひの末に咲そめてちらぬもつらき山吹の花

廿一番　夏

左　更衣　　　同社百首
あけたては花の色をもすて衣うすき袂やかたみ成らん
右　夕卯花　　　或所會
夕月夜うつろひまかふかひもなし袖にかけ見ぬ庭の卯花
廿二番
左　郭公
待えてもうはの空なるあま雲のよそにのみ鳴時鳥哉
右　　　侍從中納言家[illegible]首
なけしはし涙をからは郭公うき身ひとつの袖を尋て
廿三番
左　古宅郭公　　九條前内大臣家百首
里はあれて聞人かはる時鳥同し昔をいかゝきたむる
右　故郷郭公　　私會
故里と思ひなすてそほとゝきすなれも昔の聲はかはらし
廿四番
左　山五月雨　　少將兼輔朝臣百首會
[illegible]小船はつせの山の名もしるし檜原かみねの五月雨のそら
右　閑庭五月雨　　光俊朝臣當座會
五月雨のたえまも見えす暮る日は曇るにつけてとふ人もなし
廿五番
左　瀧五月雨
きより分れておつる瀧津せもひとつに成ぬ五月雨の頃
右
五月雨に岩ねをとをし行とたにあまりてみえぬ水の白波
廿六番
左　早苗　　春日社百首
足曳の山田もる庵はあれにしを久いつのまに早苗とるらん
右　照射
明かたは木々の雫やたまるらん山のともし影そ[illegible]
廿七番
左　蓮　　春日社百首
蓮葉の花のかゝみに成比はうき世の外の影もみゆらん
右　氷室　　同百首
氷室山木のまもりくる夏の日の氷によはる影そ寒けき
廿八番
左　深山泉　　九條前内大臣家百首
世にすまぬみ山かくれの庵まて板井の水をはらふ比哉
右　夏歌中　　光俊朝臣古今詞百首
宮古にもあかてやむすふ泉河てる日に雲の衣かせ山
廿九番
左　蚊遣火　　春日社百首
蚊遣火をふせやの床に立をきてすゝみに出る庭の松風
右　鵜螢　　九條前内大臣家百首
鵜八ゝくいらこか崎の波まにもこたへぬ玉は螢なりけり
卅番
左　螢　　春日社百首
秋ちかき袖師の浦に波わけてかけもつゝます澤螢哉
右　行路夏草　　御室御會
葛かゝる草の葉山を限にて秋のみちかき武藏のゝ原
三十一番　秋
左　初秋五首中　　大嘗百首
吹風もけふ立なれて初瀬女かゝふはなかくる秋の河波

右　同題　　春日社百首
秋はけさたつをた巻のつかのまも今はた露のひまやなからん
廿二番
左　早秋　　光俊朝臣會
今朝みれは露のみしけき淺茅生に風も吹あへす秋はきにけり
右　同題　　九條前内大臣家百首
初秋の雲行風はいたつらにくるれは出ぬやまのはの月
廿三番
左　秋歌中　　祝部忠成日吉社會
吹はらふまかきの荻の夕露を袂にのこす秋の初風
右　同　　光俊朝臣古今詞百首
夕暮は月まつとても物そ思ふ雲のはたての秋の山の端
廿四番
左　同題　　同百首
天川あふせもしるしわかうへは露置そめてさ夜更にけり
右　名所七夕　　九條前内大臣家百首
たよりある園の清水にやとりても年にまれなる星合の空
廿五番
左　霧　　春日社百首
夕日さす峯のこすゑはあらはれて麓の霧に遠人そなき
右　山村秋夕　　九條前内大臣家百首
ゆふ日さす遠山本の里みえて薄吹しく野への秋風
廿六番
左　月　　春日社百首
末てらす三笠の山にすむ月のかゝみをかけて神は知らん
右　同題　　日吉社百首
空晴て行ともみえぬ秋風を光になしてすめる月かな
廿七番
左　原秋月　　或處歌合
久方の月より外の影もなし露の下なる小のゝ篠原
右　月歌中　　九條前内大臣家九月十三夜會
色まさる月のかつらや吹風の散もおもはぬ秋の紅葉は
廿八番
左　松間月　　同百首
里遠き月みんとても契をかぬ草の枕に松風そ吹
右　秋苑月　　同百首
山陰のそのふをかけてかこつとも月はいかしき色なかりけり
廿九番
左　月　　住吉釣殿に書付侍りける
すみはてゝ遠里小野を行月の猶めにかゝる波の上かな
右　　又同所
滿わたるあし分小船おなし江にことそともなく月そ更行
卅番
左　關山月　　九條前内大臣家百首
むかし思ふ人たにあらし更科やをは捨山に月はすむとも
右　駒迎　　春日社百首
またれつる關に水こふほとなれや大宮人に望月の駒
卅一番
左　穐歌中　　光俊朝臣古今詞百首
久かたの天の河原にたゝぬ日はまれなる比の秋の夕霧
右　薄　　春日社百首
風吹はまのゝ入江の花すゝきなひくや浪のかへる成らむ

卅二番　左　女郎花　同百首

女郎花露おもけなる花の枝に心もしらぬ野への秋風

右　蘭　同百首

玉鉾のゆきゝの野への旅人に匂ひをきする藤袴かな

卅三番　左　荻　同百首

末たはに野路のしの原なひけとも猶聲しるき荻の上風

右　山中秋花　九條前内大臣家御會

しら鳥のとは山あらし吹なへに尾花か末は浪のまもなし

卅四番　左　初雁　春日社百首

はつかりの音に立そむる夕へより物思ふやとの秋も悲しき

右　虫　同百首

かよひくる秋の枕のきり〴〵す籬の露や夜寒成らん

卅五番　左　杜鹿　私會

秋山のふもとの杜に啼鹿は神たにうけぬ物やかなしき

右

泊瀬山おなし尾上に立しかも更る枕は聲そ近つく

卅六番　左　秋歌中　光俊朝臣古今調百首

野わけより軒端のいさゝに中絶てあはすは何をきゝかにの糸

右　同題　同百首

我宿の軒はの木の葉そめしよりたつ日はきかし四方の山風

卅七番　左　紅葉五十首の中　大殿百首

晴くもり幾度空にしくれてかしのたの杜をそめつくすらん

右　水郷紅葉　九條前内大臣家百首

秋の日もなからの山の紅葉はゝおほつの里のかさし成けり

卅八番　左　旅泊紅葉　私會

もみち葉のうきねの浪にかけみえて夕日もとまる秋の山本

右　同題　同百首

うきねする浦半に近き山なれと幾しほまては木の葉そむらん

卅九番　左　擣衣五首中　大殿百首中

衣うつよそのね覺の秋風も月みよとてや袖にふくらん

右　同題　春日社百首

大かたのよを秋はつるしるへしてよのまやすます打衣哉

五十番　左　橋邊菊　九條前内大臣家百首

かさゝきもわたさぬ橋のあたりまてほしか川への白菊の花

右　暮秋　同百首

ね覺して月みしよりも行秋のわかれそ千々に物は悲しき

五十一番　冬　左　初冬　春日社百首

をのつから殘る梢の秋の色もけさは淋しき神無月哉

右　同題　九條前内大臣家百首

木からしのかはれる色はなけれとも神無月とや吹まさるらん

五十二番　左　落葉見松　少將兼輔朝臣百首

立田山木の葉の後にあらはれて松こそ冬のはしめ成けれ
　右　旅時雨
よそになる宮古の空にめくりあはゝ時雨る山も袖やほさまし
五十三番
　左　冬歌中　祝部忠成日吉會に
霜枯の籬の菊の花かたみめならふ色もみえぬ比哉
　右　霜　春日社百首
みつくきの岡のすかたは人はなしいとはぬ霜の幾夜をくらん
五十四番
　左　落葉　私會
山下風につもる木の葉や散ぬらん庭もまはらに降時雨かな
　右　網代　春日社百首
惜ゐこし秋は留らて網代木にまたぬ木の葉のよらぬ日もなき
五十五番
　左　冬歌中　光俊朝臣古今詞百首
駒とめてこそ水かはぬさゝのくま日のくま河に氷とちつゝ
　右　湊霰　私會
おきつなみ波吹上の濱千鳥玉かあらぬか霰よす也
五十六番
　左　冬川　吉備津彦社歌合中
立田川木の葉の色をせきとめて氷そ秋のかたみ成ける
　右　河氷　或處會
さす棹の雫ににこる井河となせの瀧はしからみもなし
五十七番
　左　炭竈　春日社百首
炭かまの烟の下もいたつらに淋しさたへぬ小野の山里
　右　日々鷹狩　光俊朝臣會
限りあれは鳥立すくなく成にけりたゆむ日もなき御狩野の原
五十八番
　左　氷　熊野社百首
山河に數かきとめぬをし鳥の跡つけそむるうす氷かな
　右　大殿百首
山河の氷る夜ことにすみかへて床もさためぬをしのひとりね
五十九番
　左　冬歌中　光俊朝臣當座會
冬かれの芦まの水にゐる鳥の氷そ今は床になしける
　右　氷　春日社百首
石はしる瀧津岩なみ行末をあらそひかねて氷る冬哉
六十番
　左　岸千鳥　九條前内大臣家百首
住よしの岸による波よる〳〵は鳴や千鳥の人めよくらん
　右　同題　私會
浪よする岸に生てふ川竹の夜半もあらはに立千鳥哉
六十一番
　左　海邊冬鶴　九條前内大臣家百首
藻かり船よるへもしらすあるかひの波にもたつの聲さはく也
　右　雪歌中に　熊野社百首
降雪をしきつの浦の友千鳥波の上にも跡はつけゝり
六十二番
　左　庭雪積　或處會
人とはぬ軒はの松にふる雪の道を殘してつもる日もかな
　右　水路新雪　九條前内大臣百首

奥山の木のはのうへに降雪を落くる水のすゑにみる哉

六十三番

左　雪歌中　大殿百首

枝かはすたえまもみえす常磐山ちらぬ木の葉とふれる白雪

右　雪　春日社百首

うつもれて終にもみちぬ松とたに忘る計にふれる白雪

六十四番

左　冬歌中　光俊朝臣古今詞百首

よし野山今こん年の花よりもまたも降しけ峯の白雪

右　熊野社百首

かきくもり淺間の煙うつめとも雪をも人のみやはとかめぬ

六十五番

左　曉雪　光俊朝臣會

さえわたる有明の月の山のはに入影みえて積るしら雪

右　嶺樹深雪　九條前内大臣家百首

雪折の音たに今はたえにけりうつもれはつる峯の松はら

六十六番　戀

左　初戀　春日社百首

またれつゝ恨むるまてはなけれともしらぬもつらき心也けり

右　初逢戀　同百首

逢事ははつおのかゝみ影たえぬ遠山鳥の音にやたつらん

六十七番

左　春戀歌中　九條前内大臣家百首

山吹の花色ころもきしかたはいはて過しもあらはれにけり

右　逢不遇戀　春日社百首

あひみてしいもせの山の玉かつらくるゝ夜ことに戀つゝそる

六十八番

左　寄山戀　九條前内大臣家百首

祈つゝけふは幾日もこもり江の初瀬の檜原さてもつれなし

右　同題　同百首

物思ふ身こそあさまの夕けふり都なからにみやはとかめぬ

六十九番

左　絶戀　或處歌合隱名

なひきこし煙をよそに吹なして涙もよふす袖の浦風

右　戀歌中　或處會

今も又かたみにけたぬ煙にも思ひや富士のねにあまるらん

七十番

左　戀歌中　侍從中納言家百首

ましてしはし烟の下になからへてむろの八嶋も人はすみけり

右　思　春日社百首

したにもえうらへは霞てかはらやの人たにしらぬ身の思ひ哉

七十一番

左　秋戀　九條前内大臣家百首

吹風に鳴やうつらの床あれてさそひとりねの秋は悲しき

右　旅戀　春日社百首

草枕あたのかりねの枕にもつらき心や行めくるらん

七十二番

左　寄山戀　九條前内大臣家百首

夢にたに音信たゆる夜な〳〵は袖の泪や床の山守

右　不逢戀　大殿百首

いかにせん逢にしかへぬ月日へて徒にのみ身はよはりつゝ

七十三番

左　戀歌中　光俊朝臣古今詞百首
雲はらふ風そたよりのしるへとて思ふかたより月を待かな

右　逢不逢戀　或處會
をのつから思ひ出てはなかむともくもらぬ袖に月や待らん

七十四番

左　後朝戀　春日社百首
歸るさのかたみとたにもたのまれすわか身にかへぬ有明の月

右　同題　大殿百首
僞のかたみとたにもやすらはておなしわかれの有明の月

七十五番

左　戀歌中　光俊朝臣後撰集詞百首
河嶋のまつの心はしらねとも藻面みえて年は經にけり

右　怨戀　大殿百首
風吹はとはに浪こす石見かたかたふく月もぬるゝ顏なる

七十六番

左　戀歌中　光俊朝臣會
枯はつる人の契の淺茅原しのにしめゆふ軒の立花

右

七十七番

左　寄弓戀　大殿御歌合
梓弓いく田の川に身を捨て名をのみおしむあとそはかなき

右　不逢戀　春日社百首
戀をのみしなのゝま弓徒に心計はひくかひもなし

七十八番

左　寄玉戀　大殿御歌合
人こゝろよのうきよりも幾度の袖にそひろふ淚の白玉

右　後朝戀　或處會
暮ぬとて待し夜比の白露はわかるゝ袖の淵と成ける

七十九番

左　戀歌中　光俊朝臣古今詞百首
うへにみぬ思ひの色の下染はたへす忍ふの山の口なし

右　同題　或處會
うくつらく人の心を秋の田のいねてふことはかりになしてよ

八十番

左　久祈戀　或處會
かけて思ふ心のしめはくちねとも神たにうけぬ年はへにけり

右　寄山戀　九條前内大臣家百首
我身とて山の岩木にあらはこそ變もつらきもさてはすくさめ

八十一番　雜

左　海路　十禪師社百首
しらま弓はるかにみゆる波まより春日にまかふあけのそほ舟

右　旅　或處會
あつさゆみ幾山越てはる〳〵と暮行峯やとまり成らん

八十二番

左　旅五首中　大殿百首
旅人の菅のさむしろ敷しのひしらぬ別に露そこほるゝ

右　雜歌中　光俊朝臣古今詞百首
とはれねははれぬ雲井にわふとたに都に誰か思ひ知へき

八十三番

左　浦煙
吹風に烟や遠くなひくらん里なき風もしほやきけり

右　眺望　熊野社百首

おほつかないつれの山にかゝるらん波の上なる空の浮雲

八十四番

左　同題五首中　大殿百首

かきりあれはかすまぬ浦の浪まより心ときゆる霧の釣舟

右　同題中　同百首

見渡せはみおの浦半の夕なきに猶波かくる興津嶋山

八十五番

左　山家

人しれす我身ひとつの山里は世のうきことも聞えさりけり

右　苔　十禪師社百首

踏わくる道たに深き苔の下に語らつもれて朽果にけり

八十六番

左　山家燈　九條前内大臣家百首

山里は明行空もあけやらて雲に殘れる窓の灯

右　山家五首中　大殿百首

うきたひの心は深き山もあらし是より奥に住かはるとも

八十七番

左　名所述懷五首中　九條前内大臣家百首

世中の人にしらるゝ山なれは吉野の奥も猶やいとはん

右　同中

難波かた芦まにやとる月はなをしつむとみるも光有けり

八十八番

左　懷舊　春日社百首

和歌の浦や過にし御代の變らすは庵のもくすも顯れなまし

右　同題　或所會

世の中に思ひけてとも和歌の浦や身を慰むるあまのもしほ火

八十九番

左　花浮水　同會

身をすつる誰あらましも難面てさそふ水あらは花そ流るゝ

右　述懷　春日社百首

かれやあらぬ藤の末葉のかひもなくまた紫の衣ならねは

九十番

左　同題五首中　大殿百首

慰さめし秋のねさめのあらましも思ひそよはる年のへぬれは

右　懷舊　秀能入道身まかりて一品經すゝめ侍しついてに

もしほひにあらぬ烟になりはてゝ見しは昔のわかのうら人

九十一番

左　寄名所懷舊五首中　九條前内大臣家百首

をのつから人にひかるゝ時やあると眞弓の岡に宿やからまし

右　述懷五首中　大殿百首

くらゐ山ふもとはかりの道をたになを分かたくかゝる白雲

九十二番

左　曉　春日社百首

世中に猶あり明のうき身をやつれなきものゝ月はみるらん

右　名所述懷五首中　九條前内大臣家百首

風吹はさやの中山なか空にかゝるかたなくまよふ白雲

九十三番

左　谷餘花　父の思ひに侍し年の百首に

花もまた春にをくれて物や思ふことし卯月の谷隱つゝ

右　海初秋　九條前内大臣家御會天王寺に侍しに

[illegible]渡のたましのかりねにみし夢の猶覺やらぬ秋の初かせ

九十四番

左　述懷　熊野社百首

墨衣かけゝる袂の翠簾にやかてうき世をいとひ果はや

右　橋　春日社百首

[illegible]しらすらを世を渡る人はみなながらの橋のためしなりけり

九十五番

左

此世にはよしことゝはし角田川すみえぬかたの鳥の名もうし

右　河邊鳥　同百首

大井川おりゐる鷺の立跡を淺瀬としりてわたるかち人

九十六番

左　夢　春日社百首

はかなしなさめても夢の世中をうちふす程と思ひけるかな

右　盂蘭盆　光俊朝臣當座會

なき人の此世にかへる俤の哀ふけゆく秋のともし火

九十七番

左　松　春日社百首

小倉山峯のもみちの散しより梢の風は松に吹也

右　竹　同百首

竹の葉に衣をかけしいにしへの人の心のなき世成けり

九十八番

左　春曙　九條前内大臣家百首

わかの浦や行末かけて出る日に聲ものとけき春のあしたつ

右　春雨　春日社百首

人しれぬ山の草木も春雨に神の惠を空に知けり

九十九番

左　述懷　承久以前或所御會

君か代を松につけてそ春日山藤の末葉も花は咲へき

右　郭公　進北野社

待こともかゝらん物は郭公今そ北野の空に鳴なる

百番

左　祝五首中　大殿百首[illegible]閏九月

行すゑの千世のあまりもしら菊の秋くれかゝる色そ久しき

右　[illegible]歌中　住吉社を

神のます春日山ちの四方の海の波風あらき時のまもなし

已上二百首中自點十首朱點京極中納言入道。墨點家隆入道。

右隆祐朝臣百番自歌合以猪苗代兼謙藏本書寫畢

和歌部七十六自歌合五

永福門院百番自歌合

一番

左

春とたに思ひもあへぬけさの間に山の霞ははや立に鬼

右

朝嵐は外面の竹に吹あれて山の霞も春寒き比

二番

左

外山には霞たな引むへしこそ野澤の雪も下消にけれ

右

なきそふる夜半の雲けのうすくもり晴行月も又霞ぬる

三番

左

峯の霞ふもとの草のうす緑野山をかけて春めきに鬼

右

木々の心花ちかゝらし昨日けふ世はうすくもり春雨そふる

四番

左

折かさす道行人のけしきにて世はみな花の盛をそしる

右

入あひのこゑする山の陰くれて花の木の間に月出にけり

五番

左

花のうへにしはしうつろふ夕附日入ともなしに影消にけり

右

何となき草の花さく野への春雲にひはりの聲ものとけき

六番

左

窓の梅のかほりなつかし朝明に閨なから聞鶯の聲

右

あくかるゝ心なからやさそはれん梅咲軒のはるの夕かせ

七番

左

遠近の霞の色はふかけれと岸の柳そ淺みとりなる

右

霞わたり長閑き暮に河きしの柳一もと春風そふく

八番

左

さえかへる嵐を寒み足引の山のさくらも咲やかねぬる

右
軒近の竹の音ものとかにて花の咲そふ宿の夕暮
九番
左
一本つゝつきて咲なん我宿の花は見るほと久しかるへき
右
春ことにかはらぬ物か梅の匂ひ櫻かいろにうつるこゝろは
十番
左
峯のかすみ麓の花に鳥のこゑ野山のはるは夕なりけり
右
夕暮の霞につゝむ山本の花とけふりの里のむら〳〵
十一番
左
夕月日軒はの影はうつり消て花のうへにそしはし殘れる
右
何となく庭の梢はかすみふけて入かた晴る山のはの月
十二番
左
詠やるかすみの遠のはるの暮柳さくらの色そこもれる
右
枝かはす柳か末はなひけとも盛のはなは風もよきけり
十三番
左
吹はらふ山の嵐ははけしきにおつる櫻はのとけかりけり
右
ちるとなみ花おちすさふ夕暮の風ゆるき日の二月の空
十四番
左
あひ思はてうたて散ゆく花にしも何あちきなく心そむらん
右
あやにくに吹たつ風のつらき哉あすまてよものけふの櫻に
十五番
左
殘なく散しく庭の花の雪えたにをかへせ春のゆふ風
右
峯つゝきくれて吹たつ山風にさかぬ野へまて花そ散しく
十六番
左
瀧津せやいはもと白くよる花は流るとすれと又かへる也
右
流やらぬ花のしら浪立かへり春をとゝむる山川の水
十七番
左
明かたき秋の寐覺もかくやありし草の庵のよはの春雨
右
何となく寝覺の袂しほりわひをし明る空もよはの春雨
十八番
左
歸さの道もやまよふ夕暮のかすむ雲井にきゆる雁かね
右
入かたの月影かすむ山のはに歸る雁さへほのかなるこゑ

十九番

左

聞こゝろ井手のわたりもかくやらん山吹吹てかはつ鳴也

右

打いつる浪さへ色にうつろひぬ井手の川瀬の山吹の比

廿番

左

ゆく春をしたひかねてそ聞ゆなる青葉のなかの鶯の聲

右

岩かくれ咲るつゝしの人しれす殘れる春の色もめつらし

廿一番

左

神まつる卯月になれや榊葉にみしめはへたるあけの玉垣

右

ほとゝきすこゑも高根のよこ雲になき捨てゆく曙の空

廿二番

左

卯の花の垣ねの月のうす雲に山ほとゝきすひと聲そ鳴

右

月雪の色にそまかふ卯の花のかきねつゝきのたそかれの宿

廿三番

左

さなへなひく外面の小田のむら雨に山時鳥こゑおとすなり

右

槇の葉にむら雨かゝる山陰のくるゝ雲間に郭公なく

廿四番

左

小山田のさなへの色はすゝしくて岡へこくらき杉の一村

右

山本のけふりの色も消はてぬ遠里むらの五月雨の比

廿五番

左

五月雨のふるやの軒の糸水のくる人もなき暮そ淋しき

右

五月雨のはるゝ雲間の宵の月軒のあまりの影そすくなき

廿六番

左

夕立の雲も殘らす空晴てすたれをのほる宵の月影

右

風の音もすゝしくそよく吳竹のふしうきよはの月の影哉

廿七番

左

みしか夜はさし入月の影をこめて枕の山ははや明にけり

右

雨はるゝ梢の青葉いろそひて吹たつ風は露はらふなり

廿八番

左

なく蟬のこゑさへすゝし吹風にむら雨ましる山のゆふかけ

右

旅人のあまた立よる夕木陰山川きよみすゝみ凉しも

廿九番

左

夜の雨に竹の葉末はなひき伏て朝けの窓の風の涼しさ

右

夏深き草のしけみのしけくのみ思ふおもひは道もとをらす

卅番

左

谷ふかき庵の軒のまつの風秋よりさきに秋をきく哉

右

吹かせも今宵はすゝし御祓する川瀬の浪に秋やさきたつ

卅一番

左

いつしかと閨に心そ愁そむる荻のうへわたる秋のはつ風

右

（本ノマヽ）何もなくかはるとなしの色さひて松も檜原も秋は見えけり

卅二番

左

ひこほしのあふ夜をちかく思ふより我さへ雲に詠をそする

右

天の川としのわたりを待よりもけふのくるゝは猶や久しき

卅三番

左

秋草の花のひもとく比しもあれ吹なむすひそ野への夕風

右

宮城野やちくさのうへの秋の風なひくそ花のすかた成ける

卅四番

左

おきて見る朝けの籬露しけし小萩かすゑの花になる比

右

出そむる尾花にはきも色そこき露の籬のけさの曙

卅五番

左

更る夜の月と虫とは何なれや光もこゑもひとつにそすむ

右

みちのへや垣根の虫も峰更て月より外に行人もなし

卅六番

左

庭白く月〔の〕出ぬる宵のまの草の葉かくれきり〳〵す鳴

右

虫のこゑ露の光もさよ更て霜にしをれる野への月影

卅七番

左

きかしみしかけそふ比の月の色にねさめ秋なる荻の上かせ

右

秋の夜の月は心にすみけるを雲井にのみと何おもひけん

卅八番

左

雨風は暮にや見ぬる大空の雲間に早き夜半の月影

右

村雲にかくれ顯れゆく月のはれも曇りも秋そ悲しき

卅九番

左

秋風のひゝきは峯にさよ更て影遠くなる入かたの月

右

このまより月はたえ〳〵庭にもりて軒端にさはく夜半の松風

四十番

左

月にみかく露の光も清くしてよな〳〵涼し竹の秋風

右

更行はまきのお山に霧はれて月影清し宇治の川浪

四十一番

左

露繁き草葉のうへは靜にて下には虫の聲そみたるゝ

右

宵過て月また遲き山のはの雲にひかれる秋の稻妻

四十二番

左

はる〳〵とわたるや雁のこゑ遠し雲に色ある西の山のは

右

やへきりのたつ山本のはる〳〵と田面におつる秋の雁かね

四十三番

左

末高き籬の花はかたふきて露おちつゝく雨の夕暮

右

何となく寝覺の袖もうるほひぬ明やらぬ窓の秋のよの雨

四十四番

左

うす霧の朝けの梢いろさひて虫の音殘る森の下草

右

露しけき草のうへより明そめて霧の山へそしはし夜深き

四十五番

左

秋風の梢をはらふ夕暮の雲にはつるゝみか月のかけ

右

夕附日いはねの苔に影きえて岡の柳は秋風そふく

四十六番

左

其いろとさゝぬ夕の悲しきはおはなか風に薄雲の空

右

さま〳〵にうき世をおもふ夕暮のそてと草葉といつれ露けし

四十七番

左

をしなへて紅葉はちかく成にけり夕日の山の秋のゆふくれ

右

時雨つゝ秋すさましき岡のへの尾花にましる櫨の一本

四十八番

左

打はらふ袖にも秋そすさましき露霜かゝる山の下道

右

嵐吹岡への秋はさむくして柞のもみち散そめぬなり

四十九番

左

何となき山の木のはは落すさひ時雨るゝ暮の秋そ悲しき

右

もろくなる桐のかれ葉は庭に落て嵐にましる村雨の音

五十番

左

とめかたき日数の秋をおもふよの月たに空をいそかさらなん

右

色残る花の籬はまた秋をはや霜しろしけさの朝明

五十一番

左

浮雲は軒はの峯をこえかゝりしはし時雨て又過ぬなり

右

枯ておつる木の葉の上にかゝれはや時雨の音ももろく聞ゆる

五十二番

左

さやかなる光もぬれてみゆる哉時雨の後の庭の月影

右

月のすかた猶有明の村雲に一そゝきする時雨をそ見る

五十三番

左

もみち葉をさそひておろす山風にいく木の錦庭に敷らん

右

一はらひ颯しくおろす夕暮のあらしの末を木のはにそみる

五十四番

左

朝日さす野原のをさゝ霜消て露としもなき光をそみる

右

山本はまた霧くらき曙のすそ野は霜の色にしらめる

五十五番

左

窓たゝく嵐にさやく呉竹のよことに雪をあすやとそ待

右

村鳥の羽音してたつ朝明の汀のあしも雪降にけり

五十六番

左

雪の色にやゝしらみ行山のはの梢にきゆる有明の月

右

朝戸明の軒はに近く聞ゆなる梢のからす雪ふかきこゑ

五十七番

左

青のまゝ雪はひとへの色なから薄雲晴て月そさやけき

右

雲はるゝ月は梢に更過て積りもそはぬ夜半の薄雪

五十八番

左

遠近の里のわたりそ靜なるかよひ絶たる雪の夕くれ

右

浦風や雪の白浪吹はれてしはし霞める遠しまの松

五十九番

左

むら〳〵に小松ましれる冬枯の野へすさましき夕暮の雨

右

寒き雨はかれ野の原に降しめて山松風の音たにもせす

六十番

左

解やらぬ池の汀のあさ氷こほれるほとゝつもる雪哉

右
とちわたる氷のひまを行なやみ常よりほそき山川の水
六十一番
左
降雪にしられぬ程に交る雨の暮ゆく軒に音をたてぬる
右
くもる夜の庭はむら〳〵霰にてまかきの竹は風はらふなり
六十二番
左
天乙女そてふる夜はの風さむみ月を雲井におもひやる哉
右
あれぬ日の夕の空は長閑にて柳のすゑも春近く見ゆ
六十三番
左
包むかた人めも常に忘るゝを世にもそもるのことよせもなし
右
出暮につゝむ涙はとゝめかねぬをさふる袖の下とをるまて
六十四番
左
あやしくも心のうちそ亂れ行物おもふ身とはなら（さ歟）しと思ふに
右
とにかくに晴ぬ思ひにむきそめて憂より先に物の悲しき
六十五番
左
逢ことはなきさによするしき浪の頻にぬるゝ袖を見せはや
右
いつまでも命をかけて待へきになからゝかたくなるそ悲しき
六十六番
左
芦間わくる湊の小舟とにかくに障やすさをこりす待哉
右
いつとしもたのめぬ暮の玉章に解ぬにおとるつらさ社そへ
六十七番
左
何となく今宵さへこそ待れけれあかぬきのふの心ならひに
右
またやもしと頼む心の今日さへよけさ別きとおもふ物から
六十八番
左
空しくはおもひはつへき今宵ともしらてや人のたゝ明すらん
右
つゐに今宵こすしもならん後に社つらき人とは思ひはてなめ
六十九番
左
後をとも頼ぬ中のたまさかにあふ夜は時のうつらすもかな
右
たまさかに逢はひと夜の時のまにう〔こ歟〕ひも恨もいかにはるけん
七十番
左
馴しかたの哀はかりは捨すとも又逢見すは何にかはせん
右
思ひ過す其おり〳〵の心をもいつあひ見てかかゝりしもせん

七十一番

左

つゝみ暮す涙をゆるす時にして月をさたかにみるよはそなき

右

泪にも餘りて人のつらきよは思にみし月さへもうし

七十二番

左

いつまでか行衛もたのめぬ浮雲のうきて立ゐに物を思はん

右

大かたは頼むへくしもなき人のうからぬにこそ思ひ侘ぬれ

七十三番

左

よはゝ夜は契りかたさの疑ひにまた深しともえこそいはれね

右

別てもまた夜に深き鳥のねを獨なこりの床に聞かな

七十四番

左

思ひしる一ふしをたに見せかぬる心よはさそ我なからうき

右

有しよりも哀はそひてみしよりもうさは増るに思ひかねぬる

七十五番

左

昔々の夢の行衛のあやしさよ我おもひ寝かひとの心か

右

思ふてふことのはなくは今更に人のこゝろにまよはさらまし

七十六番

左

をのつからおなし月をは詠ともおもふ思ひは我にしもにし

右

人戀る心はつねにあくかれてふると計の世にはいつまて

七十七番

左

うれしかりし昨日の暮の契こそけふはつらさの數に成けれ

右

かけて待し月日を何に歎けん夜も頼まぬ歸るさの道

七十八番

左

おなし世を頼むかたにはあらねとも馴し名殘を忘れかねぬる

右

かはさすは夜比かさなるから衣かへす〳〵も身をそうらむる

七十九番

左

其折をかきるとは猶おもはぬをいかなるふしにいつ替けん

右

日數とは哀いつまてかそへけんいく年月の中のへたてを

八十番

左

戀やまぬ身はことはりにかへれ共忘るゝ人のうさはゆるさす

右

限そと命をかけてかこてとも厭ふひとには其かひもなし

八十一番

左

おもひ馴し我心こそ哀なれ頼まぬものを夕暮の空

右

憂はてをつれなやありてとはかりにむかふ夕そたへす悲しき

八十二番　左

契けりまちけり哀其時のことのは殘る水莖のあと

右

うかりしも哀なりしもあらぬ世の今になりてはみなそ戀しき

八十三番　左

山松の梢の空のしらむまゝにかへにきえ行閨の月かけ

右

ひゝきつる松の嵐の音もせす月さしのほる夕暮の山

八十四番　左

月も入鐘も聲やむ明くれの空しつかなる星の影哉

右

里遠く八こゑの鳥は音つれて月すみ清き有明の空

八十五番　左

月ははや遠島かけに傾きぬしはしとゝめよ須磨の關守

右

大空の月よ何とて常ならんさしもすみうき此世とおもふに

八十六番　左

山川のたゝ一筋のなかれこそあまたの瀨に落わかれけれ

右

しつみはてぬ入日は浪のうへにして鹽干に清き礒の松原

八十七番　左

峯ふかき嵐の音と聞ほとに谷の松にそ吹おろしぬる

右

谷川の底のひゝきにかよふ也高き梢のまつかせの音

八十八番　左

聞しほるねさめの窓は夜ふかくて槇の葉くらき曉の雨

右

山風の吹わたるかと聞ほとに槇原に雨のかゝる成けり

八十九番　左

濡まさる草葉の色にしられけりそゝくも見えぬ夕暮の雨

右

おく山の槇原かうへに雨落て雲ゐる谷に鳥かへるなり

九十番　左

夕暮の山きは清く雨はれて雲おりかゝる杉のむらたち

右

たちみたれ風に浮ゆく雨雲に半いろこきゆふくれの山

九十一番　左

風たちてむら〳〵わたる雨雲の晴る方より星出にけり

右

別ゆく雲の絶間の見えてしも更に降そふ夕暮の雨

九十二番

左

山あひにおりしつまれる白雲のしはしと見れははや消にけり

右

暮はつる嵐の底にこたふなり宿とふ山の入相のかね

九十三番

左

折しもあれ遠里けふり絶はてゝ夕のなかめ哀そふらん

右

うちむれて麓にくたる山人のゆくさきくるゝ野への夕霧

九十四番

左

竹の編戸かこふともなき柴の垣物はかなけの賤か家居や

右

山里の軒はに近き椎柴のしゐてうき世にいつまてかへん

九十五番

左

山水の流を見ても住人のこゝろの塵をすゝけとそ思ふ

右

なかれての末をも何か頼むへき飛鳥の川のあすしらぬよに

九十六番

左

旅衣たゝよる袖は涙にてむすふまくらも野への夕露

右

ひにそへて都の空そ隔てまさる昨日の宿はけふのふる里

九十七番

左

はしめなく迷ひ初ける長き夜の夢を此たひいかて覚さん

右

心をも何かとゝめん露の命しはしをくまのかりの宿に

九十八番

左

昔とは遠きをのみは何かいはん近き昨日もけふはむかしを

右

こし方を忍ふ涙の玉くしけふたゝひあはぬ時そ悲しき

九十九番

左

人のうへのはかなき事を聞にしも身は行末のよゝのかねこと

右

目のまへに見聞しひとのなき数をかそへ／＼て我もいつまて

百番

左

日にそへてうきふししけみ呉竹の世にへかたくも成まさる哉

右

手すさひにつけをく露も行末は誰かあはれと水茎の跡

右永福門院百番御自歌合以猪苗代兼庭本書寫校合了

慈照院殿御自歌合

一番

左

いつる日の影こそ霞め足引の山のあなたも春や立らん

右

天津風けさはのとかに吹ぬなりをとめの袖も春や知らん

左歌、立春紅光出扶桑ほと。春從東來ことをおもひやり右歌は、解レ氷東風至時。天津乙女の袖も春を弁とはへる。共巻頭の歌、勝負難定申可レ爲レ持歟、

二番

左

神代より霞わたれる春の色をおもふも遠し天の浮橋

右

仙人のすみかやいつく立ぬはぬ霞の衣をりかけてけり

左、神代よりとあるよりするの句、天のうきはしまて。心もことはも及ひかたく聞ゆ、右又たちぬはぬ霞の衣、龍門にまうてゝ詠侍しにもをとらす侍れと、猶左の天の浮橋には。かけてもをよひかたくや侍らん

三番

左

明やらぬよさの浦波をとはして入うみくらくたつ霞哉

右

心なき海士のなかめはをしてるや難波江かすむ浦の曙

よさの浦。難波江。霞のたち所。いつれ深しあさしとも。わきかたく侍るに。歌のすかた。又ともに優美にして。勝劣なくや。

四番

左

長岡やおちほひろひし跡とめて春は田つらに若なをそ摘

右

谷川やうち出し波のはなも又いはねにかへる春風そ吹

左。おちほひろふときかませはといへる歌を。わかなにとりなされたる心おかし。右とくる氷のひまことにと侍る事を思ひて。根にかへるはなと。いはんとのたくみ。おもしろく侍り。但落穂なと。歌合となりては。さのみ褒美のことはにはあらさるへし。仍右の勝とす。

五番

左

天地のひらけ初にし時よりや梅はたへなる香に匂ひけん

右

咲みちて匂ふもふかし紅の色にとられぬ庭の梅か枝

梅のはなを賞するあまり。天地開闢の時まておもひやるこゝろ限なし。源氏物語の紅梅の巻に。香なんしろき梅にはをとれるといふめるを。いとかしこくとりならへても。咲ける哉と侍るやらん。心も詞も艷に聞え侍れは。右の勝にこそ。

六番

左

立田川きしの柳のいとはへて条けみとりの水くゝるなり

右

志賀の浦や氷とけにし浪のうへに遠ざかり行春の靈金
左。昔紅に水くゝるとは侍る心を。翠柳の糸にひきむすはれたる。尤めづらし。右は遠ざかりゆく志賀の浦なみとあるを。歸雁にとりなされぬる姿もよろしくはへれは。持にて侍へし。

七番

左

うつし植る庭の一木の花にさへおほふはかりの袖やなからん

右

誰か世よりあたたなる色に咲そめて花に心を盡し來ぬらん

大空にとよめる歌を。わつかなる庭の花にたたに。おほふ袖なきことをうらむる心おかし。誰か世よりと。いひいたされたるより。末の句にいたるまて。理りかなひて。こひ願へるさま也。これも。いつれまさると申かたくや。

八番

左

春の池のかゝみの影に降雪は汀の花や老木なるらん

右

ちりかゝる花のかゝみの山櫻さゝ波くもる浦風そふく

左は。鏡のかけに見ゆる雪と波とを。なけきといへることはをおもひ。右は。ちりかゝるをやくもるといふらんと侍る歌をとらる。共に古今集よりいつ。兩首のかゝみに心うつりて。是非にまとひはへれと。右は猶下句たけある心ちし侍る。

九番

左

哀身のさかりにかへる春もかな散にし花そ又も咲ける

右

いはねふむ山路は花にうつもれて梢そ苔の色に成ぬる

左は。壯年の時を。又さくはなにむかひてうらやみ。右は。少年の春を。いはねの花をふみこ。おもひいつる心やはへるへき。詞はかはれるに似て。歌のさまひとしき歟。

十番

左

うちなひく松はうら葉にうつもれて風にかゝれる春の藤浪

右

春をへて藤さきかゝる松かえや顯れやらぬ浪の埋木

左右の松。みなうつもれて。藤浪のみかゝれる風情。おなしさまにみえたり。

十一番

左

櫻色の袖とや今朝もいひなさんたゝひとへなる花もこそあれ

右

名のみして花染ならぬ櫻麻の袖をもけさは立やかふらん

右の櫻麻の袖。めつらしきさまには侍れと。左のたゝひとへなる花もこそあれと侍る下句なと　まさりて聞ゆ。

十二番

左

花ちりし軒はの櫻あさ露に猶うとまれぬわか綠哉

右

身にはまた近きまもりに袖ふれしおり忘られぬ軒の橘

左歌。猶うとまれぬと侍ること。郭公の古歌に。思ふ物か

らとあるは。うとまれぬるといふ詞なるへし。源氏物語の。やまとなてしこはうとまれすといへる心にや。此若みとりもさそ聞え侍る。心いとおかし。右歌。右大将辭し申されて。いくはくもなくてよませ給へるよし。うけ給りしことなり。こと葉の花も。袖のかも。まかふへくも侍らす。勝たるへし。

十三番

左

待はうきならひ知てや郭公妻とふ暮にねをもらすらん

右

宿ちかくなけほとゝきす我爲にもらす初音とおもふ計に

郭公のうた。むかしより數なくつもりはへりて。さま〱の風情もつきにたるに。此左右の郭公。いつれもめつらしく聞え侍り。

十四番

左

けふこそは引て袖にもかくれぬにおふる菖蒲の長きねなから

右

眞菅おふる沼江にましるあやめ草引てや長きねをくらへまし

左右の菖蒲のなかきね。いつれもひとしくはへるにとりて。右は興ある風情のみなり。左は。けふこそはとて。ひきて袖にもかくれとあるわたり。やすらかにいひくたされて。歌のさまよろし。

十五番

左

つきてふる日數やいくか庭の面は薄をしなみ五月雨の比

右

山川のせゝ行波もいはこすけ末はや下にさみたれの比

すゝきをしなみ。ふれる白雪を。五月雨の露をもきかたにおもひよせられたる。めつらしき心にも侍かな。瀬々行波もいはこすけなと。よくつゝける秀句には侍れと。左は。なをおかしき所も。まさり侍らんかし。

十六番

左

山ひこのよそにこたふる聲す也谷の戸たゝくよはの水鷄に

右

露をかぬもとあらの小萩夏深み風にはあらて花を社まて

左。谷のとたゝく水鷄に。山ひこのこたふるこゝろ。よろしくきこえ侍り。右もとあらの小萩露ををもみの歌をとりて。いく世の春をまつの白雪と。定家卿よみ侍りしをこそ。めつらしく思ひはへりしに。露をかぬと置るより。花をこそまてと。いひとちめられたる。いとおかし。露なき夏の萩もみる心地し侍り。尤勝侍るへし。

十七番

左

丈夫かするわさならし棹鹿のよるはすからに見ゆる照射は

右

いにしへの高津の宮の氷室よりそなへ初つるためしとやなる

ますらおかするわさならしとて。鹿のよるはすからなと。古歌をは。かやうにこそ。とるへき事にて侍れ。右ことなることなけれは。左の勝とす。

十八番

左

言葉を月まつ山にかゝらまし入日をあとにはるゝ夕立

右

夏そなき高根の雪を見るに冬きくに秋ある富士の川風

右。見るに冬。きくに秋あるなと。こと葉をかさらすして。心をときとせられけり。此哥。一の姿にておかしく見ゆ。左上下の句に文字あること。ふるき歌合に。なきよりはいかにそや聞こ侍るなともいへるか。しかはあれと。入日をあとに晴る夕立の雲。月まつ山になと。よろしく見えはへれは。以レ左爲レ勝。

十九番

左

七夕にかしつる夜の衣をや今朝かへすらん天の川風

右

契こそおなし例よ天川のうき木は絶のうき木ならねと

左。牛女にさまさまの物をかす事ある中にも。よるの衣使あり。けさ返らん天の川風。首尾かなひてきこゆ。右。天川のうき木。常のことに侍れと。又如一眼之亀値浮木孔の如來の金言を。稀なるためしに引よせられたるも。おかしく侍れは。爲レ無二差別一歟。

廿番

左

あまの川わたれと錦中たえぬ紅葉の橋はいく代かけけん

右

七夕のめくりあふ日は七車としをつむとも盡しとそ思ふ

左。天河のもみちの橋。立田川の紅葉の錦。二首の歌をとられたる心こと葉よろし。右。力車に七車とある事を。七夕によせられたる。誠おかしく見え侍れと。中たえぬもみちのはし。うるはしき姿に侍れは。爲レ勝。

廿一番

左

けふはまた咲殘けりふる里のあすかさかりの秋萩の花

右

小車のにしきとそ見る古里の庭は蓬かもとあらの萩

左右ともに。故郷の萩なるにとりて。左は古里のあすか盛のなと。こまやかにいひくたされて。詞もいみしうおかし。右は小車の錦と見ゆる萩に。蓬の轉するを見て。車輪をつくれることをおもはれたる。心こと葉及ひ難くは侍れと。左の萩は。なを色まさり行心地し侍るなり。

廿二番

左

置まよふ野原の露に亂あひて尾花か袖も萩かはな摺

右

身にそしむ末葉さやきて散露のしのゝめ深き夜半の秋風

左。尾花か袖もはきか花すりなと。風情もあまり。詞もよしありておかし。但右しのゝめふかき夜半の秋かせ。事もなく感氣ありて。誠に身にしむはかりなれは。勝と申へくや。

廿三番

左

咲花はさなからむせるあはつのゝ露もたかはす見ゆる色哉

右

紫のねすりならねと藤はかまわくれは露をくたく袖哉

　花色如レ蒸レ粟。俗呼ニ女郎一と。順か作れる詞を。むせる粟津野の露もたかはすと侍る。いとおかしくも侍る哉。又紫のねすりならねと。蘭にくたくる露も。めつらしく侍れは。為レ持。

廿四番

左

詠わふる夕は山のおくもなし秋にうき身のかくれかもかな

右

なく虫のませもか露や寒からし枕の壁にこゑのうらむる

　左ハ愛ニ秋夕於深山之幽居一。右聞ニ蛩於寒更之敗壁一。共以有ニ秋景之感一。豈決ニ雌雄一乎。

廿五番

左

またしとは思はぬ物か棹鹿の来ぬ夜あまたの妻こひの聲

右

心あらはもるや山田のひたすらにいとひははてし棹鹿のこゑ

　左は古歌によりてよろし。右は心あたらしくておかし。猶又持にて侍らんかし。

廿六番

左

あま人の袖しの浦のうつせ貝ひろふはかりにすめる月哉

右

此ころの夜をへて色ますまさり行時雨はそめぬ月の桂も

　海士人の袖しのうらに貝拾ふはかりの月かけ。まさしく見る心地して。おかしく侍るに。時雨は染ぬ月の桂。望以前清光逐レ夜まさるへき心よろし。尤可レ為レ勝。

廿七番

左

八重たちし雲は嵐にきえはてゝ横川の峯の月そさやけき

右

朽残る軒の板まもさもあらはあれあれすは月の影ももらしを

　右は中三句。興ありて聞え侍れと。左横川の峯。雲のやへたつ山。みゝなれて侍るを。月には猶心やすみまさらまし。勝へきにこそ。

廿八番

左

海士人はよな〱夢やうとはまの波かけ衣うち明すらん

右

見し花の色を残して白妙の衣うつなり夕かほのやと

　左。よくいひくたされて。姿もよろしく侍れと。右源氏物語の夕かほの巻に。白妙の衣うつきぬたの音とはへるを。花の色によそへられたるもおかしけれは。勝にや。

廿九番

左

常盤木も下葉色つく秋山は時雨にもるゝ一本もなし

右

露霜の色とるきゝは紅の筆の林とよそに見えけり

　左。露にも時雨にも。つれなき常盤木。あき深くなるまゝに。下葉いろつく事。眼前のことはり。さる躰にておかしく侍り。右。紅の筆は。〳〵てといはんために。つゝけはへる詞にや。もみちによりて色とるによそへられたるは。見

所ある心地し侍れと。時雨にもるゝ一本もなしなと。いささかまさり侍るへし。

卅番

左

したひこし昨日の秋やふゆならん春の名にたつ神無月哉

右

吹風もはけしくなれは山櫻花よりもろく散紅葉かな

左。十月を小春といへるにつきて。秋を冬。ふゆを春になされたる作意。短慮のをよふ所にあらす。右。吹かせもはけしくなれは。山櫻花よりもろしなと。何となきさまに聞え侍れと。飛花にふるゝ風は。日をへてゆるく。落葉に吹あらしは。昨日よりはけしくなるへき心。人のおもひよるましき事なるへし。いつれもめつらしくおほえ侍れと。右なをまさるとや申へからん。

卅一番

左

日影さす庭の草はゝかつとけて霜の花にも露は置けり

右

をく霜をはらふと見ゆる袖もなし野への尾花の冬かれの比

右の尾花。雑とすへき所もなくは侍れと。左の霜のはなにも露はおきけり。いみしうおかしくはへるにや。

卅二番

左

山の井の曉かけて結ふ手の雫もやかてこほる比かな

右

水上はなを流れけり谷川の氷のうへをこゆる白浪

左。山寺の後夜。閼伽水のしつく氷ところさひて。さる事ときこえ侍り。右。氷をこゆる白浪。日影も及はぬ谷川なとの景氣。今見る心ちし侍りておかし。但かみと。うへとの事。心は聊かはりはへるは。古くも如此のこと多く侍るめれと。わさと歌合のために。沈みおもひて讀れたる歌ならは。いかにそやと思ふひともや侍らん。うたのさまめつらしく侍れは。まつ持なとにても侍れかし。

卅三番

左

月殘る浦はの波の東雲に面影みえてたつ千鳥哉

右

夕霧に友まとはしていもかしまかたみに千鳥こゑそ恨むる

左右の千鳥。左は殘月のしのゝめの面影。右は妹か島。かたみのうらのけしき。歌のすかた優にして。又勝負申かたし。

卅四番

左

今朝ははやいつくの山も埋もれてめつらしけなき富士の白雪

右

越路にはしるしにさせる棹ならて竹の末はも見えぬ雪哉

右もさる。躰には侍れと。左のふしの雪。まつ古歌のこと葉をもとゝして。春夏秋の詠にかはりて。麓の群山の雪ゆへ。めつらしけなきとはへるこそ。いとめつらしく見え侍れ。

卅五番

左

下くゝるひをも有らし鳰鳥の名におふ海の末の網代木

右

山陰や曉いつる炭車こほりにきしる音のさむけさ

左。下くゝるひをゝ。にほ鳥によそへられて。名におふうみの末。田上といふ所まて。おもひやられける心。いとおかし。右。文集に。賣炭翁曉駕二炭車一輾レ氷とはへるにや。天の寒からん事をねかふといへるも。かなひて見え侍れと。左は勝るなるへし。

卅六番

左

難面きのむくひを知らてかこつこそ戀のうき世の迷ひ成けれ

右

程へてもとはぬおりにや武藏鐙かくしもつらく思ひ侘けん

右。武藏あふみ。ふる事にてよろしくは侍るを。左戀の浮世。まよひの中の迷ひをなけく心。おかしくや。

卅七番

左

いく年そ祈る契はかたそきの行あひ見んもしらぬ憂身に

右

我命人のこゝろもあすしらぬ世にゆく末を契るはかなさ

左。祈るちきりはかたそきなと。いひしりて優美にはへり。右わか命人の心もあすしらぬなと。戀のおもひの切なるのみにあらす。大かた浮世のことはりを。うるはしくいひくたされたる。うたの心こと葉。かくおもふさまには。ありかたき物をとそおほえ侍る。尤可レ爲レ勝。

卅八番

左

まつ人は思ひたえたる雨の音のをやむも流石ねられさりけり

右

徒に更ゆく月の影もうしいひしはかりの有明の空

右。いひしはかりに長月のと。いへるをとりて。かけもうしなと。淺きにて深し。左おもひたえたる雨の夜なから。をやむをたゝならすきく心。哀におかし。以レ左爲レ勝。

卅九番

左

いかにせん身をうきかたにいひしほる袖はみとりの淺き契を

右

とはゝやな逢と見えつる夢のうら人も心のかよひけるかと

左。身をうきかたにいひしほるなと。淺位を恨しこゝろにや。よろし。右すゑの句に。かよひけるかとはへるまて。首尾よく聞えて。おかしく侍れは。勝負なし。

四十番

左

けふはまつ思ふはかりの色見せて心のおくをいひは盡さし

右

かさねても猶夢とのみたとる哉逢しなれにし夜半の衣は

左有餘。詞はあらぬさまなれとも。難逢に逢戀の心なるへし。おもひのふかさもはかりかたく侍り。又爲レ持

四十一番

左

つらき哉曾我の河原にかる草のつかのまもなく思ひ亂て

右

問はやな伊勢をの海人もかく計からぬみるめに袖は濡やと

左歌。ますけよき曾我の河原と。萬葉集にはへるやらん。增戀のこゝろにてよろし。凡此歌合。題をのせられすして。つかはれたり。題を見侍らは。思ひめくらされたる所も。心をなすまされけるほともみえて。おかしくそ侍へき。右歌。いせをのあま。源氏物語の心もかよひて。こと葉つかひも。優にきこえ侍れと。左は。なをつよき所はへる歟。

四十二番

左

年をへてつらき心のたねしあれは岩におふてふ松かひもなし

右

我かたに忘るゝ草の種もかな人のつらさもしらぬ計に

左之松。右之萱。共以レ種爲レ詮。歌躰又等同也。不レ及レ論ニ勝劣ニ歟。

四十三番

左

忘られぬうき身はなれぬ面影や人ののこさぬ形見なるらん

右

さやかなる影は其夜のかたみかはよしたゝ袰れ袖のうへの月

左。こと葉もなたらかにいひ下されて。よろしくはへり。右又心ふかくて。よしあるさまに聞ゆ。又持にや。

四十四番

左

さほ川の流にはあらぬみかさ山深くそ頼む神のちかひを

右

住吉のまつに神代のことゝへはふるき梢に風そこたふる

右の歌。ふるき梢に風そこたふる。たけ高くさひて。ならひなく見え侍り。左歌の。さほ川三笠山なと拙老の判者。おとると申かたき旨はへり。

四十五番

左

あひそふる親のまもりもなき身には關もる人も哀とをみよ

右

釣舟そをのか浦々かへるなる明石ゝ須磨もくるゝ浪ちに

小野のちふるか母の。心はかりはと。よみ侍りしことをおもひて。親のまもりもなき身にはと侍る。うちみるより老涙をもよほし侍る。あかしも須磨もをのか浦々と。いへる古歌をとりて。くるゝなみちにと置かへられたる。いとおかしく。遠望も思ひやられはへれと。左の旅の心。あはれもふかく聞え侍れは。勝とや申へからん。

四十六番

左

柏木のかけしめはへてこゝにしも住や葉もりの神なひの杜

右

賤の男かたきゝを老のさかこえて歸る山路はさそなくるしき

神なひの杜。おいのさか。おなし品にや侍らん。

四十七番

左

行末をかねて定むる人はみなあすしらぬ世を知らぬとそ見る

右

程もなく煙のすゑは立きえて雲をかたみの空そ悲しき

左。まよひの凡夫の有增。一として。はかなからすといふことなきことはり。卅一字に盡はへる。和歌の道の不思議

に侍るもの哉。右きた山等持院にて。舊日哀傷の御歌かくれなかりし事にこそ。尤可レ爲レ勝。

四十八番

左

いつかさてたえぬ願ひもこく船のよるへ待見んやとの池水

右

憂こともさためたき世の理りを思ひしらすは猶やなけかん

左歌。非二凡俗之言詞一右歌。不レ可レ及二比量一歟。

四十九番

左

法の道まよふへしやは二なく三なきのみか一たになし

右

ことのはのほかに出たる法の道誰にかとはん誰かこたへん

左歌。方便品に。唯有一乘法。無二亦無三とはへるを。ひとつたになしと侍る。おほつかなし。智者大師の。一諦尙無。諸諦安有むと。尺せられけるなと申。さやうのことにや。又曹六祖偈に。本來無一物なとの事歟。右歌。ことの葉の外にいてたる法の道。禪鋒に。敎外別傳なといへる心にや。ともに其意深して。淺才難レ弁。故不レ加レ判。

五十番

左

いく代まて下葉のちりの積りけんあま雲かゝるみねの松か枝

右

かの見ゆる松に千とせの陰しめて池邊にたてるたつの諸こゑ

左は古今集の序をひきて。あま雲たな引峯の松を思ひ。右は拾遺集の歌をとりて。池邊のつるを見る。いつれもゆへありて。うたのさま。祝言にかなへり。なすらへて爲レ持。

此歌合。准后より給ひて。判詞しるし付へきよし仰らる。是よりさきにも。えなんいなひ申さす。たひ／＼勝負をしるし奉りしかと。わつかに三十一字をつらぬる事たに。誠には。其さかひにいらさる身にして。如何なるをよし。いつれをあしと定め申へきなれは。たひ／＼辭し申しかと。重ねての嚴命によりて。かたのことくしるし奉るなるへし。凡たけ姿。こゝろ詞。よのつねならす見え侍り。名をかくされたる中にも。まかひなき御歌ともあまた有。おほつかなくおもひなから。詞をかたのやうに。書付はへりぬるところに。悉みつからの御歌を。おほしいつるにしたかひて。つかはれたるよし聞え侍るに。いよ／＼あさましく。みたりなる事ともを。いかにかせましとおもひ侍れと。旣にしるしおはりぬる事なれは。ちからなく返し奉るなるへし。

榮雅上

右慈照院殿御自歌合以百花庵宗固本挍合

堯孝法印自歌合

判者冷泉爲廣卿

一番　遠山朝雪

左勝

みよし野や明ゆく雪の山のはに面影殘る月の色哉

右

すたれまく風もやつけしめもはるに明たつ山の峯の白雪

右歌。題により。捨さる文字はへれと。これは。いつれも捨かたくこそ。明ゆく雪の山の端に面影殘る月の色かなと。月の雪にのこりたる心。よろしく侍うへに。朝の字顯さて。心におほめかせる。六百番歌合に。冬朝といへる題にて。寂蓮法師やらん。なかめやる衣手寒し有明の月より殘る峯のしら雪と詠せるを。判者。冬朝はかくこそと褒美しはへる。月よりのこるといへる樣にこそ侍らねと。朝心は面影おもひ出られて。よろしきやうに侍るを。遠心少し幽にやと。ふと覺はへるを。たち歸りみ侍れは。隨分こゝろに籠侍て。作者粉骨せると。おかしきやうなるを。三吉野やとをけるや。古は。まゝかやうにも侍れと。其詞の餘情なくては無レ詮歟。右歌。香爐峯雪撥レ簾看とやらんいへる詩の心さしにて。めつらかならすや。めもはるといへる說々侍れと。是は遙歟。但春に用ひ侍て。雪を花の心になし。告しも。はるをつけしにやと覺えはへれと。さやうにはいかかそや。たゝ明たつ山のみねの白雪を。つけしかたにては。つけしもこゝにとりては。少し心よからす侍るうへ。明立と計にては。朝のこゝろもことたらぬやうにや。左初五文字思ひたくは侍れと。勝たるへし。

二番

左勝

白雲のはれまもおなし色なから朝風寒き雪の遠山

右

おきいつる昨日の暮の雨ならし外山をうつむ雪の白雲

左。白雲の色をゆきに殘し侍りて。晴まもおなし色なからなといへる。心なきにもあらす。右きのふの暮の雨は。今朝又雪のしら雲となりたるとをしはかられて。心こと葉おかしきやうなるを。打まかせては。昨日のくれの雨ならし。外山をうつむ今朝の雪の白雲はと。言くたすへきを。おき出しと昨日の事をいへる。無二其詮一うへ。詞のつゝき宰予なとか晝寢すこして。夕暮におきいてしやうにや。朝遣なとの文字あらはさぬを隨分とおもへるにや。しかはあれと。題の字をあらはさぬは。題によるへき事にこそ。此題なとは。顯はさんこといともくるしからすや。殊に歌合のうたにとりては。口傳故實等不レ可レ勝レ計者歟。おそらくは。讒をか恥侍らんとおもへ給へるは。例(本ノマヽ)管籥のたとへにや。亦左かちはへれかし。

三番

左持

朝戶あけて都に遠し山里はさそな軒はの峯の白雪

右

都には朝な〳〵にまつ雪をいくへかはらふ比良の山かせ

さそな軒はの峯のしら雪。いくへか拂ふ比良の山風。いつ

れも大かたなひらかなるやらにや。雨首の雪の淺深難レ分者也。

四番　左持

山鳥のおのへの雪のあさほらけ向ふ鏡の影そくもらぬ

右

朝かゝみ手にとる計おとろくや雪に望める窓の遠山

雨首。源氏物語の浮舟卷やらんに。山は鏡をかけたるやうにと侍る。雪のことを。左は。やまとりのおのかゝみのかたにとりなして。曇らぬといひ。右は白髮のかたへことよせて。おとろくと侍り。いつれも心あるやらにや。又可レ爲レ持。

五番　左

明わたる雪の光にうつもれて影うすくなる山のはの月

右勝

降つもる雪のひかりに影きえて月も明ゆく遠の山のは

左。雪朝等の心。右。曙のこゝろ。いつれも。一番の左のことく。さも侍ぬへし。然ゆきのひかりにうつもれて。雪の光に影きえてと侍る。同し姿にはへるを。ゆきのひかりに月の影うつもれてといはんこと。すこしいかにそや。影きえては勝へきにこそ。

六番　依戀祈身

左

神もなを哀はしるや我せこか來へき宵そとかけし頼は

右勝

身のとかとおもひ知らすやかはかりは祈らし物を神も耻かし

左歌。衣通姫のうたをとりたる計にて。題の心いとおほつかなくや。右おかしく聞えはへり。尤勝侍らん。

七番

左

なからへは逢ことやあらんと計に惜からぬ身を猶祈る哉

右勝

なからへて有はといのる心こそ行末頼む契り成けれ

左右の。なからへこと。左は。第二句をはしめて。題の心あまりに幼稚にや。右は雌雄をわかつほとにもこそ聞えはへれ。勝へきにこそ。

八番

左勝

なひかしな神のいさむる道ならは迷ふ戀ゆへ身を祈るとも

右

うき身さへ思ふ事とて神もしれ逢見んまての世を歎とは

右第二句。おもふことと計あるへきをとて。と文字をそへてはいかゝそや。左下句はかりに題を顯せる。無念には侍れと。神のいさむる道ならは。迷戀ゆへなといへる。まさるへき歟。

九番

左

新てもとはれす獨月日へはあるにくるしき命ならまし

右勝

定めなき身はうき中とみしめ繩くりかへし猶祈きにけり

左。此題にとりては。祈てもといへる。 命を祈心か。命と

いはぬまては、何事を詮とも聞えす侍るか。右は、いつくを責すへき程の事にては侍らねと、大方難きにつきて勝も註し侍らんすらめ。

十番

左勝

つれもなき人の心のすへをたに見るやとなかく祈る玉のを

右

逢まてはつらき身なから長かれと祈ても其かひやなからん

左歌、結句、此題にとりては、其玉の緒を祈るとこそ聞え侍らんすれと、一首したて、我思ふ人のたまのををも。なかく祈たる心にもなるへくや。右歌。初五文字に、よくも首尾相應せぬうへなくと。此題には聞えはへらんか。身をなかゝれと祈らも、玉の緒をなかゝれといのるやうにはなくや。左の勝と申へし。

和歌の浦や　風のすかたを　つたへても
ことはのなみの　世とともに　たちさましらて
明くれは　陸にしつめる　身にしあれは
玉によるなは　よそにのみ　きくの池水
汲てたに　哀しられん　人もなみ
四十今はた　過ゆけと　まとふ心の
道なれは　春ははなさへ　はつかしみ
夏は五月雨　袖にふり　秋はをしかの
音にしたへ　冬はかしらも　ゆきならん
とおもふからに　ゆく末も　なにを頼むの
かりの世に　捨んもさすか　たらちねの
なけきの森を　ほたしにて　かくしつゝのみ
かくなはに　思ひみたるゝ　折しもあれ
此ひと巻の　二十歌や　錦ぬのもを
織ませて　しかまの里の　かちまけを
分つへしとの　ことの葉は　さすかにえやは
井名野なる　篠の一ふし　なきことを
ゆく水莖の　みちにまかしつ
よしといひあしと分つゝ和歌の浦や短き棹の舟踏くるしも

右尭孝法印自歌合以遠布印本挍合

道堅法師自歌合

一番

左　初春待花

雪のうちに思ひしよりも春の色を待えて遲き山櫻哉

右　山路尋花

山風の春さむけなりけふはまつ都の花に歸りてや見ん

左歌。往年より花をおもへる心ふかきうへに。世の中のならひ。またるゝ事のわりなさは。期にのそみての心いられもまさることに侍るを。よくいひかなへられて。おかしく聞えはへり。右歌。都のはなに歸りてや見ん。尤其興侍るを。第二句やあまりやすらかにいひくたさむとて。少し平懷のやうにも聞え侍らん。左猶まさると定申侍るへし。

二番

左　山花未遍

深からぬ春に先たつ花もあれと猶面影は峯のしら雲

右　朝見花

梢より色つく露の袖かけて花にすゝしき庭の朝風

庭の朝かせよりも。峯の白雲は面影はるかに立まさりてや侍らん。

三番

左　山村花

いひしらぬ片山本の家櫻うへても誰か花は見つらん

右　故鄕花

咲花のけふのあるしに身をなして思ふも悲しふる鄕の春

左歌。山本の家櫻。まことに心あるさまに見え侍るを。右の歌。けふのあるしに身をなして思ふも悲しといへる。故鄕の春のあはれは。猶こゝろもふかく。詞も艷に聞えて。感涙禁しかたくこそはへれ。

四番

左　田家花

庵さす苗代かきに折そへていふかひもなき花の枝哉

右　古寺花

世のうさも又やあひ見ん初瀨山新し道は花そ降しく

左。苗代垣の花の枝けに遊興ありといへとも。少し俗に近くて。いふかひなくや侍らん。右の。はつせ山は。心も。こと葉も。たゝしくて。田夫の花のすかた及ひかたきにや。

五番

左　花似雪

梢にてうつろふまては見し花の色にあとなき庭の白雪

右　河邊花

暮ゆけはたゝ春かせの音羽川をとにきゝても花そ悲しき

花の雪は。をのつから見馴たる跡も侍ぬへし。此春風の音こそ。身にしみて聞えはへるに。末の句。水分山をみれは悲しもといへる古風さへ。かよひきたれる心地して。かなしきのこと葉も。此歌なとにゝて。誠におかしく侍りけり。

六番

左　深山花

馴ぬれは深山の花もおもふらんあはれ浮世の春やいかにと

右　暮山花

えもいはすさすかに花の宿なくは歸らんとせしを山の端の月

左歌。心有てきこに見え侍り。右歌。誠にえもいはすおもしろき風情にはへるを。此初五文字こそ。貞賓言語同断にくらゐに。言語道断とも謂出す〻き所なくや侍らん。彼はなにくらさる木のまより侍としきなき山のはの月も。こもいはの心は。此暮山のはなれたし誠に侍る〻きにや。なを此歌にとりては。えもいはぬといはすともにや侍らん。是らはあまりの事にはへるうへ。謙議のこゝろあさきゝはも見えぬへく。掛酌は申詞に侍れとも。かゝる吹毛の難を申はへらては。何はかりの事をかとて。短慮の初一念をしるし出し侍る也。作者とまあることゝ〻信判あるへきやらん。[illegible]なくこそ侍れ。しからは此番[illegible]なすらへて持に定申へし。

七番

左　古渓花

花ゆへや風のつらさも浮世とて又すみすてん谷の下庵

右　関路花

春よたゝ霞の関の朝ほらけ花にとゝめしこゝろの〻みかは

左右ともに[illegible]にはへるにとりて。左は風のつらさも花のたよりなるらき世とて。下の庵をすみかへん事を思へり。右は霞の関の春のけしきは。花の色ならても。心とまれるよしもいへり。しからはなをおもふ志の深さあさきにとりて。左をまさると申へし。

八番

左　霧中花

春風の朝たつ峯に思ひをきし花のゆくゑもいかゝ成らん

右　霞上花

朝霞たゝ猶[illegible]行末の雲ふかく[illegible]も花の香そする

[illegible]霞中花の浅深不レ浅ははへれと。右[illegible]ふく風も花の香そすゝ[illegible]いへる句[illegible]添る所なくて。白玉の露に。徑寸の[illegible]はかりあさやかに。いさきよくは侍らしかし。是そ寛平以往の古歌にも。なとか立ならひ侍らさらんと。いろ〳〵感情に堪す侍へり。

九番

左　橋下花

わすれすや花に露ちる夕暮も紅葉の橋の秋の村雨

右　花下送日

吉野より外にはいてす日数へておなし陰なる花は見れ共

左、唯有レ別時今不レ忘。[illegible]南過ニ楓橋一とやらん侍る。杜牧の詩の心をおもへるにや。歌からよけにみえ侍り。右。吉野の一境。千樹の雪遠に来往して。他山の春を尋るに及はさる也。誠に無ニ其興一歟。所謂もろこしの楓橋。日の本の吉野。いつれを劣り。いつれをまさるともわきまへ難きにこそ。

十番

左　庭上落花

月そとふ庭のまつかせ心せよわかためにこそ花もおしまね

右　暮春惜花

今はとてうつろふ花の木かくれにあるをみるたに春風そ吹

右。暮春の残花に対して。右を見るたに。はるかせそ吹。さもうつくしけにもつゝけられぬる物哉。彼秋やは人のといへる本歌にも。いたく劣り侍らしと見給ふるは。古今集

の撰者に對して。空おそろしき申詞にもや侍らん。返す返す心肝にそみて覺えはへり。左歌。心ふかく。もひ入たる所。短慮の及へきにあらすといへとも。此右のうたにつかへる中。不運の兵賦にても侍らん。但惡界を合手にては。負てもなとかおもひ出ならさるへき。

十一番　左　初秋月

思ふにも限そしらぬ今よりの秋に心は月のゆくする

右　月前萱花

月はなをあかぬ物哉荻に露尾花に風のなひく夕暮

左歌。とゝこほる所なくいひくたして。事もなく。かへすかへすきやうに侍り。右の草花あまりに事好みたるさまにて。心みたれはへり。左の方人に侍るへし。

十二番　左　雨後月

雨落し槇の廣葉の露の上に心もをかす宿る月哉

右　松間月

住の山松より遠の河かせに波も聞えて月そ更ゆく

雨の後は雨の後。まつより遠の波の聲。月のひかり。とりとりにて優劣をわかたし。

十三番　左　山家月

なに事のうきをもいはぬ山にても月見る秋は心こそあれ

右　月前竹風

窓の露さもえくれやらし呉竹の葉分の月に秋風そ吹

兩方心ふかきにとりて。左は聞をいたはらす。たすむかへるやうにいひ顯はし。右は。ことはやさしく。姿艷に云さしたる所有。誠に上に立んも下にたゝんも。かたはらの定は。ふたきことにこそはへれ。

十四番　左　野徑月

里とをく野は成にけり長き夜の月のゆくゑをとふとせしまに

右　澤邊月

澄影もふかき江にこそよるの月みくさ隱れの秋の澤水

水草かくれの秋の澤水。おもひ入たるこゝろあさからすおかしく侍るを。遊子猶行らん遠野原の月。あはれ捨かたき世にしらぬ心地こそすれと侍る。源氏物語の歌さまも。空に通ひて。此月のゆくゑ。殘（殊歟）にやさしく。見所おほくこそ侍れ。

十五番　左　月前聞雁

契りあれや必秋の夜をかさね月たにすめは雁も鳴なり

右　海上月

秋深くなるとの海のはや汐に落ゆく月のよとむ瀬もかな

左右。長高く姿きよらにて。いつれも短才の存量分別しかたく侍れとも。猶左はめつらしき方にとて勝とす。

十六番　左　月照瀧水

あかなくに何をか月のくまの川清きなみかく瀧の白玉

右　杜間月

夕露のもりのしめ隱くるしくも思ふ木の間の月にかゝれる（さイ）

左右の月。瀧のしら玉は。殊に金玉のひかりあさやかなるにつきて。杜のしめ繩少しくまある心ちして侍る。いかゝ。

十七番

左　月前秋風

雲霧も夜には月のかけまさは霧をいさめて秋風のふく

右　江上月

寒なり夜なく鶴の聲ひとつすめる古江の水の月影

左は、霧情たくひなく、右は、有心躰を存せり。たとひ提撕か言つくりても、此優劣にいたりては、定申かね侍らん。

十八番

左　月前虫

露のまとみるもはかなし鳴虫の命のすゑの蓬生の月

右　月前聞鹿

月にこそ泪のこさねなく鹿のひとりある暮は忍ひても見つ

左は、蓬生の事なから。命の末の蓬生の月、何に及ふへきやうにも侍らぬにや。右ひとり有くれを忍ひ過して。月の前にたへさらんなく鹿の泪のほとも。聞ひとの心の中も。さこそとをしはかられて、感興ふかく聞覚え侍れ。

十九番

左　旅泊月

浪風も今朝の舟出にさはらすはかゝる所の月をみましや

右　月前草露

消さらは花にも劣れ山奥の青葉にをもる露の月影

左。旅泊のこゝろめつらしくとりなされはへる。憂もうれしきといふ心は。かゝる所の事にや。またなく哀なるものといひけん須磨の寝覚も。思ひよそへられぬる詞つゝき。不可思議の秀句にこそ侍れ。右、消さらは花にも劣れなといへるわたり、心もことはも既に侍るを。青葉におもき露の月影て、當世の歌よみの口つきにて、おもしろき道ても不二庶幾一もはへらん。かゝる所の月、返すぐくとりみまほしく。このもしくこそ。愚意には存しおもひ給ふれ。

二十番

左　菊籬月

白菊の籬の月の霜をきていかなる色に心うつらん

右　暮秋月

別ては又もこん夜の秋の月残るね覺そ猶たのまれぬ

右は。無常の観心なと。興ふかけに聞え侍れは。文字言句を。わつらはすに及はすとも。末の句なと。己達のやうに聞え侍り。左、尋常の歌さまにとりて、やすらかにうつくしくて。こん世の秋の月よりも。まつうつろふ心の深きは。是も慚愧のひとつにこそ侍らめ。

廿一番

左　寄雲戀

うはの空に思ひたちしは契にもあらぬ身なから迷ふ浮雲

右　寄風戀

おもひいらは便なるへき山風をはけしとのみも歎つる哉

左右の雲風、述懐の及ふ所、さして勝負も侍らすや。

廿二番

左　寄雨戀

あさましや曇るはかりの心をもはらはん袖のかゝる村雨

右　寄草戀

知あやは思ふあたりの草にこそきえん露とは身を歎くとも

此番、右は常に見なれぬる心詞にも侍らん。左は猶こゝろあるさまにやとて勝とす。

廿三番

左　寄木戀

もらしても色なかるへき言の葉や花さかぬ木の陰にくらさん

右　寄鳥戀

我ねをもなかすは終に庭鳥のこは時しらぬ物や思はん

右。短慮少し思ひ分侍らぬ所有ににたり。先左を勝と申へし。

廿四番

左　寄嵐戀

淺からす戀し暮の松をたに問すはあらしいかゝ吹らん

右　寄船戀

契こそ漕つ海原ゆく船のほのかなりしもあかぬ名殘よ

左右。いつれも披講の秀逸。とり／＼のすかたこと葉に侍るを。右歌。結句そ。此歌にとりて。今少しよはく聞えはへれとも。事からゆへ／＼しく見え侍り。猶持にても侍へし。

廿五番

左　寄糸戀

おもへ君歎きくはゝることはりも只わひ人の宿にこそあれ

右　寄衣戀

いとはるゝ身はいとひても墨染の衣の糸のみたれてそ思なけきくはゝる衣の糸の亂れ。いつれも歌から上科には侍らす。よき程の持とす。

御此一帖は。道堅禪師の獨吟の五十首を。左右に分て。拙夫に判詞つかうまつるへきよし。命せられ侍りし。凡一身の所詠をもつて。南方のつかひを定しむることは。昔も今も。きたあて生涯はへるにや。されと。うちおほゆるには。御裳濯河の歌合とて。五條三品の判者たるを始として。同く宮河のなみ立つゝき。中川水莖の跡を殘せるに。世のもてあそひとなれりける。是皆圓位上人の風雅欣淨の。ほかからかなる胸中より。みかき出せる玉の光にて。誠に無價の寶に侍へし。今彼堅師は。俗をはなるゝ事既に九かへり。見性を三昧として。偏に片岡山のひしりの跡を尋ぬといへとも。猶難波津のかしこき道を忘れすして。柿本。山邊の餘情も。樹下石上の禪定も。誠に今の世の西上人なるへし。其詠歌にをきて。まさしき判者を思ふに。世にかたかるへき事にや。いはゆる累代碩學の家によきり。當時英才の輩にもとめんは。猶そのかみの家を忘れす。道をもおもへるに似たるへし。たゝ久しく己を知る契計に。一はしをしるしつけんは。何事のそしりかはとて。強て至愚の所にいたれるも。毘盧の心上は。凡下の一念を超さる理りにもかなふにや侍らん。中々いなみ申さんは。身の程をはかりしり。其うへは物のかたはしにもたくへるに似たり。又はなての歌合とて。人我の執情をあらそひ。彼此の雌雄を論せはこそあらめ。忽然念起の一句を述侍らんは。そしるともいかるへからす。譽とても悦へからす。只一枝微笑の儀に擬して。一筆褒貶のことはをくはふるのみなり。時に明應六の年しはすのはしめの八日。是をしるす。

正六位上凡河内倹恒

右道堅法師自歌合也。件本從二親王之御方一申出書寫畢。彼本後柏原院勅筆也。未レ遂二一挍一者也。

于時永祿十二暦夏六月上八日

正五位下行左近衞權少將源通勝

右道堅法師自歌合以百花庵宗固本挍合

群書類從卷第二百廿二

和歌部七十七自歌合六

豐原統秋自歌合

一番　左勝　春　音羽河

春きぬと岩波高し音羽河はやくも氷とけやしぬらむ

右　玉嶋河

河かぜにあてこす浪の玉嶋やえたにもぬける青柳の露

二番　左　高砂

をしなへてとくる氷の初花やかすみのさきの春をみす覧

松にふく風のしらへも春ながらきゝしそむかし高砂の山

右勝　春日野

かすかのやかきりしられぬ春の色をねにあらはして鶯そなく

峯の雪消ていくかの空ならむ松も檜原も杉もいろ〳〵

三番　左　三輪山

雪きえてかすむはかりや三輪の山春をゝしへししるし成らん

右勝　葛城山

春はなをはふきあまたに咲花の雲こそかゝれかつらきの山

はふき多き中にいつれを春の色にかけて葛の哭をくらむ

四番　左持　手向山

おもふにも神やはうけし手向山ぬさとちりゆくはなの心は

右　伊勢海

いせの海のちひろは沖のかすみにてみるめかひある春の濱風

咲もあへすうたて跡なく散花をとりやふりぬる世に惜みまし

五番　左勝　志賀浦

さゝ浪や國津神代のおもかけにかすみてのこる浦のはま松

右　三嶋江

三嶋江の芦のわかはの露の上にたれしあをきて月やとすらん

しのゝめの霞色こき軒はより鶯の音のらうたけになく

六番　左勝　鹽竈浦

こく舟のつなてくるしき鹽かまも春にうらみぬ浦の明ほの

右　宇津山

夢にたにあひみぬ花の春なからしけるやうつゝうつの山越

月もこゝ波もたゝこゝてらすころにほてる匂ひ空霞ゆく

七番　左持　芦屋里

[illegible]下たく煙むすほゝれはれぬあしやの春雨の空

右　　吹上濱

うらわかみをのゝ淺茅生なひくめり春風よはし吹上の濱
　ちらて花常盤の色は住の江にへにける松をしる人にせよ

八番

左　　湯等三崎

かちをたえゆらのみさきの春の日にかすみをしのく沖の舟人

右勝　忍山

紅にふり出て花は咲ところをいかてしのふのやまほとゝきす
　しかすかにのとけき春もふくをとや山は嵐の松の下庵

九番

左勝　水無瀬河

春の色をそこにふかめてみた瀬河夕日にかすむ山のはのそら

右　　田簑浦

いかにせむたこの浦波たゝぬ日にこひしかるへきあすの春哉
　みちとせになるてふ色をせき入てかほるなかれの花の盃

十番

左勝　末松山

けふはまた春のわかれの名にさへやたちこゆる波の末の松山

右　　大淀浦

おほ淀のまつとせしまの春もいまうらみてかへる浪の夕暮
　菫草ゑかくもたへしの〻の色にまとゐせし夜の露の曙

十一番　夏

左　　大井河

大井河水の緑と夏木立しけれはかけのふかきころかな

右勝　信太杜

うつろはむ秋を心にこめなからしけるしのたのもりの下草
　茂りそふ軒はにくらき竹の葉のよな〳〵月を忍ふころ哉

十二番

左　　猪名野

さゝ分るゐなのゝ月のやとりさへ見る程なくてあくるよは哉

右勝　御裳濯河

神風やみもすそ河のゆふすゝみ松もも〻枝のかけひたすなり
　夢やよそにふす程なしと過つ覽すゝむ枕のみしか夜の月

十三番

左持　伊香保沼

あやめ草時過る身のした根をはいかほの沼のいかてしられん

右　　天香具山

白妙にあさゐる雲もゆふかけて夏おもしろき天のかく山
　おき出て眺むる空のしのゝめに螢は薄くとひきえてゆく

十四番

左持　大江山

大江山雲吹風も峯こえて木陰すゝしきゆふ立の露

右　　難波江

夏かりのなにはのあしをさす棹のをとにもちかき秋をしる哉
　我妹子かきてもとふやとかたまては叩く水鷄に白む宿哉

十五番

左　　美豆御牧

まこも草ゆふ手をたゆみ夏の日のめくるやおそきみつの里人

右勝　松浦山

沖つ風吹夕暮はまつらかたたつなきやまの名にしおふらん
　松風に月ふけゆけは羅綺の上にかさなる霜の袂すゝしも

十六番　秋

左勝　泊瀬山

秋といへはやかて哀もこもり江のはつせのひはら色は替らて

右　龍田山

秋のくることや侘しきたつた姫たゝなをさりの色はそめしと

花の色や露のしからみせきもあへす戀て移ふまのゝ萩原

十七番

左勝　須磨浦

いつはあれと須磨のしほ焼なれをしそ哀と思ふ秋のうら浪

右　宮城野

こをしかの涙にさかふしら露も色にそめゆく宮城野の原

すかる鳴まかきも跡しめへ近くあれたる里の木々の下風

十八番

左　水莖岡

水くきの岡の木葉の秋風をいつとかまたむ露の玉つさ

右勝　小倉山

風わたるふもとの尾花みねの松蔭はをくらの山そかなしき

朧けの春の色をはなにかせむみなから花のむさしのゝ原

十九番

左　宇治河

河風によそのきぬたの音なからねぬよしらるゝうちの山かけ

右勝　雲鷺杜

染そめすぬるゝを色の楢の葉にはれぬときはのもりの秋霧

いてふねの棹をさす浪ににたる哉空とふ雁のむれて鳴聲

二十番

左勝　三室山

神垣やみむろの山のくすかつら繁くを見れは露のしらゆふ

右　高圓野

高圓の野への秋風ふくことに萩の下葉の夜寒をそしる

繰返し過こしかたも後の世もつきせぬ露のゆふ暮の袖

二十一番

左　伊駒山

いこま山木すゑこえ行今よりや時雨るゝ秋もよそにみゆ覽

右勝　生田池

秋ふかきいくたの池のいくたひか空もしくれの森の下陰

稲妻は雲に光りて田面にはひたひく聲のかすかなる空

二十二番

左勝　淨見關

清みかた關路の秋もやゝふけぬ山もとさむきいさり火の影

右　武藏野

むらさきの一もとあらの萩ちれはなへてうつろふ武藏のゝ原

夜をのこす霧のうちなる月影にかはりて高く日の登る空

二十三番

左勝　伊吹山

なかめしとさしもいふきの外山より暮れはおしき秋の色哉

右　佐良科里

慰めて月たにすまぬ秋ならは誰かはとはむさらしなのさと

かれ／＼の千種の中に一本の類ひなき色やりうたんの花

二十四番

左　白河關

月かけもいく有明にめくりきてけふしら河のせきの秋風

右勝　野嶋崎

打よする浪さへ色のひとつにてかるゝ野しまの秋のはつ霜

なくよりもみゝにたゝりて庭近くよる〳〵虫の冷然の聲

二十五番

左　明石浦

うら風にあかしのとなみ霧はれてたくもの煙哀にそたつ

右勝　阿武隈河

鹿こそわか世もしらすあふくまそらきとし浪の秋のわかれち

霞あひて関も色そふ袖なれやかさすも道のちらす匂ひに

二十六番　冬

左　清瀧河

見るまゝに山分衣たちかへて冬やきぬらむきよたきのなみ

右勝　小鹽山

をしほ山ふたはの松もとしふりぬいくよなれてか時雨降らん

眺むれは峯さたかにも匂ふ日の曇る程なくしくれ行かけ

二十七番

左勝　住吉浦

今朝みれはゆきあひの霜の夜や寒き衛府さふる岸の姫まつ

右　片野

降雪のけふは昨日の道かへてあとなきかたのみかりならまし

木からしにとくは生田の杜の露なれこし秋をしのふ袖哉

二十八番

左勝　田簑嶋

旅にしてぬるゝ田簑の宿なからからすはきかし夜半の時雨を

右　有乳山

都には時雨ふるらし風の音もけさはあらちのみねのしら雲

友鶴のもろこゑになく庭の松よるの嵐に霜はさえつゝ

二十九番

左勝　浮嶋原

時しらぬ山とし高くふる雪に松もはかへぬうきしまかはら

右　安達原

もみちせしあたちのまゆみちりしより夕日を寒み霰ふるなり

程もなく年はきはまるしはす哉らうを盡して過る月日の

三十番

左　因幡山

よこ雲もたえ〳〵峯に立わかれあくるいなはのやまの白雪

右勝　鏡山

いつの間に暮ゆく年の鏡山五十地にかゝるときをうつして

ひゝきあふ瀧の音してりうもんの松風とをくもる雪哉

三十一番　戀

左　伏見里

あはれともいはて年ふる里の名の伏見の夢にたれをまつらん

右勝　霞浦

おもふかたありてやなひく鹽けふりはては霞のうら風そふく

思あれはもえつゝとはにふしのねのかゝる煙をたゝぬ苦しさ

三十二番

左　石瀬杜

いかにして岩瀬にそめむ初時雨もりての色はさもあらはあれ

右勝　筑波山

橋のした吹風やつくは山かりねのゆめのよはのうつり香

つれなきに悔しと思ひ果もせてやますや人を又慕はまし

三十三番

左勝　袖浦

身をつくしくちぬしるしを思ふにもかけてそつらき袖の浦波

右　縫田池

わか[illegible]も縫田の池におふといふねぬなはたちて逢夜なき哉

身よいかに君くやとのみ待しよのけふも空しき姤うれたさ

三十四番

左　高師濱

人しれすふけ行夜半による波の高しの濱の松そかなしき

右勝　[illegible]宮下社

いまそしるあはてのもりの秋風よ木葉ふりしく契なりとは

あはて身はきゆとも人の必とせめては後の世をし契らは

三十五番

左　志香須賀渡

思ひ沈む淵はありともしかすかの渡りし瀬をは忘れやはする

右勝　濱名橋

かけて思ふ濱名の橋にみつ潮のなといやましに遠さかるらん

になくもまけてそ慕ふ中絶て悲しかるへき契と思ふに

三十六番

左持　礒間浦

さよふけぬなれも礒間の浦千鳥つまとふかたに鳴て行らむ

右　守山

つゆ雫やまの山もりもる山のやます心のしたにそめつゝ

夜も更ぬきけは河風千鳥なく問へき人はすますなる身に

三十七番

左勝　佐野舟橋

なる神のとゝろくよりもかなしきは親さへさけしさのゝ舟橋

右　安積沼

いるさまにあやめも分すかつみるも安積の沼のえに社有けれ

またさらんえにしもあならしらてけふ教へし宿の身を返しけん

三十八番

左勝　松嶋

右　緒斷橋

しるやいかにけたぬ思ひも陸奥のをたえの橋にかよふ物とは

空ことをこらす神をも佛をもさしてをちかへしかる頼まん

三十九番

左持　三熊野浦

三熊野の浦にかさなる濱ゆふのいふにもあまる袖をみせはや

右　鳴海浦

たかかたになるみのうらのはまひさきひさしや

夕暮と深く契るもひとかたにさため難さよ君はつれなし

四十番

左　二見浦

二見かた礒なにましるうつせみの身につまゝれて哀とそみる

右勝　名取河

つゐにさてあはてくちぬる名取河ためしもしらぬ袖の埋木

文をたにたゝに返してみもいれす先は思ふにけしからぬ哉

四十一番　雜

左(■■)芳野河

よしの河千世にひとたひすむあれと渡時なき御代を知かな

右　鈴鹿河

あき衣世にしほたれし鈴鹿河すゝぬむ浪のよるへしらせよ

世の憂に忍ふにたえぬ遁れきて隠れん岩の狭間たにあれ

四十二番
左勝　不士山
降雪も半に消て時しるやけふみな月の不二のしは山
右　還山
來るといへと秋も南にかへるやま猶とて鴈の行もとまらす
笛竹の調へは代々にたえすてふ風も其音を知かかしこき
四十三番
左　海橋立
今みるも下てる神やわたしけむ松に入日のあまのはし立
右勝　飛鳥河
飛鳥かせ吹にもあらていたつらに七瀬すきたる跡をしそ思ふ
哀にも過行世かな河水もかはれはふちの瀬になかれつゝ
四十四番
左　鳥羽
時雨ゆく鳥羽山松はつれなくて木すへ色つく深草の里
右勝　辰市
あけぬまもをのれさきたち辰の市やかへる夕も人の世の中
旅はたゝつゆしも寒き野山をも家ちとたのむ契かなしも
四十五番
左　吹飯浦
袖寒み友よる千鳥こゑすなり小夜も更非の浦のしほかせ
右勝　布引瀧
山姫や染し木の葉をこきませてさらしもあへぬ布引の瀧
玉きはる極めもしらすふへき世を必遠くしめむとや思ふ
四十六番
左　長柄橋
むかしたにしるしはかりの橋はしらあとも長柄の芦のむら立
右勝　玉河里
かりねしてかへす衣はうすくともおもふゆあかせたま河の里
行年の巡り巡るやをのつから身に積りきて昔といふらん
四十七番
左　生浦
櫻あさのおふの根を人とはゝ世にまつことのなしと答へよ
右勝　佐夜中山
おひかねはまた嶺雲のはれぬまになか〳〵あくる佐夜の中山
背をまけて笑む方に利なりせは貧しき道も苦しからしな
四十八番
左勝　嵯峨野
おもひやる昔もさらにかなしきは秋のさかのゝ夜はの松風
右　角太河
暮ぬともきゝてわたらむすみた河かたりも出し都鳥かも
いひかめるはたかいか計り理をせめてかた人するも近くやはある
四十九番
左勝　志賀磨市
うることもなくて年ふるしかまかちの心の色は道にそむれと
右　和歌浦
音をそなく翅みしかき老の鶴のたつかた知らぬ若の浦ちに
しるや君神の定めしまことと人かみしもやすし千代も絶しな
五十番
左勝　逢坂關
立かへり代に逢坂のさねかつらくるしとのみはなに思ひけむ
右　御津濱

舟とめて三津の濱松なみこしに幾代の人かむかしとふらむ

學ひつゝよゝにかくなり藻鹽草ねは心とか盡ぬものから

右か十番歌合。貴玉也。爭金也。即以其詞華嘗其雕琢。只信來者之不撰其修辭。奇句希冠和歌。述其意。狂夔不足成鼓。蓋供一莞而已。

明應庚申暦孟陬廿三日書之　　御判

右以原純秋自歌合以稱當代譯本書寫校合了

十市遠忠自歌合

兵部少輔中原遠忠

一番

左　立春

天下いつくはありとも春はまつはなのみやこに立やきぬらん

右

あふ坂やせき吹こえてあらたまの音羽の山のけさの春風

左。天下いつくはありともと侍るは。みちのくはいつくはあれとゝいへる心にや。はしめ五もしことくしくして。耳にもきこえすや侍らん。右あらたまのをとは山。めつらしきやうにおほゆ。萬葉に。あら玉とをきて。としの心にもちゆる歌侍るにや。そのすかたなるへし。はなのみやこの色香すてかたくおほえて。左爲ㇾ勝。

二番

左　初春

けふといへは千さとをかけて新玉の年のを長く春はきにけり

右

春のくる色にみえても朝かすみまたたちやらすやま風そ吹

左。としのをなかく春やきぬらん。祝の心にて。よろしく侍り。右あさかすみ山かせにてきえむには。何かは色に見ゆらむときこゆ。以ㇾ左爲ㇾ勝。

三番

左　梅

梅かゝを外にもしたふ人やあるとあらしにかへすまとの暗

右　夜梅

春のよにやとの梅かえはな開はよところもさらす風かほるなり

左右ともに。むめのにほひもふかくきこえ侍れと。あらしにかへすいかゝ。ところもさらす。たゝ詞なれは。きゝにくく侍り。仍爲レ持

四番

左　殘雪

みるまゝに春たつそらのしるしとや霞に消る峯のしら雪

右　雪中鶯

さえかへりきりなき山もふるゆきにむせふはかりの鶯の聲

左の歌。かすみにきゆるみねのしらゆき。いとよろしく侍り。右ふる雪にむせふはかりのうくひすのこゑ。ゆかしくきこゆ。剛レ霧山鶯啼尙少といへる詩の心なるへし。きりなきやま。いさゝかおもふへくやあらむ。降雪にむせふも興ありてきこえ侍れと。霞にきゆる。下の句。すかた心おかしくきこゆれは。以レ左爲レ勝。

五番

左　霞

立なるゝ軒はの山もほの〳〵と霞にとをきあさほらけかな

右

すまのうらなみよりしらむ春のよは霞める山になを殘つゝ

左歌。軒はの山かすみにとをくなるよしよろしきに。はしめのほもしおほつかなくきこゆ。右の歌。なみちよりしらみて。かすめるやまは。あけかねたるけしき。おもしろくきこゆ。結句なをのこりつゝ。おほつかなきやうにあらむかし。なすらへて可レ爲レ持。

六番

左　浦霞

春の夜は霞むそなかめたまくしけふたみのうらの明やらす共

右　霞隔遠樹

あさかすみ松のあらしにかつ消てへたつともなき春の遠山

左。なかめとはかりは。古來なむあることにや。右。朝かすみとをけるより。すなをにして。たちまさるへくや。可レ爲レ勝。

七番

左　禁中花

花のみやなかめもやらむ雲の上の春をはしらぬ身の行衞にも

右　夕待花

をはつせやまたるゝはなの峯の雲あやめもわかし夕暮の春

左。禁中花をおもへる心。やさしく侍らむを。右下句。あやめもわかしゆふ暮の春。ことはたくみにしこゝろふかし。左右のはなの爲レ持。さしたる難にはあらねと。花はるは病同病にや。うた合にきらひ侍れはいかゝ。

八番

左　歸鴈

はな鳥の色香やまさる行鴈のとこ世の春を我やとはまし

右　谷歸鴈

影うつす谷の小河のこほれるもとけ行なみにかへるかりかね

左。花鳥の色香は。いろ香とありたきにや。右とけゆくなみにかへるかりかね。よろしく侍れは。以レ右爲レ勝。

九番

左　夫雁遙

雁かへる行衛をみれはしら雲のかさなる嶺のあとのはるかせ

右　歸雁清雲

春風にかすむつはさはふき淺て見さりしくもやかりの行らむ

左。首尾とゝのほりて幽玄なるへし。但是も同病にや。右。見さりしくもやかりのゆくらむ。心えかたくきこゆ。左可ㇾ爲ㇾ勝。

十番

左　曉歸雁

有明の月はつれなき春の夜になにとてかりものこらさるらむ

右　雲雀

春風にふかれてあかる山もとのかすむかきりに雲雀なくなり

左。有明の月はつれなきと侍る。あかつきはかりといへる歌の心も。けさやかに見えて。よろしく侍るに。なにとては。むけにたゝ詞ならん。右こしの句。吹れてあかるおほつかなし。月のひかりをまさるにやあらんかし。

十一番

左　暮春

聞からにゆふつけ鳥も聲そへておのへのかねにしたふ春かな

右

ゆく春をしたひわひてはあかつきに心つきぬるかねの音哉

左右ともに。暮春の心。おなしすかたなれは。可ㇾ爲ㇾ持。

十二番

左　藤

咲かゝる藤江のうらに立なみのむらさきくたく水のはるかせ

右　卯花

卯の花のあすく闇へき色に出てくるゝかきねの露とみえつる

左。むらさきくたく。おほつかなし。萬葉には。しろたへのふち江のうらにいさりするとあれは。しろきふちと。よみならひたるに。むらさきくたくは。あかひたるやうにきこゆ。萬葉の後。むらさきとよめる證歌もあるらめと。ふしんなきにあらす。右こしたるたむたし。ふち江のむらさき。證歌あらは。とゝのほりてすかた侍れは。可ㇾ爲ㇾ勝。若作例なくは可ㇾ爲ㇾ持。

十三番

左　郭公

ほとゝきすまちかね山の明かたにつらき雲まのひとこゑの空

右　夜郭公

あしひきの山ほとゝきす小夜ふけて月よりおつるひと聲の空

まちかねやまのくも間のひとこゑ。いとえむにおかしくきこえて。すてかたく侍れと。月よりおつるひと聲のそら。すかた詞たくひなくきこえ侍り。つらきくもまは。はるかにおとりたれは。もつとも右可ㇾ爲ㇾ勝。

十四番

左　曉郭公

夏草のことしけき世もわするゝにまたも寐さめをとへ郭公

右　山家郭公

ほとゝきすなれはしらしな山さとにすみうき身をも慰むる聲

左。ことしけき世も。ものく(本ノマヽ)にとありたくや。忘るるにと侍るは。おろかなるやうにきこゆ。右。山里にすみうきをもなくさむる聲。切におもふこゝろ。左にはまさり侍らむ。

十五番

左　葵

朝夕日うつるあふひの影すゝしみとりのすたれ色をそへつゝ

右　晩螢

露しけくほたるみたるゝ夏の夜のあけかたすゝし庭の草村

朝ゆふ日きゝなれす侍れは。みゝにたちてきこゆ。右つゆしけくほたるみたるゝ。ひかりありてきこゆれは。可レ爲レ勝。

十六番

左　五月雨

雲とつる峯のいほりのいかならんふもとの里もさみたれの比

右　夕立

入日さし夕立はるゝ山もとの木すゑの露にせみのもろこゑ

左。さしたるなむなし。右。入日さし夕立はるゝより木すゑの露にせみのもろ聲。くた〳〵しくきこゆ。左可レ爲レ勝。

十七番

左　夕納涼

なかめやる夕波すゝしあはち潟あはとはきえぬ日影なからに

右　早秋露

風もまた吹あへぬ秋の夕よりむくらにふかきやとのしらつゆ

左。源氏物語に。あはと見るあはちのしまといへる心にや。右むくらにふかきやとのしらつゆ。おかしくきこゆ。よりの字や心ゆかす侍らむ。以レ左爲レ勝。

十八番

左　岡邊薄

しろ妙におかへの尾はなみえしより夕を秋のよそになしつる

右　女郎花

いつれ我ちきりむすはんおみなへし千草の花に亂あひても

左。ゆふへは秋のよそになしつる。いと心得かたし。右をみなへし。ちくさの花にみたれあひたる。おもしろく侍れは。色まさるへくなむ。

十九番

左　萩

みやき野の秋のけしきや庭もせに萩さかりなる露の夕風

右　荻

うき秋の露もかけしと夕されははらふやおきの風そよくらん

左。秋のけしきや庭もせは。よろしくきこゆ。はきさかりなる。いさゝか平懐なるやうにや。右うき秋のつゆをかけしなと。よろしく侍るに。かせそよくらむは。こゝろえぬやうにおほゆ。みやきのゝけしきは。かちにて侍らん。

二十番

左　月

うす霧に山もとこめしゆふ月夜さやけき外の影も有けり

右

しはしみむはらひなはてそ秋の夜の月にさはらぬみねの白雲

左。さやけきほかのかけもありけり。めつらしくおほゆ。右はらひなはてそと侍れは。かせといふことのあるへきにきこゆ。左の歌。まさるへくなむ。

二十一番

左　湖月

おほゝえや傾ふく月の木のまよりうみ半はある影をしそ思ふ

右　浦月

くむしほに影をうつせは秋のよの月にそなるゝちかの浦人

左。かたふく月ののこるかけ。湖上のなかはかけ殘るよし。おかしく侍り。うへなかはあるや。あまりたしかなるやうにて。みゝにたゝ侍らん。右さしたるふせいなし。ちかのうら人。そのたよりなきやうにみゆ。なすらへて可レ爲レ持。

二十二番

左　山月

またやみむ木のはみたれててる月にくれなゐくたく秋の山風

右　名所月

所から折からむへもあらしふくふしのたかねの秋の夜の月

左。くれなゐくたくめつらしく侍り。たゝし。題山月を本意としてあるへきに。紅葉全篇あるやうにきこゆ。右ふしの高根の秋のよの月。そのなもたかく聞ゆ。可レ爲レ勝。

二十三番

左　月前鹿

山のはに入までみつる月影をなれもあかすやをしかなくらむ

右　夕鹿

山かけや霧のまかきをふみわけて夕暮ふかくそよく鹿〔の〕音

左。首尾なたらかにいひくたされて。よろしく侍り。右結句。そよく鹿の音とはてたるすかた。頗甘心せす。なれもあかすやをしかなくらむ。優にきこゆれは。可レ爲レ勝。

二十四番

左　河霧

朝日さし水上はれて河竹のなかれのすゑにきりのひとむら

右　擣衣

衣うつかたのゝ里の秋かせにやゝ明わたるよとのかはなみ

左。河竹のなかれのすゑ。さためて本歌侍りなむ。老耄。萬見しことも聞しことも忘れ侍れは。只今分別しかたし。およそ。かはたけは禁中のことなれは。またゝてそのよしあるへし。世にためしなき名をやなかさむとありしは。當家〔の〕こと歎しかれとも。よもその歎をは。本歌にはとられしとおほゆ。右これも前段申かことく。五もしはかりに衣うつとありて。其四句に。名所の景氣はかりにや。此番は。判者の未練ゆへ。勝負さためす侍りなむ。

二十五番

左　叢虫

をく露も秋のおもひや深草のうつらの床にむしも侘つゝ

右　紅葉

春はなをはなのかたみとなかむとも紅葉にきえね峯の白雲

左右ともに。おなしほとのすかたなれは。持といふへきにや。

二十六番

左　夕雪

はらはしなさのゝわたりの夕暮にやとなき雪や袖をとふらむ

右　杉雪

ふく風につもりもやらて山姫の雪をめくらすそての綾すき

左。さのゝわたりに家もあらなくにといへる歌をおもへるにや。右。雪をめくらすは。回雪の曲の心にや。左右ともに。あさきこゝろをもつてはかりかたし。また可レ爲レ持。

二十七番

左　炭竈

よこ雲に立わかれ行すみかまのけふりのすゑもをのゝ細道

右　水鳥

人の世もかくあらまほし難波江やよしあしわかすうかふ水鳥
　左。けふりのすゑもをのゝほそみち。めつらしくおかしく
　きこゆ。右よしあしわかすうかふ水鳥。をとりてきこゆ。
　以レ左爲レ勝。
二十八番
　左　　忍戀
おもひわひかたしく床のきり〳〵す我忍音を何ととふらむ
　右　　忍久戀
ひとも今聞ふりぬらんとし月を身にかそへきて忍ふくるしさ
　左。かたしく床のきり〳〵すわかしのひ音をとふらむ。あ
　はれに心ふかく侍り。右ふりぬらんは。何ことを聞ふりぬ
　らむ。おほつかなきやうに侍り。左爲レ勝。
二十九番
　左　　不逢戀
身にはまたならはぬものをかねの聲鳥のなく音をいとふ別も
　右　　厭戀
神かけしあかひもいはす松浦舟をひてをいそくひとの心よ
　左右ともに。締細たるへし。持にや侍らむ。
三十番
　左　　戀雲
朝ゆふになかめなれにししら雲の空たのめなる中をしそ思ふ
　右　　恨鐘戀
かねの音のとかにやはなさむ宵々はこぬ人ゆへにつきぬ恨を
　左右ともに。すかた幽玄にきこゆ。また持にや。
三十一番
　左　　寄野戀
逢ふことや遠き野もせの秋のかせ人の心のすゑにふくらむ
　右　　寄埋木戀
くちねたゝ戀にうき身の名とり河しつみもはてぬせゝの埋木
　左。あふことやとあるより。毎句つゝきて。尤おかしく侍
　り。右しつみもはてぬせゝのむもれ木。難なく侍れと。こ
　とふりたるやうにきこゆ。人の心のすゑに吹らむは。身に
　しみておほゆ。尤可レ勝。
三十二番
　左　　故郷戀
故郷の露わけなれし袖の上にむかしかたりの月そやとれる
　右　　山路
太山ちやそこともしらぬ雲鳥の立ゐを友と行なやみつゝ
　左。露わけなれしそてに。むかしの月のやとるらむ。よく
　きこゆ。戀の心もあるにこそ侍るめれと。たしかに侍らす。
　右。雲鳥のたちゐを友とゆきなやみつゝ。やまちの心さそ
　と。をしはかられてよろしく侍り。持にや侍らむ。
三十三番
　左　　旅
旅ころもかたしく袖の露かけてかりかね寒しさよの中山
　右
夢そうきなに中々に故郷をさやにも見けむさ夜の中山
　左。かりかねさむしさよの中山。ことはたしかにて心かす
　かなり。右さやかにも見けむさよの中山。おかしく侍るに
　や。かりかねも聞すてかたく侍れと。夢そうきといへるよ
　りなか〳〵にふるさとさやにも見けむ。なをまさりてき
　こゆ。右爲レ勝。

三十四番

左　閑下松

ひたくみをよはしものを庭の松おのれとなせる千枝の姿は

右　名所浦

あはちかたふく月にほの〳〵とあかしの浦をいつるとも舟

左。ひたゝくみは古語なるへし。松の千枝におもひ出されけるも。まことにたくみにや侍らむ。右。柿本の詠をさなからおもへるにや。すなをに侍れは。ひたゝくみは負侍るへし。

三十五番

左　蕭寺

かゝけはやもろこしまても名の高きはつせのてらの法の灯

右　釋教

さま〳〵の法はありともひとすちに我はたのめむ彌陀の数を

左。はつせのてら。もろこしへきこえたること緣起に侍れは。さもよみ侍らむかし。右さま〳〵の法ありともといへること〻ろ。諸教所レ讃多在二彌陀一故以二西方一而爲二一準一といへる尺のこゝろに。すこしもたかはす。左は。はつせの觀自在。右は。安養無量壽なれは。いつれをまさり。いつれをとりとも。さためかたけれは。爲レ持。

三十六番

左　懐舊

何とかく身に立かへるむかしそもつらき浮世に物わすれせて

右　神祇祝

世の中はふるの神杉すなをにて立さかゆへきすゑいのるかな

左。懐舊のこゝろ身におほえて。ひとしほ袖もぬるゝはかりなり。すかた心たくひなくきこえ侍り。右ふるの神杉。すなをにて侍るは。世をいのること〻ろ甘心す。聖人の詞。擧レ直錯二諸枉一則民服といへり。いつれを勝。いつれを負とさためかたくや侍らん。又爲レ持。

右十市遠忠自歌合依無類本不能校合

細川左京大夫自歌合

一番

左　早春

春の色に世はそめなしてさほ姫の四方におほふや霞はたの袖

右　朝霞

久かたの天の岩戸の明るよりいつる日影もかすむそらかな

左の歌。四方の色春にそめなして。さほひめの袖ひろくおほふらむ風情たけ高く。もつとも優美に侍る。右。久かたのとをけるより。古風を存せりとは見え侍れと。世のつね見る心ちして侍れは。左にをよひかたくや。

二番

左　谷鶯

さえかへる峰のあらしの吹落てはつ音わひしき谷の鶯

右　帰鴈

花はまつ南の枝に咲ものをこしちにはなとかへるかりかね

左のうた。さえかへるとは。春いたりて陽和の気すでにおほそての氷。さらに餘寒のかへり来るをいふなるへし。初音わひしきいくひすには。たゝ春寒や相叶へからむ。右。南の枝の花をみて。北にかへる鴈をあやめる心なきにしもあらす。但随陽のかりとて。山は南を陽といひ。水は北を陽といふことはりにて。南北去来する鳥に侍れは。うたかふへきに非すやあらむ。されとも。やまとうたのならひ。かくのみこそいひなすことにて侍れ。いかさまにもなすらへて。もちとすへし。

三番

左　軒梅

軒端よりひと花落る春風のにほひもさそな梅のよそほひ

右　窓梅

春といへとまた咲わひぬ梅のはなまなふる窓の月や寒けき

左は。寿陽公主の容色をしのひ。右は。孫武御史官宇をおもへり。ともに唐のふることとなるにとりて。含章簷下の粧はまさるへし。為レ勝。

四番

左　待花

まちわひて打ぬる夢に咲はなのさかりほとなきかねの聲哉

右　遠尋花

いつはりのよそめのはなに行暮て雲に宿かるみねのかりふし

左。はなをおもへる心。つらゆきか。夢のうちにもはなそ散けるといひつるも。おもひよそへられて。あはれふかく侍るに。さかりほとなきかねのこゑかな。ことに身にしみてきこえ侍るを。右又よそめのはなに行暮て。くもにやとからんありさまは。かのたかやとの雲のなかめに暮ぬらむといへるおもかけも。さなからめのまへにたちそふ心地して。いつれもすてかたく侍れは。よき持とこそさため侍れ。

五番

左　風前花

春風に移ふはなの心さへさそふにつれていつちゆくらむ

右　雨後花

雨はるゝ雲のかへしのかせ落てちる露にほふ花の下陰

此番。くものかへしよりも。うつろふはなのはるかせに。色

あるべきにこそとて。以レ左爲レ勝。

六番

左　菖蒲

賤のめか菖蒲もひくやむまはなるけふのひおりの眞弓のみかは

右　杜若

名にし負かほやか沼のかほよ花おらては流石いかてすきまし

左。ひおりのまゆみ。つよきところあるにこそ。右の□とてなかにつきて。左のあやめ。心ひくかたあり。可レ爲レ勝。

七番

左　人傳時鳥

時鳥今宵なきつと語る人のことのはやまつ初音ならまし

右　曉水鷄

今ははや明方ちかき槇の戸をたたてくゐなのなにたゝくらむ

左の歌。心あるさまなから。右はとゝこほるところなく。やすらかにいひくたして。もつともよろし。勝にこそ。

八番

左　水邊納凉

すゝみよる小河の岸の柳陰ちらてもうかふあきのいろかな

右　納涼忘夏

所から松かけすゝしすみよしの岸には夏もわすれくさかな

左の歌。初の五字。この比つねに人々よむことゝ侍るにや。よろしき歌のうちには。いたくみなれさる心地して。管見の所存甘心せられす侍り。右歌。首尾相叶て。珍重に侍り。

九番

左　野草露

秋ふかき露をわけ行むさしのやすへの尾花やゆきのした草

右　濱秋風

月影も眞砂も白き秋風にさなから雪をふき上の濱

左のむさし野。右の吹上のはま。心言葉ともに佳境にいたれるまたにすゑのおはな。ゆきの下草。ふかくおもひ入たる所あるに似たり。勝ると申へし。

十番

左　野月

宮城野や露吹亂す秋風にしつ心なき萩の上の月

右　深山月

そはつたひ岩ねの苔の露ふかみ月ふみわけて行山路哉

左は。源氏物かたりのうたをおもへり。下の句。ことに優美に見え侍るを。右の歌。月ふみわけて行やまちかな。風躰ことからさひて。あはれに侍れは。まさるといふへきにや。

十一番

左　海上月

浦遠み浪より出る月影にくもちのすゑもつゝく海原

右　船中月

みしまえや芦間の小舟さすさほに月もくたけて□

左は。滄海の眺望。きはまりなしといへとも。右。みしまえの芦間の月。こまやかに見所ありとおほえ侍るはいかゝ。

十二番

左　鶉

あけまきはうしひきかへる夕くれのみちの□

右　虫

哥しもあれ寢さめもかなし虫の音の物おもへとは鳴ぬ物から

左。夕陽の野村見る心ちして侍り。右又夜ふかき寢さめのむしのこゑ。感慨淺からす。いつれもことに下句神妙に見す侍り。よき持也。

十三番

左　雲間雁

けにしのふ玉つさならしゆふ霧にすかたも見えぬ初雁の聲

右　夜鹿

よそなからおもふもさそな小山田のいほねぬ床の小男鹿の聲

兩方の歌。ともにことなる事なしといへとも。右のうたは。民間の勞苦をおもひしれる心さし。もつともしかるへし。仍爲レ勝。

十四番

左　時雨

夕附日さすかに色そかはりける時雨にたてるかたをかの松

右　朝雪

降出し雪は夜の間に積りはて空もしつかにのこる在明

右。夜の雪つもりはてゝ。晨の月空しつかなる景氣。感情あさからすといへとも。時雨にたてる片岡の松。夕附日さすかをかへのといへる。古今集の餘風。猶見所ありとて爲勝。

十五番

左　河千鳥

玉川や風もゐてこすゆふなみにやゝこゑさむき友ちとり哉

右　池水鳥

あるかもの上毛の霜も氷るらむ有明さむき庭のいけ水

此水鳥。やゝこゑ寒き。あり明さむき。雌雄わきかたきにや

十六番

左　江寒芦

難波江やなみもさむけき水の面に雪こそなひけ見えぬ芦の葉

右　雪中早梅

冬さむみ咲心さしの色そへて雪をもむめの數にこそみれ

左結句。見えぬ芦の葉ととまれるや。たけ有てきこえさらむ。右第二句。いさゝかなかきやうにきこえ侍れと。よくよくおもひたまふるに。心さしふかくそめてしといへる歌を。おもへるにやあらむ。ゆきをもむめの數にこそ見れ。はなをふかくめてぬる心さし。いかてか賞翫せさるへきとて。爲レ勝。

十七番

左　寄草戀

ひとしれぬ心を種にしのふ草みたれてしけるおもひ成けり

右　不言戀

いかにせむ心の下のゆふけふりむせふおもひにすくる月日を

左歌。下句すこし平懐なるやうにや。右の夕けふり。はるかにたちまさるにこそ侍らめ。

十八番

左　寄草戀

まつかひもあらし吹也三輪の山――色も杉立るかと

右　不逢戀

限りそと聞ても人のつれなくは今ひとときはのつらさならまし

此右歌。心詞いひしりてあはれすくなからす。戀のうたは。かくこそあらまほしくはへりけれ。かへすゝゝもおかし

くも。優艶にも侍るものかな。左の。杉たてるかと。せひを
こらふにをよはす。右の勝とす。

十九番

左　寄霜恋

つれもなき人に見てはや淺ちふのけぬへき露を身に宿しつゝ

右　被厭恋

數ならぬ身をし忘れてともすれは人のつらさのなけかるゝ哉

左。すかたやさしく。聞えむに侍り。右まけて侍れかし。

二十番

左　寄雨恋

けにやさは身をしる雨の身をしらて思もたへて袖やほさまし

右　初逢恋

とけ初し夜半の下たもけさは又後の世まてやむすひをくへき

左。身をしる雨の身をしらては。詞のつゝきめつらかにて。
ふりぬるあめともきこえす。また左の勝とすへし。

二十一番

左　寄衣恋

あさき色は契りもうすきさよ衣うらむらさきのねすり成けり

右　曉閨恋

うつゝともおもはぬけさの手まくらに夢かとすれは□

左。うらむらさきのねすりなりけり。古體其興は侍り。右。
うつり香も幽玄に侍れは。なすらへて持とすへきや。

二十二番

左　寄枕恋

うちもねすなみたの床に明す夜は枕にたにもうとき成けり

右　恨恋

まくすはら人の心の秋ふけて露けきかせのそてのゆふくれ

左歌。うときなりけりといひはてたるそ。今すこし心をつ
けて。いひのへたくもやとおほえ侍る。右の歌。袖の夕暮
やあしからされとも。新造のやうにおほえ侍るは。僻見に
こそ侍らむ。いかさま兩方ともに。いさゝかおもふ所ある
につきて。また持にさため申す。

二十三番

左　寄鏡恋

山鳥の尾ろの鏡のをろかにも見まくほしきや人のおもかけ

右　絶久恋

聞もうしをたえの橋のなをかけて逢ぬ年ふる身のたくひそと

左。尾ろのかゝみのうちむきたる歌のさまに見え侍り。
右。をたえのはしの名をかこてる戀の心優に侍れとも。歌
の科同なるへし。

二十四番

左　曉鶏

さらぬたに旅ねものうき曉に八聲の鳥のなかすとも哉

右　夕鐘

峰のてらくも間にみゆる軒端よりあらしにをくる入あひの聲

左歌。晨鷄再啼殘月沒、征馬連□行人出なと。ふるき詩に
も作て。旅寐の物うきには。あしたをいそく心よのつねな
るを。八聲のとりのなかすともかなとは。いかにいへるに
かと。すこしはおほつかなく侍れとも。またはさもこそ侍
らめ。右の入あひのこゑ。聞なれぬ心ちして侍れは。また
持とすへし。

二十五番

左　山家

人とはぬ山里さひしゆふくれのかけひの水にしと丶おりゐて

右　田家

賤かすむ田つらのかきはまはらにてはにふの窓に殘る燈火

左。京極黄門の歌。人とはぬ冬の山路のさひしきにかきねのそはにしと丶おりゐてと侍る。初の五文字も。相かはらて。いか丶とおほえ侍り。はにふのともしひ。ひかりありと見え侍れは。爲レ勝。

二十六番

左　旅泊船

鷗をも友寢の舟とたのむかな月にあかしのなみ枕して

右　羇中夢

古里を夢にみるかとやほかゆく濱のはまゆふまくら重て

左。月にあかしの浪まくらして。秀逸の躰に侍れは。尤可レ爲レ勝。

二十七番

左　述懷

よしやさは世のうきふしも恨しな愚なる身のとかになしつ丶

右　懷舊

むかしとてさのみ忍はしくたり行今をならひにおもふ後の世

右の歌。くたりゆくよのすゑををしはかりて。むかしをしゐて忍ふ、かたきる意。さる事には侍れと。唐大宗も。魏徵か仁義をす丶めしによりてこそ。貞觀の太平。つゐにむかしにも立歸りけれ。此歌の心は。宰相衡かやあさきに似たる無念に侍らむ。左歌。をろかなる身を觀して。世のうきことを恨さるは。知恵ふかくことはりかなひて。歌からもことにいひしりて。尤しかるへし。仍勝とさため申なり。

二十八番

左　古寺

いさきよき水をむすひて古寺の林に歸るすみそめの袖

右　尺教

あさましといふそはかなき佛をも知らぬ心の法にやはあらぬ

此番。右は向上の一路。凡慮の境界をはなれぬれは。採菓汲水の淨業も。およふへきみちならすとて。以レ右爲レ勝。

二十九番

左　神祇

朝日影天てる神のちかひにはすくなるみちを守るとそきく

右　社頭

あふけた丶そのます鏡榊葉にかけてくもらぬ神の誓を

兩首の神のちかひ。左は。朝日影あまてるとおけるより。風躰うるはしくた丶しく侍り。勝ると申へし。

三十番

左　慶賀

竹のはの千世もうけつ丶もろ人のことふきそへてめくる盃

右　祝言

みちとせになるてふも丶を□君かみましにたてまつらまし

左歌。宜城の竹葉衆人のことふき。いとめてたきふしに侍るを。右歌。瑤池の仙桃。たひかさねてたてまつるへきよし。かきりなき進算侍るへし。ともにすてかたきによつてしはらく勝負をさためす。

そも／＼歌合といふ事。仁和天徳のそのかみより。ちかく今の

世にいたるまで。おほやけわたくしにつきて。その數おほき中にも。とりの歌を左右にわかちつかへる事は。圓位ひしり御裳濯川歌合をはしめとも申へからむ。また判者もてあふかるゝことに。呉竹の世々をへて。しきしまのみちのひしりたる中にも。五條三品のみ。古今に獨歩して。世これをゆるせるにや。彼の上人のふた川歌あはせは。代々のもてあそひ。家々のまくらことゝなれる事も。おほく〳〵。三位禪門父子の判の詞に。色をそへけるにこそ。おほよそ。やまとうたは。わつかなるかなの四十七字を出すして。よろつのことをいひあらはすに。ひとの心やさしけれは。をのかしかおもふにまかせて。風躰といひ。心言葉といひ。このむところまち〳〵なりといへとも。まことの佳境にいたる事は。かたきわさになむ侍るなる。されはいつれをよしと。いつれをあしとも。十目の見る所一字の褒貶にをよひかたきものなるをや。爰に一夜の雪の。つとめて扶風源君一卷をおくり給て。判のことはくはふへきよし侍りし。つたなき翁の身におはさるは。あき人のよき衣にもすきたるへし。たちまちにかへしをくり侍らむにもさすかにて。まつかたはらをたにとひらき見たまふに。錦色々に玉聲々なり。むさしあふみさしも名高き武將の家をうけて。政をたすけ民をはこくみ。もろ〳〵のことわさしけきいとま。かろきをきき。肥たるに鞭うちて。世の中のたのしみ業をこりならひ。さるはちかきとしころとなりては。あつさゆみひき〳〵に。かりこものみたれしけくて。ふかくそのみちにたち添ふへき人ひとたに。あさか山の春をわすれ。難波津の冬こもりはてぬるに。いつのいとまに。かくまてたくみ吟し。おもひめくらされけむ。帷幄の中に千里のはかりことは。六義のうへにもおよほしけるにや。此勝事を決せむことは。なへてのちからたるへきにもあらされは。いよ〳〵ふてをなけすて侍りしかとも。いなふねのいなともいはてかたく。たゝこのつきはかりかと。たひ〳〵のもよほし侍れは。かたいとのすちなきふしともかきつけ侍る。もとより窓の雪にうとく。野への露のたと〳〵しき心のまよひ。ことの葉もつゝかす。かたはらいたき事に侍れとも。まめやかに撫談壺書になすらへて。かたへのそしりをかへりみさるになむ。

右者常桓入道細川左京大夫以二自歌一番二左右一。判詞逍遙院内府禪公被二書付一者也。

天文二十四年四月七日　判

右細川左京大夫自歌合以百花庵宗固本書寫挍合

和歌部七十八 詩歌合上

元久詩歌合

題
水郷春望　山路秋行

作者

詩
攝政太政大臣
良輔
資實
長兼朝臣
在高朝臣
親範朝臣
宗業朝臣
爲長朝臣
盛經
宗行
成信
信定
孝範
家宣
行長
宗親
親經左大辨

歌
前上總介藤原朝臣家隆
左衛門督源朝臣通光
前大僧正慈圓
大藏卿藤原朝臣有家
沙彌蓮性
左近衛權中將藤原朝臣定家
兵庫頭源朝臣家長
大納言局
散位藤原朝臣保季
左近衛少將藤原朝臣雅經
女房丹後
宮內權少輔藤原朝臣行能
左近衛權少將源朝臣具親
散位藤原朝臣業清
鴨長明
左近衛權中將藤原朝臣良平
左衛門少尉藤原朝臣秀能
俊成卿女
左馬頭藤原朝臣親定

水郷春望

一番
左　攝政
土俗地低春草底、　海仙樓遠曙雲間、
右　家隆
橋姫の朝けの袖やまかふらん霞もしろき宇治の河波

二番
左勝　攝政
沙村逸嶋烟霞境、　水澤半春花柳山。
右　家隆
にほのうみのかすみ吹行春風に浪もいくよの志賀の花園

三番
左　良輔
渭北晩霞消二雁陣一。　江南春柳隔二漁郷一
右　通光

三嶋江や霜もまたひぬ芦のはにつのくむ程の春風そふく

四番

左勝　百花亭外胡天遠。　五鳳樓前伊水長。　良輔

右　きと人の玉もの袖やせく春の霞そよとむゐてのしからみ　通光

五番

左　蒼蕪堤低花嶼遠。　潮寫岸曙樹烟孤。　資實

右　しかの浦の浪よりかすむ明ほのに山ふきおろす春の松かせ　僧正

六番

左　潯陽春色連二廬阜一　杭縣風光屬二鏡湖一。　資實

右　難波江の芦の枯葉の春風に秋みし露の袖にこほるゝ　僧正

七番

左持　風颺松嶋客帆遠。　雲外雁歸孤嶋暁。

右　見すしらす靄すむ方そ漁火のほの／＼明る春の夜の月　有家

八番

左勝　江驛月清更又來。　湖山春漾浪將花。

右　志賀の浦にひらの山おろし吹ぬらん花と散かふ春のさゝ浪　有家

九番

左勝　海岸孤松雲外見。　江村遠柳雨初新。

右　かつらのや河そひ柳浪かけて梅津ははやく春めきに鬼　蓮性

十番

左　薫留二何處一放遊客　樂在二其中一漁釣人。

右　いつくとも霞なかれてみえぬかた高せの淀のあけほのゝ空　蓮性

十一番

左持　千程春浪驛船路。　一穗暮烟潮戸堤。　長兼

右　あしろ木に櫻こきませ行春のいさよふ浪もえやはとゝむる　定家

十二番

左負　遠雁消レ霞湖月上。　儻鶴拍レ水海雲低。　長兼

右　みや木守なきさの霞たなひきて昔もとをきしかの花その　定家

十三番

左勝　沙村漁稅輸二霞色一。　浪驛棹歌和二鳥聲一　在高

右負　隔つるまきのを山もたえ／＼に霞なかるゝ宇治の川浪　家長

十四番

左勝　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　在高

青草湖邊舟一艘。　紅桃岸遠路千程

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　家長

久かたの中なる河は名のみして春は霞におほろなる空

十五番

左持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　頼範

雨晴渚蒲裙帶葉。　風翻江柳麴塵波

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大納言局

しかのうらのさゝなみしろく成行は長良の花に風や吹らん

十六番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　頼範

烟村酒旆穿花見。　夜岸漁舟篝火過。

右勝　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大納言局

いく千世もたえぬみなせの水の面に長閑にすめる春夜の月

十七番

左勝　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宗業

桃酒酌レ花邀客盃。　蘆魚膾レ稅釣郎船。

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　保季

河上はまた横雲のうすみとり浪よりかすむ淀の明ほの

十八番

左持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宗業

江心晩浪清浮レ月。　湖上春山青倚レ天。

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　保季

消かねし芦間の雪も渚よりけふ三嶋江の春の一しほ

十九番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　爲長

[illegible]東沙封薄霧纈。　浪去汀松花不レ留。

右勝　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　業經

かすむよりみとりはふかしまこも生るみつの御牧の春の河風

二十番

左持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　爲長

春徑草青湖北岸。　曉江月白郡西樓。

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　業經

かた敷のかすみ吹みたる春風になをさむしろの宇治の橋姫

廿一番

左持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　盛經

極浦風和遙度レ岸。　迴塘柳嫩僅無レ塵。

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丹後

しかの浦や打出しなみの花の上に猶色そふる春の山かせ

廿二番

左持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　盛經

霞光爛々江村夕。　草色青々湖水春。

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丹後

わかすまぬ方もひとつに霞みけり芦屋の里をいかにとはまし

廿三番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宗行

松縣花芳輸レ酒地。　浮梁風暖賣レ茶人。

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　行能

音羽川花のしからみ春かけて岩間に色を水のしら浪

廿四番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宗行

錢塘湖上曉霞薄。　錦水橋邊宿草春。

右　行能
春はこれいく霞ともしら浪の跡もつきぬるしかの夕暮

廿五番
左勝　成信
渭北烟中斜岸草。　湖東雲白遠山花。
右　具親
芦の葉のまたうら若き津の國の小屋の隔はかすみ也けり

廿六番
左　成信
蘆芽水漾蓬遺ㇾ漢。　蜃氣樓高半入ㇾ雲。
右　具親
石上ふる河のへの柳かけめくみもあへぬ春のいろかな

廿七番
左勝　信定
長河浸ㇾ月烟波遠。　孤嶋帶ㇾ花雲樹低。
右　業清
あさつまや雲のをちかたかすむ也花かあらぬか志賀のうら浪

廿八番
左勝　信定
江岸臨沙青帶ㇾ草。　湖田春水白無ㇾ畦。
右　業清
峯の雲汀のなみに立なれて春にそ契る宇治の橋姫

廿九番
左勝　孝範
煙岫雁歸波月白。　蘇州柳暗水烟青。
右　長明
今日もまたおなし霞や深みとりかひある春のあとを尋て

三十番
左勝　孝範
江南春樹千莖薺。　湖上晩船一葉萍。
右　長明
雲雀たつみつの上野になかむれは霞なかるゝ淀の河なみ

三十一番
左持　家宣
春山斜繞湖三面。　夜泊先聞潮一聲。
右　良平
里わかす花咲ぬれは浪まよりみゆる小嶋も雲かくれつゝ

三十二番
左持　家宣
岸勢半添堤柳力。　郡圖初記海花名。
右　良平
春の夜のあけのそほ船ほの〴〵と幾山本をかすみきぬらん

三十三番
左　行長
海隅求ㇾ泊雲無ㇾ跡。　湖上停ㇾ船月作ㇾ隣。
右　秀能
詠れは袖にかけゝり春の夜のおほろ月よのすまの浦なみ

三十四番
左　行長
楊柳一村江縣綠。　烟霞萬里水鄉春。
右　秀能
夕つくよ鹽みちくらし難波江の芦のわか葉を越る白浪

三十五番

左勝　宗親

長堤草樹長二草色一　斜岸柳絲宛二麹塵一

右　俊成卿女

昔まて哀をみする津の國の難波の沖の春の明ほの

三十六番

左勝　宗親

澗口呼レ舟霞隔夕。　潭心遠レ宇霧歸辰。

右　俊成卿女

春ふかき心のなみ（色の浪路イ）に雲消て霞そなひくしかの浦風

三十七番

左　親經

澗南澗北山千里、　澗去澗來興幾重。

右　御製

みわたせは山本かすむ水無瀬河夕は秋となに思ひけむ

三十八番

左　親經

鳳鎌杭州春柳岸、　烟青呉郡暮江松。

右　御製

志賀の浦のおほろ月よの名残とて曇も果ぬ明ほのゝ空

山路秋行

一番

左　親經

巣鳥無二人村葉滿。　樵蘇有レ路峡烟開。

右　御製

ときは山秋を忍ひて鳴はゝ猶の色ともゝ鹿や鳴らん

二番

左勝　親經

雲歸二巖嶼一共レ誰宿。　月自二家山一送レ我來。

右　御製

旅ころもけふみかの原露なれぬ宿かせ山の秋の夕くれ

三番

左勝　宗親

眼窮胡雁參レ雲翅。　腸斷巴猿叫レ月聲。

右　俊成卿女

吹みたるやま下風の露の間（木の間イ）に秋の哀を送る月かけ

四番

左　宗親

碧澗過來猶碧澗、　紅林行盡又紅林。

右　俊成卿女

心さへうつりもゆくか龍田山こするに秋の色をたつねて

五番

左　行長

鳥路烟均河漢上、　龍門水冷洛陽西。

右　秀能

かつら木やよそに思ひし峯の雲を袂に分る秋の夕くれ

六番

左　行長

行人隨レ月過二鑪軸一。　旅客與レ雲宿二碧山一。

右　秀能

しをりしてつらき山とはきかさりき只此ころの秋のゆふ暮

七番

左持　家宣

雁陣過レ林風初遠。　鹿蹄踏レ葉雨聲幽。

右　良平

露おもき山わけ衣吹かへて浦になれたる秋かせのこゑ

八番

左持　家宣

巻舒深洞白雲夕。　等領空山蘿月秋。

右　良平

みちすから友なふ月も影たえぬふけやしぬらんさよの中山

九番

左勝　孝範

林館題レ書紅葉紙。　麝屏同レ宿碧蘿帷。

右　長明

外山より野への朝霧分かへて雲のいくへに日くらしのこゑ

十番

左　孝範

三峽路傳秋雲色。　八字山垂曉月眉。

右　長明

袖にしも月かゝれとは契をかす涙はしるやうつの山こえ

十一番

左勝　信定

鳥一聲秋霧晴。　峽猿群宿暮雲閑。

右　業清

かた岡の外山か末の淺茅生に夕日かくれの松むしのこゑ

十二番

左勝　信定

秦吳路遠月猶月。　巴蜀嶺移山又山。

右　業清

太山路の木の下露にぬれゆけは袖にそうつる有明の月

十三番

左持　成信

落葉霜深人事少。　荒榛露亂鹿蹤多。

右　具親

しをりせし誰かは宿をはつ鴈のかりにもわけん峯の秋霧

十四番

左持　成信

關情薊北千山月。　行色巴南一嶂雲。

右　具親

夜半になをこゆる名のみや立田山月のさかりの有明の比

十五番

左　宗行

黛色露來連岫曉。　鈴聲嵐去故關秋。

右勝　行能

外山より雲ゐる峯に宿とへは秋をこたへて嵐ふく也

十六番

左勝　宗行

黔陽月滿行人路。　隴上風閑遠戍樓。

右　行能

あすもこむ契を松にしをりしてけふはいなはの峯の秋風

十七番

左　盛經

雲晴曉埋樵客跡。　月晴夜照旅人夢。

右勝　丹後

月をなを雲のよそにそをくりける山路の秋はさをしかの聲

十八番

左　盛經

嚴扉露滿苔痕白。　山館蟬鳴木葉紅。

右勝　丹後

あし曳の山路わけいる苔の袖わかをく露そ色は有ける

十九番

左　爲長

蟬聲滿レ耳商風急。　猿叫斷レ腸巴月閑。

右　雅經

立ぬるゝ木の下露に啼鹿の聲きく時の山のゆふ暮

廿番

左　爲長

寒雨聞レ鐘尋二晩寺一。　白雲假レ路過二秋山一。

右勝　雅經

吹なるゝ嵐の音もたつ田山秋の時雨にまかふ袖哉（よそへてそきくイ）

廿一番

左勝　宗業

樵衣更薄嶺嵐響。　鞭袖應濡山雨音。

右　保季

みよし野のすゝ分る袖の秋の露はらはしとても嵐ふく也

廿二番

左持　宗業

蘆犯埋レ蹊秋露谷。　露螢見レ宿夕陽林。

右　保季

ゆくものかたのめし月は霧こめてしかたにまかふ岩のかけ道

廿三番

左　頼範

旅店酒醒嵐拂レ面。　樵谿草悴露霑レ衣。

右勝　大納言局

鹿そなく岩ふむ峯の苔の上に思ひも分すふる時雨哉

廿四番

左勝　頼範

石梯峯遠踏レ雲過。　巖洞霧開帶レ月皈。

右　大納言局

分きつる跡はいくへの霧こめて今行末もさよの中山

廿五番

左　在高

峽猿一叫旅人思。　雲鴈幾行遊子心。

右勝　家長

しるへせよ山とひこゆる秋の鴈跡なき嶺の八重の白雲

廿六番

左　在高

右　家長

道すから檜原槇の葉露おちてみ山かなしき松風のをと

廿七番

左　長兼

右　定家

宮古にも今や衣をうつの山夕霜はらふつたの下みち

廿八番

左　長兼

右　定家

夕つくよ木のまのかけも初雁の鳴や雲ゐのみねの梯

廿九番

左

右　蓮性

うす紅葉花にをとらぬ梢かな春と思ひし志賀の山越

三十番

左

右　蓮性

うつの山分行蔦の下露に物思ふ袖そいとゝしほるゝ

三十一番

左

右　有家

かこたしな時雨もる山の秋の露（涙イ）ぬれぬ習ひのたもと也とも

三十二番

左

右　有家

三吉野の槙たつ山の秋風に衣手うすし道ふかくして

三十三番

左　資實

右　僧正

太山路やいつより秋の色ならんみさりし雲の夕くれの空

三十四番

左　資實

右　僧正

立田山秋ゆく人の袖をみよ木々の梢は時雨さりけり

三十五番

左　良輔

右　通光

鴈のくる山の夕霧わけ過てしのに衣の露そこほるゝ

三十六番

左　良輔

右　通光

しるへせよ吉野のおくの秋の月誰かは跡を又尋ぬへき

三十七番

左　攝政

右　家隆

秋風の袖に吹まく峯の雲をつはさにかけて雁も鳴なり（なきけりイ）

三十八番

左　攝政

右　家隆

時雨ゆく山路も木のはうつろひぬ衣手かなし秋のたひ人

右以歌合具弘文院本校合了

内裏詩歌合 建保元年二月廿六日

題

山中花夕　野外秋望

作者

左

右中弁藤原範時朝臣

権右中弁平經高朝臣

式部権大輔爲長卿

大宰権帥資實卿

參議範朝卿

從三位頼範卿

右中將源通方朝臣

左少弁藤原家宣

左近將監藤原教實

中宮大進〔[illegible]〕藤原氣隆

治部大輔藤原知長

右衛門権少尉藤原家光

勘解由次官平棟基

右

播磨守藤原範基朝臣

勘解由次官平宗宣

権大納言良平卿

侍從定家卿

女房〔主上〕

從三位家衡卿

女房

女房

左衛門権少尉藤原康光

左近少將藤原爲家

左近將監藤原宗時

左兵衛権少尉源維長

丹後守藤原範宗

一番　山中花夕

左　右中弁藤原範時朝臣

好鳥弁謳凌レ雪宿。　飯樵路滑負レ春行。

右　播磨守藤原範基朝臣

いほしめて山のかひあるみよし野の花より出る月をみるかな

二番

左持下

桃渓浪洗斜陽影。　梅嶺風芳欲レ夜暉。

右

吉野山こけのさむしろしきしのひ今夜はこゝに花のしたふし

三番

左勝

煙霞林遠暮雲掛。　桃李蹊深春日垂。　權右中辨平經高朝臣

右

はつせ山花の梢にこもる也雨うちそふる入あひのかね　勘解由次官平宗宣

四番

左持中

松根嵐噪青霄寞。　峯樹花滿白雲遲。

右

あらしより花は袂に匂ひきて霞にこゆるしかの夕暮　式部權大輔爲長朝臣

五番

左

一日遊レ春歸帶レ月。　双雲爲レ雪老眠レ花。

右

春といへはしるもしらぬもみ山へに答へぬ花にたそかれの空　權大納言良平卿

六番

左

烟霞洞裏廣人宿。　錦繡谷西居士家。

右勝

雲かへす嵐もしらすうつり行さくらの山の雨の夕くれ

七番

左持上

山郭風煙多トレ村。　溪門桃李少從レ松。　大宰權帥資實卿

右

しくれせし色はにほはすからにしき立田のみねの花の夕かせ　侍從定家

八番

左持上

嶺霞峯隔八千丈。　花雨巫山十二重。

右

さくらかり霞の下にけふ暮ぬ一夜やとかせ春の山かせ

九番

左勝中

紫陌共嶮樵客路、　戒壇欲レ宿隱倫家、　參議範朝卿

右

みよし野や花に宿とふ夕暮の雲はにほはぬ春の山かせ　女房

十番

左

晴風拂レ嵐雲二春餘一　斜日映レ林混二晩霞一

右勝

かつらきや高間の櫻春ふけて夕ゐる雲の跡そさひしき

十一番

左持下

叢樹遠近隨レ嵐亂　野香淺深乘レ媚分。　從三位頼範卿

右

暮ぬるか山陰さひし夕月よ花にほのめくみよし野の□　從三位家衡卿

十二番

左持中

興白擁レ林開二曉月一　爲レ花借レ宿入二春雲一

右

みよしのやいく〳〵霞を分つらむ花にくれ行春の山みち

十三番

左

霞中問レ寺訪二松戸一　塵外愛レ山坐二石苔一　右中將源通方朝臣

右　女房

こなしさはたゝ大かたの眺めかは花にくらせるしかの山こえ

十四番

左

淺竹夕鶯藏二舊宿一。　叢林春月出レ花外。

右

山ふかみ峯の木のまをたとりきて花に暮ぬる夕月よ哉

十五番

左　左少辨藤原家宣

雲色厭二深思一御宙。　月光銜レ嶺出レ花遲。

右　女房

とまるへき宿は櫻にかり衣ひも夕くれの山のはるかせ

十六番

左

春山鶯白雲高囀　青嶂霞紅松獨遺。

右

歸るさの家路はくれぬ山さくら人たのめなる花の下かけ

十七番

左　左近衞監藤原敦實

庫是春山鶯下レ宿。　鶯草西日欲二何之一

右　左衞門權少尉藤原康光

にほひくる風のしるへをしたひつゝひとりみ山の花の夕暮

十八番

左

樵夫歌返殘花夕。　巫女夢芳行雨時。

右

たつねつゝかすみを分て峯のはなにほひそ深き春の夕かせ

十九番

左　中宮大進藤原兼隆

藍溪霞暖鶯聲出。　松洞日曛鶴睡閑。

右　左近少將藤原爲家

けふもまた花ゆへくらす袖の上に山かせおとす入あひのかね

廿番

左勝

與レ月相期占二綠水一。　爲レ花一夜宿二春山一。

右

吉野山花にや宿をかり衣くれ行空の入あひのかね

廿一番

左持　治部大輔藤原知長

雪飛樵客漸歸地。　月伴隱倫獨往春。

右　左近將監藤原宗時

高砂の尾上に春のかせたちて櫻をわくる入あひのかね

廿二番

左

雲宿二洞中一纔隔レ巖。　風來二溪北一僅傳レ匂。

右

うはの空花とは風そしるへする夕日にかすむみねの白雲

廿三番

左勝　　右衛門權少將藤原實光

朧月東升霧塢杪、　松嵐北送一溪花。

右　　左兵衞權少將源重長

よしの山こほりし雲も春風につもるも花のゆきくれの空

廿四番

左

[illegible]霞綿[illegible]閉霞、　夕拜蓬萊洞裏霞

右勝

はなゝれや水わけ山の夕まくれ雲に波たつをちの春かせ

廿五番

左持　　勘解由次官平棟基

雨來柳色[illegible]青[illegible]、　日暖桃顏開[illegible]春、

右　　丹後守藤原範宗

さくら花木の下かけは暮やらてにほふ山ちの袖の夕つゆ

廿六番

左

暮靄迎[illegible]月影、　樵衣[illegible]風展、

右勝

しほりせしたつきもしらぬ山櫻花にやとかせゆふくれのくも

一番　　野外秋望

左勝　　範朝卿

松蓋雨時應レ宿レ客。　蘆花風處似レ招レ人。

右　　女房

袖にをく朝けの露のほしもあへす霧にわけ行秋の旅人

二番

左持上

山西[illegible]日斜陽透。　林下鹿鳴落葉飛、

右

淺茅生やのへのあはれも白露のふかきは秋のならひ也けり

三番

左勝　　資實卿

牛笛ニ林梢一黃鳥少、　馬嘶ニ原上一旅行多。

右　　定家卿

むら雨の玉ぬきとめぬ秋かせにいく野かくたく萩の上の露

四番

左持上

殷夢夜驚甘霖雨。　軒樂秋深落葉波、

右

朝な〳〵草の袂はうつろひぬかりのなみたもをちのしの原

五番

左　　爲長卿

白鷺双飛秋澤雪、　紅梢半出暮山雲、

右勝　　良平卿

むさしのやみちある時はめもはるになひく草葉を秋風そふく

六番

左勝

風生村柳多ニ黃落一。　月透野松帶ニ翠氣一。

右

なかめするいくのゝ原に霧はれてかきりもしらぬ秋の色哉

七番

左　　通方朝臣

寒水澤長芦雨岸。　秋花經細草千程。

右勝　　女房

あさち原分行末もしら露の袖にふきこす野への秋風

八番

左勝　　

仰雪連野遠鴻滅。　爽籟興林睡鹿驚。

右

宮城野やこ萩か下もうら枯て露のかたみの秋かせそふく

九番

左(何勝)　　賴範卿

秋露草深樂鹿苑。　夕陽煙細隱倫棲。

右　　家衡朝臣

むさし野やなかめの末のはてそなきお花吹こす秋の夕かせ

十番

左持上

月浮二水面一雲花白。　霧斷二山腰一遠雁低。

右

みやき野やなかむる末は霧こめて秋風そふくさをしかの聲

十一番

左持中　　範時朝臣

寒野直霞穿レ霧見。　暮山雁陣與レ雲斜。

右　　範基朝臣

なかめやるふるのゝをのこ萩はら露も昔にかはらさり鬼

十二番

左持下　　家宣

梧楸雨深群梢色。　蘗薄露芳百草花。

右

野原より秋のあはれはしらせけり荻ふく風のたよりたつねて

十三番

左持下　　家宣

嵐陰慘烈林園暮。　野色青蒼錦繡秋。

右　　女房

わけきつる野への錦の袖の色もあらへはふかき萩の下つゆ

十四番

左勝

雲樹影斜村北路。　月花望遠郡西樓。

右

つゆにたにわきてはなれし荻原や末こすかせは袖にふく也

十五番

左　　經高朝臣

林霧興來城樹鬧。　稼雲茹盡野西閑。

右　　宗宣

むさし野や分行方はしら雲のとたゆる空のはつかりのこゑ

十六番

左勝

紫蘭露綴東籬月。　紅葉嵐高西繞山。

右

ほのかなるお花か末はきりこめてなかめにつゝくまのゝ秋風

十七番

左持上　　兼隆

蘭錦露殘風千畝。　木葉秋紅霜一村。

右　　　爲家

夕されは露ふきむすふ秋風にみたれてなひくをのゝ萩はら

十八番

左勝

林寒鶯囀倚レ石。　野遊索意酒盈レ樽。

右

から衣すそのゝはらの夕霧にいくかしほれぬ萩の花すり

十九番

左　　　知長

鳥來易掩三間寺。　雲舞初看萬項田。

右勝　　　藤宗時

有明の雲ふきはらふ秋かせにひとりしくるゝいはしろの松

二十番

左

遠樹梢紅冬已近。　寒雲山舞月孤懸。

右

むら雨の露のかことももらかれてをのゝ草ふし秋かせそふく

廿一番

左持　　　藤家光

遠樹半晴虹影淡。　平蕪雨過鹿蹤荒。

右　　　源継長

藤袴香をなつかしみきてみれはゆかりの色も武藏野の原

廿二番

左持

郊端曉露蕙蘭悴。　原上秋風鷹隼揚。

右

身にそしむ千草にうつる露よりも色なき霧の野邊の曙

廿三番

左持　　　藤教實

秋雲歸レ洞寒皐靜。　白霧隔レ涯遠水深。

右　　　藤康光

風わたる野へには秋の色みえてくもちはるかにはつかりの聲

廿四番

左持

野外徑幽霜後草。　村南地僻夕陽林。

右

つゆふかき野へのかるかや秋風に思ひみたるゝさを鹿の聲

廿五番

左　　　棟基

三危露結添二虫怨一。　一片嵐過和二鹿聲一。

右勝　　　範宗朝臣

さを鹿のをのかすむのゝ萩の上に鴈のなみたの露そあらそふ

廿六番

左

歸燕遥飛雲靜色。　敗蘭更臥月明程。

右勝

夕月よ月ふくかせにかよふなり野はらにすたく松虫のこゑ

右得古寫一本書寫以横田茂語本挍合了

和歌部七十九詩歌合中

現存卅六人詩歌 建治二年

屏風詩歌

甲帖

早春同　前博陸殿下

雪嶺含雪猶殘レ色。彭蠡湖鴻欲レ反レ寒。

梅　前藤亞相

咲なはとまたれし梅の花の香にこぬ人たのむ春の山里

陶潛　九條前內相府

歸休彭澤秋三菊。生計廬山春五松。

寄社祝　沙彌眞觀

かくしこそかものみやゐのかつらかみおさまれは下も亂れね

初冬山寺即事　粟田口入道亞相

仙鶴伴レ行紅葉路。僧龍迎レ老白雲山。

秋歌　熊野撿挍宮

まさきちるみやまの峽の夕時雨そこはかとなくぬるゝ袖哉

秋暮水村中　土御門入道亞相

海樹風寒休レ向レ北　江村雲物任二斜陽一

戀　今出河院近衞

思ひせく袖より落る瀧つせはいつの人まの涙なるらん　二品納言

羇中即事　鷹司院帥

雪月三年懷レ十夢。烟嵐萬里望レ鄉魂。

擣衣　堀河前納言

衣うつ音にそしるき秋風に人をたのまぬ宿のけしきは

羇中感懷　京極內侍

雲浮胡塞遠人路。淚濕江州司馬衫。

月前盧橘　前菅相公

月かけもたか袖の香としのいて〔本ノマヽ〕花橘の木のまなるらん

北野聖廟　兵部卿

廟樹爲レ隣孤客淚。紅二於花色一脆二於花一。

秋述懷　岡崎入道三品

秋をへてかさなるとしの數よりも淚そ老のしるし成ける

江上夏望好

雲浪夕香菱藕市。風花春過綺羅船。

松間花　高倉入道三品

高砂のおのへの花に埋れて下葉と見ゆる松の色哉

觀心念佛　勸修寺撿挍僧正

是心是佛雖レ來レ外。上品上生誓望レ西。

住山之時詠歌　青蓮院僧正(道玄)

我山をすみかとすれは都さへかへりて旅と成ぬへき哉

乙帖

秋　曲阜殿下

月照二青嶋一猿叫レ霜。嵐吹二紅葉一鹿鳴レ林。

懐旧　式乾門院御匣別當

過にけるむかしも今のつらさにてうき思ひ出にぬるゝ袖哉

山中秋興　堀河入道内相府

巖徑月纏猿叫囀、深窓風冷鶴心閑。

河月　土御門入道内相府(通成)

龜のおのたきつ川浪玉ちりて千代の数みる秋のよの月

山中秋興　二條前亜相

楚嶺霧深秋景色。嵩山月冷舊樓臺。

鶯　安嘉門院右衛門佐

鶯ものうからてや吹かせの枝をならさぬ花に鳴覧

春日即事　新亜相(實)

野烟作晴草三徑、林雨催芳花一村。

大峯修行之時　聖護院宮

雲かゝるおほくの峯を越つれと猶末遠しいはのかけみち

春日山望　藤侍從(雅言)

萬室春濃花漢水、翠閑霞深鳥啼梯。

於當根本宮詠　園城寺長吏大僧正(隆弁)

分入山路はるけくなりにけり嵐の音のすみかはるまで

春日山望

一棹春暖花開路。千障雪消竹外山。

早苗　院弁内侍

小山田にまかする水の淺みこそ袖はひつらめさなへとるとて

只憑高祖餘慶　菅二品(為長?)

非唯恩父祖餘慶、天永帝師五代孫。

參詣日吉社路次之詠　法印良覺

ゆきゝにはたのむかけそと立よりて五十過ぬるしかの濱松

春日山望　藏人頭左大弁經長朝臣

春柳黛深春澗水。晩樵歌遠白雲梯。

夏戀　左武衛大將軍(實冬)

夏の夜と何か恨んいつとてもあふ人からにあかぬならひは

殿庭夏景清　右大弁兼頼朝臣

璅砌前頭晨露色。玉池南面薫風聲。

秋曙　左近中將爲世朝臣

秋風にたなひく雲の隙みえて山のはしるき曙の空

丙帖

初冬於禪林寺上方即事　前博陸殿下

影圍古殿殘更燭。聲晴禪林半夜鐘。

山路落花　座主宮

誰ゆへにあくかれそめし山路とて我をはよそに花のちるらん

秋日山寺言志　花山院前内府

有レ山有レ水眼前興。不レ厭不レ求世上心。

花契遐年　中納言

花みてものとけかりけり幾千代と限もしらぬ春の心は

羈旅秋行　堀河亜相(基具)

林外楚山霜葉色。竹中巴路晩蟬聲。

月歌　花山院亞相

雲にのみ袖をやぬらす秋の月心すむにも涙おちけり

水郷秋望　前源納言

遠樹暮消千葉樹。斜陽夜月滿二江樓一。

秋雲　前右武衛大將軍

秋山の松の木末の村しくれつれなき中はふるかひもなし

田日即事　徳大寺納言

夕忘二暑氣一蘭葉荷。夏有二秋霜一沙月庭。

暮入閑庭　澗院納言

秋はたゝをのれなきてやかりかねの夕の空の哀しるらん

仙家秋曙　中院納言

路草花陽向月洞。山行松外（マヽ）雲中。

冬歌　左近中將兼有朝臣

雪を夜の外山吹こす木からしに時雨てつたふ峯の浮雲

寒村遠景暮　菅三品

月白消上三峯暮。風巻蒲中一縣遊。

山家雪　法印尊海

山里は雪の中こそさひしけれさらぬ月日も人はとはねと

江上春望　藤三品

百花橋北春嵐寫。五柳水南曉月門。

山花　法印實伊

雲かゝる山とはかねてまかひけり千代に一たひ散花も哉

暮秋於山家言志　東宮學士資兼

落葉岩幹殘秋水。紅葉門前消暮山。

寄菊久戀　左京大夫隆博朝臣

つもりなは袖にも淵と成やせん涙はきくの露ならねとも

丁帖

秋日山家言志　前曲阜殿下

鳥聲日暮溪雲底。人事纔稀山月前。

暮秋　大相國

なからへてさても幾たひおしむらん身にかへつへき秋の別を

贈答　戸部尚書

四句賓白鐘中穿。孤鶴溪紅花外春。

早秋　二條入道亞相

足引の山下かせのいつのまに音吹かへて秋のきぬらん

冬日於水郷即事　姉小路前納言

魚籃便寒嵐後夢。樵舟消靜月前歎。

早秋　入道相公

めにみるといふたにあるをいかおしく身にしむ夕を秋の初風

閑居偶吟　藤納言

秋心成レ宗鳳ニ閑素一。老溪滿レ衫不レ拂レ紅。

後朝戀　藻璧門院少將

をのかねにつらき別の有とたに思ひもしらて鳥のなく蘭

山家偶吟　九條入道二品羽林

溪鴻翅冷秋霜席。巖鹿聲悲曉月峯。

秋夕風　富小路入道納言

吹かせもわきて身にしむ時そとは誰ならはしの秋の夕暮

釋奠　散位基長朝臣

南樹秋風雨不レ冷。青雲衣重禁園鄉。

尋山花　一條新三品能清

けふも又あなし山路を尋ねて昨日はさかぬ花をみる哉

秋夜旅懷　文章博士在匡朝臣

長慶二十澄江月。歸夢一夜洛陽秋。

浦月　法印實圓

舟たへのとこの浦わの浪枕やとるや月のうきねなるらん

夏　散位範資朝臣

竹窓宿枕清風簟。松影落ㇾ盃明月庭。

寄夢戀　沙彌寂明伊信入道

逢とみはさても思ひのなくさまてはかなき夢は猶そかなしき

秋日言志　沙彌景綱宗氏入道

壽陵月白三宿、彭澤菊黃重九秋、

秋歌　沙彌圓意

秋の野に行ゑもしらてなく鹿はあふを限と妻やこふらん

此詩歌者、嘉元二年春閏二月、關東相州時宗。所ㇾ被ㇾ結構ㇾ之屏風詩歌也。圖作者伊信入道、詩者藤中納言爲世卿撰ㇾ之、歌者右大弁入道員撰ㇾ之也。以ㇾ當世能書一令ㇾ書ㇾ色紙形一云々。

五十四番詩歌合 康永二年

詩　勝十三　點十七

作者	勝	持	負
御製	勝一	持四	負一
參議藤原朝臣隆職	勝一	持二	負三
沙彌眞乘		持二	負四
藏人頭右京大夫藤原朝臣國俊	勝一	持二	負三
右大辨藤原朝臣藤長	勝一	持二	負三
散位藤原朝臣有範		持二	負四
大學頭紀朝臣行親		持四	負二
藏人春宮大進藤原朝臣俊冬	勝四	持二	
法印玄惠	勝五	持一	

歌　勝廿　點十八

作者	勝	持	負
女房	勝一	持二	
永福門院內侍		持二	負一
前權大納言藤原朝臣實明女	勝三	持一	
散位藤原朝臣親行	勝一	持一	負一
徽安門院小宰相	勝二	持一	
沙彌無覺	勝二	持一	
一條	勝二	持一	
右近衛中將藤原朝臣定宗	勝一	持一	負一

三條　勝二　持二　負一
參議源朝臣重資　勝一　持二
左大臣藤原朝臣　勝一　持二
徽安門院一條　勝三
宣光門院新右衛門督　勝二　持一
權中納言藤原朝臣公蔭　持三
五條　負三
散位藤原朝臣爲名　持二　負一
坊門　負三
永福門院右衛門督　持一　負一

講師

讀師

判者

一番

左持　山家春興　御製

桃花流水洞中天。不レ記煙霞多少年。
滿目風光塵世外。等閑逢着是神仙。

右　女房

嶺の花麓の柳をしこめてたゝ我宿の物にそ有ける

二番

左持　沙彌眞乘

竹外午鷄聞夢回。紙窓人履踏二苺苔一。
微風時軟二簷香一過。似レ報二前山花已開一。

右　沙彌敍覺

霞しくふもとの里は明やらて軒端の山の花そしらある

三番

左持　散位藤原朝臣有範

山鶯啼破午窓夢。閑掩二柴門一春晝長。
是處有レ花人不レ到。知レ非二塵世利名場一。

右　左大臣藤原朝臣

峯の霞谷の鶯わかやとの外にもとめて春そしらるゝ

四番

左勝　法印玄惠

路接桃源傍水濱。煙霞鎖處絕無レ隣。
惜哉九陌紅塵客。不レ見山中一段春。

右　坊門

山高み我いほりにて見渡せは麓をめくる花の白雲

五番

左勝　藏人春宮大進藤原朝臣俊冬

幽處元來竹徑深。屋頭山色碧千尋。
浮花浪藥未二曾發一。春到二梅邊一先蕊簪。

右　散位藤原朝臣爲名

深山邊や我すむ庵の近けれはかへるさしらて花にくらしつ

六番

左　參議藤原朝臣隆蔭

花色不レ孤雲有レ隣。紅塵無レ到碧桃春。
一瓢貯得可肥水。還恥人間食肉人。

右勝　散位藤原朝臣親行

山深き宿にはおしきなさけ哉咲匂ふ花に鶯の聲

七番

左　藏人頭右京大夫藤原朝臣圖俊

閑齋曾無二營世事一。清歌日々到二花間一。
遊絲百尺颺二天外一。不レ及二山翁心緒閑一。

右勝　一條

山風や猶もうき世の色にうつす心そあはれよしなき

八番

左持　右大辨藤原朝臣藤長

柴門曾不レ似二人家一。綠水青山左右遮。
已識山溪有二絕景一。夜深溪月屬二梨花一。

右　參議源朝臣重資

よそにのみうき世の風を聞なして心もちらぬ山陰のはな

九番

左　大學頭紀朝臣行親

但實早寒同田里、孤宵半夜雲半家、
不レ識黃鶯棲二樹底一。一聲啼破滿山霞。

右勝　宣光門院新右衛門督

さすか猶はな鶯の春はかり時を忘れぬ山かけの宿

十番

左勝　參議藤原朝臣隆職

藜杖芒鞋清晝長。歸來猶是不二斜陽一。
更臨二机上一讀二周易一、岩背梅供二一爐香一、

右　前權大納言藤原朝臣實剛女

なにかとふうきよをいとふ山里に花に人めはまたれぬものを

十一番

左持　法印玄惠

遊人結レ隊爲レ花來。猶掩二柴扉一晝不レ開。
更想陽春三二月。移居別處白雲堆。

右　永福門院右衛門督

まつとなき人めもはるはみやまへや花鶯の宿の梢に

十二番

左持　御製

入羅不レ到滿溪雪、岩下草廬自掩レ門
薫識梅邊一段意、水清淺也月黃昏。

右　永福門院內侍

山深み春はよそなる柴の戸に花と柳の色そあまれる

十三番

左持　大學頭紀朝臣行親

有レ客問レ余庵內事。笑而不レ答倚二欄干一。
目前春水春山綠。豈以二世情一作二此看一。

右　權中納言藤原朝臣公蔭

誰かしらん深山の庵の花さかり塵の外なる春の情を

十四番

左　右大辨藤原朝臣藤長

此境風流別有レ天、埋傳深鎖絕二紅塵一
不レ開一樣俗人眼。花柳形容物外春。

右勝　一條

をちこちの花を一つに吹よせて風いとはれぬ山陰の庭

十五番

左　藏人頭右京大夫藤原朝臣

獨携二藜杖一澗邊立、落絮紛々逐水流。
也行二山花一擇二鳥語一、清狂日永忘二春愁一、

右持　　右近衛中將藤原朝臣定宗

花にあかぬなかめのみかは山陰やかすむ軒はの春夜の月

十六番

左持　　沙彌眞乘

鳴禽舞蝶意相得。　素蘂丹葩眼自明。

閑覺幽栖風味厚。　莫レ言春不レ入二柴荊一。

右　　徽安門院小宰相

くるとあくとひとりみやまの花さかり都の人に告やらまし

十七番

左　　散位藤原朝臣有範

杏花村落路三叉。　藜杖徘徊日已斜。

村外炊煙靑淺積。　定知幽處有二人家一。

右勝　　徽安門院一條

静なるなかめも更に山かけや軒はの花のゆふへ曙

十八番

左持　　藏人春宮大進藤原朝臣俊冬

杜鵑聲裏落花底。　岩下柴門掩二夕陽一。

不二是人間勤業地一。　煙霞痼疾入二膏肓一。

右　　五條

山かけや軒端の松のたえまより村々みゆる花の白雲

十九番　　幽思不窮

左持　　玄惠

深殿无レ人簾影靜。　等閑把レ撥弃二琵琶一。

不レ堪半夜朦朧月。　亦是空庭寂寞花。

右　　坊門

あはれ身をいかなる谷にしつめても猶を思ひのそこはみえしな

廿番

左　　國俊朝臣

淸殿（風イ）纔有同天景。　不レ似心情舊日時。

和雨引來多少恨。　梧桐庭院夜遲々。

右勝　　一條

憂そかしつらきそかしと思ふうへに何そ哀をさましかぬらん

廿一番

左　　有範朝臣

銷瘦愁顏慵レ對レ鏡。　日高强起拂二蛾眉一。

傍人但見淚痕濕。　不レ識中心是恨レ誰。

右勝　　徽安門院一條

契こそ人にもよらめ思ひさます心よなとか我にかなはぬ

廿二番

左　　隆職卿

烟柳陰々鎖二畫樓一。　幽閨數盡五更籌。

等閑相對臺頭鏡。　不二是寫一レ容只寫レ愁。

右勝　　實明卿女

同し世を厭ふも悲し身をかへてめくりあふよの賴みはかりに

廿三番

左持　　御製

滿階梧葉月徘徊。　繡戶爲レ誰終夜開。

別殿霓裳天未レ曙。　不レ容雲雨到二陽臺一。

右　　內侍

あはれ此つきぬ思ひもはれすして絕すは後の世まてかなしな

廿四番

左　　藤原藤長朝臣

億日上雲篇二遣人一　還雪催梓有憂身。
長門寫得春風底。　花落鳥啼亦一聲。

右勝　三條

あらぬ世のへたても悲し思ひあまりきえん命はおしからね共

廿五番

左持　俊冬

九十春風開未レ歸。　愁有微雨無雙飛。
黄金無實相知處　爭奈恩情再得レ歸。

右　爲名朝臣

夢の世の人のうきせに涙河久後までの身をやしつめむ

廿六番

左持　行親朝臣

燈前半夜數行涙。　湖盡五湖三峽深。
人在關山千里外一　還レ文難レ寫二此悲心一。

右　公藤卿

うき中よいとひしたふもむくひならはかくて幾世の契成らん

廿七番

左　眞乘

樹底古芳如二昨日一。　秋風拂レ盡落二紅葉一。
鐘樓不レ畫半開宇。　南風渾无雲作書。

右勝　小宰相

ある世こそ名をも忍はぬ戀しぬる今は限をいかてしらせん

廿八番

左　御製

經夜忍聞宮漏聲。　朝來慵レ畫翠蛾眉。
獨中猶有二玉顏在一　惟是昔恩非二舊時一

右持　女房

人はつらく我は哀に成にけりおもひの底よいつかはるへき

廿九番

左持　藤長朝臣

簾幕陰々白日長。　羅帷猶自有二餘香一。
直饒滴盡江湖水。　若比二涙痕一未レ識レ量。

右　重資卿

白雲の行かたもなき物おもひに久むかはるゝ夕暮の空

卅番

左勝　國俊朝臣

花落鳥啼深掩レ門。　蝶鐘寂寞亦黄昏。
恩情空去絃聲絶。　獨對二春風一拭二涙痕一。

右　定宗朝臣

戀しなは煙となりてうき人に後の世までもたちやそはまし

卅一番

左勝　隆職卿

一封消息告二來期一。　竊拭二涙痕一畫二翠眉一。
鐘韻喚回孤枕夢。　始知事々出二相思一。

右　親行朝臣

こひよはる命のきはの恨をは身をしかへてもいはむとそ思ふ

卅二番

左持　有範朝臣

獨對二殘燈一宮漏長。　忍聽歌吹在二昭陽一。
衣裳不レ要薫二蘭麝一。　偏裏空餘御賜香。

右　左大臣

涙のみせきこそかへせことのはにいふへき程の思ひならねは

卅三番

左勝　玄　恵

卅僊仙衣皆不レ薫。　腸々只禮玉晨君。
紗窓獨守天將レ暮。　忍出二瑤階一看二碧雲一。

右　右衛門督

しつむとも君をみるめの浦ならは千尋のそこも尋ねさらめや

卅四番

左勝　俊　冬

泪眼曾嘗レ閉二鳴鏡一。　玉顏自笑比二寒鴉一。
眉光有レ恨无二人見一。　空對二深宮一落月斜。

右　五　條

終にわれ戀しぬとたにきかれはや深き思ひのしらるはかりに

卅五番

左　行親朝臣

花落黄昏金鏁合。　春風不レ管太無レ情。
當初宮裏玉顏色。　爲二一日恩一誤二一生一。

右勝　新右衛門督

なるゝまゝに我思ひすむ心より人のあはれはけたれてそゆく

卅六番

左　眞　乘

昏暗畫碧雲合、　空鎖長門獨坐時。
庭樹清風羅帳月。　悄然自數二曉籌移一。

右勝　兼　覺

戀よはる命はかくてつきぬともおもひはよゝに猶やのこらん

卅七番　海邊眺望

左　有範朝臣

對岸孤舟煙靄裏。　漁簑未レ乾雨初晴。
滿江風景渾堪レ畫。　但不レ應レ摸二欸乃聲一。

右持　左大臣

沖つかせまた吹〔たゝイ〕たえぬ朝なきの浦より遠にみつの松原

卅八番

左持　國俊朝臣

海門落日抹二平沙一。　隔レ浦炊煙一兩家。
江上晩來風浪急。　白鷗驚起入二蘆花一。

右　一　條

海原やまた夜をのこす浪のうへにかたふく月を遙にそみる

卅九番

左勝　御　製

天涯地角只蒼茫。　便是漁翁自得レ場。
堪レ咲儻背千古恨。　銀潮捲起浸二斜陽一。

右　安　房

はるかなる沖よりしらむあかしかた〔ほのイ〕浪にたなひく横雲の空

四十番

左　眞　乘

〔淑イ〕淑浦潮生浸二碧空一。　花欄倚遍夕陽中。
漁翁唱入二蘆花一去。　驚起暮天沙上鴻。

右勝　兼　覺

漕出しとまりやいつこ山のはもみえすなるみの浦のをちかた

四十一番

左持　玄　恵

碧波心上白鷗前。　掉出漁家一釣船。
萬里蓬瀛休二遠覓一。　風塵絶處是神仙。

をとを。しらぬ漢詩をしのきつゝ。おさをかさね。語をならひける。かれは元和のはしめにあたりけるにや。白樂天元微之か詩の。時に盛なりけるをならひつたへて。世々にける。其跡ひとへに。やまとこと葉にちかゝりければ。たやすくわか國の俗を化せしにや。しかはあれと。元白を學ふ者は。ことはゝをひらかに。心たしかなるを本とせし。よく此旨をえたらんはしらす。あしうせは俗なる語。俗なる意をのかれすや　あらん。唐土のむかしの時。いく百とせのちかとかす。文體三たひ改るといへり。是源に其國の歌も。萬葉のすかたは。三代集に移り。また後拾遺にあらたまり。新古今にいたりて。大に變しけるにそ。歌すてにかくのことし。詩の道また是におなしかるへし。今のよに詩をまなひぬともからは。唐の李杜。宋の蘇黄たにかねかはんのみなん。時の好むといふ。世のことはりにも叶侍らんものをや。そもく世に人なくやはあるへきを。愚なる身に判者のやうなること葉をしるしつくへきよし侍ることは。たとへはかしかき題をのへて　大峯をかけり　いやしきうつはものをもて。わたつ海をくみはかるにおなしけれと。いつくしき命のかれかたきはかりに。後のあさけりをしらぬなるへし。左の詩は。つたなきこと葉に侍りけり。第二句なと。ふるき詩に二字こそかはり侍れ。あまりなるにや侍らん　右歌。秋風晴天野草樹之景。寶望眼穿盡慢心切なりといへとも。初五文字。ききいとゝか不二庶幾一にや。よのつねの歌合の例になそらへて。しはらく持とや申へからむ。

二番

左　前内大臣

霧罩立盡依秋風、　水色山光一望中。
月滿星垂各有遠。　數行過雁字横レ雲。

右　資廣卿

しら露に千種の花の色にみえてうつろひ渡る秋のゝへ哉

左。水色一望にきはまり。右は花の色露のひかり。ちくさにみえまかふ。をよそ勝劣を論するに。すこふる是非にまよひ侍ぬ。しかれとも。左は野外のこゝろ。猶不分明に。右は題の文字たしかなるにつきて。一旦判者の心も。秋の野邊にうつろひ侍るにやあらん。

三番

左　在豊卿

行盡京塵芳草紅、　携レ節野外立二西風一、
山裁二錦綉一江羅帶。　萬里雲天一目中、

右　僧正禪信

雲にまゝ岩田のをのゝ秋風に山のはみえて月そさやけき

唐律の詩は。いかにも三四句一意にいひてしかるへきにや。山錦江羅の勝景をすてゝ。忽渺茫たる萬里の雲。天に目をあそはしむへきことは。いかゝと覺え侍り。また岩田の小野の秋風に山の端みえて月さやかなる風情は。いつくのゝへにてもいふへきにや。うすくこき柞のもみちに。山路しくれて月影のうつろひ侍らんや猶見所は侍らむ。

四番

左　俊秀朝臣

斜日村春秋色濃。　回レ頭野外屢臨レ風。
詩情不レ減富春好。　處々楓林霜葉紅。

右　　[illegible]朝臣

誰か今なかめすてゝはさしすきのくるすのをのに眞萩散ころ

左第三の句の富作は山の名にや。短慮皮ひかたし。右くるすのをのゝ眞萩萬葉の古風をおもへり。勝へきにこそ。但なかめといふものゝ。別にあるやうによむことは。うけられすと。五條の三品は申侍るとかや。

五番

左　　敦秀

野亭一望景無涯。　鵶背夕陽疎樹烟。

右　　爲季朝臣

隴畔秋光多所ㇾ通。　寒雲寞庭遠詩情。

いつくともみえす草はのはてそなき露も玉ぬくむさしのゝ原

見えす草葉のと侍ることはのつゝき。いかにそや聞え侍る。鵶背夕陽疎樹烟。なにとなく物さひしき心ちす。勝へきにこそ。

六番

左　　業忠眞人

杖策扶ㇾ我出二柴扉一。　野草秋深露濕ㇾ衣。

右　　季春

集山城遠天共遠。　回ㇾ頭一望人稀。

むさしのや露もはてなき秋草に雲さへかゝるゆく末の空

左の四七。右の五七。野草のともに玉をつらぬく思ひをなせり。たゝし雲さへかゝる行すゑの空。武藏野の遠望さることなれとも。さへのことはなを心もとなきにや。左の秦樹城遷入共遠といへる。身は野田の間居に居なから。眼は鳳闕の青雲を望む心。いまゝか勝り侍らん。

七番

左　　內大臣

蘚帽吟第一望寬。　蕭條野徑疊二秋閑一。

右　　通淳卿

汀煙斷處蘆花白。　村雨殘邊樹葉丹。

ことに出ていかゝいはれのをのつから賤もわかぬ秋の色哉

左の後聯。唐詩に紙をへたて侍り。賤なとは。錦の袴を着たるとや申侍らん。右に。ことにいてゝいはぬはかりのことは。何はかりのことそや。おもひわかれぬさましたり。汀烟村雨。見所おほく侍るにや。

八番

左　　經清

秋聲幾色易二黄昏一。　一陣霜鴻落二遠村一。

右　　爲富

望眼轉迷二平野外一。　疎煙細草役二吟魂一。

野へははや花の錦をゝりはへて色なる聲に虫も鳴めり

左右の二首。野外の秋色を詠せるのみにあらす。霜鴻草虫の秋聲をさへあらそへり。いつれまさり。いつれをとれるといふことをしらす。

九番

左　　敦房卿

山光野色帶二秋陰一。　蘭悴菊衰看不ㇾ禁。

右　　雅永卿

滿目蕭條霜露底。　斜陽暖處草虫吟。

みるからにあはれそこもる霧立てをしか妻こふのへの夕暮

左。露下草虫認二殘陽暖處一兮。續二切々之吟一。右。霧中鹿感二

はゐる常草瑣樹なとのことは。さもや侍らん。菊花といはんからに。うたかふ詞をも殘さす。うちまかせて春秋にわたりて。みるへきやうに讀侍らんことこそ。おほつかなく覺え侍れ。秋なきときやさかさらむ。又老せぬ秋の久しかる(可思)ぬへくなとは。各別の意にや。とまれかくまれ。是は左勝へきにや。

十八番

左　　業忠眞人

洞門霜露菊花鮮。一種秋香屬ニ地仙一。
白々黄々何所レ似。雲間鶴護半籬前。

右　　持爲朝臣

袖かゝる鶴のつはさも白菊のにほひやうつす秋の山人

右歌。初の五文字こそ。いさゝかさゝへて聞え侍れ。鶴のつはさもしら菊のにほひやうつすなとは。あしからす侍るにや。雲間鶴護半籬前。これまた捨かたく侍れは。いつれと申かたくや。

十九番

左　　在豐卿

九日賞遊仙子家。菊籬風露十分加。
一枝聊挿ニ滿頭一去。可レ作人間不老花。

右　　近衞局

をつゝえはさもあらはあれ幾秋も花は朽せし庭の白菊

一枝を滿頭にさしはさむこと。いかゝと覺え侍り。又は花は。しほむかるゝとこそ申ならはし侍れ。花は朽せしも。おほつかなく侍れと。かやうのことは。いつれもことなる難には侍らぬにや。又爲レ持。

二十番

左　　俊秀朝臣

一叢黄菊數枝香。縹紗仙居秋滿レ庭。
惟見寒英傲ニ霜色一。爲レ君欲三好制ニ頽齡一。

右　　爲富

をのゝへもこゝにや朽し咲匂ふ山路の菊に露をかさねて

左第四句。いひもおほせぬやうに聞え侍り。右をのゝえもこゝにやくちし。めつらしからす侍れとも。難なきにつきて。勝へきにこそ。

二十一番

左　　中原康富

娟々黄菊弄ニ秋光一。洞裏神仙却老方。
花制ニ頽齡一金滿レ地。又知甘谷在ニ南陽一。

右　　有俊朝臣

をのゝえの朽るためしや白菊の花に半の日を暮しても

左。金滿地の三字。あまりたることはに聞え侍り。右は謌入ニ仙家一爲ニ半日客一といふ心にや。いさゝかまさされるにや侍らん。

二十二番

左　　親長

紫艶半開穠色斜。叢生冒レ雨地仙家。
佳辰好備群賢宴。霜階鋪金籬却花。

右　　定衡法師

山人のすめるも菊の陰なれは花みて千世の秋を契らん

左。地仙家に群賢の宴たひらき。右仙人のすみかに千とせの契をむすへり。ことはりはいつれも聞え侍れと。ことに

おかしきふしもましり侍らぬにや。

二十三番

左　　　　定[illegible]朝臣

仙池菊苗花正開。　金英當々見奇哉。
從レ今籬畔重陽後。　戯蝶遊蜂更不レ來。

右　　　　爲季朝臣

やま人の老せぬ友と契をく秋も千とせのそか菊の花

仙地菊苗とはかりいひては。仙家の意なを不足なるへきにや。菊苗に花のひらかむことも。早速なるとや申侍らん。又そか菊は。そかひにみゆるといへる說にとりをかれ侍るにや。もし承和の黄菊にとりては。山人の老せぬ友とちきるへきことも。心もとなく侍り。しはらくなすらへて持と[illegible]侍るへし。

二十四番

左　　　　教房卿

陶潜之[illegible]仙御秋。　金英玉葉露香浮。
籬邊分得南陽水。　采々好レ醫衰疾憂。

右　　　　季春

老らくのくへき道なき山ふかみ千世の影くむ菊の下水

左。菊は花の隱逸也といへる、茂叔か說を思へり。右おいらくのこむとしりせはと讀る。翁か歌をとれり。いつれも心あれて聞こ侍るへきを。隱逸者といへること葉。あまりに物ふかく聞え侍り。くへき道なきも。さしさためたるやうに侍り。所詮此南陽の菊水。みしかきみつくきをもて。ふかき淵[illegible]はかられかたくこそ侍れ

二十五番　　松聲入琴

左　　　　内大臣

居有二青松一張有レ琴。　半簾落月夜沈々。
清風自穢龍吟曲。　下レ指何勞絃上音。

右　　　　雅永卿

青海の浪のをすけてひく琴にまかふみとりの松かせそ吹

左。居有二青松一張有レ琴といふより。落句にいたるまて。すゝするとそのことはり聞え侍り。右。波の緒すけてなと。古歌のこと葉たよりありてきこゆ。抑青海波の曲は。箏にこそ侍れ。まことの琴には。いかゝと申かたくや侍らん。されとも大和うたの道には。箏と琴とのわけめまてをは申侍らす。ともに。こと〱のみ云ならはしたる事なれは。それまてのことは。いかなる難にや侍るへき。左右ともに。優なるにつきて。勝負を申さすや侍らむ。

二十六番

左　　　　親長

松入二焦桐一雅操清。　冷然洗レ耳玉徽聲。
知音誰効鍾期趣。　古意一彈山月明。

右　　　　雅親朝臣

おりにあふ秋のしらへの松風を待とる琴の音こそわかれね

左。松入二焦桐一。四字の造語。わさと事つくりていひ出され侍れと。風とも聲とも侍らては。いさゝか物とをくや侍らん。右初の五文字すこふる結構の躰にや。待とる琴の音といへるわたり。かの物語のおもかけふと思ひ出られ侍りて。いさゝかまさるとや申へからん。

二十七番

左　　　　俊秀朝臣

詩歌合　文明十四年九月廿八日

一番　山中紅葉

左　從一位源通秀

楓葉霜頻九月天。吟レ詩遙想楚山邊。
殘紅欲レ盡孤村外。一抹斜陽錦樣鮮。

右　女房

色〻は千種のましはわけ捨てたをめにかくる峯のもみち葉

二番

左　釋永崇

葉不レ成レ乾霜色寛。滿山紅葉夜來霜。
寧知自有二天下集一。頭上又看栖二鳳風一。

右　無品親王

わけ人は山はもみちの色ぞ今なを奥深き霧のうち哉

三番

左　權大納言藤原教秀

常盤葉二霜一是佳氣。一抹斜陽錦繡中。
不レ當秋光紅千樹。吟邊流水上二蒼穹一。

右　式部卿邦高親王

小倉山みゆきふりにし秋も猶わすれぬ色に出るもみち葉

四番

左　釋等貴

獨憐楓樹倚二山隈一。霜後雲開錦繡堆。
紅葉隈レ花春何極。停レ車人少徑無レ媒。

右　入道親王道永

山ふかみたなる紅葉のにしきにてたかふる里にきてかへる覽

五番

左　權大納言藤原爲淸

滿林無二處不二霜楓一。裁レ錦深紅又淺紅。
此地却疑製二吳楚一。淺深葉々照二山中一。

右　入道前左大臣女

しくれ行山のもみち葉われも又心をそめて日かすふる頃

六番

左　釋景茝

行入二深陰一小徑斜。楓林紅處兩三家。
山禽日暮停レ車語。似レ道花時無二此花一。

右　前內大臣

山陰はくるゝはやしの小車も心とめよとかさるもみち葉

七番

左　大藏卿藤原經茂

昨夜滿霜葉出不。滿山葉々着レ紅稠。
有レ誰能繪二得斯境一。移作五雲天上秋。

右　按察使藤原親長

くる人もみえぬいとかの山なれと秋とや木々の錦をるらん

八番

左　權中納言藤原廣光

閑徑秋荒霜色深。滿山楓樹映二松陰一。
吟邊多是停レ車處。葉々紅飜夕照林。

右　從二位藤原敎國

染かへて時雨るゝ木々は山あゐの藍より深き千しほとそみる

九番

左　權中納言藤原實隆

殘楓揚々弄二秋光一。　吟歩忘レ歸石逕長。
一鳥下[illegible]。　回レ頭木末欲二斜陽一。

右　參議侍從藤原政爲

山深くわくる心の色よりも千しほはうすき紅葉とやみん

十番

左　釋承英

青女催成楓樹紅。　滿山落日錦歸風。
遊人不レ到三叉路。　聲々勝花嵐翠中。

右　參議左中將藤原季經

時雨つゝ日影もみえぬ奥山におのれのみてる木々のもみち葉

十一番

左　藏人神祇少副卜部兼致

淨嵐自邊枝添楓。　染得山々秋色紅。
落日無遮半[illegible]遣。　霜氣貫錦小屛風。

右　參議藤原基綱

夜をこめてたつ秋霧のあさしめり紅葉も奥も深き山哉

十二番

左　散位菅原和長

詩景[illegible]閑吟更佳。　運懷二[illegible]路一坐停レ車。
秋山變作二春山一否。　葉々紅深霜後花。

右　右衞門督藤原爲廣

松ひとりまぬる色や小倉山ふかき紅葉のけちめみすらん

十三番

左　田家秋寒　釋景菅

秋正闌時寒更忙。　門村月色夜蒼々。
戚時二雪鳥噪二林[illegible]一。　添二得曉紅一霜有レ香。

右　女房

もるいほに賤かかけほすいねかての夜寒の嵐かつふせく也

十四番

左　大藏卿藤原經茂

田村秋闌一聞罷。　風扣二柴扉一寒雨疎。
白首老農黄扶短。　此時豈耐レ荷二犂鋤一。

右　无品親王

もりあかす山田の庵に露霜のよ寒や賤をおとろかすらん

十五番

左　釋承英

八九田家村路傍。　風吹二秬稏一映二斜陽一。
秋天平野人歸後。　寒雁飛邊足二稻粱一。

右　式部卿邦高親王

もる人の夜寒もさそな岡のへや稻葉色つき霜まよふころ

十六番

左　散位菅原和長

叢村桑松曉霜乾。　田水遶レ門秋山閑。
葉自打レ窓窓白葉。　碓聲繹レ月不レ堪レ寒。

右　入道親王道永

庵近くかりの泪もしくれきて稻葉の雲のあき寒きころ

十七番

左　權中納言藤原實隆

自□暴昔至レ秋閑。　遺穗在レ田相共歡。
縣吏隣レ民租不レ重。　妻兒衣破豈憂レ寒。

右　入道前左大臣女

庵あるゝ秋の山田をかりそめにとふたに寒き袖の夕かせ

四番　左　圓山

東風吹レ雪消二前欄一　出レ谷鸎聲不レ住レ寒。
似レ報春景呈二上瑞一。　一聲高奏萬年歡。
各宜之由申レ之。

右　前関白太政大臣

鳴からく霰のにほひもらつもれて雪ふみ散す枝の鶯
はしめの五文字。きゝよからさるか。

五番　左　宗山

舊雪来レ晴今雪吹。　何圖洛下聽二黄鸝一。
錦帳春遊畫橋曉。　彊半春寒花可レ遲。
各申二殊勝之由一。

右　一位殿

咲とみえて匂はぬ雪の花のえにをのれ色ある鶯のこゑ
一同に殊勝の由を申。

六番　左　従一位通秀

一兩聲高殘雪吹。　遷喬先自上林枝。
綿蠻白雪寒猶早。　風似暮春花落時。
宜之由申レ之。

右　天台座主尊應

雪はなをこそよそ目花の梅かえに色ねを添てきゐる鶯
大かたよろしく侍る歟。

七番　左　権大納言教秀

徵雪吹晴初聽鶯。　久知春滿九重城。
東風料峭遷喬處。　幽谷寒殘歡未レ成。
一二之句。與二三四之句一意頗相違歟。

右　前大僧正増運

春あさみ霜またおいぬ鶯もこつたふ枝の雪やいたゝく
第三句第五句。不二庶幾一之由各申レ之。

八番　左　権大納言高清

春雪吹晴景更宜。　上林頃刻似二華時一。
不レ知黄鳥忘レ寒否。　百囀曲新瓊樹枝。
各申二宜之由一

右　権大納言義尚

うちはふくをのか羽風も寒からし梢の雪にきゐる鶯
いひしりて。優美にきこえ侍り。

九番　左　左近大将冬良

諸峯吹雪舞光清。　吟裡隔レ簾聞二黄鶯一。
天弄二餘寒一春已淺。　梅花紅處兩三聲。
宜之由申レ之。

右　入道左大臣

笠にぬふ花はまたきに降雪をはらふも春と鶯のなく
無レ得無レ失。

十番　左　大藏卿經茂

東風吹レ雪曉蒙蒙。　黄鳥聲中寒更多。
似レ報二梅花春信早一。　玉塵散處謂レ待レ和。

無之字未レ穩歟。

右

梢にはまたきにほはぬ白雪の花ふみちらし鶯そなく　右大臣

ことなる事なし。

十一番

左　權中納言廣光

風雪寒時春雪遲。　餘寒料峭懶レ鈎レ簾。

散雪不レ損金衣濕。　猶有二歌聲一破二春甘一。

各申二宜之由一。

右　按察使親長

我家のそのゝくれ竹雪折にやとりをとひて鶯そ鳴

無二別事一歟。

十二番

左　權中納言實隆

幽谷春遲雪作レ堆。　舊鶯聲澁出猶遲。

出明春日動陽律一。　豈有二餘寒去却來一。

各宜之由申レ之。

右　權中納言永親

下おれもかさなる竹のかけ深み雪のふるすに鶯そなく

ことなる難なし。

十三番

左　參議基綱

餘寒春深雪欲レ空。　鶯路却從二氷底一通。

遠損金衣聲不レ濕。　無因誤作落花風。

無因之字不レ足歟。

右　沙彌宗世

花とみにこつたふをのか羽ふきにも散くる雪に鶯そ鳴

無下可二難申一事上。

十四番

左　蘭坡

雪白二披且一連二野橋一。　出レ幽黃鳥未レ遷レ喬。

餘寒料峭花間路。　打濕金衣吹不レ消。

各申二殊勝之由一。

右　前左近中將敦國

ふる雪にぬれぬものから鶯のまつかけしむる梅の花かさ

第二句おもひたく侍る歟。

十五番

左　横川

春後雪深花自遲。　初知春在着レ梅枝。

餘寒不レ鎖一聲曉。　近聽鶯レ歌遠聽時。

各殊勝之由申レ之。

右　參議政爲

降そふるけさはわかしな鶯のをのかすたちし松の白雪

一二句不二甘心一侍り。

十六番

左　桃源

十日東風吹レ雪殘。　喚鶯聲濕曉鶯乾。

金衣漸暖宮花底。　和氣入レ歌春不レ寒。

申二殊勝之由一。

右　右衛門督爲廣

谷水はいとゝ氷りし雪の中に獨なかるゝうくひすの聲

歌の姿宜侍り。但第一二句。おもひたく侍り。

十七番

左　周麟

梅花臘雪殘晨。上有二黄鶯一囀近レ人。
窓掩餘寒聽彷彿。一聲如レ鶴一聲春。

一同申二宜之由一。

右　左近少將藤原雅俊

下折のねくらの竹の鶯やよふかき雪に出てなく覽

よろしくきこえ侍り。

十八番

左　周全

尋常正月聽二啼鶯一。無レ奈餘寒雪未レ晴。
一夜東風變二春暖一。鬪レ花彷彿管絃聲。

宜之由申レ之。

右　散位源倚氏

花はまた雪にこもりて梅かえに鳴音ひらくる春の鶯

ことなる難なし。

十九番

左　藏人神祇少副卜部兼致

風送二餘寒一雪較欺。簡來黄鳥出幽時。
爲レ梅偏有二護レ花意一。凍損金衣總不レ知。

宜之由申レ之。

右　左衛門大尉藤原政行

鶯のこゑをねくらのしるしにて春を埋ぬ雪の村竹

ことなる難なし。

二十番

左　秀才菅原和長

春正來時暖正催。聲々猶守閣二宮鶯一
爲二花似一報二無窮意一。囀入二禁邊一不レ惜レ聲。

申二宜之由一。

右　沙彌宗伊

梅か枝にきゐつゝ鳴や降雪の笠やとりする鶯の聲

よろしく侍り。

二十一番　江畔柳

左　横川

楊柳絲々翠拂レ空。江邊無二日不一春風一。
市橋烟水人如レ畫。舟在二千絲萬縷中一。

無二殊事一之由申レ之。

右　權大納言兼尚

かけうつる入江の水のうき草も浮かふみれは靡く青柳

見るやうの躰にてよろしく侍り。

二十二番

左　權中納言賢光

繫二舟江畔一欲二斜陽一。弱柳千條映レ水長。
從レ是烟思雨日。絲々吹亂染二鵝黄一。

宜之由申レ之。

右　左衛門大尉藤原政行

風わたる岸の柳もふるきえにみとりなみよる春そへぬ覽

無二異議一之由申レ之。

二十三番

左　參議基綱

江邊馬動二魚梁一。沙際春濃過二雨晴一。
影浸二千條垂碧水一。賞誰染出小鵝黄。

穀紋之字重復。

右　　右大臣

かもめゐる江川の水のかけなからねふる姿や青柳の糸

第三句不レ得二其意一又ねふる心には。糸の字なくとも侍りなん。

二十四番

左　　權大納言高淸

江柳絲々先識春、　麴塵浮處綠猶新、
東風便日驚魚後。　可レ作青萍漾二水濱一。

申二宜之由一。

右　　前左近中將敎國

かもめゐる入江の浪はのとかにて靡く柳もねふるとそみる

ことなる難なし。

二十五番

左　　權中納言實隆

垂柳陰々江水流、　風使裊處好維レ舟。
往還路熟釣魚叟。　屢見榮枯春又秋。

宜之由申レ之

右　　沙彌宗伊

鷺のゐる入江の柳うらなひき絲の水に春風そ吹

風躰よろしく侍り。

二十六番

左　　桃源

鴨綠江東柳巳絲。　金城繫レ馬雨晴時。
祇今行樂無人少。　不下向二春風一折中一枝上。

申二殊勝之由一。

右　　式部卿親王

をのつから絲かはらて幾春をふるえの水に靡く柳そ

ことなる事なくきこえ侍り。

二十七番

左　　藏人神祇少副卜部兼致

楊柳依々江水邊。　春風收處漾二於烟一。
晴梢欲レ月晩潮落。　人倚二翠陰一先繫レ船。

申二宜之由一。

右　　參議政爲

浪かすむ入江をとをみ青柳の絲のまゆはさたかにもなし

初五文字。思ひたく侍り。

二十八番

左　　周麟

楊柳陰中日漸遲、　正今春色度レ江時。
波心倒蘸千條影。　可レ有二遊魚疑一釣絲一。

尤申二宜之由一。

右　　前大僧正増運

青柳のなひく入江は釣人のいてぬ隙たに糸やたるらむ

さしたる事なし。

二十九番

左　　秀才菅原和長

一縷春色柳條肥。　烟晴江邊村舍扉。
萬縷染成鴨頭綠。　晩來可下繋二釣船一歸上。

難二肥之字不一レ穩。宜之由申レ之。

右　　前關白太政大臣

引しめる柳の糸はそれなから露の玉えにかけ靡くなり

五文字不レ宜哉。又江のたよりもなし。玉江の柳も作例如何。

三十番

左　　　　周　全

水暖氷消春滿レ汀。　依々楊柳繞二江亭一。
宜橋嘗與二野橋一接。　雨露無レ私一樣青。

尤宜。

右　　　　按察使親長

はる風の入江をかけて吹からにうら浪ゆらく玉柳かな

よろしく侍り。

三十一番

左　　　　左近大將冬良

江浦ニ晴景ニ望無レ邊。　柳色青々水接レ天。
最愛春風繋レ身處。　幾絲染出萬條烟。

豐宜憂綠萬條垂。

右　　　　一位殿

さそふ水あれともゆかぬうき草は入えの岸の柳かけかも

本歌の心。よろしく侍り。

三十二番

左　　　　蘭　坡

贊嘆入江春始暮。　嫩佳柳色映二新流一。
緑々歌聲東風岸。　欲レ爲二春遊一暫繋レ舟。

尤宜之由申レ之。

右　　　　女　房

かつきするあまも入えの夕波に柳の葉の亂れあひつゝ

尤もよろしく聞たくみにきこえ侍り。

三十三番

左　　　　權大納言敎秀

日暖氷消春不レ遲。　江頭楊柳万條垂。
青々影落白波上。　應是天公染出絲。

申二宜之由一。

右　　　　右衛門督爲廣

靡やかぬ入江に靡く青柳やをのれ煙を春はみすらん

ことなる事なし。

三十四番

左　　　　宗　山

千條柳色好二風光一。　短々長々江水傍。
染不レ成レ乾烟雨晩。　半如二鴨綠一半鵝黃。

尤宜。

右　　　　天台座主尊應

あし火たく難波の小屋の朝烟かけて入江に靡く青柳

朝の字おもひたく侍り。

三十五番

左　　　　從一位通秀

江面風收新柳連。　清波淺レ染半含レ烟。
晩來週レ棹簑衣客。　猶愛二垂絲一繋二釣船一。

無難之由申レ之。

右　　　　散位源尙氏

影うつる入江のなみのかたよりに靡く玉もや青柳のいと

無二指事一。

三十六番

左　　　　同　山

すむ人の心はそらも白雲に一すちかゝる峯のかけはし

左勝之由申レ之。

四十三番

左　　權中納言實隆

百尺高梯入二翠微一。雨餘苔滑客來稀。
樵夫不レ渡夕陽後。只有二寒猿抱レ子歸一。

宜之由申レ之。

右　　右大臣

柴のとのあたりにすむ身も有へつゝ渡り馴たる峯のかけ橋

ことなる事なし。

四十四番

左　　周麟

百尺高梯不レ可レ攀。一家松火隔二深山一。
山中今日無二塵事一。只許樵夫共往還。

尤申二宜之由一。

右　　參議政爲

世中をわたりかねつゝすてし身も今住なるゝ山の梯

すみなるゝ山の梯のつゝきいかゝ。

四十五番

左　　大藏卿經茂

何處圖畫上二此山一。一梯高跨白雲間。
晚霞欲レ度日西捿。人躋二虹蜺背上一還。

尤宜。

右　　左衞門大尉藤原政行

君か代にいてゝつかへは朽ぬへし山のかけ橋人もわたらて

祝言の心。よろし。

四十六番

左　　横川

雲不レ可レ梯山可レ梯。竹籬茅舍路高低。
斷岸蒼蘚吾知處。蜀南詩懸險棧西。

各稱勝之由申レ之。

右　　前關白太政大臣

世を渡る身をのかれてものかれぬはつま木に迷ふ峯のかけ橋

ことなる事なし。

四十七番

左　　關白

元是青雲不レ可レ梯。溪山深處卜二幽棲一。
昔時不レ往無二人過一。唯水聲中日又西。

申二宜之由一。

右　　一位殿

山深くおなし心に住人のかよひ路なれや谷のかけはし

同前。

四十八番

左　　桃源

路入二山村一斜日紅。人家隔レ岸往來同。
高雲不レ礙危梯滑。齊谷深霑王化中。

尤宜歟。

右　　入道右大臣

聞しむかし谷のかけはし朽にけり樵のつての猶やたえなん

やさしく聞え侍り。

四十九番

左　　秀才菅原和長

山家寂々掩二松風一。　路自二白雲深處一通。
數尺危梯背山花。　樵夫皆似レ度二青虹一。
申二宜之由一。但青字不レ穩。

右　　右衛門督爲廣

捨し世の路にあやうくたらはすは渡りやかねん峯の梯
をの〳〵よろしきよしを申。

五十番

左　　周全

數條茅屋回無レ國。　青帶梯危苔色新。
今日山中亦王化。　樵歌一曲太平春。
宜之由申レ之。

右　　前左近中將教國

まてしばし渡りやかぬる浮世をはなれたる谷のかけ橋
難なくよろし。

五十一番

左　　參議基綱

二三茅屋客邊棲。　苔纏二危梯一傍翠微。
徑歷二林西一斷續。　行々識到小柴扉。
無難之由申レ之。

右　　沙彌宗伊

山里はをのづからなる石の橋松の柱も苔そかゝれる
ことなる難なし。

五十二番

左　　藏人神祇少副卜部兼致

梯棧多書二住二山中一。　苔長二石梯一無二路通一。
啼鳥一聲人不レ到。　盡係日夜寒二松風一。

尤宜。

右　　按察使親長

捨はつる身をなく山のかけ橋はうき世に渡る道を殘すな
よろしきよしを申。

五十三番

左　　宗山

重山複水兩三家。　風送二樵歌一路更賒。
數尺高梯何所レ似。　長虹影落夕陽斜。
尤宜之由申レ之。

右　　前大僧正增運

山里になれて通ふもあやうしや水のこゑふむ谷の梯
水のこゑふむなどめづらかに侍り。

五十四番

左　　權大納言教秀

山嶺民屋與レ雲齊。　突兀高哉百尺梯。
翠代徑レ貧無二樵士一。　採レ春賢客屢攀躋。
無難之由申レ之。

右　　散位源尚氏

明わたる松のとほそは雨すぎて雲こそかゝれみねの梯
ことなる難なし。

五十五番

左　　同山

小齋蹊曲繞二翠微一。　危梯高處踏二莓蘚一。
料知樵客攀二雲去一。　上有二梅花一半出レ扉。
申二宜之由一。

右　　天台座主尊應

我庵はあまたゝ雲を袖にかけ鳥の[illegible]ふむ峯のかけはし

[illegible]には侍れとも。第三句。第五句懸字。梯字。いかゝ。

五十六番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　左近大将冬良

路入二険隈一歩々迷。　樵歌声遠夕陽西。
山前山后蹤二梯上一。　誰伴二白雲一安二舊栖一。

無二觧之由申レ之。

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　権大納言義尚

山深みわけ入ひとの便さへなをあと絶る谷のかけはし

句のつゝきなといひしりて宜侍り。

五十七番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　権中納言廣光

巖際松深日易レ曛。　踏レ之幽徑稍レ深分。
行人斜有二過梯影一。　若是非レ衣定白雲。

三四句不レ穏。

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　左近少将藤原雅俊

やま深く我住まゝの通路にわたすも細きたにの梯

大かたよろしきにや。

五十八番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　左大臣

窮[illegible]層[illegible]淺烟一。　青松夾レ路遠相連。
高歌一曲隔[illegible]。　家在二石梯流水邊一。

無二[illegible]一之由申之。

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　女房

谷かけの庵の路はたえにしを誰かよふらんみねの掛はし

平頭之病いかゝ。

五十九番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　権大納言高清

棧路猶高管路斜。　千山深處有二人家一。
夢魂疑入二剣門一去。　月晴青螺一抹霞。

尤宜之由申之。

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　権中納言永継

山ふかみとひくる人の音はせて松風わたるみねのかけはし

ことによろしくきこえ侍り。

六十番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　従一位通秀

茅屋蕭條一徑微。　古梯幾尺向二柴扉一。
蒼苔路嶮無二人過一。　只看斜陽樵士帰。

雖レ宜人與二樵士一不レ穏。

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　沙彌宗世

山里はいたゝの橋のけたよりも細きをたのむそはのかけはし

めつらしく殊勝に侍り。

題

雪中鶯　　江畔柳　　山家梯

作者

左方

関白近衛[illegible]家公

左大臣西園寺實遠公

内大臣[illegible]寺[illegible]公

同山[illegible]

宗山

和歌部八十一　物合

寛平菊合

題　菊

左方古手の菊は。殿上童に立作をて女につくりて。花におもてをかさゝせてもたせたり。いま九本をはすはまをつくりてそしたる。そのすはまのさまは。思ひやるへし。面白き所の名をつけつゝ。きくにはゆひつけたり。

古手　　山城皆瀬菊

うちつけに皆瀬は匂まさされるはおる人からか花のかけかも

二番　　嵯峨大澤池菊此歌よりはすにま

一もとゝおもひし菊を大澤のいけのそこにもたれかうへけむ

三番　　紫野菊

名にしおへは花さへにほふ紫の一もときくに置るはつ霜

四番　　大井戸瀬菊

瀧つせはたゝけふはかり音なせそをく人もなき思ひもそます

五番　　攝津國田蓑嶋菊

たみのをゝいまはもとめし立かへり花の雫にぬれむと思へは

六番　　奈良棹河菊

千鳥なくさほの河邊をとめくれは水底よりそさける花かな

七番　　和泉吹居菊

けふ〳〵と霜をきまさる冬はたゝ花うつろふと恨みにゆかん

八番　　紀伊國吹上濱菊

秋かせのふきあけにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

九番　　伊勢國網代濱菊

濱にさくあしろのをきく應かひにたまとそとらんなみの下草

十番　　逢坂關菊

此花にはなつきぬらし關かはのたえすもみよとおれる菊の葉

右方。これも殿上童ちこ藤原重時。あはこ守ひろしけかむすこかみて。きくともおほすへきすはまを。いとおほきにつくりて。ひとつにうへたれは。もていつるにところせければ。をしあはせては。ひとつになる(す)へく(こ)かまへてわりて和をつけて。ひとたひにをしあはせて。いたさんとかまへたるを。左方の一もとつゝ出すにおとろきて。たひたひにいたしければ。あはせはてたれは。いとおもしろき所ひとつなれと。あはするほとはわれて。いとかたはなり。

古手歌

山ふかみいりにしみをそいたつらにきくの匂と色つきにける

つむからに靦子の中もおはれすときく谷水そひにてなかせり

今はとてくるまかけてしにはなれは匂ふ草葉もおひ茂りけり

皇のよろつ代まてしきをりとはたまひしたねをうへしきく也
菊の水鶴をの〻すあらませはさともあらさすけふあらましや
かくはかり雲の上高くかけゝれは翔る鳥〻にあらしとそ思ふ
ぬれてほす山路のきくの露のまにいつか千年を我はへにけん
秋はてゝ冬はとなりに成ぬとてけかぬは花をにほひくはふる
萬代をきくのたねとやまきそめて花みることに祈りきにけん
花みつゝ人待ときは白たへのそてかとのみそあやまたれける

右寛平菊合以甲斐權守季信藏本書寫以百花亭宗円屋代弘
賢藏本共合畢

上東門院菊合和歌

一番　左　伊勢大輔
長きよのためしにうふる八重の花行すゑとをく君のみそ見む
右　伊與中納言
紫の匂ひことなる八重の花はつしもよりやわきてをくらむ

二番　左　大輔
めもかれすみつゝくらさんしら菊の花より後の花しなけれは
右　弁乳母
うすくこくうつろふ色はをく霜にみなしら菊とみえわたる哉

三番　左　中納言内侍
ひころへてうつろひまさる菊の花幾夜の霜をふるにか有らん
右
もろ人の心を花になす物はうつろふきくのさかりなりけり

四番　左　小弁
さく花のたくひ有とそ思ひける色々にほふきくのまかきを
右　五節
千世ふへき君かまかきの菊みてそ花の中にもひさしかりける

五番　左　中納言内侍
みるまゝに色のまさるはきくの花ちよまてさけと霜そ置らし
右　少納言内侍
朝霜におきつゝみれは菊のはなよのま〳〵ににほひこそませ

六番　左

月影のてりそふ菊はうつろへる上にもしものをくかとそ見る

右

あかすみるかひも有かななかきよのためしにさける白菊の花

七番　左　　みの弁

たちならふ色なき物はむらさきにうつろふ菊の花にそ有ける

右

月影に霜をきまかふしら菊のかをたつねすはいかておらまし

八番　左　　大輔

月かけにむらさきふかき菊の上はいく霜をきてそめし匂ひそ

右　　弁乳母

菊の花うつろふ色をみてのみそ思ふことなき身とはなりぬる

九番　左　　小弁

よな〳〵の霜に色ます菊のはなけふのためとや思ひをきけん

右

月かけの風に亂るゝむらきくはなひく方にそ色をかへける

十番　左

こむらさきさしは榮たる菊の花うつろふ色とたれかみるらん

右

にほふ色のこなたは深き菊のはなまさるかたにや霜も置らん

右以木村孔恭藏本書寫畢

朱雀院女郎花合

亭子院の御門おりゐさせ給ふて。またのとし。きさきとみかとの。せさせ給ふをみなへし合なり。

一番　左

草かれの秋過ぬへきをみなへし匂ゆへにやまつみえぬらん

右

あらかねの土の下にて秋まちてけふのうらてにあふ女郎花

二番　左

秋のゝに女郎花みんとさしはへてぬれにし袖や花とみゆらん

右（古左大臣）

をみなへし秋のゝ風にうちなひきこゝろ一つを誰によすらん

三番　左

秋ことにさきわくれとも女郎花けふまつ程の名に社有けれ

右

さやかにもけさはみえすやをみなへし霧の籬にたち隠れつゝ

四番　左

をみなへしたてるの里をうち過てうらみん露にぬれや渡らん

右

白露のをけるあしたのをみなへし花にも葉にも玉そかゝれる

五番　左

秋風のふきそめしよりをみなへし色ふかくのみ見ゆる野へ哉

右

かくおらん秋にしあはゝをみなへし移ろふ色は忘れやはせぬ

六番　左

長きよをたれたのみけん女郎花人まつむしの枝ことになく

右

（[illegible]）人のみむことやくるしき女郎花秋霧にのみたちかくるらむ

七番　左

とりてみははかなからんやをみなへし袖につゝめる白露の玉

右

（[illegible]）女郎花ふき過てくる秋風はめにはみえねとかこそしるけれ

八番　左

久かたの月人おとこをみなへしこの秋はかりうつろふなゆめ

右

（後撰秋中よみ人しらず）秋の野の露にをかるゝをみなへしはらふ人なみぬれや渡らん（つゝやよる）

九番　左

仇なれと名に祉たてれをみなへしなと秋のゝに思ひそめけむ

右

をみなへし移ろふ秋の程をなみねさし移しておしむけふかな

十番　左

うつらすは冬ともわかし女郎花ときはの枝にさきかゝらなむ

右

移しうへてけふみるからに女郎花さか野の冬はことし忘れよ

十一番　左

女郎花この秋まてそまたるへき露をもぬきて玉とまとはせ

右

君によりのへをはなれしをみなへしおなし心に秋をとゝめよ

花は右をとり。歌は左かちけり。

右一卷以屋代弘賢藏本書寫畢

内裏歌合

康保三年（[illegible]）八月十五夜大盤所にて前栽合させたまふ

題

歌人

左　左繪所　右作物所　二壺にわきてうへたり

左

君か爲花うへそむとつけねともちよまつ虫の音にそきこゆる

右

心してことしは匂へをみなへしさかぬはなそと人はいへとも

御製

花をのみみるたにあるをのとかなる月さへそへる秋にまる哉

右大將藤原師尹朝臣

――の花も色々つきよとて野へのためしのおかひも有けり

右衛門督藤原朝成朝臣

さきにほふ花のあたりの常よりもさやけかりける秋のよの月

右京大夫源博延朝臣

野も山も心あるらしこよひより松のちとせを君にゆつりて

右近中將源博雅朝臣

いつも〳〵花とはみれと白露のをきてかひあるけふと社みれ

頭中將源延光朝臣

色も香もことよひはまされ秋の花のとけき月のかけにみえつゝ

右中弁源保光朝臣

夜もすから月の光のさやけさにみれともあかぬ花のかけかも

近江介藤原國光朝臣

月影のいたらぬにはも今よひ社さやけかりけれ花のしら露

池水にかけのとかなる花みれはちるまつほとのたのもしき哉

左京大夫藤原兼家朝臣

ちゝの色の花のくさ〳〵月影ににほひそまさんよろつ代の秋

右兵衛督藤原忠尹朝臣

ちゝの秋かはらぬ花の匂ひをは月のひかりによるさへそみる

太宰大貳藤原佐忠朝臣

月かけに残らぬ花の色はみな秋のにはからねへるなるへし

讃岐權介藤原清遠朝臣

女郎花くらふの山のたねなれは人にこえたる色そみえける

左近藏人少將濟時朝臣

年をへて咲けむよりも女郎花けふよりことに匂ひまさなん

右近藏人少將藤原爲光

月影のさやかならすは秋ふかみちくさにゝほふ花を見ましや

東宮學士大江齋光

花も色も秋のよふかき月影に君か千とせをまつむしのこゑ

衛門佐藤原

秋の花かさゝすにほふよろつ代をのとけき月の影にみるかな

大和守藤原安親

うつろはぬさかの色にて女郎花いくらはかりの秋をにほはん

右兵衛佐源時中

女郎花にほへとあたに思はぬにのとけき月の影にかくれむ

散位藤原高遠

万代の秋にとにほふ花の色も心のとかに見ゆる月かな

紀伊守紀文利

花の色もことしはことに匂ひけりのとけき秋の月の影ゆへ

式部丞藤原共政

水の面に月とへすめる秋のよにのとけき花のかけをみるかな

右衛門尉源のふまさ

主殿助藤原爲光

吹風に思ひもよせし花すゝき君になひくとけふよりはしれ

左助藤原永頼

うへてける花の匂ひのかひもあるかさやけき月に下枝みゆれは

藤原ときゝよ

もゝしきに萬の花をうつし植てやちよの秋のためしにそみる

大江通雅

九重に咲みたれたる花みれはちとせの秋は色もかはらし

右近の命婦

九重ににほひそめぬるをみなへし行さきまてもみゆるつき哉

介の命婦

秋の夜の花の色々みゆるかな月のかつらも雲のうへにて

兵庫藏人

野邊よりはいかにか思花の色も月のかつらもにほひくらへて

小武の藏人

秋のよの月のひかりのひとつにて草々にほふ花のおりかな

兵衛の藏人

秋の夜の月と花とをみるほとに鳴そふるかなすゝむしのこゑ

大不の藏人

秋の空すめることよひの月なれは花のひもとくかけも見えけり

衛門の藏人

月影のうすきこきをもてらす夜はいかてか花の色にわかまし

はりまの藏人

秋のよのつねよりあかき月影はのとかに花の色を見よとか

右根合以木村孔恭藏本書寫一校畢

東三條院瞿麥合

七月七日皇太后宮に。なてしこあはせゝさせ給ふ。左頭少輔のないし。やまの井の中將おほま。右頭少將のおもと。四位の少將たちよ。裝束は。左のとうは。くれなゐのあやのひとへかさね。なてしこのうすものゝほそなか。うすものゝちすりのも。あかいろに。ふたあゐのをりものゝからきぬ。いろすりのも。すはまおまへにかきいつる。わらは四人。こきひとへかさねのあこめ。うすものゝふたあゐかさねのかさみ。綾のうへのはかまきたり。みきは。あをいろすはうかさね。方人は。くち葉なとなり。こひ(下闕)左のすはまちい　さきまさゆひて。なてしこふたもとはかりうへたるにゆひつけたる。

なてしこのけふは心を通はしていかにかすらんひこほしの空

時のまにかすと思へと七夕にかつおしまるゝなてしこの花

すはまのつるのくひにゆひつけたる。

かすしらぬまさこをふめるあしたつは齡を君に讓るとそみるりのつほにはなさしたるたいのしきものにあしてにてぬへる。

なてしこの花のかけさす河へには緑の色も見えすそ有ける

おなしすはまのなてしこにつけゝる。

七夕やわきてそむらんなてしこの花のこなたは色のまされる

むしのこにつけたる。

松虫のしきりに聲のきこゆるは千とせかさぬる心なりけり

ほとゝきすたゝ一聲に過ぬれは又まつ人になりぬへきかな

右　　右近中將顯房

うたゝねの夢にやあらん杜鵑またともきかて過ぬなる哉

三番　早苗

左　　藏人修理亮藤原隆資

五月雨に日はくれぬめり里遠み山田の早苗とりもはてぬに

右　　少納言源信房

小乙女の山田のしみにおりたちていそけや早苗むろの早わせ

四番　戀

左　　相模

うらみわひほさぬ袖たにある物を戀に朽なん名こそおしけれ

右　　左近中將源經俊

下もゆるなけきをたにもしらせはやたく火の影の暫し計りに

五番　祝

左　　式部大輔藤原國成朝臣

秋のそらいつる月日のさやかにもよろつ代すめるくもの上哉

右　　右近中將資綱朝臣

春日山枝さしそむる松の葉は君か千とせの數にそありける

此本、曾祖父入道中納言(定家)筆蹟也。可レ謂二證本一而已。

參議兼侍從藤判

此一帖、依レ仰以二古證本一不レ違二一字一書寫畢。

于時延德二年三月十七日

無品勝仁親王

以二右御本一不レ違二一字一書寫焉。

沙門彦胤

(一本)右一帖、或人依二所望一令二書寫一挍合畢。

右中將源博高

右一卷以横田茂語藏本書寫以歷代弘賢所持京極黄門眞跡摸寫本挍合畢

郁芳門院根合

寛治(嘉保)七年五月五日(辛巳)。朝間天晴小雨下。午後頗得レ晴。今日新女院女房之根合也。未刻。左右方人參二集東泉殿一。(左方西御所。右方東屋)。但右方儀式不レ知之。右方念人二位宰相中將(經實)右大弁(通俊。)兩貫首(季仲宗通。)以下來會之後。源大納言(雅實)清書方和歌一書後從二御所一召二大納言一。聞下右中無二清書之人一由上。仍遣二此大納言一也。此間左方人々儀定云。此歌。若有二風聞一者如何。然者講師之間可レ奏二此由一歟。酉時。左方人々。乘レ船進二御前一。是開水之中門道其路也。(船頗輕。幄上葺二菖蒲一。本院侍四人。着二布衣一爲二船差一。其裝束青狩衣紅梅袴。白單衣也。所所講繪。)二位中將着二直衣一乘二此船一。(殿上人皆着二直衣一此中伊與守顯季朝臣。左少弁重資。兵衛佐房遠。衣冠。)吹二雙調一次歌二席田一爲二參音聲一。(笙左近府生時之。拍子下官。頭少將付歌。刑部卿顯仲朝臣今日可レ吹レ笙也。俄稱二所勞由一不二參仕一也。後聞二得右方之女房語一。申二所勞之由一不レ參云々。仍察乘時之一人令レ吹レ笙也。顯仲朝臣所爲奇恠也。)秉燭之程進二前庭一。昇レ從二寢殿東階一。先左方之六位等供レ燭。(公卿之座上下二本。又切燈臺一本立二講師之圓座前一。右方如レ此。右方人未二參進一。前公卿相二分左右一被レ候。左方(內大臣民部卿經。源大納言雅。治部卿俊。左衛門督家。中納言中將忠。右大弁通。新宰相中將仲。)右方(右大臣。判者中宮大夫師。新大納言宗。右衛門督。藤中納言。左大弁匡。三位侍從能。)又左右女房。此前打二出簾前一。于時左方昇二立文臺一。(左少弁重資先取二打敷一。自二簀子一進二御前一敷レ之。六位二人昇二文臺一立レ之。文臺調度之鏡筥也。入レ鏡有レ臺。横鏡牝鉾。)續色紙一

卷ニ銀裏紙|、瑠璃軸|。(書ニ和歌|。菖蒲左右各入ニ此筥|、以ニ菖蒲|爲ニ打敷|。金銀蒔繪等蘭押用レ之。)次方殿上人進ニ簀子|候。二位宰相中將持レ筥ニ右方公卿座|。次右方人參進。先右中弁師頼朝臣、右少將俊忠朝臣二人取ニ紙燭|前行、童女二人取ニ文臺之根|與ニ筥|。進ニ御前|置レ之。(文臺是枇杷根之體也、色紙形書ニ和歌|、有ニ懸物|一、納ニ菖蒲根|也。地敷爲ニ地敷|、是又金銀也。以ニ葉玉|懸ニ枇杷上|。)童女并方殿上人等候ニ簀子敷|。次殿下召ニ講讀師等|之間、(…)左方之念人中納言中將進令レ奏給云。先日皆寫登ニ…之風流|。仰、此事皆以可ニ停止|之由被ニ仰下|了。今右方已有ニ…|者、此事不レ可レ有者。再三被レ奏。時剋推遷之後有レ仰。(…)人童女。左方頗有ニ暁氣|。次左右講讀師進ニ御前|。左讀師貝弁李仲朝臣、講師宗忠。右讀師顯頼朝臣。講師左少將能俊朝臣。午時漸移、上ニ中央之間御簾|、上卓御覧、殿下自ニ御簾中|出、令レ奏ニ同間之西柱邊|給。巳人ニ圖與|也。次合レ根。頭弁取ニ出根|、左少將忠教進ニ御前|、立ニ講師之前|。左方根一丈六尺許。根之上有ニ瑞玉之花枝|。次右方師頼朝臣、與ニ能俊朝臣|、從ニ御前|(八九尺許。無ニ葉玉|、爲レ負。)次右方ニ依ニ負方|、又進ニ根六七尺許|(根上有ニ菖蒲葉|)次左方根一丈三四尺許。(重左勝。)次又右進ニ三尺根|(于時中納言中將令レ奏給云、作レ銀大盃難也。不レ可レ合。還レ結句、仰、右方進ニ銀根|、有レ論無ニ勝負|。三番根依ニ永承六年殿上之根合例|、左方合ニ根之人|、講讀師之外。左少將忠教勤レ之。而右方云合ニ和歌|、先左方讀而後レ不レ然如何。若失歟。和歌之昔左講師讀上之、先讀ニ題目|(あやめ。)不レ讀ニ一番云事|。)次歌。

一番

左　　左少將忠教

なかきねそ海にみゆるあやめ草ひくへき末を千とせと思へは

右(予題)　　齋院女房(云ニ攝津君|)

たつのみるいはかきぬまのあやめ草ちよまてひかむ君か例に

判者令レ奏給云。左右共比頗興爲レ持。

左(先講)　　二位宰相中將經貞

あやめ草ひくてもたゆく長きねのいかて淺香の沼におひけん

右　　實　　持

君か代の長き例にひけとてやよとのあやめのねさしそめけん

左方右大弁被レ申云。右之歌偏ニあやめと讀ては無ニ草字|。是あやめは。本蛇之名也。此草依レ似ニ彼躰|あやめ草と云なり。不レ具レ草ノ之時は偏蛇也、如何。右方判者被レ申云。以ニ菖蒲|あやめと云。古來常事也。尤今始て不レ可レ有ニ此難|者。而左方人々私相云。判者已有レ心ニ右方|可レ陳。左右若有レ悔已爲レ持。左方歌。事外すくれたり。爲ニ大慶|。凡一題二首之時頗歌也。詞中相替を以撰入爲レ興。而右方之歌共難之詞也。已無レ興。判者被レ申云。左方は。歌躰頗有ニ一興|。右方は事已寄(ヨセアルニ)程爲レ持。有ニ何難|哉。

二番 郭公(左先讀ニ題并歌|)

左　　堀河殿

二聲となとかきなかぬ杜鵑さこそみしかき夏のよならめ

右　　右兵衛督雅俊

なかすとてうちもふされすほとゝきす聲待人もねかた□

左方之歌詞興是。爲レ勝。

左　　大貳

一聲をまたれ〳〵てほとゝきすいくかといふに今夜なくらん

右(先讀ニ郭公|負也)　　左大弁匡房

夕つく日いれはをくらの山のはにをちかへりなく郭公かな

左方申云。右方之歌詞未二聞知一已知二梵語一無二道事一者。何
知二其儀一哉。有レ智判者爲レ持。左方之人々甚有二腹立色一。一
定勝歌。推被レ爲レ持事之故也。

三番　五月雨

左　右大弁通俊

もしほやくすまの浦人うちたえていとひやすらん五月雨の空

右先讀二題歌一　小別當右大臣殿（之歌）

五月雨にかさとり山はこえしかしはな色衣かへりもはする

判者令レ奏給云。右方之歌頗有レ情。爲レ勝。

左先歌　二位宰相中將

五月雨のひましなければそほたれて山田は水に任せてそみる

右　典侍

當よりそはれてぬとしの五月雨にあまのかはらも水や増れる

判者云。左方そほたれてと云詞。無二指事一。右方河原水出。
已是似二洪水一さみたれの歌不レ讀二洪水一。其詞意停滯。爲
持。

四番　祝

左一宮女房一　宰相典侍内大臣家

住吉の松のひさしきひさしくと神にそいのる君か御代をは

右　小別當右大臣家

萬代はまかせたるへし石清水なかきなかれを君によそへて

判者云。左右其詞同爲レ持。

左　頭中將

行末も久しきことゝうたふなしには君かよはひの數そかそへむ

右　安藝

よろつ代を君にゆつらむためとてや昔むす岩に松もおひけん

是又爲レ持。

五番　戀

左先讀二題歌一　伊豫守顯季

さりともと思ふはかりやわか戀の命をかくるたのみなるらん

右　小別當左兵衞督殿

思ひ餘りさてもやしはし慰むと只なをさりに頼めやはせぬ

左方申云。右方之歌詞中に無二戀字一。已思之歌也。如何。右方
申云。昔天德之歌合之中に。あふことのたえてしなくは中
中に人をも身をもうらみさらまし者。此歌無二戀字一。左方
申云。然者此證歌彼時負也。右方申云。尤不レ然。勝之歌也。
左大弁頗有レ論。判者云。件歌勝負不二糟覺一。只今不レ可レ披二
見彼歌合一者。左方重申云。承曆殿上之歌合。左之戀歌云。
わたつみにみるめもとむるあまたにもちひろのそこにい
らぬものかは。此歌依已爲レ負。彼時判者已今日之判者也。
如何。而推爲レ持。左方大憂也。

左先讀　大貳

衣手はなみたにぬれぬくれなゐのやしほは戀の染る也けり

右　内周防掌侍

（金）戀わひてなかむる空のうき雲や我したもえの煙りなる覽

未レ判之前。左右之念人起レ座。判者被レ奏云。前例此番皆無二
勝負一不レ被レ判之後聞。右相府語レ人云。左右人之人中子強
已相分。今日好爲レ持。尤自平二小案一也。仍頗判之間無レ興。
左勝一首。右勝一首。持七首。未レ判一首。但左方根も勝也。
子時許事了。人々退出。事了後たつとて。

堀河殿

備中守仲實朝臣女子根合歌 康和二年五月五日

題

菖蒲根・　艾　棟　盧橘　石竹

歌人

左　　右

周防掌侍　　俊頼朝臣

上總君　　仲實朝臣

大宮甲斐君　　顯仲朝臣

藤波　　隆源阿闍梨

判者

一番　菖蒲根

左持　　周防掌侍

あやめ草なかき例に引はかりまたかゝるねはあらしとそ思ふ

右　　俊頼朝臣

みかきもる衛士のたまえにおり立て引はあやめのねも遙なり

左右方讀揚赤講已畢。座客相語云。和歌合事評二定優劣一可レ任二俊読一也。而依レ無二判者一雖レ難レ定二我非一不レ弁二歌趣一者雖レ難レ定二我是一任二参差一論二左右一拾二得失一難レ避二嘲哢之所一レ達見識一略言耳。唯須思二當座之興一偏存二後宴之興一矣。

あやめの歌は。いつれも引ところありて。おかしうよまれたり。左は。歌からあしくもなけれと。こしの文字うかれたるやうになんきこゆる。右歌にまさるなんとは見えす。然はあれとも。これ文字つゝきいかにや。いはまほしきとそ方方申。又すへらきにそへ奉れる歌は。まけぬ事となんいひならはしたれとも。内裏の事にあらす。よもきの門させる屋なれは。さまて。さるへきにもあらす。おほよそ。左も右も見所あるやうになん。人々申すめれは。持となとや申へからん。

二番　艾

左持　　上總君

あたにをく蓬か露もけふにあへは薬の玉とぬきそとめける

右　　實盛

万代をこめたるそのゝよもきをそ人のおいせぬ薬にはひく

左右ともに歌とおほゆ。右方人云。左の歌に。露をさらへたる(ママ)して。よもきの心なんすくなきといふ。右の歌に。よろつ代をこめたるそのとよめる。さる事の有にや覺束なし。老せぬくすりにはよもきをやはひくらむと。左人論す。これもかれも。艾の心なんたしかならぬ。つこに聞は。昔人今日のあかつきに。鳥のこゑにともなひて。そのゝよもきの人のかたにゝたるをとりて。とにあてゝ。おにをさくる薬とすといへり。それをまなひて。いまにつたへたり。しかあるを。左の歌にとりて。おかしうふるまはせたれと。まことすくなし。右歌は。然よめるかと覺しけれと。すゑかなはねは。ひとしかるへくとなん見給ふめる。

三番　棟

左　　大宮甲斐君

尋ぬとてしるもしらぬもけふこれは戀しき人にあふち成けり

右　　　　　　藤原師園?

左月をこけふにあふちの花なれは年のをたまず玉にしけぬく

右歌。まさる心をくれたり。右の歌からも。きよけなれはまさる。

四番　盧橘

左　　　　　　葉　波

匂ひつる花橘のゆかりには風のけしきもなつかしき哉

右　　　　　　仲實朝臣

五月やみそこともしらす吹風に花たちはなのにほふなるかな

左歌の。五文字のはてなん。すきぬることのやうなる。まま匂ひつるといひて。風のけしきとすゑによまれたるは。おなし風の心なんすると右人云。右の歌に。風なんあまたかたより吹くるいかゝと。左人論する方さたまりて。吹風をたに。定めなき風〔ノ〕歌すは花すゝきと。伊衛一條大納言歌合によめり。これは五月やみの空。そこともしらぬに。よりて吹くる風に。はなたちはなの匂ふか。難あるましと論する爭論有。興制林花鮮なり。たかひに論する事みないはれなきにあらす。但し左の歌。あたらしきけそをくれたれとも。いとおかし。右歌は。もしつゝきなとや。いますこしきよけならんとそ見給ふめる。

五番　石竹

左　　　　　　上總君

なへてさく色とやはみる我宿のからなてしこの花の匂ひは

右　　　　　　顯仲朝臣

手もたゆく我しめゆひし撫子の花には露もよきてをかなん

なてしこの露は。たゝ便なる物にこそいひならはしたるを。露なきそとよまれたるなん。あなたふせいに思ひ給ふ。左の歌の。なへてといふ文字は。むかし歌合にゆるさぬ事なれと。歌おもてあしからねは。すこしまさるへきにこそ。

右根合以木村孔恭藏本書寫一挍畢

圓融院扇合

宮の御方に。うへおはしまして。らこ（[illegible]）とらせ給ひて。かたせ給へる。かちわさ。六月十六日にうへせさせ給ふ。梅つほにわたらせ給へるに。殿上人中少將をはしめて。とりつゝきまいる。南は。御すたれより外にあけて。袖くちともとりいる。したんのをきくちしけるらてんの御筥に。緋扇十枚入させ給ひて。からのうすものゝすはこのすそこのさい。てにつゝみて。おなし紫（むらこイ）のくみして。白かねを精穗をみなへしの枝に造りて付させ給へり。白かねこかねのこものしたに。からの羅をある色に染て。ひとへにてはれるも。ぬへるも。あしてにて。

作か代をまつふく風にたく〳〵てそかへす千年のためし也けり（る歟）

しろかねをは。まつ萩のかたに色とりて。からの羅を淺みとりにしてはれり。それにあしてにてぬへるなんめりき。

澤に住たつの羽かせに涼しきは君か千とせをあふき成へし

したのほねに。あか色のをり物に。二藍にかさねて。はれるにぬへる。

秋來ぬと風の音にもあふきつゝそらを秋にしらんとそ思ふ

あを色にすはうかさねて。織ものにあしてに書ける。

めつらしき聲ならなくに時鳥こゝらの年をあかすも有哉

あか色の扇に。すみよしのかたを繪にかきて。あしてにかける。

住吉の松のかせをしこあたれはあふきの風のいつかたえせん

七月七日。宮うへの御つほねにのほらせ給ひて。御まけわさせさせ給。もみとも藤つほより殿上人あまたして。うへの大盤所にまいる。沈の御箱とれる四位の少將時なか。中納言正清白かねのひけこに。しろかねのなつめいれて。をみなへしの枝にかねをつくりてつけたり。次にたゝこものゝえた。いとおかしくて。手ことにとりてまいる。ひはりこさま〳〵にまきゑしたるふたに。かきたるあしての歌。

天河岩こすなみのたちゐして秋のなぬかのけふをしそ思ふ

今かたつかた。

そよみなく君をはみれと七夕のけふ待えたる心ちこそすれ

をきくちしたる沈の筥に。かたのこものにしきをりたてにして。ひあふき十枚。いとめつらかなるさまして入たり。白かねの扇のさまなとになしてしたるにも。（たゝイ）あふきのさまは。こよなくおかし。このおなしむらこのくみしてゆひて。白かねの五葉につけたり。その枝に人はたのやうにて。をしつけたる歌ませ（けイ）させ給ひたる比。夏とおほしくて。

住の江に浪のうつまてとおもひしは松吹かせのなこりなり鬼

はこのこゝろ葉にあしてうた。

中　務

天河あふきの風に霧はれて空すみわたるかさゝきのはし

又白かねをたいにして。すき筥にむすひて。二藍のうすものゝしきものして。かはほり十入たり。さまともいとおかし。ひとへは。金のほねに。くちはの本。ひとかさねは。くさのかたをぬひたり。それをまたかなたにかける。

右大將（六人道綱）

何なれやあふきのかせもわきもす衣の袖に秋しきぬれは

沈のほねにくさはのをり物を葉て。それに例の扇の歌か

くやうに。かなにをりつけたり。そのうた。

天津風あふくともぬ錦たつなこはたなはたのをれる錦そ

藤原中納言爲光

又白かねを沈のかたに色とりて。二藍のすそこなるうす

ものゝかさねて。まなかなにて織つけたり。いとゆふ(うへ)にかさねたり。

天河かはへ遠しとたなはたのあふきの風をなをやかさまし

また白かねの筒のこゝろ葉に。白き糸してあしてにぬいたる。

雲井なるたつとみしかとかさゝきのはしのたよりは行通ひ覧

能宣

草も木も思ふことあらし万代は君かあふきの風になひきて

そのはこのつゝみものは。ふたあゐのすそこのうすものの。おなしむらこのくみしてゆひて。しろかねを。はきの花のえたにつくりてつけたり。かくて日のおましにて。かんたちめあまたまいりたまひて。夜ひとよ御あそひあり。

彈正宮尹[illegible]

兵衛督[illegible]

博雅朝臣よこふえ

源宰相忠清[illegible]

四位少将時中

すへていとおかし。下のかたにめしうと。樂所の人さふらひて。いとおもしろし。夜うちふけ行ほと。左大弁保光朝臣かはらけとりて。

年ことにいのる中にもたなはたのことよひはことに心あらなん

あふくまにいとまもあらし七夕の萬代をさへいのらせやせん

あまたゝひあひわたりしを鵲の橋けこよひそのとけかりける

内大臣[illegible]

珍らしとむへもいひけり七夕のこよひにゝたる時はありきや

中納言爲光朝臣

けふをまつ七夕つめに身をなして雲の上をも祈るへらなる

源宰相忠清朝臣

まれにあふ心のうちはたなはたのけふより後ゝ袖そ露けき

左兵衛督濟時朝臣

なと有程に。曉かたに成ぬ。御あそひはてゝ。かんたちめ殿上人なとに物かつけさせ給ふ。左兵衛督石川をうたひて。箏をいとおかしくひき。時なかをたてゝ舞す。いりあやに。やかてかつけものとりてかつく。ふたまのみすこしあけて。みやの人々袖くちさま〳〵にてかつく。

右一巻以屋代弘賢藏本書寫以横田茂語所持本校合畢

堀河院艶書合

内にて殿上の人々歌よむときこゆるに宮つかへ人のもとにけさうのうたよみてやれとおほせことにて

大納言公實

思ひあまりいかてもらさむおく山のいはかきこむる谷の下水

返し　周防内侍

いかなれは音にのみきく山河のあさきにしもは心よすらん

おなし大納言くれなゐのうすやうにてたてふみに

年ふともいはてくちぬる埋木のしたの心はふりぬ戀かな

返し　筑前

ふかゝらし水無瀬の河のむもれ木は下の戀路に年ふりぬ共

源中納言國信

逢ことやこよひ〳〵とおもふまにそらわすれして月日へに兔

返し　院大進

戀瀧をとなるまても戀すしてまたきに床を忘るへしやは

左大辨

流れ出るしつくに袖は朽はてゝをさふる方もなきそ悲しき

返し　女御殿ゆり花

をく網のうけもひかれぬ物ゆへに何かはあまの袖のくつらむ

宰相中將忠教

思ひわひ戀路にまよふしるへには涙はかりそさきに立ける

返しくれなゐの七重かさねに下繪にあしてかきてかねのきゝ(ち歟)やらのえたにつけたり。

前齋院紀伊

戀路をはふみたに見しと思ふ身になにかはかゝる涙成らん

また　おなし宰相

つらさには思ひたえなんとおもへともかなはぬものは涙成兔

かへし　殿肥後

うけひかぬ海士の小舟のつなて繩たゆとて何かくるしかる覧

刑部卿俊實

なこの海の浦へにおふる濱つゝらたえま苦しき物をこそ思へ

返し　四條宮甲斐

濱つゝらたえま〳〵を歎かせてくるしと思ふも我こゝろそは

左京大夫俊頼

かすならて世に住の江のみをつくしいつを待ともなき身成兔

かへし　中宮上總

流れても逢瀬はたえし住の江の身を盡してもくちはてゝなん

俊忠中將

人しれぬ思ひありそのはま風に波のよるこそいはまほしけれ

返し　一宮紀伊

音にきくたかしの濱のあた浪はかけしや袖のぬれもこそすれ

四位中將師時

忍ふれと物思ふ人はうき雲の空に戀する名をのみそたつ

かへし　女院安藝君

こひすともいかてか空になはたてし忍ふる程は袖につゝまて

後五月二日。おもひ〳〵にみなうすやうにした繪して

そ御かへしはめてたくかさりたりける。

又同し月の七日にありつる女房のもとに戀の歌よみて

まいらすへきよし おほせられけれは。七日ときこえて

まいらす。

筑　前

郭公まつにつけてもさゝかにのいつれの世にかしるきとそ思

かへし　大納言

しるしありてこぬよもあれや郭公なか〳〵かけしくもの振舞

中宮上総

つらしともいさやいかゝは石清水あふせまたきにたゆる心は

返し　肥後君

世々ふとも絶しとそ思ふ神かきのいはれをくゝる水の心は

中納言

思ひやれとはて程ふる五月雨にひとりやともる袖のしつくを

返し　女御殿ゆり花

よとゝもにさてのみこそはすくしゝか思ひしりぬや袖の雫を（にイ）

きてなれしたもとは人にみせてましつらき涙の色のかはらは

かへし　左兵衛佐

忍ふ草しのふる程のよかれにはなにゝ心も袖もぬるらむ

周防内侍

（雲葉）人しれぬ袖そ露けきあふことは（の集）かれのみ増る山のした草〔うけ蕊〕

かへし　宰相中将

おく山のしたかけ草はかれやする軒はにのみは（そイ）をのれ成つゝ

一宮紀伊

恨かねさよの衣を人しれすおもひかへせとなくさまぬかな

かへし　美作守

ひたすらにさ夜の衣にことよせてうらなき人を恨さらなむ

前斎院一の君

たまさかに相坂山のまくすはらまたうらわかし恨はてしな

返し　刑部卿

夏山の下はふくすのうらわかみまたきに露の心をくらむ

四條宮甲斐

うきなから人をつらしとしりぬれはことはりなくも落る涙か

かへし　左京権大夫

かりそめのたえまをさへや恨むへきことはりなきは涙成けり

小大進

つらきをは思ひいれしと思へとも身をしる雨のところせき哉

返し　権中納言俊忠

思はすにふりそふ雨のなけきをはみ笠の山をさしてちかはむ

紀の君

逢瀬をは流れてとこそたのめしかいかにとたにも音なしの瀧

返し　権少将師時

すみ侘る名を流さしとつゝむまにしはしよとむそ音なしの瀧

七日権少将かからしめてたかりけりとそ。

殿上の人々あらましことよみける

くにさね

思ひ侘しなむとなしになけく覚後の世にしもあはし物ゆへ

とおもひ給ふて。今まてなからへ給ふるも。いとわひし
や。

たゝのり

人しれす落る涙にしほれつゝ戀にそ袖のかはかさりける

いはてはえこそ。

刑部卿

さらぬたに涙のかゝるわか袖をかくなぬらしそ道芝のつゆ

物いとをしと思はぬ心あり。はかなくて。つねよりも。立か

へるそらなくこそ。

（[illegible]）[illegible]江のかりそめにたに（[illegible]）まこも草ゆふてもあまる蕪もする哉　としたゝ

いは（そイ）うつなみの。

思な[illegible]しほたれぬれはあまの住あしの丸やのけふりとそなる　もろとき

おほろけにやは。

人しれぬ戀は年月へぬれとも打出るけふをはしめにやする　ためかた

いかにさは。

玉たれのこすのまとをく見てしより借に心をかけぬ日そなき　藏人いへとき

心こそ思へはつらき物なれや心とものをおもふとおもへは　藏人まさかぬ

いまはわか身そうらめしく。

正子内親王繪合 永承五年四月廿六日

やよひのとうかあまりのゆふくれに。つきかけみすにうつるをりしも。ひとあまたさふらひて。ものかたりのついてに。たれとはなくいひあはせし。はるのひのつれ〳〵にくらすよりは。つねならぬいとみことを。おまへにこらむせさせはや。むかしよりきこゆる花あはせなとは。ちりてふるきねにかへりぬれは。にほひこひしく。草あはせとかは。たつねてもとのところにかへしやれは。なこりうるさし。さておくらか歌林とかいふなるより。古萬葉集まては。こゝろもおよはす。古今後撰こそ。あをやきのいとくりかへしみれともあかす。もみちのにしき。そめいたすこゝろもふかきいろなれとて。左右に（を）さためつ（て繪歟）うたゑにかくは。よのつねのことなれは。たいよみひとをかくへきなり。ことはをとれは。うたはかきにくゝ。うたをえるには。ことはあらはれす。かみのこゝろにはめてらるとも。人のそしりをはのかれかたし。いにしへのうたのふかきにそへても。いまのこと葉のあさくともあらむは。（さかましらひたらん者（く已下））めつらしくやとて。うたみつをそへたり。（つらねけり者（そ已下））鶴。うの花。月。ほとゝきす。こそあるへきほとなれと。おほとのゝうたあはせのたいなれは。つるにかへたるなり。女房廿人を。十人つゝとりわけて。かく人を（各繪かく人を者（かく已下））つてつてにたつぬるほとに。うつきのなかはにもなりぬれは。あふひのさかりにひきかゝりて。もろ人いとまなき廿六日に。そらのけしきくもりなきに。寢殿のひむかしおもてのもやひさしを。かむたちめのおほむさにしたり。源大納言（[illegible]）殿。小野宮の

中納言(□□)左衛門督(□□)。新中納言(□□)中宮權大夫(□□)。右大弁(□□)左大弁(□□)三位侍從(□□)殿上人は。くらへむまつさためしける日なれは。そのところより右のとうの中將(公□)。つき／＼八九人許ひきつれて。まいりたまへり。みすのうちには。きたみなみゐわきて。左なてしこかさね。右ふちかさね(のきぬをなんき侍る歟)。左かねのすきはこにこゝろはして。かねのうの花かさねのかみしきて。すひふくろ(□□)にいろ／＼のたまを。むらこにつらぬきて。くゝりにしたり。古今。ゑ七帖。あたらしきうたゑ。かねのさうし一帖いれたり。へうしさま／＼にかさりたり。うちしきなてしこのふせむれうに。その花をぬひたり。かすさしかねのすはまに。さしてのいそをつくりて。いはやまに松おほくうゑたるを。かすにははまへにさしうつすへきなり。うちしきふかみとりのふせむれうなり。右かゝみのうみにかねのあみをつかうて。たまのいかりにかねのつなをかけたり。かねのすきはこをうちにおきて。ゑのさうし六帖。あたらしきうたゑのさうし一帖いれたり。へうしさま／＼にかさりたり。うちしきふたあゐのさうか(□□)に。しろき文をぬひたり。かすさしかねのすはまに。かねのつるあまたたてり。ちとせつもれるといふこゝろなり。かすにはつるのうらつたひすへきなり。うちしきふかみとりのさうか(象眼)に。ぬひものしたり。ひもやう／＼くれぬれは。こなたかなたにゐわきたまふ。おほきとのは。つゝませたまふおほむすかたなれと。上らふものしたまふとて。しのひあへさせたまはす。左。うたよむ人四位少將。右。兵衛佐。かた／＼のさうしとりて。よみあはするほとに。ひたりのかたより頭弁。人々七八人くしてまいりたまへり。かたかたうるわしくなりて。一二番かむたちめのおほむなかに。さためもやりたまはぬに。殿上人いとみことさためそむるひなるをかちまけは。いみあることになむと。はへりしかは。けにこのゑともゝ。おほろけにては。見さためかたきことのさまなれはとて。たゝこなたかなたにみたまふ。なか／＼かちまけあらむよりは。みたれをかしくそ。(ておもしろかりけり)者間(を已下)みはてたまふて。

鶴

左。をのゝみやの中納言。あたらしきうたよみたまふ。

萬代のかけをならへて鶴のすむふちえの浦は松そこたかき

こゝろはへあり。すかたかきりをかしきはしるく。

右。新中納言よみたまふ。

葉かへせぬ松のねくらにむれゐつゝ千年を君にみなゆつる哉

つゝきなとはおかしときこゆるに。ひたりのひと／＼はかへとあるをなむ。いひなしたまふやうありける。

うの花

左

俊者(□□)

みわたせはなみのしからみかけてけりうの花さける玉河の里

したゝかにきこゆれと。

右

(同伊勢大輔)

うの花のさける盛はしらなみのたつたの河のゐせきとそみる

すゑいまめかしくこゝろありなとはへるは。ゆかぬことにそ。

つき。

左

やとことにかはらぬものは山のはの月をなかむる心なりけり

ゑのさまをかしくおもひあるやうなりなと。ほめたまふ

に。

右

山のはのかゝらましかは池水にいれとも月はかくれさりき

なへてならすや。つゝみもならほめたまふ。とうの弁みまさかのかみなと。あまりなるまてきこゆ。かくてわたとのにうつりたまふまゝに。はやくよりふりにけるやりみつなれと。こよひあたらしくたていしなとをほめたまふ。かわらけあまたたひ(數度)になりて。おほむことなとは。はゝからせたまへは。大納言との。ふちせとなくこゑとはへりしに。あまたらちくはへたま(給)しも。おもひふかうきこえはへりしほとに。ひきてものゝむまにや。ともしひのかけにみゆるけ。ひさかたのつきけならねと。めとまりはへりしか。かゝることはかたはらいたけれと。ゆくすゑもときはのまつのことのはをかきとゝめすは。ちよへむつるのふるきあと。たつねまほしきこともやあるとてなむ。

右正子内親王繪合以世尊寺行經朝臣眞跡草本書寫假名違等雖不審多不敢私改以古今著聞集與合畢

小野宮右衛門督家歌合 精本載在續篇十五輯上故從省略

同家歌合

左　　なそなのりひとたのめなるもの

(異代イ)おほよそにかたらはむとはたのめつゝ山時鳥なつくよもなし(くよしイ)

右　　なそをりものゝさま〳〵

をりものゝあやめもしらすあやめ草さ月の浪や立てきすらん

左　　なそ都のほかに水くむところ

すへらきの都の月は見なれにきあかたの井戸に水や汲らむ

右　　なそうれしき物のくるしき

あひみるはうれしきものと思へとも人めの關は誰かもるへき

左　　なそあけてかひなきもの

いはと山あけてみれともかひもなし有明の月はなのみ也けり

右　　なそふかきはあさき。あさきはふかきもの

孰れともわきそかねつるあすからは深さ淺さの定めなければ

群書類従巻第二百二十七

和歌部八十二

顕昭陳状

春上

元日宴　　　左　顕昭

むつきたつけふのまとゐや百敷の豊の明の始なるらん

右方申云。むつきたつ。きゝなれすおほゆ。

左方陳云。此五文字。万葉より出たり。

判云。左方むつき立とをけるは。右方殊とかめ可レ申とも覚侍らす。万葉にも誠にむつきたちなとよめるやうに覚侍り。但し万葉集より出たり共。歌合の時は無二左右一證據とすへしとも覚侍らす。彼集は聞にくきことゝも有ぬへし。山田朝臣の鼻のうへをほれとも云。酒のみてゑひなきするにあにしかめやもなとは。とり出かたかるへし。されは優なることをとるへき也とそ故人申侍し。又後撰の時まては歌病をさらす。必しも歌合の時は不レ避例歟。是は此歌の事にしもあらす。凡申置侍る也。又とよのあかり。宣命に豊明(豊)楽とかきたるとは見え侍めり。歌の風体にをきてそ左右侍へき。歌の道風常の習ひは。まとゐと云ては梓弓を引よせ。とよのあかりなとよまん時は。くもりなき世なとそ詠ならひたる。毎事より所なきに侍へし。

顕昭陳申云。芳二万葉集一云。(第五)太宰帥大伴卿家宴梅花歌。

む月たち春のきたらはかくしこそ梅をかさして楽しきをつめ　　久米朝臣廣縄歌

(十八)睦月たつ春の初にかくしつゝあひしゑみてはときしけめやも

今按。此むつき立のことは。ことはくおそろしかるへきにあらす。春宴尤可二引用一か。鼻のうへをほれと云。ゑひなきすなと云る詞にたくふへきにあらす。又万葉集歌は。大神朝臣奥守嗤レ池田朝臣歌云。佛つくるあかにたらすはみつたまる池田のあそか鼻のうへをほれ。而今判詞に山田朝臣とかゝれ侍。相違萬葉一侍如何。故六條左京大夫(顕輔)申されしは。先親修理大夫(顕季)に万葉を讀侍し時云。万集はたゝ和歌の道にて納二箱中一て可レ持。常披見して好讀へからす。和歌損する者也云々。又後日俊頼朝臣同様に讀誡仕き。但此兩人。共に万葉の詞を取てよく詠せる人也。然は此誡極不レ重也。若心得す讀は。あしさまになるへきか。其たくひおほかり云々。尤可二用意一事歟。但今のむ月立の詞は。强に其誡に及へからさるにや。又まとゐといはは梓弓にかけ。豊の明には曇なしとよすへき事。さもいはれて侍。後拾遺云。

(春上)うらやましいるみともかな梓弓ふしみの里の花のまとゐに

但かならすしも不レ然歟。古今集に。

おもふとちまとゐせる夜は唐錦たゝまくおしき物にそ有ける

又古歌云。

榊葉のかをかくはしみとめくれは大宮人そまとゐせりける

また此歌合三月三日題に、

ちる花をけふのまとゐの光にて波間にめくる春の盃

とよみ侍る御歌は。件りによらねとも。両詞にはことによろしく聞え侍り。篇題とこそかゝれ侍めれ。歌さまによらはまとゐ夜はす侍。又とよの明に異なしとそへよむ常のこと也。

俊成卿云。

まことにや空になき名の立ぬらん豊の明のくもりなき世に

猶すら古歌も侍めり。催馬楽曰。

巻山のしゝにおひたる玉柏とよのあかりにあふかたのしさ

六帖に黒主か歌。

みの山にしけり茂るかみ榊豊の明にあふそうれしき

近は。仲實朝臣か五節歌にも。

乙女子か袖ふる御しをみ衣豊のあかりに絶せさりけり

今案に。此歌は風情にひかれてよりくる所を、ともかくも詠侍れは。恐すくしく、其詞のすかたをよみとをさぬ事のみおほく侍めり。就レ中元日宴初て被レ出て侍題なり。それに付て。豊明の初と云ことを詠にて讀ませて侍歌なれは。まとゐの秀句も。豊の明のそへ詞も。可レ讀ひまは侍らさりき。いはんや。しら波の立よるとよみ一可明といひをしなへて一よむ事は。又の事とこそ。ふるき人も申侍けれ。古今六帖の中に。なそらへ歌に。昔にけさ朝の霜のおきていなはこひしきことに消や渡らん。これそ其すちの心はへにて侍。その一様にて。其外の躰を難すへきにあらすや。偏執の義とや。世人またむ侍らんすらん。物常には

五節のみこそ。豊明とは詠ならはしゝて侍を。日本紀には宴の字をとよのあかりとよみ。古語拾遺には。神楽のおこりに付て。宴楽と書て。とよのあかりとよみ侍うへに。元日の節會の宣命に。とよのあかりきこしめす日とかけり。所謂本朝月令云。延暦八年正月一日詔法令詔之。今日正月朔の豊明聞召日在也。又雪も零て時も寒く在故。是以御酒を食へ。恵良支退弖奈良牟被レ賜と宣。是のみならす。白馬。踏歌。重陽。新嘗。是等の節會ことに。皆とよのあかりと書り。或は豊明。或は豊楽と書り。されはとよのあかりとは節會を申也。評定以前此愚歌事披露仕て。作事詠たりと云沙汰侍けり。評定の座にも。右方人々此事一切不知案内と侍しかは。宣命の證をは出申侍にき。其後落居して侍にこそ。めつらか敷責りなと感歎せらるゝ人も侍けるよし承及侍を。とよのあかりとは。宣命に豊明豊楽と書たりとは。見え侍めりと侍も。とよのあかりと云文字の沙汰のやうに聞え侍り。打任ては以二新嘗會一號二豊楽宴一と書て侍事有。其故に五節の節會をこそ豊明とは申ならはしたれと。皆節會を豊の明といへり。元日節會に付て。さま〳〵の風情とも讀れたる中に。別にもとめたる所なく。豊のあかりのはしめとは。うるせく思よりて侍は。少々のふしはゆるされ侍なんとこそ思ひたまふるに。まとゐにつけ。とよのあかりの詞にかゝりて。さま〳〵の吹毛の難義付られて侍こそ。かへりては有レ興て思給侍れ。

餘寒　左　顯昭

しからきの外山は雪も消にしを冬をのこすや谷の夕かせ

右方申云。左方歌無レ難。

判云。左しからきのなといへるより上句は。たけ有て聞え侍るを。谷の夕風としもさしたるこそ。朝は今少もさゆらん物を。是

はたゝ谷に侍と云へかけけるか、文字のたらはて、夕を添て夕しもやはと聞え侍るにこそ。さらはたゝ谷の岩陰なと云へかりけるにや。

顯昭陳申云、修實と云題にては、朝にも暮にも、夜にても晝にても、其心たにあらはさても侍なん。猶習の寒事は常の事也。暮風は冬の字なから、すかに冬の名殘覺ゆるうへに、萬葉集(第十)に、聞しつゝもいなはかき分家居せはともしくもあらし秋の夕風と侍る。よまゝほしき詞にて詠也。谷風と云に、文字のたらねはとて詠そへたるに侍らす。此方葉の歌ならては、ふるく夕かせとはいとも詠侍らす。但谷の岩陰とよみたらんも、とかは侍らし。餘にさしつめてや侍らん。此歌にとりて、谷の夕かせと谷の岩陰といつれまされりなと、世人に問合せられ侍へし。同樣ならは作者とかなし。和歌才學とは是等にて侍へき也。

若草　　右　信定

霜をきし去年の枯葉の殘るませにそれ共見えぬ春の若草

左方申云、右歌腰の六文字きゝにくゝや。

判云、こその、かれはの殘るませにそれとも見えぬ春の若草といへる、いとおかしくこそ侍めれ。五文字六七文字は常事なり。侍て不レ及二難陳一、抑左方人、腰句何句を稱申哉。稱二腰句一は。四韻詩第三對句也。和歌に有二腰句一事は、中五字と、下七々隔別せるを云也。上等不得の故也。又云、世間和歌腰句何所乎。中五字許は腰句不分同事也、中五字を爲レ腰者、殊外に上六寸也。和歌式に、道八病頭腰膝なと申事は、また同字有レ三歌蜂腰、同字有レ同歌膝腰なとゝこそ申めれ、腰句たゝ前詞の謂也、只非二歌事一。雖レ爲二無益一時時如レ此謂言者。此道亂也。仍所二答申一也。

顯昭陳申云。此番左右雖レ非二愚詠一。以二第三句一稱二腰句一事、爲二左方難一之故。評定之時定申歟。仍所二陳申一也。考二登蓮濱成朝式一云、昔レ躰有七。中亦有レ頭無レ尾。腰已上爲レ頭。第三句爲レ腰。腰以下爲レ尾。四五等句是也。又雜躰有レ十。中六頭古腰新。以二古事一陳二發句一。以二新意一陳二三句一。是爲二雜躰一也。以二古事一陳二於初句一、故曰二頭古一。陳二新意一者於二三句一、是故曰二腰新一。七頭新腰古。以二新意一陳二發句一。以二古事一陳二三句一。云二八頭古腰古一。第一句陳二於故事一。爲レ頭。第三句陳二於故事一爲レ腰。頭並腰陳二於故事一、故曰二頭古腰古一。已上作式略注二進之一。然者左方人以二第三句一稱二腰句一。已存二式文一。可レ謂二道之興隆一。何爲二道亂逆一乎。以二第三句一稱レ腰之時。上六寸之條爲二和歌之本躰一歟。何始改二其名一乎。

同題　　左　顯昭

あれぬれはなはたつ駒をいかにして繫きとむらんのへの初草

右方申云。左方歌。詞花集俊惠歌云。

右　まこも草つのくみ渡る澤邊には繫かぬ駒も放れさりけり

其心同しきらへに。なはたつをふしにしたる。それも耳に立樣也。

判云、左歌。俊惠法師歌に相似之由。右方申云、かやうの心は。さらても常事也。但平貞文か歌に、拾遺に。たゝにはよらて春駒のつなひきするそなはたつ　ときくと詠せるは。女によせて名立といへる也。是は偏に繩を斷と云る。尤凡なるにや。

顯昭陳申云。考二萬葉一(第廿)云。

らまやなるなはたつ駒のをくろなへ妹かいひしをゝきて
かなしも。此歌を思ひて。貞文か女によせて。名は立と詠
せる歟。しかたとへ万葉集の歌をしらすとも。風情自然に
相叶歟。然は万葉集の本歌を思ひてよまん時は。女によせ
て名は立といはすとも。たゝ縄を断駒とよめらん無レ失
歟。何をさへても凡也と可レ被レ定乎。万葉の詞何そ可レ凡
乎。又後恵歟。つなかぬ駒はなれす。今按は繋留らんと云
り。つなく詞面かよへる事也。強此歌の宗とのふしとは不
レ存也。

春中

野邊　　顕昭

若菜つむ野邊をしみれはたか取の翁もむへそたはれあひける

右申云。左歌打任せては。竹とりとこそ。申なれたるを。た
かとりといへる、さかせる證のあるか。

陳云。たかとり。竹とり。兩様に万葉點したり。而又堀川院
百首に。師時卿歌にも。たかとりとよめり。

判曰。左歌竹取翁事。たかたけ兩様にも申成へし。然るに此
翁にとりて。たかとりと云けりと云證據そ有へきを。万葉には。
たゝ詞に。昔有二老翁一號曰二竹取翁一也。此翁季春之月登二丘本一
遠望。忽值二煮羹之九箇女子一。百嬌無レ儔。花容無レ止。といへり。此
事を今野邊の歌に詠せる、可レ準レ無二由緒一。但万葉集に兩様に點
したるも。古の万人申せる。彼集は順源ノ和せる後。假名は付來る
也。自證ノ云事ノ手。今ノ歟傳、たかたけは以二誰人説一可レ爲二證
指南一哉、師時卿堀川院同然也。但件翁并九女子等歌中無二竹字一
只詞計也者。何そ不レ如レ爲歟。凡兩点ノ得之條は、たけは昔通之
説也。たかけ管字を陽唐韵にまたかむらと讀て侍ある。然は
打任せては。たけよろしきにや。但何れにても。此歌の風躰こ
となる事なきうへに。翁もむへそなと云る。姿詞非レ可二庶幾一
歟。

顕昭陳云。万葉集竹取翁事。たか取たけ取兩説也。万葉にも
兩點侍り。但堀川院百首懐舊題に。中納言師時卿の歌に。春
をかにのほりてみけんたかとりのこゝのこらのこらを
しそおもふとよまれて侍れは。堀川院御前にて令レ講御歌
に。後人たかとりとよまれて。別の難も聞え侍らねは。其
説に付て詠せる由申畢。たけとりとは詞計にて。彼卿の歌
程の證據もきこえす。又證歌もえいたされねは。如二只今一
は勝顕さし侍るへし。たけとりとよまれたらん人にこそ。
證據も時申さまほしく侍れ。可レ有二影迹一。但判詞には。万
葉は順か和せる後、假名は付たれは。和歌計こそ和した
れ。竹取は詞也。兩説の點不レ可レ有之由侍る如何。順万葉
の歌計を訓して。詞をは不レ訓とは誰人の定侍りけるそ。
詩歌文書詞にも作者の名にも不審あれは。勘讀常事也。萬
葉中已有様に。文筆尤可レ被二點置一也。所レ謂無常悲歎等の
詩四首并序。松浦の仙媛。佐用嬪肉。大伴熊凝。反惑情。梧桐
日本琴歌等序九首。櫻兒。縵兒。車持娘子。竹取。浦嶋子。荒
雄。葛城王。石川女郎贈大伴田主。婦人獻二舎人親王一歌。
并不レ知二姓名一の人々歌の傳は十六通。贈答之詁十三通。
沈痾自哀文。敎喩の文。鎭懐石の記等三通。已上皆有二點本一。
又順たとひ詞をよますとも。後人詞に假名付ましと云儀
やは侍へき。又順か自筆に點したる本を見たると申さは
こそは。予レ今難レ傳とも侍らめ。又順か自筆の本も。世に

侍らんもかたからす。村上御時年紀不ㇾ違。只見及はぬにてこそ侍れ。大形は如ㇾ此書籍。宣旨重書等も炎上ノ侍に。雲神遺したる事こそ悲しく侍れ。只後自筆本不ㇾ侍とも。移し置の本侍は同事也。自作侍書籍も一定也。翻譯三藏の眞筆も。御作論目之正本も。世に不ㇾ留事侍れとも。尺牘書寫の功によりて。點本も世にあれは。其に付て受習して。智恵をひらき侍也。又故御時御の説同前也とは。いかに侍にか難ニ心得一。彼卿たかとりとあしく被ㇾ詠て侍らは。それに習りたらん人の。僅にたけとりと詠たらん事を出してこそ。たかとりと讀るをは捨られ侍らめ。哀只万葉に兩説あなれは。何れにても有なんとて侍らはや。他證の僅にたけとりとよめるはなくて。万葉の兩説をは不ㇾ被ㇾ用の間。煩はしくこそ聞侍れ。詞計にてなすことは始終通りかたく侍は。これは若かくや姫の物語に付るゝか。其は別事也。又故人の申されしは。万葉に願かよみ殘したる歌の中に。少少匡房卿教隆道因なとも。讀加へたるよし侍き。それも願かれこそにあらす。五千餘首の短歌長歌等を讀解ほとに。事繁して自然に讀落せる也。後人必しも願にまさるへきにはあらねとも。かれかよみ置たる歌ともに。才學付て。讀落たるにこそ侍めれ。愚なる心にもさよと見ゆる事とも侍者なり。

雲雀　　　　左　顯　昭

はる日には空にのみこそあかるめれ雲雀の床は荒やしぬらん

右申云。上五文字。中五文字ともに聞にくし。

判云。初五文字。實に不ㇾ宜歟。凡は雲雀の子細。をのれか心ならす空にあかりて。床をあらしなとするにはあらさるへし。春に成ぬれは芝生なとに子をうみ置て。夜はあたゝめ。春日のうらゝかなれは。空に(雲上)あかりて是を見くたし。またおりのほりなともする物に侍也。されは床を荒しやしつらんなと云へからぬ事なるへし。

顯昭陳申云。先有方難に。上中五文字ともに聞にくしとある。人の心不同なれは。さも思はれなん。とかめ不ㇾ可ㇾ申。但初の句に春日と讀る古語也。万葉(第十九)に。

うら／＼にてれる春日に雲雀あかり心かなしもひとりし思へは

此歌なとをおもひて詠侍りけるにや。又後撰に。(春下)

春日さす藤のうら葉のうらとけて君し思はゝ我も頼まん

かやうにも詠置て侍れは。初句の春日。あなかちにとかなくや。第三句はさきの歌にもひはりあかりと侍り。大かた雲雀をはあかるとよみ。水鷄をはたゝくと讀。鳴をは羽かくとのみ詠習はして。鳴なとは打任せては讀ぬ事なれは。第三句とかなし。此難はきはめたる小事也。不ㇾ及ニ沙汰一歟。されと判者も。實事をたゝし。力を入て被ㇾ難て侍れは。存る所を申侍る也。やまと歌の習ひは。風情を先として。實儀をたゝさぬ事おほし。春は空にのみあかりて見ゆれは。雲雀の床やあるらんと讀る。あらましことは。さのみこそ侍れ。さのみ實事をたゝさは。子を見くたさんれうに。空にあかるとの給せたることも。さやは思ひ侍らん。雲雀の心も知かたし。草むらにあらん子を見くたさんれうならは。餘りに空につきて。あからても侍れかし。古今歌に。

青柳をかた糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花かさ

是も鶯實に梅のはな笠をぬはねとも。にせことにぬはす

るなり。

作たてゝ花も匂はぬ山里は物うかるねに鶯そ鳴

見ゝ花さかぬ山里とて。鶯よゝ物うけにも鳴侍らし。やよやまて山時鳥ことつてん我世中に住わひぬとよ。世中わひしとて郭公にことつてせんことも有かたし。又誰にことつてもすへきにか。秋くれはのもせに虫のをりみたる聲のあやをは誰かきるらん。はた織と云むしに付て。ころものあやを人にきする也。實をたゝさは正躰なかるへし。

水鳥の下やすからぬ思ひにはあたりの水もこほらさりけり

みつとりの下やすからぬまては。いはれたり。水の氷せぬ程の思ひは難レ知。かやうに心なき鳥獸にも。人のふるまひ。思ふ心を付て詠來れる也。はしめておとろくへからす。又和歌には利口おほし。

我やことはた我にもかもな時鳥聲をへたて手に任せゆかん

[illegible]はて音をのみ鳴は敷妙の枕の下に蛩そ鈎する

おもはへす袖に湊のさはく哉唐船のよりしはかりに

然は。和歌に法令欄するは口惜事とそ。法性寺殿は常に仰られ候由傳承侍りし。

春曙　　　　　　　　　　　　左　顯昭

此世には心とおもしとおもふ間に詠そはてぬ春の明ほの

右方申云。春の曙とをく。いさゝか無念也。題に春曙と出なは可レ思也。

判云。右方人嘲無念之由申。不レ可レ然歟。題は結題を多はまはまた字の可レ有やとこそ申なれ。況乎春曙なとは。あらはにいはさらんこれへりこ不。如二子細一に侍たるへき事也。歌は。まにの詞。實に不足に聞え侍也。右をこそまさると申侍らめ。題昭陳申云。判詞にまにの詞。誠に不足に聞え侍如何。宜歌ともに多讀れて侍めり。拾遺に。

　　　　　　　　　　　　　　天暦帝御製

白波のうちやかへすと思ふ間に濱の眞砂の數そつもれる

此御歌はやかて腰句に。思ふ間にと。如レ今をかせ給へり。後撰集に。　　　　　　　　　　　　貫之

こふるまに年の暮なはなき人の別やいとゝ遠く成らん

古今集に。　　　　　　　　　　　兼覽王

惜らん人の心をしらぬまに秋の時雨と身そふりにける

後撰集に。　　　　　　　　　　　中納言敦忠卿

物思ふと過る月日をしらぬ間に今年もけふに成ぬとか聞

同集に。

名のみして逢ことなみの繁き間にいつか玉もを蜑もかつかん

但年來諸撰集にいれる故に。此まにの詞を。不足の詞共知侍らさりけること。我なからもいとゝ口惜侍り。同詞なれと人に隨歌によりて。わろく聞ゆることも侍哉覽。金葉集に。

春　　　　　　　　　　　　　　秦兼方詠

こそみしに色も替らす咲にけり花こそ物は思はさりけれ

此歌は。後三條院うせさせ給て。諒闇の年。圓宗寺の花をみて讀り。世人も宜と申けれは。後拾遺の時。通俊卿の許に參して。まかり入侍らはやと望申けるに。彼卿度々詠て。宜けれと。花こそと云詞の置やうこそ心ゆかねと侍けれは。物も申さて立侍にけり。侍共のゐあひて侍ける所によりて申けるやう。四條大納言殿御歌に。

春きてそ人も問ける山里は花こそ宿のあるし成けれ

と讀給へる歌は。彼大納言殿の第一の秀歌とこそ申侍に。

花こそと云詞は、其同所に置て侍を、撰集承はらせ給はかり(拾遺イ)にては。いかにかゝる僻事をは侍けん。さに、其一に二万葉そなしはかゝる紕繆とて出侍にけり。同所なれと。人によりわろく成は。定れる事なれは。初て可レ申にあらす。

春の下

蛙　　左勝　顕昭

山吹の匂ふ井手をはよそにしてかひやか下も蛙なく也

有申云。かひやかしたそ作よまれたるいかゝ。朝霞かひやか下に鳴かはつと云本歌は。万葉の秋部にこそ入たれ。朝霞とをけるは春にかきらす。秋も霞よめる事。万葉集にもおほく見えて候。陳云。蛙の題。ふるき撰集にも。歌合にも。近世の歌合に詠也。かひやかしたに鳴かはつと讀るに付て。蛙の題にかひやよまん事。有二何難一乎。又難云。かひやを春よまん事を疑申也。又陳云。かひやと云こと。様々の儀有。其中に。田舎にこかふ屋をかひやと云。其下に蛙こをくはんために。かはくまへつまる也。土民も是をかひやと云なりと申き。其儀不レ可レ違。有又難云。此儀ならは。こをかふ事は四月よりの事也。然は時節に不審也。又陳云。かひやは。つくりつれは。いつもさてをく物なれは。春もなつも。かはつ其下に鳴てん。こをかふ事。又三月にも皆する事也。然は不レ可レ有二相違一歟。

判曰。左歌かひやか下に蛙鳴事は。打任たることを。かひやか下もといへるもの字。こと新しく聞ゆ。又かひやも。春よめらんやなと。これらをたにおほつかなく承る程に。此左右の問答の状こそ。勿論の事と見え侍れ。先かひやか下の歌は。萬葉に二首見えて侍をこそ。指南とはすへきことにて侍れ。其歌一首は(十二)朝霞かひやか下に鳴蛙聲たにきかはわれこひめやも。是第十巻秋歌内也。今一首は(万十六)朝霞かひやか下に鳴蛙忍ひつゝありとつけんこもかも。同第十六巻内也。此等の歌の心は山田の庵に田を守子等。本の住宅を離居して山中に令レ居之間。蛙の聲を聞て。別居のなくさめとせる心。相聞の歌也。又かひやと云心は。彼庵の下に。火をくゆらかし。烟をおほからしめて。或令レ拂二蚊虻一或令レ去二猿鹿一也。然は於二蚊鹿一者。縦雖レ有二前義一至二于種英一者可レ爲二一決一者。而近古之蕃田二異説一云。河のよとみに木を入ひたして。椽と稱は舊事也。其上に屋を構たるを。かひやと云也と云々。是尚謬説也。而今問答には。春時田舎に蠶をかふ屋を稱二飼屋一也。其所雖レ棄レ葉食レ蠶也云々。此儀不レ足レ云歟。蠶飼の屋をは蠶室とこそ申侍。是世俊頼朝臣の書て侍る物にも。玉箒のことを云る所に。春初子日。玉箒をもて蠶室をかき拂ひ祝初る也と云り。凡蠶飼の比は。正月初子日午年生ける女子をかひめと稱して。蠶室をかき拂ひ祝ひ初る也。次二月午日。始て蠶の屋を出して。暖日にあたゝめしめて。三月午日初て桑につく。四五月まゆをひく時とすと云々。加レ此土民所レ貴重一之蠶室之内。何無二其用一蛙を令レ聚入一云々。可レ令レ施二與蠶一乎。況蠶養之家中。令レ不レ可レ場。潺湲更不レ可レ溝。池沼蛙何因可レ令レ寄住一乎。凡蝦蟇は。本自。荒所レ水邊に寄住者也。然は晋惠帝。蟇を聞しも華林園と云り。橘清友か蛙を詠せしも。ゐての里をさせり。漢家本朝蟇之鳴所。皆田園水澤也。先万葉集の歌は。山中の田の蚊香火屋か下。蛙鳴事尤相當也。朝霞と云るも。夜煙の消際に殘たる。朝霞の山の腰にめくれるに不レ異。

仍彼歌等尤相叶者也。右方人[illegible]春時之儀は不レ可ニ難申一歟。たゝ飼屋を可二[illegible]申一事也。左方申旨何士民之境風手。尤可レ有ニ停止一之義也。

寄烟戀　右　寂蓮

山田もるかひやか下の煙こそこかれもやらぬたくひなりけれ

左申云。かひやに山田もるといはんいかゝ。陳云。かひやと云は。鹿火屋と万葉にかけり。其上に山田に鹿を寄[せ]しれうに。紙なとくさき物ともをとりてやくを。雨にぬらさしれうに。舍を作り覆也。是をかひやと云と。士民も申き。已万葉集の昔穢に相叶たり。又[illegible]申云。堀川院百首狀歟に。春宮大夫ふしつけによみ。敦隆も蚊火の部に入たり。先達の所存かくのことし。万葉に鹿火香火と書て無二定儀一。飼と云文字を訓せん料に。如レ斯書歟。一片に鹿火とは不レ可レ定歟。又陳云。先達も随意をやかねに無二信受一歟。又宵霞と定てつゝけたるも。鹿火の烟なとの。つとめて霞わたりたるに似たるをよめるにや。又人丸集に。こかね山かひやか下に鳴蛙とよめり。然は山田に可レ讀と見えたり。

判云。右。かひやか下の烟は。両方問答に見えて侍へし。此歌雖陳申承し。先に春手の歌にも。蛙の所にかひやの事は委しく記申侍にき。かしこく。今の問答にいとも無二相違一申侍りにけり。但其右方[illegible]はこかるゝこそ常の事なれ。こかれもやらぬやいかゝと覺侍れと。かひの事所存にいともたかはす侍めり。

顯昭陳申云。先此かひやか下に。鳴蛙とよめる歌は。判者前春の歌の[illegible]時。[illegible]被二注出一万葉に二首侍り。其に簡讀かひ屋か下に啼蛙と讀て。かひやとは何事を云とも見え侍らす。然者今の愚詠にも手をいたして。その事ともよみあらはし侍らす。只古歌のおもむき。蛙の鳴を付て。獄冬の咲とも見えたり。又山吹はむねと井手に詠ならはし。獄冬の匂ふ井手又蛙をもあてになかせなとして侍れは。かひやか下もかはつなくと歌によみて侍也。

其古歌に。

澤水に蛙なく也山吹のうつろふ影や底にみゆらん

蛙なく神なひ河にかけみえて今や咲らん山吹の花

なかれ行蛙鳴也是引の山吹の花匂ふへらなり

歇冬詩

養得昔令。扶二蓉萌一閑案本是待二蛙鳴一而今寄烟戀の右歌に。山田守かひやか下の烟と讀り。已是秋歌の心也。仍雨方かひやの事可レ申の由。評定の時一々勘得たる義は侍らねは。古義共を少々出申。一には公實卿堀川院百首。水のうたに。ますらをかもふしつかふなふしつけしかひやか下は氷しにけり。是はふしつけにかひやと云事侍るか。ふしつけとは。江川のぬるみに柴を切付て。魚をつとへて。是を取。其上に庵を構て。田の庵なとの樣に。葦萱なとを打かけて下をくもらせ。又上より來ぬる鳥をふせき。くひ物を打散して魚をかふかゆへに。其屋を飼屋と云と。田舍士民等あまた申せり。顯昭か。かひやとて。所を定て有とそ申。万葉集に。かひやか下になく蛙とよめるは。おほつかなきに。春宮大夫の。ふしつけしかひやか下とよまれぬれは。士民か説に相叶へり。定て其子細を聞てこそはよまれ侍りけめ。非レ可レ疑。古き遣戸なとをも上にうちかけたり。或は上の覆はなくて。下には敷[illegible]や

らに竹[illegible]をすのこの様にあみて。其上に[illegible]こもな
とを敷て。まはりに田の様に[illegible]其上にくひ[illegible]を
置て。魚ともをあつむ。其廣は一間はかりも有。其より廣
も有。打縄をつけて。陸なる木なとに結付て。魚集りぬら
んと思ふ時に。集りて引あけてとる。それをは。やなと名
付て。やなひくと申事も有と申。又かの屋をは。或はかく
屋とも云。或はかふやともいひ。或はかやともいふ。所に
付て構様もかはり。其名も不同也。されとおほやうは。か
ひ屋の儀なり。常にふしつけとて。略てするは。たゝ柴竹
なとを岸近き所のよとみの便有に切つけて。魚をあつめ
て。すを立まはしてとるなり。念比なるとおほしきそ。所
[illegible]に[illegible]打とて。それにもあらぬかきなとして侍める。其を
見さらん人の。かひやの様をも不レ知。かひ屋と云名をも
不知して。疑おもはんは。尤理りに侍り。猶々所々の土民
に尋聞てそ。實とも信せられ侍らん。

一には敦隆か類聚萬葉集には。このかひやか下の歌二首
と。幷に(万十一)(新古今二)足曳の山田もるをの(をに)おくかひの
下に[illegible]其歌[illegible]らん(ゐくに)此歌と已上三首をは。
蚊遣火の歌に入たり。蛙らは此かひやと申は。鹿火屋と
云。香火屋とは書たれ共。ともに蚊火屋と存たりと心得
られては侍り。敦隆は博覧の者にて。万葉集よく〳〵料簡
して部類すはかりなれは。廣く尋勘[へ]てこそは。蚊火と
[illegible]大納言と申侍し歟。誠は。[illegible]清臣
[illegible]歌の[illegible]て侍りき。小童
にて侍りし時。[illegible]蚊火屋也と答
侍りき。其上に尋云。蚊遣火は賤か庭なとにたつる物也。

その鹿の屋を。別にかひやといはん事いかゝと申侍しか
は。山田なとの鹿の邊にたつれは。それか下に蛙の鳴をそ
蚊火屋か下に鳴蛙とはよめるなりと申侍き。但万葉に。鹿
火とも書。香火とも書たるは。彼集は正字を書ぬ事も有。
眞に一所には正字を書共。又別所にはあて字を書事も
あれは。大事ならすと申侍しは。偏にこの敦隆か類聚万葉
の心にて侍けり。其時は此書を不レ見侍しかは。偏に思余
か義と存して罷過をはりぬ。此儀も。とまこつとかはなは
れ共。猶春宮大夫ふしつけの儀に違侍歟。一には田舎に蠶
養すとて別の屋を作りて。人も不レ居して。春に成て。こか
ひをする屋をは。こやと申國も有。又かひやとも申。こかひ
する故也。かひ屋か下とは。其屋の下か。それも蛙鳴てん
すと尋侍しかは。其下にてみそせゝなきなともあれは。蛙
住て鳴事一定也。且は蠶の落たるを食し侍りと。土民等申
侍し上に。又和歌道に心得たる人の。山陰道のかたへ下向
して侍けるに。慥に其かひ屋を見たるよし申侍き。然は万
葉のかひの屋は。件のこかひの屋をよみてもや侍らんと申
侍しも。是猶ふしつけのかひ屋には不レ可レ及歟。此等の儀
を少々書上侍しを。本鉢所レ執のふしつけの義をは略して
偏に此かひやの儀を旨として。委被二注載一之間。判者も力
を入[れ]て委被レ載に侍。[已]以本意相違也。尤遺恨事也。於
レ今者田舎蠶養之次第甚以無益歟。但判者詞に。蠶養屋中
に遣水の池を湛て。蠶を令レ栖て。蛙をくはすと侍そ。利口
と作レ申。以外沙汰にて侍る。飼女か所爲物狂の至歟。たゝ
わさとならねと。屋中軒邊にみそせゝなきなとに。蛙鳴し
事不レ可レ難歟。又蛙の鳴所は。田園水澤と被レ定たる勿論

也。されと又後撰には。我宿にあひやとりして鳴蛙。夜になれは物はかなしきと。詠て侍める。況人も居さらん蠶屋に。蛙の鳴ん事は打任せたる事也。漢家の花林園。山城の井手里まて不レ可レ被レ尋。抑此等之義外にめつらしく出來は。有方歟の鹿火屋の儀也。判者も被レ同申たり。尤心にくし。其判詞に。山田の庵に田を守〔る〕予等。本の住宅を離居して。山中に令レ居之間。蛙の聲を聞て別居のなくさめとせる心。相聞の歌也。又かひ屋と云心は。彼いほの下に火をくゆらし。烟を多からしめて。或令レ拂二棄蚊一若は令レ去二猿鹿一也。然者於二予蚊鹿一者。縱有二兩儀一至二予炎烟一者可レ爲二一決一矣。云々。今按此義已爲二金言一年來蒙霧且以散之庵。猶所レ殘云々。疑不レ可レ不レ決。山田廬下に火をくゆらして拂レ蚊は。已敎隆か蚊火の儀にこそ侍なれ。然者只其定にて可レ侍を。鹿火屋と書ける文字に付て。くゆらかす火に依て令レ去二猿鹿一と侍條いかゝ侍へかん。其料に蚊鹿はたとひ有二兩說一共とは被レ書歟。蚊鹿相兼之義一宜(イモ)兩端極以不レ被二庶幾一侍り。又蚊火の山田のくろにくゆらんによりて鹿離レ去歟。狩人の山に鹿をあさふとて。よひより立こめて方々に火を燒て。をゝとさけひをるをは。あくむといふ。それにこそ鹿はおそれて。いつちへもはたらかぬを。鹿のたちと見ゆるほとに。夜明て案內者。鹿をおこして。便にしたかひて射付侍なれ。蚊遣火のくゆらんに。鹿はゝかりをなして。立去ん事不レ可レ侍。只蚊火屋といひて。鹿火屋と書たるは。文字をとかく書替る事。万葉の習ひとて。敎隆の儀の定にて侍らんは。煩なくて宜侍なん物を。又山田のくろにくゆらん夜の煙の。山腰澗際にたな引まはりて。朝の空に霞と見えん事甚不レ可レ有事也。炭竈もえは野火の煙なとこそ空にたな引て。霞にはまかひ侍らめ。又蚊火は夜こそくゆり侍らんすれ。後朝にたなひかんする烟の。霞と見えむを思ひて。かねて朝霞とつつけよまん事は。次第あたり侍らす。さらは蚊火屋の朝かすみとそ侍(ロイ)へき。又朝かすみかひやか下に鳴蛙。とつつくる事は。蛙のなく朝の。打かすみたる景氣也。朝の霞は夏も秋もよめり。万葉の習也。秋相聞歌には。秋の田のほの上にきりあふ朝霞いつくの方に我戀をらん。夏雜の歌には(第十)朝霞たな引野へに足曳の山時鳥いつか來なかん。此等かひの烟ならね共。朝霞とよめり。又此朝霞かひやか下の歌二首か內。第十卷の歌は。秋の相聞に入。相聞の歌は。いかなる題にも。戀の心によせて詠する。常のこと也。必しも山田守らんするものゝ本宅を離れて。山中に居て蛙の聲を聞て。心慰る故に詠し侍るへきにあらす。又山田守はかりの賤は。歌によまんことかたくや。彼玄賓僧都の南都を去て。備中國にて山田守て世をわたるとて。山田もるそうつの身こそかなしけれ秋はてぬれはとふ人もなし。とよめるは別事也。然はさきにも出して侍る第十卷蚊火歌には。山田もる をのをくかひのといふ歌は。これも寄物陳思とかけり。田守か自詠にはあらさるへし。上には山田もるをゝあけ。下に我戀を置は。よむ人の詞の定に置るなり。相聞の蚊火歌。只同事也。又此歌寄レ蝦事也。又此歌の心は戀しき人の聲をたにきかは。かくは戀さるへしといふ也。朝霞かひやか下に鳴蛙とは。聲といはんれらなり。されは蛙のこゑを聞て。戀を慰るにはあらす。次の歌

も鳴蛙の音もせぬ忍ふ心也。それかやうに我無忍心を。思ふひとに掛はやと讀る。此等相聞の心也。又十巻に詠レ露中に。秋田守かりいほつくり我をれは衣手寒し露そ置ける。此歌我をれはとよみたるは。賤か詠する共可レ思。されと今の人も田家歌を詠には。皆我山田を守。なるこひき。なたうちてこそは書ことも侍れ。賤かよめる共難レ定。又かひやか下に鳴蛙とは。打任せたる事を。かひやか下もといへるもの字。こと新敷聞ゆと侍る如何。かひやか下に鳴蛙と云歌は。万葉に二首計也。それすら猶上三句は同事也。下二句は又同雜の戀の歌なれは。ひとつ歌の末句。詞のすこしかはりたれはとて。別の巻にかけるかとも可レ申。井手の蛙の歌こそ。かく打任せたる事にて。いにしへ今の歌おほく侍れ。仍井手の蛙に對して。かひやか下も蛙なけりと詠して侍り。又右方作者の義は。かひやとは。鹿火屋と万葉に書り。其上に山田に鹿をよせしれうに。かみなとくさき物ともをとりて焼を。雨にぬらさしれうに。家を作り覆を。かひやと土民も申きと被レ書たる。然は判者の被レ書儀とは大きにたかへり。判者の儀は。かひやとは山田の庵也。いほにて田をもるに。蚊火をたてゝ蚊を拂。又其火にて鹿をも令レ去と侍り。其屋の義也(ほと)相違也。又かひも是蚊火と云とれり。判者は蚊火と鹿火と相兼られたり。鹿火と云方けさるかたに似たり。蚊火といふ方はたかへり。屋の儀は大に違を。今の問答に。いとも無二相違一之様に。かしこく申侍りにけりと被レ書たる如何。大かたは。一門の儀は。一筋にとをりて侍らはこそ。心にくゝも侍らめ。又如二判者一之儀蚊と鹿と相兼は。かひやの聲をはいかゝさし侍るへき。蚊ならは上聲也。鹿ならは平聲也。評定の座に。右作者も蚊鹿混雑しけに侍しを。此定に難を仕侍りき。其問答は不レ被二注載一如何。又付二右方作者之義一。大和國土民等折々相尋之處に。秋田邊に鹿毛なとを焼て。鹿をよせしとましなふ事侍れと。其火に鹿の恐れてよらぬ程のこと侍らすと。申あひて侍如何。國々にかはれりといはぬ上には。いよ／＼不審也。又此かひやか下に鳴蛙と侍歌には。秋にしも蛙の歌あまた侍り。秋部歌中に。

寄蛙

万十　みよし野のいは本さらす鳴蛙むへもなきけり川の瀬ことに

同　神なひの山下とよみ行水に蛙なく也秋といはんとや

同　草枕旅に物思ふ我きけはゆふかたまけて鳴蛙かも

詠川

同　暮さらす蛙鳴也みわ川の清き瀬の音きけはかなしも

此歌共。皆以第十巻秋雑の歌に入たり。神なひの歌の外は。秋とよめる詞なけれと。惣して蛙を秋の相聞に入たるも。かひ屋か下にはあらす。蛙の故也。又第十巻を第壹巻と書れたること。あやまてるか。又秋相聞歌の中に。

寄蛙

朝霞かひやか下に鳴蛙(句前)

又寄鹿

万十二旁書歌三　棹鹿の朝たつ小野の草わかみかくろへかねて人にしらるな(る)

棹鹿のをつゝ草ふしいちしるく我とはさるに人のしるらし

今按にこたきの鹿火屋か下の歌。鹿の火をよみたらは。此次にわへこ寄鹿歌の中に尤可二入加一歟。題も寄蛙と書。たゝ

題の義なければこそ。別に蛙の歌には入て侍らめ。又右方作者云。人丸歌に。こかね山かひ屋か下に鳴蛙とあれは。山に山田は便あり。ふしつけの義にあるへからすと云難侍りき。陳云。世間流布の人丸集は。不レ足レ信之由存侍り。其故は人丸歌。萬葉集に□餘首入たり。先其歌。大旨皆入ての上に。万葉の外の歌共をは可二入侍一也。而万葉集（歌イ）は殘かちに侍めり。それはさる事にて。年来人丸集數十本窺見侍りしに。一本にてもこかね山の歌入たる本不二見給一。又下句はいかに侍にか。證文に被レ引計にては。なと一首なからは不レ被二書載一乎。隨可レ承也。其故は万葉（第十）に。

金（アキ）山香日下（カネヤマノシタヒカシタ）になく鳥の聲たにきけはなとなけかるゝ

と云歌あり（侍イ）。初五文字の句を。或はかな山のと讀。或は秋山とよめり。此歌をかひ屋か下と書。鳴鳥をなく蛙と書なしたるにや。かゝるためしおほかり。万葉集歌をは。すゑ〳〵にとかく書なしたる也。たとひ所見せはくて。こかね山の歌。人丸か集に侍らん本を見及す侍にても。猶此歌は難二信受一歟。又可レ注にても。山には山川ある常のこと也。河にはふしつくる事あれは。ふしつけのかひや便侍り。山田はある所こそ侍れ。こかね山は何所に侍そや。彼山を詠て。山田にこそ山河はなし共可レ被レ定事なれ。是は責ての儀に侍り。此こかね山の歌甚以不審也。前にも申侍様に。春宮大夫。堀川院御前にて。令レ講給百首に被レ詠て。別に僻事と云難有共閣侍らす侍れは。ふし付のかひ屋。髄の儀にて可レ侍。且彼すゑ〳〵の閑院の一家。大臣公卿を初て。當世迄に此道の棄旧に絶る事も侍らねは。此事も定而習ひ傳られても侍らん。彼詠を背て。當の非據の儀を申さん事も。尤可レ恥事なり。かうまて委可レ申にも侍らぬを。左右両方此かひ屋を詠して。人々の異儀も水火也。判者も殊に力を入〔れ〕て沙汰侍れは。存事を申たる間。筆跡きはめて見苦侍らん歟。所詮ふしつけのかひ屋と。秋の山田の鹿の火の屋とを。髄に可レ被二尋明一侍歟。異議相論は。末代共なく和歌興隆以外侍。尤可レ與事也。

夏上

夏草　左　顯昭

夏くさの野嶋か崎の朝露をわけてそきつる萩のはのすり

右方申云。無二別難一。

判云。左歌の終の句に。萩のはのすりと云ならは。はしめにはたゝ野しまかさきを分つる計にてあるへきを。初に夏草のとをける。重畳して聞ゆ。

顯昭陳申云。考二万葉集一云。詠二夏草一歌。

夏草の露分衣きもせぬに我衣手のひる時もなき

此比の戀のしけゝく夏草のかりそくれ共おいしくかこと

人ことは夏野の草のしけく共いとも我としたつさはりねは

夏草をは。か様に詠て。其草とさせる事も侍らす。たゝ夏の野へに。をしなへてしけく成行草をよめる也。天暦歌合にも。夏草題一番侍り。

左　忠見

夏草の中を露けみかき分てかる人なしに茂るのへ哉

右　兼盛

夏深く成そしにけるおほあらきの森の下草なへて人かる

此等の歌も。其草とさせる事なし。然は今の歌も。萩のは

わすれ草を、夏草とは覚侍らぬ上に、万葉に人丸歌に。

玉藻かるをとしまを過て夏草の野島か崎に船ちかつきぬ

と侍れは、本歌のまゝに、それて夏草の野島か崎とつゝけて侍也。萩を夏草とよみて侍らはこそ、初句の夏くさと萩のはのすりとは、不審し侍らめ。又古歌に。

夏くさのしけみにましる姫ゆりのしられぬ戀は苦しかりけり

此歌は、ひめゆりも夏草なれと、夏草とはなへての事にて。姫ゆりをは別によめり。今の歌も。夏草の野島か崎は、惣しての事にて、萩のはのすりをは別によめる也。夏くさの中にも。夏花咲秋花咲草もあれと、別に其名を不顕侍る也。又春草、秋草、冬草なとも讀る。同事也。

春草を馬くひ山をこえくれはかりのつかひは宿りすく也

春草の茂き我戀おほうみにかた行浪のちへに積りぬ

神さふときかすはあらす秋草の結ひし紐をとかは悲しも

我またぬ年はきぬれと冬草のかれぬる人は音信もせぬ

前後の草も、皆もえて夏茂り、秋花咲、冬霜かるれはとて。其名をさして讀侍らは、古歌の讀様にも可違侍也。

夏夜　　左顕　昭

みしか夜も鳥より前そ聞さらぬ老のね覚に物思ふみは

右申云、短夜と云五文字心ゆかす。又鳥より後も事たらす。

陳云、みしかよの更行まゝに共置。又なくやさ月のみしかよ共云て。上にも下にも置たるは。皆優にこそ聞ゆれ。

判云、老のね覚思ひしられ侍り。

顕昭陳申云、此歌評定の夜。右方より或人の難にて。短夜をよめるきゝつかすと侍しかは万葉に人丸歌。

時鳥鳴やさ月のみしか夜も獨しぬれは明しかねつも

と申歌を出し申に。同人云、それは第三句に置たれは、あしくも聞えす。初句にては猶心ゆかすと侍し時。後撰に夏夜深養父か琴ひくを聞て。

　　　　兼輔中納言

短夜の更行まゝに高砂の嶺の松風吹かとそ思ふ

と申歌は。初句によめり。如何と申侍しかは。大略閉口。其事世に聞て。先第三句の證歌を出して。それは腰句なれはといはせて。後に初句の證歌を出す。おそろしき事也と人々申と承るこそ。其次第さもおもはす侍しを。たゝ自然事也。此評定には先初句を出し。第三をは後に被書て侍めり。其夜申次第には相違せり。何事か侍らんすと。又鳥より後にの詞。古今に鳥よりさきにとよめる。たゝ同事也。前後のことはつゝき。いかにても侍なん。

夏下

蟬　　左顕　昭

ゆふま山松のはかせに打添て蟬のなくねも嶺渡る也

右申云。はかせは鳥にこそ打任せたる事にてあれ。

判云。左の松の葉風は。實にすこしは。いかにそ聞え侍れと。必しも鳥にのみやは有へからん。竹のは風。萩のはかせ常の事也。但松吹風にうちそへてなとにては。なと侍らさりけるにか。

顕昭陳申云。松吹風とよむ人も侍なん。さは侍れと。此歌にては少ことうるはしき心地のし侍しかは。松のはかせとつかふまつる也。は風は鳥にこそあれ。松にては少はいかにそや聞ゆなれと侍こそ。いかゝと聞侍れ。俊頼朝臣住吉にてよめる歌に。

住吉のしき津の浦に旅ねして松の葉風にめを覺しつる

此歌はいかにそ聞えぬは。ぬしからか歌からか。思なしにや。かゝる歌のふるまひ。目前作りたてらるゝ上手の歌なれは。おもはるゝやう侍りけんと。猶思ひ給ふる也。時の人鳥にこそ。はかせはよめと不レ難侍けるにや。

秋上

鶉　　左 顯昭

鷹の子を手にはすへねと鶉なくあはつの原に今日もくらしつ

右申云。左歌無二別難一。

判云。左歌催馬樂の。たかの子の歌の心をよまは。たゝ手にもすへ侍れかし。是は手には居ねとゝ云て。あはつの原にけふも暮しつとは。鶉をとらはやとのみ思ひくらせるにや侍らん。又風躰も無下に。たゝ詞にや侍らん。

顯昭陳申云。催馬樂の鷹子歌云。

たかの子はまろにたはらん。手にすへてあはつの原の見くるすのめくりの鶉からせんや。とうたへり。此歌を思ひて詠して侍けるにや。此歌のまゝに。鷹の子を手に居て。粟津の原に鶉かりくらさんと詠る人も侍なん。今歌は。万葉集の。鶉鳴いはれの野邊の秋萩を思ふ人とも見つるけふ哉。と讀るよりことおこりて。鶉をは和歌に殊外興し讀る也。古郷淺茅生野邊の萩原。もしは深草の里なとになかせつれは。何にもまさりて哀をもよほし。身にしめ心もすむよしを。古き人も詠せり。近俊頼朝臣歌にも。鶉鳴まの入江の濱風に尾花浪よる秋の夕暮。とよめる歌も。勝たる事共をよめり。是則万葉集のいはれのゝへの歌の躰也。然は催馬樂の心にては。たかの子を手にすへてこそ。あはつの原に鶉狩して。日をは暮すへきに。たゝ狩せんとてもこねは。鷹の子を手にすへねと。鶉の聲を身にしめて。粟津の原を過もやらす。日をくらす心をつかうまつれり。古歌の心を思ひなから。か樣に讀かへたる歌の風情。始而不レ可二申盡一歟、而を催馬樂の心にたかひたれは。たゝ鶉とらはやと思暮すかと云推量は。いかゝ侍へからん。網なくては淵なのそきそと云世俗の諺侍るめり。鷹をもたすして。鶉をとらはやと思ひくらさん事。いと〳〵はかなかるへし。是則兎を取んとて。株を守りけんたとへに同しかるへし。今より後は。鶉の音を心にしむる事は。思ひあらためて。偏に鶉とらはやとのみ心に入て。歌をは詠すへきか。和歌の風情は。折にしたかひ。志にまかせて。蘭菊のみをほしきまゝに讀きたれるにや。彼長能道濟か鷹狩の歌にて心得ぬへし。長能歌に。

霰ふる片野のみのゝ狩衣ぬれぬ宿かす人しなけ　れは

道濟歌に。

ぬれ〳〵も猶かりゆかん箸鷹の上毛の雪を打拂ひつゝ

前の歌は。狩衣の霰にぬれん事をたに歎て。宿かるへきをもむきを讀り。後の歌は。かき暮し降雪に。鷹かりもとゝまりぬへけれと。なをぬれ〳〵かりゆかんと云志を顯せり。只各風情のより來る所。一興をもよほさすと云事なし。日のあたゝかなるに付て。水のつめたきを怪むへからす。魚の浪をくゝるを見て。鳥の雲をかけるを疑ふへからさるかことし。

野分　　左 顯昭

萩かえをしからむ鹿もあらかりし風のねたさに猶しかすけり

右申云。あらかりし風と云たらんにて。野分の心有なんや。

陳申云。野分歟ふるくはいと見えす。あらかりし風の後よりなと。讀たるに付てよめる。

判云。左歌猶しかすけりなといへる。古風の躰にやとみゆるを。上句より風のねたさまては。只近き歌の躰也。布衣の人。靴を着したらん心地し侍る。

顕昭陳申云。先右方の難に。あらかりし風と計にて。野分の心難レ有と云沙汰侍しこそ。返々口惜侍しか。金葉集に侍るかとよ。野分したりけるに。いかゝなと音信たりける人の。その後又をとせさりければ。

相撲

あらかりし風の後より音せぬは蜘手にすかく糸にや有劔

又史記曰。暴風雷雨云々。暴風をはのわきの風と調せり。乙侍従か始て野分をあらかりし風と詠せる。暴風の本文に相叶へり。旦重と可レ云歟。右方嫌甚以遺恨云々。又しかすけりは万葉の詞なれは。古風の躰と侍るは可レ然。但猶しかさりけりと云詞を。つゝめて云なしたれは。あなかちに手かけふたかるへきにあらす。又みれとあかすけりともあり。見れとあかさりけりと云也。物にこそ有けると云を。物にさりけるなと云るかことし。況万葉の詞とて。みな古躰と定はつへきにあらす。彼集の歌の終句をみれは。

うつろひにけり　さ夜ふけにけり　花さきにけり
かなしかりけり　鳴わたるなり　見るよしもかな
ぬれにけるかな　見つるけふかな　戀もする哉
おもほゆるかな　ほとゝきすかな　人にしらるな
思ひそめけん　年そへにける　袖そぬれける
すきてゆくらん　いこそねられね　はやかへりこん
いまそくやしき　うくひすの聲　戀しかりけり

上句は。おそろしけに。こはきやうに侍れと。第五句は。此頃の歌にとりても。ことになひやかに。やはらかなる詞にても侍れは。是を古風とて。上四句はちかき歌の躰なるを。第五句ふりたると云難もいかゝ。

又古今集被レ撰候時は。万葉の歌をは。古語とこそ侍けれ。古今に素性法師の歌に。

時鳥鳴聲聞はあちきなくぬし定らぬ戀せらるはた

而万葉集歌に。

みよし野の山下風の寒けきにはたやこよひも我獨ねん

万葉の古語に。はたと讀たれと。古今の上四句は今の躰なり。又元方歌。

秋の夜の月の光しあかけれはくらまの山も越ぬへら也

へらなり古語なれと。他句普通詞也。小野篁卿歌に。

なく涙雨とふらなんわたり川水増りなは歸りくるかに

万葉集歌云。

秋田もるかり庵も来たこほれぬに雁金寒し霜をかぬかに

面白き尾花なやきそ古草に新草ましりおひはおふるかに

足引の小山田つくる戀す共つなたにはへよもると知かね

橘の林をうへん時鳥つねに冬まてすみ渡るかね

此かねと。かにとは同詞也。万葉の歌式。皆古語不レ然。今篁卿詠存二其様一歟。又濱成卿式。雜躰歌の姿を出すにも頭古腰新。頭腰古なと云り。されは一首中に上下句。古き新き詞も心も相ましはれる。あしからぬ事にや。今の歌布衣

人着レ靴たらん心地すと侍ることは。古人内々歌合なとに初句わろくて。むね腰の句あしからすよき歌を。ぬの袴に水干を着て。烏帽子かゝけたりなと。評給判者侍りき。されは此詞おもしろくめつらしとも。おとろき侍らす。又ゆゆしききすつきぬる歌哉とも いたみ侍らす。是より後にこそは。五句なから古語をとり集て。一首なから今様のすかたにのみは。つらね侍らめ。古き上手の歌。必しもさしもみえ侍らす。古歌合判詞に。かゝる難も侍らす。堂舎高危瓦有レ松。と云詞をは。法華經の四文字に。文集の三文字を切繼たる類(ルイ)也とこそ感し侍けれ。釋尊の説に居易か筆をは。きりつくそとは。そしりは聞え侍らす。まして和歌の新古相交の條は。あなかちに不レ可レ禁歟。

秋中

鴫　　左　顕昭

こも枕たか瀬の淀にたつ鴫の羽音もそゝやあはれかく也

右方難云。神樂にしきつきのほるといへるを。鴫と了簡して。こも枕には引よせたる歟。

判云。左歌こも枕の事。右方人申て侍めり。そゝやは初の秋の夕の荻の歌にたに。不レ被二甘心一侍を。鴫の羽音には。よる所なかるへし。

顕昭陳申云。神樂のこも枕のうたに。

こも枕高せの淀にたかにへ人そしきつきのほる。あみおろし。さてさしのほる。とうたへり。此歌に付按に。贄には魚鳥ともにたつることにて。鴫の贄(にへイ)と云こと侍なれは。鴫つきのほると云は。鴫とるをはつくと申也。次に綱おろして。さてさしのほるとは。魚をとる所也。綱をはおろし。さてと云物をは。さてさしのほると云也。但敷つきのほるとこそうたへ。鴫つきのほるとは。うたはすと侍る。實に覺束なく侍り。而神樂。催馬樂。風俗雜藝等には。必しも文字のまゝ詞のまゝに もうたはぬ事おほし。或はあかりて云へき詞をも。さかりて云。さかりたる文字をあけてうたふ事も有。又にこりてうたふへきもしを澄て云。すみて云へき詞をも。にこりてもうたふは常の事也。聲明にも聲にひかれて。本躰の文字には違たる事多けれは。此神樂のふりも。敷つきのほるとて同事歟。若は鴫つきのほると。實事をうたはゝ。うたひにくゝて。敷つきのほるとては謡よきふしに成事もや侍ん。神樂の家の人に被 問侍へし。さらすはたゝ昔より。さ様にうたひつれは。只實儀をあらはさぬ事も侍らん。況敷つきのほるとは。何を敷つきのほり侍にか。下あみ。おろしあみと云綱を。しきつきのほるとはいはゝ。敷綱と云物はきこゆれと。つきのほるとは申さぬにや。又古語に付て。しきりと心うるにても。つくと云詞は。綱に不レ叶とそ承には。たゝ鴫つきのほると心得て。敷つきのほると謡ふは。鴫をうたひなしたると申さんは歌の詞續には相叶歟。此事は先年。或所の歌合に。或者此こも枕の歌に付て。鴫の定に讀て侍し時。今度の難の定に。敷つきとこそうたへ。鴫とは聞えすと云難侍き。其に付て彼歌の詞の續不レ得レ心侍れは。且はいかゝ人々も侍とて仕て侍るに。右方難おもしろう侍り。本意相叶へり。此上に委了簡侍て。一方に可レ被レ定侍事也。抑神樂の薦枕。高瀬の淀とうたへる事は。よし有と承しかと。それ迄は沙汰

侍へる事ならねは。委は申侍らす。

廣澤池眺望　左　顯昭

廣澤の池さえ渡る月影は都まてしく氷なりけり

判云。廣澤の池さえ渡るとも。都まてしく氷とみえん事いかゝ。

顯昭陳申云。此題の心は。月前眺望をよませ給んれうに。遍照寺にて明月を詠しむるに。廣澤池と嵯峨野と。ひとつにをとなりて。雪にうつゝれる氷を敷けり。長安城をはるかに望に。岡山の立隔たるもなくして。澄渡るけしき。實に長句之二一千餘里。凛々氷鋪ノと見えたり。是則廣澤の池。さえ渡る月の都まてしく氷と見ゆるにあらすや。たゝ空すむ月を望て。氷にまかふるも常事也。況池にかけて氷と見えむ事は。いよ〳〵あまりの心有と申へき歟。此餘うはの空に申さんはよしなし。月の夜に彼所に行向ひて。都の實をまへ詠やられては。いはれ有よしの沙汰け侍へき也。池上をてらす月なれと。それを本体にて都迄は詠やる也。鳳凰池上月。送レ我過二商山一と被レ作たるをは。池に澄む月は。いかて山路をは。送らんそとや難し侍候へき。如レ此難たて侍らは詩歌の風情は。みなうせ侍なんす。

秋下

蔦　左　顯昭

見るに猶すまゝほしきは色々に蔦はふ小屋のよそめ成けり

右申云。小屋と讀る。攝津國のこやならては。より所なし。又たゝ小屋ならは。さやうにもよめるにや。

左陳云。只小屋をこやと云、常の事也。

判云。攝津國の小屋ならて。たゝ小屋をさよめらん事、常の事とこそ覺侍らね。證歌あるにても。此歌の小屋より所なくや。

顯昭陳申云。攝津國のこやと云所によせねと。小屋をはこやとこそ。外にても詠て侍めれ。慥成證歌をめされは。万葉に。

久堅の羽生の小屋に小雨降床さへぬれぬ身にそへ我妹

（をちイ）と此歌こそ。津の國のこやならて。小屋をこやとよ見て侍る證歌よ。をち方のあかしのこやと點したる本も侍れと。是は一定に小屋也。より所は賤のこやは八重葎いふせくとち。竹のすかきふしにくして。あなかちにすまゝほしかるましきに。色々の蔦のはひかゝれる柴の庵の。いみしく作り添たらん。都のさるへき人の家居よりも。すまゝほしくおほえんこそは。山家の小屋のより所にては侍らめ。又衛士のひたきやをも。本文には古屋と云と云り。すへてちいさきやをは小屋と云か。

九月九日　左　顯昭

わけきつる情のみかはそか菊の色もてはやす白妙の袖

右方申云。そか菊の儀不レ審。

左陳云。承知菊也。承和は黃菊を好。仍黃菊を云也。

右重申云。万葉にそかひと云るは。おひすかひの心也。されは岸なとにおひすかひに咲たる菊を云歟。

判云。左歌情のみかはと云。此歌に取てあしからさるへし。そか菊承知の菊のよしは。近古より申事なるへし。俊頼朝臣も黃なる一本菊にて可レ有なと云て侍めり。

又右方難申、万葉集にそかひと云る事にやと申も非レ無二其理一。

顯昭陳申云。そかきくは黃菊と存て仕けり。

文選曰、陶潜九月九日無レ酒立二菊叢前一大保王弘令二白衣

使ニ闕ニ酒云々。今日黄菊艶。無ニ復白衣来ニ云々。今按。文選には。黄菊ともいはねとも。百詠文に黄花と侍れは。其定に詠して侍也。評定の詞御尋侍時。古義に或黄菊。或一本菊と侍り。但其中には。黄菊と申儀宜歟。季綱朝臣も非レ耕非ニ歟冬ニを可レ謂ニ承和菊ニと書り。又古記云。帝の御装束を。注に承和色の御袴を奉ると云事も侍とそ承る。又或人の詩にも。付ニ黄菊ニて承知の遺跡なと作られたり。そか菊は承和を云なしたるへし。或はそは菊とも云り。一本菊の義。猶不レ審。況や黄菊の一本菊と取合たる儀は。貴てのわりなき義也。難レ用歟。又此菊の事。万葉古今後撰。三代集に無ニ其歌ニ古家集なとにも讀る事なし。只拾遺計に初て出たり。かのみゆる池邊に立るそか菊のしけみさえたの色のてこらさ。此歌につけて後人まゝ是を詠。而右方人申云。万葉にそかひと云詞あり。おひすかひと云詞なり。是は池岸なとにおひすかひに立る菊歟云々。其評定の座にて難申云々。

きゝすくなく。ひろく不レ見故歟。此儀一切不ニ聞及ニ侍。但考ニ万葉ニそかひとよめる歌あまた侍。且於ニ三五ニ可レ推ニ其旨ニ侍。

なはの浦を背向に見ゆるは奥の嶋漕まふ舩は釣をすらしも

むこの浦を漕まふ小舟あは嶋を背向にみつゝともしき小舟

大君のみことかしこみおほの浦をそかひに見つゝ都へ上る

今按に。此等の歌。背向と書てそかひとよめり。或はそむきとよみ。或はそなかとよめり。彼浦をうしろさまにみなす心也。おひすかひと聞えす。菊に池邊に數本もたゝは。おひすかひなり共申てん。一浦をさしてはいかゝおひすかひに見るとも申へき。中にも勅命のおそろしさに。おほの浦をもうしろさまにて。都へのほりぬとよめるに。本國の方を別るゝ心はきこゆる也。おひすかひとては無レ詮か。

冬上

霙　　　　左　顕昭

宇津の山夕越くれはみそれふり袖ほしかねつ哀このたひ

右申云。左歌無ニ指難ニ。

判云。左歌袖ほしかねつ哀此たひなといへる。さひては聞え侍れと。うつの山こそより所なくや侍らん。伊勢物語なとに。うつの山へのうつゝにもなと云る所にも。みそれふれり共見えす。其故なきならは。みそれ降ぬへからん山も。あはれ此たひといはん所もおほく侍らんかし。宇津の山故なくは無レ詮やあらん。

顕昭陳申云。誠霙所もわかすふる物なれは。何の野山海川にても讀たらんに。憚侍へからす。雨雪の降。霜露のをかんに。たゝ同し事也。但旅によせて讀んに取ては。伊勢物語に。するかの國宇津の山に至りて入なんとするに。道はいとくらく心ほそきに。蔦かへてしけり。物心ほそう。すするなるめを見る事と思ふに。修行者あひたり。かゝる道には。いかゝいますると云をみれは見し人也けり。京にその人のもとにとて。文をかきてつく。

駿河なるうつの山邊の現にも夢にも人にあはぬ也けり

とよめる。此事のありさま。實に傍に立て。心ほそく物かなしけれは。彼山路をとり分て詠て侍也。あつまちの山路には。相坂。不破關。二村。たかし。宇津山。あしから。此等み

な詠ならはせり。思ひかけぬ所の歌にも讀ぬを取出て詠て侍らはこそ。聞つかぬ雑のよせとも侍らめ。彼物語には宇津山と云につきて。現にも夢にもと添たり。今の歌は彼山の心ほそきかたを。霧にひきよせて侍は。此難不レ可レ侍。さる歌侍はとて。あなかちにうつの山邊のうつゝにもとよまは。無下に古歌になり侍へし。又霙ふる所を尋侍るに。万葉に少々あり。

みそれふり板間風吹寒き夜にはた野にこよひ我獨ねん

霙ふるとをつ大浦による浪やたとひよる共憎からなくに

霙ふりあられ松原住吉のをとひ娘とみれとあかぬかも

いや姫のをのれ神さひ青雲のたな引ひすら霙そほふる

如レ此等の歌は。はたの。とを津大浦。松原。いやひめにのみ霙をは可レ詠歟如何。其外は何處にてよむとも。みそれより所なしと云置に。たゝ同し事也。又伊勢物語にも。宇津の山邊の現にもなと云る所にも。霙ふれりとも見えすと侍る如何。彼物語によめる歌枕。花を詠。月をもよめるに付て。後人必しもその跡を尋て不レ詠哉。伊勢物語に春日里にて女に遣はす歌。

春日野の若紫のすり衣忍ふの亂かきりしられす

古今に春日祭の使しけるに。物見ける女に遣はす歌。

春日野の雪間を分ておひ出くる草のはつかに見えし君鴨

同集に。題しらす。

誰みそきゆふ付鳥かから衣立田の山におりはへてなく

伊勢物語に。立田山を越る人を思ひやりて。

風吹は興津しら波立田山夜半にや君か獨越らん

同物語に。布引の瀧にて。

我世をはけふかあすかとまつかひの涙の瀧と孰れ高けん

同物語に。富士の山をみて。

時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこ斑に雪の降らん

同物語に。

信濃なる淺間の嶽に立烟をちこち人のみやはとかめぬ

此等の歌に付て思ふに。伊勢物語の宇津山にて歌よむ所にみそれふる共見えぬに。左歌彼山にて霙をよめる。させるよしなしと侍如何。

野行幸　　左　顯　昭

大原や野へのみゆきに所えて空とるけふのましらふの鷹

右申云。所えて歌に聞なれす。

判云。左歌こと〳〵しけには侍れと。有レ疑事こそ侍めれ。大原やとをきつれと。をしほの山と云てこそ。大原野とは聞ゆれ。をしほとつゝけすしては。大原やおほろの清水とも。せか井の水とも云て。大原やとは置也、其大原は、叡山の麓野行幸例不レ聞。小塩山にこそ。野行幸の例は侍事なれ。せか井の水のかたには。鳥はなく共あそひにゆかんなとこそ聞え侍れ。ましらふの鷹もそらとるへからさるにや。

顯昭陳申云、平城より平安にうつされ給て後。野行幸ならせ給へる所々は。紫野。嵯峨野。芹河野、大原野等也、而野行幸と侍題に、大原や野への行幸と仕るをは。野もなく鷹狩もせす。大原野行幸もならさらん。炭やく北の大原かと申疑は不レ可レ侍歟。延喜六年十二月五日御鷹狩逍遥のために。大原野にこそ。野行幸は侍しか。件度中山の山口入せ給ふ程に。しらふと申御鷹。いつしか鳥をそら取て御輿の鳳の上に參居て侍けるに。暮日は漸山端に近つきて。峯の

紅葉片々錦をさらせり。鷹の色白妙にて。雉の上毛は紺青をのへたり。其時しも雪打散て。折ふし取集たる御狩の興也と記したる事。心にしめて。所えて空取ましらふの鷹とも詠侍也。小塩山とつゝけぬは。叡山の麓の大原とや。人思はんずらんとて。野への御狩に。あなかち無用の小塩山をも讀へからさる事也。二條の后の大原野行啓に。在五中將詠云。

大原やをしほの山もけふこそは神代の事もおもひ出らめ

是は尤をしほ山とつゝけたり。心のうちに昔を思出事有て。神代のことにかけて。彼山にわか心を付る也。又藤氏の人を祝ふとて。貫之かよめる。

大原や小塩の山の小松原はや木高かれ千世のかけみん

是又藤氏の氏神に寄て。をしほ山の小松によせたり。但後拾遺云。三條院御時。大嘗會御禊なと過ての頃。雪の降侍けるに。大原に住侍ける少將井の尼のもとに遣しける。

伊勢大輔

代にとよむ豐の禊をよそに聞て小塩の山のみ幸をやみし

返し　少將井尼

小塩山稍もみえす降つみしそやすへらきのみゆき成らん

このうたのことはに。おほはらにすみけるとかけるは。北の大原なり。しかるに。をしほ山をよめる。あやしきこと也。伊勢大輔重代のうたよみなれは。小塩山大原野に有とこそ知て侍けめ。又傳事を詠たらんに。通俊卿よも勅撰に入られ侍らし。たゝ大原や小塩の山とつゝけ置たれは。小塩の山をかけて讀るにや。若又彼尼大原野に住けるを。只大原と書たるかと疑ふ人も侍れと。それはさも覺侍らす。

後撰の内に良暹法師。大原に籠居ぬと書るも北大原也。又彼尼をは大原殿と號すと。後拾遺の目錄にも記せり。所の名をは。かやうにかよはして讀にや。後撰集に。

菅原や伏見の暮に見渡せは霞にまかふ小泊瀨の山

是は大和の菅原伏見也。又古今にも。

いさこゝに我世はへなん菅原や伏見の里の荒まくもおし

か樣によめるに。後撰の詞に云。菅原おほいまうち君の家に侍ける女に。男よはひ侍けるか。中絕て後。又とふらひて侍けれは。

菅原や伏見の里の荒しよりかよひし人の跡もたえにき

此歌は。菅原と申に付て。平安城の菅原の家を。大和の定に。伏見の里のあれしよりと讀うつせり。是は和歌の習なり。炭やく北の大原をは。大原山と讀ならはせり。

後拾遺に。　和泉式部

こりつみてまきの炭燒けをぬるみ大原山の雪の村消

又良暹法師のもとへつかはす。　藤原國房

思ひやる心さへこそさひしけれ大原山の秋のゆふくれ

然に同集に。藤原敦敏少將。子うませ侍ける七夜によめる。

清原元輔

小松原大原山のたねなれは千とせはこゝに任せてそみむ

是はをしほ山を大原山と讀て。藤氏の人を祈也。これこそ小塩山の種なれはと讀へけれとも。大原野の社に寄て。大原山とよめり。をしほの社と不レ申故也。されと。大原や小塩の山といはねと。大原や野への御幸と讀て。鷹狩して侍れは。一定大原野の鷹狩の行幸と存て侍を。叡山の麓に成侍らん無二論方一事也　國々に同名の歌枕おほかれと。よみ

様にしたかひて。そこ〳〵と思ひわかち侍る也。たこの浦と云所あまた侍れと。浪しけく立と云つれは。駿河としり。藤花を詠つれは。越中のふせの湖としれり。いさりのあまによせつれは。丹後のよさの海と定侍る也。大原と云所は。山城に両所侍り。近江にも侍れと。夫は歌にもよまねは不レ及二沙汰一歟。北大原は炭竈をむねとせり。おほろの清水をよめり。南の大原野は大原野社を旨とせり。行幸ならせ給へり。藤氏后宮の行啓も侍り。大原やをしほの山とよめるも。神にかけ松によせて。藤氏の氏神を崇也。大原野とて。野邊の鷹狩を旨とする事。宇多野交野にも勝れたり。仍野行幸もならせ給ふ。小塩山とつゝけねはと云雖は。世人能々可レ被レ案歟。鷹狩の時は。をしほ山の詞。必しも不レ可レ入とそ思ひ給ふる。

冬下

冬河　　左顕昭

山里はあさ川渡るこまの音に瀬々の氷のほとをしるかな

右方申云。無二指難一。

判云。左歌山里はと置る。冬の河にてたにあらは。いつくにてもあるへきを。是は河邊歟。水村歟にてそ可レ侍。又朝心あさ川わたる計にや。

顕昭陳申云。實に冬の河の心たにあらは。花の都にてしも。ひなの旅にても。所はきらひ侍らし。よしなき山家にかゝり侍けるにこそ。又山家にて便有事にも侍なん。但朝川渡ると云に付て。河邊歟水村歟と侍そ不定に侍ける。山家川有へからすとは。誰か定侍にか。山家は山近き民の栖。それに又河も有。河は大なるも小なるも。其源を尋は山よりこそ流出侍なれ。されは山家には。そともの河戸に朝けの水を汲。垣ねにいさゝ小河を流し。前の小川に棚橋を渡し。川瀬に鵜舟(川イ)をたて網をおろし。さてをさし。うけをふせて。瀬にふす鮎をとり。淀みにふし付て。もふしつかふなをすなとり。谷の小河を懸樋にうけ。ゐせきをあけて。苗代水にまかするは常の事也。偏に川の流れに付て。山遠きすまゐをこそ。水郷とは申せ。又朝川と云詞の外。朝の心なしと侍るはいかに。朝の床にねなからも。起ゐなからもきくは。川瀬の氷をふみくたく駒の音をきくに。寒さも身にしむ心地するにはあらすや。河瀬の氷も日出ぬれは。解行事を思ふに。朝心もつよかるへし。朝霞夕霧と計詠ても。朝の心をあらはす歌とても。難にはあらさるへし。朝川に朝すくなく。山家は水村になされて。題そりはてぬる歟にこそ侍めれ。かた〳〵取所なかるへし。

寒松　　左顕昭

芳野山すゝのかりねに霜さえて松風はやし更ぬこの夜は

左右ともに無二指難一申旨ゆゝしけ也

判云。よし野山すゝのかりねにといへる。岑をとをるそみかくたもすゝをいほりともし。木の根を枕ともこそし侍らめ。是はたゝすゝをかりたるはかりにて。打敷てふしたるにや。又松風はやしも。優にしも聞えさるにや。

顕昭陳申云。すゝのかりねは。かりそめふしにすゝをからんするにそへてよみ侍る也。

後拾遺に。　　伊勢大輔

こも枕かり初にてもあかさはや入江の芦の一夜計りを

万葉集に。
三嶋江の入江の薦をかりにこそ我をは人の思ひたりけれ
如レ斯も詠侍れは。たゝ是かり初とそふる心也。又すゝをかりかりしかん事。なとか侍らさらん。山伏必しもすゝをかりては。いほりのみさすと不レ可レ定。雨雪のふらさらんには。たゝひた地にふさんよりは。すゝをかり敷て。其上に丸ねもし侍へし。
神風や伊勢の濱荻折ふせて旅ねやすらん荒き濱へに
印南野の淺茅をしなみさねし夜のけ長くあれは家路忍はる
濱荻を折ふせ。淺茅をおしなひかしてもねて侍り。山伏もかりねは同し事也。すゝはさすかに淺茅よりは。こはこはしければ。かりしかん事便侍る歟。
又万葉に。
倭には聞ゆらんかもおほか野のさゝかり敷て庵せりとはなと詠て侍る事も有。すてにさゝかりしけり。いかにもすかりしかん事同事歟。しかれは。よし野山のすゝのかりね。あなかちに不二難事一歟。

椎柴　　　　　　　　　　　　　左　顕　昭
山人の便なりとも岡へなる椎のこやてはおらすもあらなん
右申云。こやておしみて何にかすへき。
判云。しゐのこやては。たゝしゐ柴といはんにまさりても不レ聞にや。
顕昭申云。万葉集に。
をそはやも汝社待ゐむかつをの椎のこやてのあひは違はしとよめり。先椎のこやてには何そと尋侍ての上の事なり。右方よりをしみて。何にかすへきと侍るも。椎のこやて椎柴と云んに増りても聞えすと侍るも。不審。万葉集の椎のこやての心には。不レ叶事にや侍らん。不審。抑春曙と云題には。春曙とよめりとて無念と。右方より被レ申。椎柴と云題にはしゐのこやてとつかふまつれるを。椎柴と可レ詠と判者いましめられたり。進退きはまりて失二計略一歟。自今以後題を給りて。何様に可二存侍一乎。古今集見給ふるに。そへにとてとすれはかゝり（かく脱歟）すれはあないひしらすあふさきるさにとよみ侍けん人の心をも。今こそ思ひしり侍ぬれ。

一本云
右借二請参議藤原元長筆跡本一于時永正五年九月上旬之比令二書写一之訖。
城南男山隠士　宗勝在判

右顕昭陳状以宮繁一清蔵本書写以横田茂語本挍合畢

蓮性陳狀

畏て申上候十首御歌合([illegible])。よにゆかしくおほえ候へと。いまた見及候はぬに。一日或人つたへ聞候とて。おろ〳〵かたり候し中に。蓮性番六首まて勝とうけ給り候へは。且面目身にあまりて悦承候。四首の負更にいたむところにあらす。但判のおもむき定めて。ひかこと承て侍りつらめと。いさゝかおほつかなき事ともつゝりしるし申候。

十番左

春は今と渡りくらしゝ天の原雲井遙に今朝はかすめる

霞の歌に。今と今朝と判者([illegible])難申て候なる。誠にさりかたきあやまりにて候。老のほれおもひしられ候へとも。建保内裏百首御歌合に。西園寺入道相國(公經)

爪木こる山路は今や絶ぬらん里たにふかき今朝のしら雪

判者定家卿不レ難レ之可レ爲レ勝之由定申。其上此歌。已に新勅撰に撰入られて候にこそ。おほかたけさを今朝と書て。今の字同しと難候はん。あまりある事にや。かく申候へは。五月雨とて月とも詠し。時雨とて時とはよむましきにて候にや。それはさる事にて。けさを必今朝とかゝさる事も候はん。日本紀には明旦と書て。けさとよみて候にや。今度の御歌合の判の詞には。日本紀までも勘載られたるよし聞え候へは。今申上候明旦の字も。定て存知の事にてこそ候らめとおほえ候。又延喜聖代には。菅家萬葉を撰奉られ候。彼集には。間の字はかりをけさとよみて候。北野の聖廟[illegible]ためて御ひかことゝなく候らめと。御て[illegible]より候。但万葉には今朝今旦なと書たる本も候へは。これにつきて難し申され候らん。のかるゝ所なく候へとも。万葉も文字つかひ。巻ことにかはりたる事にて。眞名書。假名書。或は義をもつてこれをよませ。或は字をもつてこれを稱したるものにて候なとゝそ先達申傳へたる事にて候へは。件集の漢字につきて。歌の難有へきにて候はゝ。つるかもなとの詞を。鶴鴨の字を書て候へは。若此鳥を聴に得て詠し候はん時は。彼字は病にて有へきにや候らん。すへて漢字のかよひたるを難とし候事。誠にふるくもなきにはさふらはす。沙汰有事にて候歟。これは不の字の事にて候にこそ。ちかくもすなはち建保内裏撰歌合に。

時しらぬ富士のしは山しはしたにけたぬ思ひにたつ煙かな

定家卿判には。此歌のぬの字を難申たるかとおほえ候。しかるを今の御歌合に。判者忍戀の詠にはいはておもふとて。下句にしらしなと候なるを不レ言。不レ知。此字にてこそ候らめ。ふるき難を用られ候はゝ。是も又おほつかなき所なきにしも候はす。猶もし今と今朝とはかり難に定められ候へきならは。爲家朝臣今度すなはち花の歌に。

今朝よりは雲こそにほへ芳野山たかねの櫻今やさくらん

此字を詠し候よし聞えて候。かれは誠にこゝろのやみに。何のあやめもわきかたく候らんと。かへす〳〵餘所まで哀れとこそおほゆる事にて候へは。彼を用是を捨候。皆其謂ふかく候にや。凡歌を奉らしめて。さかしをろかなりとしろしめされ候らん。いにしへにたちかへり候御代に。いつしか老か病を顯し候ぬる事。たかとかならす。身ひとつの道のかるゝ所なくおもひ給ひ候。右歌(下野)さほひめの霞の衣袖さえてと讀て候なる。判にも。すなはち近頃おほくなりて。目にたゝすとかやは候なれは。今しるし申上へきに候はねとも。元仁(後堀河)の比九條前内

大臣。人々に三十首をよませらるゝ事候き。其中に前藤大納
言。
春たつと霞の衣まむからしまたひとへなる嶺の白雲
家長朝臣
さほ姫の四方の霞もらす衣またうらなれぬ春風そふく
かく両人よみて。心詞かはらすおほえ候にや。霞の衣は。古今集より出たる物にて候へは。今もとり用ひ候はん事。難有へきに候はねとも。早率傳実なとの心相変り候なん。歌は此両首に異へからす候にや。寛元二年(後嵯峨)にて候しやらん。光俊入道卷經(一首イ)とて。人々に百首歌よまする事の候しにも。爲氏。さほひめの霞の衣とつゝけて詠たるとおほえ候。今は無下にふる衣とこそ見え候へ。霞の衣はきになり候へしともおほえ候はす。かつは千五百番歌合に。顕昭。吾妻路の雪にうち出て見渡せは浪にたゝよふ浮嶋か原。定家卿判云。左歌。雪にうち出てといへる浪にもことよりておかしく侍れと。少おもひ出らるゝ事は侍る。作者は見及はさる事もや侍らん。建仁二年(土御門)左大將家百首。
あしからの關路こえ行明ほのに一むらかすむ浮嶋か原
正治二年内大臣家歌合に。
駒なへて打出の濱を見渡せは朝日にさはくしかの浦浪
讃レ所今事。徐入道通親。打出見渡詞。東路眺望心。大略相同。此両首歟。此判詞を見給ふにも。いよ〳〵めなれ候なん事は。作者はあやまりてつからまつりて候とも。議義のまへにはつへき事と聞え候にや。
廿三番右下野
みよしのゝ奥まて花に尋はれぬ歸らん道のしをりたにせて
山花の古歌はよしのゝ奥。誠に山はさふらふらめと。ためしならすや候らん。横谷瀧掃路なと申候らん題とても。吉野の奥とよみては候ぬへきやらん。先達おほくかやうの事。秘事口傳にて申旨とも候中にも。定家卿殊更わきまへ申事にて候き。天象地儀のたくひをは題にあらはし。詞字の題をは。こゝろをめくらして可レ詠なと。末席までにも申をしふる事。うけ給りをき候き。今判者此旨をこそ存知候らめ。他人へ教訓の趣と。賢息に口決の旨とは。かはりめは殊にしりかたく候へとも。或所の歌合に。深山花。たつねきて一木か末を見るからに。奥ゆかしきは三吉野の花。判者。左改擧二百仮之嶺一只望二一樹之梢一。名所之風景已失二本意一又三十一字之中。山字無レ之。題字中山尤可二詠裁一候也。これは定家卿判に如レ此候。いかてか今彼家を傳て。其跡をまもらす候へきや。おなし歌合。海邊月
興津風ふけゆく空はをのつから雲もまかはぬ浦の月かけ
判云。興津かせ浦の月。さためて題には侍らめと。愚意猶いささか淵海のかはりめ有てや。海邊には被レ用侍らん。山字なき難意據をしるし申ぬる上に。沖津風浦の月まてはのすへきにも候はねとも。しをりといふに山の聞えて侍れはとにや。判詞に候なれは。枝折にて山のたしかなるへき理。いさゝかおほつかなく候。古歌には。
武士のいつさ入江にしをりするとや〳〵とりのむや〳〵の關
俊成卿歌に。
枝折するならの下葉にちる露のはら〳〵と祉ねはなかれけれ
かくもよみて候めれは。一筋に山のこゝろにとるへしともおほえ候はす。随て古今六帖と申候集には。題をつくして候にも。枝折をは木の部に入たるとおほえ候。山の類には見えぬ事にて候。沖浦なとこそ海にて候へとも。猶湖をわくへしと判した

る事にて候へは、かやうにわたり候らん事は、一方につきて定たま〳〵きにやとおもひ給ひ候。海邊月の番は、たま〳〵愚詠の勝にて候なれは、右歌の事、とかく申へきにて候はねと、今しるし申上候聞のことくにて候は丶、浦こく舟はかりにては、誠に志賀の浦の儀もかよひぬへきと、すみまさるこ丶ろ聞なれて、はかりにてまよひたる體をは、引こめられ候にこそ。郭公遠隣の題に、下句をかぬほとは、いかに有へきにかと聞ゆる所なと候とかす、是又尤いはれて候。但上句を序分にて。下句真實をつゝけ候事、定まれるならひにて候。今もむかしも歌おほくこそ候なれ。かつは此御歌合に、俊成卿女。逢不遇戀、

わけし夜の契りも消て悲しきはとへと答へぬ道芝の露

とよまれて候なる、是もわけし夜と打聞候ほとは、何をわけたるとも聞わかれ候はねと、道芝の露とよみて候にこそ。ことはりは聞ゆる事にて候へ。かやうの事は歌の習ひにてこそ候に、ひとへに毛を吹て疵をもとめられ候事も。おもてになく難の候ぬにやと、こゝろをとりせらるゝ方も候にこそ。比興におほえ候へ。右歌、五月雨のふりにし友とかたらへはとよみて候なる、まことにて候は丶、洞院攝政家百首、題百首、家長朝臣

五月雨のふることゝもを語り出て長閑なる夜の友そうれしき

心詞いともかはらすや候らん。今の作者共むつひ淺からぬ中にて、相ゆるきを忍て、歌を和たる贈答とも申へく候らん。千五百番歌合に。

秋山に時雨はすきぬ神無月木の葉そ冬のはしめとはふる

定家卿判云、右歌神無月に時雨ふらぬそらに聞え侍と。木葉そ冬のへといはんためは、さも侍るとか。又或歌合に、紅葉滿山。

たえ〳〵に時雨し山の雲なれとそめも殘さぬ四方の紅葉は

家隆卿判云、左歌よろしきさまに聞え侍れと。時雨し山のといへる。紅葉のさかりにこそは。時雨もことに侍らめ。今は時雨もせぬやうにや聞え侍らん。時雨ると侍へきにやと候めり。此歌は。五月雨のふりにし友とよみて候。此雨判の詞にて候は丶。六月の郭公ともや聞え候ぬらん。但五月雨。卅日をかきらぬ事にて候へは。時聞にこそは來たる郭公にても候らめなと。了簡せらる丶方も候へと。さては又五月と見ゆる詞。此外にはあらはれす候へは。旁題のこ丶ろたしかならすこそ思ひ給ひ候へ。

忍久戀(八十六番)右歌。

戀をのみしつか庵のかやむしろ敷忍ふまに年そへにける

判詞に。俊頼歌おもひ出され侍とも。詞つゝきよろしと候なる。此歌の本意は。しき忍ふを詮と見え候につきては。めつらしきふしなくや候らん。後鳥羽院。建仁元年八月十五夜御歌合に。

田家見月。土御門内大臣

稻莚かり田の面に月すめはしき忍ふへき袖の露かは

後京極攝政家六百番歌合に。寄席戀。兼宗卿

憂身ゆへわかるゝ床のさむしろに敷忍ひてもかひやなからん

東山入道攝政家。嘉禎二年戀十首歌合に同題　定家卿。

吾妻野の露のかりねのかやむしろ見ゆらん消て敷忍ふとは

親季卿

扨もなを敷忍ふてふいなむしろ川そひ柳浪はこすとも

家隆卿

くちねたゝ人やあやめんあや莚をになるまては敷忍へとも

成實卿

あやむしろ涙の露のたてぬきに誰をりそめて敷忍ふらん

此歌合には。蓮性も敷忍ふと仕て候き。此外にもおほく見え候

とこそ。又或所歌合に。
くれて猶更行空をまつ鳴や月はをしまのあけほのゝ空
此歌を定家卿判に。空を松島や月はをしまのこゝろ。仙洞にてかゝる歌見侍りき。作者大藏卿有家にや候らん。かやうに少是をふしと見ゆるをは。見及はれ侍らすとも。後に出候はんは難に侍へしとこそ。判して侍めれ。今しるし申上候ぬる數忍ふの歌ともは。此判はかの趣には相違せす候にや。かやうにめなれたるふしをのみ賞翫せられさふらはゝ。只櫻ちる木の下風とのみ詠て候はゝ。やすくや候へき。凡かやうの證據歌は。昔今の歌合におほく見ゆる事にて候へとも。他人の判をはしるし申ても。今判者指南とすへからす候へは。多く定家卿の判はかりを書のせ候。抑丞相嵐の愚詠。上下句のはしめの同字のあやまり。ともかくも申に及はす候。判者すゝみて是を勝と定申候にける。身のふかくは顯れ候ぬと。判者の情はありかたきほとにこそ。おほゆる事にてさふらへと。かやうの難を判にのせ候なる事は。同體あまた番に見え候。歌合に始の歌をまつ難して。後の判をはそれにゆつり候とこそうけ給候に。今度の御歌合には。爲氏月の歌に。同字を上下に詠て候よしうけ給候へは。末の番の愚詠にはしめて見とかめられ候けるも。かれは例のこゝろのやみの故にや候らん。誠に此難は。上にとかめたる事にて候へは。露塵のかるゝ所なく候へと。蓮性か番にのみ。かやうの事ともをのみ申注せられ候も。子細なとをわきまふましき者とおもはれ候にこそ。尤そのいはれ候。大方はかたしけなく。 勅を承て。判者にそなはり候はん人は。其家をもおもひ。此道を執して。私有へきにて候はねは。直き心をさきとするよし。今も見え候にこそ。只蓮性か歌にあたりて。自然と見出さるゝ難にてさふらふらめは。老のつたなさをのみ歎きおもひ給候。さりなから爲氏。爲教等朝臣。今の老の心にかなひて。父の卿の所存はそむきけるにこそ。身の冥かも悦ひおもひ給ふ事にて候へ。餘所の人も。おもひゆるす方もや候らんなと。ほこらしき迄おほえ候。誠に道を守る神明も。かきりなき事にて候けりとは。いよ〳〵仰かれ候まゝには。涙もをさえかたくこそおほえ候へ。二代撰者の得によりてなと。奥書にのせられて候なれと。今しるし申役父祖の歌は。父卿判には。ことなる事のみ候にや。これらの子細こゝろにこめて候はんも。妄念のもとゐと罷成候はゝ。よしなき方も候ぬへくおもひ給ひ候間。返々恐懼なから。書あつめ候ぬるに。是も皆老のあまり。ひかことのみこそ候らめ。披露ゆめ〳〵あるましき御事にて候。判者もれうけ給候はゝ。定て老の恥もいよ〳〵顯れさふらひぬと。いたみおほえ候へと。此道をおこしをこなはせおはしまし候御時にあひ候ぬれは。かやうに申候事も。又ふるき跡なきに候はねは。道にふけるこゝろさしはかりにひかれて。はゝかりをわすれぬるに候。此やうをは心得。御披露の後は。ひきやふらるへく候。あなかしこ。

寶治二年九月　仙洞御歌合披露之後。入道正三位知家卿(法名蓮性)以二此狀一就二大藏卿定嗣卿一院ニ奏之一云々。

十番

早春霞　左　蓮性

春は今と渡りくらし天の原雲井はるかにけさは霞める

右勝　下野

さほ姫の霞の衣袖たれて立とはみれと春そすくなき

廿三番

山花　左　蓮性

尋ねきて今そしめゆふ玉たすき雲ゐる山のはつ櫻花

右勝　下野

みよしのゝ奥まて花にさそはれぬかへらん道の枝折たにせて

卅六番

五月時鳥　左　蓮性

時鳥いかてあやめに引そへてなかるゝねをも玉にぬかまし

右勝　下野

五月雨のふりにし友と語らへはなれもこととふほとゝきす哉

四十九番

初秋風　左勝　蓮性

天の川河かせ涼しとをつまのいつかとまちし秋やきぬらん

右　下野

いつも吹めに見ぬ風の秋といへは身に入色のいかてそふらむ

六十二番

海邊月　左勝　蓮性

海原やなたの塩ひの眞砂地にきよき月夜のさもそとやけき

右　下野

更行は浦こく船の音までもさもすみ渡るよはの月かな

七十五番

野雪　左勝　蓮性

下折のゐなのふしはらいやしきに間なくも雪の猶積るらし

右　下野

木の下の露にや増るみやきのゝみかさとりあへぬ雪の深さは

八十八番

忍冬戀　左　蓮性

すかのねの忍ひに結ふ下紐のとけすやこひん年はへぬとも

右勝　下野

戀をのみしつか庵のかやむしろ敷忍ふ間に年そへにける

百一番

逢不逢戀　左持　蓮性

たのめてもこぬ僞にふけしよをなかくや人のわすれ果ぬる

右　下野

驚かす人しなけれは今はたゝ見しは夢かと誰にとはまし

百十四番

旅宿嵐　左持　蓮性

岩かねの枕のあらしさらてたにいねかてなるを心してふけ

右　下野

行くれて一夜宿かる松かねに何とあらしの床はらふらん

百廿七番

社頭祝　左持　蓮性

うこきなき山松かねの岩清水すむへき千世の影そ久しき

右　下野

千年へむ流もしるし岩清水にこりなき世の末もあらはに

右蓮性陳状以古寫二本及御歌合校合畢

松林竹雄
小林正直　校
知念武雄

（第十三輯奥附）

昭和五年六月二十日印刷
昭和五年六月廿五日發行

發行者　東京府西巣鴨町大字巣鴨千五百七十番地
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者　東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地
今井鐵次郎

印刷所　東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地
太洋社第三工場

發行所　東京府西巣鴨町大字巣鴨二千五百七十番地
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七電話大塚〇七一八